

第V章 古代の遺構と遺物

1 概要

古代の遺構では天仁元年（1108）の浅間山降下テフラ（A s - B）以前の遺構を扱った。古墳時代4世紀初頭とされる浅間山降下テフラ（A s - C）上に造られた水田が最も古い遺構である。弥生時代後期の土器がごくわずかに出土したが、縄文時代の遺物は確認できない。調査範囲中央の3-2区以西では中世の遺構とともに平安時代の遺構が確認される場合もあり、土坑やピットなど遺物出土のない遺構には厳密な分類ができなかった施設も多い。氾濫の影響を頻繁に受けた本遺跡では多数の調査面から遺構が確認されている。降下テフラ下や一部の泥流面を除き、異なる調査区を繋ぐ面の照合が明瞭にできない部分もあった。

A s - C 混じりの土を耕土とする小区画水田（本文328頁）は古墳時代集落のない3区で最も明瞭に残存し、4区で一部が確認できる。集落の密集した1・2区で住居掘り方調査時に水田痕跡の可能性のある溝状の施設が確認できた部分があり、古墳時代初頭は広範な水田地帯であった可能性がある。

古墳時代の集落（本文147頁）は4世紀代の古墳時代前期から1区西隅から2区にかけて（東側集落）と、3区西隅から4区にかけて（西側集落）に見られる。水田と重複する部分が多く、比較的短期間に行われた土地利用変化が確認できる。調査範囲では東側集落の規模が大きく、著しい住居間重複が見られる。また東側集落に隣接する河道脇には多量の土器が出土し（本文358頁）、水辺の祭祀行為が推測される遺物が含まれる。装飾器台など特殊な遺物を含め、古墳時代前期の良好な土器類が集落や周辺から出土している。

5世紀に至ると西側集落で規模が拡大し、出現期のカマドを備えた住居が4棟確認されている。

本遺跡では須恵器を伴う住居が出現する以前に集落は消失し、広範囲の畑（本文299頁）へと変わる。この間に泥流を被覆し、確認された集落面と上面畑では2区で40～50cm、4区でも50cm前後の比高差を生じている。

この泥流を運んだ氾濫が一度のものか繰り返し起きたのか不明だが、遺跡の様相を激変させるものであった。氾濫による泥流層上では、5区の畑では5世紀末から6世紀初頭とされる榛名山降下テフラ（H r - F A）を直接被覆する畑が、4区ではこのテフラを鋤き込んだ畑が確認できる。これらの畑は再度大規模な泥流で埋没する。この泥流の契機についてはテフラ分析（本文369頁）でH r - F Aの可能性が提起されているが、発掘調査では降灰から洪水までの間に畑の復旧等の作業痕跡が観察されている。

畑を埋めた洪水後、遺構は長期間不明になる。荒廃地であったか、安定した耕作地となり遺構として痕跡をどめなかったかを判断する資料に欠ける。

再び集落が出現するのは平安時代9世紀以降で、3・4区にかけて（本文126頁）見られ、古墳時代に密集した集落のあった2区では確認されていない。竪穴住居数は多くないが、区画を区切る溝（本文271頁）や掘立柱建物（本文278頁）などが見られ、農耕村落と単純に位置付けられない要素が看取でき、石製巡方など官衙に繋がる遺物もわずかに見られる。集落は10世紀代には消失するようで、羽釜を伴う住居は見られない。また採取される遺物にも平安時代後期の土器は含まれない。

A s - Bの一次堆積層は広く確認されるが、直下の遺構は3-1区の畑のみである。畝・畝間は明瞭でなく、耕作されていなかった畑の可能性もある。3-1区ではA s - Bを鋤き込んだ中世の畑（本文93頁）が調査されているが、この間に畝間の方向が異なり、古代と中世の間に継続性は確認できない。

遺物が集中して出土したが遺構を確認できなかった地点について本文354頁以降に記した。その他遺構に伴わない遺物や他時期の遺構に混入した遺物は本文364頁以降に一括して扱った。

2 竪穴住居

(1) 平安時代の竪穴住居

平安時代の竪穴住居は14棟確認できた。3区に2棟・4区に12棟・5区に1棟見られる。古墳時代集落に比べると密度が低く、散在している。3・4区は東西60mの範囲にあり古墳時代集落とほぼ同じ微高地上に占地している。5区は古墳時代にF A下の畑のみ確認された一画で平安時代になって初めて住居が確認された。古墳時代にきわめて多数の住居があった1・2区では平安時代の住居は確認されていない。

3区の竪穴住居

3区西隅は4区から続く微高地の東隅で、古墳時代西側集落と同様に集落範囲の東隅にあたっている。ここで2棟の住居が確認できた。2棟とも典型的な住居ではなく、1号住居は掘り方みの確認で、2号住居はきわめて小型で竪穴住居的ではない。集落以外に井戸や区画溝となる可能性のある施設が確認されている。

1号住居(第103図 PL.19-②、65 遺物観察表411頁)

本遺跡平安時代の住居のうち、最も東側に位置している。床面はなく掘り方部分のみの確認と思われる。北側

は調査区境に接し、排水溝を兼ねたサブトレンチにより北壁直下を失っている。

位置 042～046-880～884グリッドにある。

規模形状 長軸長3.3m以上、北側短軸長3.25mで南辺が北辺より狭い逆台形状に歪んだ長方形を呈している。

方位 N-2° W。 **面積** 復元10.0m²

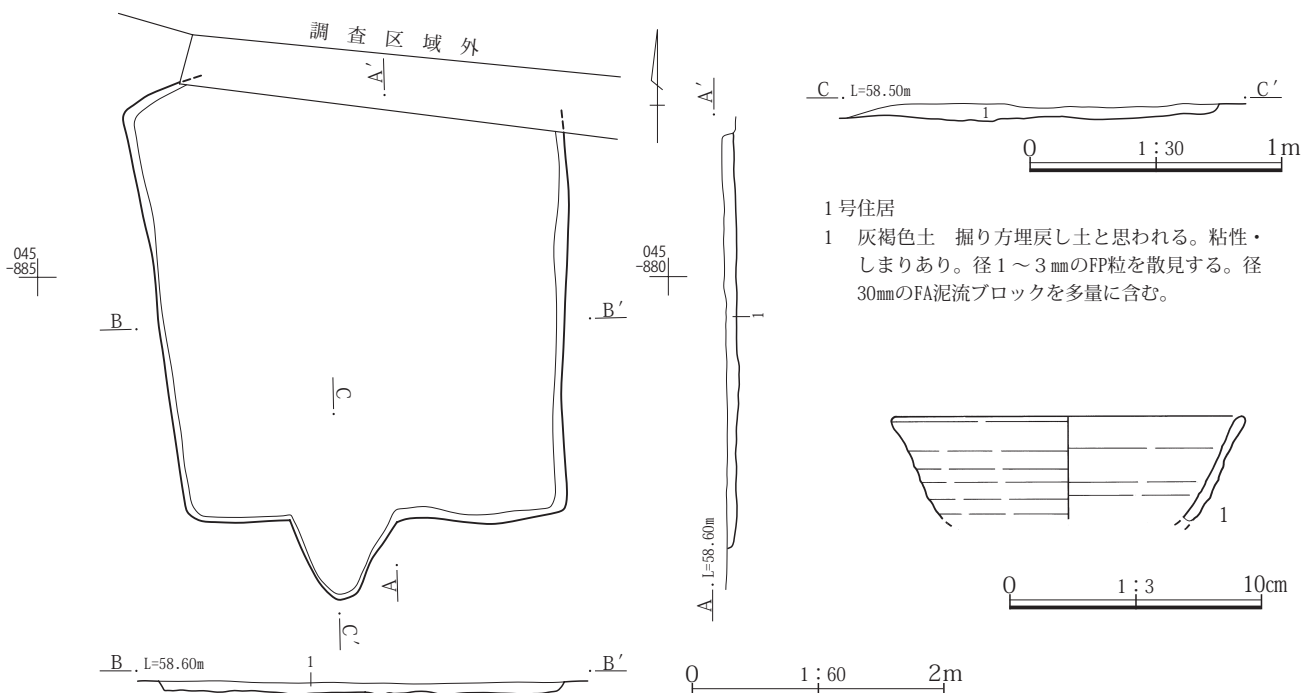
床面 確認面に踏み固めや焼土等が見られない。調査できたのは10cmの深度がある掘り方部分と思われる。掘り方底面は比較的凹凸が少なく、全体では南側へ低くわずかに傾斜し、北側と4cm前後の比高差がある。

カマド 南壁中央に奥行68cmの張出し部分があり、カマドを想定して精査したが、被熱痕や焼土・粘土等の混入がなく、カマドと確認できなかった。本遺跡に南カマドを持つ住居は類例がない。

その他 壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 掘り方埋戻し土内であるが重量で0.5kgの土師器・須恵器片を出土し、須恵器杯1点を図示した。

所見 平安時代の区画溝と思われる1号溝東側(外側)に軸方向をほぼ揃えて隣接している。平安時代の住居に必須のカマドが確認できていない。東辺にカマドを設けることが一般的であり、本住居の床面は確認でき他面よりかなり上側にあり、カマド痕跡が消失したものと想定する。時期決定を行う資料に欠くが、図示した土器は口縁端部に反りのない9世紀中頃の遺物である。



第103図 3区1号住居および出土遺物

2号住居(第104図 PL.19-③、65 遺物観察表411頁)

調査範囲の西隅にあって、西側の大部分が調査区域外となり、全容は把握できていない。調査範囲では全体が古墳時代の3号住居内にある。

位置 027～029-886～887グリッドにある。

規模形状 南北軸長2.3m、東西軸長0.65m以上の規模で、竪穴住居としてはきわめて小さい。

埋没土・壁 中央付近に粘性土や炭化物粒を積み上げたような層が見られるが、その後一気に埋没している。壁高は最も深い東辺で12cmを測る。

方位 N-8° W。 **面積** 残存1.11m²

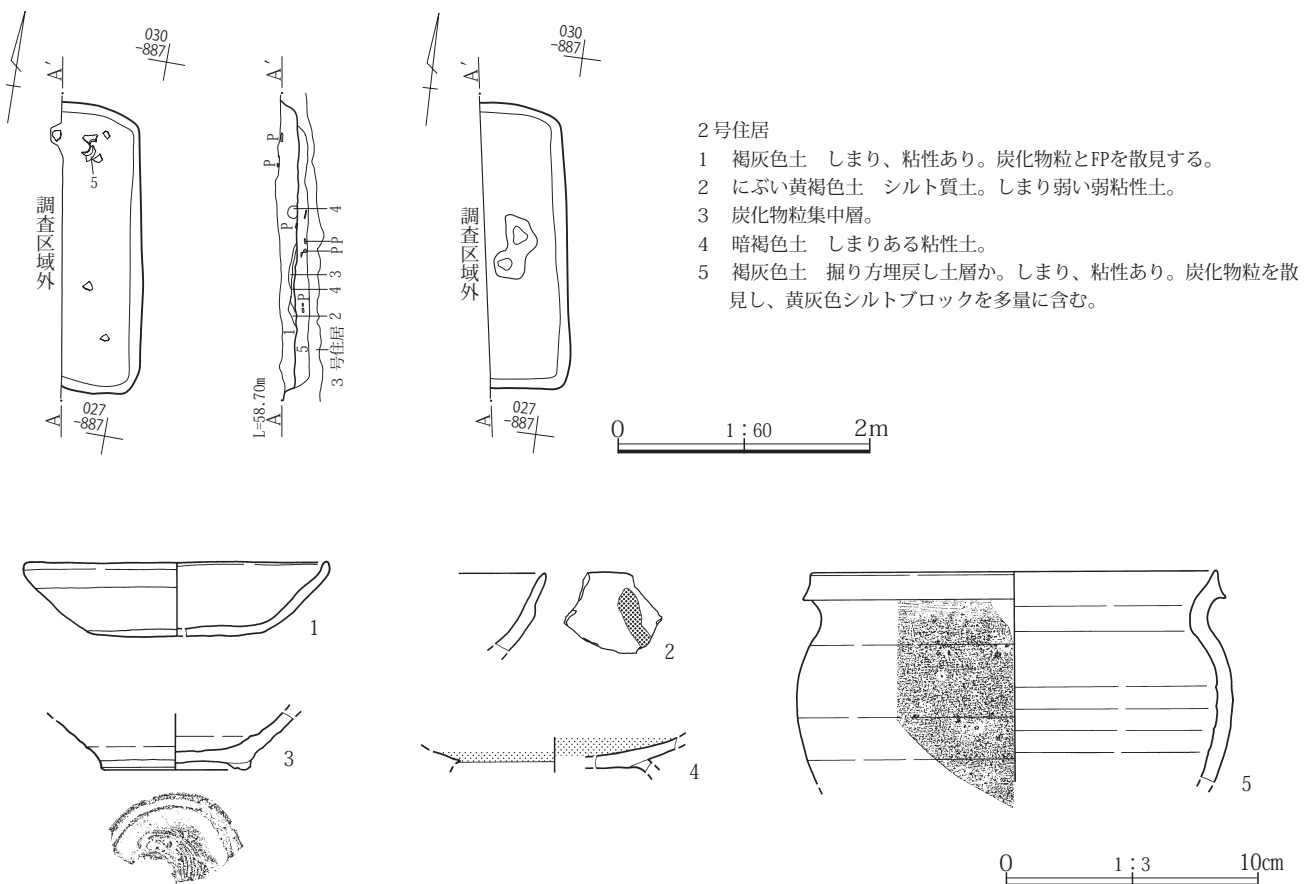
床面 北側へ低くやや傾斜していて、南側と3cmの比高差がある。ほぼ全体に深さ10cm前後の掘り方があり部分的にピット状の細い窪みが見られる。

その他 3号住居に後出する。カマド・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 狭い調査範囲に比して出土遺物量は多く、埋没土出土土器を中心に土師器・須恵器・灰釉陶器5点を図示

した。須恵器甕5は北東隅付近の床面から5cm前後浮いた状態であった。他の遺物はすべて埋没土内の出土である。図示した以外に重量で約1kgの土師器・須恵器を出土しているが、杯類破片が主体で甕類破片はきわめて少ない。

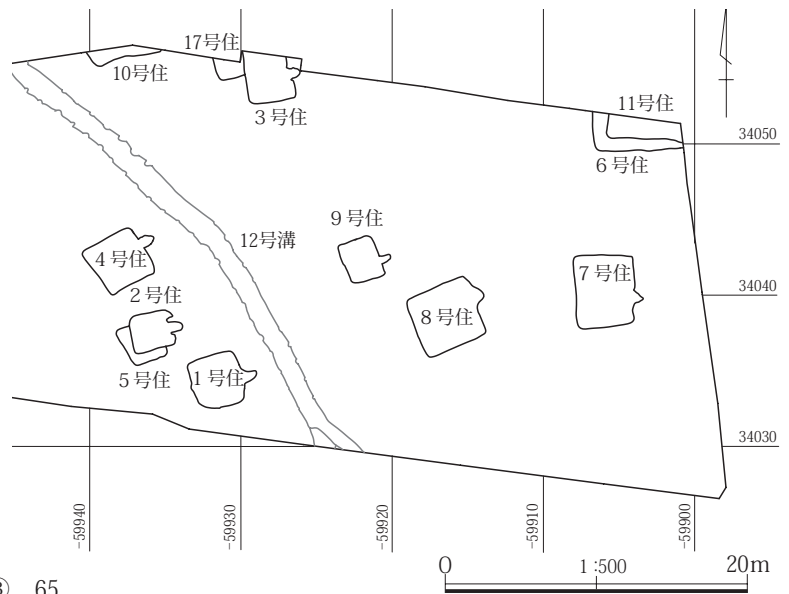
所見 平安時代の遺構であるが、東辺にカマドがなく、出土遺物に甕類が少ないなど、該期の住居としては違和感のある施設である。本住居に確実に伴う土器がなく時期決定の資料に欠くが、灰釉陶器の存在など9世紀末以降10世紀までの出土遺物である。



第104図 3区2号住居および出土遺物

4区の堅穴住居

調査第1面で5号住居まで、調査第2面で6号住居以降の住居を確認したが、同一時期の集落である。調査区の東側で合計12棟の住居が確認できた。ここは3区西隅から続く微高地にあたる。集落は4区東半のほぼ全域にひろがっているが、集落範囲は古墳時代よりやや東側に寄っている。3区同様区画溝と想定できる施設や掘立柱建物などの同時代遺構がある。

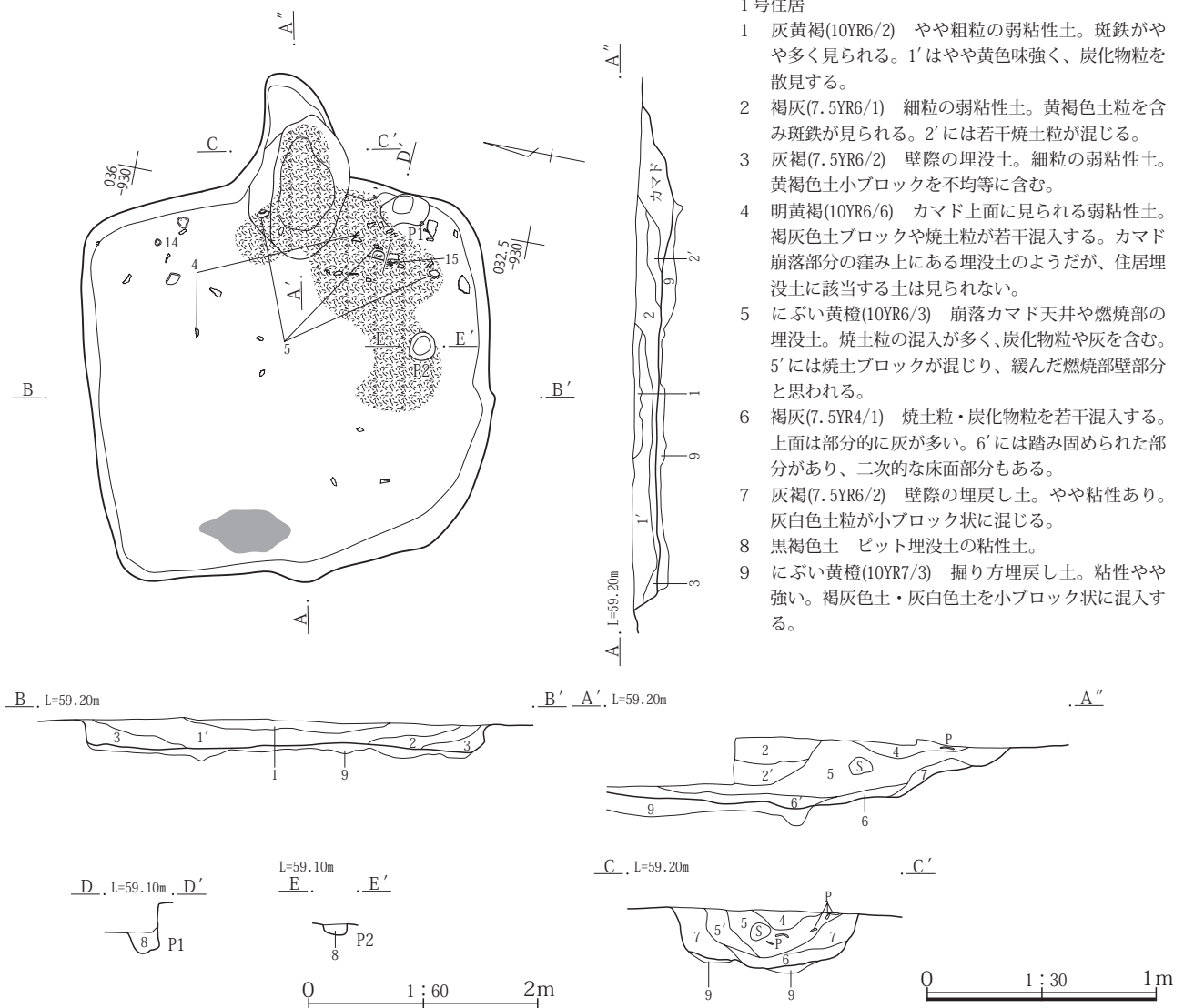


第105図 4区平安時代住居配置図

1号住居(第106～108図 PL.19-⑦、20-①～③、65

遺物観察表411頁)

4区西側の平安時代住居群内にあり、最も南側で確認



1号住居

- 1 灰黄褐(10YR6/2) やや粗粒の弱粘性土。斑鉄がやや多く見られる。1'はやや黄色味強く、炭化物粒を散見する。
- 2 褐灰(7.5YR6/1) 細粒の弱粘性土。黄褐色土粒を含み斑鉄が見られる。2'には若干焼土粒が混じる。
- 3 灰褐(7.5YR6/2) 壁際の埋没土。細粒の弱粘性土。黄褐色土小ブロックを不均等に含む。
- 4 明黄褐(10YR6/6) カマド上面に見られる弱粘性土。褐灰色土ブロックや焼土粒が若干混入する。カマド崩落部分の窪み上にある埋没土のようだが、住居埋没土に該当する土は見られない。
- 5 にぶい黄橙(10YR6/3) 崩落カマド天井や燃烧部の埋没土。焼土粒の混入が多く、炭化物粒や灰を含む。5'には焼土ブロックが混じり、緩んだ燃烧部壁部分と思われる。
- 6 褐灰(7.5YR4/1) 焼土粒・炭化物粒を若干混入する。上面は部分的に灰が多い。6'には踏み固められた部分があり、二次的な床面部分もある。
- 7 灰褐(7.5YR6/2) 壁際の埋戻し土。やや粘性あり。灰白色土粒が小ブロック状に混じる。
- 8 黒褐色土 ビット埋没土の粘性土。
- 9 にぶい黄橙(10YR7/3) 掘り方埋戻し土。粘性やや強い。褐灰色土・灰白色土を小ブロック状に混入する。

第106図 4区1号住居

した住居である。

位置 032～036-930～933グリッドにある。

規模形状 長軸長3.5m、短軸長3.2mの長方形を呈している。北辺は直線的だが南辺は湾曲気味で均等でない。隅の丸みの強いプランである。

埋没土・壁 レンズ状堆積を基本としており自然堆積と思われる。壁高は25cm前後である。

方位 N-78° E。 **面積** 2.75㎡

床面 南東側へ低く傾斜し、北西隅と11cmの比高差がある。掘り方はほぼ全体に見られるが深度5cm前後で浅く、壁際がやや深くなる傾向がある。

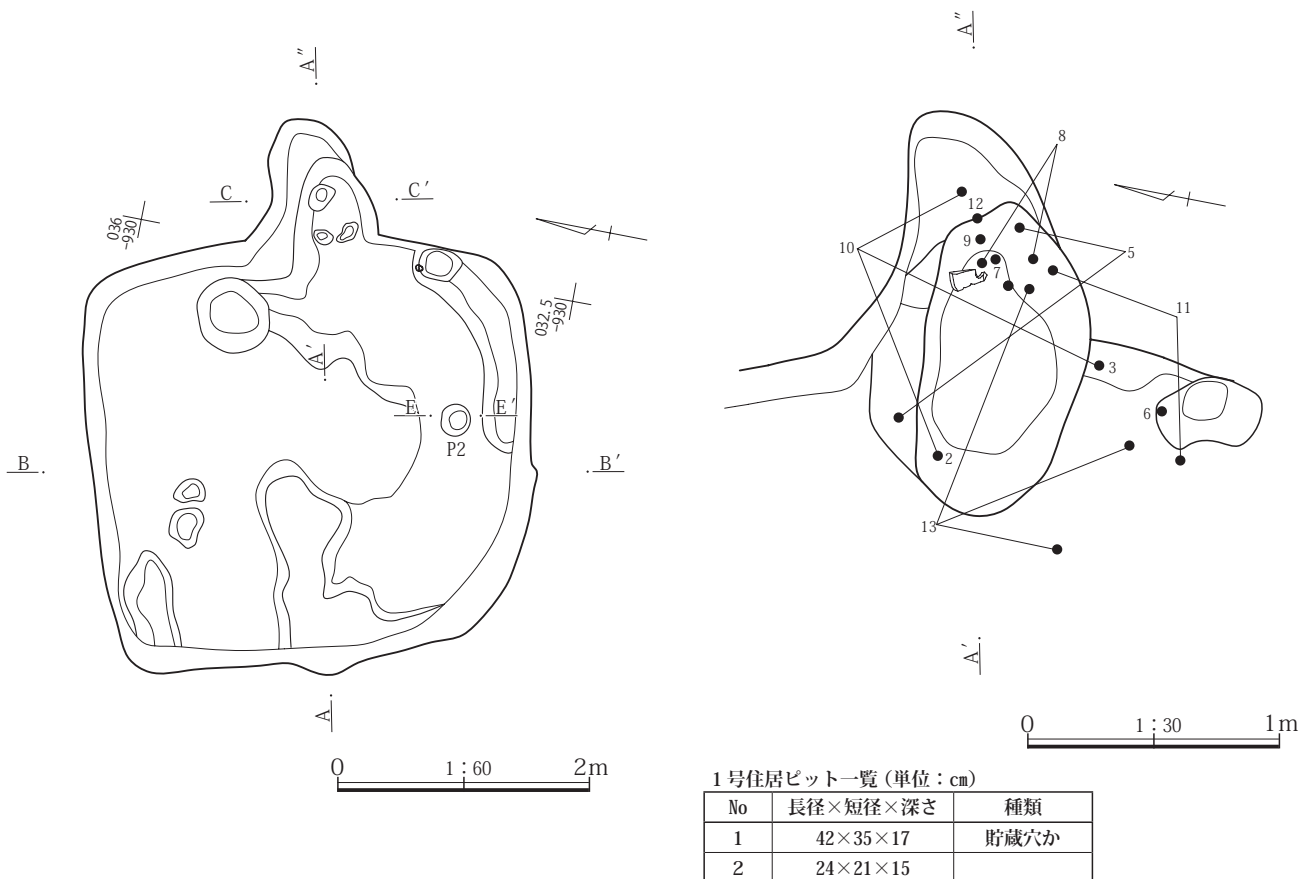
壁溝 掘り方調査時に壁際の窪みが部分的に確認されており、南東隅・北西隅など部分的に小規模な壁溝があった可能性がある。

ピット 床面で2基のピットを確認した。P1は貯蔵穴の位置にあるが規模が小さい。P2は浅く柱穴とは考えにくい。掘り方調査時にもピット状の窪みを確認しているが、主柱穴配置上になく深度10cm未満でピットとして扱わなかった。

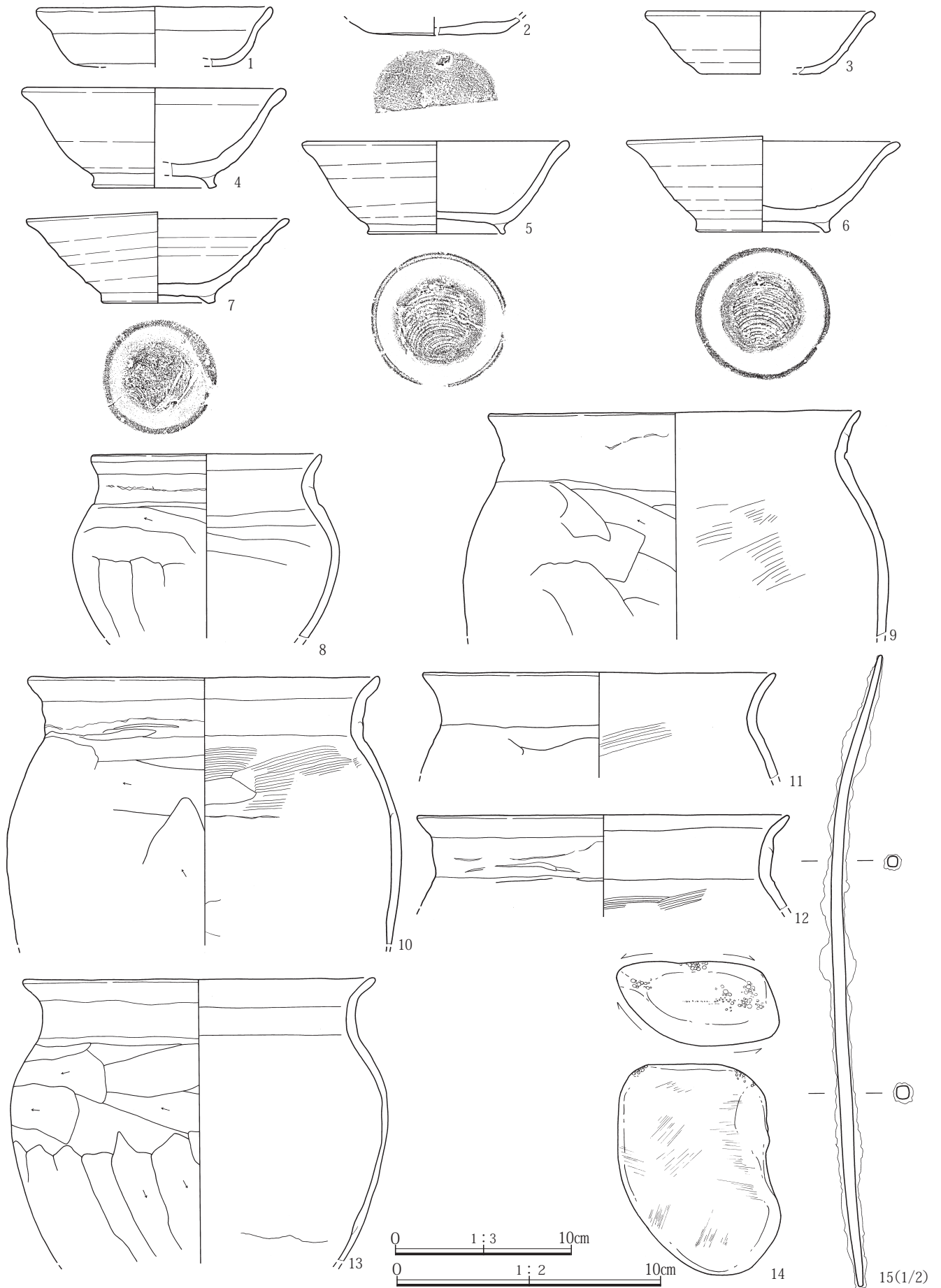
カマド 東辺ほぼ中央にある。広い燃烧部が壁際を中心とする位置にあり壁外から住居内へおよぶ。火床は住居床面より7cm低い。煙道の壁外への張り出しは95cmを測る。袖部は確認できないが、構造上住居内にも袖があったはずである。

遺物 出土遺物は豊富でカマド周辺遺物を中心に土器13点・石器1点・鉄器1点を図示した。カマド内から甕8・9・12と椀7が、またカマド内とカマド前面の床直上にかけて甕10・11・13が出土した。本住居に確実に伴う土器である。杯類は4～6など東壁寄りの床面よりやや高い位置から出土するものが多かった。鉄器15は紡軸のような完形の棒状製品でカマド前面の床直上で出土している。図示した以外に重量で2.1kgの土師器・須恵器を出土している。

所見 炭化物粒や焼土が広範囲に見られるが、焼失住居の痕跡はない。出土した甕類はコの字状口縁で椀は口縁部がやや外反し、9世紀後半頃の住居と想定できる。



第107図 4区1号住居掘り方およびカマド



第108図 4区1号住居出土遺物

2号住居(第109・110図 PL.20-④~⑦、65

遺物観察表411・412頁)

1号住居の北西側2mの位置に軸方向を揃えて並ぶようにして確認された。

位置 036～039-933～937グリッドにある。

規模形状 長軸長2.85m、短軸長2.4mの東西にやや長い長方形を呈している。各辺は直線的だが北側両隅の丸みが強い。カマド下の面では東壁がカマドを挟んでやや食い違っていることが分かる。

埋没土・壁 壁高は10cm前後である。

方位 N-78° E。面積 9.60㎡

床面 地山傾斜とは逆に北西側へ低く傾斜し、南東隅と5cmの比高差がある。掘り方は見られない。

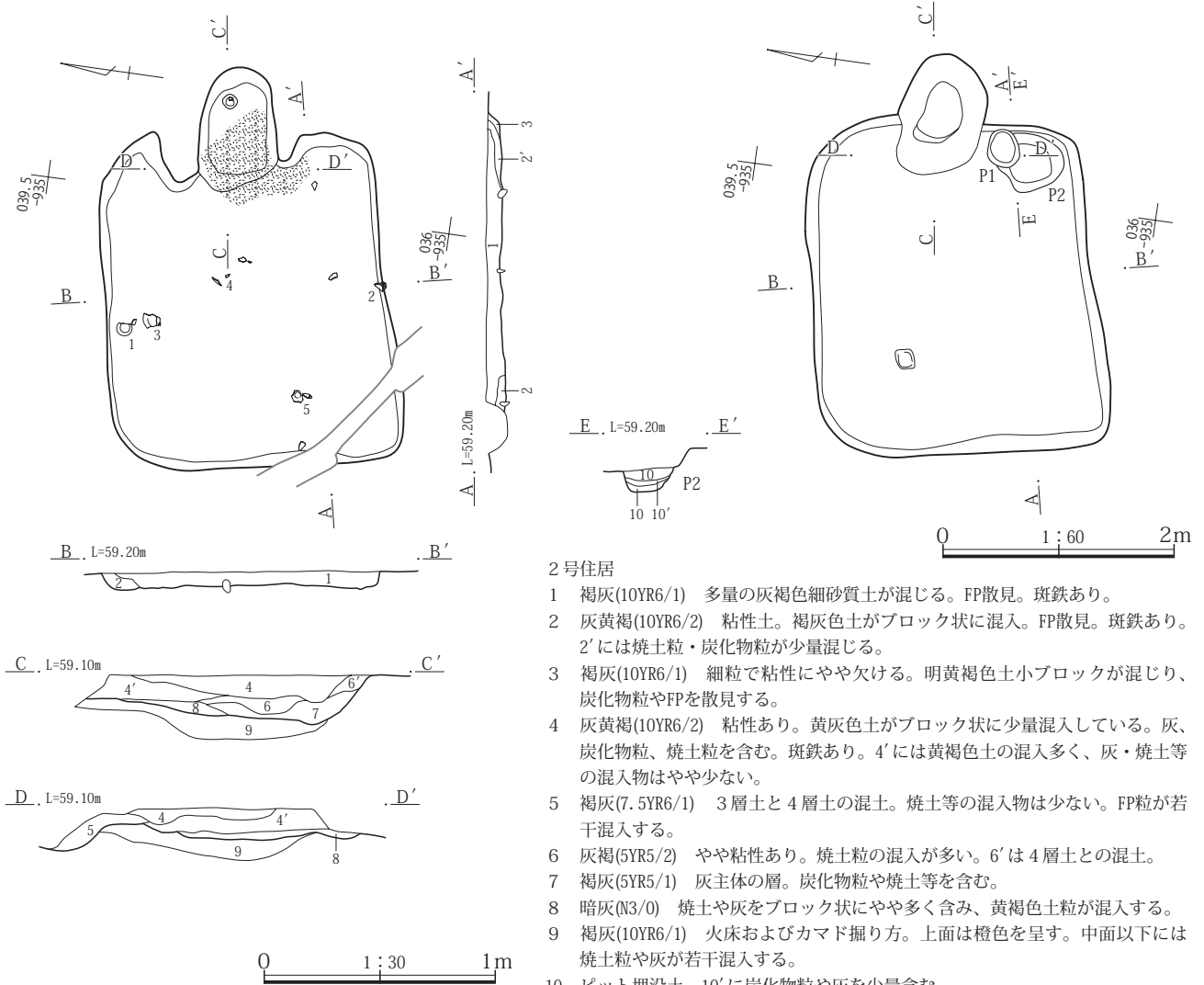
カマド 東辺中央にある。燃焼部は壁際から壁外にあり、火床は住居床面より4cm低い。深さ10cmほどの掘り方があり、埋戻し土には焼土・灰等が混じる。焚口幅が60cm

あり、小型住居としては大きなカマドである。

その他 5号住居に後出している。南東壁際の窪みP2は床面調査時には確認できなかった施設で配置より貯蔵穴と思われる。径48×40cm、床面からの深さ20cmで底面は比較的平坦な施設である。住居廃絶時には埋められていたようだ。P1はP2に後出する施設で床面からの深さ10cmの不明瞭な施設である。壁溝・ピット等は確認できない。

遺物 住居全体に散乱するようにして遺物が出土しており、そのうち杯類5点を図示した。北壁直下で1は床直上、3は床ほぼ直上から出土した。5も西壁寄りの床ほぼ直上の出土で、これらは本住居に確実に伴う遺物である。図示した以外に重量で0.5kgの遺物が出土した。この中には甕類が多く含まれている。

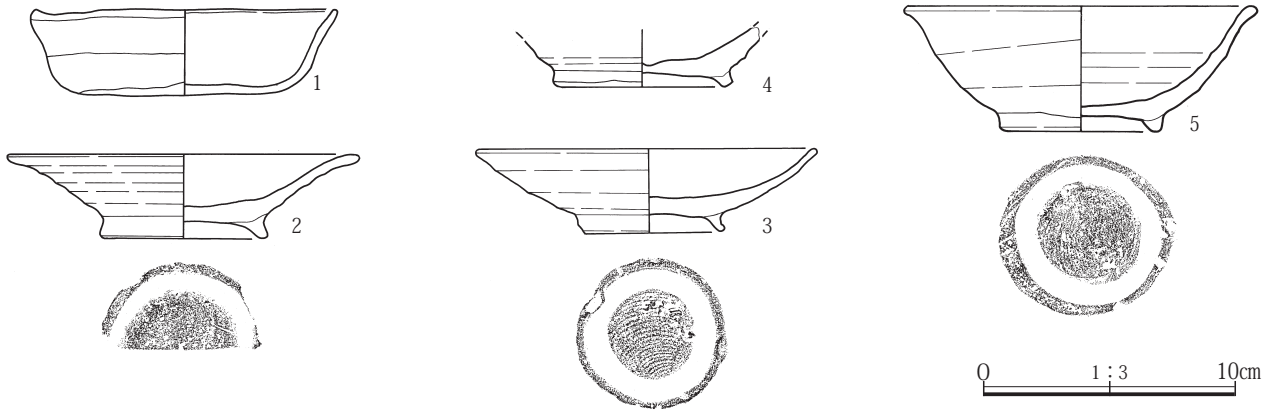
所見 出土須恵器は椀と皿へ分化し、口縁端部外反が見られ、9世紀末から10世紀前半の遺物と考えられる。



2号住居

- 1 褐灰(10YR6/1) 多量の灰褐色細砂質土が混じる。FP散見。斑鉄あり。
- 2 灰黄褐(10YR6/2) 粘性土。褐灰色土がブロック状に混入。FP散見。斑鉄あり。2'には焼土粒・炭化物粒が少量混じる。
- 3 褐灰(10YR6/1) 細粒で粘性にやや欠ける。明黄褐色土小ブロックが混じり、炭化物粒やFPを散見する。
- 4 灰黄褐(10YR6/2) 粘性あり。黄灰色土がブロック状に少量混入している。灰、炭化物粒、焼土粒を含む。斑鉄あり。4'には黄褐色土の混入物はやや少ない。
- 5 褐灰(7.5YR6/1) 3層土と4層土の混土。焼土等の混入物は少ない。FP粒が若干混入する。
- 6 灰褐(5YR5/2) やや粘性あり。焼土粒の混入が多い。6'は4層土との混土。
- 7 褐灰(5YR5/1) 灰主体の層。炭化物粒や焼土等を含む。
- 8 暗灰(N3/0) 焼土や灰をブロック状にやや多く含み、黄褐色土粒が混入する。
- 9 褐灰(10YR6/1) 火床およびカマド掘り方。上面は橙色を呈す。中面以下には焼土粒や灰が若干混入する。
- 10 ピット埋没土 10'に炭化物粒や灰を少量含む。

第109図 4区2号住居



第110図 4区2号住居出土遺物

3号住居(第111・112図 PL. 20-⑧、21-①~③、65・66
遺物観察表412頁)

北側が調査区域外で全容を把握できていない。

位置 052～056-926～929グリッドにある。

規模形状 長軸長3.4m以上、短軸長3.15mの南北に長い長方形を呈している。東辺はカマドを挟んで食い違っており、長いと推定されるカマド北側が狭くなっている。各辺は直線的で比較的整美な形状である。

埋没土・壁 壁高は10cm前後である。

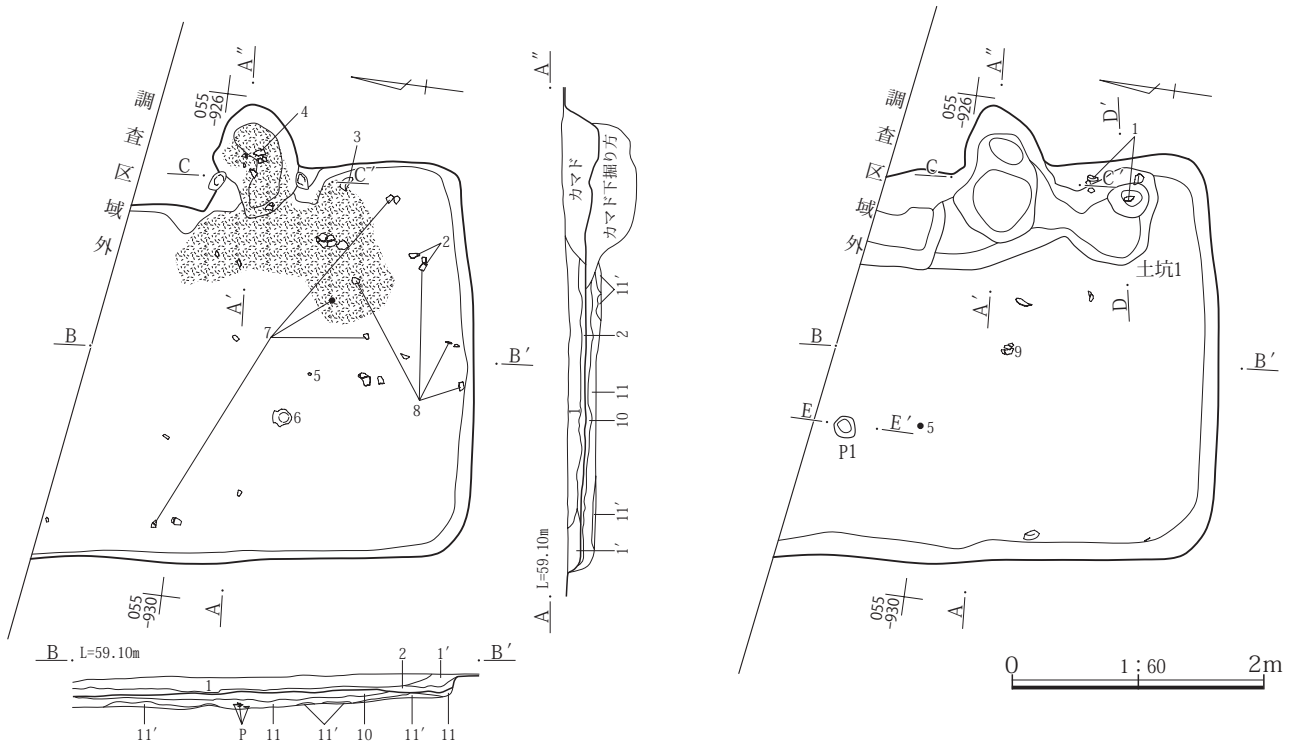
方位 N-86° E。面積 残存5.79㎡

床面 5cm前後の凹凸のある不整な床面である。深さ10

cm前後の掘り方があり、掘り方底面は東壁下を除いて比較的平坦である。

カマド 東辺やや南寄りにある。燃焼部は壁際から壁外にあり、火床は住居床面より9cm低い。さらに火床下には深さ25cm前後の掘り方があり、埋戻し土に焼土・灰が混じる。壁際に川原石を使った袖石が据えられ、焚口間口は60cmとなる。煙道の張り出しは確認できない。

その他 掘り方調査時にカマド南脇と住居中央北西寄りで径17cm、床面からの深さ33cmのP1を確認した。配置・規模から支柱穴となる施設ではない。壁溝は確認されていない。

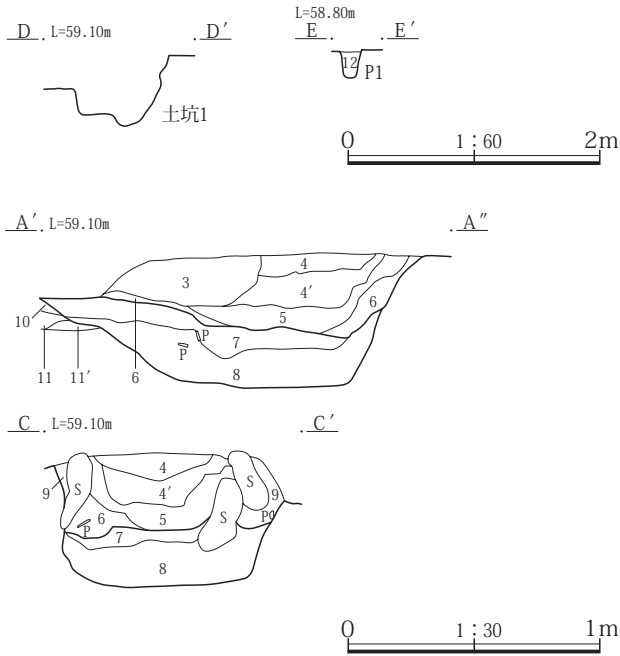


第111図 4区3号住居

遺物 2号住居同様住居内に散乱するように遺物が出土し、そのうち9点を図示した。カマド内出土は杯4のみで、床面に散乱する破片のうち杯5、甕7・8が床直上出土破片を含んでいる。椀6は床ほぼ直上だが住居中央

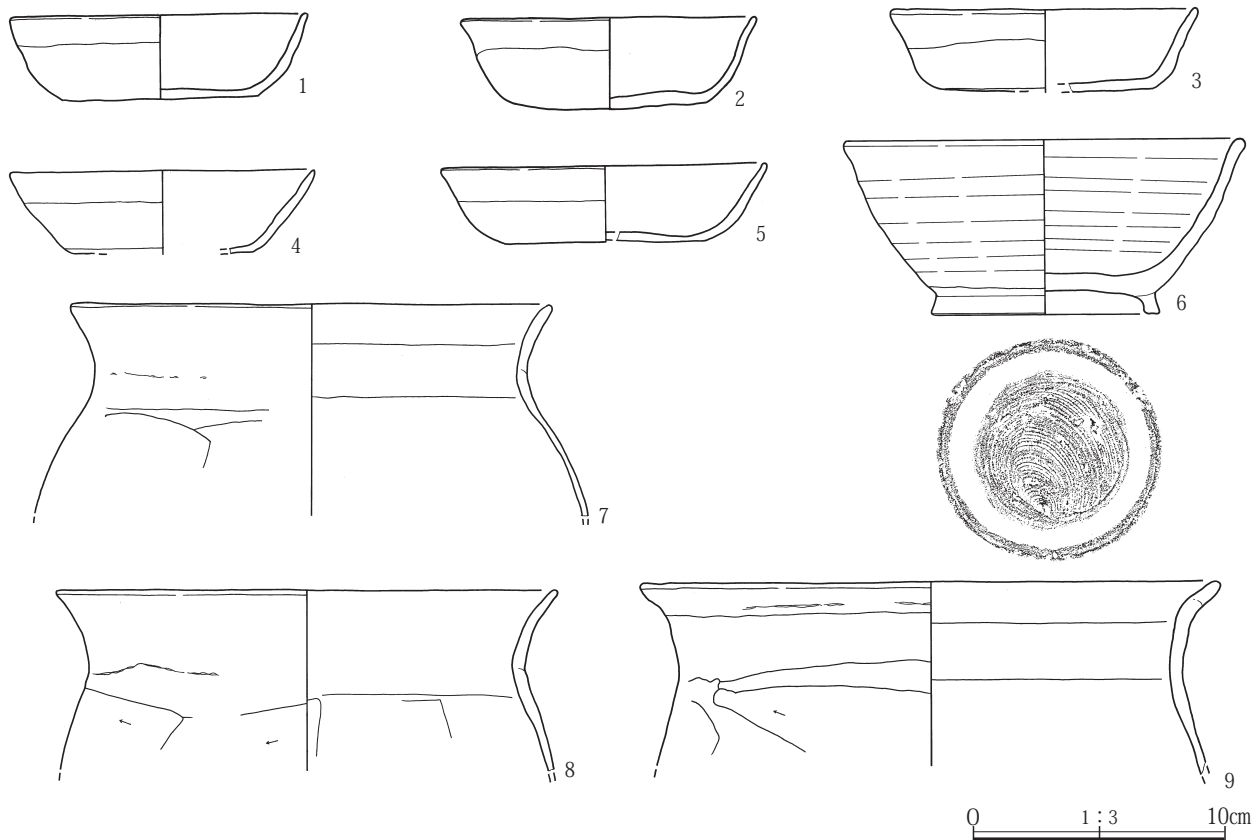
付近の出土である。図示した以外に重量で1.6kgの土師器を主体とする遺物が出土した。

所見 確実な住居時期決定の遺物を欠くが、出土遺物はコの字状口縁甕と底径の広い杯を伴う9世紀前半の土器である。



3号住居

- 1 褐灰(10YR5/1) 黄褐色土をブロック状に含むややしまり欠く層。炭化物粒を含む。1'には暗褐色土ブロックも混じる。
- 2 褐灰(10YR5/1) 斑鉄の見られるややしまりある層。
- 3 灰黄褐(10YR5/2) 2層に近いが下層に向かって漸移的に炭化物粒や焼土粒の混入増す。
- 4 にぶい黄褐(10YR5/4) しまり弱く粘性強い。焼土ブロックを散見する。4'には不均等に多量の炭化物粒が混じる。
- 5 灰黄褐(10YR5/2) しまりやや弱い粘性土。二次的な火床面と思われるが被熱痕は少ない。
- 6 黒褐(7.5YR3/1) 下側にある火床上の埋没土と思われる。炭化物粒を多量に含むややしまり弱い層。
- 7 灰褐(7.5YR4/2) カマド下掘り方埋戻し土。ローム状土ブロック・灰・炭化物粒を多量に含む。
- 8 にぶい黄橙(10YR6/4) カマド下掘り方埋戻し土下層。大粒の焼土ブロック、暗褐色土ブロック・灰を含む。しまりあり。
- 9 黒(N2/0) 袖石裏込め。焼土小ブロックと多量の炭化物粒・灰白色の灰を含む。しまり弱い。
- 10 灰黄褐(10YR5/2) しまりのある貼床層か。暗褐色土の混じる弱粘性土。斑鉄が多い。
- 11 褐灰(10YR5/1) 掘り方埋戻し土。黄褐色土小ブロックを含む。しまり・粘性あり。11'はやや砂質。
- 12 灰黄褐(10YR6/2) ピット埋没土。砂質土で・炭化物小片を含む。下層ほど黒色味をおびる。



第112図 4区3号住居断面および出土遺物

4号住居(第113図 PL. 21-④ 遺物観察表412頁)

床面直上付近および一部床を削り込んだ面で把握した壁面のほとんど残存しない住居である。

位置 040～044-935～940グリッドにある。

規模形状 北側長軸長3.6m、短軸長3.45mの方形で南・北隅がやや鈍角に開き菱形状に歪んでいる。

埋没土・壁 埋没土は確認できず、壁は残存しない。

方位 N-60° E。 面積 8.35㎡

床面 調査できた範囲では地山傾斜とは逆に西側へ低く傾斜し、東隅と5cm前後の比高差がある。北西側は削られた可能性がある。確実に残存する床面の範囲が不明瞭だが、カマド前面に踏み固められた硬化面が見られる。住居粗掘り時の窪みを埋め戻したようなわずかな掘り方が見られる。一部ピット状の窪み部分があるが、P1と

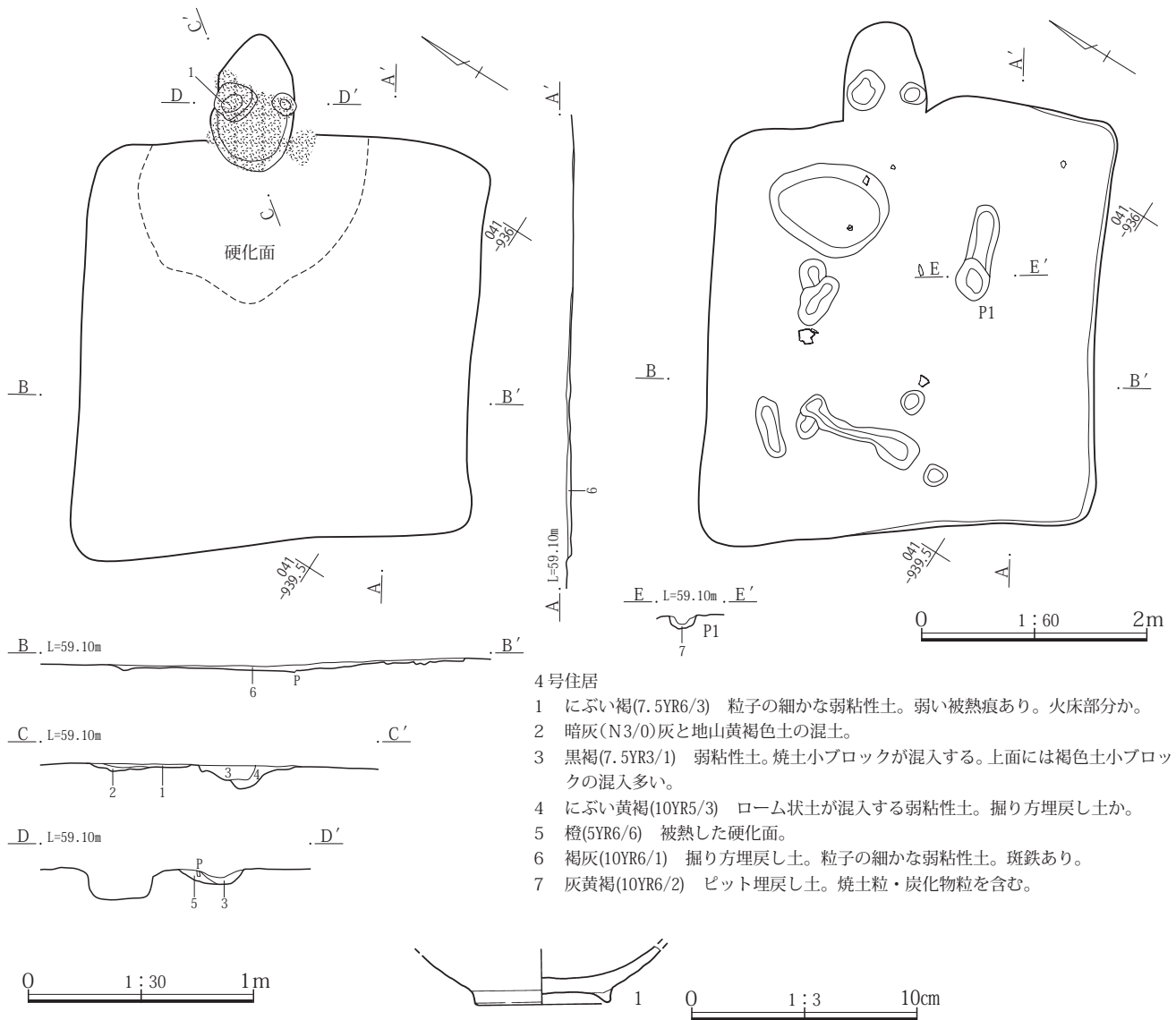
した。最も深い部分でも床面からの深さ12cmの不明瞭なものである。

カマド 北東辺やや北寄りにある。燃烧部は壁外にあり、火床は床面より3cm低い。燃烧部両脇に小ピットがある。火床からの深さは北西側12cm、南東側6cmで礫を据えた痕跡となる可能性がある。袖石や支脚の位置ではなく、煙道入口部の施設になると想定する。

その他 壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 カマド燃烧部脇の窪み内出土須恵器碗1を图示した。图示した以外に重量で0.5kgの土器があるが須恵器が3割を占めていた。

所見 唯一图示できた須恵器碗は口縁が開く9世紀後半から10世紀前半頃の遺物と考えられる。



第113図 4区4号住居および出土遺物

5号住居(第114・115図 PL.20-④、21-⑤・⑥、66
遺物観察表412頁)

2号住居に北東隅付近を壊されているが、掘り方部分から住居の全容が把握できる。

位置 035～038-934～938グリッドにある。

規模形状 北側長軸長2.9m、東側短軸長2.25mで、南辺は北辺より70cm短く、東辺は西辺より30cm短い台形状を呈している。

埋没土・壁 埋没土は水平に近い堆積の部分が多い。壁高は20cm前後で最も深い南壁で29cmを測る。

方位 N-72° E。面積 12.26㎡

床面 細かな凹凸があるがほぼ平坦な床面である。カマド内から南東隅にかけて炭化物粒が散っている。住居掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の浅い掘り方が広範囲に見られる。

壁溝 南西隅周辺にのみ見られる。床面からの深さ5cm前後の比較的明瞭な掘り込みであった。

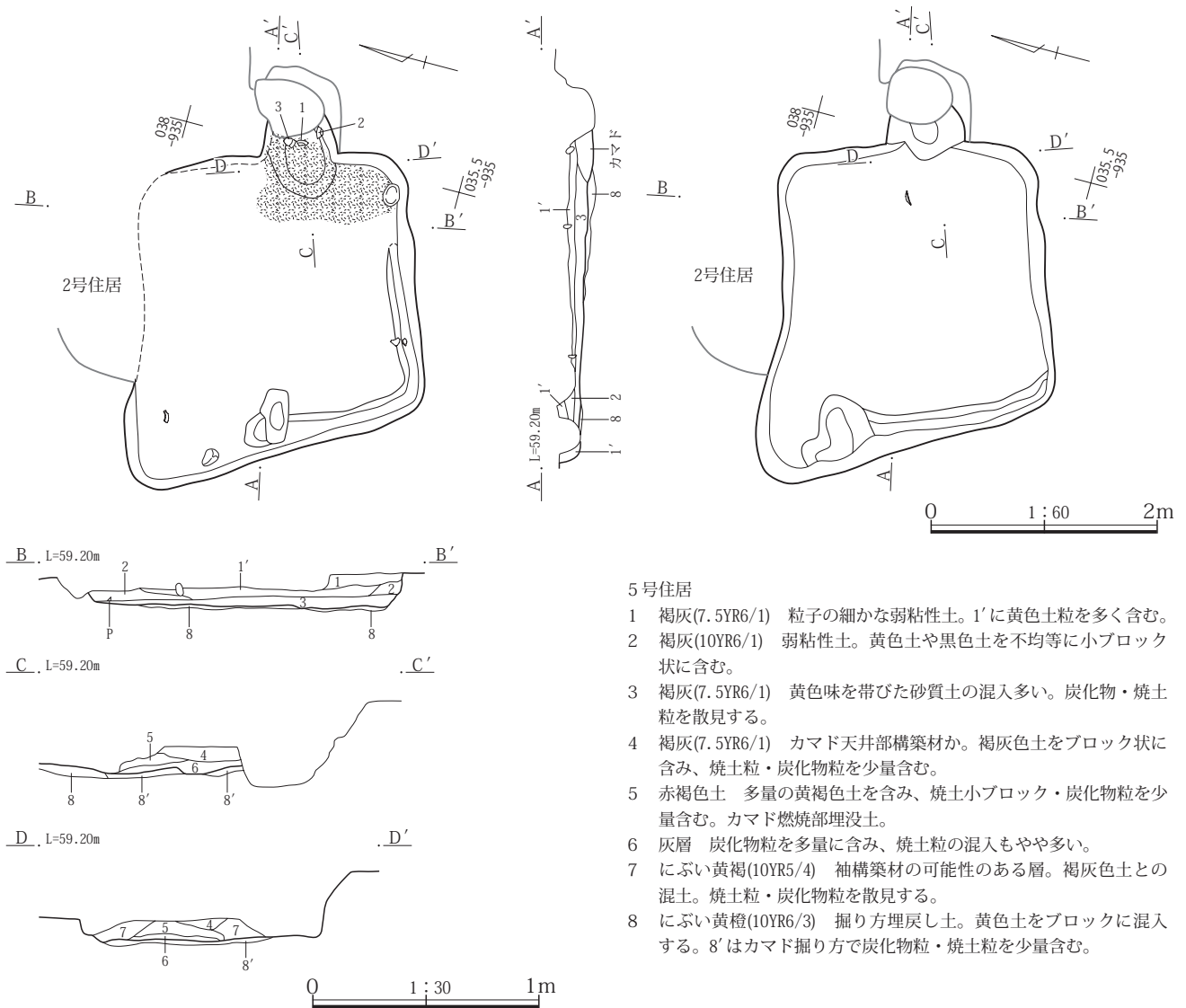
ピット 掘り方調査時に壁溝北隅に接して床面からの深さ12cmのピット状の窪みを確認した。埋没土上面からの掘り込みとは別の窪みである。

カマド 東辺中央やや南寄りにあり、東隅を壊されている。燃烧部は壁際から壁外にあり、火床は住居床面より3cm前後低くなっている。

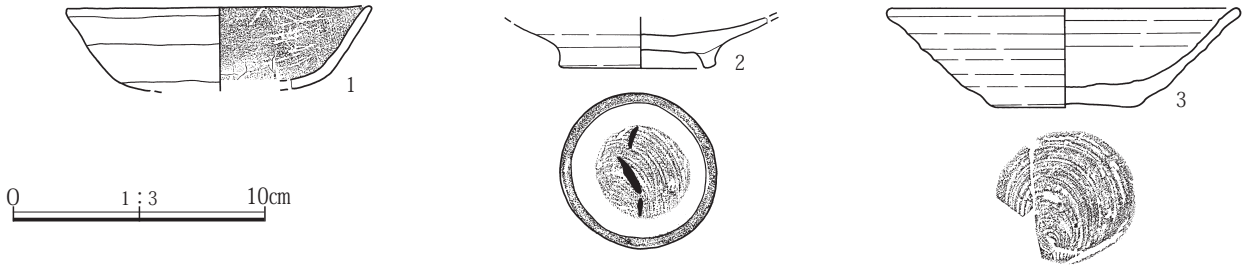
その他 2号住居に前出している。

遺物 カマド火床下埋め戻し土内から出土した杯類3点を図示した。図示した以外に重量で0.8kgの土器が出土したが、ほとんど土師器である。

所見 図示した遺物は口縁の反りのない9世紀後半頃の土器で、カマド構築または改築時の遺物である。



第114図 4区5号住居



第115図 4区5号住居出土遺物

6号住居(第116～118図 PL. 21-⑦・⑧、22-①・②、66・67 遺物観察表412・413頁)

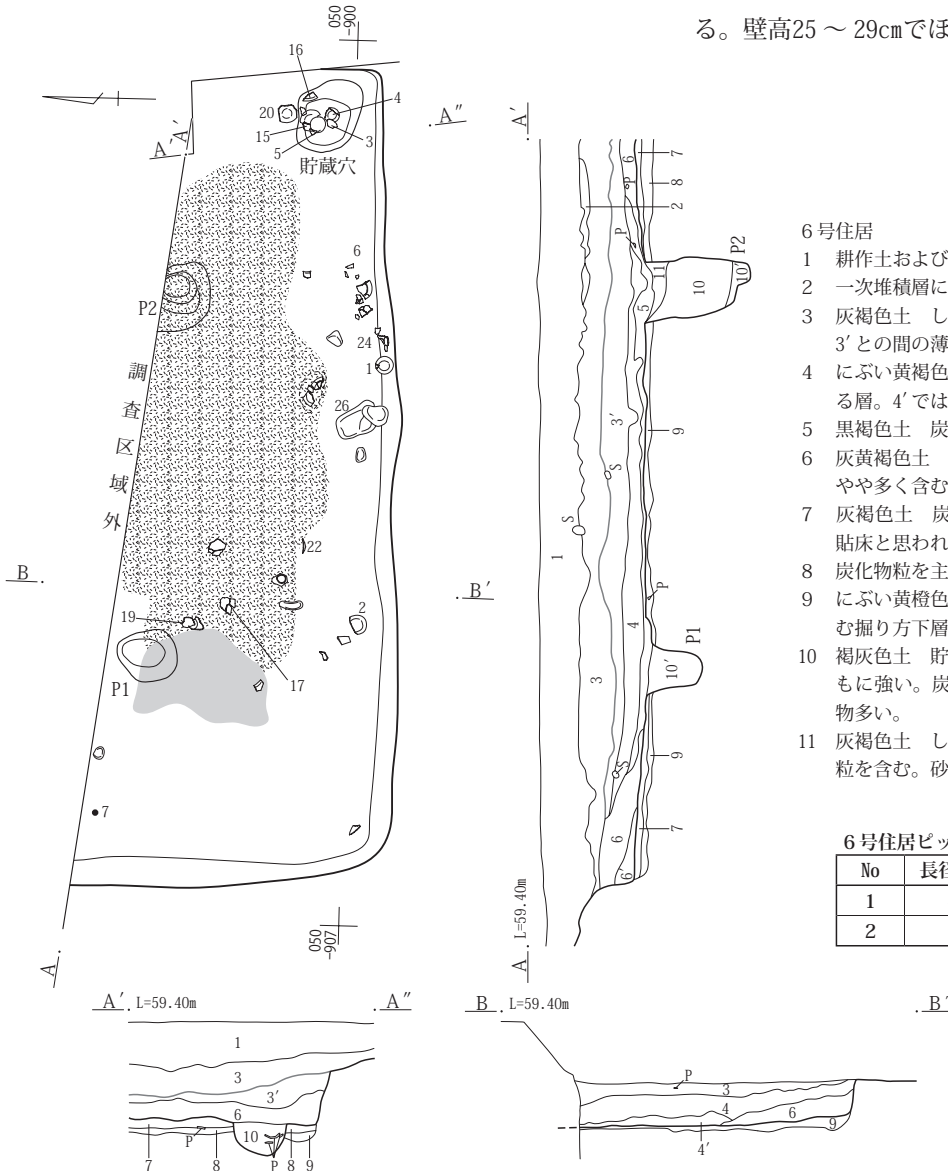
4区北東隅にあって住居南側を確認し、東隅を調査範囲いっぱいを広げて調査し、かろうじて南東隅まで把握できた。このため土層断面図が変則的になっている。この付近の上面部分は土器出土の多い地点で調査時には遺

物包含層として扱われた。

位置 049～051-900～906グリッドにある。

規模形状 東西軸長6.3m、南北軸長2.3m以上の規模の大型住居である。残存する各辺は直線的で各隅も丸みが少なく、整美な形状である。

埋没土・壁 壁側から埋もれており、自然堆積と思われる。壁高25～29cmでほぼ一様である。



6号住居

- 1 耕作土およびAs-B混土。
- 2 一次堆積層に近いブロック状のAs-B。
- 3 灰褐色土 しまりある層。炭化物粒・焼土粒を散見する。3'との間の薄線部分に炭化物層が見られる。
- 4 にぶい黄褐色土 炭化物粒・焼土粒を散見するしまりある層。4'では混入物やや多い。
- 5 黒褐色土 炭化物の多い層。灰・焼土を散見する。
- 6 灰黄褐色土 しまりのある粘性土層。6'では炭化物粒をやや多く含む。
- 7 灰褐色土 炭化物粒・焼土粒を散見するしまり強い層。貼床と思われる。
- 8 炭化物粒を主体に互層状の砂質土が混じる層。
- 9 にぶい黄褐色土 地山に近い砂質土。炭化物粒を少量含む掘り方下層埋戻し土。
- 10 褐灰色土 貯蔵穴およびピット埋没土。しまり、粘性ともに強い。炭化物粒・焼土粒を散見する。10'では混入物多い。
- 11 灰褐色土 しまり粘性ともにやや強い。焼土粒・炭化物粒を含む。砂質土をブロック状に混入する。

6号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	47×40×52	主柱穴
2	53×-×90	主柱穴

第116図 4区6号住居

方位 N-1°W。面積 残存12.03㎡

床面 細かな凹凸があり、調査範囲では住居中央側が低く、壁際と5cm前後の比高差がある。ほぼ全体に深さ2~13cmの掘り方があり、上面に貼床と思われる層厚4cm前後の踏み固め層(7層)が見られる。

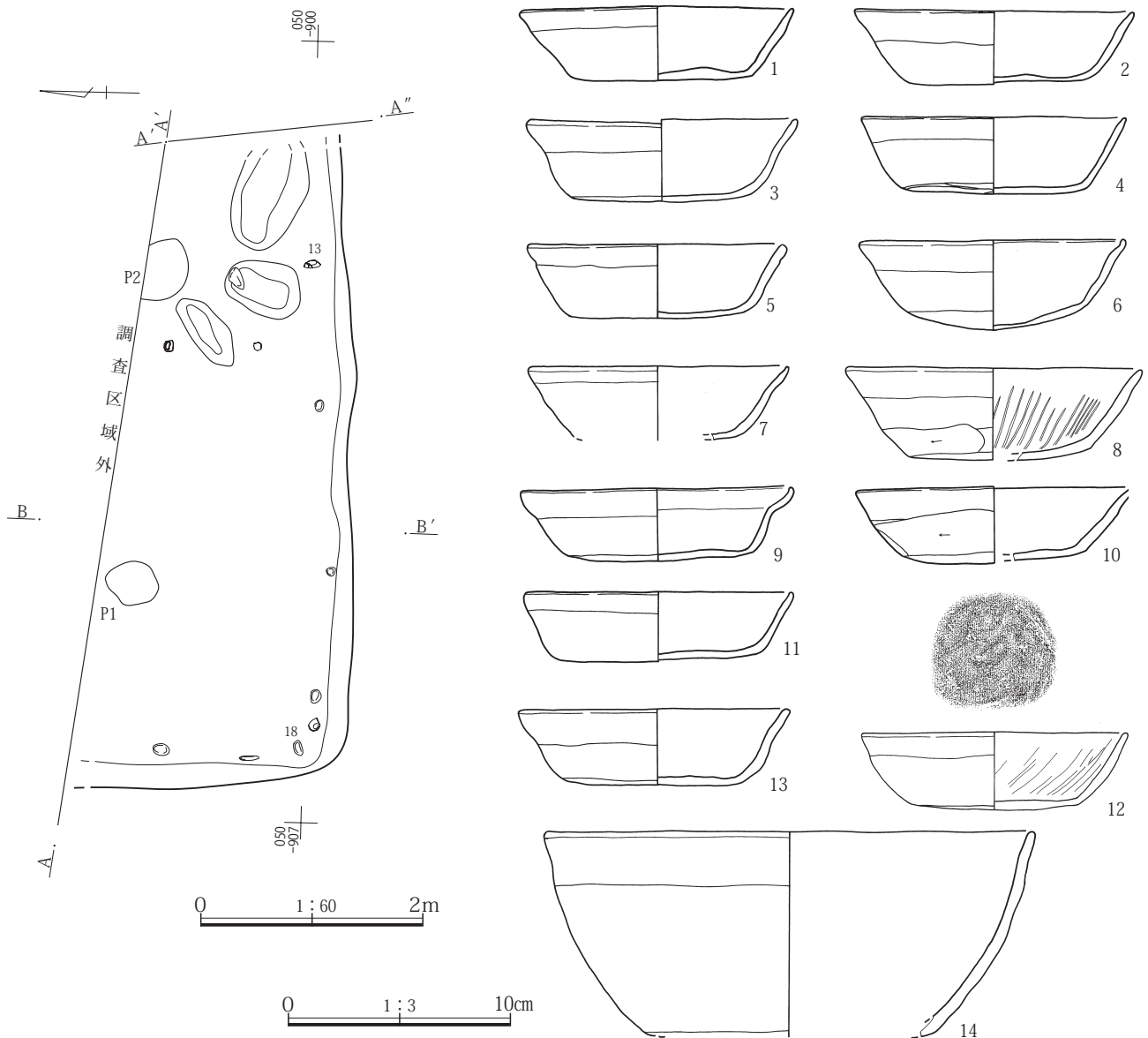
ピット 2本の柱穴を確認した。4支柱穴を構成すると思われるが南壁からの距離はP1がP2より30cm長く、歪んだ配置となっている。

貯蔵穴 南東隅壁直下で確認したピット状の窪みは径60×49cm・深さ30cmの小規模な施設だが、配置より貯蔵穴と思われる。遺物の出土も多い。

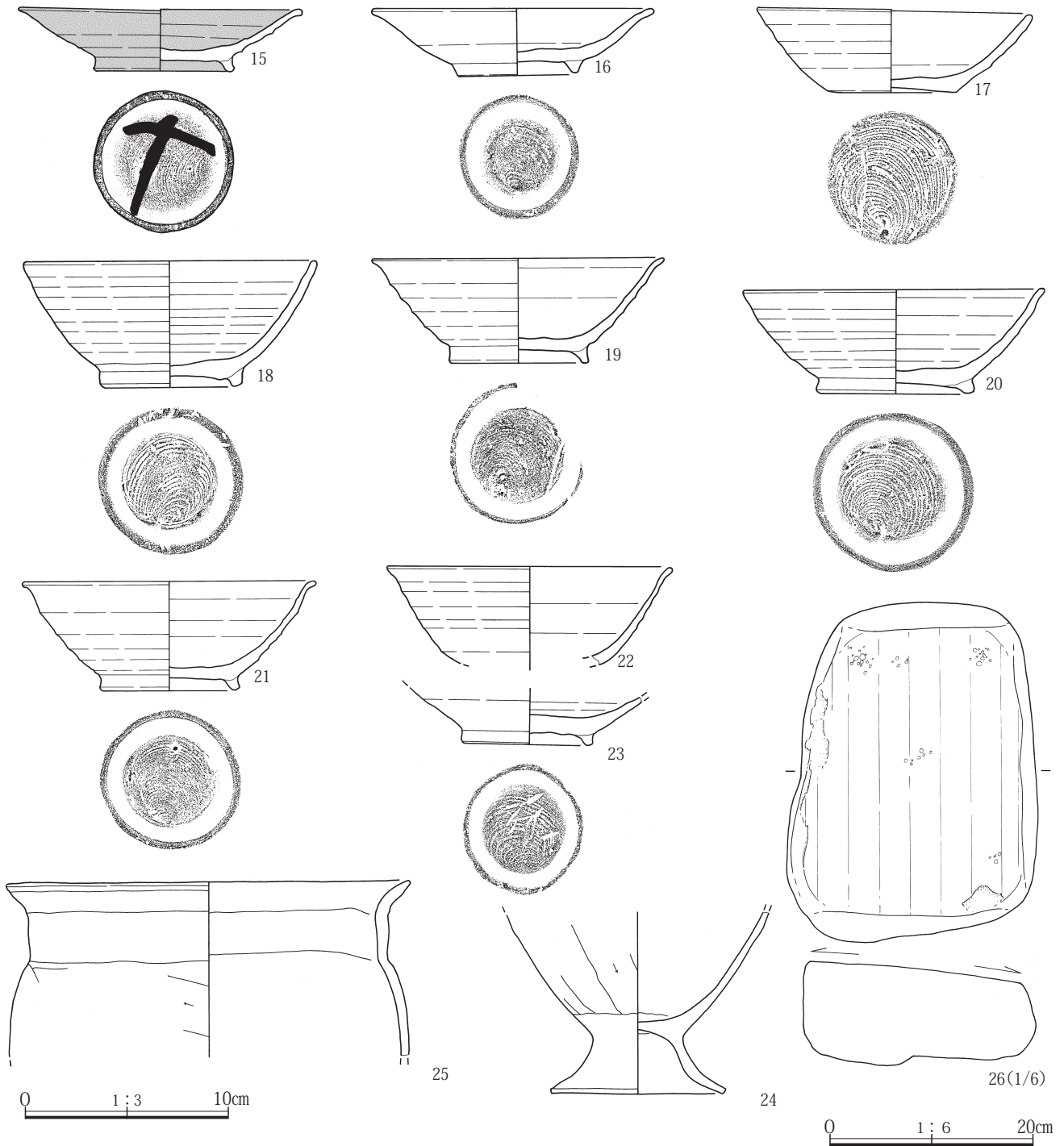
その他 11号住居に後出している。カマド・壁溝は確認できない。掘り方調査時に壁下に不規則に並べたような小礫が確認されている。

遺物 住居内の一部のみの調査であったが出土遺物はきわめて多く、杯類を中心に25点の土器と石製品1点を図示した。貯蔵穴内で床下15cm以下から土師器杯3~5、須恵器皿15・16が、深度不明だが土師器杯8・9が出土している。土師器杯2・須恵器碗20も床直上出土遺物でこれらが本住居に確実に伴う遺物である。台石26は南壁中央直下の床直上に据えられていた。図示した以外にも重量で約8kgの土器があり、須恵器を1/4ほど含み灰釉陶器も見られた。

所見 床直上には広範囲に炭化物粒や灰の散布が見られるが、柱穴はこの層下で確認した。住居廃絶直後に堆積した炭化物粒・灰層と思われる。11号住居に後出する。



第117図 4区6号住居掘り方および出土遺物(1)



第118図 4区6号住居出土遺物(2)

7号住居(第119～121図 PL.22-③～⑥、67
遺物観察表413・414頁)

調査段階で2層土下に若干硬化した面と灰等の散布面があり床面としたが、さらに10cmほど下により顕著な床面が見られ、この下面を住居床面と訂正した。上面の硬化面も比較的水平和で、住居廃絶後の埋没過程で踏み固められた二次的な床面の可能性がある。

位置 037～042-903～907グリッドで、1号掘立柱建物の北側に並ぶような配置にある。

規模形状 長軸長西側4.9m、短軸長3.9mの南北に長い長方形を呈し、東辺は西辺より50cm短い台形状に歪んでいる。東辺はカマドを挟んでわずかに食い違っている。

埋没土・壁 壁高は15～27cmを測る。

方位 N-89° E。面積 16.41㎡

床面 凹凸の多い床面で地山傾斜に沿って南側が低く、北壁直下と8cmの比高差がある。東半に踏み固められた硬化面が確認できる。掘り方は四隅周辺や中央付近で土坑状の底面が平坦で広い窪みがあり、他にピット状の窪

みもあった。これらのうち特に顕著な部分をピット2～4および床下土坑1・2として計測値を記した。

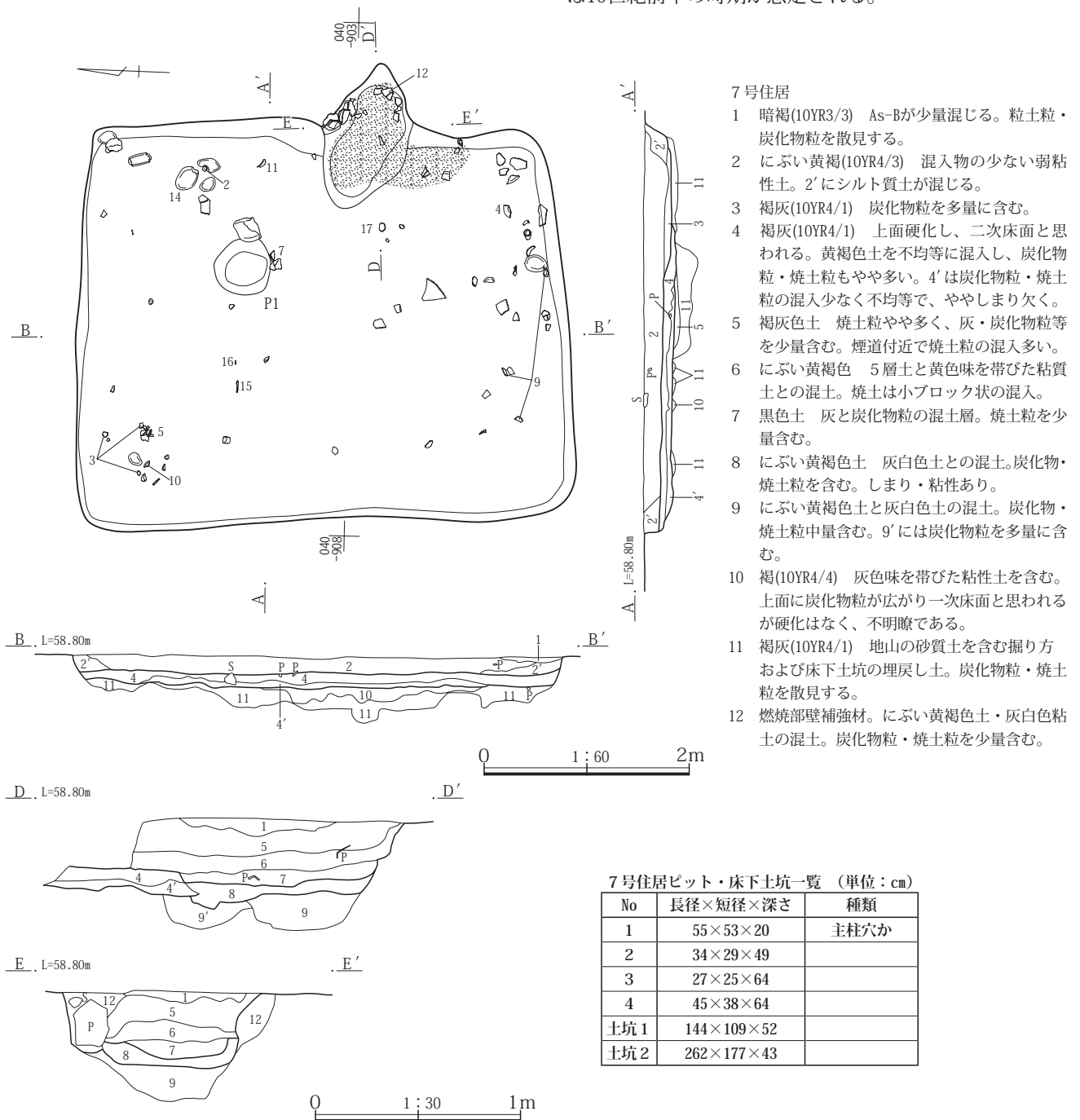
ピット 住居中央北東寄りの窪みをP1とした。配置は支柱穴的であるが対になるピットがなく、不明瞭である。
カマド 東辺南寄りにある。燃烧部は壁際で火床は住居床縁より6cm前後低い。煙道はわずかで、先端は住居壁から65cmの位置にある。袖は確認できなかった。

その他 壁溝は確認できない。

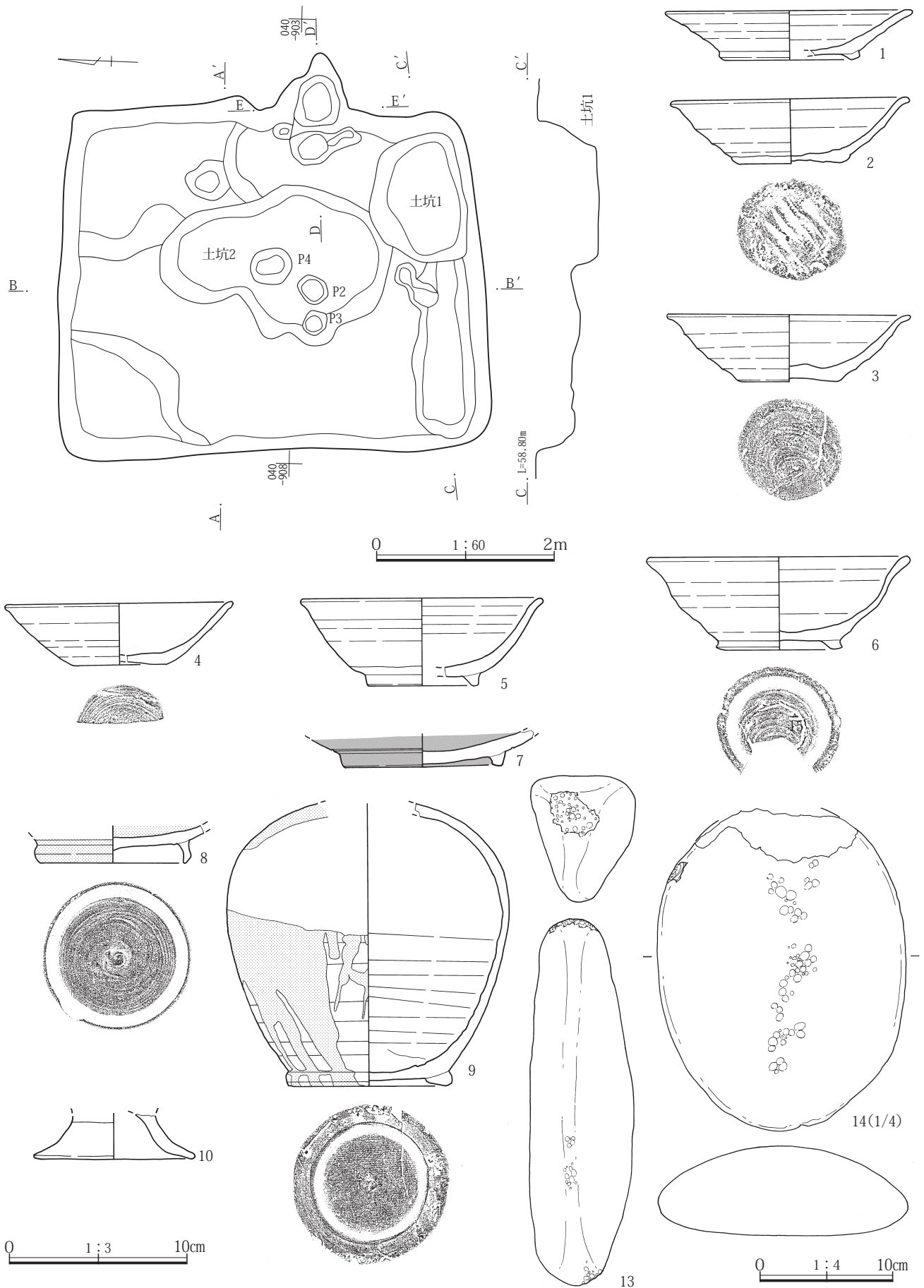
遺物 住居全域から多量の遺物を出土した。図示できた

遺物も灰釉陶器・緑釉陶器を含む土器12点の他、石製品2点、鉄器3点があり多彩である。カマド内の遺物は少なく甕12と、住居埋没土片とも接合した皿1のみである。北西隅壁下床直上で3・5・10がまとまって出土している。南壁下の4・9、東壁下の2も床直上の出土でこれらが本住居に確実に伴う土器である。図示した以外に重量で13.4kgの遺物が出土し過半が須恵器で、土師器片には甕類が多かった。

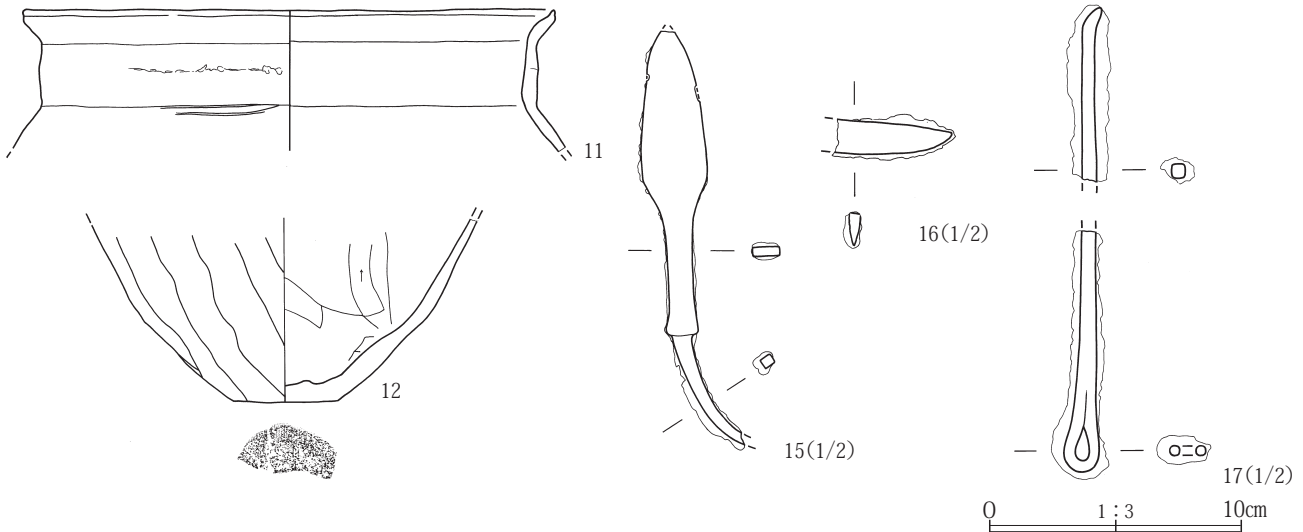
所見 須恵器碗類は深めで口縁が外反しており、本住居は10世紀前半の時期が想定される。



第119図 4区7号住居



第120図 4区7号住居掘り方および出土遺物(1)



第121図 4区7号住居出土遺物(2)

8号住居(第122図 PL. 22-⑦・⑧)

掘り方で把握した壁・床面の残存しない住居である。

位置 035～041-913～919グリッドにある。

規模形状 掘り方部分で東西軸長4.4m、南北軸長4.3mのほぼ正方形を呈している。東辺が外側に大きく湾曲し整美さに欠ける。

壁・床面 壁・床面は残存しない。掘り方底面は比較的平坦で、本遺跡の他の住居と照合すれば床下全体に浅い掘り方があり、住居プランに等しいと思われる。

方位 N-68° E。面積 18.47㎡(掘り方面)

ピット 2カ所のピット状窪みがあるが、住居床面に伴

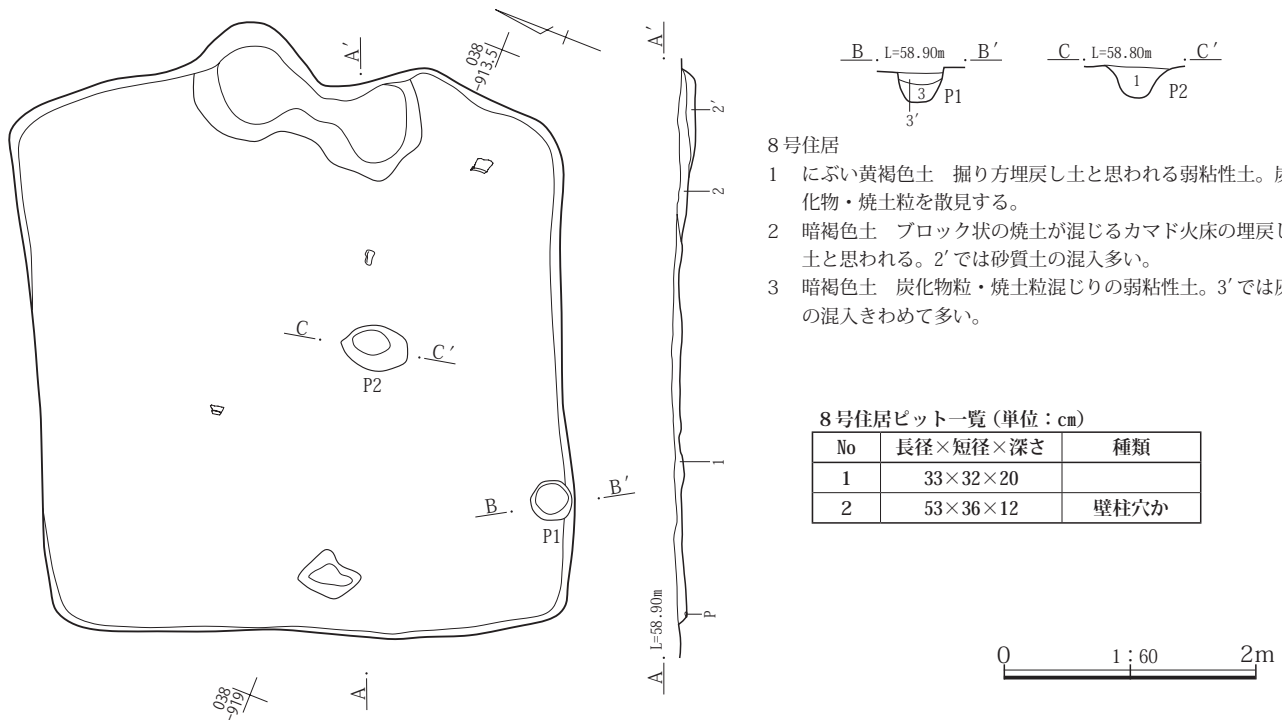
うものか判断できない。配置から主柱穴になるとは考えにくい。P1は埋没土に焼土等の混入が顕著である。

カマド 東辺中央にカマド掘り方と思われる窪みが南北に2カ所並び、この部分の埋没土には焼土や灰の混入が明瞭に見られる。

その他 壁溝・貯蔵穴の痕跡は確認できない。

遺物 土師器甕類等の破片を中心に重量で1.1kgの土器が出土しているが、図示できる遺物を得られなかった。古墳時代の土器の混入も多い。

所見 遺構確認の層やカマドの痕跡から平安時代の住居として問題ないと考えますが、時期決定の資料に欠く。



8号住居

- 1 にぶい黄褐色土 掘り方埋戻し土と思われる弱粘性土。炭化物・焼土粒を散見する。
- 2 暗褐色土 ブロック状の焼土が混じるカマド火床の埋戻し土と思われる。2'では砂質土の混入多い。
- 3 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒混じりの弱粘性土。3'では灰の混入きわめて多い。

8号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	33×32×20	
2	53×36×12	壁柱穴か

第122図 4区8号住居

9号住居(第123図 PL. 23-①、67 遺物観察表414頁)

南西隅付近を試掘調査坑で失っている。

位置 041～043-920～923グリッドにある。

規模形状 長軸長2.85m、短軸長2.4mの南北に長い長方形を呈している。各辺は直線的で整美な形状である。

埋没土・壁 埋没土は単層でほとんど残存せず、壁高も2～5cmの残存である。

方位 N-71° E。面積 復元5.9㎡

床面 中央付近がやや低い床面で、壁際と4cm前後の比高差がある。北側に灰の散布が広く見られた。全体に深さ10cm前後の掘り方が見られる。北東隅壁直下に掘り方底面より6cm深い窪みがあり配置から貯蔵穴の可能性はあるが、小規模で底面も狭い不明瞭な窪みである。

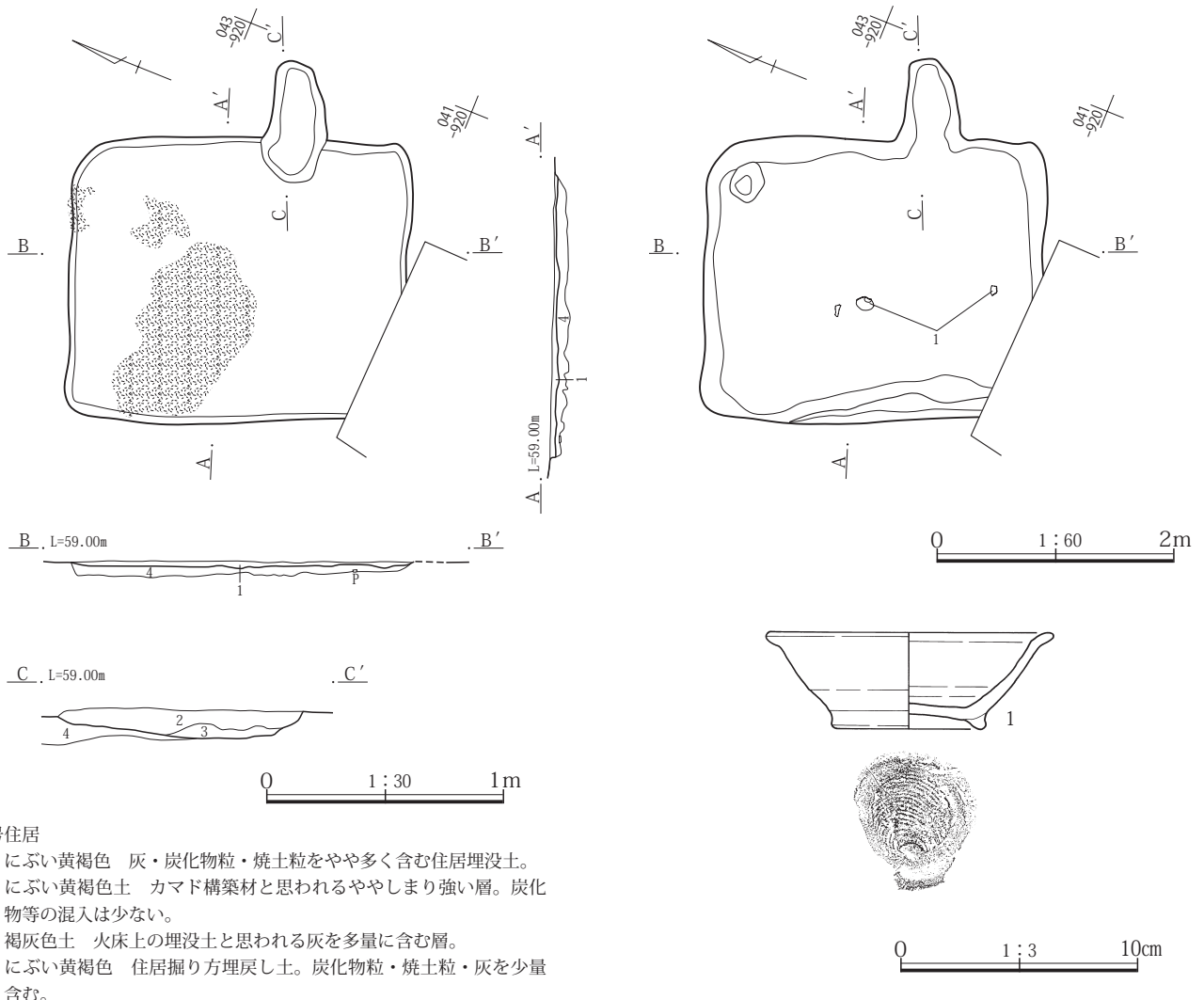
カマド 東辺南寄りにある。燃焼部は壁際から壁外にあ

り、火床は住居床面より10cm深く上面に灰の堆積が見られる。袖部分は確認できない。カマド先端は住居壁より60cm張出しているが、煙道部分は明瞭でない。

その他 壁溝・柱穴等は見られない。

遺物 出土遺物は少なく重量で0.2kgで、図示できたのは1点のみである。須恵器椀1は掘り方調査時の出土土器で、床下7～9cmの深さであった。

所見 掘り方底面は比較的平坦な部分があり、一次の床面があった可能性がある。西壁掘り方部分の歪みは若干拡張して二次床を築いた痕跡の可能性はある。図示した椀は口縁端部が外反するが底径がやや広めで、9世紀後半の遺物と考えられる。



9号住居

- 1 にぶい黄褐色 灰・炭化物粒・焼土粒をやや多く含む住居埋没土。
- 2 にぶい黄褐色土 カマド構築材と思われるややしまり強い層。炭化物等の混入は少ない。
- 3 褐灰色土 火床上の埋没土と思われる灰を多量に含む層。
- 4 にぶい黄褐色 住居掘り方埋戻し土。炭化物粒・焼土粒・灰を少量含む。

第123図 4区9号住居および出土遺物

10号住居(第124図 PL.23-②、67 遺物観察表414頁)

壁面に歪みがあり、床面にも段差があつて2棟の重複する住居となる可能性があるが、埋没土から切り合いを明瞭にすることはできなかった。2棟の住居であれば東側の住居が新しいと思われる。

位置 055～056-935～940グリッドにある。

規模形状 南辺4.3m、西辺1.2m以上の規模である。南辺が内側に大きく屈曲し、歪んだ形状になっている。

埋没土・壁 壁高は最も深い南辺東側で10cmを測る。ほぼ単層の埋没土であるが、西隅付近に若干の差があり、これを住居重複の痕跡とすれば、図▼1部分が切り合いの位置となる。

方位 南辺N-77° E。面積 残存2.70㎡

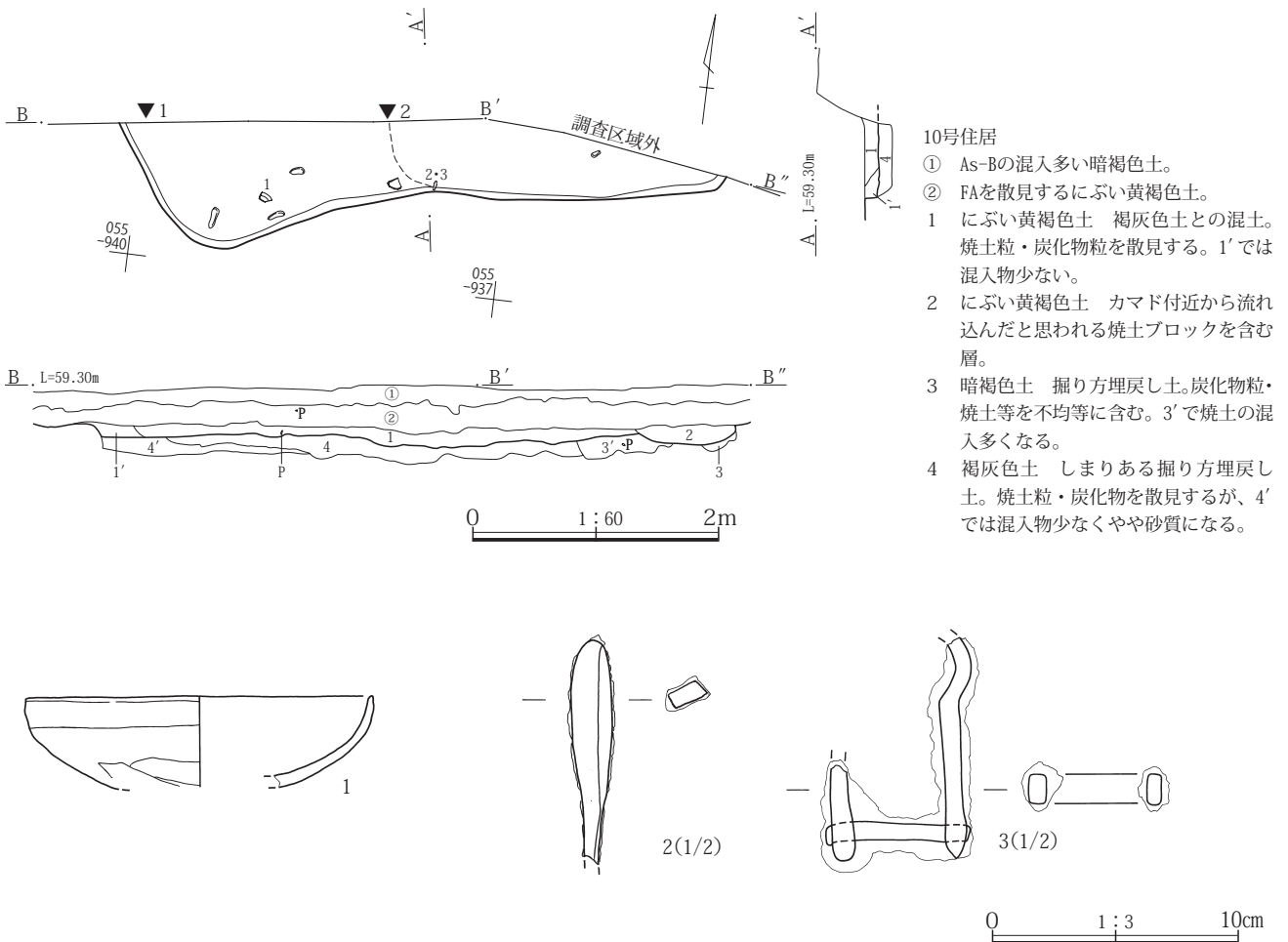
床面 東半部分が西半より3cm前後低くなっている。境部分は明瞭ではないが、▼2部分に切り合いのある図中破線のような重複住居の存在が想定されるが、やや東側に掘り方のわずかな差異も見られる。

カマド 西隅付近の掘り方埋戻し土に焼土・炭化物粒が含まれ、付近にカマドがあつた可能性がある。

その他 壁溝・柱穴等の痕跡は確認できない。

遺物 出土土器は重量で0.3kgと少なく、図示できたのは土師器1点と鉄製品2点である。西隅付近の南壁直下床ほぼ直上から杯1を出土している。鉄製品は2点でどちらも掘り方内の出土である。3は鉸具で大きさから馬具と思われる。

所見 重複住居が▼1・▼2のどちらであっても図示した土器は前出住居の遺物となる。丸底が扁平に向かう6世紀後半頃と思われる。出土破片類には2割を超える須恵器があり、遺構確認の層からも後出住居は平安時代の住居と想定している。



第124図 4区10号住居および出土遺物

11号住居(第125・126図 PL.23-③~⑥、67

遺物観察表414頁)

6号住居掘り方調査時に確認した、調査範囲内では全域が同住居下にある住居である。

位置 050～052-900～905グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.9m以上、南北軸長1.4m以上の長方形を呈している。

埋没土・壁 6号住居掘り方底面からの壁高は6～12cmだが、6号住居確認面からの壁高は35cm前後を測る。

方位 N-87° W。面積 残存6.15㎡

床面 凹凸の多い床面で調査範囲でも5cmの比高差がある。ほぼ全体に深さ7cm前後の掘り方が見られる。

その他 カマドの痕跡や壁溝・ピット等は確認できない。6号住居に前出している。

遺物 狭い調査範囲だが比較的多量の土器を出土し土師器9点と須恵器2点を図示した。7・8は掘り方内の遺物で他はすべて床直上の出土である。土師器には高杯6など古墳時代の土器も多数混入していたが、床直上出土なので遺構外遺物として扱わず、本住居出土遺物として掲載した。図示した以外の土器は重量で0.8kgあり須恵器はわずかであった。

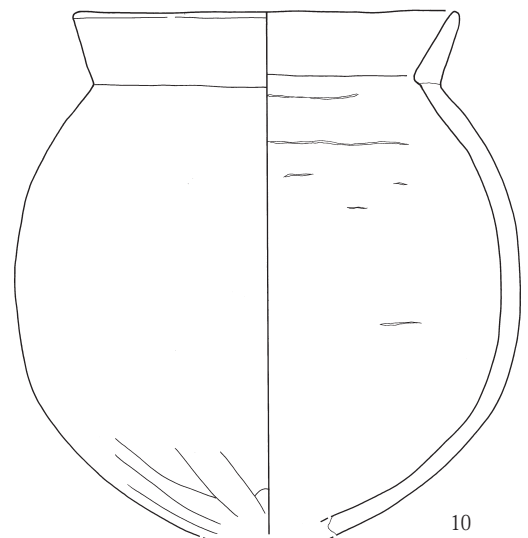
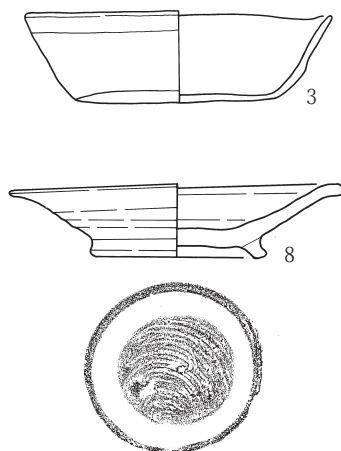
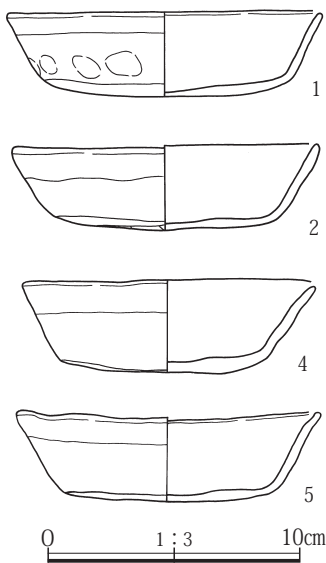
所見 甕類が少なく、完形の杯類が多量に出土しており、カマドから離れた住居隅の状況と考える。祭祀等を想定する他の遺物は出土していない。出土遺物は口縁部の外反のない須恵器皿など特徴的であり、9世紀後半の住居と想定できる。



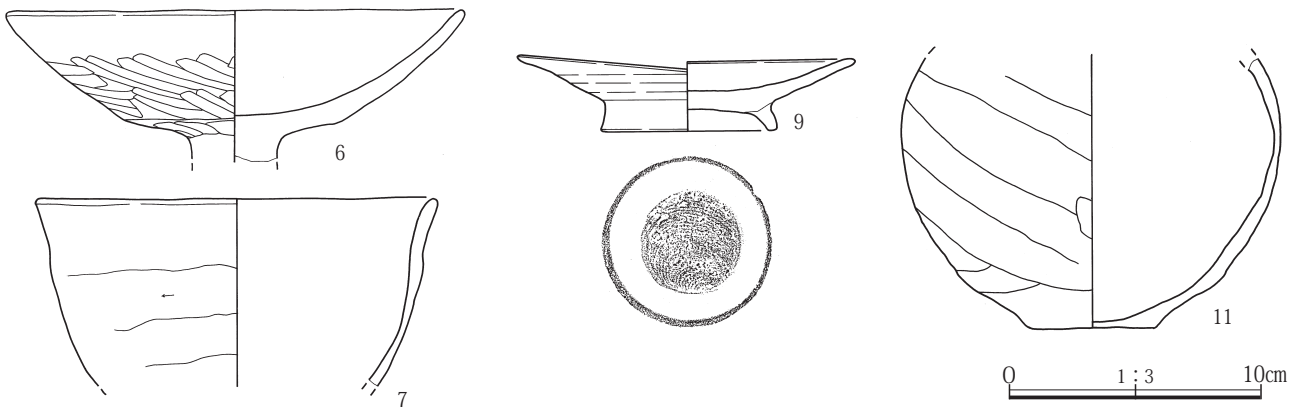
11号住居

- 1 褐灰色土 しまり・粘性ともにある。炭化物粒を少量含む。
- 2 灰褐色土 しまり・粘性ともにある。混入物は少ないが2'には炭化物を散見する。
- 3 明褐色土 砂質土。掘り方埋戻し土だがしまりやや弱い。炭化物粒を少量含む。

0 1:60 2m



第125図 4区11号住居および出土遺物(1)



第126図 4区11号住居出土遺物(2)

17号住居(第127図 PL. 40-⑦、67 遺物観察表414頁)

調査区北隅にあり、大半が調査区域外にあって全容は把握できていない。古墳時代調査面で確認したが、出土遺物より平安時代の泥流上面遺構掘り残しと判断できた。

位置 054～055-929～931グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.5m以上、南北軸長1.4m以上の規模である。南東隅付近まで確認できたようで、小型住居が想定される。

埋没土・壁 壁側から自然堆積しているようだ。調査時の遺構確認面からの壁高は15cm前後だが、断面から50cmの壁高があったことが分かる。

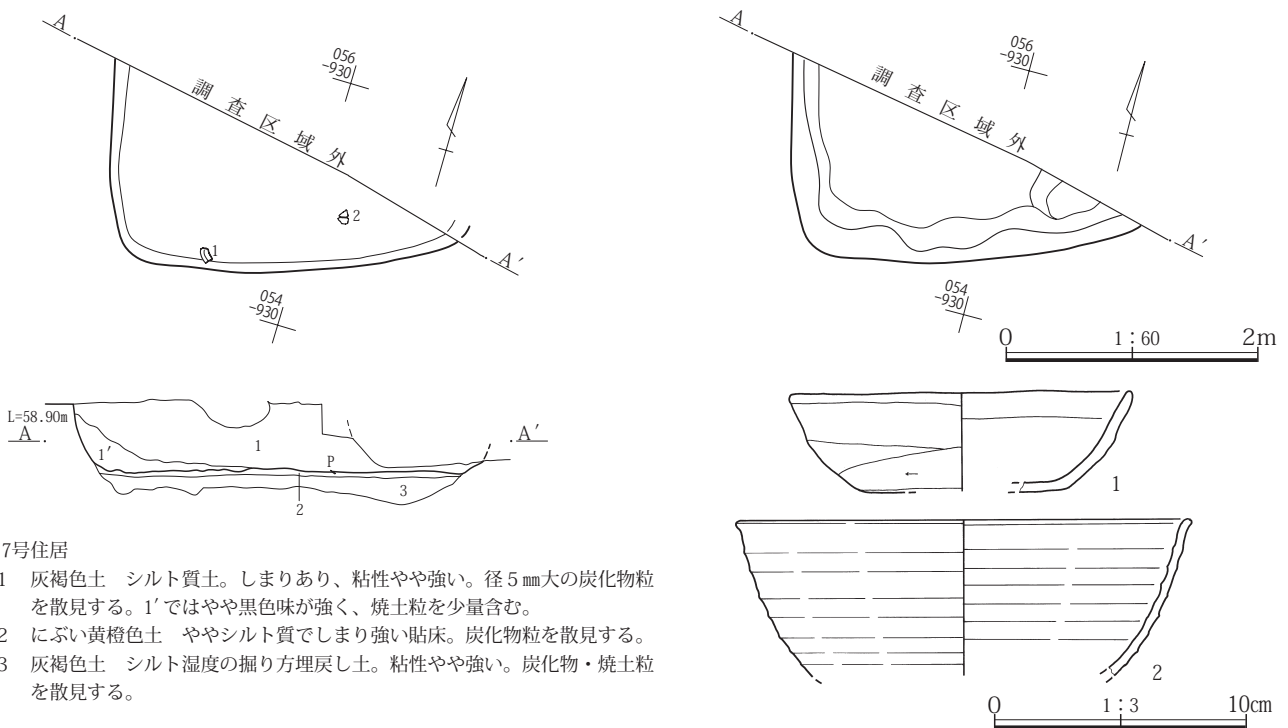
方位 N-77° E。面積 残存1.73㎡

床面 調査範囲では住居中央へ向かって低く傾斜して、壁際と4cmの比高差がある。全体に7～15cmの掘り方があり、厚さ2cm前後の貼床を設けている。

その他 カマド・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 出土土器はきわめて少なかったが、壁際から出土した2点の杯類を図示した。1は床上5cmの高さだが壁に密着するような位置であり、2は床直上の出土で、破片だがどちらも本住居に確実に伴う遺物と考えられる。図示した以外の土器は重量で0.04kgしかなく、須恵器・土師器がほぼ等量であった。

所見 出土遺物は小破片で2点の時期は同一でないようだ。明確な時期決定は不安だが、新しい要素は平底土師器杯にあり9世紀後半の住居と想定したい。



17号住居

- 1 灰褐色土 シルト質土。しまりあり、粘性やや強い。径5mm大の炭化物粒を散見する。1'ではやや黒色味が強く、焼土粒を少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土 ややシルト質でしまり強い貼床。炭化物粒を散見する。
- 3 灰褐色土 シルト湿度の掘り方埋戻し土。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を散見する。

第127図 4区17号住居および出土遺物

5区の竪穴住居

1棟だけ離れた住居が確認されている。調査範囲内で最も近い住居は110m東側にある4区4号住居である。

1号住居(第128図 PL.23-⑦・⑧、67 遺物観察表415頁)

床面は把握できず、掘り方底面部分の記録である。

位置 059～063-050～055グリッドにある。

規模形状 残存範囲で長軸長3.3m以上、短軸長3.25mの正方形に近い形状が想定される。

方位 N-66° E。面積 残存8.50㎡

床面 残存部分深さ7cm前後の掘り方がほぼ全面で確認できる。カマド前面に窪みがあるが上面から掘り込まれたもので、後世の窪みの可能性がある。

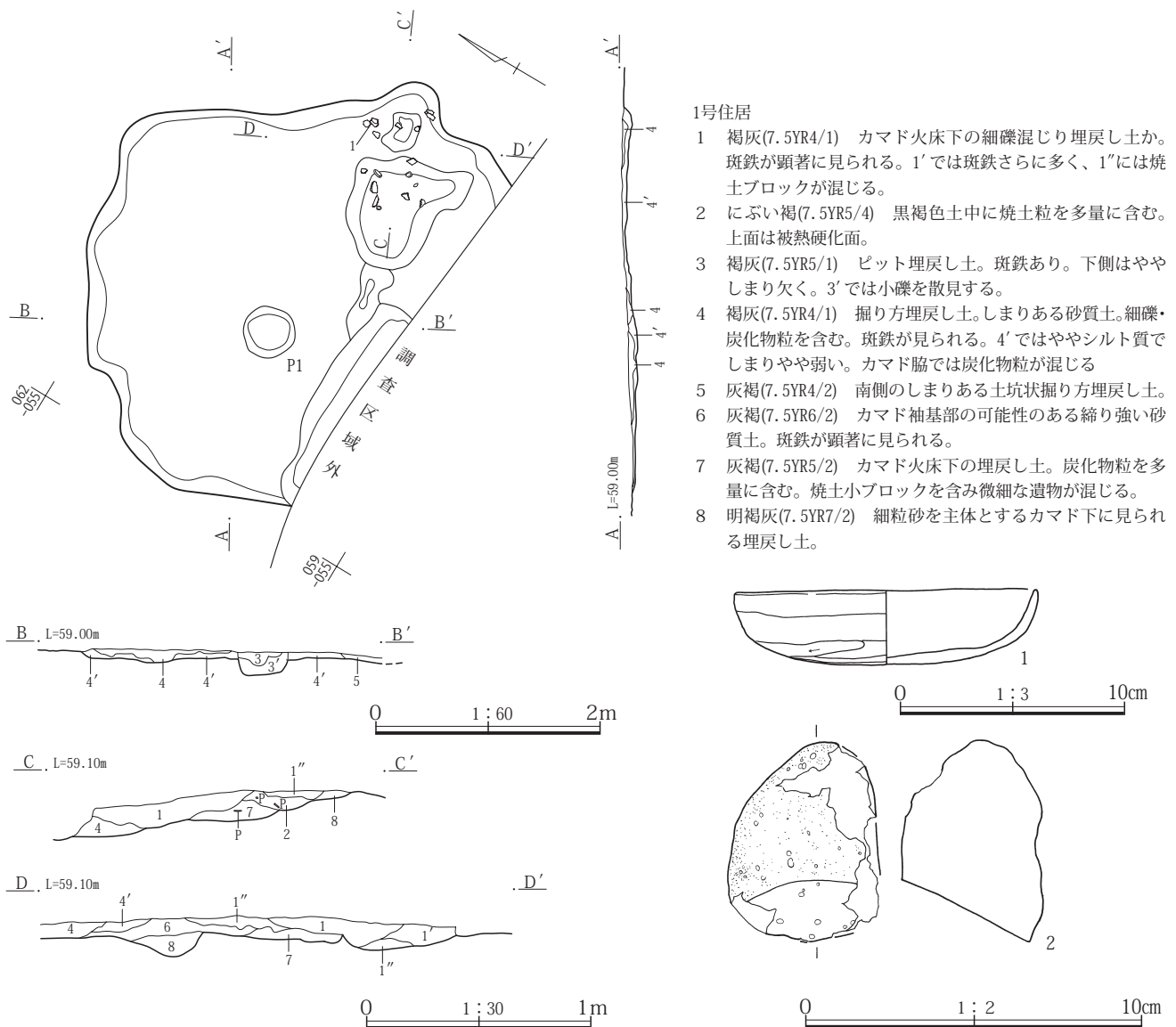
ピット 住居中央西寄りで円形のP1を調査しているが、床面のない住居であり、このピットが本住居に伴うものか確認できない。

カマド 東辺南隅にカマドの痕跡が確認できる。燃烧部は壁際付近と思われる、壁外へも張出している。火床は床面を掘り込んでおり、焼土層が観察できる。

その他 壁溝・貯蔵穴等の施設痕跡は観察できない。

遺物 カマド燃烧部から杯1が出土した。掘り方底面から3～5cmの高さである。2の軽石はカマド前の窪み内の出土で、確実に本住居に伴う遺物とは断定できない。

所見 出土遺物に乏しいが、図示した1は平底の土師器杯で8世紀後半から9世紀の時期が想定され、カマド配置からみられる住居形状と矛盾しない。



(2)古墳時代の竪穴住居

古墳時代の集落は1区・2区と3-2区・4-1区に見られ、おおよそ東西2カ所に分けられる。

東側集落は1区西隅から2区にかけて広がっている。確認できる範囲では東西約80m部分で住居密度がきわめて高く、住居間の重複が多い。2区では西側から南側にかけて旧流路による削平があり、多数の住居を失っている。1区で8棟、2区で56棟の住居を確認し本遺跡の古墳時代住居の75%を超える住居がこの一画で確認されたが、さらに多くの住居が存在していたはずである。

西側集落は3-2区西隅から4区中央にかけて見られる。東西約80mの微高地部分には、古墳時代初頭の水田上に集落が築かれている。3-2区で4棟、4-1区で19棟の住居を調査した。1・2区に比べ住居密度は低く、特に微高地中央付近で住居が少ない。住居間の重複も少ないが、1・2区の集落と同時代の住居が見られる。

1区の竪穴住居

1区の集落は調査区西隅で確認したが、密集した状態で全棟に住居間の重複が見られ集落縁辺の様相ではない。7号溝が集落の南側を画すように開削されているが、住居の軸方向とは合致していない。また、集落南側は流路で削平されている。調査区中央以東では流路による強い削平があり、確認できた範囲だけではなく、本来はさらに東側・南側へ集落が広がっていたものと考えられる。集落は6世紀前半の泥流によって埋没し、それ以降は畑地となり住居は築かれない。

1号住居(第130・131図 PL. 24-②~④、68

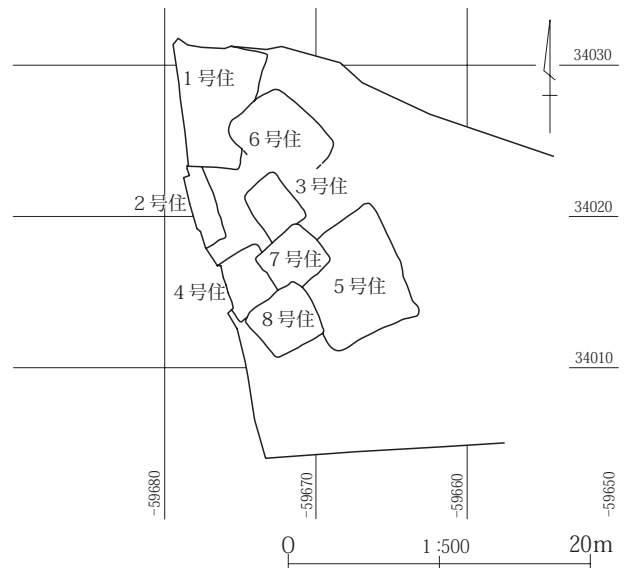
遺物観察表415頁)

1区北西隅にあり、住居の西側と北西隅部分が調査区域外となって全容を把握できていない。

位置 023～031-673～679グリッドにある。

規模形状 南北方向の軸長7.95mで大型の正方形に近い住居になると思われるが、南東隅が鈍角に開き台形状に歪んでいる。東西方向には6m以上の軸長がある。東辺は細かな蛇行があり整美さに欠ける形状である。

埋没土・壁 単層の洪水堆積物土に炭化物粒や焼土粒が混じる。南壁寄りには特に焼土の多い部分があった。壁



第129図 1区古墳時代住居配置図

は全体に浅く、最も深い南辺で18cmを測る。

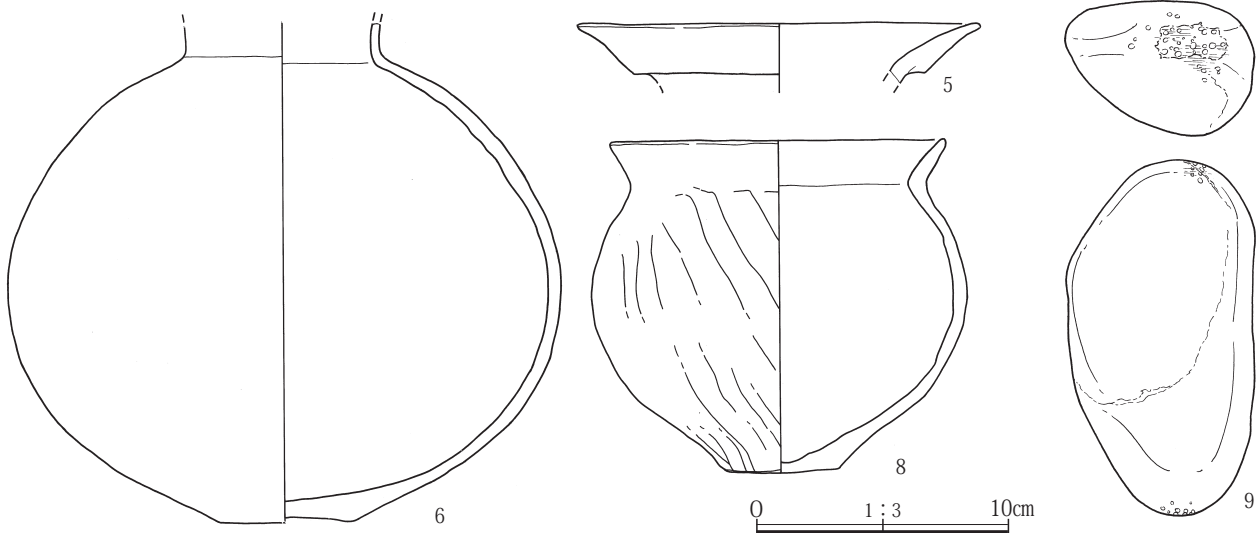
方位 N-12° W。 **面積** 残存31.46㎡

床面 緩やかな凹凸のある床面で、北西側へ低く傾斜し南東隅付近と10cmの比高差がある。深さ2～10cmの掘り方があり、東壁下南寄りで土坑状に深い部分があった。
ピット 深度に乏しい3本の柱穴状ピット(P1～3)を確認したが、規則的な支柱穴配置にはない。

その他 2号住居と重複し、6号住居に後出している。炉や壁溝は確認できない。東壁中央直下にある径124cm、床面からの深さ26cmの窪みを土坑1とした。住居廃絶時に開口していたと思われる施設である。壁中央下において貯蔵穴としては不自然で、規模も大き過ぎる。土坑2はP3南西側にある床面からの深さ11cmの窪みで、上面の規模は柱穴に近似している。上層に灰や炭化物粒の混入が多かったが、配置・規模から炉とは考えにくい。

遺物 住居内中央から南側を中心に散在するように遺物が出土し、そのうち土器8点・石製品1点を図示した。壺6が南東隅付近に散っていたが、他はまとまって出土した。器台4が南壁際の出土で本住居に伴う土器と考えられる。他は床面より10cm以上浮いた状態であった。他に川原石状の礫の出土もやや多いが、菰編石状の大きさの近似した礫は少なかった。9は敲石の使用痕跡が認められた。図示した以外に重量で10kg近い土器が出土している。須恵器も1%を超える量が出土したが本住居に伴う遺物ではなく、土師器にも混入品があると思われる。

所見 器台を確実に伴う4世紀代の住居である。



第131図 1区1号住居出土遺物(2)

2号住居(第132～134図 PL.24-⑤～⑦、68・69

遺物観察表415頁)

1区西隅にあり、住居の大半が調査区域外で東壁下の一部しか確認できていない。

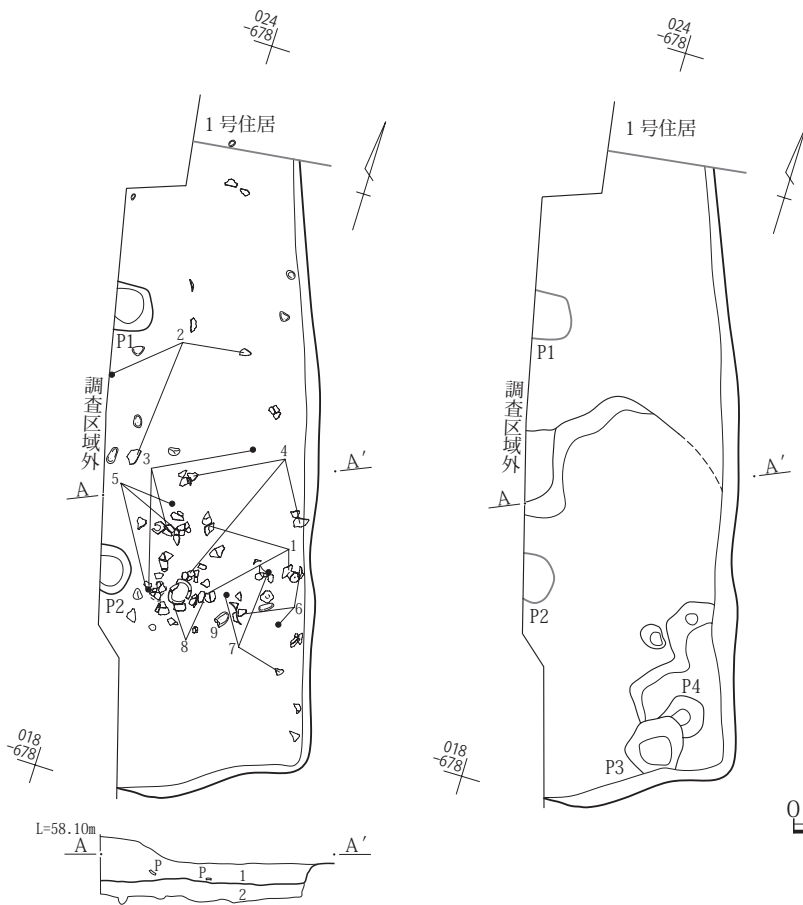
位置 018～023-676～678グリッドにある。

規模形状 残存する南北軸長5.1m、東西軸長1.2mで、

柱穴配置から長軸長5.5m前後の南北方向にやや長い長方形を呈すと思われる。南東隅は直角に近く丸みは少ないが、南辺は歪みが大きい。

埋没土・壁 単層で洪水堆積物土を埋没土としている。壁高は浅めで、最も深い東辺で19cmを測る。

方位 N-18° W(東壁)。面積 残存7.49㎡



2号住居

- 1 褐灰色洪水堆積土 弱粘性土。As-C、炭化物粒を含む。
- 2 褐色土 As-Cを含む掘り方埋戻し土。

2号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	27.5×(30)×53	主柱穴
2	38×(24.5)×50	主柱穴
3	47×(38)×49	貯蔵穴か
4	32×(25)×36	

第132図 1区2号住居

床面 ほぼ水平な床だが、南壁下周辺のみ5cm前後低くなっている。掘り方が全体にあり、南側で深さ15cm前後、北側で深さ7cm前後を測る。

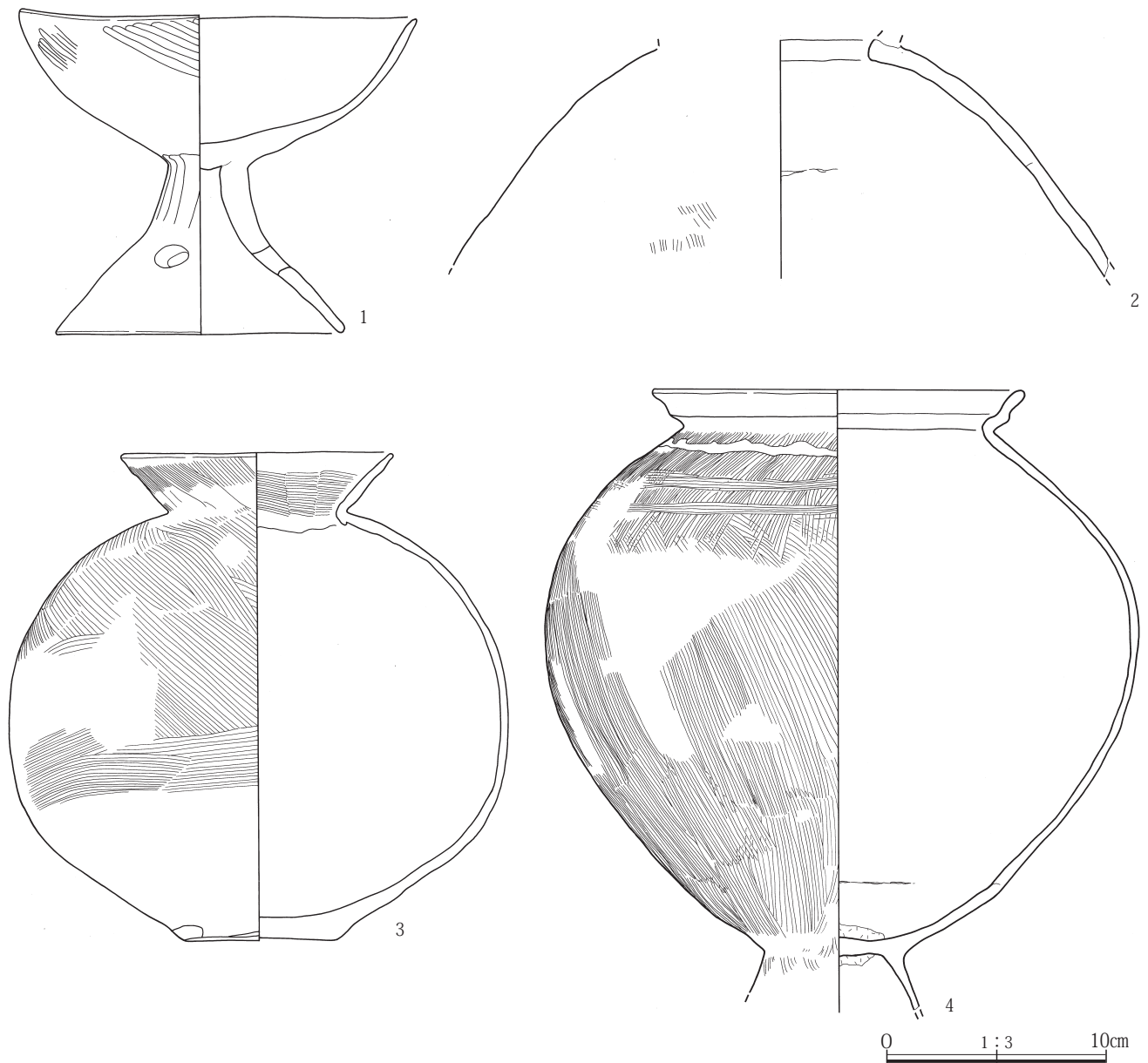
ピット 掘り方調査時に4主柱穴を構成する2基の柱穴を確認している。同様に南東隅付近でも重複する2基のピットを確認しているが、この内P3は配置や深度から貯蔵穴の可能性もある。

その他 1号住居と重複している。炉・壁溝などの施設は確認できない。

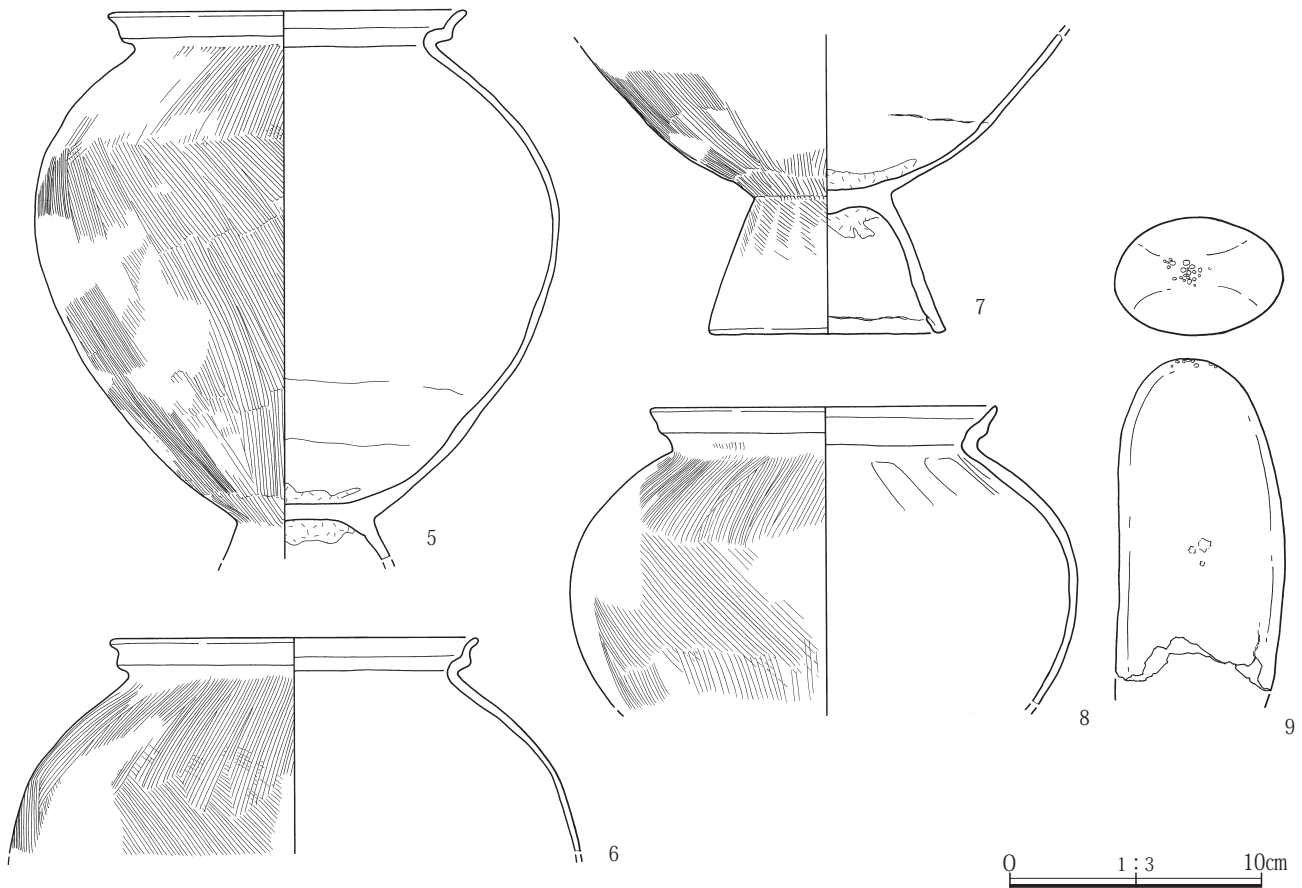
遺物 住居内中央から南側を中心に散在するように多量の遺物が出土したが、床上5～10cmの高い位置の遺物

が多く、住居廃絶時に投棄されたような状態であった。そのうち土器8点・石製品1点を図示した。高杯1、台付甕6・7が東壁際の床直上で出土し、壺2・3、台付甕4も壁寄りの床直上出土でこれらが本住居に確実に伴う遺物である。1号住居同様、他に川原石状の礫の出土もやや多く、9は南寄り床上7cmの出土で敲石の使用痕跡が認められた。図示した以外には重量で約4.2kgの土師器を出土している。

所見 刷毛目のある甕類を主体とした4世紀代の住居である。埋没土内の遺物も床直上出土遺物と時期的に差のないものであった。



第133図 1区2号住居出土遺物(1)



第134図 1区2号住居出土遺物(2)

3号住居(第135図 PL.25-①~④、69

遺物観察表416頁)

1区集落内では中央付近の重複の少ない一画にあり、数少ない全容を把握できた住居の1棟である。また1区で最も小型の住居である

位置 018～022-670～674グリッドにある。

規模形状 長軸長3.6m、短軸長2.7mの長方形を呈している。1区の住居中、最も小型の住居である。西隅が鈍角に開き、やや歪んだ形状で南東辺は北西辺より40cm長い。

埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程は推測できない。壁高は最も深い北・東辺で19cmを測る。

方位 N-37° W。 **面積** 9.66㎡

床面 緩やかな凹凸があるが、全体ではほぼ水平な床面である。全体に深さ15cm前後の掘り方があり、部分的にピット状の窪みが見られる。

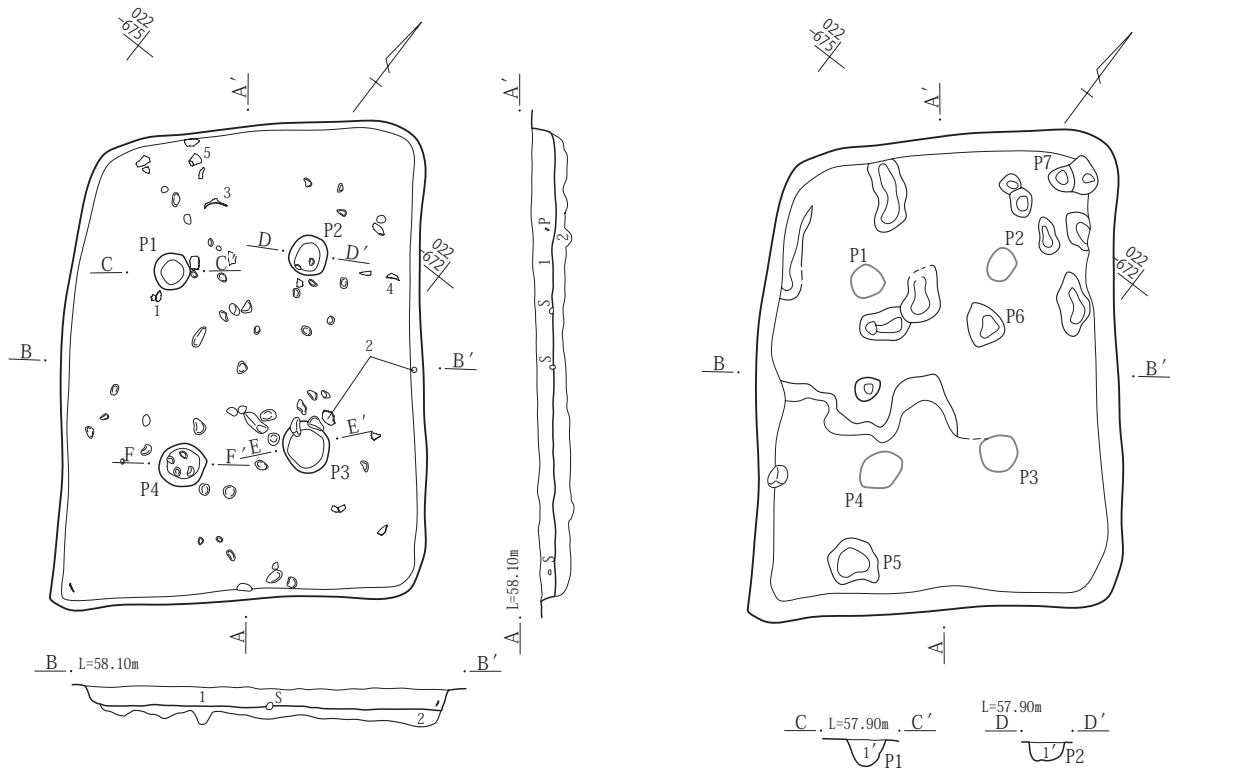
ピット 深度の乏しい不明瞭な施設であったが、4主柱穴が確認できる。配置は平行四辺形に歪み、住居南東壁

との乖離がやや目立つ。床下調査時に確認した窪みの内、P5・7は配置から貯蔵穴となる可能性がある。

その他 南東辺が7号住居とわずかに重複している。炉・壁溝は確認できない。掘り方調査時に確認したP5は配置より貯蔵穴の可能性はある。

遺物 住居内のほぼ全域から散在するように遺物が多量に出土したが、図示できたのは土師器5点であった。完形近くまで復元できる遺物がない。台付甕3・甕4が壁寄りの床直上で出土した。その他の破片にも床面直上から出土するものは多かった。器台1・台付甕5は床面下の掘り方埋戻し土内の出土である。床面直上に川原石の出土がきわめて多かったが、菰編石のように大きさが一定のものがまとまって出土したものではない。図示した以外には重量で約2kgの土師器があった。

所見 出土遺物は破片で本住居に確実に伴う遺物を抽出できなかったが、刷毛目のある甕類を主体とした4世紀代の遺物であった。

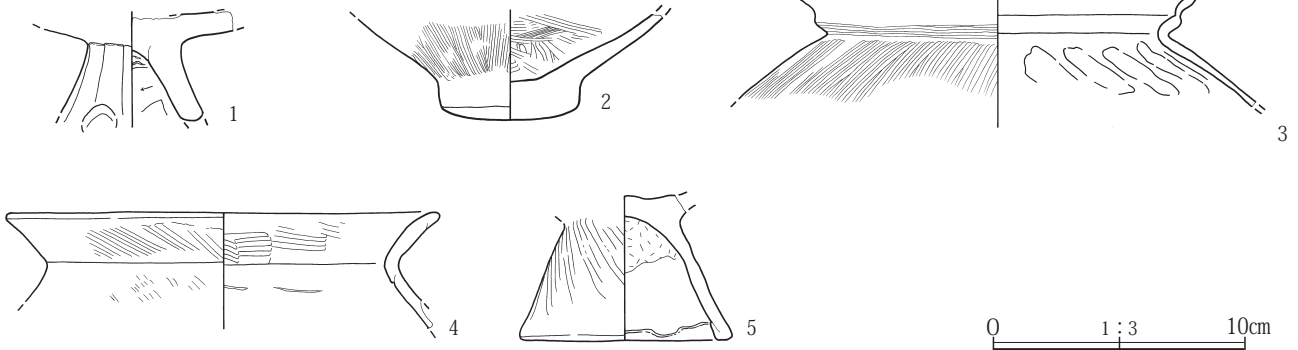
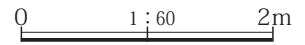
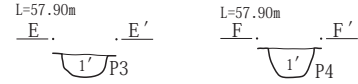
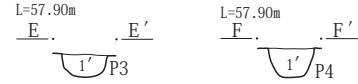


3号住居

- 1 褐灰色洪水堆積土 粘質土。炭化物粒、白色軽石を含む。黄色洪水堆積土をブロック状に混入する。1'は単層の柱穴埋没土で混入物が少ない。
- 2 褐灰色洪水堆積土 しまりやや強い掘り方埋戻し土。As-Cを少量含む。

3号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	29×28×22	主柱穴
2	32×30×14	主柱穴
3	42×37×21	主柱穴
4	38×35×18	主柱穴
5	37×34.5×21	貯蔵穴か
6	35×28×18	
7	35×28×27	貯蔵穴か



第135図 1区3号住居および出土遺物

4号住居(第136～138図 PL. 25-⑤・⑥、69・70)

遺物観察表416・417頁)

1区西隅にあり、住居西隅部分が調査区域外で全容を把握できていない。

位置 013～018-672～677グリッドにある。

規模形状 長軸長3.8m、短軸長3.3mの長方形を呈して

いる。北辺は南辺より30cm以上長くなると想定される。

埋没土・壁 埋没土は単層(2層)で、1層土は洪水堆積土と思われる。壁高は最も深い北隅周辺で20cmを測る。

方位 N-29° W。面積 復元12.8㎡

床面 ほぼ水平な床面だが南壁下のみやや高く、他の床面と4cm前後の比高差がある。全面に深さ20cm前後の掘

り方があり、南東隅付近と東辺中央付近壁直下で深くなる部分がある。

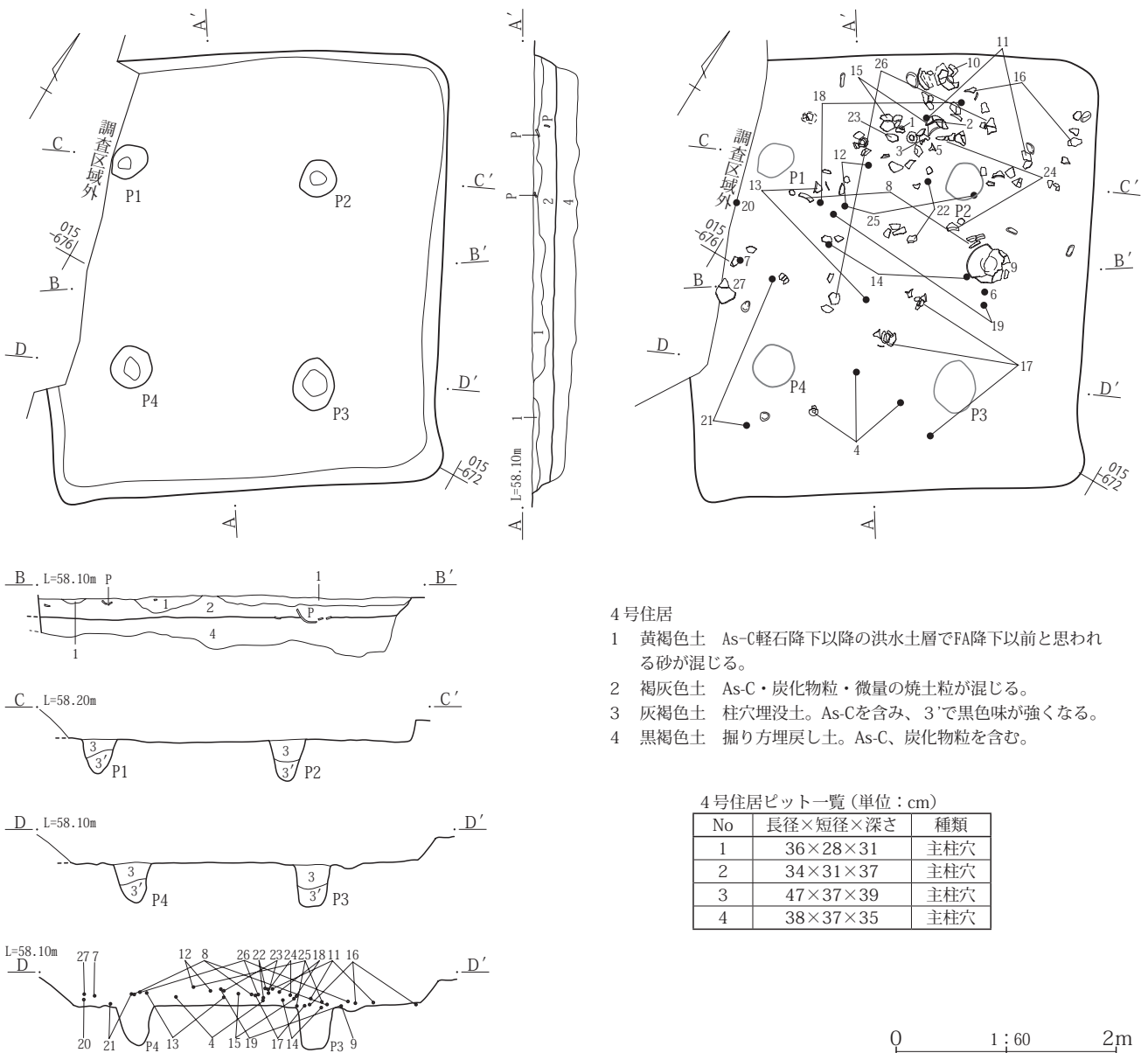
ピット 4 主柱穴が確認できる。配置が平行四辺形状にやや歪み、住居北西辺・南東辺と平行でない。

その他 7・8号住居と重複している。炉・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 住居中央から北側にかけて多量の遺物を出土し、甕類を中心に27点を図示した。台付甕など大型土器の出土が目立ったが、それらに完形まで復元できる土器はなかった。大型の壺9・台付甕17が中央東よりの床直上付近でまとまって出土した破片から復元した。床直上出土遺物には他に台付甕11・14・16・21、甕25があるが、広

い範囲に散っていて、床上10cm以上の破片と接合するなど、本住居に確実に伴う遺物とは認定できない。器台の出土が目立つがこれらにも床直上での出土はなかった。装飾器台7は同巧の遺物が1区5号住居で出土している。1号住居同様川原石の出土もやや多いが使用痕の認められるものはなかった。図示した以外に重量で4区22号住居に次ぐ本遺跡2番目、東側集落では最大量にあたる14.4kgの土師器片を出土しているが、須恵器片もわずかに見られ、後世の混入品もあるようだ。

所見 刷毛目のある甕類を主体とした4世紀代の住居である。



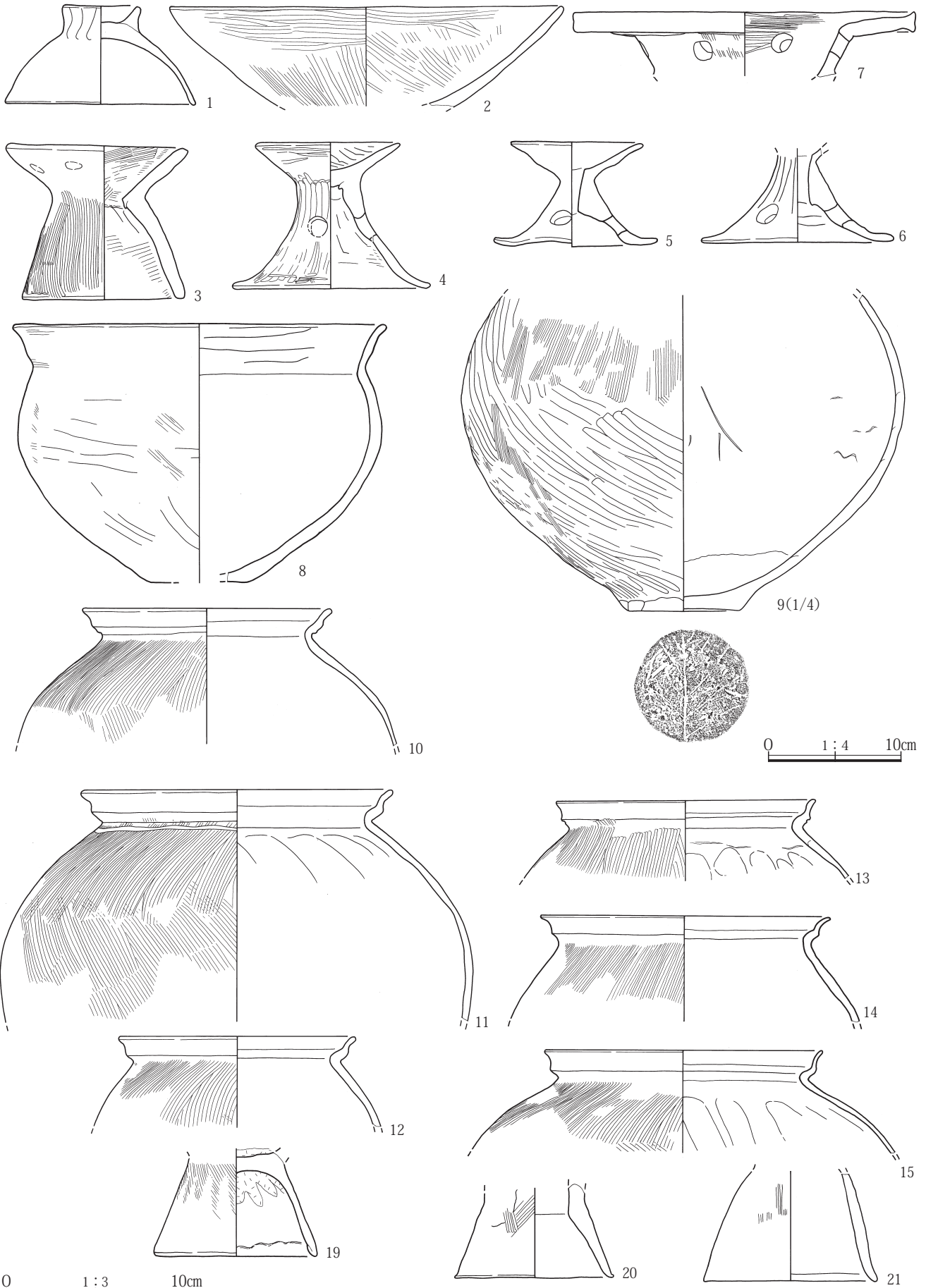
4号住居

- 1 黄褐色土 As-C軽石降下以降の洪水土層でFA降下以前と思われる砂が混じる。
- 2 褐灰色土 As-C・炭化物粒・微量の焼土粒が混じる。
- 3 灰褐色土 柱穴埋没土。As-Cを含み、3'で黒色味が強くなる。
- 4 黒褐色土 掘り方埋戻し土。As-C、炭化物粒を含む。

4号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	36×28×31	主柱穴
2	34×31×37	主柱穴
3	47×37×39	主柱穴
4	38×37×35	主柱穴

第136図 1区4号住居



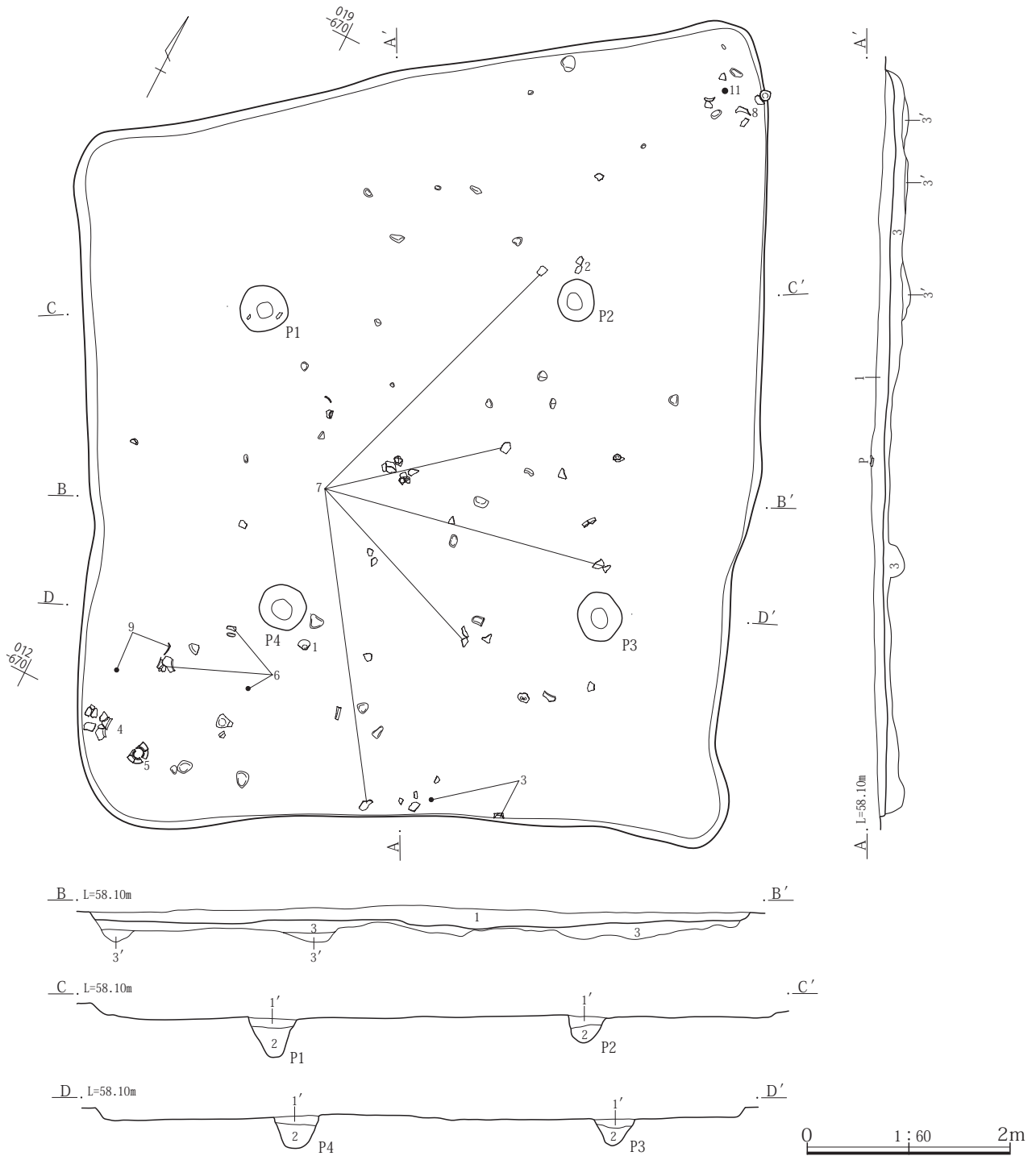
第137図 1区4号住居出土遺物(1)



第138图 1区4号住居出土遺物(2)

5号住居(第139～141図 PL.25-⑦・⑧、26-①、71・72
遺物観察表417・418頁)

本遺跡で調査できた住居中、最も東側に位置している。
位置 011～020-663～671グリッドにある。



5号住居

- 1 褐灰色土 洪水堆積土 炭化物粒、As-Cを含み、焼土粒を散見する。
1'は柱穴上層埋没土で焼土粒は見られない。
- 2 黒褐色土 柱穴下層埋没土。As-Cを少量含む。
- 3 黒褐色土 しまりやや強い掘り方埋戻し土。As-Cを含み、3'ではごく少ない。

5号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	47×45×40	主柱穴
2	42×35×23	主柱穴
3	48×43×25	主柱穴
4	45×44×32	主柱穴
5	60×35×18	
6	34×30×31	
7	28×26×19	入口か

第139図 1区5号住居

規模形状 長軸長7.2m、短軸長6.4mの大型住居で、東辺は西辺より1.5m、北西辺は南東辺より0.6m長い台形状を呈している。また南隅の丸みが強く、東隅が小さく突出するように歪んでいる。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。大型だが浅い住居で、壁高は最も深い南東辺でも11cmしか残存しない。

方位 N-26° W。 **面積** 46.47㎡

床面 床面からの深さ4～20cmの凹凸の大きな掘り方が全体にみられ、北側・西側で深い。なお、南東方向から北西方向へ平行する溝状の窪みが見られるが、下面水田の一部となる可能性がある(本文336頁参照)。

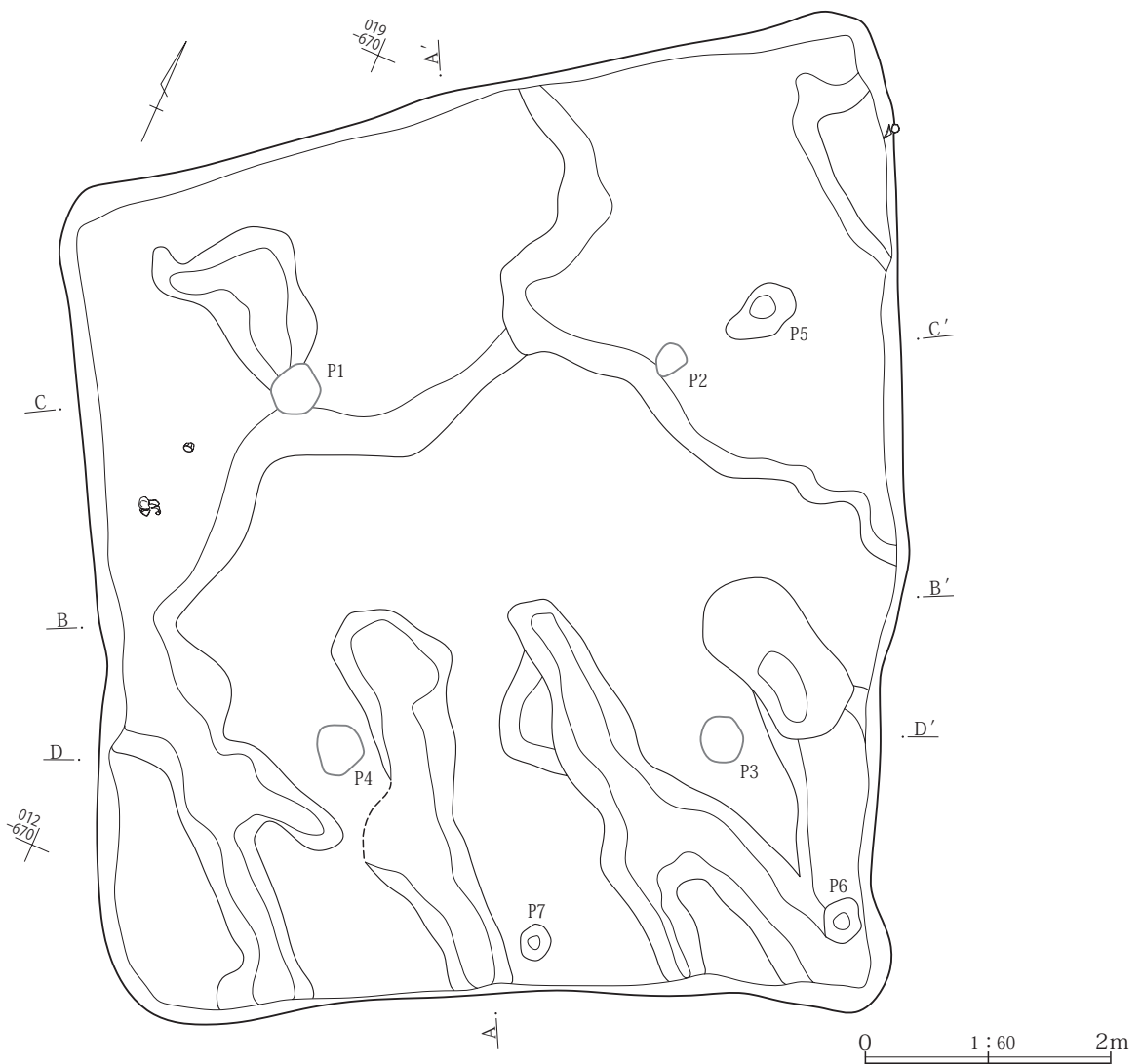
ピット 4支柱穴が確認できる。住居プランに比して深度に乏しい柱穴で、住居の台形プランに沿わず、長方形の配置である。上面には踏み固めはないが貼床状の層があり、柱痕が確認できない。掘り方調査時にピット状の

窪みを3基(P5～7)確認している。南東壁中央直下のP7は配置より入口ピットの可能性がある。

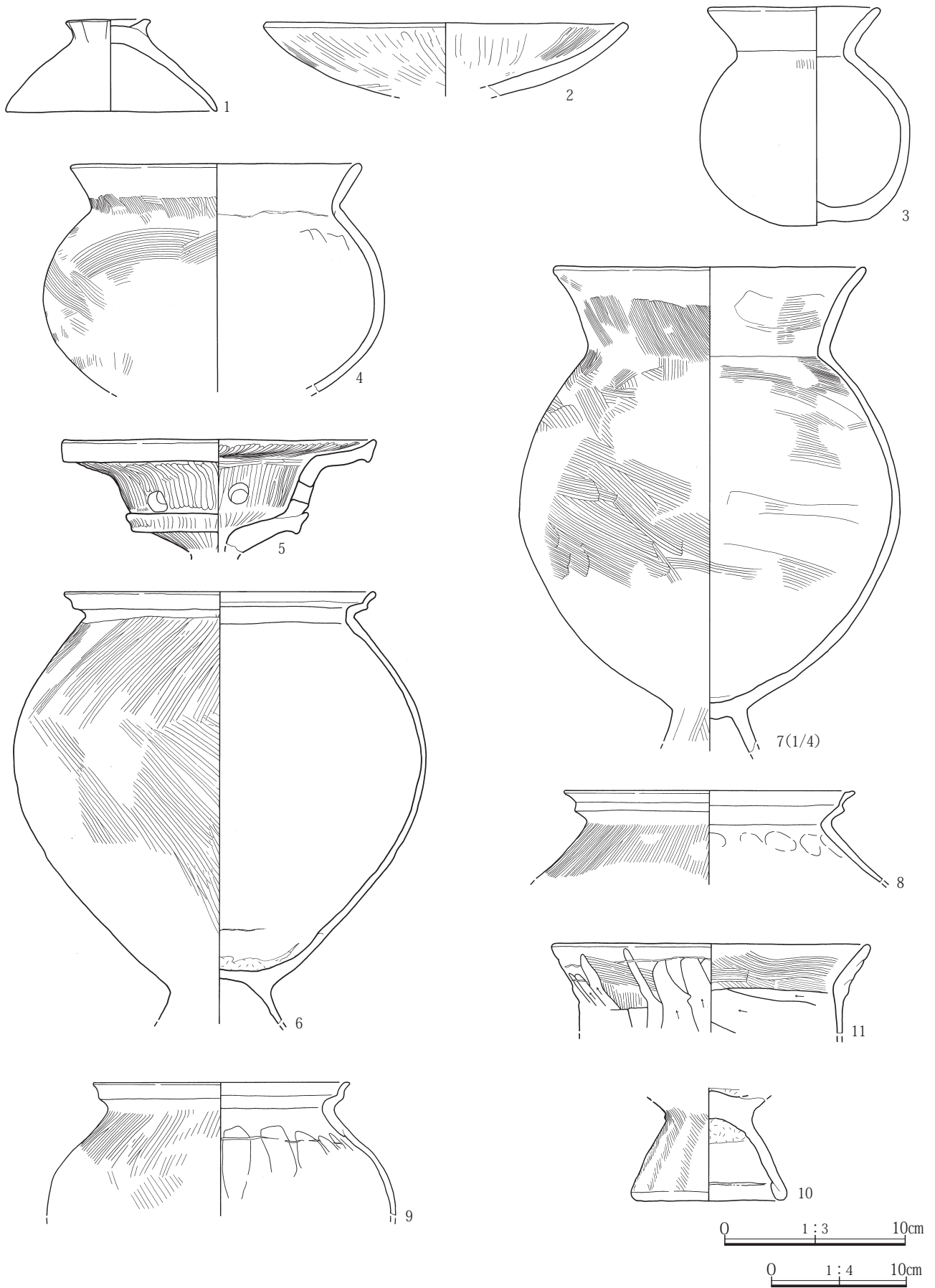
その他 7・8号住居と重複している。炉・壁溝等は確認できない。

遺物 住居内の東西両隅付近を除いたほぼ全域から遺物が出土し、そのうち甕類を中心に11点を図示した。南東壁直下の小型壺3と南隅壁直下の壺4および北隅壁直下の台付甕8・鉢11が床直上の出土である。南隅付近の台付甕6・9も床直上の出土でこれらは本住居に確実に伴う遺物である。装飾器台5は8号住居出土破片と接合している。図示した以外に甕類を中心に重量で4.9kgの土師器を出土している。

所見 刷毛目のある甕類を主体とした4世紀代の住居である。椀や装飾器台など特殊遺物が4号住居出土遺物と共通している。



第140図 1区5号住居掘り方



第141図 1区5号住居出土遺物

6号住居(第142図 PL.26-②、72 遺物観察表418頁)

1号住居確認段階では明瞭ではなく、同住居調査終了後、周辺を若干掘り下げてプランを確認した住居である。

位置 023～028-668～676グリッドにある。

規模形状 長軸長6.0m、短軸長4.55mの隅丸長方形を呈している。南西辺が北東辺より30cm前後長くなりそうである。

埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程は推測できない。ごく浅い住居で壁高は最も深い北隅周辺でも4cmしか残存しない。

方位 N-47° W。 **面積** 復元26.41㎡

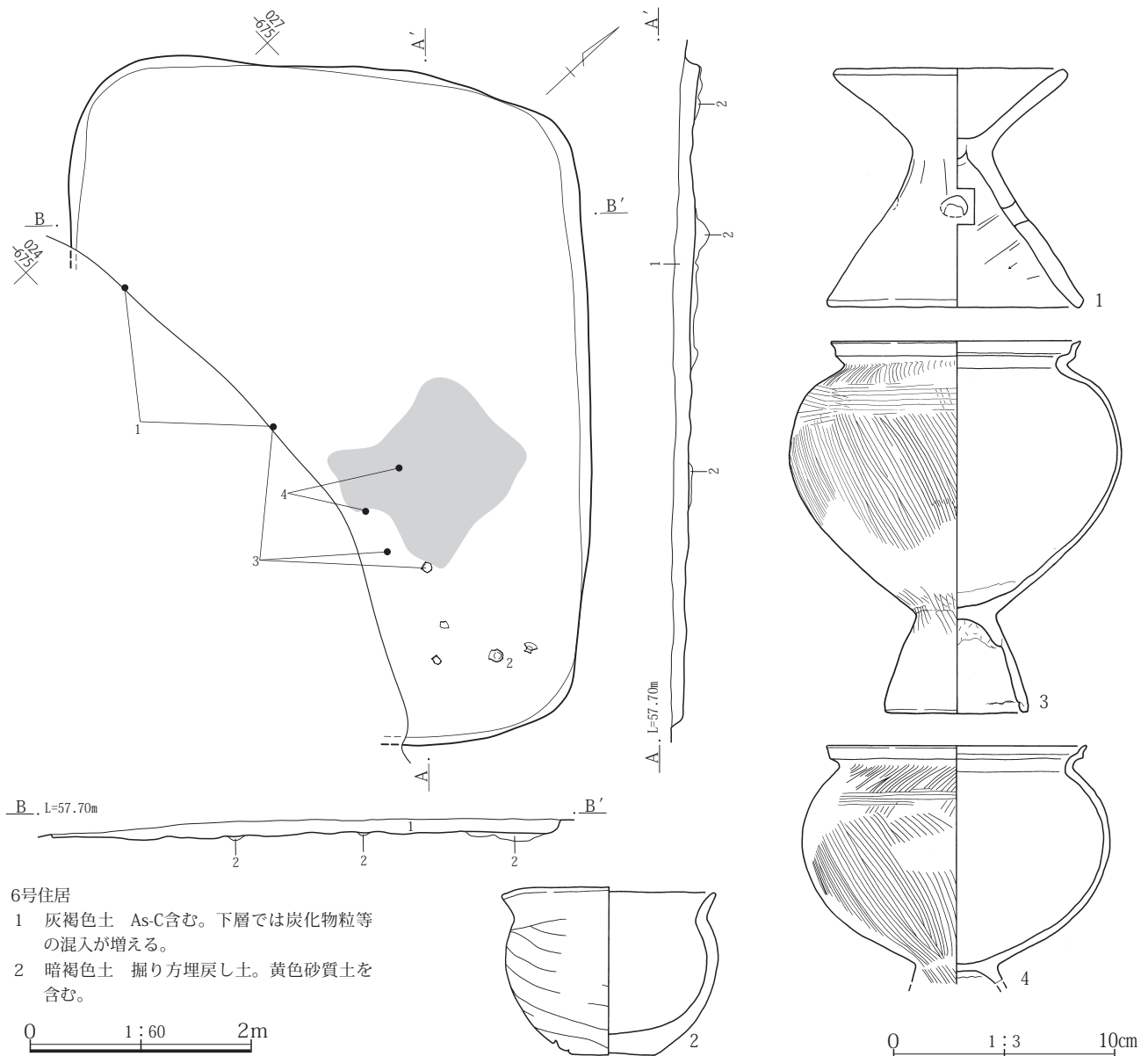
床面 地山の傾斜に沿って東側へ低く傾斜し、東西両壁

下では10cm前後の比高差がある。中央から北東寄りの床直上に黒色灰・炭化物粒が散っている。掘り方は住居粗掘り時の窪みを埋め戻したような小規模ものが部分的に見られる。

その他 1号住居に前出している。炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 ごく浅い住居で遺物も少なかったが接合率が良く、4点の土器を図示できた。いずれも南側の床直上付近の高さであるが、住居中央付近からの出土で、本住居に確実に伴う遺物とは決定できない。図示した以外の遺物は重量で0.2kgに満たなかった。

所見 刷毛目のある甕類で4世紀代の住居である。



6号住居

- 1 灰褐色土 As-C含む。下層では炭化物粒等の混入が増える。
- 2 暗褐色土 掘り方埋戻し土。黄色砂質土を含む。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第142図 1区6号住居および出土遺物

7号住居(第143図 PL. 26③~⑥、72 遺物観察表418頁)

1区で最も多い4棟の竪穴住居と重複しているが、ほぼ全容が把握できている。

位置 015～019-669～673グリッドにある。

規模形状 長軸長3.7m、短軸長3.35mの長方形を呈している。南北両隅が鋭角でやや菱形状に歪んでいる。

埋没土・壁 壁高は最も深い北西辺で25cmを測る。

方位 N-48° E。面積 復元12.07㎡

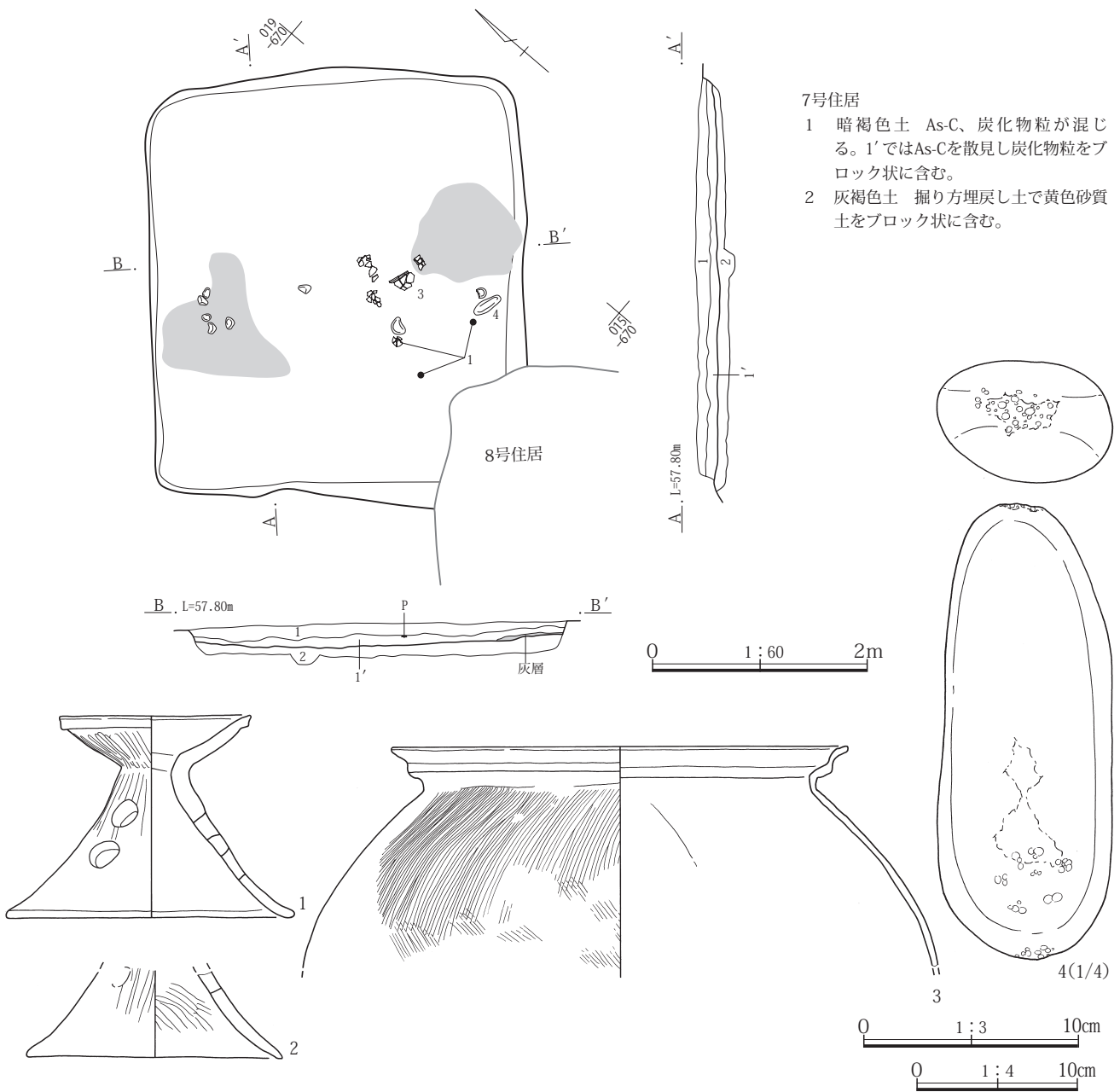
床面 傾斜はないが、住居中央付近がやや低く、壁際と3cm前後の比高差がある。住居中央南東寄り北西寄りの床直上2カ所に広範囲に黒色灰・炭化物粒が散っている。

全域に平坦な掘り方が見られた。

その他 3～5・8号住居と重複している。炉・壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 住居中央付近を中心に出土遺物は少なくなかったが、小破片が多く、図示できたのは土器3点と石器1点であった。器台1は床上3cm前後の高さからの出土であるが壁寄りの破片と接合し、本住居に伴う遺物と考えたい。3は床から7cm浮いた状態の出土である。図示した以外には重量で1.1kgの土師器片がある。

所見 器台1は4世紀代の遺物で共伴する甕も刷毛目があり問題がない。



8号住居(第144図 PL.26-⑦・⑧、72 遺物観察表418頁)

5号住居と並んで1区集落の南隅にある住居である。

位置 010～015-669～674グリッドにある。

規模形状 長軸長4.05m、短軸長3.6mで、北辺が南辺より50cm長く、台形状に歪んだ形状を呈している。

埋没土・壁 壁高は最も深い南辺で21cmを測る。

方位 N-58° E。面積 14.02㎡

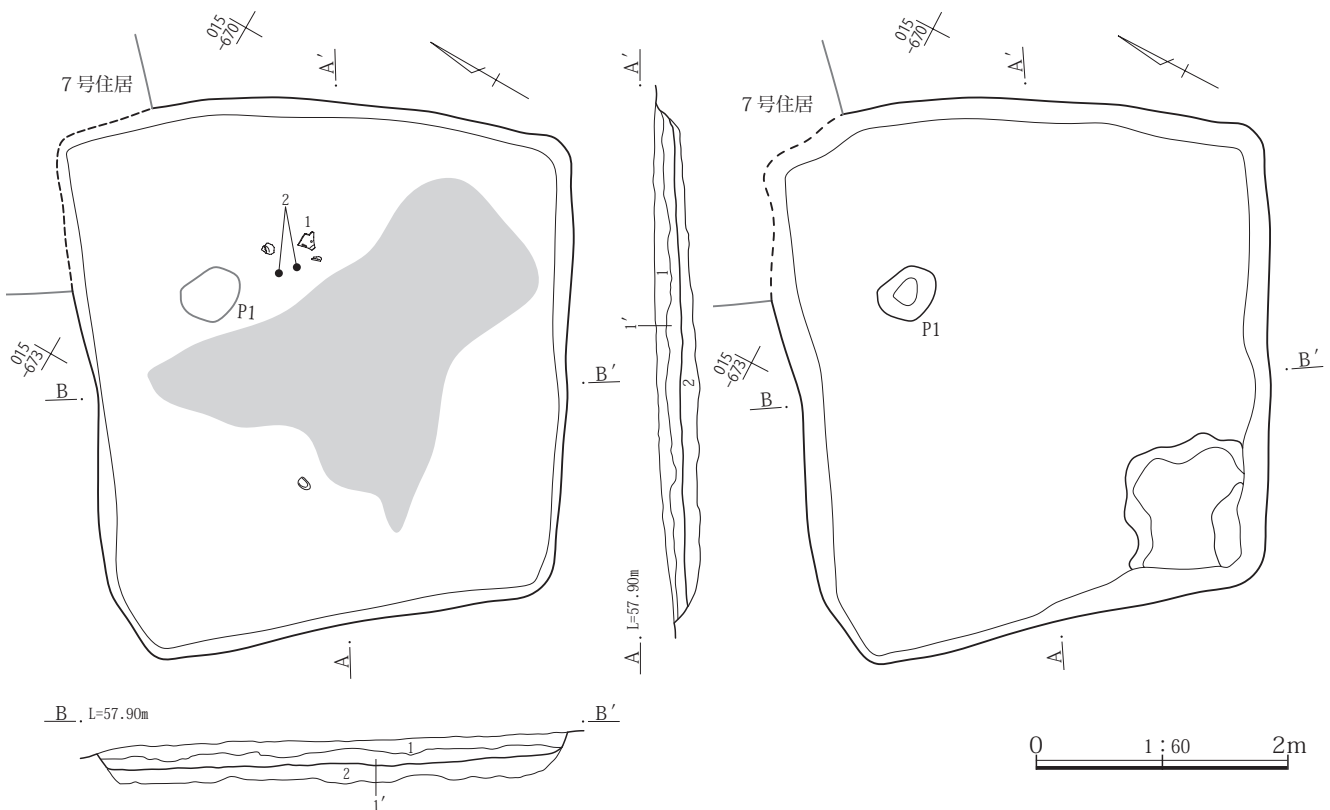
床面 西隅方向へ低く傾斜していて、東隅付近と20cm以上の比高差がある。住居中央に広範囲に黒色灰・炭化物粒が散っている。全体に深さ15cm前後の掘り方が見られ、一部でピット状・土坑状の浅い窪みになっている部分が

あり、最大規模のものをP1とした。径45×38cmの規模で、床面からの深さは18cmになる。

その他 4・5・7号住居と重複している。炉・壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

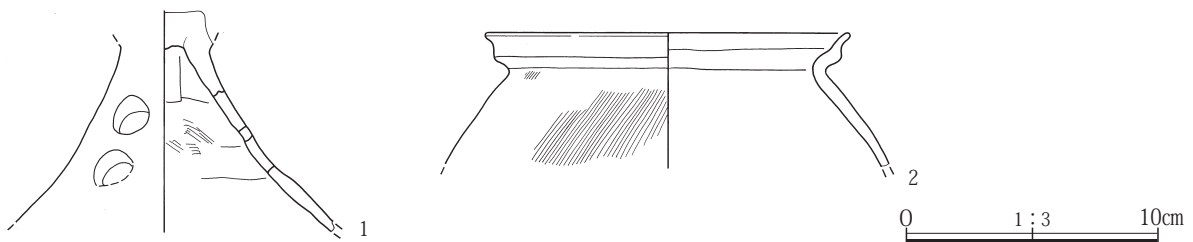
遺物 住居中央付近出土の2点を図示した。高杯1・台付甕2が床直上の出土である。床から19cm浮いた状態の須恵器があったが、遺構外の遺物(363図-1)として扱った。図示した以外の遺物は重量で0.6kgの土師器片で、1区では6号住居に次いで少なかった。

所見 図示した2点の土師器はともに4世紀代のもので、遺構形状とも矛盾しない。



8号住居

- 1 暗褐色土 炭化物粒、As-C等を含む。1'ではAs-Cの混入少なく、炭化物粒はブロック状の混入となる。
- 2 灰褐色土 掘り方埋戻し土。黄色砂質土を含む。



第144図 1区8号住居および出土遺物

(3) 古墳時代の竪穴住居

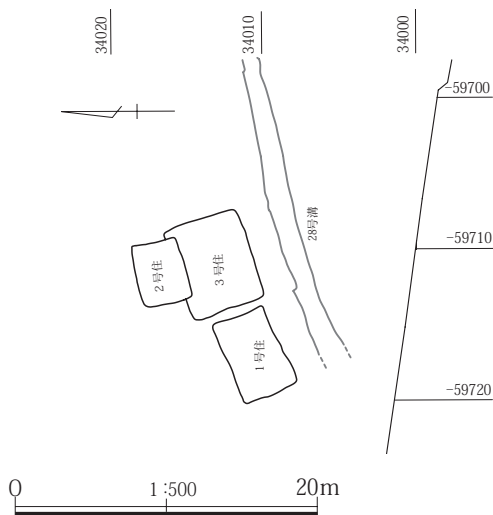
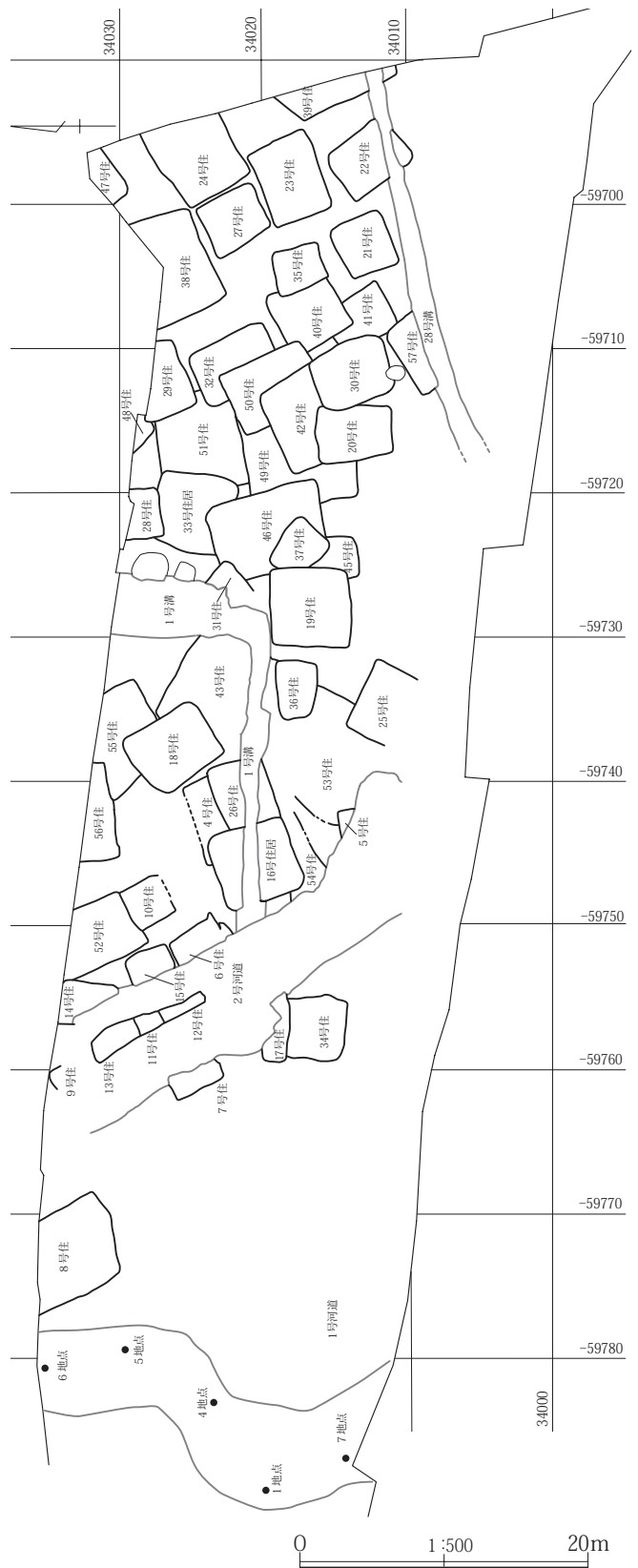
2区の竪穴住居

2区は1区西端から続く微高地上にあたる。2区西隅で北側から流れ込んだ流路が東側へ向きを変え、調査区の西側・南側が大きく削られている。また、中世方形館に伴う堀や井戸など深度に富む遺構による影響も受けている。それでも本遺跡内で最も多くの竪穴住居が確認された。調査区西側は流路に削られた住居が確認でき、さらに多数の住居が存在していたと思われる。南側も流路によって集落の立地した地山が残存していないが、この一画は流路で削られた住居の痕跡は明瞭ではなく、集落の南限を捉えられたか流路で削られているか判断できなかった。調査区南隅にある28号溝は集落の南限を区切る施設であった可能性がある(本文344頁)。

確認できた範囲内でも1区西隅から繋がる東西100m近い規模を有す古墳時代拠点集落であり、集落は確実に北側に続いている。

調査できた56棟の住居は複数住居の重複の可能性をもつ住居が含まれ、さらに多数の住居があったと思われる。最大4時期の重複が数カ所で確認できる。1～3号住居の3棟は3面調査の直上で確認し、他は3面調査で確認した。河川堆積物を地山とし、泥流堆積物を埋没土としているため遺構確認のきわめて難しい遺跡であり、遺構間の重複や炉・柱穴等を明瞭にすることができた住居はほとんどなかった。

集落は4世紀の水田上に築かれたと思われる(本文328頁)。1区同様に6世紀前半の泥流によって最終的に埋



第145図 2区古墳時代住居配置図

没し、それ以降は畑地となり4区で見られる平安時代の集落は築かれなかった。

1号住居(第146図 PL.27-②)

2区集落の南隅で確認した。床面を失っていて掘り方のみの調査で、一部不明確な部分があった。

位置 007～012-713～720グリッドにある。

規模形状 一部で不明瞭な部分があるが、長軸長5.5m、短軸長3.5mの東西に長い長方形を呈している。

方位 N-66° E。 **面積** 19.54㎡ (掘り方面)

床面 現状で深さ7cm前後の凹凸の少ない掘り方が、ほぼ全面で確認できる。埋戻し土は炭化物等の混入物の多いシルト質土で、他の2区住居では床上の埋没土に近似した土質である。

その他 20号住居に後出する。壁溝・柱穴等の施設は確認できなかった。出土遺物はない。

所見 時期決定の資料となる遺物を持たない。遺構の規模や方向では2区23号住居が類似している。また2区南隅を画す施設の可能性がある28号溝の北西側約2mの位置に軸方向を揃えるようにして並んでいる。

1号住居

1 にぶい黄褐色土 掘り方埋戻し土。ブロック状の火山灰・シルト質土、炭化物粒等、雑多な混入物を含む。

2号住居(第147図 PL.27-③)

床面は失っていて掘り方のみの調査で確認できない部分も多く、不明瞭な遺構である。

位置 014～018-709～713グリッドにある。

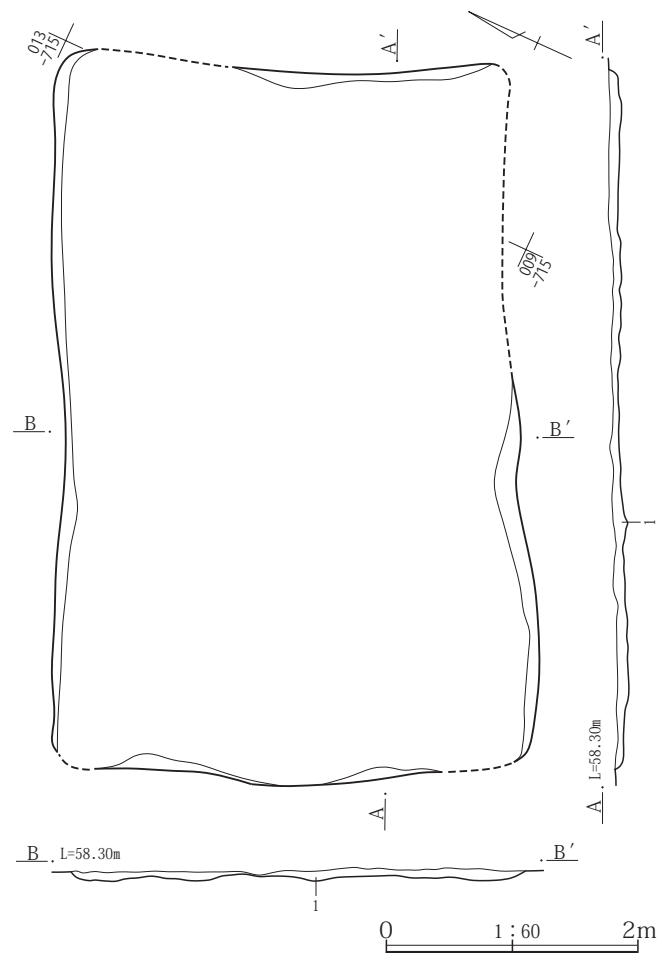
規模形状 西辺側の両隅が不明だが、長軸長4.1m、短軸長3.1mの東西に長い長方形が想定できる。

方位 N-74° E。 **面積** 12.67㎡ (掘り方面)

床面 現状で深さ最大5cm前後の凹凸の少ない掘り方が確認できる。埋戻し土はシルト質土で床面粗掘り時の残土をそのまま踏み固めたような土質である。

その他 3・30・42号住居等に後出している。壁溝・柱穴等の施設は確認できなかった。出土遺物はない。

所見 時期決定の資料となる遺物を持たない。方位は1～3号住居中、最も東側へ振れている。



第146図 2区1号住居

3号住居(第147図 PL.27-③)

住居床面は失っているようで掘り方のみの調査で、一部不明確な部分もあった。

位置 009～016-707～714グリッドにある。

規模形状 西辺側の両隅が不明だが、長軸長6.2m、短軸長5.1mで東辺が西辺より20cm前後長い台形状に歪む長方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 掘り方埋戻し土は炭化物粒の混じるシルト質土で、全域で7cm前後の深さがある。

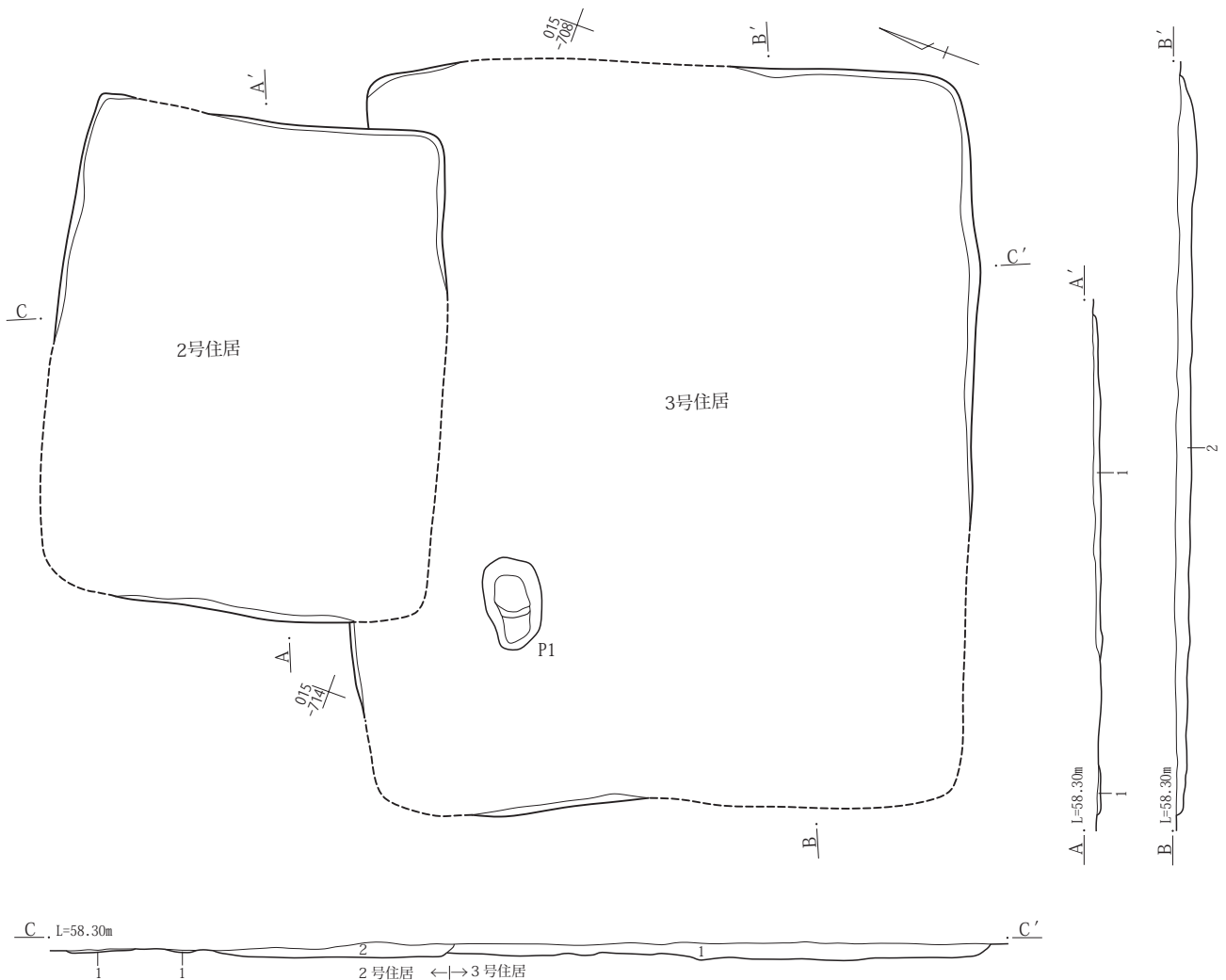
方位 N-68° E。 **面積** 31.35㎡ (掘り方面復元)

床面 床面らしい踏み固めはないが、表層に炭化物粒が薄い層状に観察できる部分もあり、一部で床面が残存している可能性がある。

ピット 住居北西隅寄りに長径78cm、短径48cm、掘り方底面からの深さ16cmの窪みがある。4支柱穴配置にありピットとして扱ったが、明瞭な施設ではない。

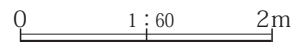
その他 2号住居に前出し、40～42号住居等に後出している。壁溝・炉等の施設は確認できなかった。
遺物 土師器甕類片をわずかに出土したが、図示に耐え

る遺物はなかった。
所見 時期決定の資料となる遺物を持たない。1号住居と近似した方位である。



2・3号住居

- 1 暗灰～灰色土 2号住居掘り方埋戻し土のシルト質土。表層に炭化物粒が薄層状に観察できる部分あり、中層以下にも炭化物粒の混入はやや多い。
- 2 暗灰～灰黄色土 3号住居掘り方埋戻し土。やや粗粒のシルト質土や砂質土の混土。FAが混じると思われる径10～20mmのシルト質土ブロックを混入。



第147図 2区2・3号住居

4号住居(第148～150図 PL.27-④～⑦、72・73)

遺物観察表418・419頁)

北辺に攪乱を受け、南側は中世館堀の1号溝に壊されているがほぼ全容は把握できた。東辺に沿って内側に掘り方状の段差が見られ、東側へ拡張した住居の可能性がある。外側をA号住居・内側を掘り方ではなくB号住居とした。

位置 018～025-739～745グリッドにある。

規模形状 A号住居は長軸長南北方向で5.9m、短軸長

東西方向で5.7mを測り正方形に近い。B号住居は東辺と北辺東側以外をA号住居と共有し短軸東西方向長が5.2mで長方形となる。

方位 N-21° W。

面積 A号住居復元31.32㎡ B号住居復元28.68㎡

埋没土・壁 A号住居・B号住居とも埋没土は単層であった。A号住居の壁高は低く、最も深い東辺で8cmを測る地点があるが、他の辺では2cm前後の部分がほとんどである。B号住居では12cm前後の壁高がある。

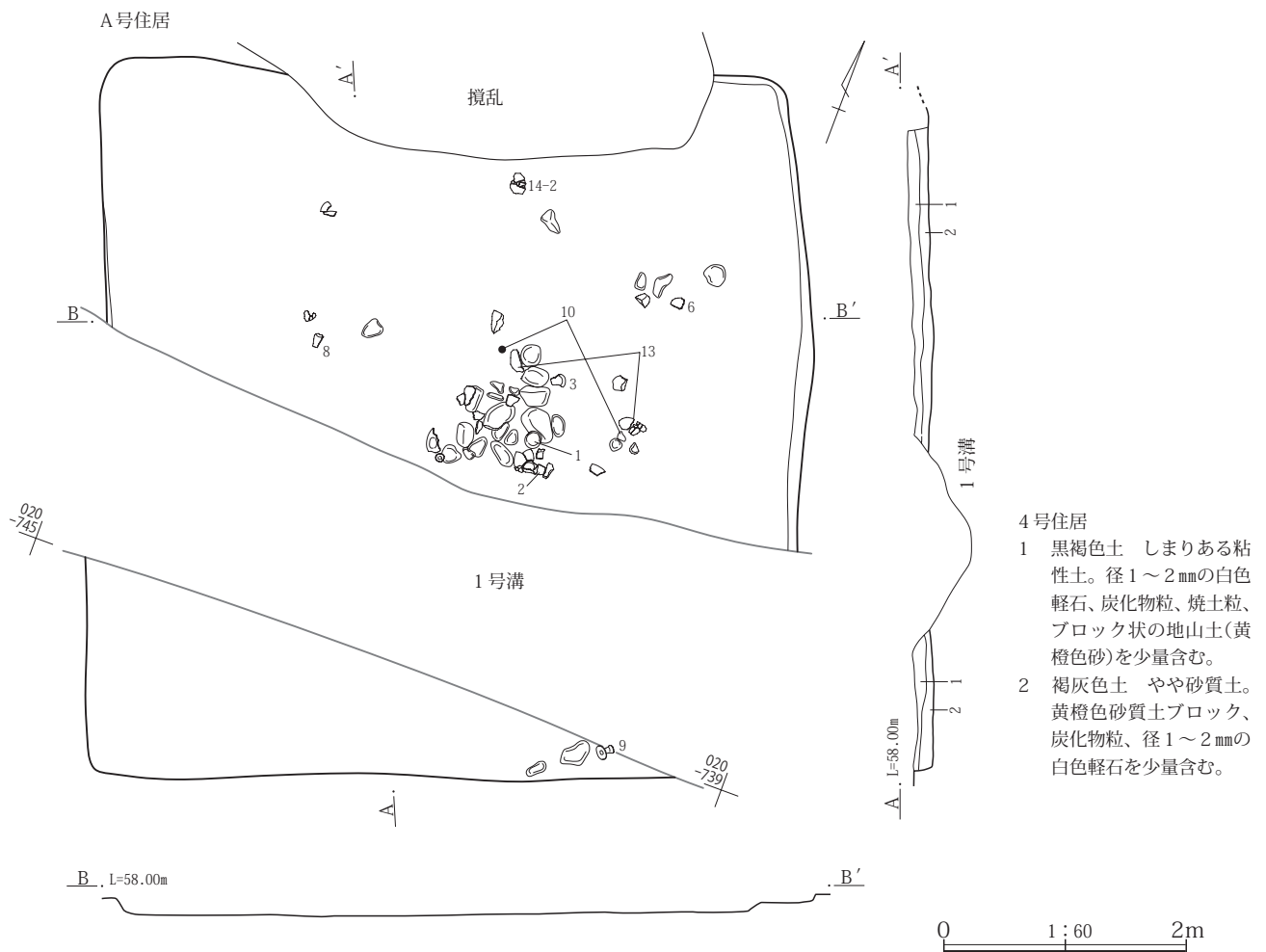
床面 A号住居は細かな凹凸のある床面で南側へ低くやや傾斜し、北壁直下と10cm前後の比高差がある。明確な踏み固めは確認できていない。B号住居床面は凹凸が少なく、この点も掘り方的ではない。

その他 16・26号住居に後出している。A・B両号住居とも炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。掘り方底面がB号住居床面であれば、B号住居は掘り方のない住居となる。

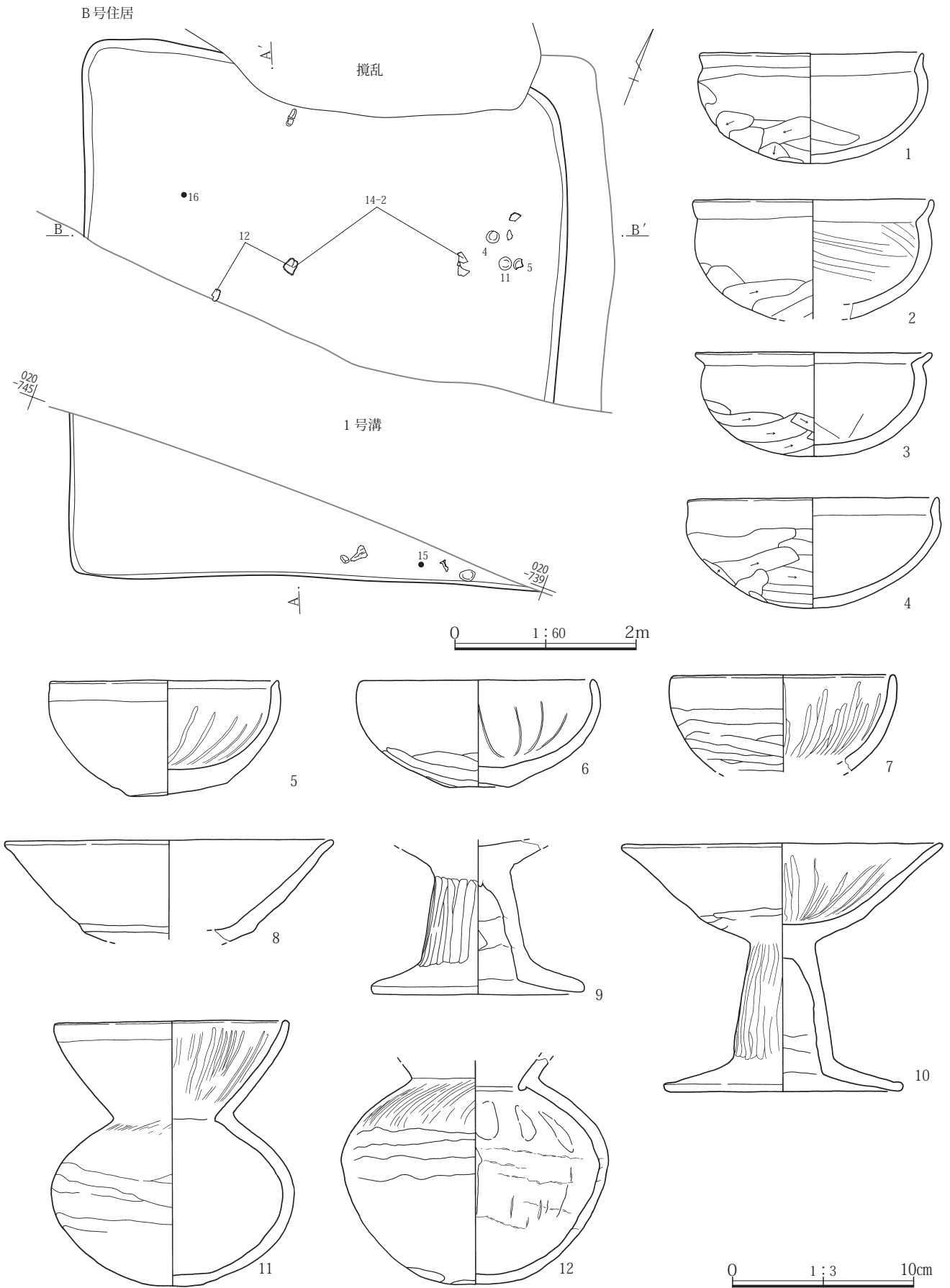
遺物 浅い遺構だが多量の遺物を出し土器15点と石製品1点を図示した。また集落上面の畑調査時に出土した土器と接合するものが多かった。A号住居は高杯9が南壁際床直上で出土している。住居中央付近からは杯1～3、高杯10、壺13が川原石とともにまとまって出土した。床から5cm浮いた状態の杯2以外は床直上の遺物である。また、中央の遺物北側を囲むようにして鉢6、高杯8、

甕14-2が床直上で出土している。なお、14-1は集落上面の畑出土遺物で14-2と同一個体と思われ、接合できなかったが住居遺物と並べてここで扱った。B号住居も掘り方とは考えにくい量の遺物があり、図示したものはすべて床直上の出土である。手捏ね15は南壁際、杯4・5と埴11が北東寄り、埴12と甕14-2が中央付近に散乱していた。剣型石製品16は北西寄り掘り方内で出土している。本住居に重複する16号住居からも剣型石製品の出土がある。図示した以外にA・B両住居併せて甕類を主体とした土師器を重量で1.7kg出土している。

所見 A・B両住居は西・南の壁を共有しており住居拡張の痕跡と考えたい。出土遺物は5世紀代である。A号住居は中央付近に川原石を集め、それとともに土器が出土している。生活の様子を留めるようには見えないが、出土遺物に祭祀的な特徴は指摘できない。



第148図 2区4 A号住居



第149図 2区4B号住居および出土遺物(1)



第150図 2区4号住居出土遺物(2)

5号住居(第151図 PL. 28-①~③)

2区では最も南側に位置する住居の1棟である。2号河道により大きく削られ、北東隅部分のみが調査できた不明瞭な住居である。

位置 013～014-741～743グリッドにある。

規模形状 残存の良い北辺でも長さ1.7m部分のみの確認である。北東隅は直角に近く、北・東辺も直線的で整美な方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 壁際の3層土は壁崩落土としては裾が広がらずまとまって確認される。他は水平に近い洪水堆積物を含む埋没土となる。人為的な埋戻しの後、下層に焼土等の混入がやや多いが自然堆積したものだろうか。直線的に立ち上がる比較的残存状態の良い壁で、壁高は28cm前後を測る。

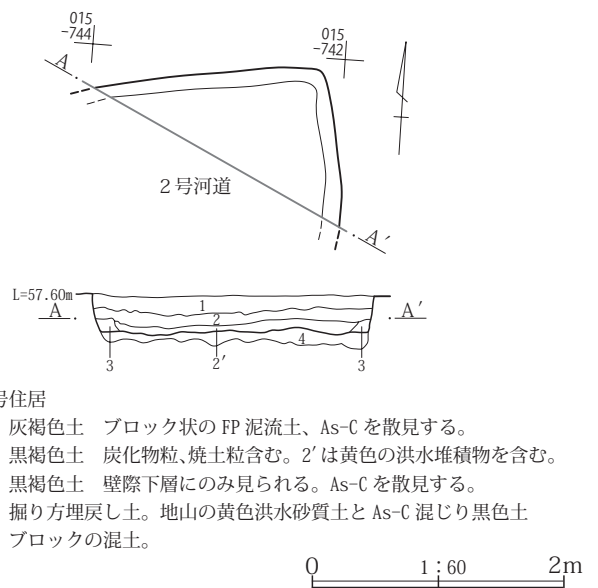
方位 N-8°W(南北軸)。 **面積** 残存0.91m²

床面 調査できた範囲では凹凸の多い不整な床面である。全体に深さ4～15cmの掘り方がある。

その他 53号住居に後出している。炉・壁溝・柱穴等の

施設は確認できない。

所見 土師器甕類片を少量出土したが、図示できるもの・時期決定の資料となる土器はない。



5号住居

- 1 灰褐色土 ブロック状のFP泥流土、As-Cを散見する。
- 2 黒褐色土 炭化物粒、焼土粒含む。2'は黄色の洪水堆積物を含む。
- 3 黒褐色土 壁際下層にのみ見られる。As-Cを散見する。
- 4 掘り方埋戻し土。地山の黄色洪水砂質土とAs-C混じり黒色土ブロックの混土。

第151図 2区5号住居

6号住居(第152・153図 PL. 28-④~⑥、73

遺物観察表419頁)

2号河道で住居西側半分を削られ全容を明らかにできていない。2区で唯一カマドのある住居である。

位置 022～026-749～752グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.25m、南北軸長1.9m以上の規模である。直角に近い北東隅と比べ、カマドのある南東隅が著しく丸みをおびている。

埋没土・壁 2層上面に平坦面がある。1層土は人為的な埋め戻しのような。壁高は30cm前後である。

方位 N-64° E。面積 残存5.97㎡

床面 緩やかな凹凸の多い床面で、10cm近い比高差がある。カマド北側に灰が散っていた。全体に深さ15cm前後の掘り方があり、壁際でやや深くなる。

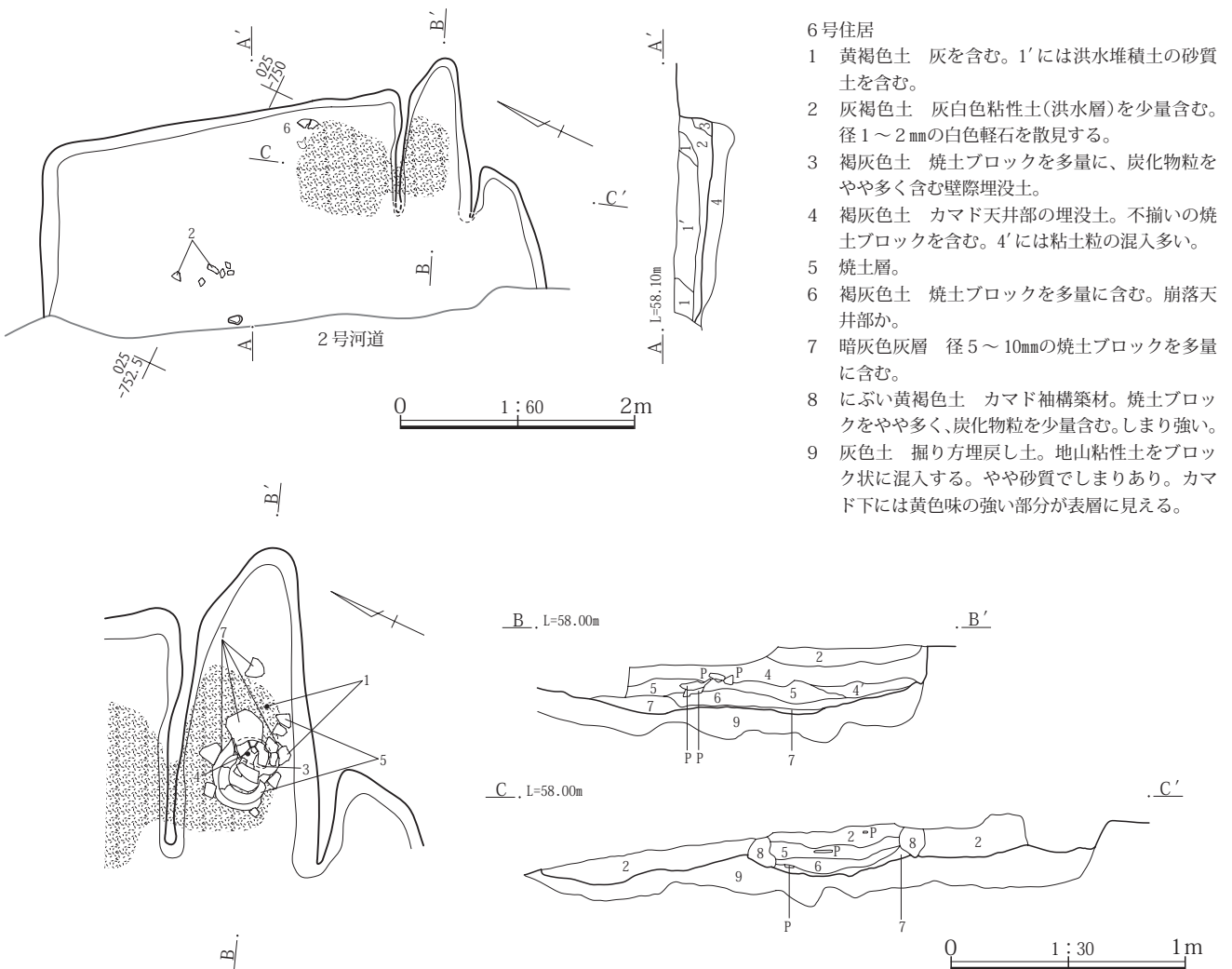
カマド 東隅付近に築かれている。調査当初灰の多い部分として把握し、削り始めた段階でカマドと確認された。

袖先端部分を一部失っている。燃焼部は住居内にあり壁側へ向かって奥行があり、壁外へ20cm張出している。火床は住居床より8cm前後深く、壁方向へ緩やかに高くなっている。煙道は明確でない。

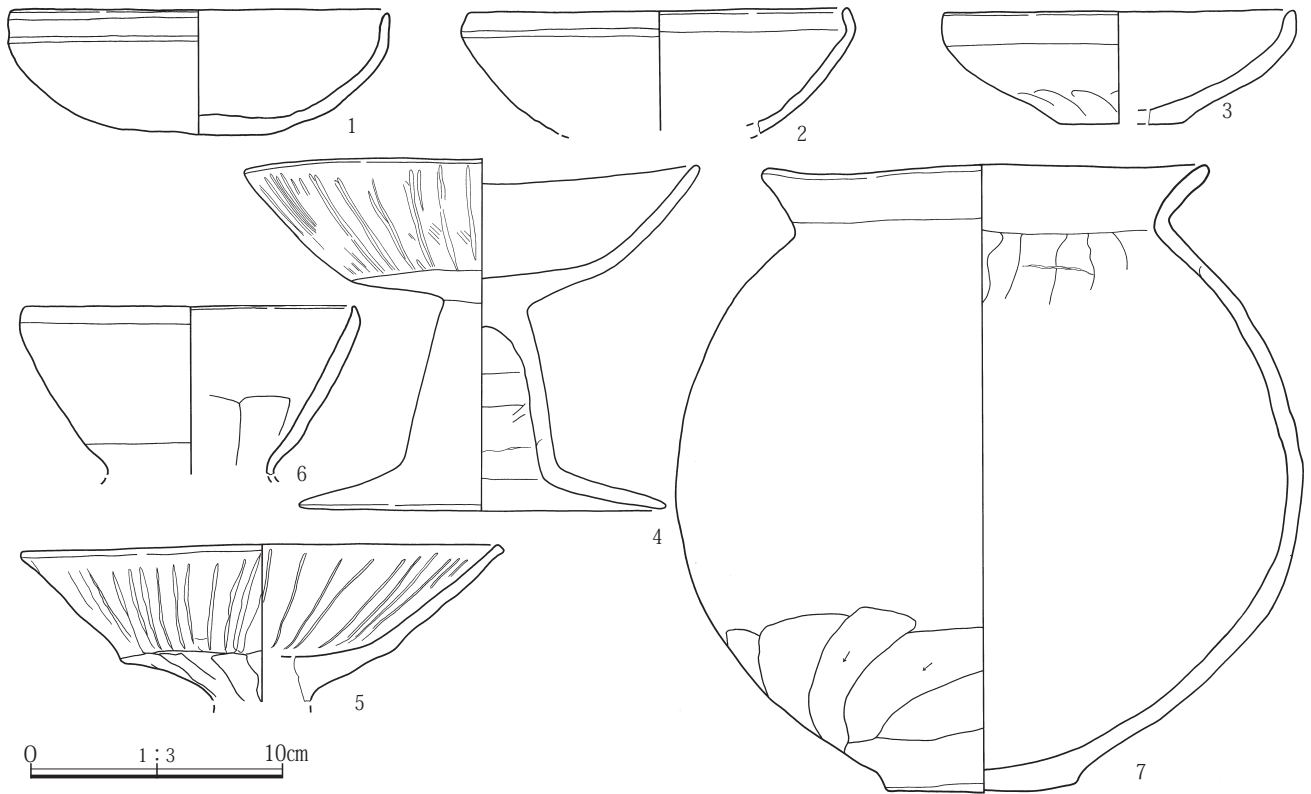
その他 炉・壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 カマドを中心に出土遺物は多く、7点の土師器を図示した。カマド支脚に転用した高杯4が据えられ、他に杯1・3、高杯5、甕7がカマド内の出土である。埴6はカマド西脇の北壁直下床直上遺物である。杯2は床直上遺物だが床上8cmの破片と接合している。図示した以外に重量で0.7kgの土師器を出土している。

所見 4区古墳時代の初現期カマドのある住居と同じ5世紀代の住居で、火床に高杯転用支脚を据えるなど近似した特徴をもつが、カマドの位置が異なり唯一のコーナーカマドである。



第152図 2区6号住居



第153図 2区6号住居出土遺物

7号住居(第154図 PL. 28-⑦・⑧)

2号河道西側の住居のきわめて少ない一画にある。同河道に東側を大きく削られた住居である。

位置 022～026-759～762グリッドにある。

規模形状 西辺は3.4mで、この部分が長軸であれば小型の住居である。東西軸長は1.7m以上である。

埋没土・壁 最下層に水平に近い洪水砂層が堆積しており、洪水砂を直接被覆した可能性のある住居である。比

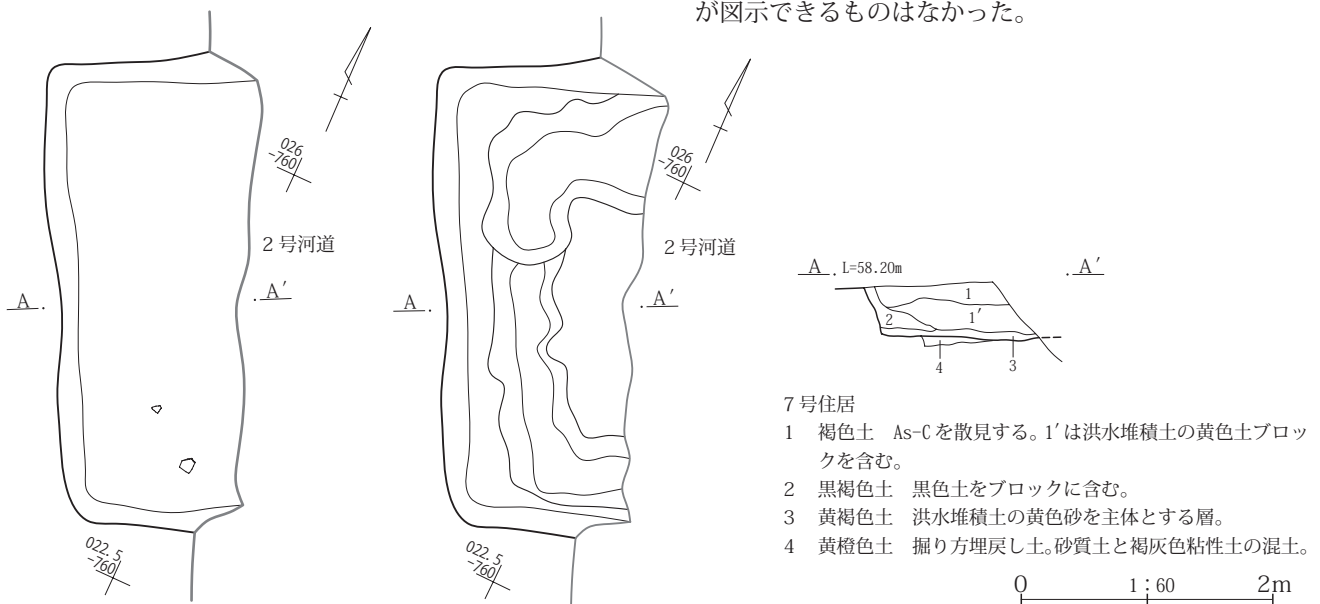
較的深い住居で、壁高は最も深い南辺で50cmを測る。

方位 東西軸N-27° W。面積 残存4.55㎡

床面 南東へ低く緩やかに傾斜した床面で細かな凹凸がある。掘り方は方形の溝のような窪みが壁直下と中央を除いて巡っている。明瞭な掘り方だが深さは10cm以内で浅い。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

所見 甕類主体に重量で0.4kgの土師器を出土しているが図示できるものはなかった。



第154図 2区7号住居

- 7号住居
- 1 褐色土 As-Cを散見する。1'は洪水堆積土の黄色土ブロックを含む。
 - 2 黒褐色土 黒色土をブロックに含む。
 - 3 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂を主体とする層。
 - 4 黄橙色土 掘り方埋戻し土。砂質土と褐灰色粘性土の混土。

8号住居(第155～158図 PL. 29-①～④、73・74

遺物観察表419・420頁)

調査できた2区の住居中、最も西側にある。河道内で確認された住居で南東隅は不明瞭である。また北側は調査区域外で全容を把握できていない。

位置 030～035-768～777グリッドにある。

規模形状 長軸長6.4m以上、短軸長5.9mの南北に長い長方形を呈す大型住居である。

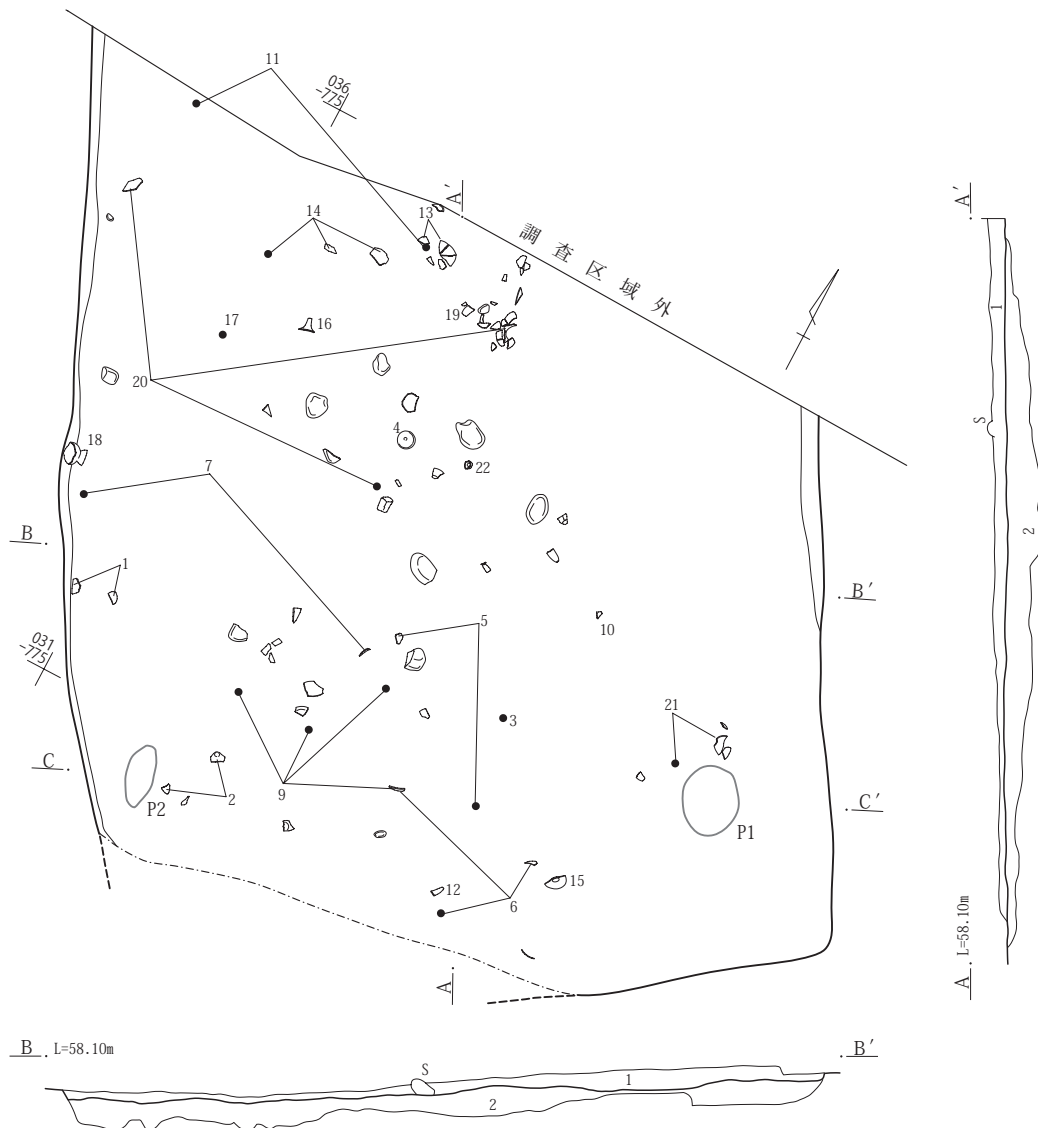
埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁高は全体にごく浅いが、東・西辺の一部で8cm前後を測る部分もある。

方位 N-27° W。面積 残存32.96㎡

床面 南側へ低く傾斜していて、調査できた範囲でも北側と最大15cmの比高差がある。南側では床面を失っている部分がある。掘り方は東西断面で見ると波打つような形状で、最大20cmの深さがある。

ピット 掘り方調査時に確認したP1は規模・配置とも主柱穴である。同じP2は床下土坑状の窪み(土坑1)と重複し不明瞭で壁に近接しているが、P1に対応する主柱穴と考えても齟齬はない。

その他 炉・壁溝等の施設は確認できない。掘り方調査



8号住居

- 1 褐灰色土 洪水堆積土。炭化物・焼土粒を含む。
- 2 褐灰色土 掘り方埋戻しの粘質土。炭化物散見し、地山の灰白色砂を少量含む。

- 3 褐灰色土 砂質土。ピット埋没土。
- 4 暗褐灰色土 白色軽石含む粘性土で、4'は軽石の混入多い。
- 5 暗灰色土 白色軽石を散見する粘性土。

0 1:60 2m

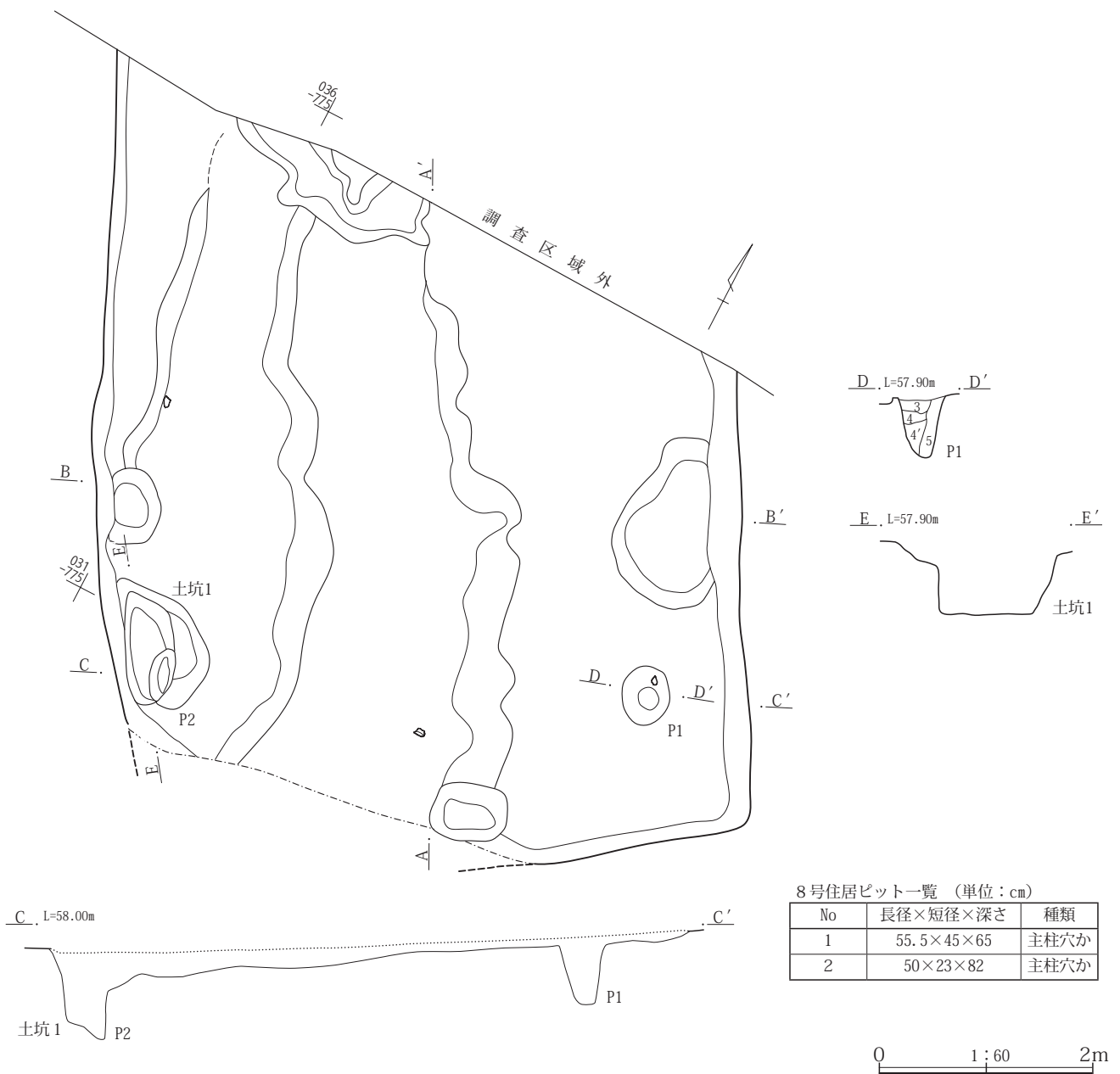
第155図 2区8号住居

時に南西隅付近壁際で確認した窪みを土坑1とした。径104×47cmで南北に細長く貯蔵穴的ではないが、床面からの深さ70cmの平坦な底面である。

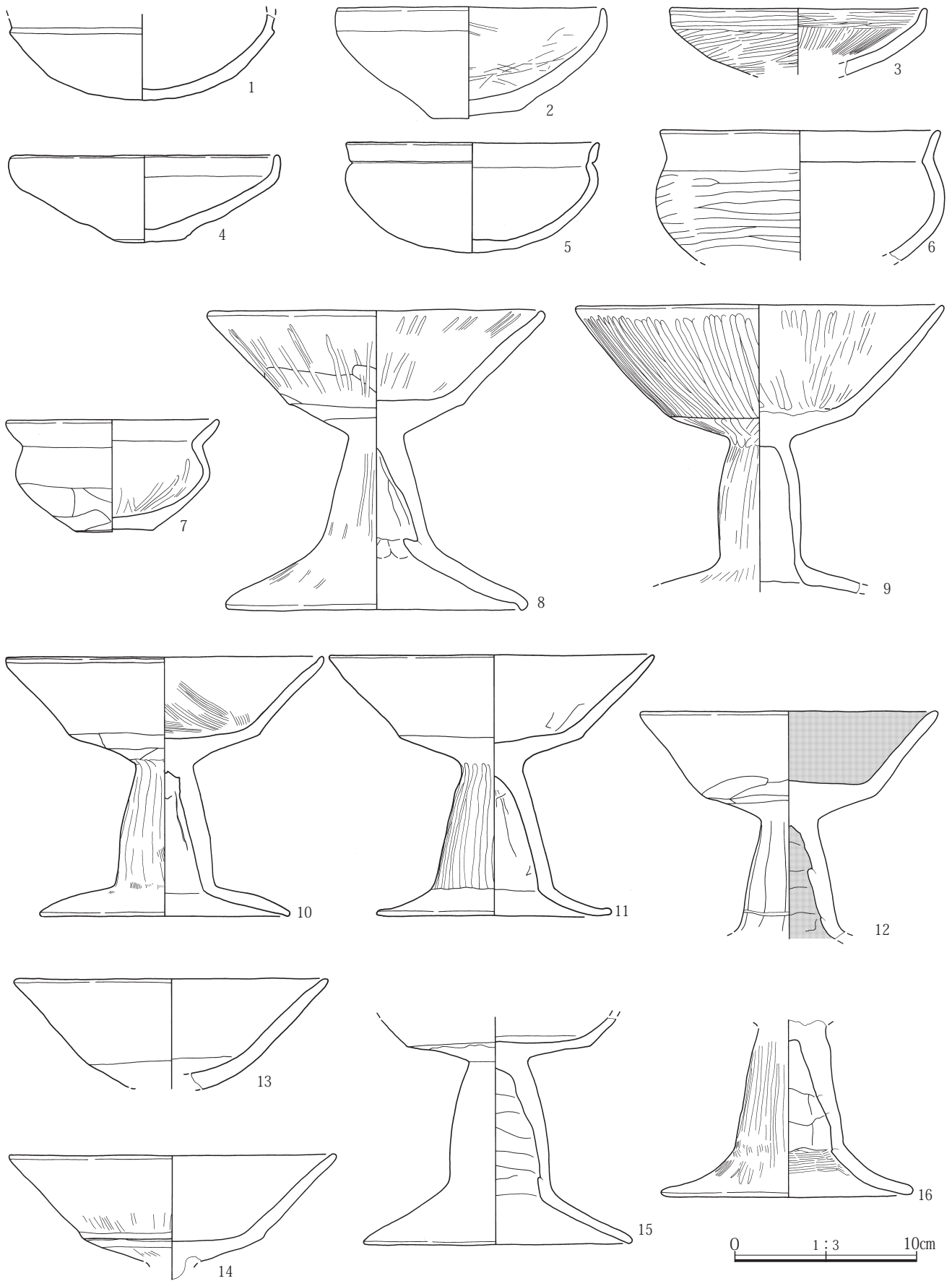
遺物 浅い住居だが多量の遺物を出土し、22点の土師器と石製品1点を図示した。住居全域に散在するように出土し、離れた地点で接合するものが多かった。壁際の遺物は西壁際の2点のみで杯1は床面より10cm前後高い位置、埴18は床上4cmの比較的低い位置だが上面畑調査時の破片が接合している。他は壁から離れた位置だが床直上の高さで鉢4・壺19が出土している。鉢5、高杯11・13、手捏ね22など床直上の破片が床上5cm前後の高さの

破片と接合する例が多い。さらに杯2、鉢6、高杯9は床上の破片が掘り方埋戻し土内の破片と接合し、床面が不安定だったことが窺える。図示した以外に重量で2.9kgの土師器を出土している。

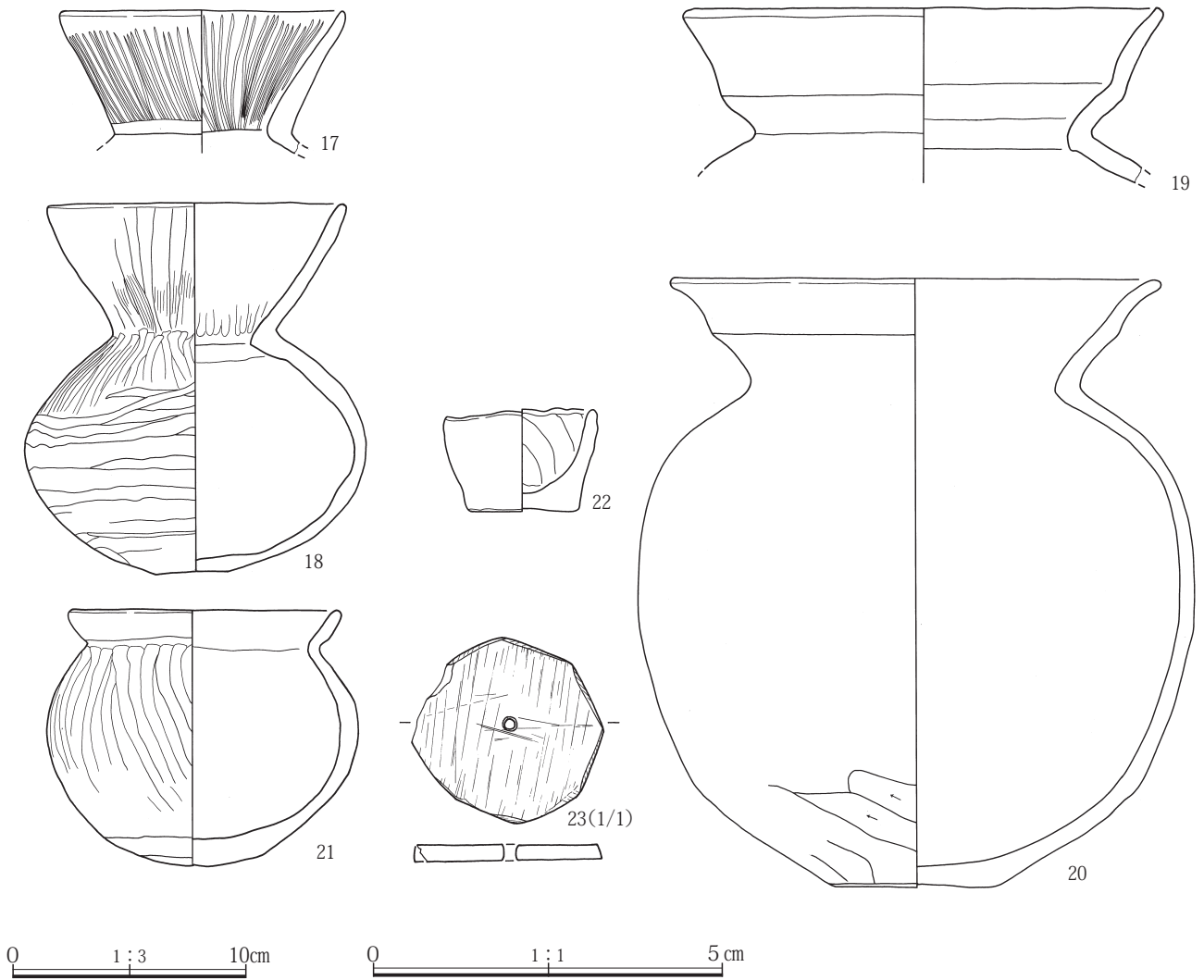
所見 遺物の出土状態が不安定で確実に本住居に伴う土器を選定できないが、いずれも5世紀代の土師器である。鉢や高杯など供膳具の出土が目立ち完形近くまで復元できるものがあった。反面煮沸具で復元できるものがない偏った遺物セットである。中央付近に多量の川原石があるが、床面より10cm前後高い位置にあるものが多い。



第156図 2区8号住居掘り方



第157図 2区8号住居出土遺物(1)



第158図 2区8号住居出土遺物(2)

9号住居(第159図 PL. 29-⑤)

河道内で確認された遺構で北東隅付近を調査できただけで全容は不明である。確実に住居とする根拠を持たないが調査時の遺構名称に沿い住居として扱った。

位置 033～034-759～761 グリッドにある。

規模形状 残存する北辺・東辺とも確認できる壁の長さ約1mで形状推定の資料に乏しい。残存範囲ではやや鋭角気味の隅で両辺は直線的である。

埋没土・壁 埋没土の記録を欠く。比較的深い住居で、壁高は30cm前後を測る。

方位 N-29° W(東辺) 面積 残存0.61㎡

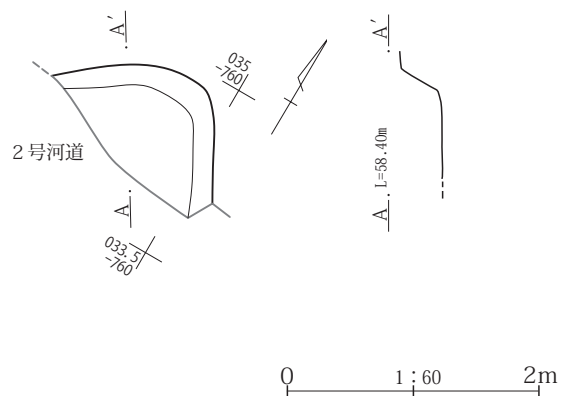
床面 残存する範囲では平坦な床面で掘り方はない。踏み固めや灰等の散布なども見られなかった。

その他 壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 重量で0.3kgの土師器片を出土しているが図示で

きる遺物はなかった。

所見 壁の方向は2区住居に多数みられるもので、住居と推定することに齟齬はない。



第159図 2区9号住居

10号住居(第160図 PL. 29-⑥~⑧、74 遺物観察表420頁)

南東側を攪乱(中世遺構)によって失っているが、ほぼ全容を把握できた住居である。

位置 026 ~ 029-746 ~ 750グリッドにある。

規模形状 長軸長東西方向で2.9m、短軸長南北方向で2.8mのほぼ正方形を呈している。

埋没土・壁 壁際が一部埋もれたあと水平に近い堆積となり、5号住居等と近似している。壁は崩落の痕跡の少ない良好な状態で、壁高は北・東辺で28cm前後を測る。

方位 N-28° W。面積 復元8.18㎡

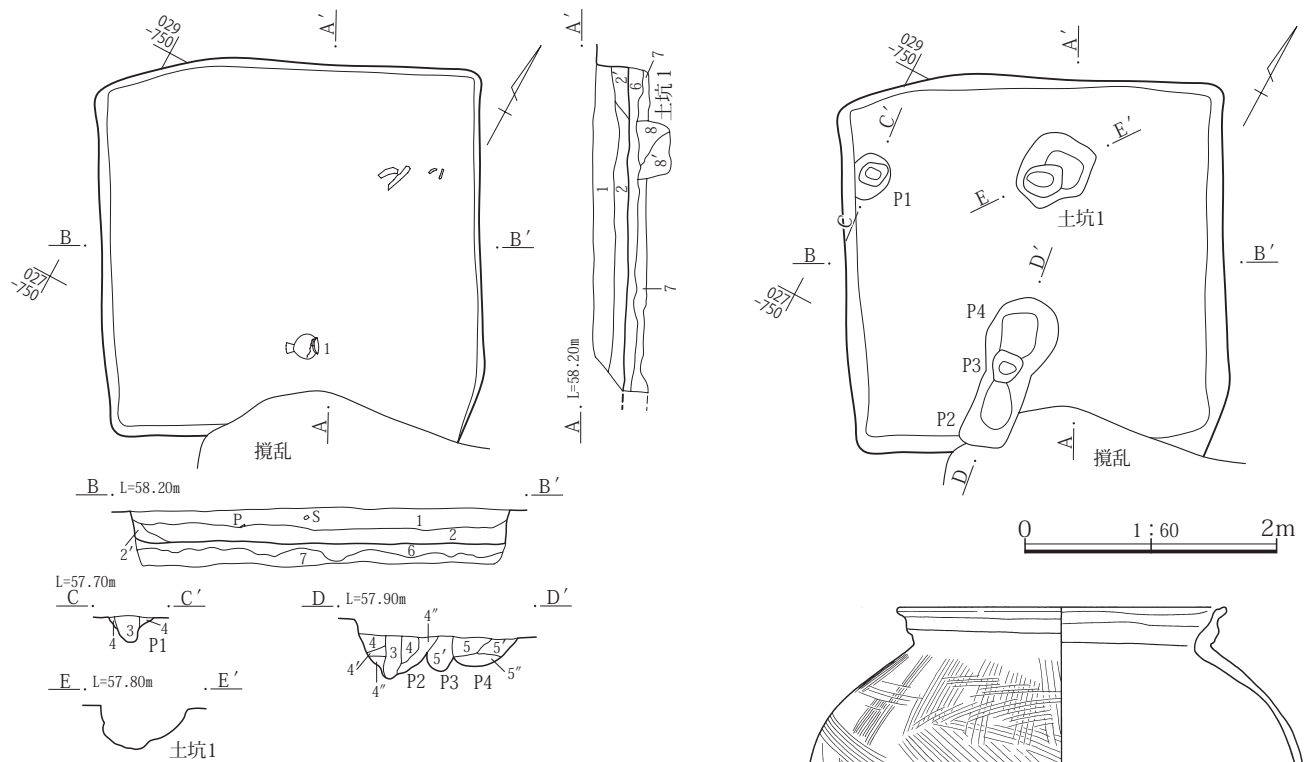
床面 細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床である。深さ15 ~ 20cmの掘り方が全面に見られる。

ピット 掘り方調査時にピット状の窪み4基(P1~4)を確認している。いずれも深度を伴いP2には柱痕も見られるが支柱穴配置にはあたらない。

その他 52号住居に後出する。炉・壁溝は確認できない。掘り方調査時に北壁下で長径67cm、深さ26cmの窪みを確認し土坑1とした。炉の想定できる位置にあるが焼土・炭化物粒等の検出はなかった。

遺物 図示した台付甕1は床面より12cm高い位置だが完形に近い状態で出土した。図示した以外に重量で0.6kgの土師器を出土している。

所見 出土土器は4世紀代の台付甕だが、本住居に確実に伴う遺物とはできない。



10号住居

- 1 灰褐色土 炭化物粒を含む。
- 2 褐灰色土 As-C・炭化物粒を含む。2'では炭化物粒をブロック状にやや多く含む。
- 3 暗褐色土 As-C・炭化物粒・黄褐色砂質土等を不均等に含む。しまりやや欠く柱痕部分。
- 4 暗褐色土 As-C・黄褐色粘性土を散見するややしまり強い層。柱穴脇埋戻し土。4'→4''と黄色味を帯びた砂質土の混入多くなる。
- 5 暗褐色土 P3・P4埋没土。黄褐色砂質土をブロック状に含み、5'→5''と混入量増える。
- 6 暗褐色土 掘り方埋戻し土。As-C・炭化物粒を散見する。
- 7 にぶい黄褐色土 掘り方埋戻し土下層。砂質土。暗褐色灰色土を少量含む。
- 8 暗褐色土 土坑埋没土。As-C・炭化物粒を散見する。8'はにぶい黄褐色砂質土が混じる。

10号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	37×32×23	壁柱穴か
2	(63)×35×35	
3	(24)×(23)×29	
4	(58)×53×21	

第160図 2区10号住居および出土遺物

11号住居(第161・162図 PL.30-①・②、75
遺物観察表421頁)

11～13号住居は2区西側を北西方向から南東方向へ横断する流路内で部分的に確認したきわめて不明瞭な住居である。3棟の住居が重複して繋がると推定したが、11号住居はこの中央に位置している。

位置 027～031-755～758グリッドにある。

規模形状 長軸長3.55m、短軸長2.8mの長方形を呈し、西辺の短い台形状に歪むと思われる。

埋没土・壁 炭化物粒等の混入のない埋没土であった。壁高は最も深い南西隅付近で10cmを測る。

方位 N-26°W。面積 復元9.62㎡

床面 明瞭な床ではない。全体に浅い掘り方があり、住

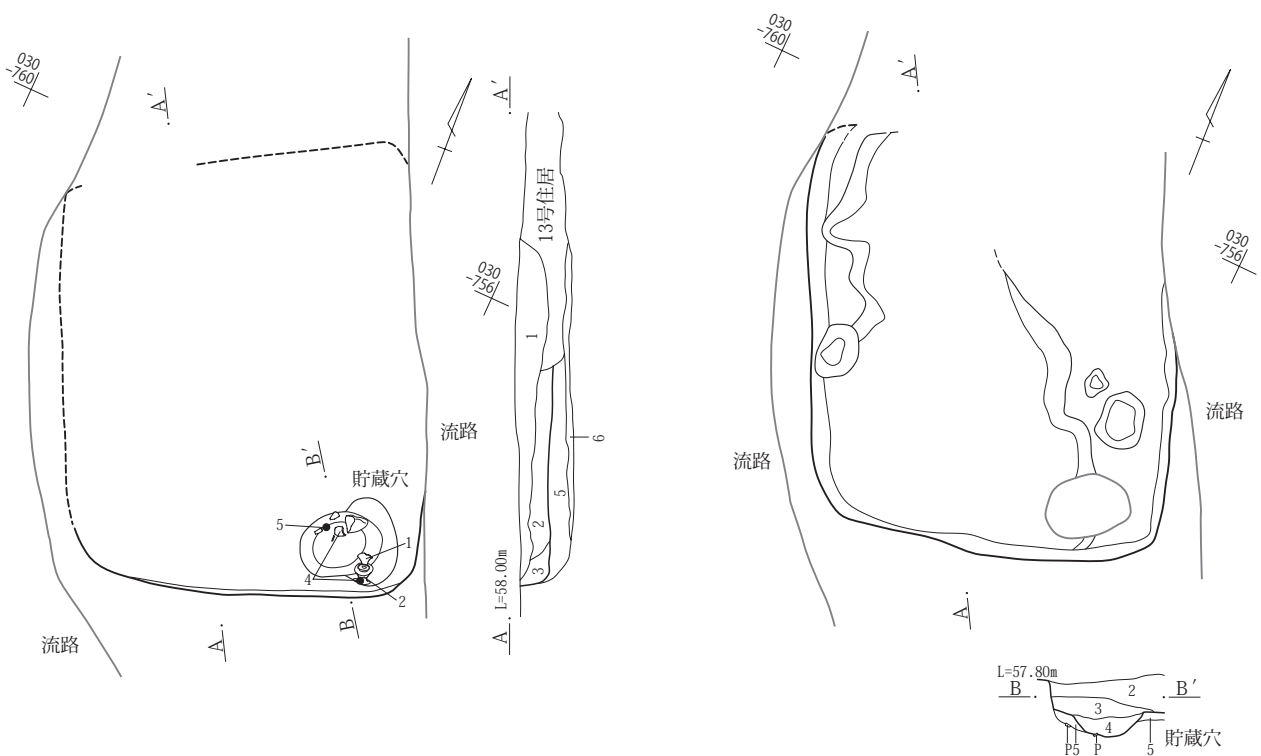
居北辺は掘り方の範囲から推定している。掘り方内にピット状のごく浅い窪みを確認している。

貯蔵穴 南東隅壁直下にある窪みは径64×48cmの規模があり、配置より貯蔵穴と考えられるが床面からの深さ15cmの不明瞭な施設である。

その他 炉・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 貯蔵穴周辺に遺物が多く、土師器5点を図示した。器台1・2は南壁直下貯蔵穴脇の床直上で重なるようにして出土した。甕4・5は貯蔵穴内で住居床面より10cm前後低い下層の出土である。図示した以外に甕類を中心に重量で0.7kgの土師器を出土している。

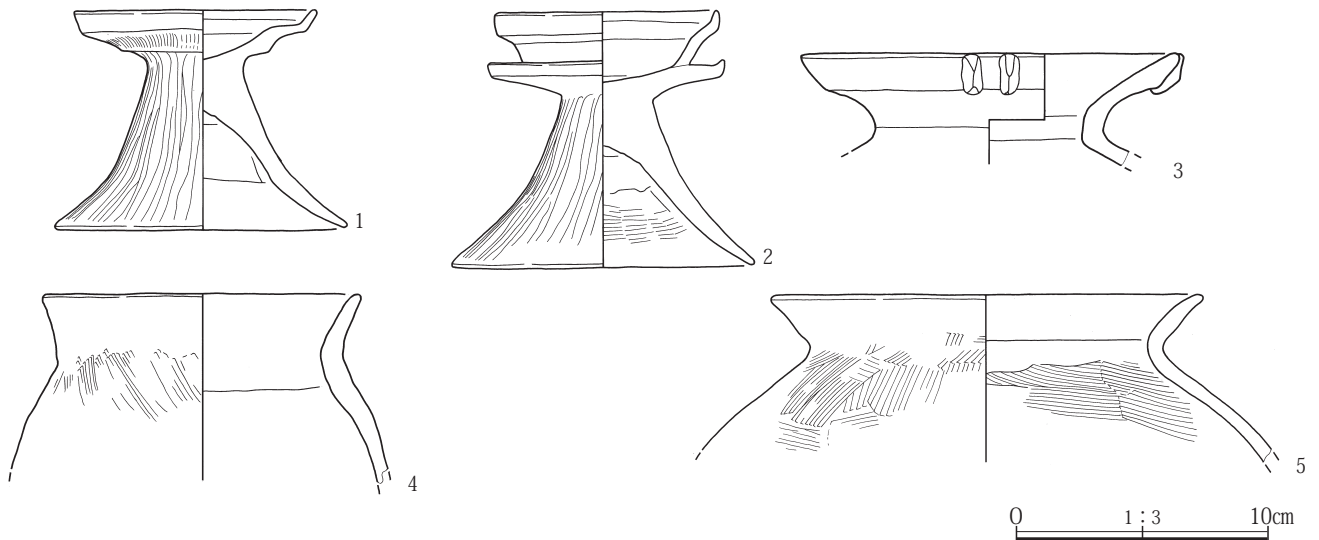
所見 埋没土層より、12号住居に後出し、13号住居に前出すると思われる。



11号住居

- 1 暗褐色土 流路跡の砂質土。FAを散見する。炭化物粒・焼土小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 住居上層埋没土で径1～2mmの白色軽石や黄褐色の粘土ブロックを含む。しまりあり。
- 3 暗褐色土 住居壁際の埋没土。白色軽石や黄褐色砂質土ブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 As-C散見の貯蔵穴埋没土。ややしまり欠く。
- 5 褐色土 地山シルト質土をブロック状に含む掘り方埋戻し土。
- 6 黄褐色土 多量の地山シルト質土を含む掘り方下層埋戻し土で、黄褐色軽石を散見する。

第161図 2区11号住居



第162図 2区11号住居出土遺物

12号住居(第163図 PL. 30-③・④ 遺物観察表421頁)

11～13号住居のうち南隅に位置している。北側を11号住居、他の辺を流路に壊されたようで、床面らしい硬化面より住居を想定したが、壁部分は確認できない。

位置 024～027-754～756グリッドにある。

規模形状 床面は南北長3.2m以上、東西長2.1m以上の範囲で確認できるが、各辺を想定する資料がない。

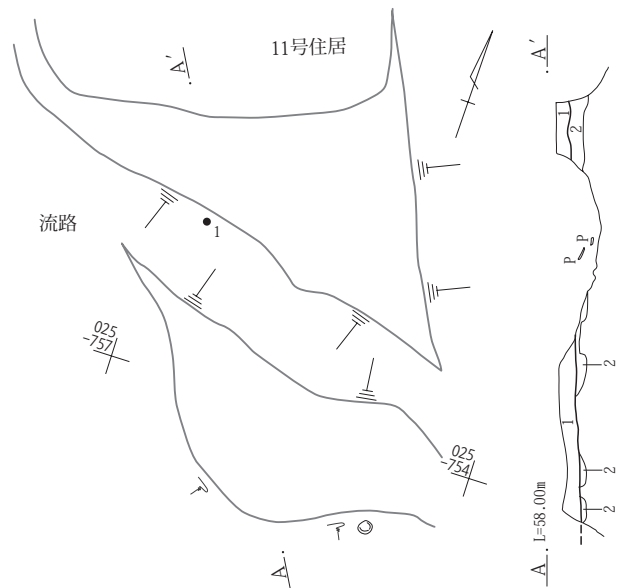
埋没土・壁 1層が埋没土であれば確認できるのは単層である。壁は確認できない。

床面 細かな凹凸があるが、比較的平坦な床で硬化が見られる。焼土・灰等の散布はない。住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度の掘り方が不規則に見られる。

その他 11号住居に前出するようだ。ピット・壁溝等の施設は全く確認できない。

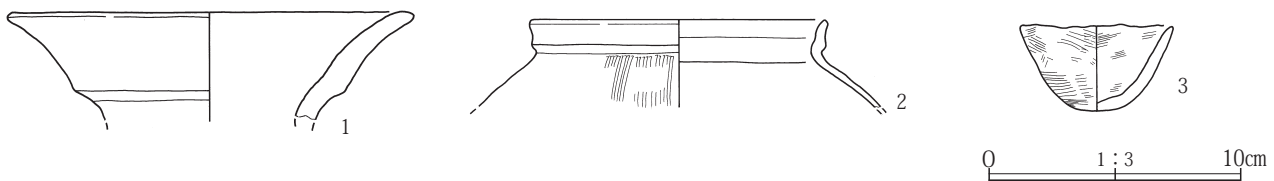
遺物 出土遺物は少ないが土師器3点を図示できた。壺1は流路にかかる部分の出土で本住居に伴うか判断できない。他の土器は埋没土内の出土である。図示した以外に重量で0.3kgの土師器を出土している。

所見 出土遺物はいずれも埋没土内出土の小破片であるが、時期は同一で、本住居を4世紀代と推定できる。



12号住居

- 1 暗褐灰色土 住居埋没土か。白色軽石を少量含む。
- 2 褐灰色土 掘り方埋戻し土か。地山シルト質土をブロック状に多量に含む。



第163図 2区12号住居および出土遺物

13号住居(第164図 PL. 30-① 遺物観察表421頁)

11～13号住居のうち北隅に位置している。南壁のみ一部で確認でき、北辺は掘り方より想定した。

位置 028～031-756～759グリッドにある。

規模形状 長軸長3.7m、短軸長2.8mほどの長方形を想定した。

埋没土・壁 流路によって流され、埋没土はわずかし確認できない。壁高は南辺で6cmを測る。

方位 N-30° W。面積 残存5.47㎡

床面 踏み固めは顕著ではないが、灰等の散布より比較的分かりやすい床面だった。ほぼ全体に深さ12cm前後の

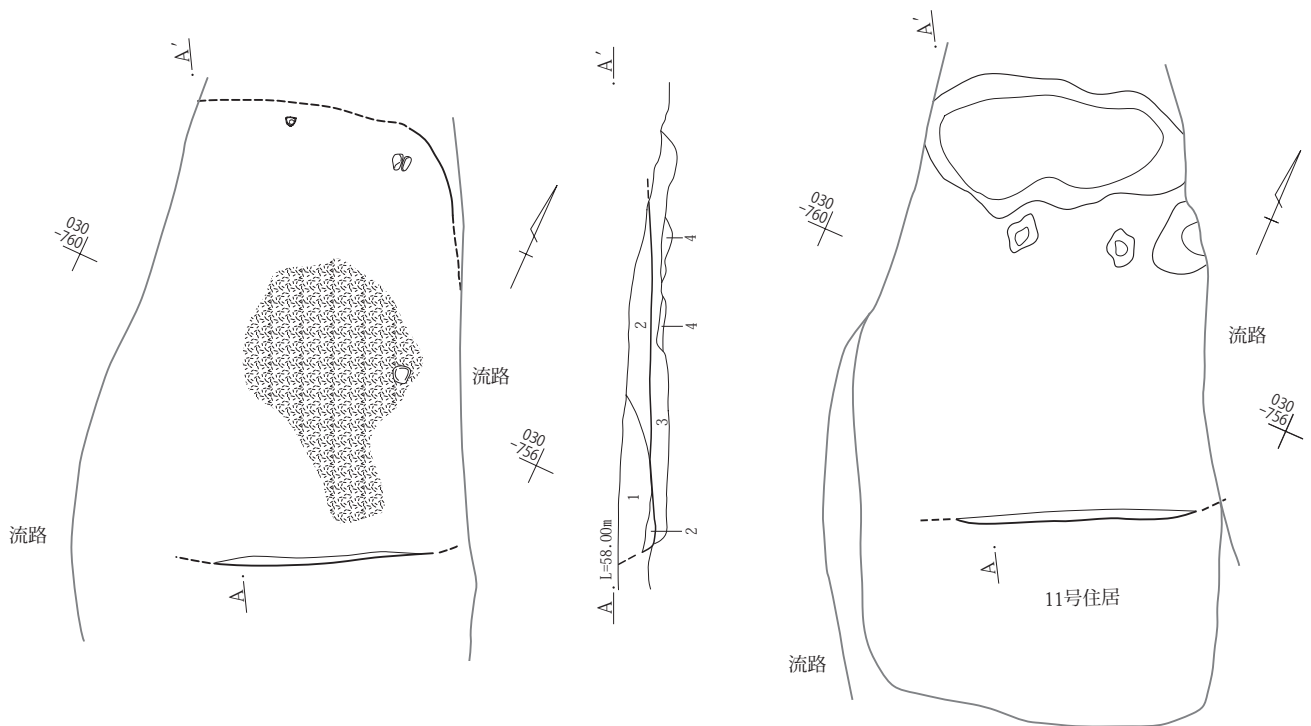
掘り方があり、土坑状・ピット状に窪む部分があったが、いずれも深度に乏しかった。

炉 住居中央から南東側にかけて灰の散布する部分があり、炉やカマドの存在した可能性がある。炉体状の窪みや枕石が想定できる礫およびカマド火床状の窪み等は確認できなかった。

その他 ピット・壁溝等は確認できない。

遺物 遺物はごく少なく図示できた土器は埋没土内の破片から復元できた小型甕1のみである。他には甕類を中心に重量で0.1kgの土師器を出土した。

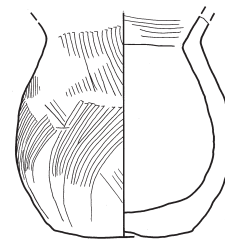
所見 11号住居に後出している。



13号住居

- 1 暗褐色土 流路跡の砂質土。FAを散見する。炭化物粒・焼土小ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 住居埋没土で粘性・しまりに富む。黄橙色のブロック状砂質土や径1～2mmの白色軽石をやや多く含む。
- 3 褐灰白色土 掘り方埋戻し土。白色軽石や黄橙色砂質土ブロックを含み、炭化物粒を散見する。
- 4 黄橙色土 掘り方下層埋戻し土の砂質土。ブロック状の褐灰色土を含むややしまり弱い層。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第164図 2区13号住居および出土遺物

14号住居(第165・166図 PL.30-⑤・⑥、75・76

遺物観察表421頁)

北隅は調査区域外で、南西側は河道に大きく壊されているが、東辺の両隅付近が把握でき、住居の大よその規模形状は復元できた。

位置 030～034-753～756グリッドにある。

規模形状 短軸長3.05m、推定長軸長4m前後の長方形を呈している。小型の住居である。

埋没土・壁 埋没土は単層である。壁高は最も深い西辺で39cmを測るが、他は20cm未満である。

方位 N-4° E。面積 残存6.75㎡

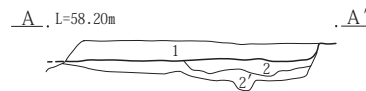
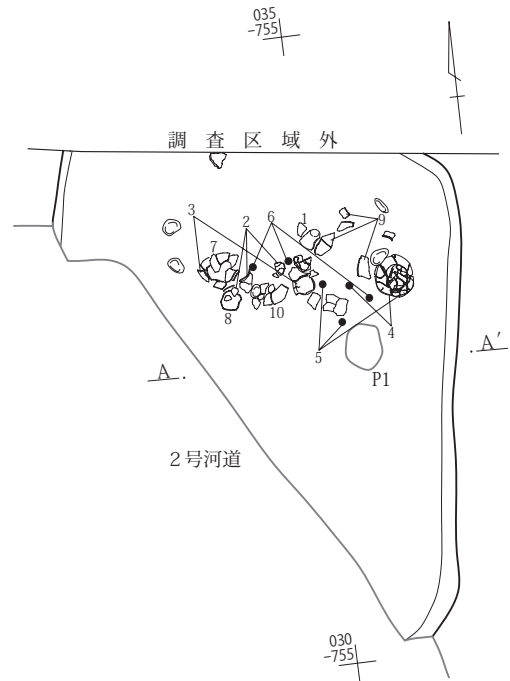
床面 ほぼ水平な床面である。全面に深さ20～25cmの掘り方がある。

ピット 掘り方調査時に東側でピット状の窪みを確認しP1とした。掘り方底面からの深さ10cm、床面からの深さ25cmを図る施設であるが、対になる施設がなく、配置や埋没土の状況からも柱穴とは考えにくい。

その他 炉・壁溝等は確認できない。

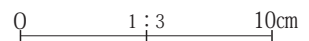
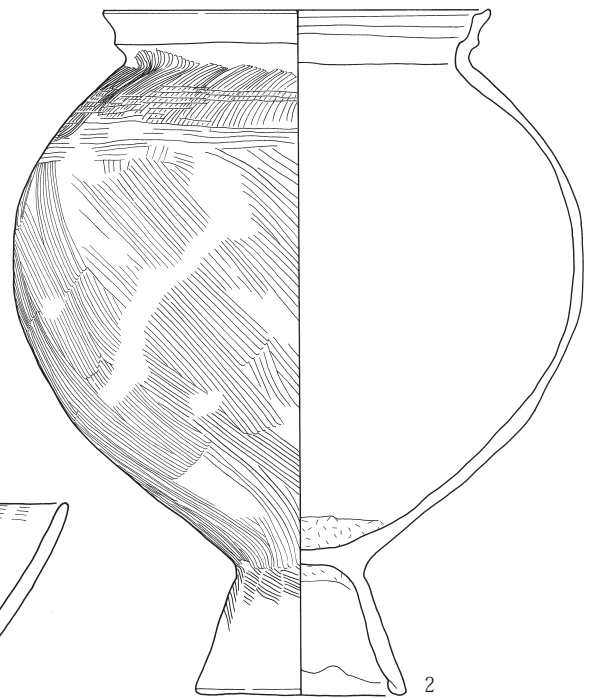
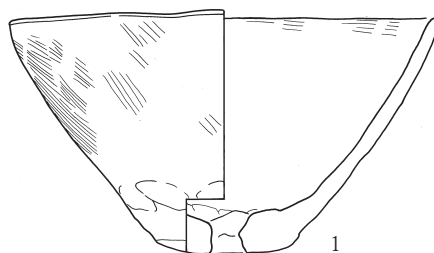
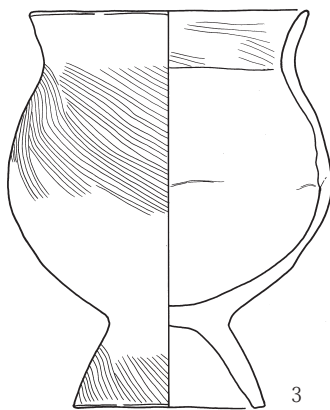
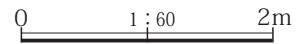
遺物 北寄りから川原石と共に甕類がまとまって出土し、この中にあった10点を図示した。床面直上の土器は台付甕5のみで他は床面より10cm以上高い位置の出土である。図示した以外の遺物も甕類がほとんどで、重量で0.7kgの土師器を出土している。

所見 出土遺物が極端に甕類に偏り、完形近くまで復元できた甕類が多かった。4世紀の土師器であるがS字状口縁の甕類より単口縁の甕類のほうが多く、本遺跡内では特異な組成の遺物だった。住居の深さに比して遺物の復元率が高く、完形に近い甕類を一括廃棄したような様相である。



14号住居

- 1 灰褐色土 As-C・炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量含む。2'は地山の砂質土をブロック状に少量含む。



第165図 2区14号住居および出土遺物(1)



第166图 2区14号住居出土遗物(2)

15号住居(第167図 PL. 50-⑦・⑧)

西半を河道に削られ、東側のみの残存である。

位置 026～029-751～754グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.15m、東西軸長2.1m以上の規模である。掘り方の状況から西辺はかなり削られたようで、正方形に近い住居となる可能性がある。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られるが、洪水砂を直接被覆したものではないようだ。壁高は30cm前後である。

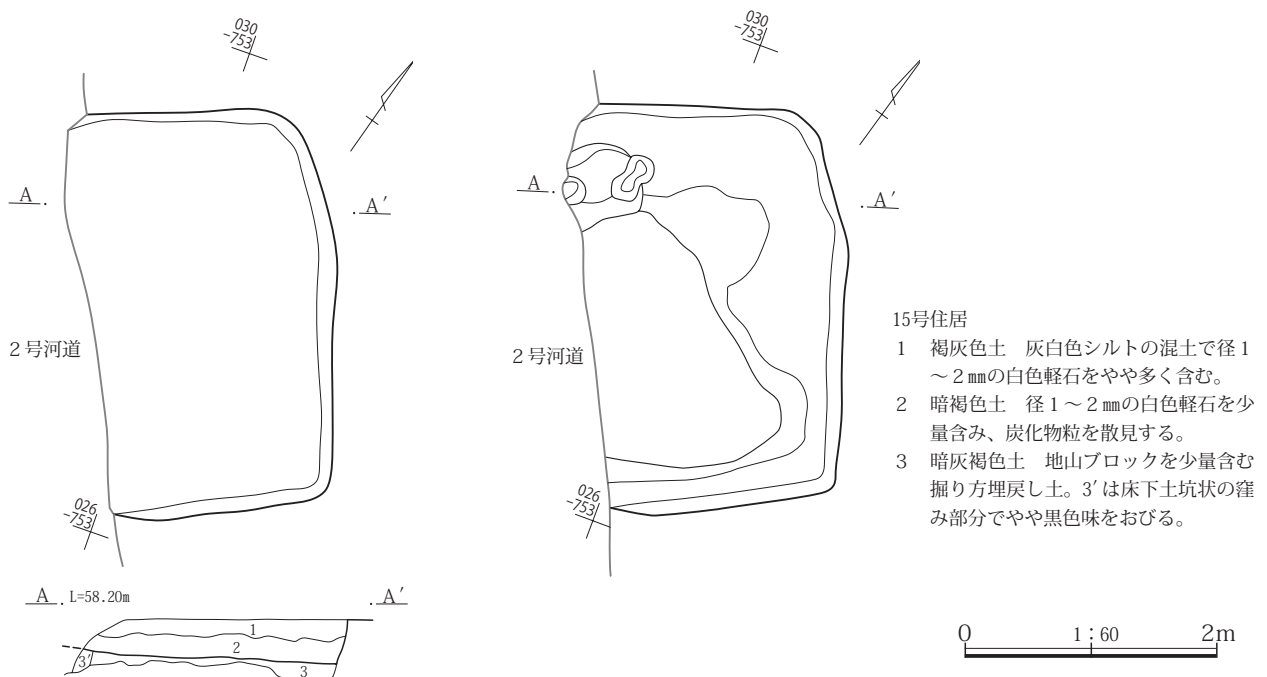
方位 N-66° E。面積 残存5.40㎡

床面 南側へ低く傾斜していて、北壁直下と7cmの比高差がある。掘り方がほぼ全体に見られ、壁際で深い部分が多い。

その他 炉・ピット・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 重量で0.6kgの土師器を出土したが、図示できる遺物はなかった。

所見 時期決定の根拠となる遺物を持たない。南側に隣接する5世紀の6号住居とほぼ接するように並んでいて、時期的にも近接する住居となる可能性がある。



第167図 2区15号住居

16号住居(第168～170図 PL. 31-①・②、76)

遺物観察表421・422頁)

中世館堀の1号溝などによる削平を広範囲に受けているが、規模形状は把握できた。

位置 017～023-742～748グリッドにある。

規模形状 長軸長南北方向で5.4m、短軸長東西方向で5.1mの正方形に近い形状を呈している。

埋没土・壁 南壁下など一部の壁際で部分的な堆積後、水平に近い堆積が見られる。壁高は東辺を除いて30cm以上あり、最も深い北辺で38cmを測る。

方位 N-21° W。面積 復元27.30㎡

床面 凹凸の多い床面で部分的に灰等の散布がある。ほ

ぼ全域に掘り方が見られ、壁直下と住居中央付近を除いて深い部分がある。

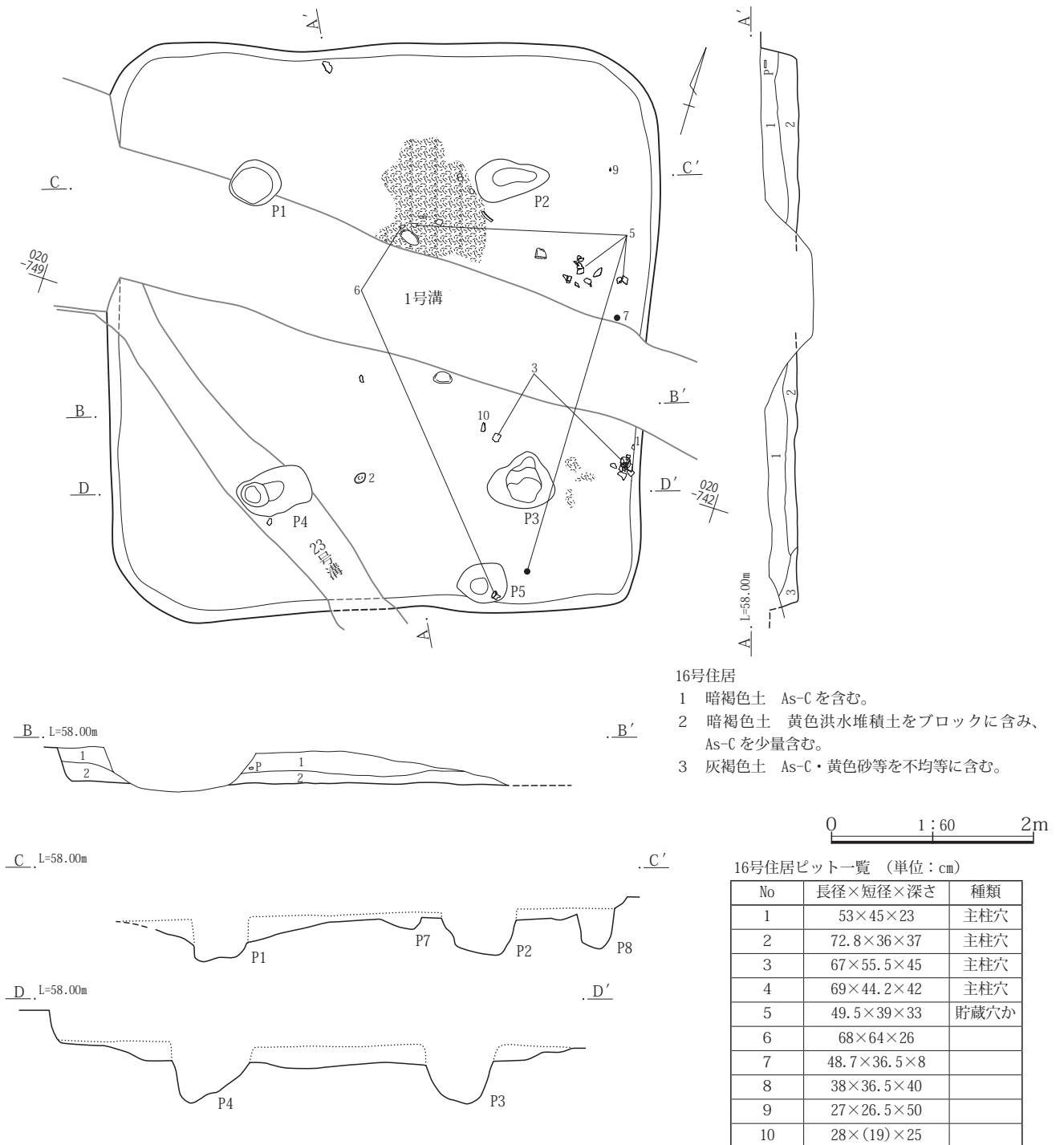
ピット 床面レベルでは不明瞭であったが、掘り方調査時に4支柱穴(P1～4)と入口脇に相当する位置から貯蔵穴と推定されるP5を確認した。支柱穴は住居軸よりやや西側へ傾いた配置にある。掘り方調査時にも5基のピット(P6～10)を確認しているが性格は不明である。P8は北側支柱穴柱筋上の東壁際にある。P10は壁外にあり、本住居に伴うか不明である。

炉 明確な炉の痕跡は確認できないが、P2の西側から南側にかけて広がる灰・炭化物粒の分布範囲から炉が想定できる。扁平な石が炉想定部分の南寄りにあり枕石の

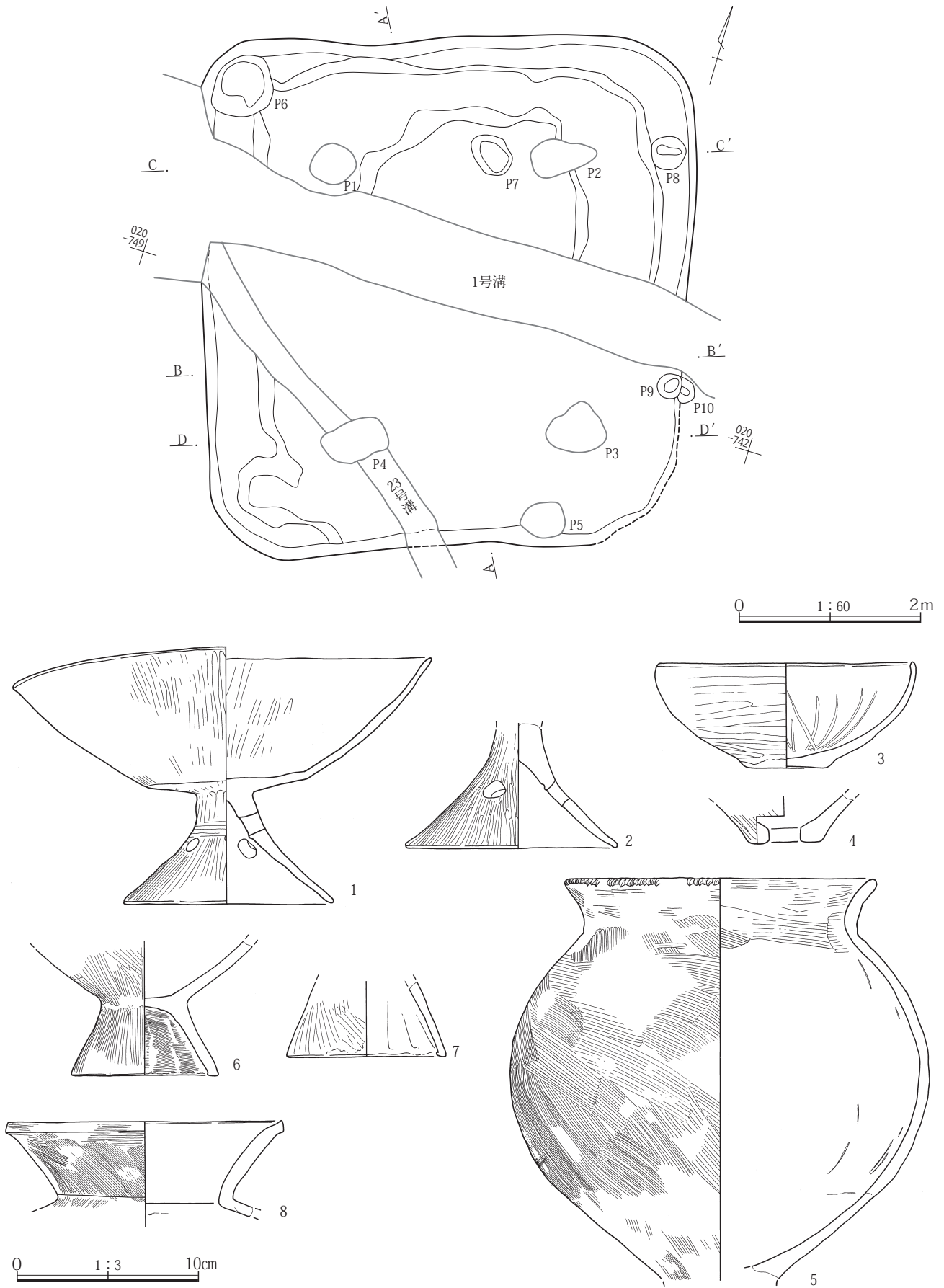
可能性があるが、長径20cmに満たない小さな礫である。
その他 4号住居に前出している。壁溝は確認できない。
遺物 広範囲に散乱するようにして多量の遺物が出土し、土師器8点と石製品2点を図示した。高杯1は床上8cmの高さだが東壁際の出土である。炉が想定される灰分布域の床直上から台付甕5・6が出土しているがどちらも南壁際の破片と接合し、特に5は広範囲に散乱した

状態だった。石製品では剣型石製品9が北西隅付近の床上8cm、砥石10が中央床直上で出土した。図示した以外に重量で2.8kgの土師器を出土している。

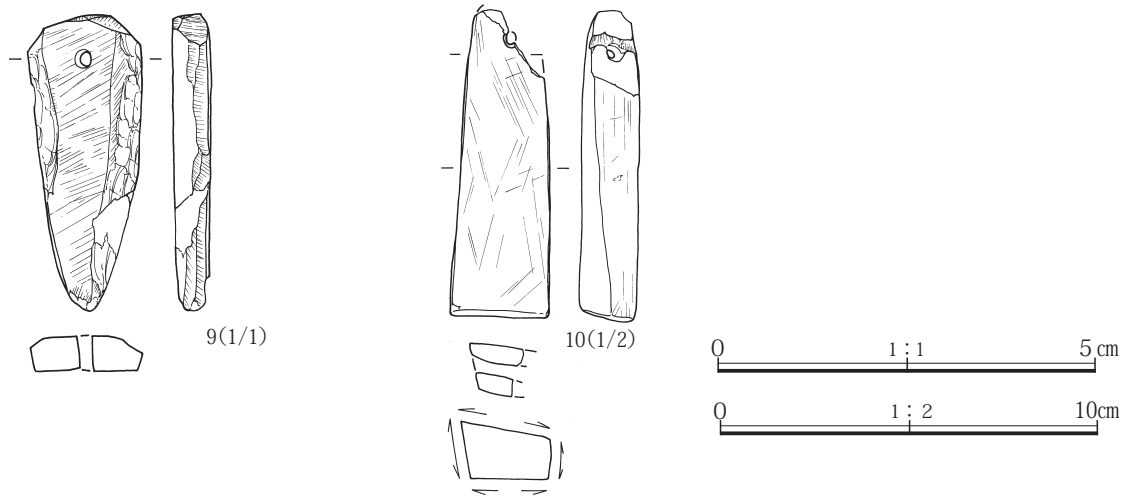
所見 台付甕を伴う4世紀の住居である。剣型石製品は4号住居掘り方内から出土例がある。出土位置は本住居と重複する部分であり、本住居遺物が4号住居に混入した可能性がある。



第168図 2区16号住居



第169図 2区16号住居掘り方および出土遺物(1)



第170図 2区16号住居出土遺物(2)

17号住居(第171図 PL. 31-③・④ 遺物観察表422頁)

北東側を河道に大きく削られ全容は把握できない。炭化物粒の散布や遺物の出土があり調査時の分類に沿って住居としたが形状は土坑に近い。住居掘り方の一部の可能性はある。

位置 018～020-754～759グリッドにある。

規模形状 長軸長4.5m以上、短軸長1.6mの東西に長い長方形を呈している。

埋没土・壁 埋没土は単層だが住居埋没土であるか掘り方埋戻し土か判別できなかった。壁高は最も深い西辺で26cmを測る。

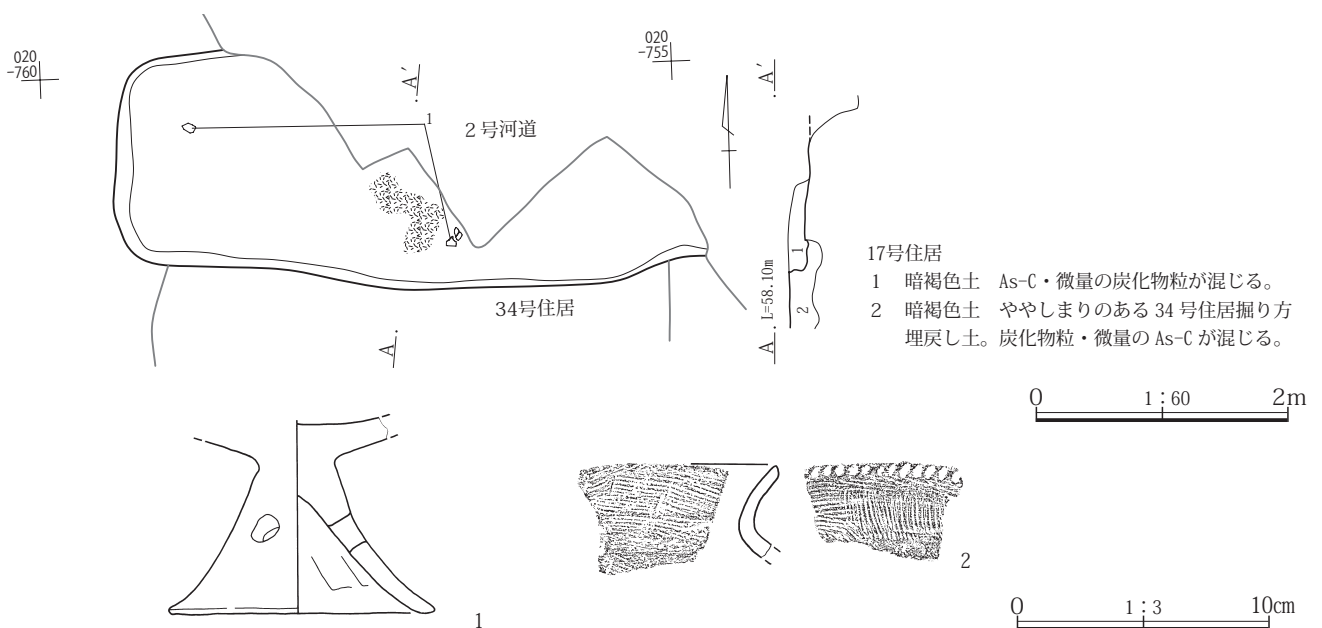
方位 N-88° W。面積 残存4.54㎡

床面 細かな凹凸があるが比較的平坦な床面である。

その他 34号住居に後出する。炉・壁溝・ピット等は確認できない。

遺物 狭い範囲だが出土遺物は比較的多く、2点を図示した。器台1は遺構中央床ほぼ直上の破片と西隅床上20cmの破片が接合した。2は埋没土内出土の破片である。図示した以外に甕類を主体に重量で0.8kgの土師器を出土している。

所見 本住居に確実に伴う土器がないが、出土遺物は4世紀代の土器である。前出する34号住居と軸方向が並び、近接する時期の遺構と思われる。



第171図 2区17号住居および出土遺物

18号住居(第172・173図 PL. 31-⑤・⑥、76

遺物観察表422頁)

24号溝や中世井戸の攪乱を受けているが、全容は把握できた。

位置 022～029-734～740グリッドにある。

規模形状 長軸長5.7m、短軸長4.4mの南北に長い長方形を呈している。北辺が南辺より30cm前後長い逆台形状に歪みそうである。北辺が大きく湾曲し、南西隅以外は丸みが強く、整美さに欠ける。

埋没土・壁 一部壁際から埋没した後、水平に近い堆積が見られる。本住居では類例の多い堆積状態である。壁高は最も深い東・南辺で20cmを測る。

方位 N-33° W。面積 復元24.52㎡

床面 西側がやや高いが、それ以外では3cm前後の凹凸のあるほぼ水平な床面である。全体に深さ10cm前後の掘り方があり、北側で30cm近い部分がある。

壁溝 掘り方調査時に確認した南西壁直下の溝状の窪み

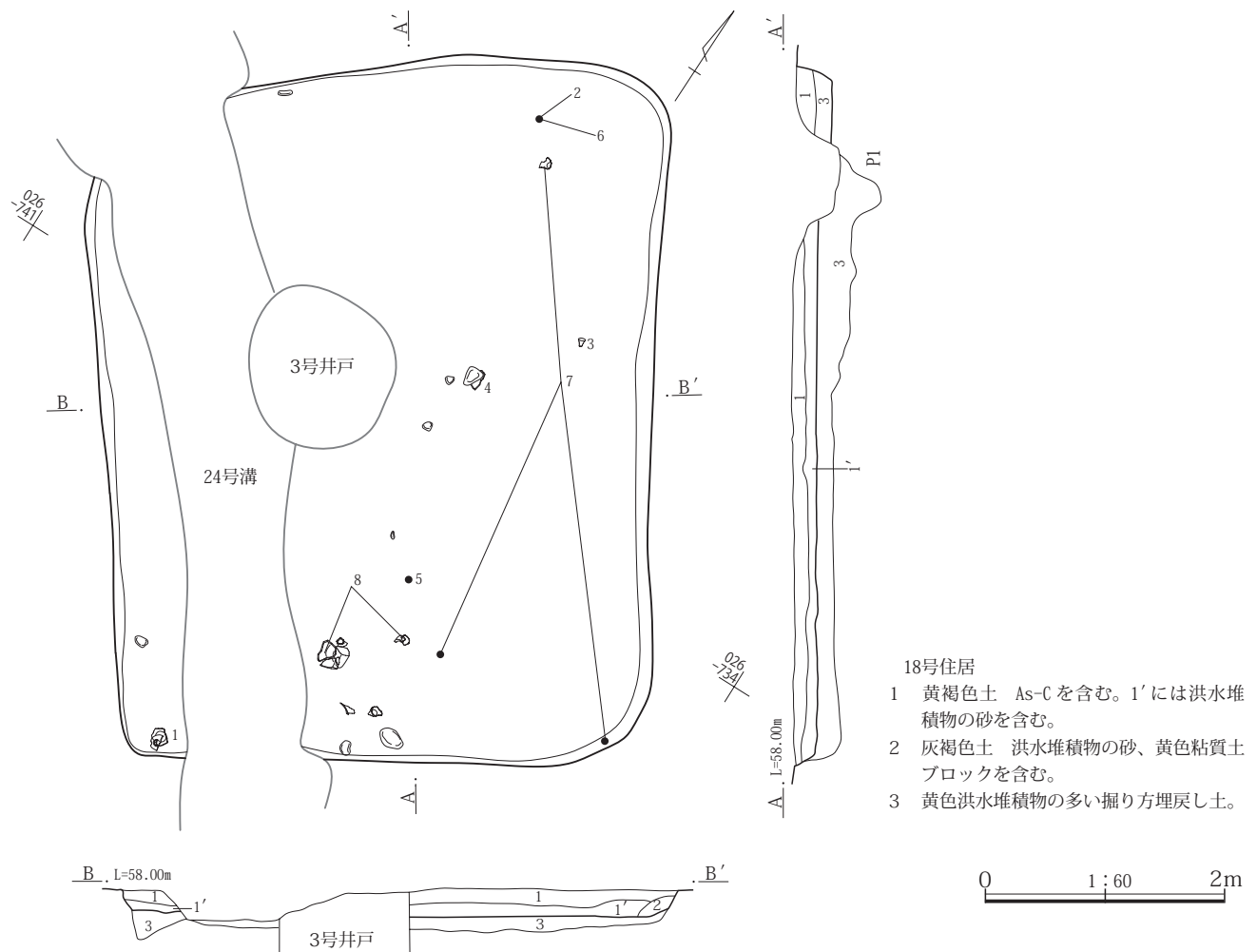
が壁溝の痕跡の可能性がある。ただしこの部分の埋没土は掘り方埋戻し土と区別がつかず、幅も下端で20cm前後の部分ほとんどで、壁溝としては太すぎる。

ピット 床面上では確認できなかった。掘り方調査時にピット状の窪みが10基見つかっているが、主柱穴配置を構成するような配置にはない。P1・P2が特に深く、柱穴的である。

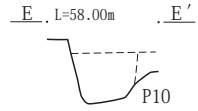
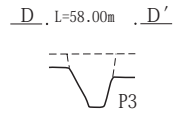
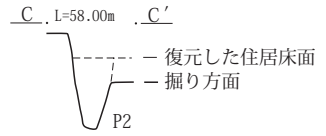
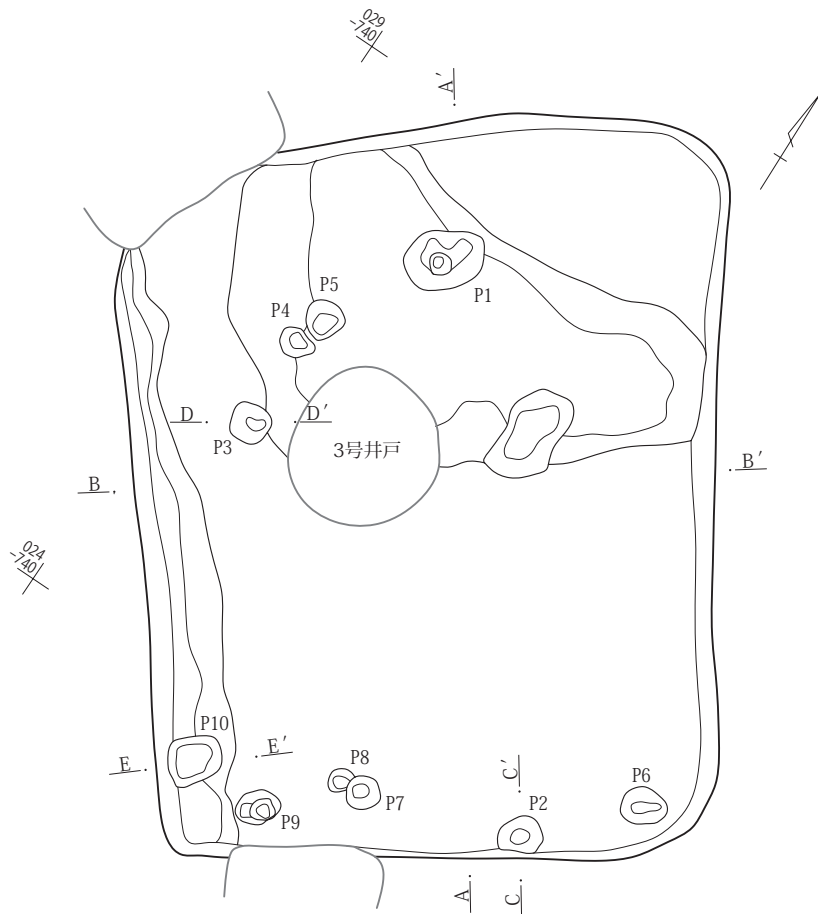
その他 43・55号住居と重複する。炉は確認できない。

遺物 住居全体に散在するようにしてやや多量の遺物が出土し、土師器9点を図示した。高杯1と甕9が南西隅壁直下で重なるようにして出土している。反対側にあたる北東隅付近の埴2・台付甕6と東寄りの器台3は床直上の出土である。炉が想定される住居中央付近の遺物はなく、鉢4は掘り方調査時の出土で床下7cmの深さであった。図示した以外に重量で2.3kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀の住居である。

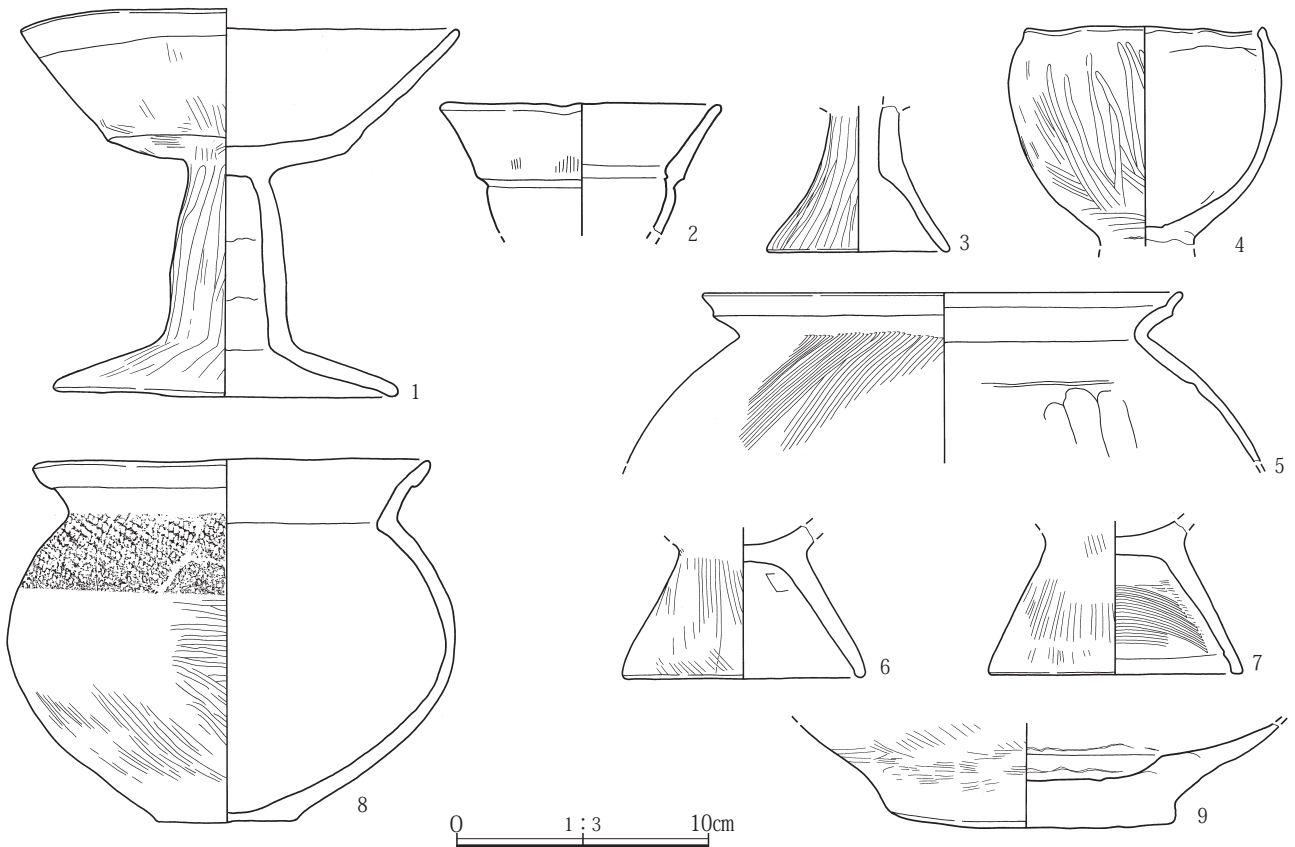
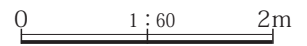


第172図 2区18号住居



18号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	63.5×46.5×70	
2	36×29.5×57	壁柱穴か
3	31×30.5×42	
4	26×22×40	
5	30.5×30×40	
6	37.5×29.5×31	
7	27×26×48	
8	21.5×18×38	
9	36×27×45	
10	44×36×44	壁柱穴か



第173図 2区18号住居掘り方および出土遺物

19号住居(第174～176図 PL. 31-⑦・⑧、76・77

遺物観察表422・423頁)

噴砂の痕跡を明瞭に留める住居である。

位置 014～019-725～730グリッドにある。

規模形状 長軸長南北方向で5.5m、短軸長東西方向で5.3mの正方形に近い。各辺は直線的で比較的整美だが、南辺東側が北側へ屈曲するように歪んでいる。

埋没土・壁 壁際からの埋没と全体的に水平に近い堆積の重なる埋没状態が見られる。壁高は各辺とも25cm以上あり、最も深い西辺では36cmを測る。

方位 N-0°。面積 27.22㎡

床面 緩やかな凹凸があり5cm前後の比高差があるが、全体では水平に近い床面である。深さ10cm前後で比較的平坦な掘り方が全体にある。

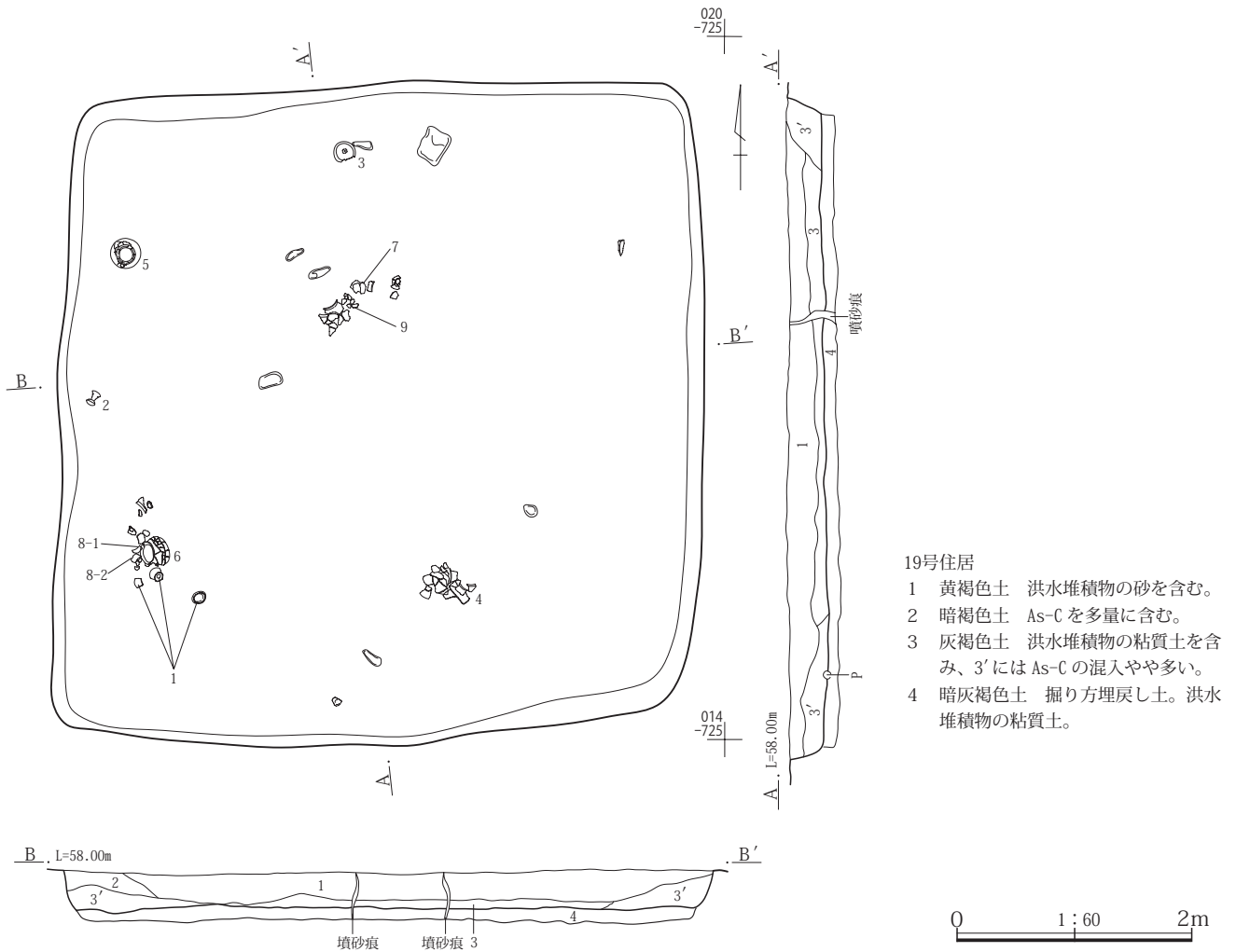
炉 床面で被熱痕を確認できないが、住居中央北寄りに

台付甕7・9が出土しており、付近に炉があったと想定できる。北西側に隣接した床面には長さ20cm未満の小型だが、枕石に使用できそうな棒状の礫が2点見られる。

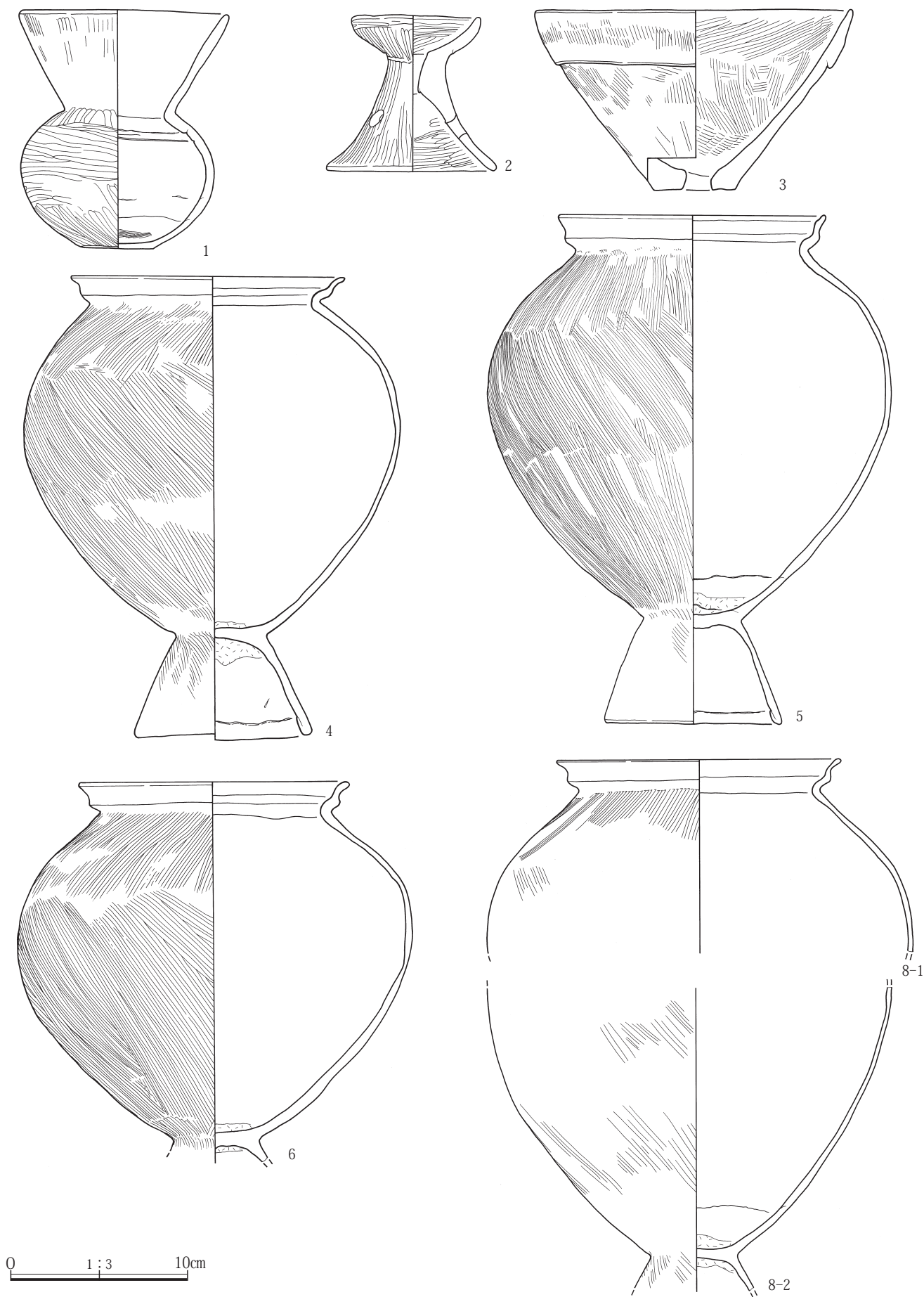
その他 37・45号住居に後出する。壁溝・ピット等は確認できない。

遺物 住居ほぼ全域から遺物が出土し、土師器を9点図示した。台付甕8は同一個体だが完形近くまで復元できなかった個体を枝番号付けて一括した。器台2が床面より13cm高い位置にあったが、他は床直上の出土である。図示した以外に重量で3.5kgの土師器を出土している。

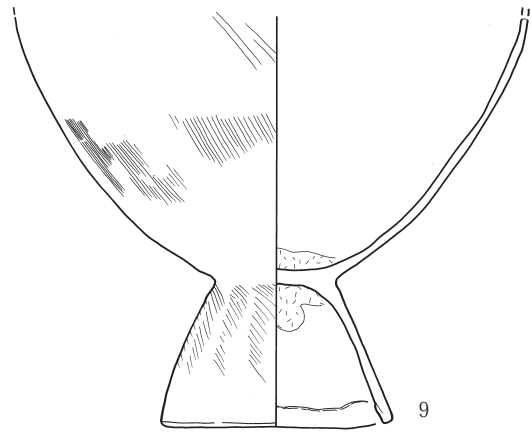
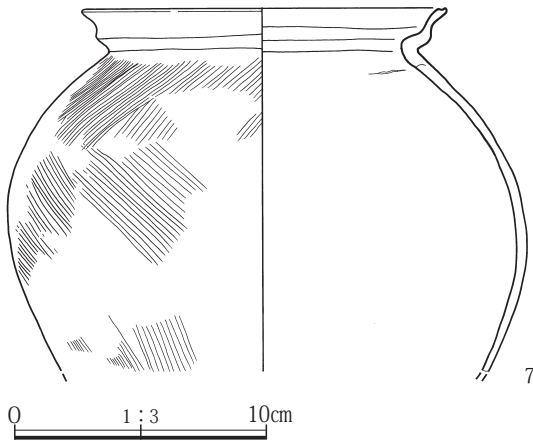
所見 遺物は完形近くまで復元できるものが多かった。また、床直上で潰れるようにして出土し、離れた位置の破片が接合する例もほとんどなく、住居廃絶時の遺物の様相を留めているようである。台付甕を伴う4世紀代の住居である。



第174図 2区19号住居



第175图 2区19号住居出土遺物(1)



第176図 2区19号住居出土遺物(2)

20号住居(第177・178図 PL. 32-①・②、77・78
遺物観察表423頁)

2区東寄りの住居密集地点にあり多数の住居と重複しているが、本住居南側では集落は途切れている。

位置 011～016-713～717グリッドにある。

規模形状 長軸長5.1m、北側短軸長3.8mの長方形を呈し、北辺が南辺より80cm長い逆台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 一部壁際から埋没した後、水平に近い堆積をする本遺跡で類例の多い堆積状態である。壁高は各辺

30cm前後で、最も深い西辺で36cmを測る部分がある。

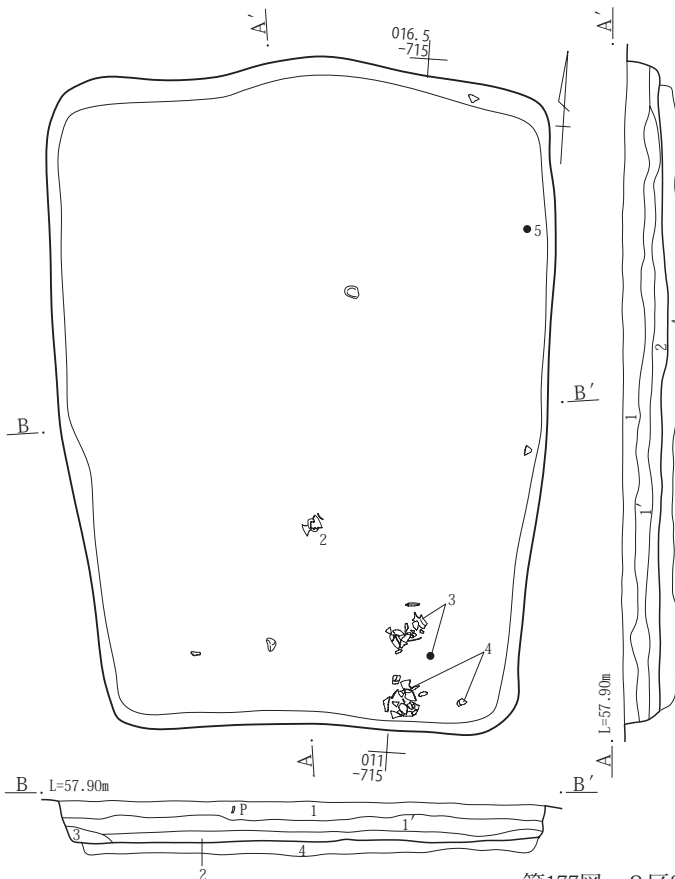
方位 N-7° W。面積 17.63㎡

床面 細かな凹凸の多い床面である。ほぼ全体に深さ12cm前後の掘り方がある。

その他 1・3号住居に前出し、30・42号住居等に後出する。炉・ピット・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 比較的多数の遺物を出土したが図示できたのは土師器5点だった。床直上出土の遺物はなく、完形近くに復元できた台付甕2～4は床面より20cm前後高い位置の遺物である。図示した以外に重量で3.5kgの土師器を出土している。

所見 確実に本住居に伴う遺物はないが、図示した土器は4世紀代の土師器である。

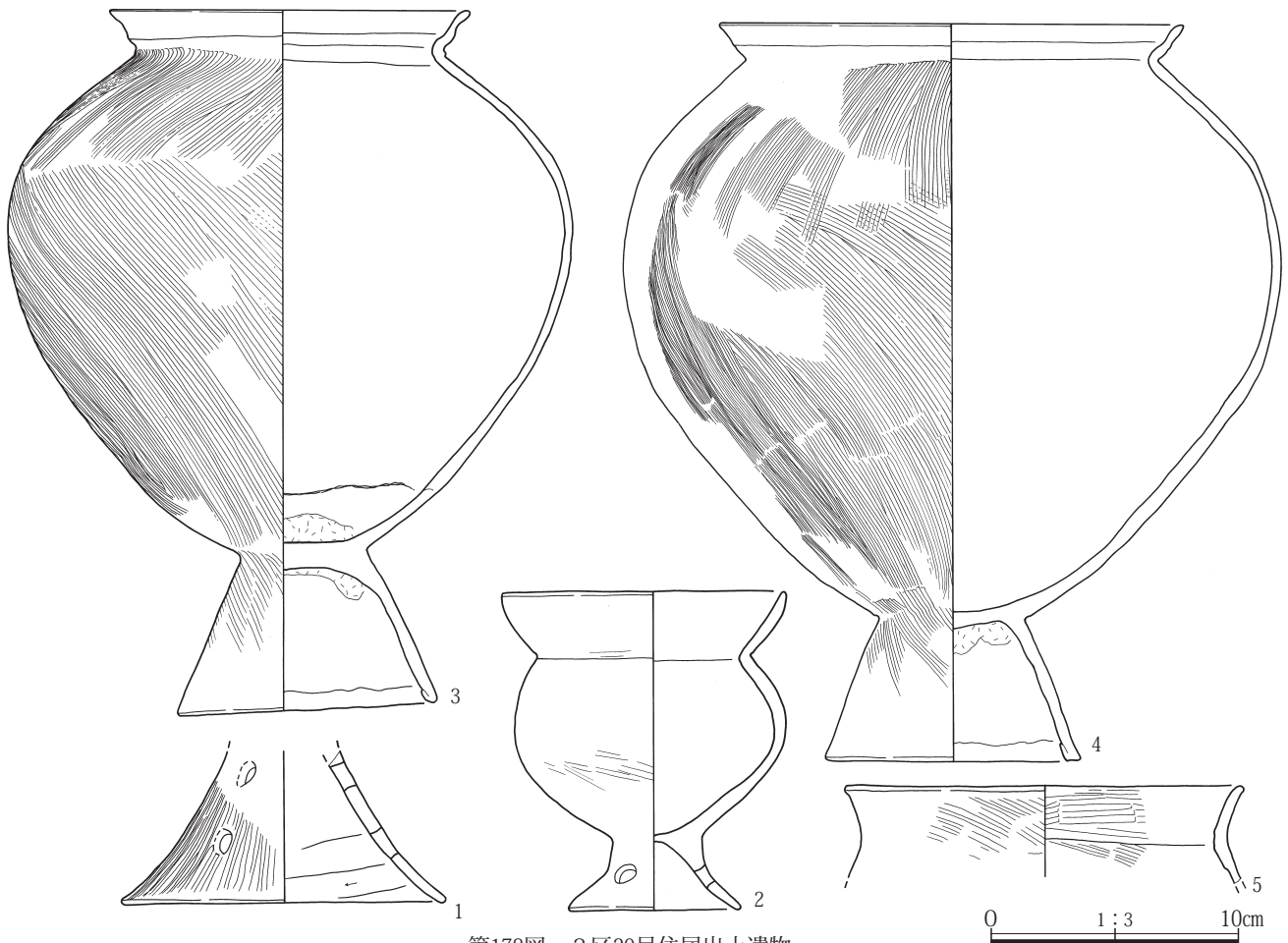


20号住居

- 1 暗褐色土 As-Cを含む洪水堆積土の多い層で、1'ではAs-C少ない。
- 2 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂を含む。
- 3 灰褐色土 洪水堆積土主体の砂質土。
- 4 灰褐色土 掘り方埋戻し土。洪水堆積土で黄色土を含む。

0 1:60 2m

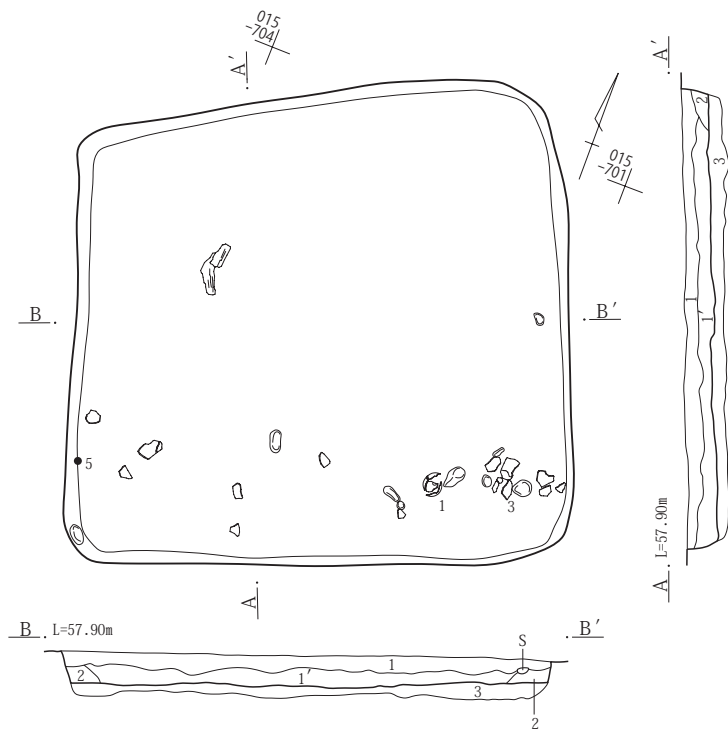
第177図 2区20号住居



第178図 2区20号住居出土遺物

21号住居(第179・180図 PL. 32-③・④、78
遺物観察表423頁)

2区東隅は住居が近接しながらほとんど重複なく並ぶ一画であり、本住居はこの一画の南西隅にある。



21号住居

- 1 灰褐色土 As-Cを含む。1'は洪水堆積土の混入多く、砂質になる。
- 2 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂を含む。
- 3 黄褐色土 掘り方埋戻し土で洪水堆積土の黄色砂粒を含む。

第179図 2区21号住居

位置 010～015-700～705グリッドにある。

規模形状 東西長軸長4.0m、南北短軸長3.8mの方形で、東辺が西辺より40cm長い台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 壁際から埋没した後、水平に近い堆積を見せる20号住居等と同じ2区に多数見られる堆積状態である。壁高は20cm前後で最も深い西辺で26cmを測る。

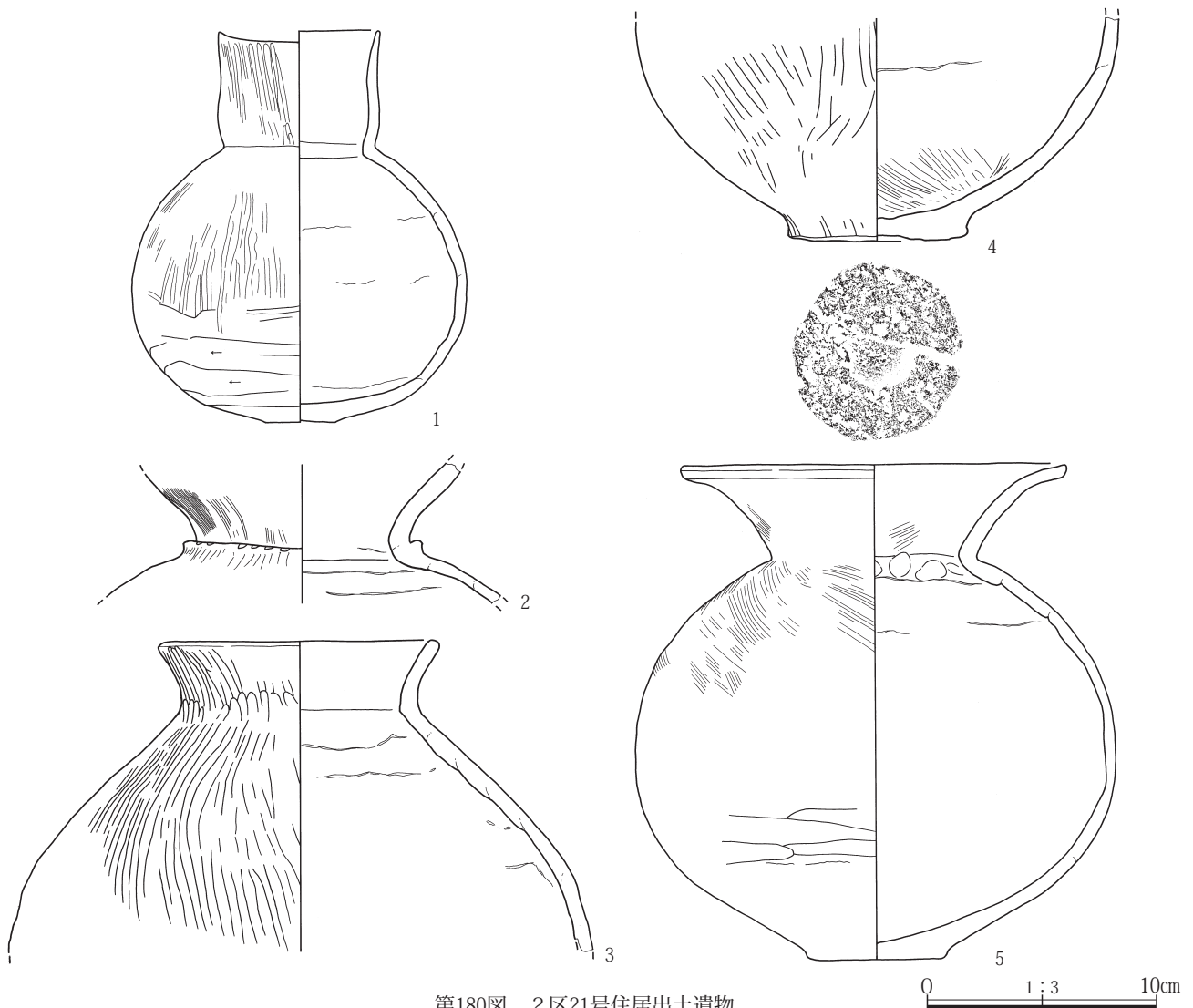
方位 N-68° E。 **面積** 13.15㎡

床面 凹凸のある床で南側へ低くやや傾斜し、北壁下と5cm前後の比高差がある。全体に深さ5～15cmの掘り方があり、壁際で深くなる傾向がある。

その他 炭化材は床面より8cm前後高い位置にあった。住居間の重複のない遺構である。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 住居南寄り出土する遺物が多く、土師器5点を図示した。埴1と壺5が床直上の出土である。図示した以外に壺甕等大型土器破片を中心に重量で1.6kgの土師器を出土している。

所見 図示できた遺物は壺類に偏ったが破片では甕類の出土のある4世紀代の住居である。



第180図 2区21号住居出土遺物

22号住居(第181図 PL. 32-⑤・⑥、78

遺物観察表423・424頁)

2区東隅の集落南端にある。南側の集落は途切れるが周辺は土器散布地で確認できなかった住居がまだ存在する可能性がある。

位置 009～015-694～699グリッドにある。

規模形状 長軸長5.2m、短軸長3.8mの長方形を呈している。西隅以外の各隅は丸みが強い。北東辺が南西辺より50cm短い台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 壁際から埋没した後、水平に近い堆積を見せる2区に多数見られる堆積状態である。壁高は18cm前後で最も深い南東辺で23cmを測る。

方位 N-37° W。 面積 17.68㎡

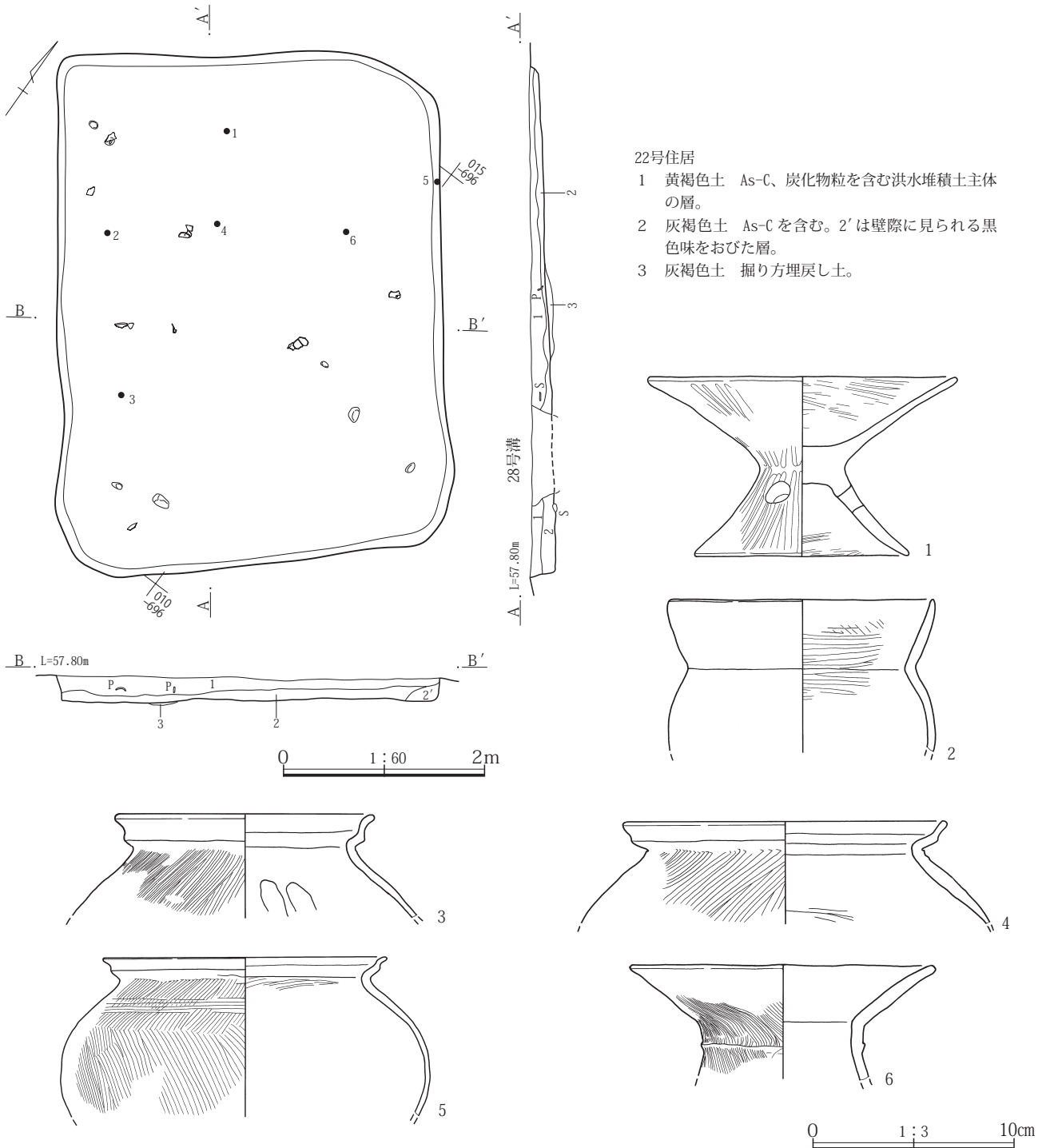
床面 凹凸があり地山傾斜とは逆に北側が高い床で南壁際と8cmの比高差がある。住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度の小規模な掘り方が部分的に見られる。

その他 28号溝に前出する。炉・ピット・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 住居全体に散在するようにして遺物が出土し、土

師器6点を図示した。完形近くまで復元できたのは高杯1のみで北寄り床直上の遺物である。台付甕5は北東壁際の出土でこれらが本住居に確実に伴う遺物である。台付甕4は中央付近の床直上遺物であるが西側に隣接する21号住居出土破片と接合するなど広い地域に破片が散った土器である。図示した以外に重量で1.3kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀の住居である。



23号住居(第182図 PL. 32-⑦ 遺物観察表424頁)

位置 015～021-694～701グリッドにある。

規模形状 長軸長5.5m、短軸長4.2mの長方形で、南辺が北辺より40cm、東辺が西辺より20cm長い台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 部分的に壁際から埋没し、後は単層の堆積である。各辺とも壁高は12cm前後を測る。

方位 N-62° E。面積 22.68㎡

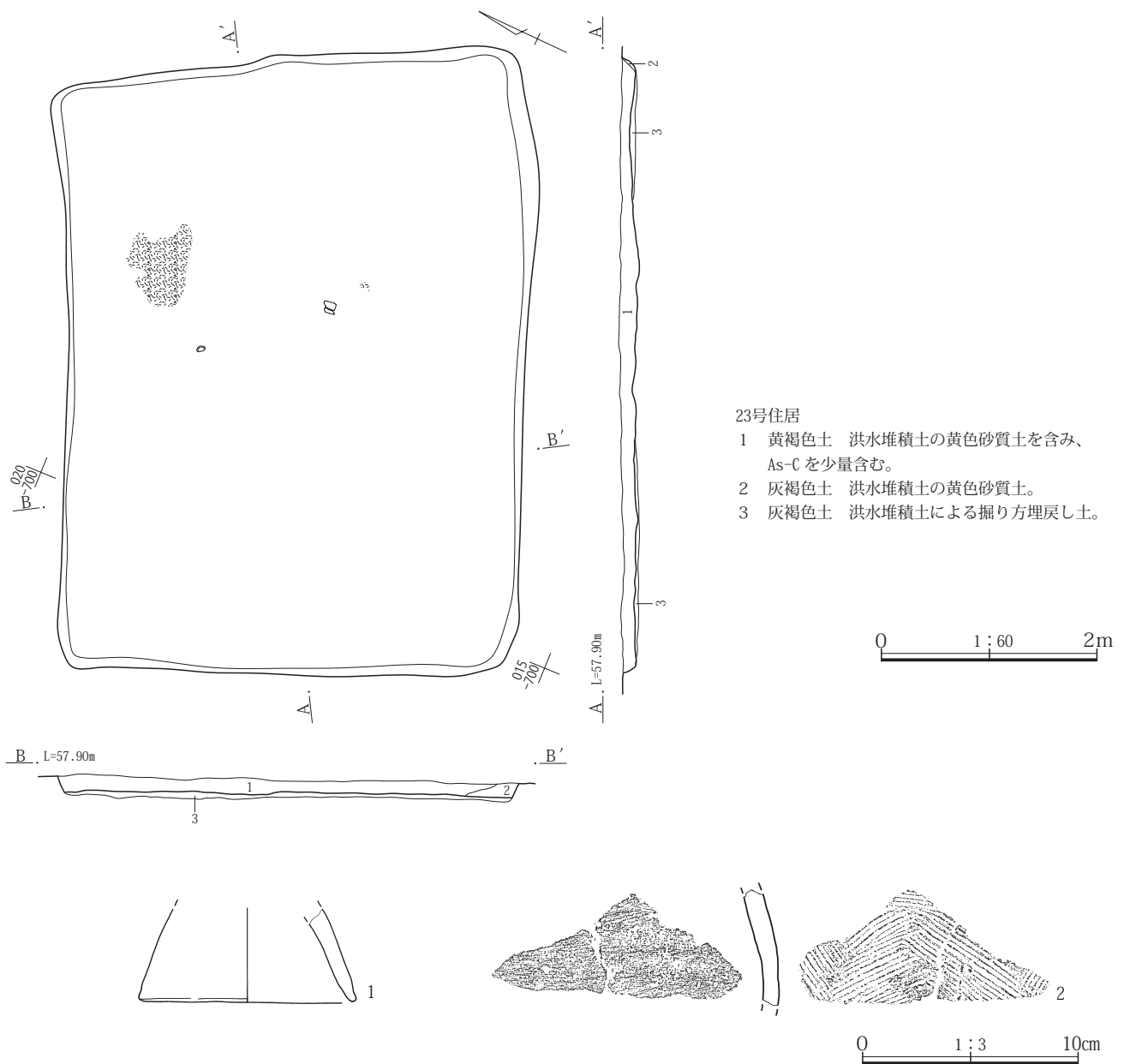
床面 凹凸の多い床面で南側へ低く緩やかに傾斜し、北壁下と5cm前後の比高差がある。北東隅付近に炭化物粒

等の散布が見られるが、炉とは異なるようだ。粗掘り時の窪みを埋め戻す程度の掘り方が部分的に見られる。

その他 炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物は少なく復元できた土器も少なかった。図示できたのは埋没土出土の2点で1は台付甕台部破片、2は弥生土器胴部破片である。図示した以外に重量で0.9kgの土師器を出土している。

所見 確実に本住居に伴う遺物を持たないが出土土器は4世紀代の土師器を中心としている。北側に隣接する24・27号住居は同時存在が不可能な近接した位置にある。



第182図 2区23号住居および出土遺物

24号住居(第183・184図 PL. 32-⑧ 遺物観察表424頁)

4区東隅にあり住居東側は調査区域外となり全容を把握できていない。2棟の住居となる可能性があり本文中では前出住居が想定される東側部分をB号住居と呼称する。

位置 020～028-693～700グリッドにある。

規模形状 長軸長6.1m以上、短軸長西側4.8m・東側5.4mの長方形を呈している。北辺が途中で段差を生じるように歪み、南辺は内湾気味に弱く屈曲している。そのため東側へ広がる台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 埋没土は単層である。壁高は北辺や南辺で10cm、西辺で8cmを測り、B号住居では北壁15cm、南壁20cm前後になる。

方位 N-60° E。 B号住居N-64° E。

面積 残存28.29㎡

床面 上面床は焼土の散布を基準とした凹凸のある不整な床面で南側は中央付近よりわずかに高くなっている。下面床は上面床より6cm前後下位にある。全体に深い掘

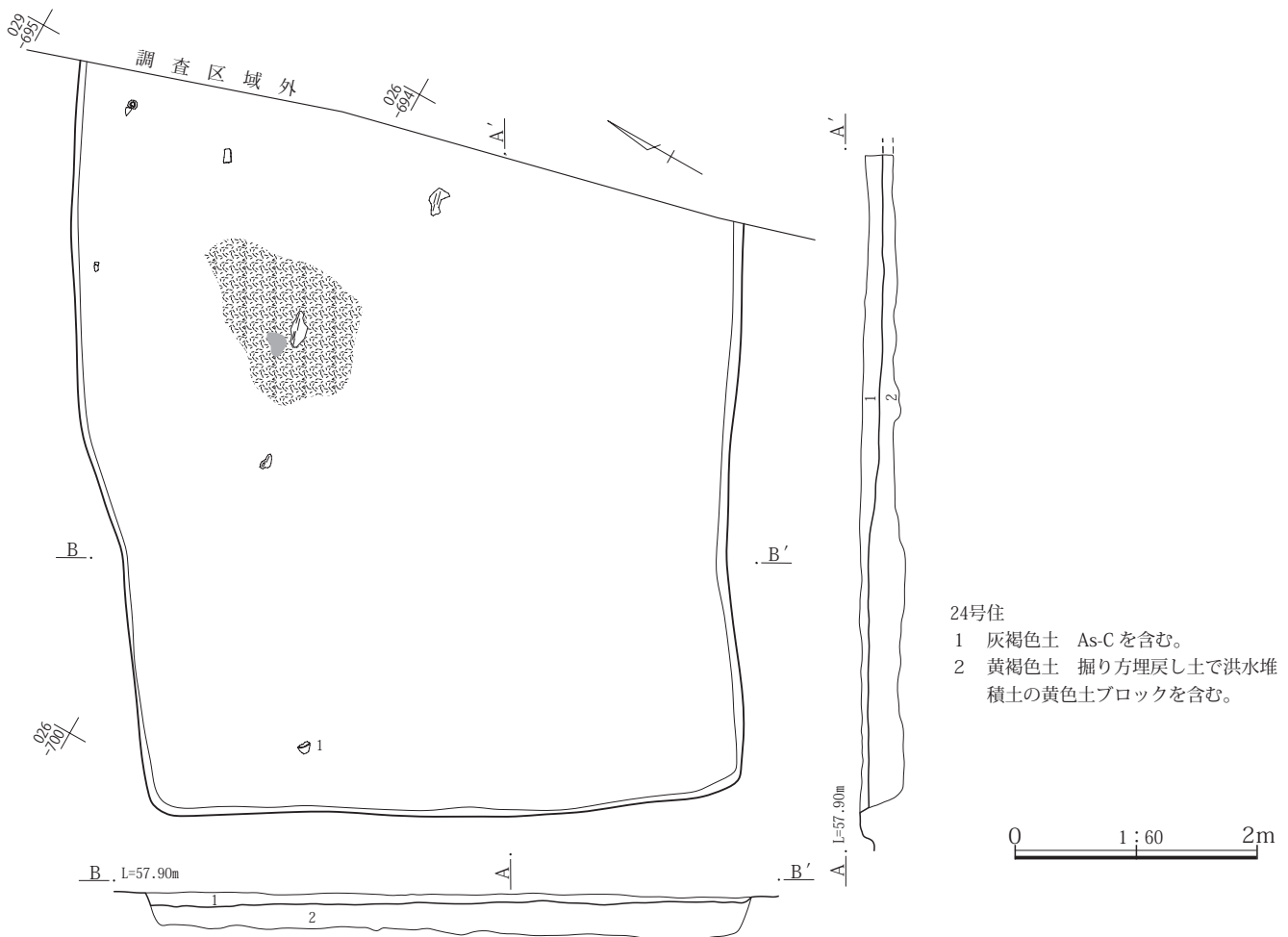
り方があり、床面からの深さは東側で10cm前後、床面の高い西側で30cm前後の深度がある。

ピット P1・P2は掘り方調査時に確認したピットだがB号住居を想定すれば主柱穴配置上にあたる。住居床面からの深さは30cm前後となる。南壁際にあるP3・4は径は小さいがP1・2以上の深度がある。

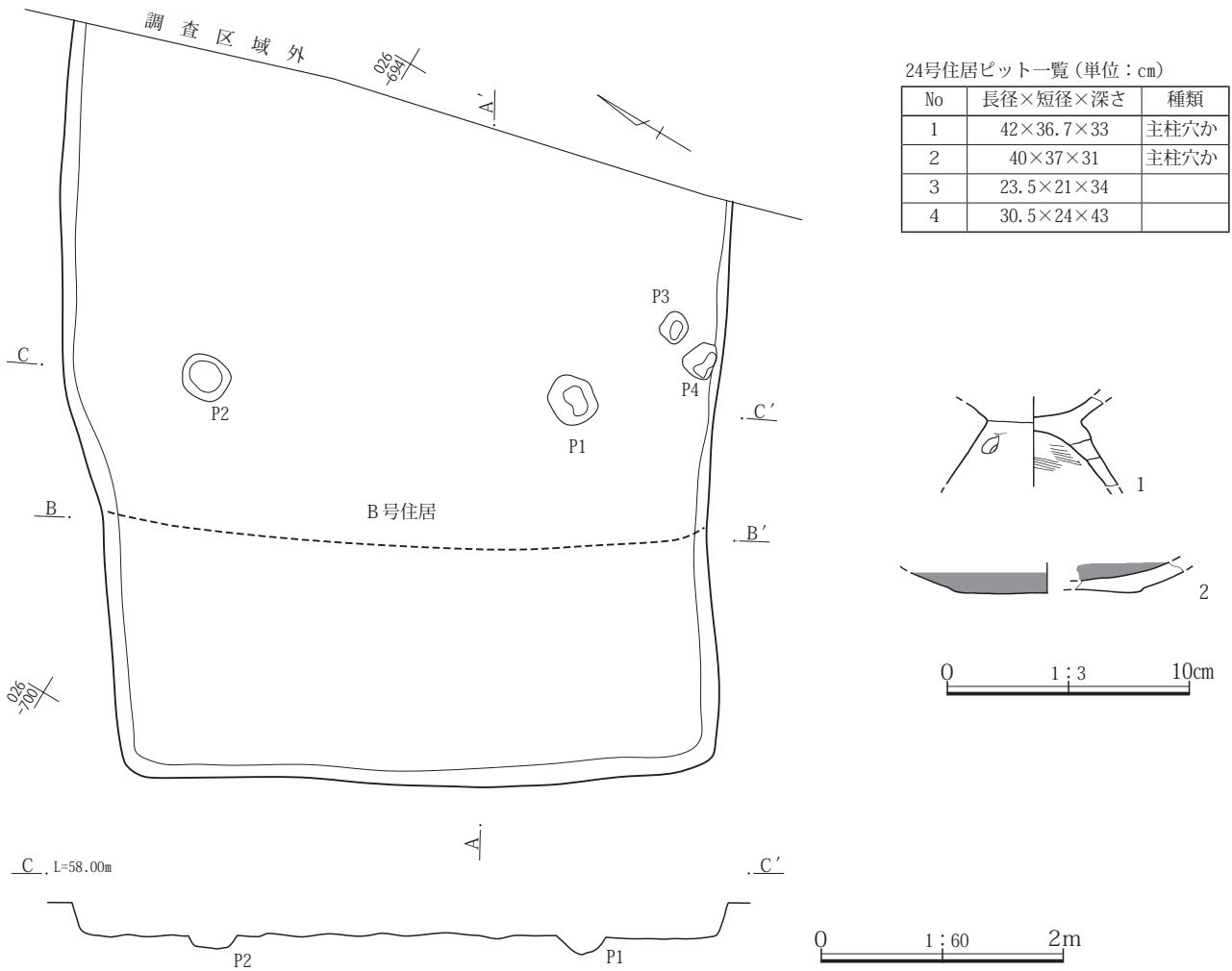
その他 住居中央北寄りに広範囲に焼土や炭化物粒の散布が見られる。床面より若干盛り上がっていて配置からも炉とは考えにくい。壁溝は確認できない。

遺物 出土遺物は少なく図示できたのは土師器2点である。器台1は西側住居床上4cmの高さの出土で、壺2は掘り方内一括処理の遺物で出土地点不明である。図示した以外に重量で0.6kgの土師器を出土している。

所見 埋没土からは確認できなかったが、床面の段差・南北両辺の屈曲およびP1・2の配置から、もう1棟の建物が存在する可能性があり、想定されるB号住居の輪郭を掘り方図に破線で表示した。この場合、P1・2は内側B号住居主柱穴となる可能性が強い。



第183図 2区24号住居



第184図 2区24号住居掘り方および出土遺物

25号住居(第185図 PL. 33-①、78 遺物観察表424頁)

2区中央で確認できた集落の最も南側に位置している。南側を河道に削られ全容を把握できていない。

位置 009～014-731～737グリッドにある。

規模形状 長軸長5.1m、短軸長3.1m以上で残存する北辺両隅は丸みが少なく、各辺も直線的で整いな長方形を呈している。図示した河道の南側は本住居床面より高く、住居は河道の南側まで達していない。短軸長は3.6m以内となる。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られ人為的な埋戻しの痕跡はない。壁は垂直に近い立ち上がりの良好な壁で、高さは全面30cm以上あり、最も深い東辺で40cmを測る。

方位 N-63° W。 **面積** 残存15.02㎡

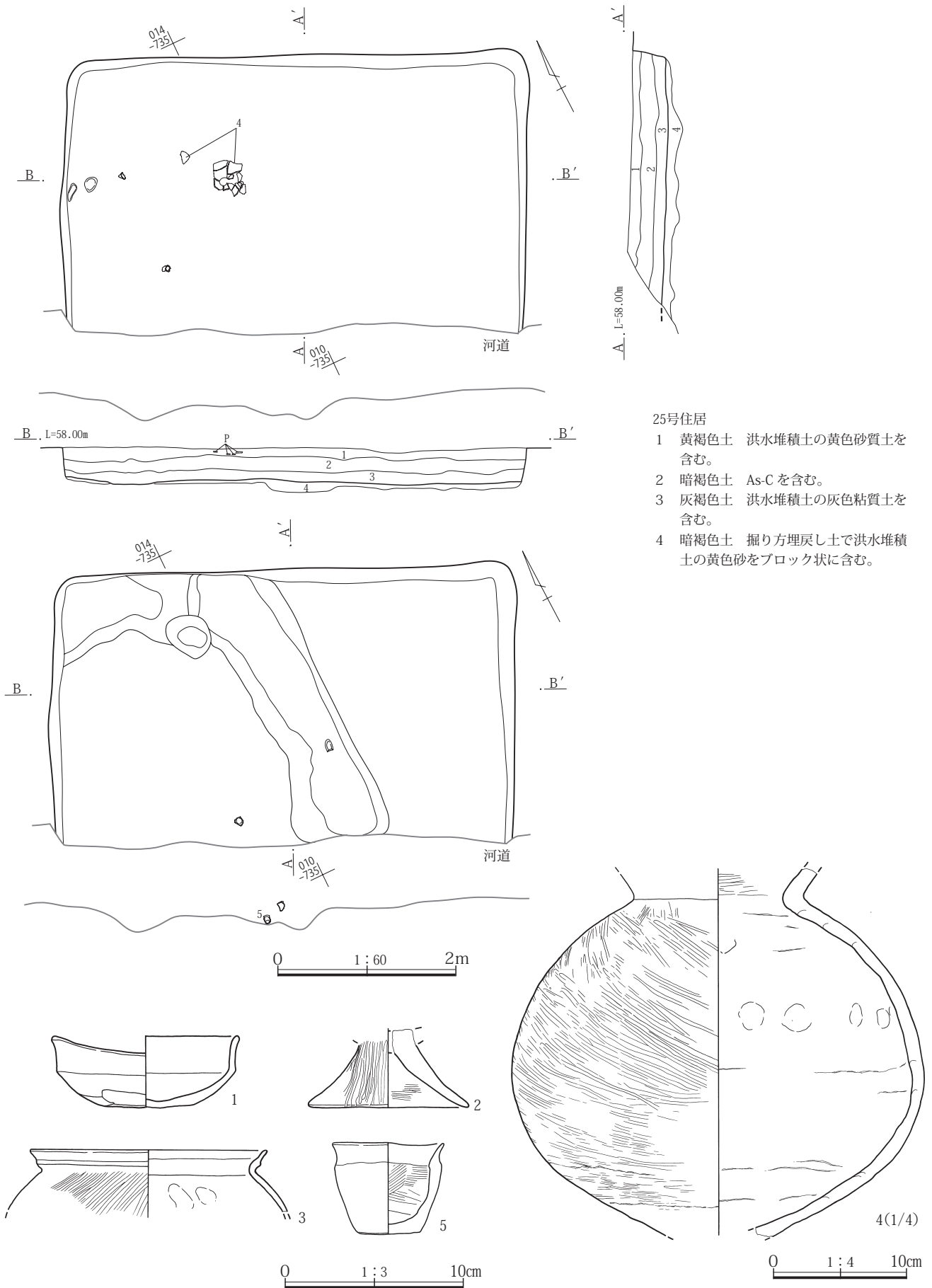
床面 緩やかな凹凸があり、住居中央が壁際より3～5cm窪んでいる。浅い掘り方がほぼ全体に見られ、中央付近に溝状のやや深い部分がある。

ピット 掘り方調査時に住居床面からの深さ25cmの窪みを確認しているが、配置からは柱穴と考えにくい。

その他 炉・壁溝は確認できない。

遺物 出土遺物は比較的多かったが図示できた土器は5点のみだった。壺4が住居内北寄りの出土だが床面より30cm前後浮いた状態で出土している。杯1と手捏ね5は住居付近の流路内遺物だが完形に近い土器で本住居と共に掲示した。図示した以外に重量で3.5kgの土師器を出土しているが流路内の土器も混在している。

所見 本住居に確実に伴う遺物がない。掘り方部分から確認できた溝状の施設は30・33号住居などに類例があり、それらは下面にある水田に関わるものと想定した(本文345頁)。本住居の掘り方は、走行方向が北側に向いていて、水田と同時期の施設とは考えにくい。4世紀代の遺物が多いようで古墳時代後期の杯1は混入品であろう。



25号住居

- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む。
- 3 灰褐色土 洪水堆積土の灰色粘質土を含む。
- 4 暗褐色土 掘り方埋戻し土で洪水堆積土の黄色砂をブロック状に含む。

第185図 2区25号住居および出土遺物

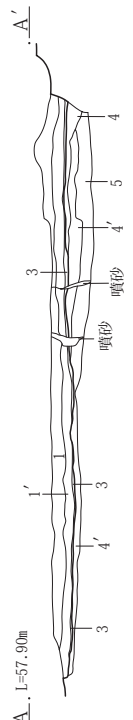
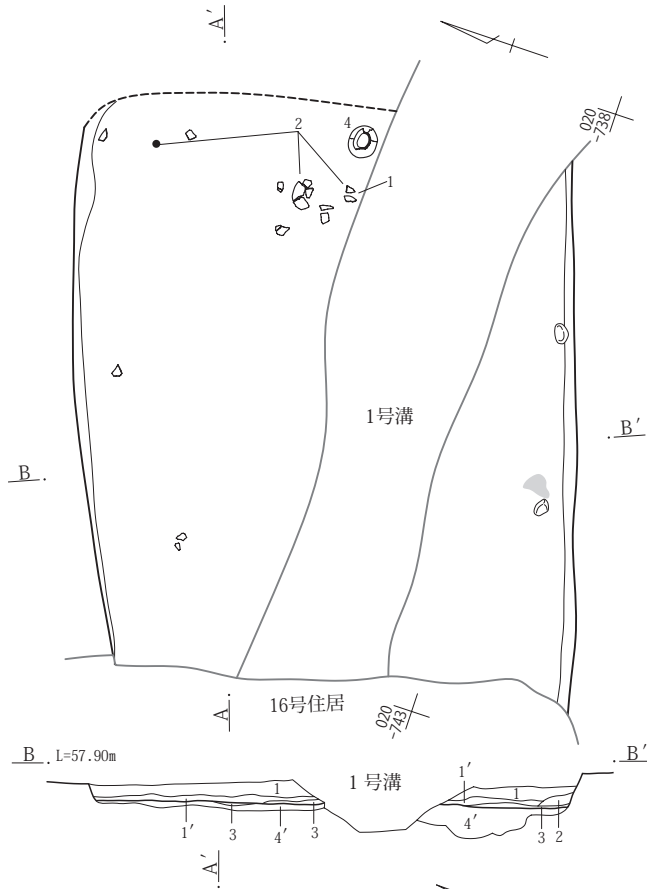
26号住居(第186図 PL. 33-②~④、78 遺物観察表424頁)

後出する遺構に壊された部分が多く、全容は明らかにできていない。噴砂の痕跡が比較的良く見られる。

位置 018 ~ 023-738 ~ 743グリッドにある。

規模形状 長軸長4.4m以上、短軸長3.7mの東西に長い長方形を呈している。西辺の短い台形状に歪みそうだ。

埋没土・壁 一部壁際から埋没した後、水平に近い堆積となる。壁高は18cm前後で最も深い南辺で26cmを測る。

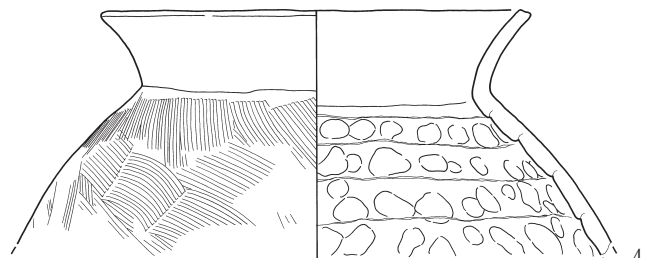
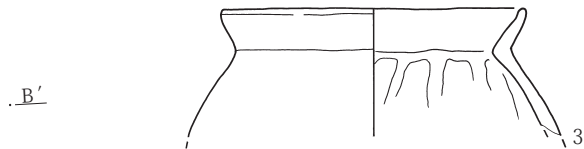
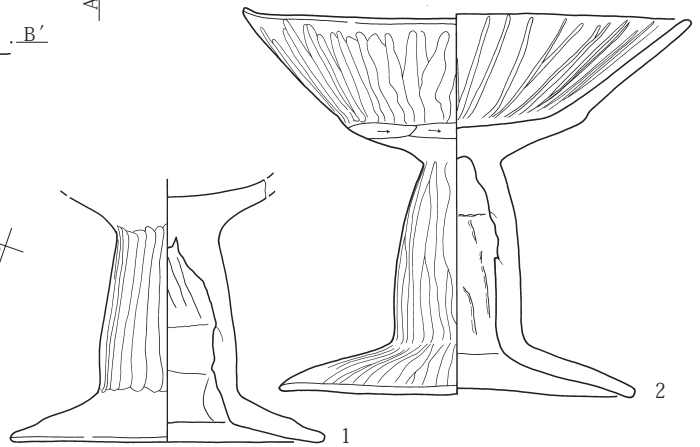
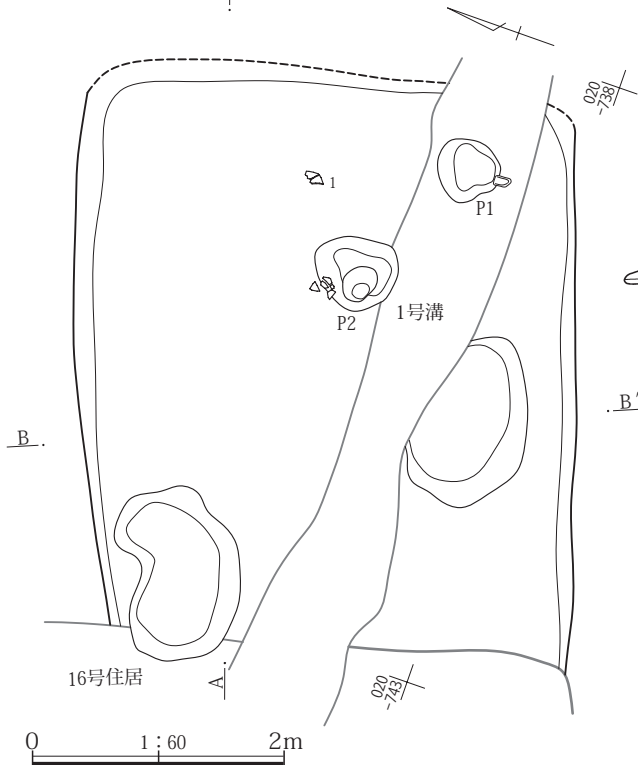


26号住居

- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂を含む。1'にAs-Cを散見する。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む。下半には洪水堆積土の黄色粘性土を多量に含む。
- 3 焼土、炭化物、灰を主体とする踏み固められた層。上面が住居廃絶時の床面、下面が住居構築時の床直上埋没土に相当する。
- 4 黄褐色土 掘り方埋戻し土。洪水堆積土の黄色砂質土を多量に含む。炭化物粒、灰を含むが4'にはほとんど見られない。
- 5 暗褐色土 焼土、炭化物粒を多量に含む。

26号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	48×47.5×46	
2	50×48×21	



0 1:3 10cm

第186図 2区26号住居および出土遺物

方位 N-70° E。 面積 残存16.82㎡

床面 凹凸の多い不整な床で高低差は最大8cmにおよび、全体では東側がやや高くなっている。広い範囲に深さ5cm前後の掘り方が見られ、一部土坑状に窪み、東側では深さ20cm以上となる部分が多い。掘り方下層埋戻し土は他住居と異なり焼土・炭化物粒等の混入が多い。

炉 東壁下に遺物の出土が多く、掘り方調査時に中央東寄りに窪み(P2)を確認した。炉が想定できる位置の施設だが、被熱痕などの痕跡は確認できない。

ピット 掘り方調査時に南東隅付近のピット状の窪みを確認しP1とした。中世の館堀である1号溝下にあたるが、埋没土は住居掘り方と同質の土であり本住居に伴う施設と判断できた。

その他 4・16号住居に前出している。壁溝は確認できていない。

遺物 住居内の広い範囲から遺物を出土し土師器4点を図示した。高杯2と甕4が東壁寄りの床直上出土である。高杯1は掘り方調査時の出土土器が床直上の出土破片と接合している。図示した以外に重量で2.0kgの土師器を出土している。

所見 主体的な煮沸具が台付甕でなくなり、高杯脚部が長脚化した5世紀代の住居である。

27号住居(第187図 PL.33-⑤ 遺物観察表424頁)

北側38号住居、東側24号住居、南側23住居とごく近接しながら重複なく並び、この傾向が広く見られる2区東隅の典型的な住居である。

位置 019～024-698～703グリッドにある。

規模形状 長軸長4.1m、短軸長北寄りで3.7mの長方形を呈している。南辺が北辺より50cm短い逆台形状に歪んでいる。南北両辺が内湾気味に小さく屈曲している。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁は全体に浅く、壁厚は最も深い西辺でも7cm前後しかない。

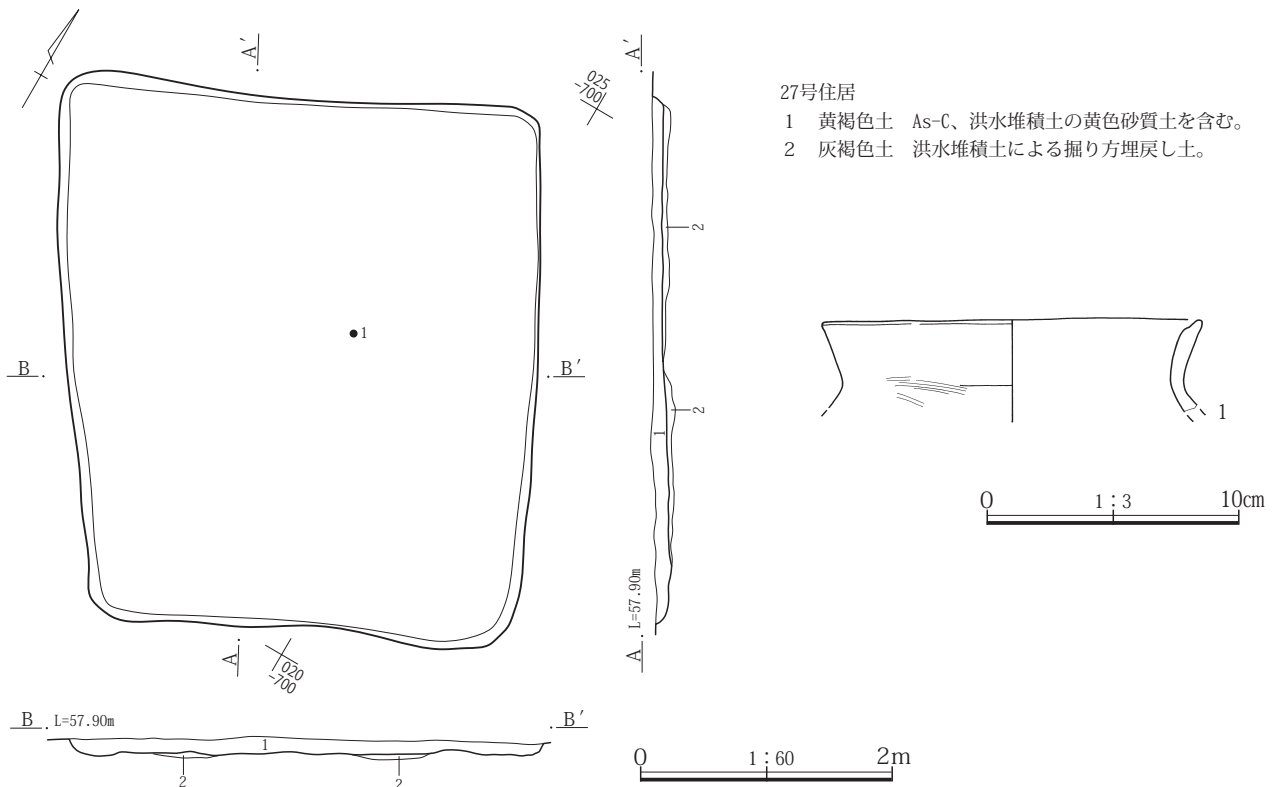
方位 N-28° W。 面積 14.61㎡

床面 細かな凹凸の多い不整な床面である。全体では東側へやや低く傾斜し、西壁下と5cm前後の比高差がある。粗掘り時の部分的な窪みを埋め戻すようなごく浅い掘り方が広範囲に確認できる。

その他 炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物はきわめて少なく、図示できたのは土師器1点で甕1は住居中央付近の床ほぼ直上の高さの出土である。図示した以外の出土土器もごくわずかである。

所見 確実に本住居に伴う遺物がないが、図示した土器は刷毛目が若干残る4世紀後半から5世紀にかけての土師器である。



第187図 2区27号住居および出土遺物

28号住居(第188図 PL. 33-⑥・⑦、79

遺物観察表424・425頁)

北側は調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 026～029-719～723グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.35m、南北軸長2.5m以上で、残存部分から長軸方向を推測できないが、他住居との規模を比較すると正方形もしくは南北方向に長い長方形になる場合が多い。各辺は直線的で比較的整った形状になりそうである。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁高は最も深い南辺で17cmを測る。

方位 N-5° E。面積 残存6.30㎡

床面 波打つような凹凸があり、全体では東側へ低く傾斜していて西壁下と5cm前後の比高差がある。全域に深さ8cm前後の平坦な掘り方がある。

その他 33・48号住居に後出する。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

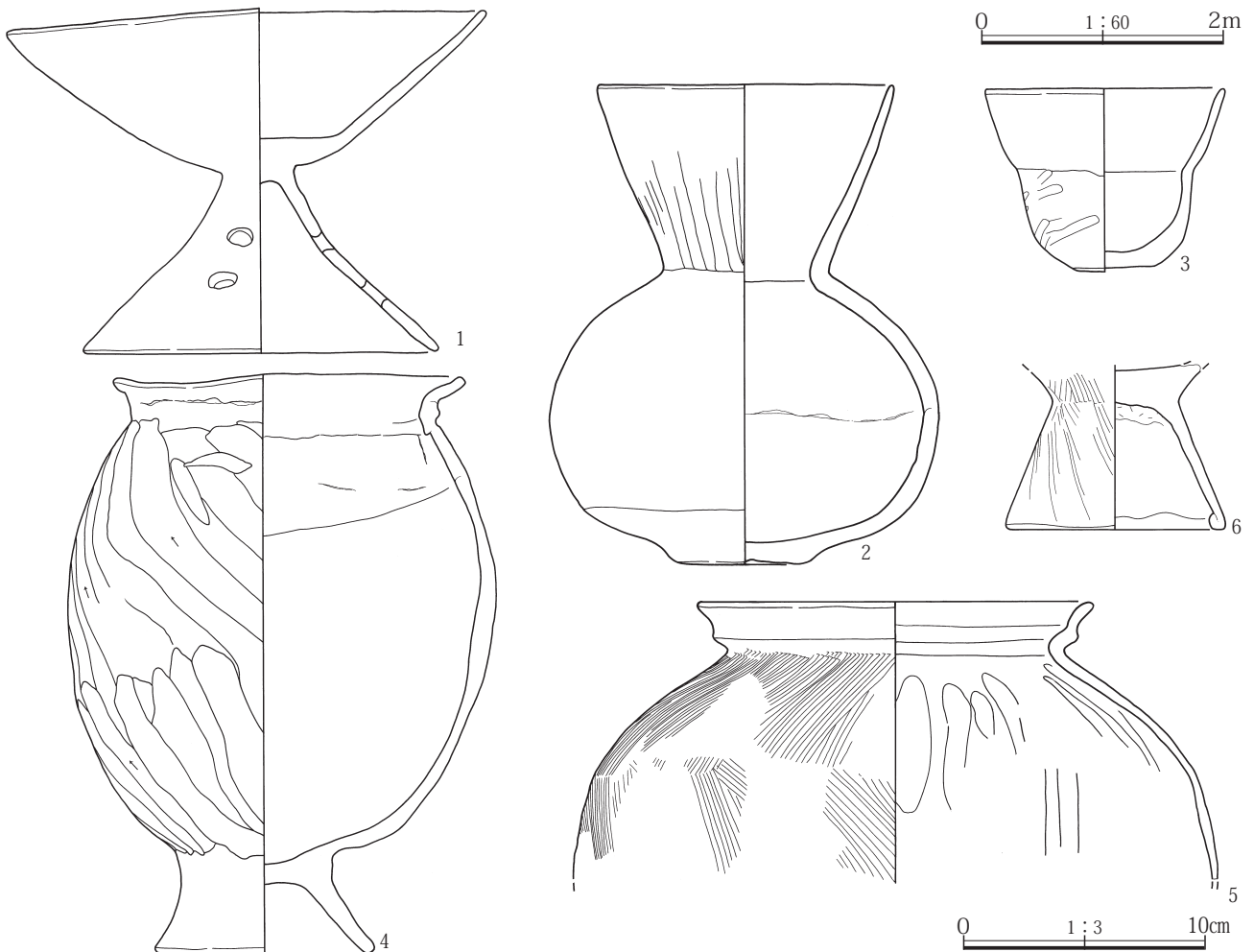
遺物 住居内の東側で出土遺物が多く、土師器6点を図示した。埴2が東壁寄りの床直上出土で、他は床面から7cm以上高い位置の出土である。台付甕4は南東隅付近でまとまって出土した同一個体だが接合せず、図上で復元した。図示した以外に重量で0.7kgの甕類を主体とする土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀前半の住居である。



28号住居

- 1 暗褐色土 洪水堆積砂質土、As-C、炭化物粒を含む。
- 2 灰褐色土 掘り方埋戻し土の洪水堆積砂質土。



第188図 2区28号住居および出土遺物

29号住居(第189図 PL.33-⑧、79 遺物観察表425頁)

北側の調査区境にかかり、全容は把握できていない。

位置 024～028-709～715グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.95m、南北軸長3.6m以上で、残存部分から長軸方向を測ることはできない。南東隅は鈍角に開き、西辺は内側に折れるように屈曲しており、整美さに欠ける。

埋没土・壁 壁際が一部埋没した後、水平堆積する2区住居に多数見られる埋没状況である。壁高は最も深い南辺で22cmを測る。

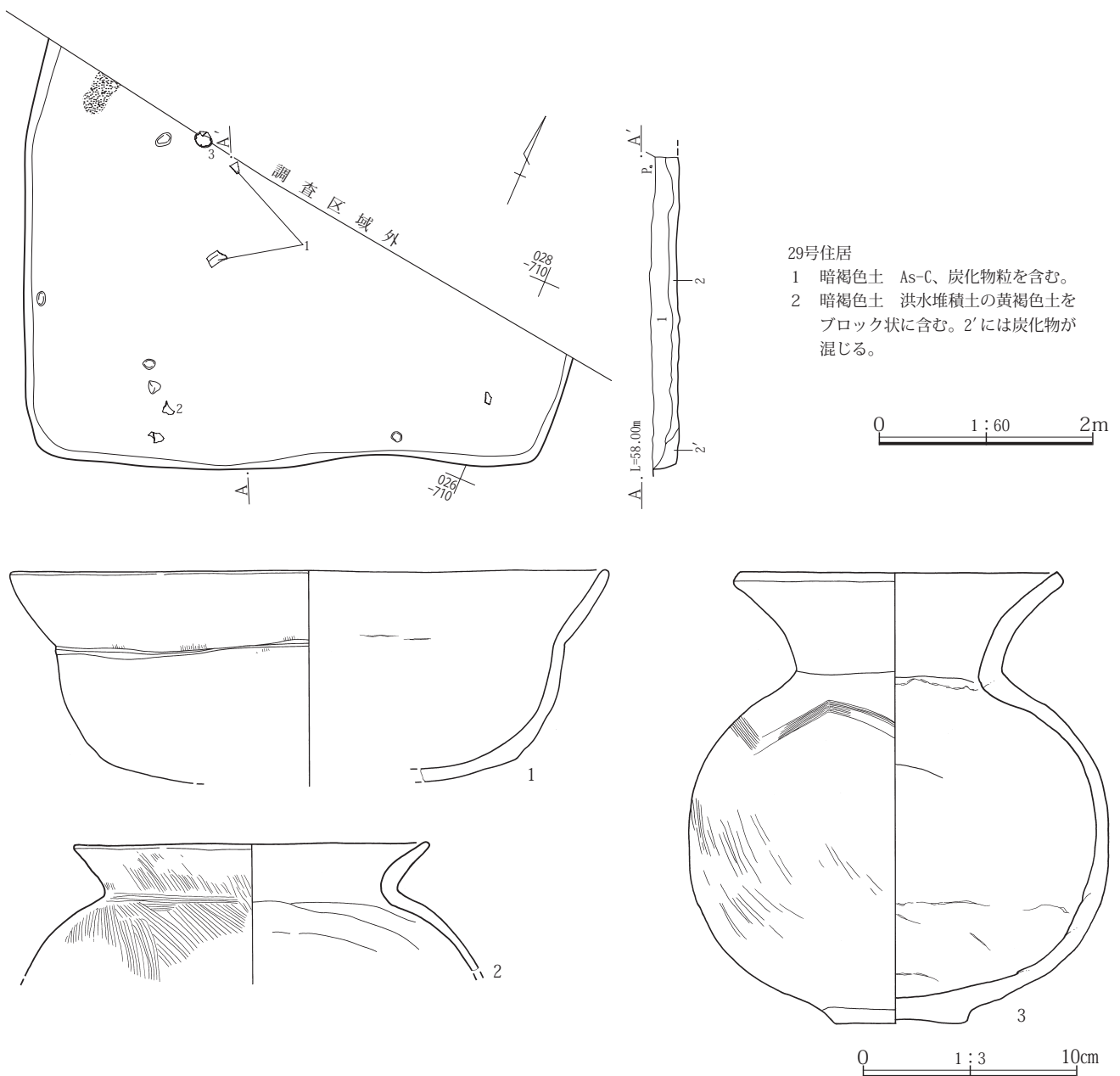
方位 N-21° W(西辺) 面積 残存11.83㎡

床面 細かな凹凸の多いやや不整な床面である。全体に深さ18cm前後の平坦な掘り方がある。

その他 48・51号住居に後出する。西側調査区境付近の床面直上に性格不明の粘土がちっていた。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 住居全体に散在するようにして遺物が出土し、このうち土師器3点を図示した。台付甕になるとと思われる甕2は南壁寄りの床直上出土土器で、他は20cm以上床面より高い位置の出土である。図示した以外に重量で1.4kgの土師器を出土している。

所見 出土遺物は4世紀代の土師器である。



第189図 2区29号住居および出土遺物

30号住居(第190～192図 PL. 34-①～④、79・80

遺物観察表425・426頁)

2区東側の住居密集地点にあり住居間の重複がきわめて多い。

位置 010～016-709～714グリッドにある。

規模形状 長軸長5.2m、短軸長4.0mの長方形を呈している。四隅の丸みが強く、両長辺は胴張り状に膨らみ整美さに欠ける。

埋没土・壁 壁際で部分的に埋没した後、水平に近い堆積となる2区に多い堆積状態である。壁高は30cm前後で最も深い南辺で41cmを測る。

方位 N-21° W。 面積 19.70㎡

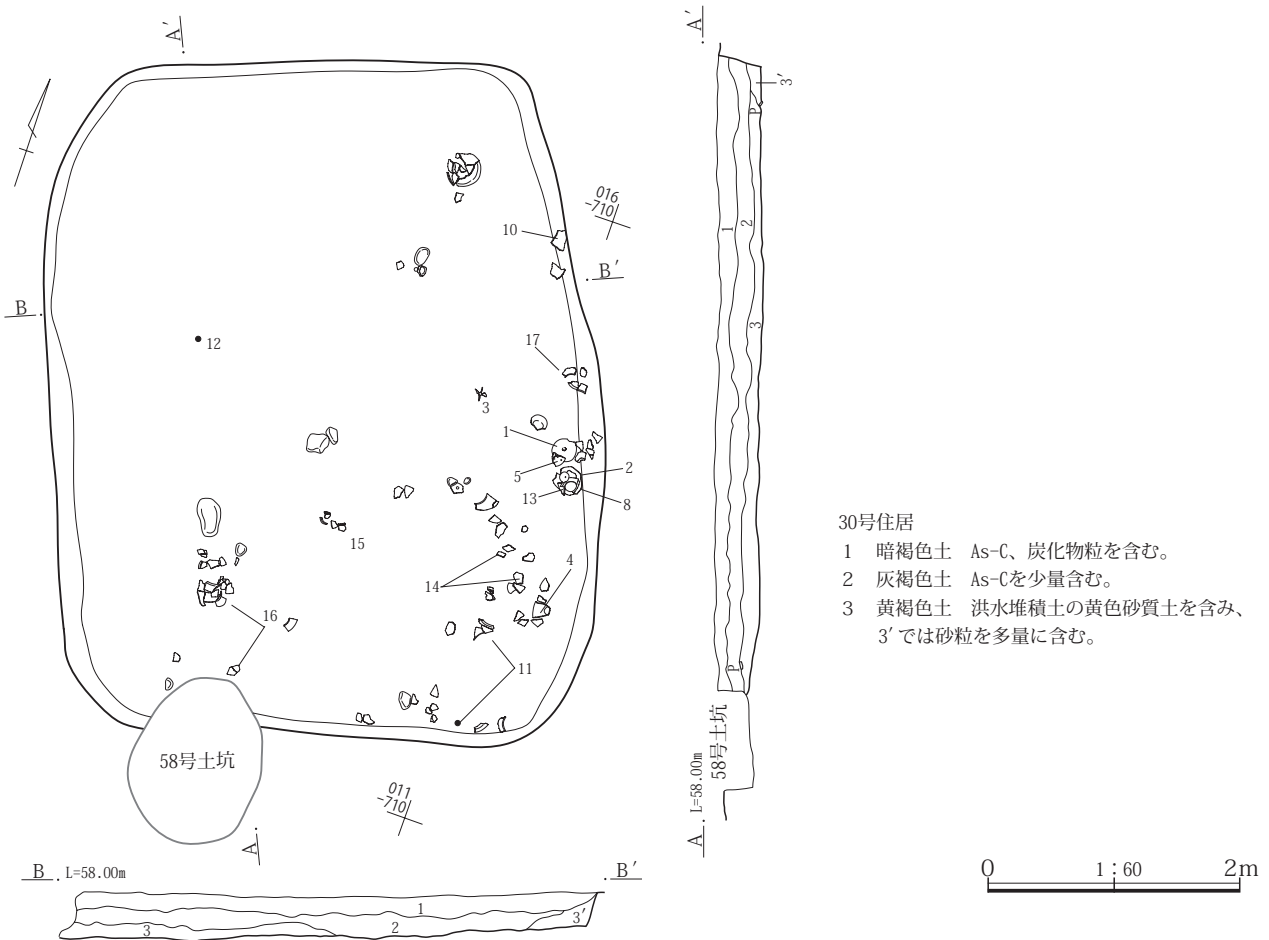
床面 最大10cmの高低差の緩やかに波打つような凹凸がある。全体に深さ11～15cmの平坦な掘り方がある。

その他 2・20号住居、58号土坑等に前出し、41・42号住居等に出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確

認できない。

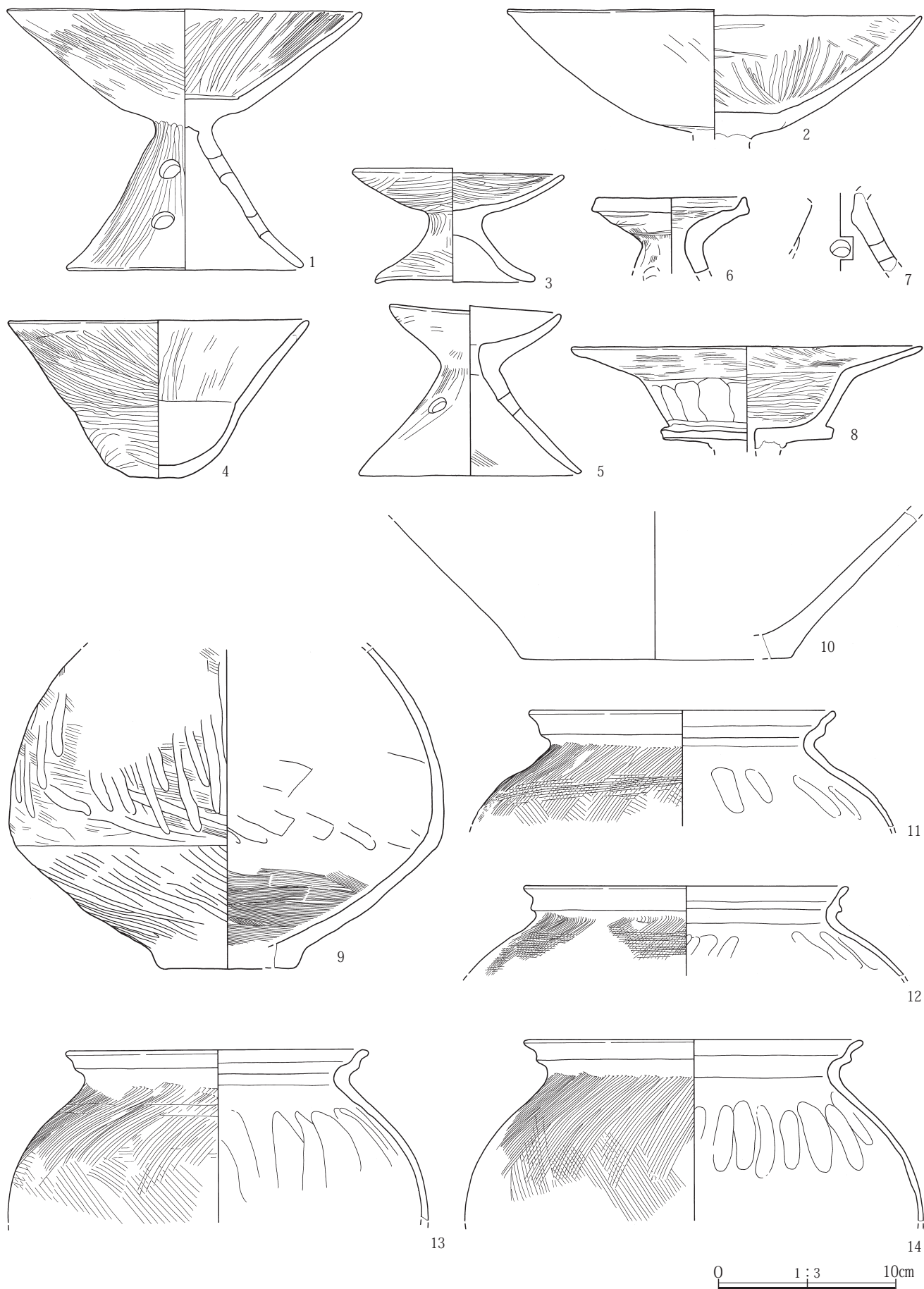
遺物 住居東・南側の出土遺物が多く、土器18点と石製品1点を図示した。床直上の遺物は東壁寄りの高杯3のみであった。高杯2、器台5・8、壺10、台付甕13・17が東壁際から出土している。床面から20cm以上高い位置の出土だが壁の密着するような状態で本住居に伴う遺物と考えたい。ただし、器台8は37・41・47・50号住居の出土破片と接合する特殊な状態だった。他に東壁寄りの高杯1が19号住居、埋没土中の甕18が47号住居出土破片と接合する例がある。器台6は掘り方埋戻し土内の出土だった。図示した以外の遺物もきわめて多く、重量で7.8kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。掘り方内の溝状の窪みは北側に隣接する42号住居を経てさらに北側へ繋がっている。埋没土から区別はできなかったが水田畦畔脇の窪みと考えた(本文345頁)。

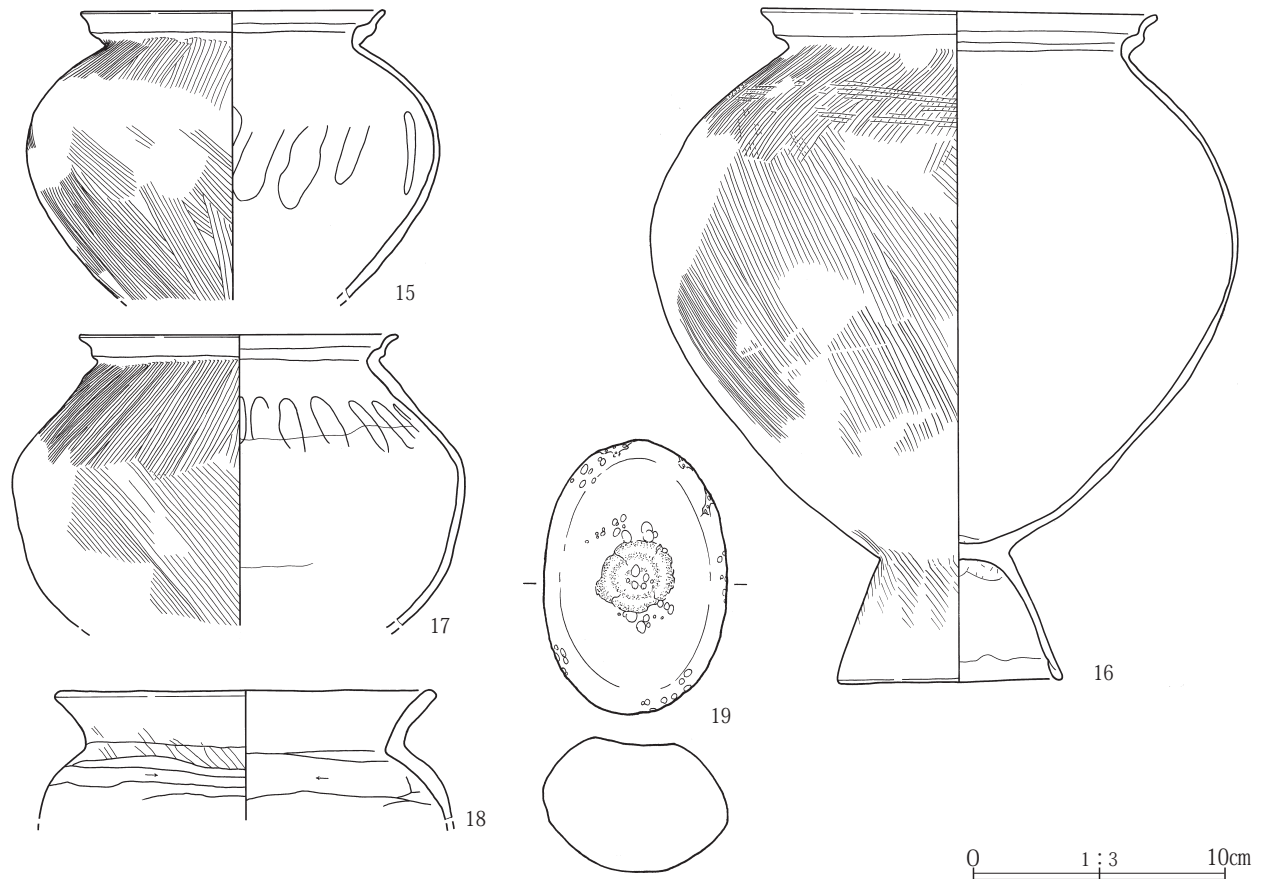


- 30号住居
- 1 暗褐色土 As-C、炭化物粒を含む。
 - 2 灰褐色土 As-Cを少量含む。
 - 3 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を含み、3'では砂粒を多量に含む。

第190図 2区30号住居



第191图 2区30号住居出土遺物(1)



第192図 2区30号住居出土遺物(2)

31号住居(第193図 PL. 34-⑤・⑥、80

遺物観察表426頁)

中世館堀である1号溝コーナー部分に住居中央を大きく削られ不明瞭だが、規模の概要は推測できる。

位置 018～024-724～733グリッドにある。

規模形状 南東側長軸長7.05m、短軸長3.3mの細長い長方形を呈している。北西辺が短い台形状に歪むと思われる。残存する範囲の各辺は直線的で整美である。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られる。壁高は最も深い南西辺で21cmを測る。

方位 N-48° E。 **面積** 復元27.70㎡

床面 高さ3cm前後の細かく波打つような凹凸がある。

深さ4～10cmの掘り方があり、東隅付近のみ20cm前後

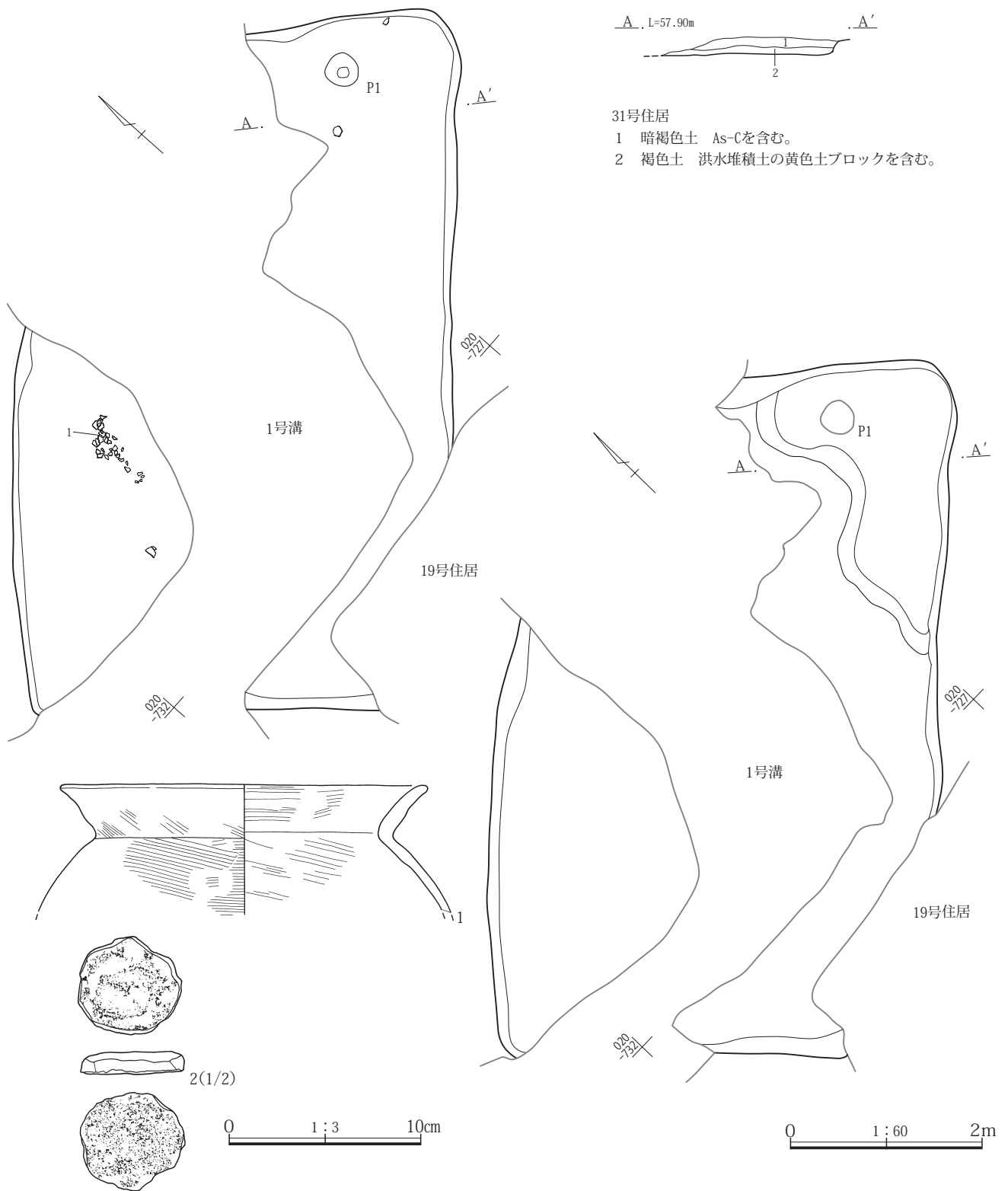
深くなっていた。

ピット 北東壁下東寄りから小ピットを確認している。径34cmの歪んだ円形で床面から30cmの深さがある。支柱穴の配置がなく、対になるピットも見られない。

その他 19号住居に前出し、46号住居に後出している。炉・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 北西辺寄り床直上に小破片が集中する地点があり、この中では上位にあたる床上8cmのブロックから甕1を復元した。図示した以外に重量で1.0kgの土師器を出土している。

所見 確実に本住居に伴う土器をもたないが、重複などから4世紀の住居と想定される。



第193図 2区31号住居および出土遺物

32号住居(第194～196図 PL. 34-⑦・⑧、80

遺物観察表426・427頁)

2区北寄りの住居が密集する一画の北東隅にある。南壁際にある住居内土坑から多量の遺物を出土している。

位置 018～025-708～713グリッドにある。

規模形状 長軸長5.7m、短軸長3.8mの長方形を呈している。北東・南西の両隅が鈍角気味に開いていて平行四辺形状に歪んでいる。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、地山傾斜とは逆の東側から埋没する傾向にある。壁高は20cm前後で最も深い北

辺で25cmを測る。

方位 N-26° W。 面積 21.37㎡

床面 細かな凹凸のある床面で、全体では西側へ低く傾斜していて、東壁下と6cm前後の比高差がある。粗掘り時の部分的な窪みを埋め戻すような浅い掘り方が部分的に見られる。住居内土坑上の踏み固めは不明瞭である。

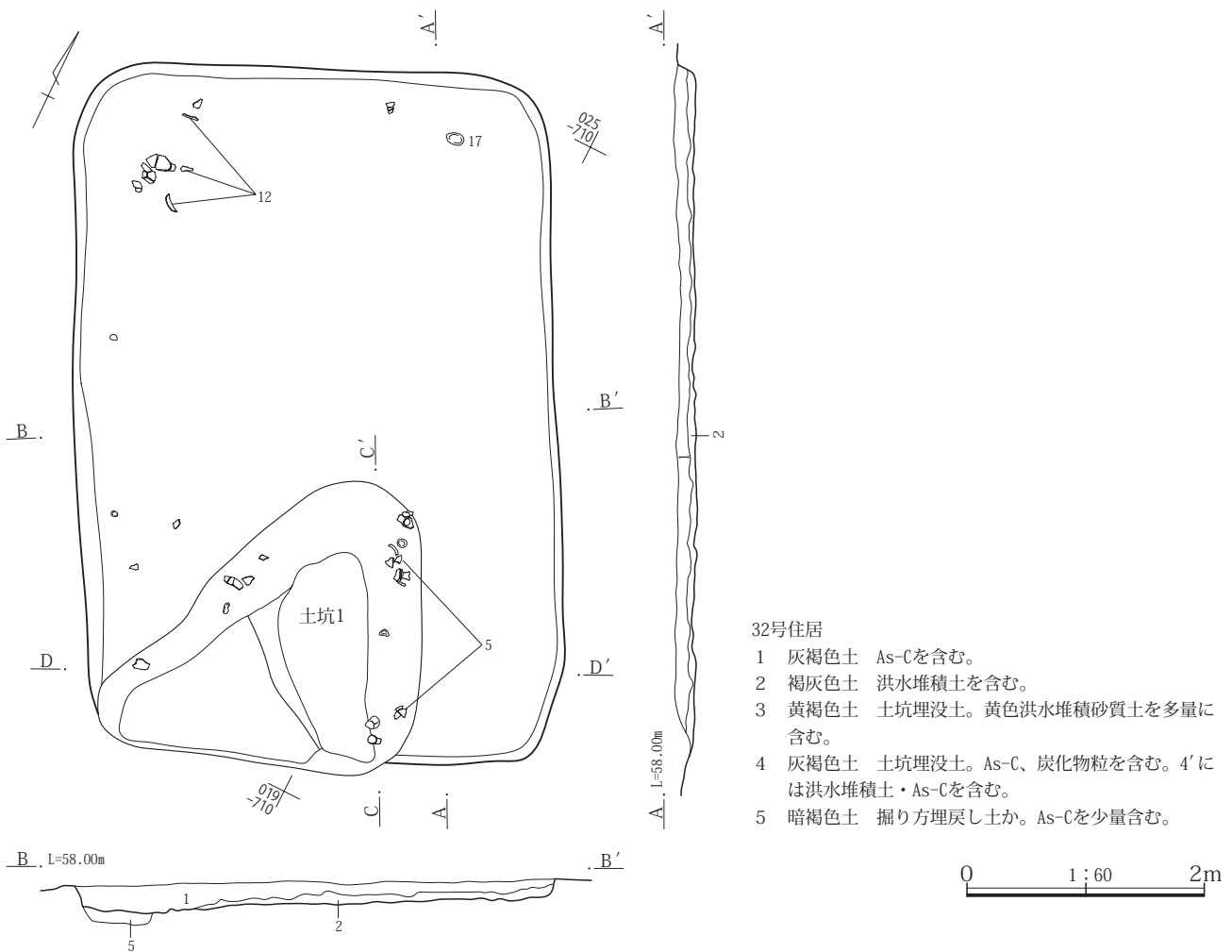
住居内土坑 南壁際に平面形状三角形の窪みがあり、住居内土坑とした。床面からの深さ38cmを測る明瞭な施設である。南辺が住居南壁に沿って掘り込まれているが、南壁外側まではみ出して掘り込まれている。また土層断面観察から床面の踏み固めは確認できないが土坑上面埋没土は住居下層埋没土と異なっている。土坑は住居廃絶直後の掘り込みで、人為的に床面レベルまで埋め戻された可能性もある。

その他 50・51号住居に後出する。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

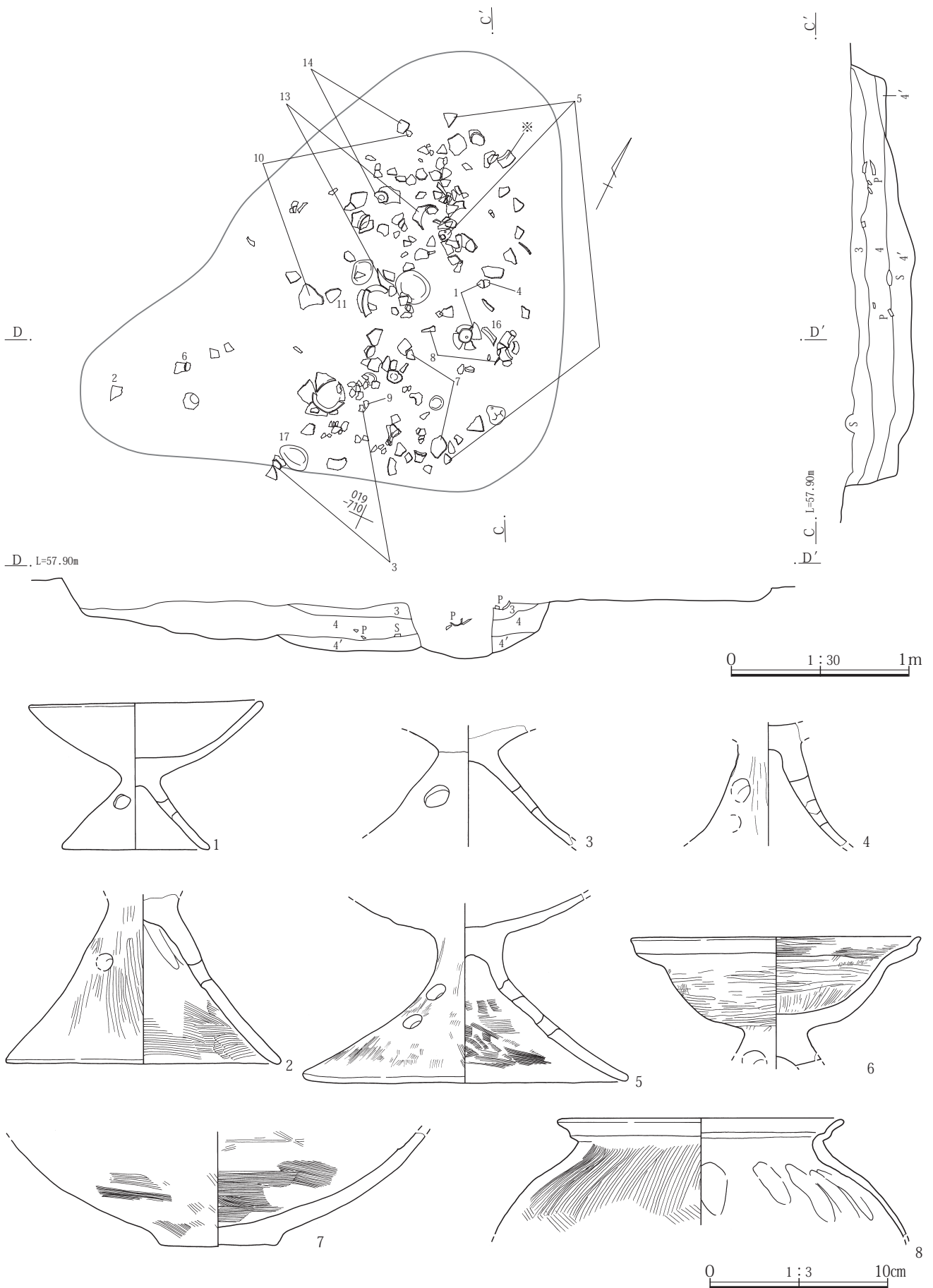
遺物 住居内土坑を中心に多量の遺物を出土し、土師器

16点と石製品1点を図示した。住居床面レベルの遺物は住居内土坑上の高杯5と北西隅の台付甕12である。他はすべて住居内土坑内の遺物で高杯1と台付甕11が住居床下10cm未満のやや浅い位置で出土した以外は床下20cm以下から土坑底面直上の深い位置の出土である。住居内土坑の遺物は他の住居と接合する例も目立ち、器台4が23号住居、壺7が53号住居、台付甕10が59号住居、台付甕12・14が35号住居の埋没土出土破片と接合している。また51号住居7は図中※印で記した破片と接合している。図示した以外の遺物も住居内土坑遺物を中心にきわめて多く、重量で8.7kgの土師器を出土している

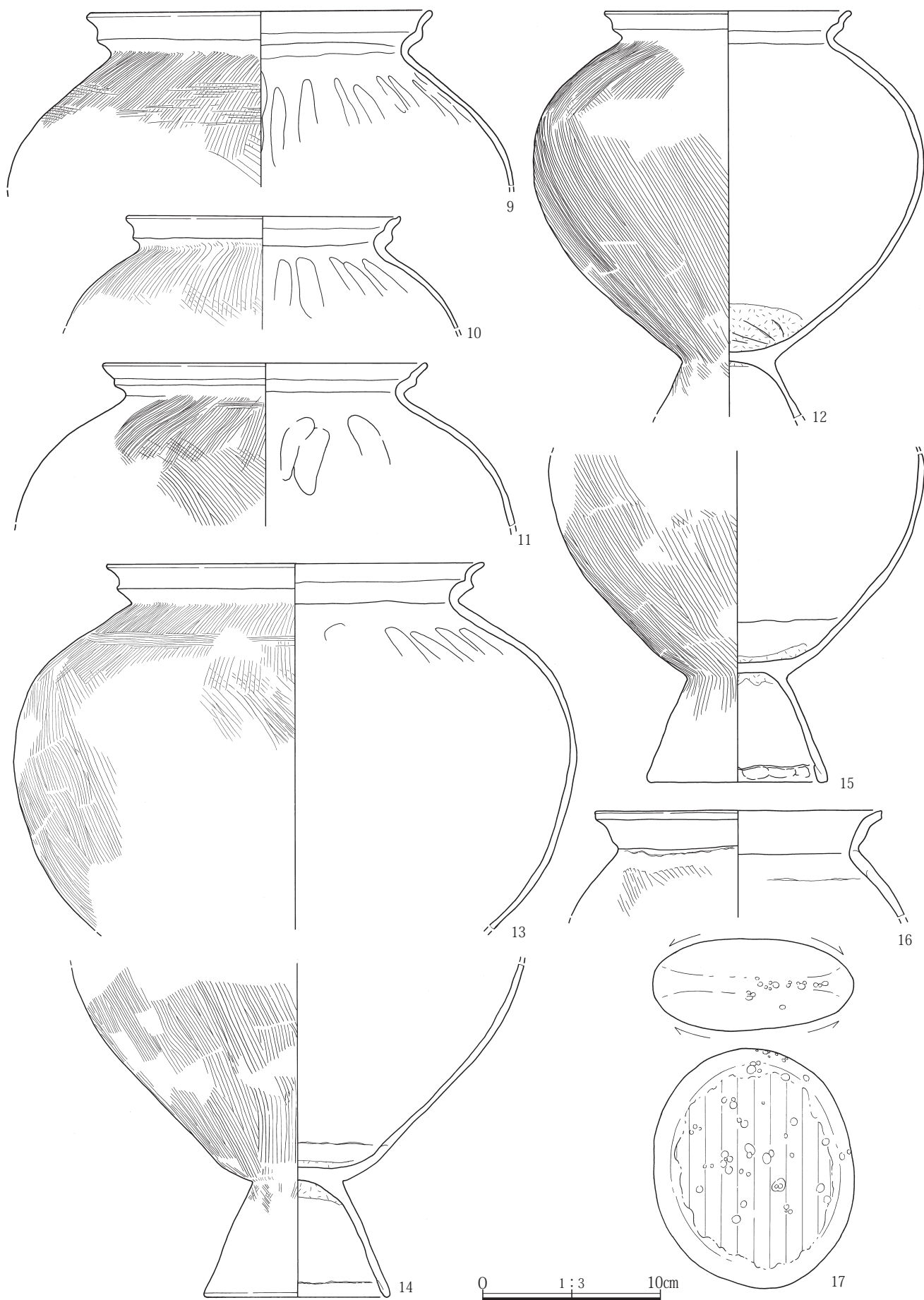
所見 出土遺物は4世紀代で床面と住居内土坑の遺物間に年代差はないようである。住居内土坑遺物は完形近くまで復元できたものが少ないが、離れた位置での接合が少なく、破片をバラバラに投げ込んだ様相ではない。反面、他住居との接合が多い本床下土坑の特色と整合していない。



第194図 2区32号住居



第195図 2区32号住居遺物出土状態および出土遺物(1)



第196図 2区32号住居出土遺物(2)

33号住居(第197・198図 PL.35-①・②、80
遺物観察表427頁)

北西隅を28号住居に壊されているが、規模の概要は推測できる。

位置 021～027-718～724グリッドにある。

規模形状 南北軸長5.2m、東西軸長南側で5.25mの方形を呈している。北辺が南辺よりやや短い台形状に歪むと想定される。東西両辺が胴張り状に湾曲している。

埋没土・壁 壁際から埋没した後、水平に近い堆積となる2区に多い堆積状態である。北辺が壁高8cmで浅いが、他は20cm前後を測る。

方位 N-9° E。面積 復元25.39㎡

床面 住居中央付近がやや窪む傾向があり、壁際と2～5cmの比高差がある。住居粗掘り時の部分的な窪みを埋め戻すようなごく浅い掘り方が見られる。

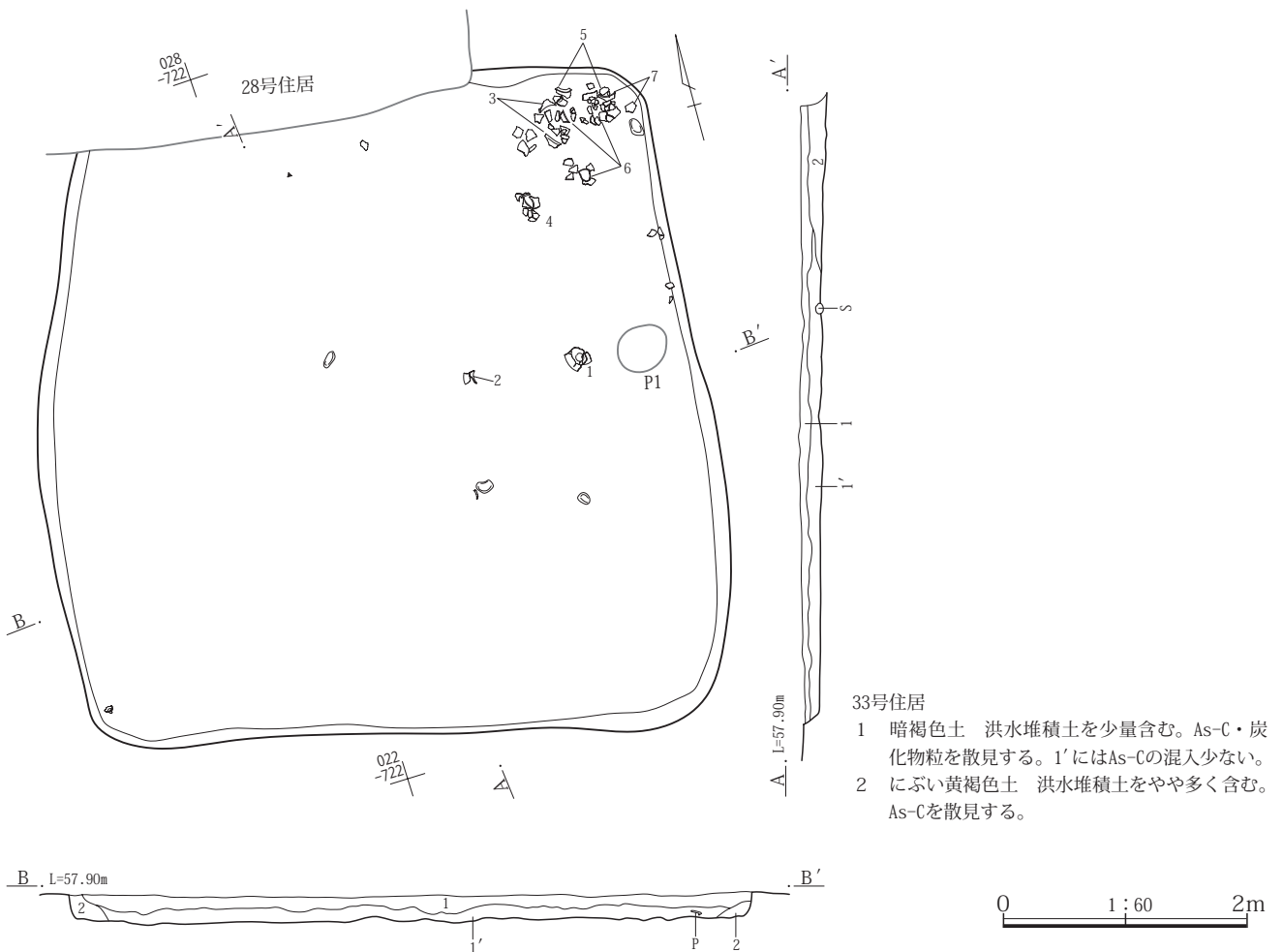
ピット 掘り方調査時に東壁下で径42×37cm、床面か

らの深さ28cmの窪みを確認しP1とした。東壁中央付近の配置から入口ピットとなる可能性があるが、本遺跡では明瞭な類例がない。

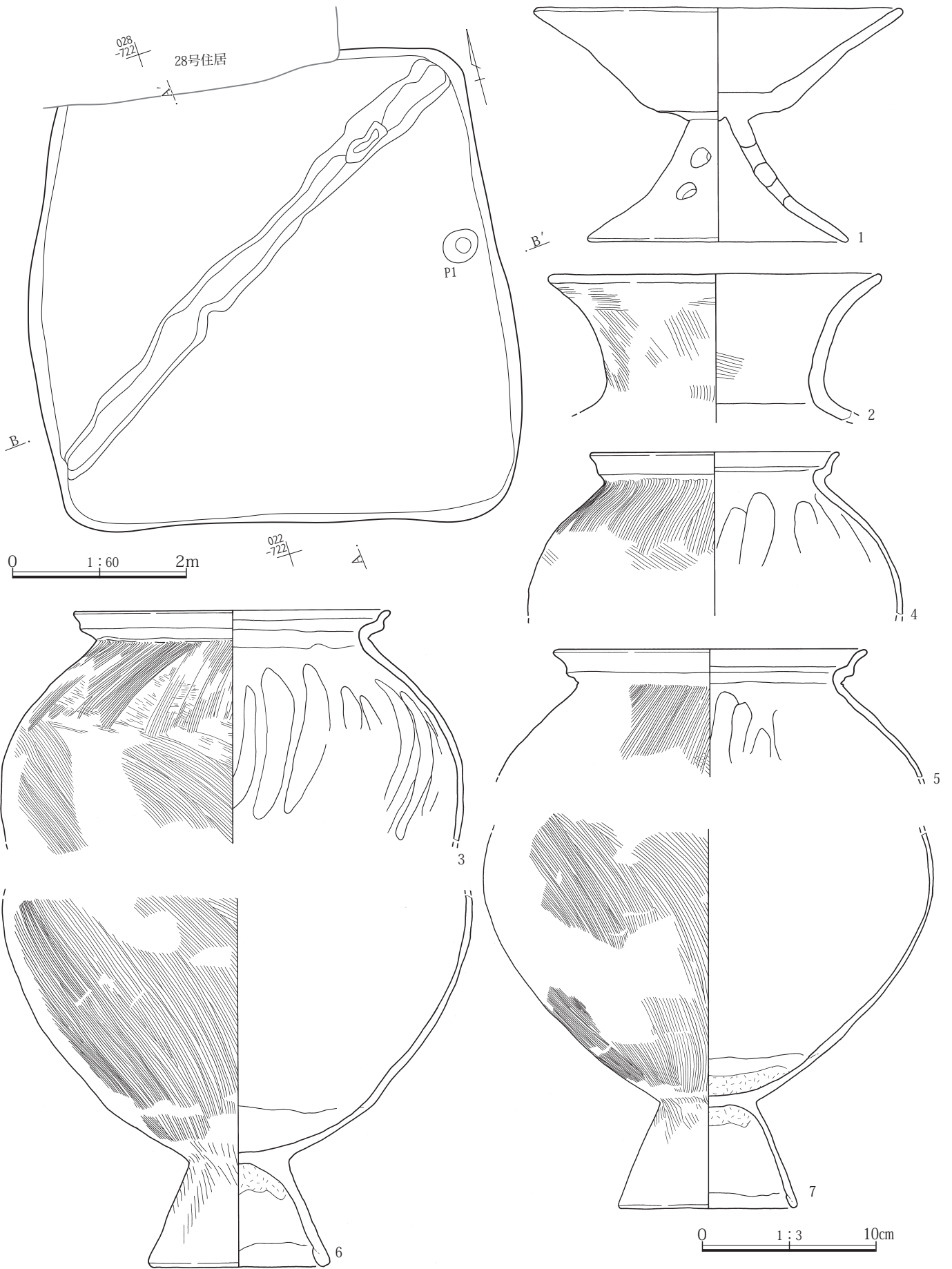
その他 28号住居に前出し、46・51号住居に後出している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 北東隅付近を中心に遺物の出土があり土師器7点を図示した。完形近く復元できた高杯1は床上12cmの高さの出土である。床直上の出土土器は中央付近の壺2と北東隅の台付甕7である。他はいずれも床面より4cm以上高い位置での出土だが、壁際の遺物で本住居に確実に伴うと考えられる。図示した以外に重量で1.8kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。掘り方調査時に確認した溝状の窪みは水田に伴う施設として本文345頁で扱った。



第197図 2区33号住居



第198図 2区33号住居掘り方および出土遺物

34号住居(第199図 PL. 31-③・④ 遺物観察表427頁)

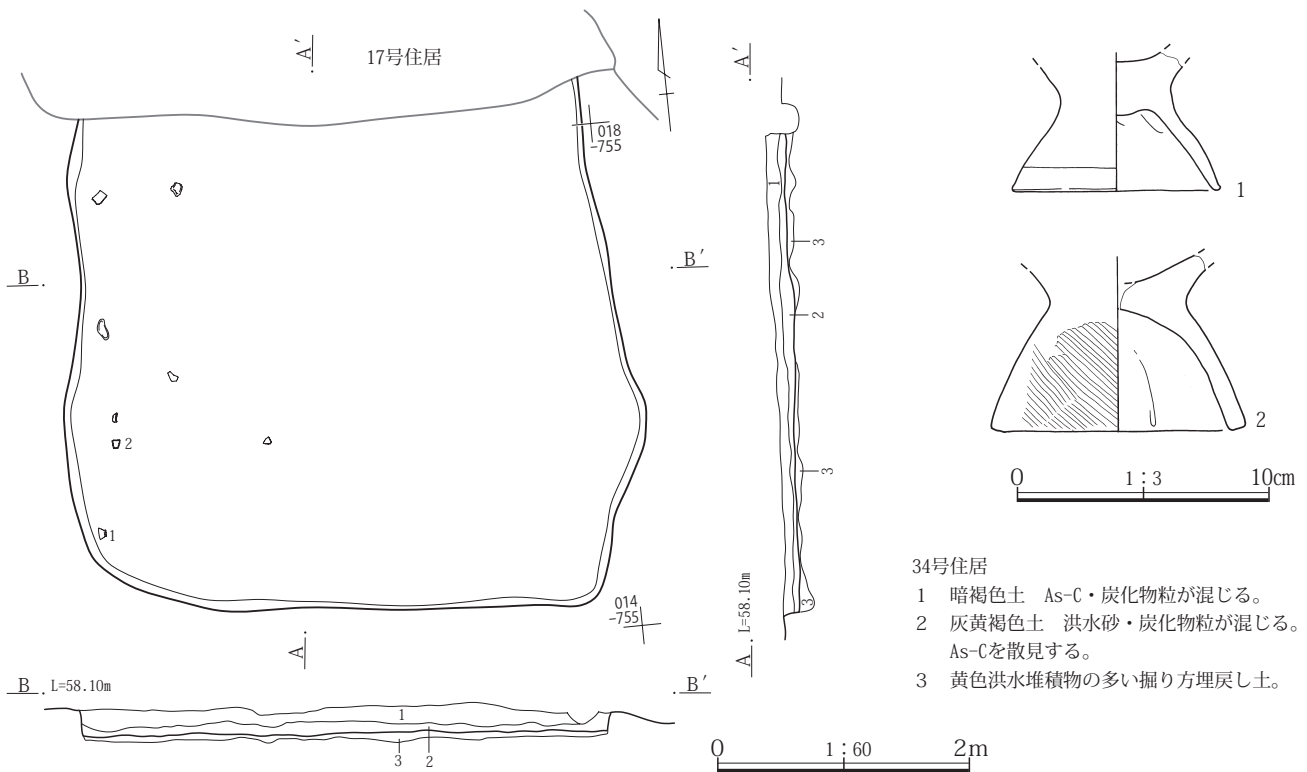
2区集落の南西隅にある。住居北側を17号住居に壊されていて全容を把握できていない。

位置 014～018-754～759グリッドにある。

規模形状 北辺が不明だが後出する17号住居床下に本住居の掘り方が確認されず、北辺直前まで調査できたと考えられる。東西軸長4.2m、南北軸長4.0m以上で方形か南北にやや長い長方形を呈すと思われる。各辺は不規則に屈曲し整美さに欠ける。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られる。壁高は10cm前後だが、西辺で20cmを超える部分がある。

方位 N-5° E。面積 残存15.89㎡



第199図 2区34号住居および出土遺物

35号住居(第200図 PL. 35-③ 遺物観察表427頁)

2区東側の住居が密集する一画の東隅にある。

位置 015～019-702～706グリッドにある。

規模形状 長軸長西側で3.4m、短軸長北側で2.9mの長方形を呈している。北東隅が鈍角に開き、対向する辺は平行せずに長さも揃っていない。全体では北辺の長い逆台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 壁際の部分的な埋没後、水平に近い堆積が見られる。壁高は22cm前後でほぼ一様である。

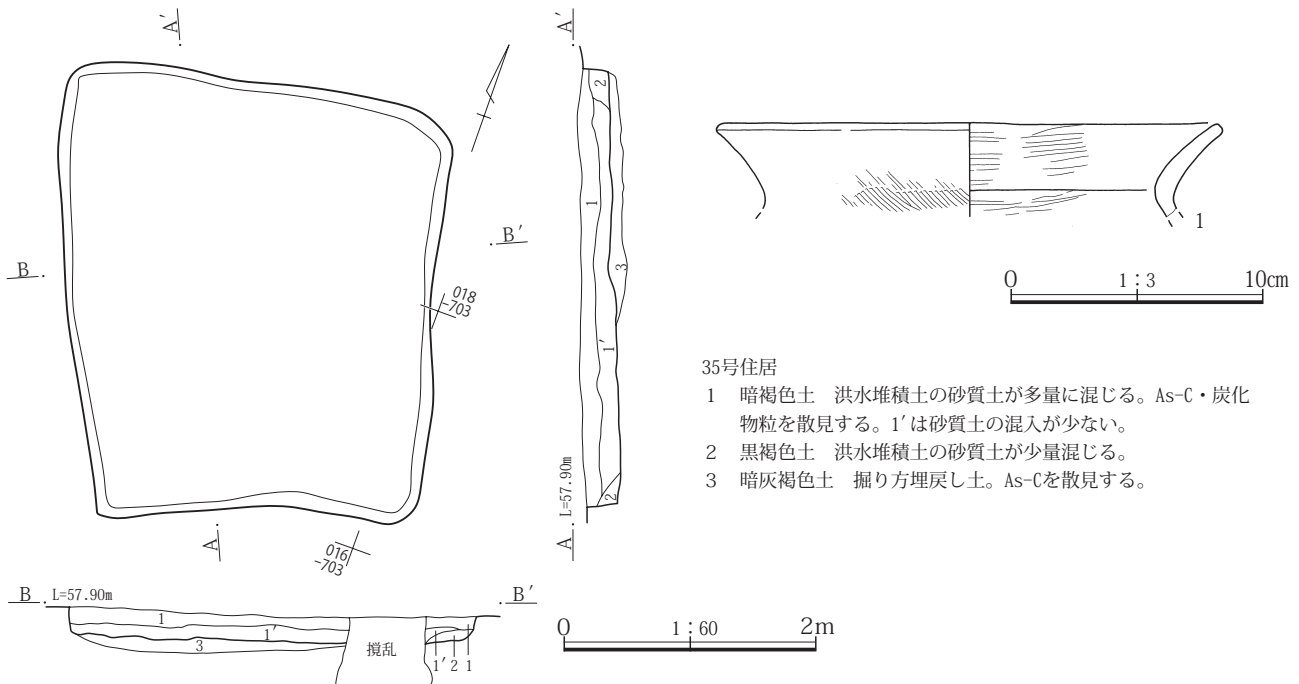
方位 N-24° W。面積 8.84㎡

床面 凹凸のある床で東側へ低く傾斜し、西側と7cm前後の比高差がある。北西側に床面からの深度10cm前後の掘り方があり床面の凹凸は掘り方で顕著となる。

その他 41号住居に後出する。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 埋没内出土の甕1を図示した。他に重量で0.1kgの甕類主体の土師器を出土している。

所見 時期決定のための遺物を持たない。



35号住居

- 1 暗褐色土 洪水堆積土の砂質土が多量に混じる。As-C・炭化物粒を散見する。1'は砂質土の混入が少ない。
- 2 黒褐色土 洪水堆積土の砂質土が少量混じる。
- 3 暗灰褐色土 掘り方埋戻し土。As-Cを散見する。

第200図 2区35号住居および出土遺物

36号住居(第201・202図 PL.35-④・⑤、80
遺物観察表427頁)

2区集落の中央付近にある。流路に北東側を削られているが床面まで達している部分はわずかで形状の把握には問題ない。

位置 016～019-731～735グリッドにある。

規模形状 長軸長3.65m、東側短軸長2.5mの東西に長い長方形を呈している。西辺が東辺より70cm短く台形状に大きく歪んでいる。

埋没土・壁 壁際の埋没と全体的な水平に近い堆積を不規則に繰り返す変則的な埋没過程が見られる。壁高は35cm前後でほぼ一様である。

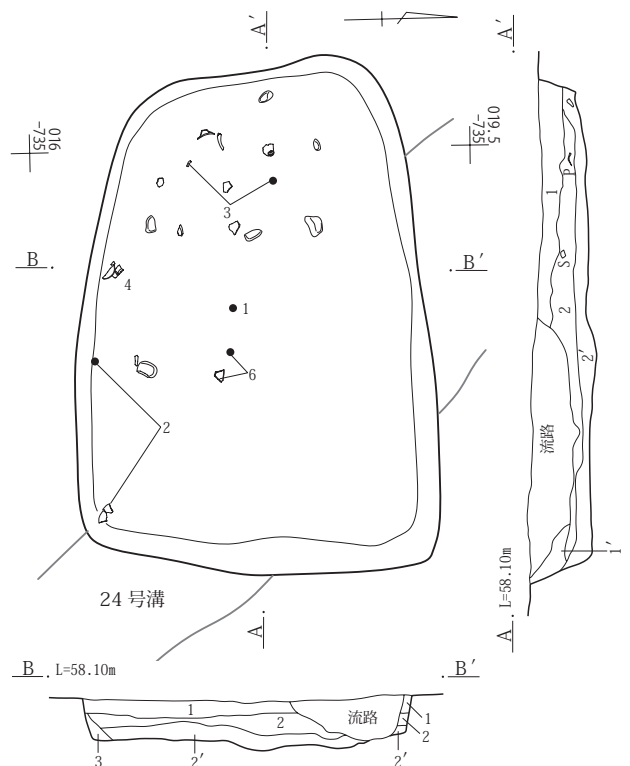
方位 N-88° W。面積 8.46㎡

床面 凹凸の多い不整な床面で10cm前後の段差を生じている。掘り方は見られない。

その他 炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

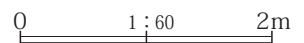
遺物 住居西側を中心に遺物が出土し、土師器6点を図示した。埴1、台付甕4が床直上の遺物である。器台2は南壁際の出土だが床直上と床土18cmの高さの破片との接合で、同様に台付甕3・6も床直上の破片と床土10cm以上の高さ出土破片が接合している。また1は26号住居、2は28・53号住居、4は53号住居埋没土出土破片と接合している。図示した以外に重量で1.0kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。西辺の長さは1.8mで、住居として認定できるか疑問点のある17号住居に次いで短い。

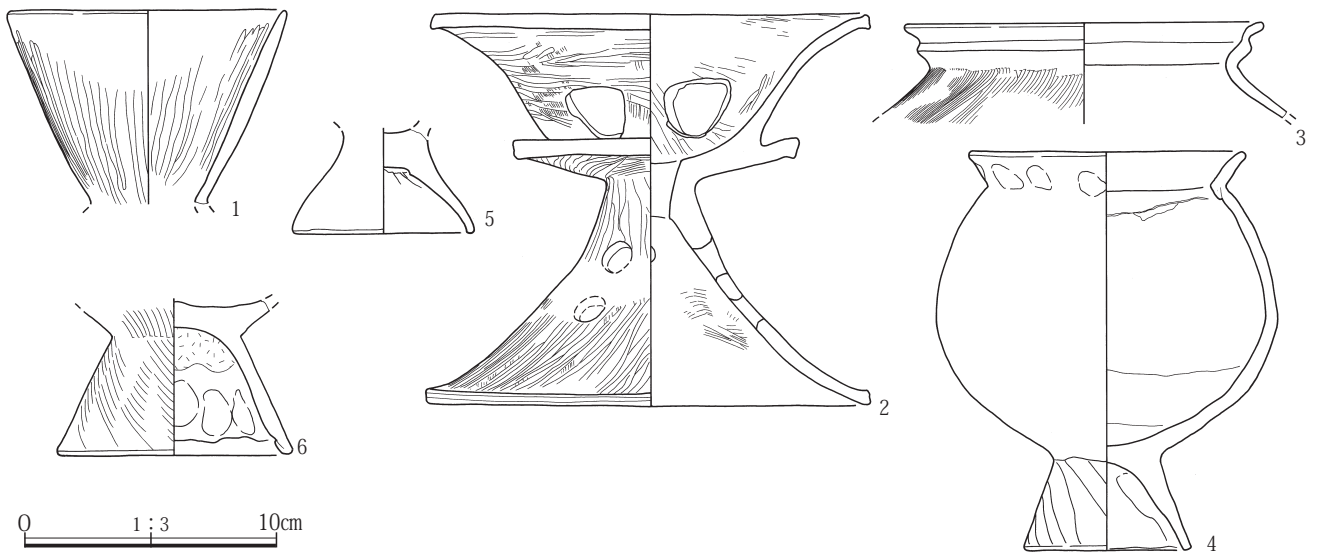


36号住居

- 1 暗褐色土 洪水堆積土の砂質土を含む。1'は粘性がある。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む。2'は炭化物粒が混じる。
- 3 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を含む。



第201図 2区36号住居



第202図 2区36号住居出土遺物

37号住居(第203・204図 PL. 35-⑥、81

遺物観察表427・428頁)

19号住居に西隅を削られている。

位置 015～019-721～725グリッドにある。

規模形状 長軸長3.5m、南東側短軸長2.9mの長方形を呈している。北西辺が南東辺より80cm近く短く、台形状に歪んでいる。

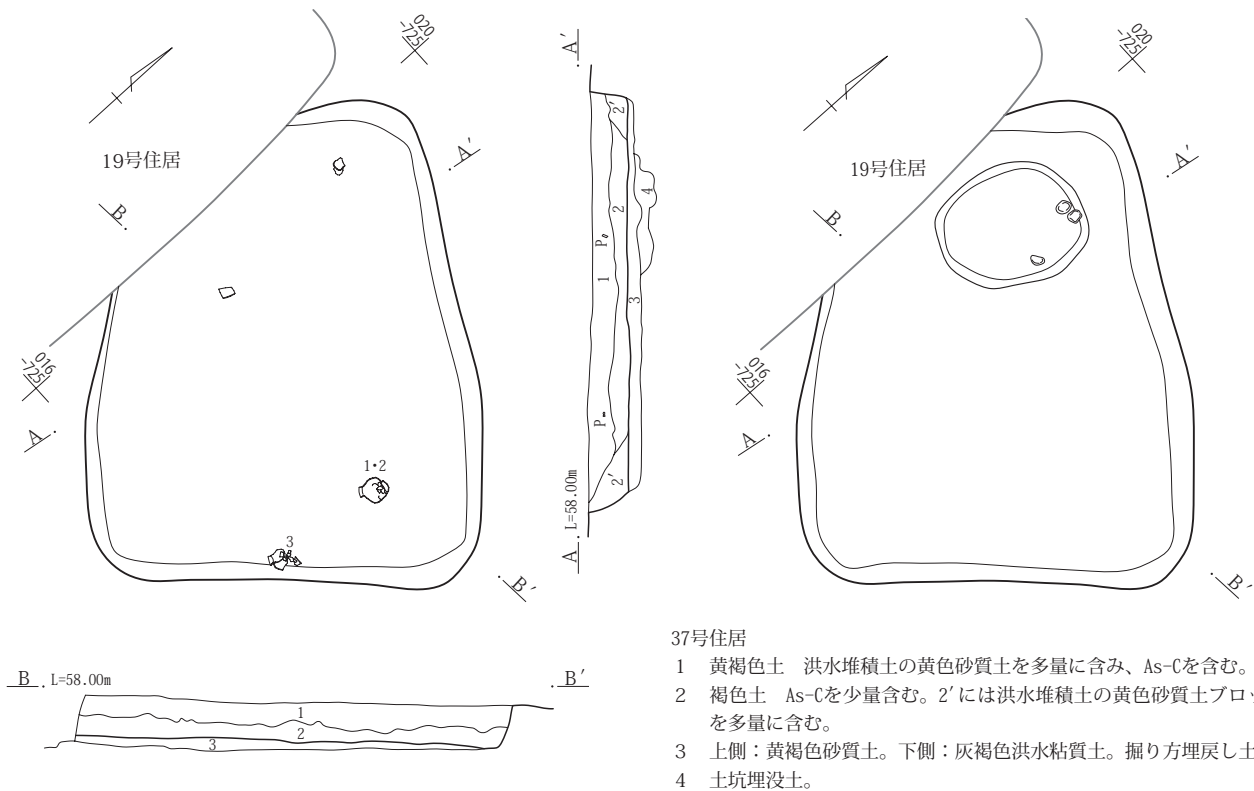
埋没土・壁 部分的に壁際から埋没した後、水平に近い

堆積となる2区に多い埋没状況が見られる。壁高は30cm前後で最も深い南西辺で35cmを測る。

方位 N-47° W。面積 復元9.08㎡

床面 東側へやや低く傾斜していて西側と5cmの比高差がある。全体に深さ8cm前後の掘り方がある。

住居内土坑 床下調査時に、住居内南西寄りに長径116cm、短径97cm、床面からの深さ25cmの楕円形の窪みを確認した。底面は凹凸が多く、壁際に川原石が見られた。



37号住居

- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を多量に含み、As-Cを含む。
- 2 褐色土 As-Cを少量含む。2'には洪水堆積土の黄色砂質土ブロックを多量に含む。
- 3 上側：黄褐色砂質土。下側：灰褐色洪水粘質土。掘り方埋戻し土。
- 4 土坑埋没土。

第203図 2区37号住居

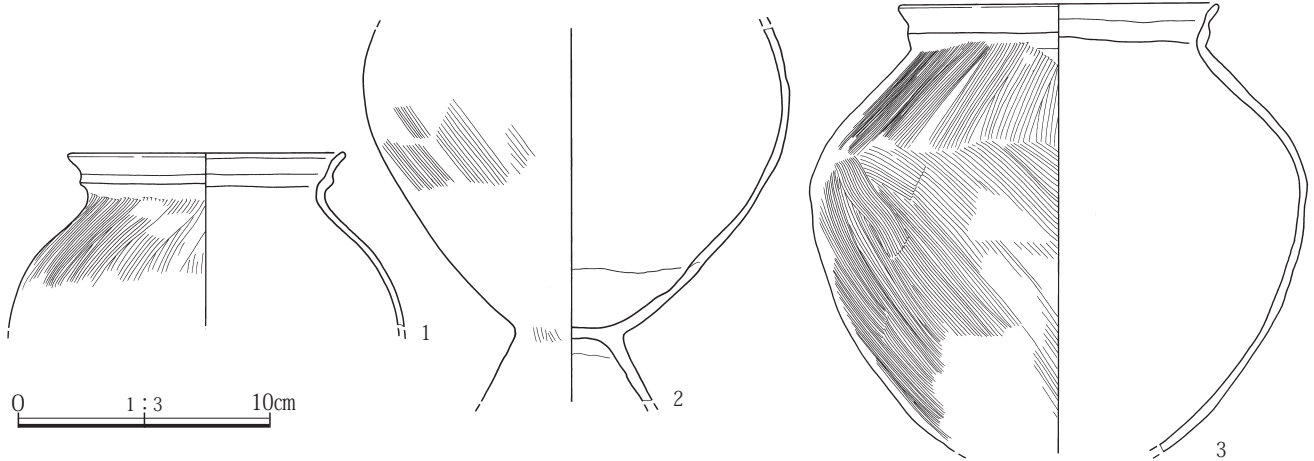
掘り方にも前出する別遺構の可能性はある。

その他 19号住居に前出し、45・46号住居に後出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 南東壁寄り出土の土師器台付甕3点を図示した。いずれも床面より20cm以上高い位置の出土である。図示

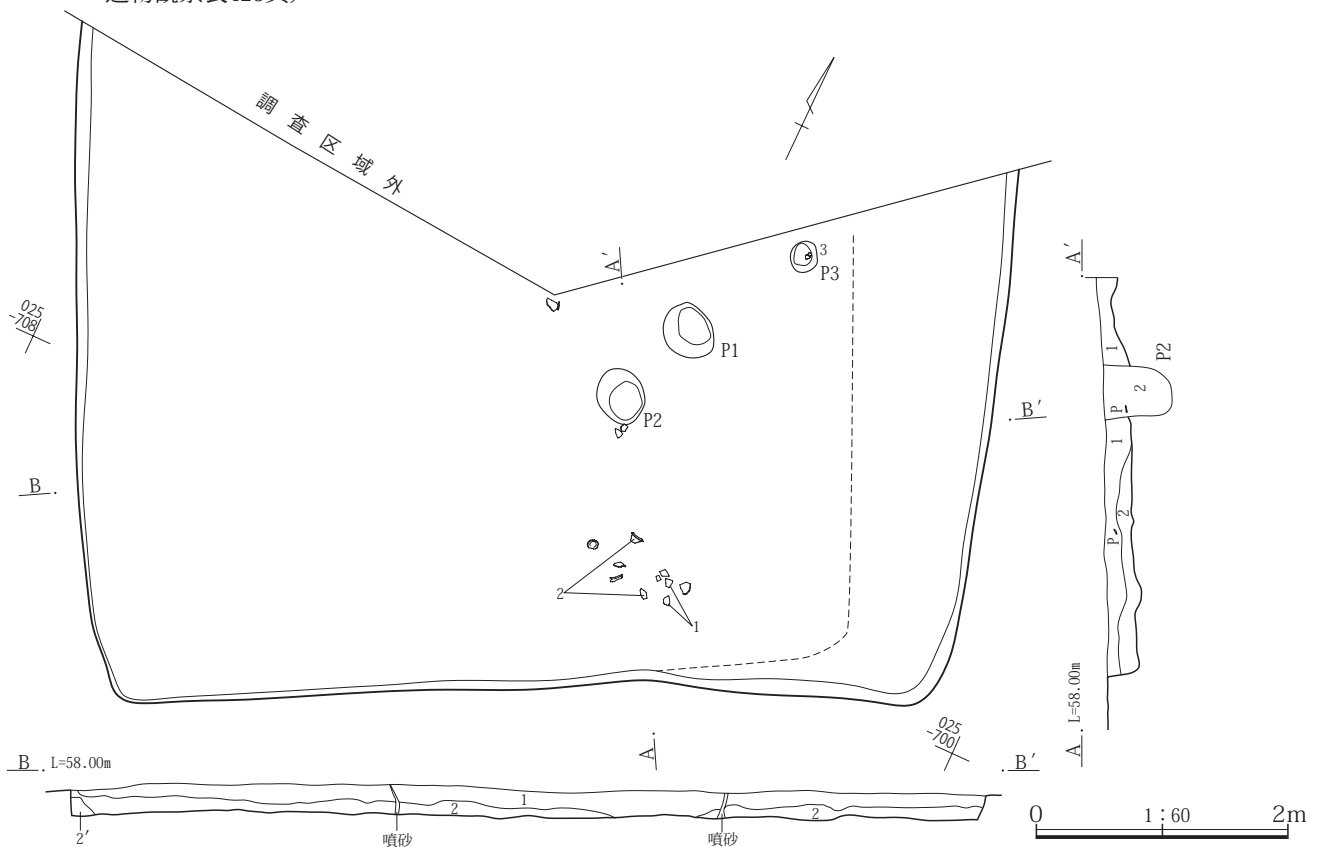
した以外に重量で0.8kgの土師器を出土している。

所見 本住居に確実に伴う遺物を持たないが、出土土器は最大径が胴上部にある4世紀後半の台付甕である。方向が異なるが、西側6mの位置にある36号住居に規模・形状が近似している。



第204図 2区37号住居出土遺物

38号住居(第205・206図 PL. 35-⑦・⑧
遺物観察表428頁)



38号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	45×39×36	別遺構か
2	45×38×30	別遺構
3	24×21×20	別遺構か

38号住居

1 暗褐色土 As-Cを含む。

2 灰褐色土 洪水堆積土の黄色土ブロックを含み、2'では多量に混入する。

第205図 2区38号住居

調査区北隅にあって全容を把握できていない。噴砂の痕跡が比較的良く見られる。

位置 022～029-700～709グリッドにある。

規模形状 東西軸長7.3m、南北軸長5.2m以上の大型住居である。北辺が南辺より長くなり、逆台形状に歪むと想定できる。また2棟の住居の重複の可能性もある。

埋没土・壁 分的に壁際から埋没した後、水平に近い堆積となる2区に多い埋没状況が見られる。壁高は15cm前後ではば一様である。

方位 N-29° W(西辺)。 N-16° W(東辺)

面積 残存27.17㎡

床面 住居東側に小さな段差があり、2棟の住居の重複部分となる可能性がある。掘り方は見られない。

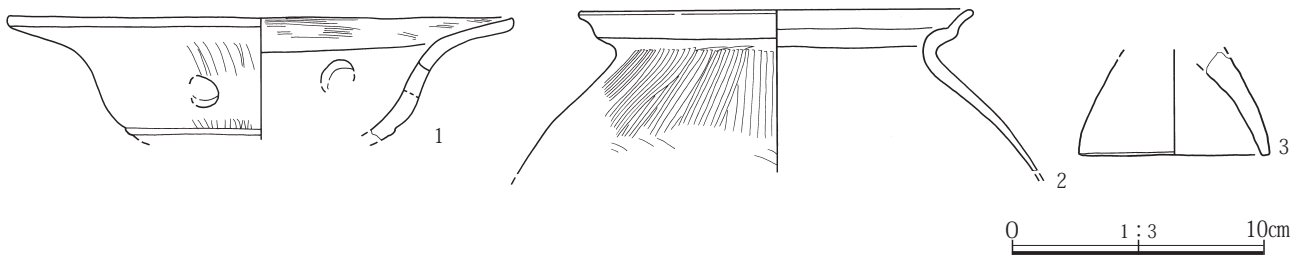
ピット 3基のピットを住居中央東よりで確認した。こ

のうちP2は住居に後出する施設であることが断面から確認できたが、他のピットは本住居に確実に伴う施設か判断できなかった。埋没土はP2に近く、時期の異なる遺構である可能性が高い。

その他 炉・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 図示できたのは3点で器台1は床上20cm前後、台付甕2は床上9cmの高さの出土である。台付甕3はP3上にあたる位置で出土したが、他の埋没土内破片と接合したものでP3の時期を推定する資料とはならない。図示した以外に重量で1.6kgの土師器を出土している。

所見 出土遺物は4世紀代の土師器である。B断面に表れる床面の段差から重複する住居を想定し、平面図に破線で示した。床段差はA断面北側にも見られ、明確な根拠のあるものではない。



第206図 2区38号住居出土遺物

39号住居(第207図 PL.36-①・② 遺物観察表428頁)

2区南東隅にある。東側の大半が調査区域外で住居の一部しか調査できていない。変則的なプランや掘り方から2棟の住居を想定し、南側を39A号住居、北側を39B号住居とし、本文ではA号住居・B号住居と呼称した。

位置 010～019-690～694グリッドにある。

規模形状 北西隅が極端に鈍角に開いており、床面や埋没土からは区別できないが1棟の住居プランとしては不自然で、複数遺構の重複を考えた。掘り方の窪みから南辺の長さ3.8mほどのA号住居が全体の窪み内の南側に想定できるようで、平面図に破線で図示した。北側には軸方向がやや西側へ傾くB号住居を想定し、薄線で延長部分を表したが不明瞭である。

埋没土・壁 単層で住居間の重複は確認できない。浅い壁で、壁高は最も深い西辺でも8cmしかない。

方位 A号住居N-65° E。 B号住居N-39° E。

面積 全体残存11.73㎡

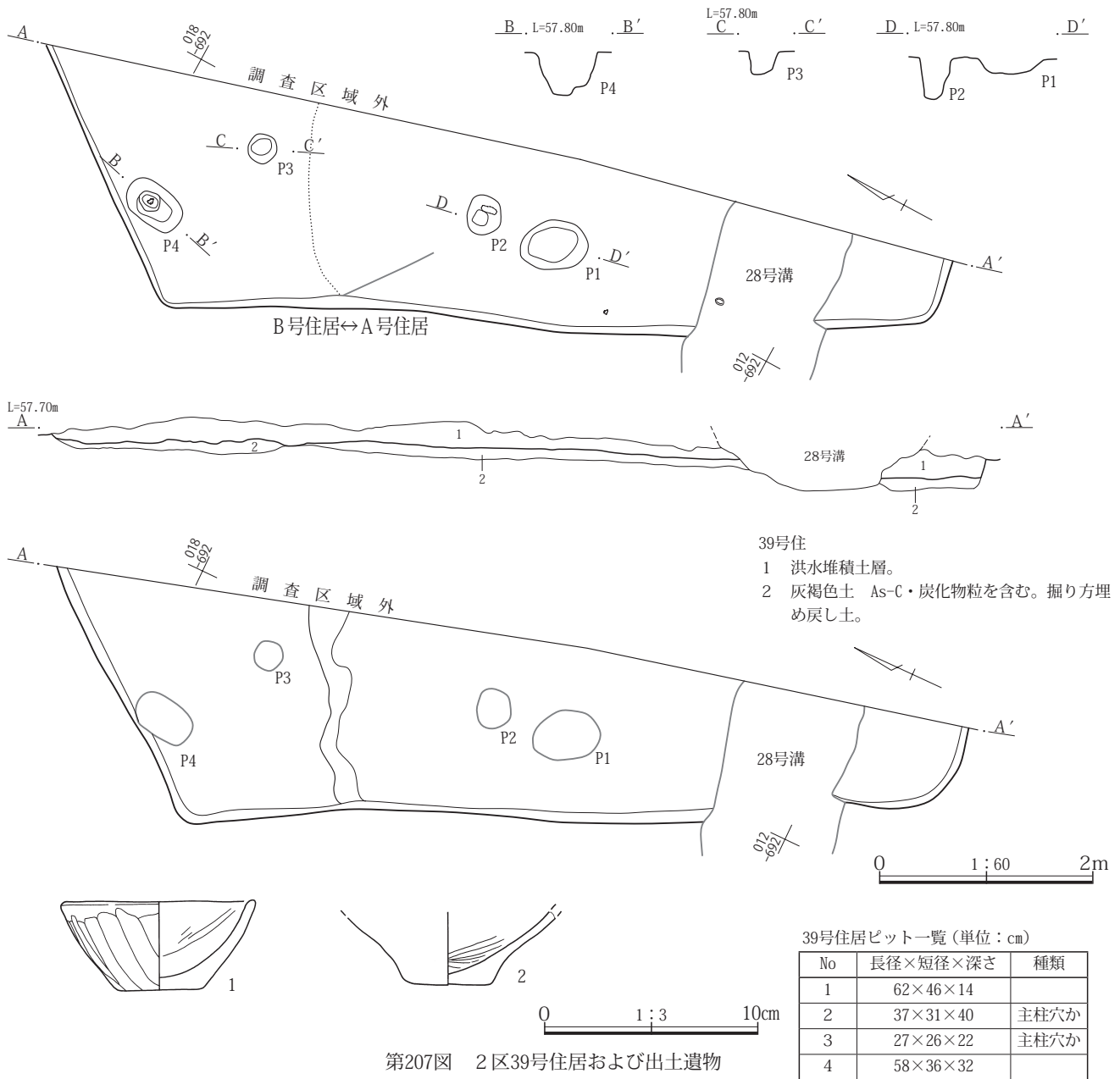
床面 調査できた範囲では中央付近がやや高く、北隅が3～5cm、南隅は15cm近く低くなっている。南隅には貯蔵穴状の窪みか別遺構が存在した可能性もあろう。深さ8cm前後の掘り方がA号住居では全域に、B号住居では不均等に見られる。

ピット 4基のピットを確認した。P1・2がA号住居、P3・4がB号住居に伴うものと考えられ、配置からP2・P3が支柱穴となる可能性がある。

その他 1・2区集落南側区画溝となる可能性のある28号溝に前出している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 広い遺構だが出土遺物は少なかった。甕2がP2内から出土し、鉢1は埋没土内遺物である。図示した2点以外に重量で0.4kgの土師器を出土している。

所見 時期決定のための資料に欠くが、西側に隣接する22号住居に近接する4世紀の住居と推測する。



第207図 2区39号住居および出土遺物

40号住居(第208図 PL. 36-③・④、81 遺物観察表428頁)

2区東側の住居が密集する一画にある。

位置 013～019-705～710グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.45m、東西軸長4.55mの方形を呈している。北東隅は残存する整美な他の二隅に比べ著しく歪んでおり、直角に近い隅が崩れた可能性がある。本来は正方形の住居と想定される。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁高は10cm前後である。

方位 N-28° W。面積 復元19.26㎡

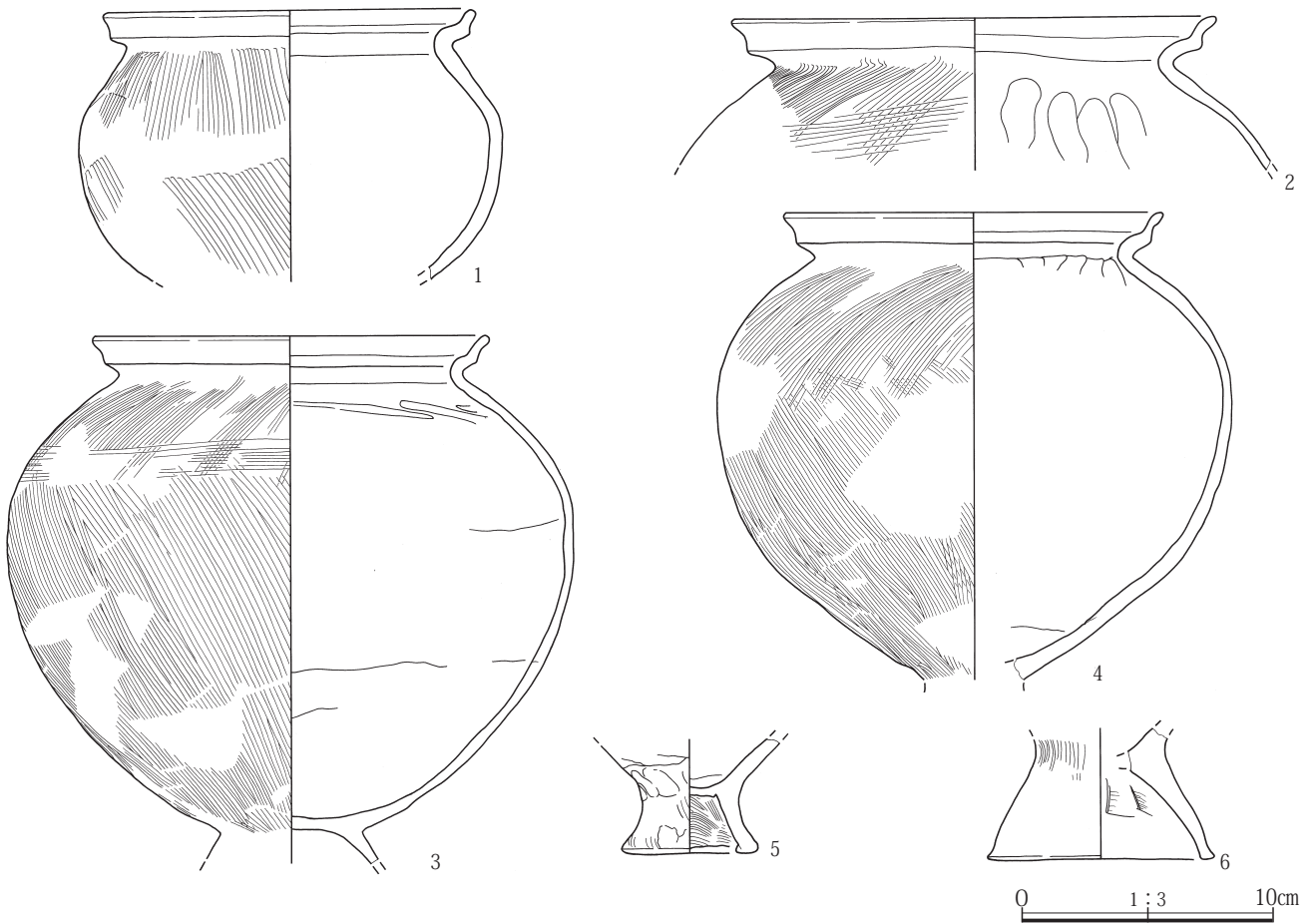
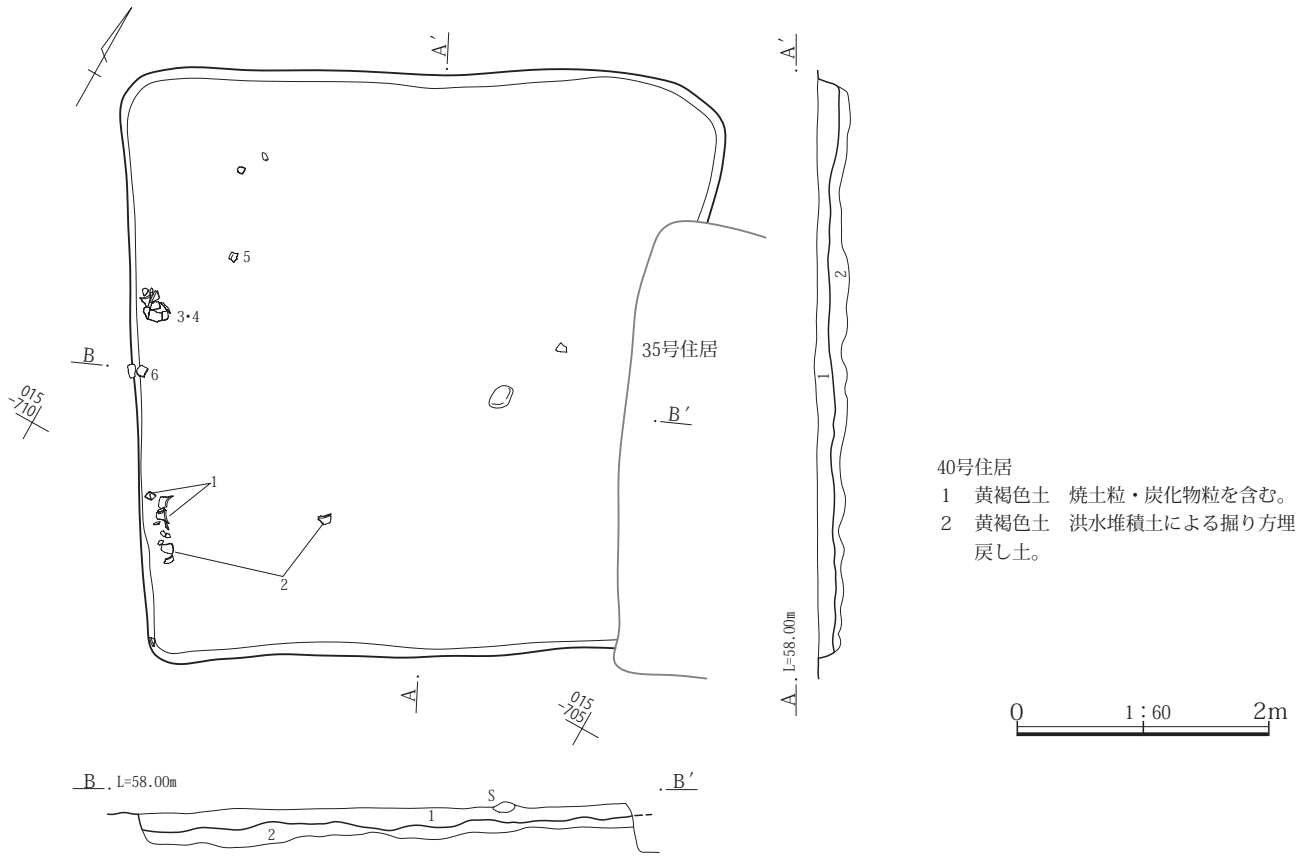
床面 強い凹凸の多い床面で、全体では南西側へ低く傾斜し北東側と5cm前後の比高差がある。全体に深さ5～

17cmの掘り方がある。

その他 3・35号住居に前出し、41・50号住居に後出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 西壁際を中心に出土した甕類6点を図示した。西壁に密着するようにして出土した4点の内、1は床直上、3・6も床上10cm未満の高さで本住居に確実に伴う遺物である。4も同じく10cm未満の高さの遺物であるが、20・30号住居や65号土坑出土破片とも接合している。図示した以外の破片にも供膳土器は少なく、甕類を中心に重量で0.7kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。



第208図 2区40号住居および出土遺物

41号住居(第209図 PL. 36-⑤、81 遺物観察表428頁)

東・西の両隅を後出する30・40号住居に大きく壊されているが、規模形状の概略は把握できる。

位置 010～015-705～710グリッドにある。

規模形状 長軸長4.4m、短軸長3.3mの長方形を呈している。南西隅が鈍角に開き、西辺が東辺より50cm前後短い台形状に歪むと想定される。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は20cm前後を測る。

方位 N-34° W。面積 復元13.80㎡

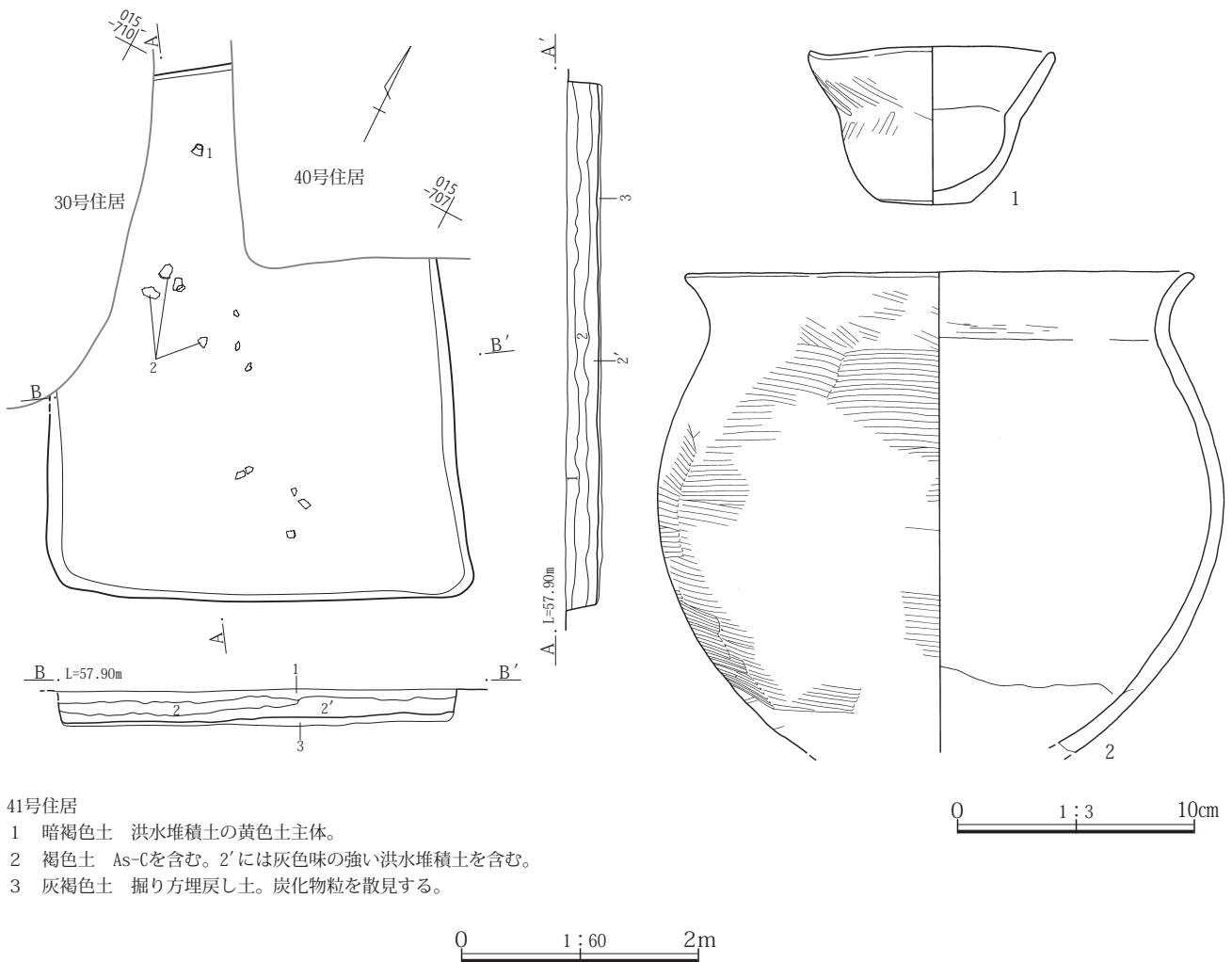
床面 南隅周辺が5cm前後窪んでいるが、他はほぼ水平

な床面である。全体に深さ2～8cmの比較的平坦な掘り方がある。

その他 30・40号住居に前出し57号住居に後出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 住居内の全域から遺物が出土しているが、図示できたのは土師器2点である。埴1は北側床上4cmの高さ出土破片から復元し、甕2は中央付近に散乱する床直上から床上5cmの破片を接合し、さらに30号住居出土破片とも接合している。図示した以外に重量で1.4kgの土師器を出土している。

所見 4世紀代の住居である。



第209図 2区41号住居および出土遺物

42号住居(第210図 PL.36-⑥、81 遺物観察表428頁)

2区東側の住居間重複が多い一画の南寄りにあり、南側を大きく壊され全容を把握できていない。

位置 015～020-710～719グリッドにある。

規模形状 東西軸で6.3m、南北軸3.8m以上で2区の他住居規模にあてはめると正方形に近いプランが想定される。北東隅が鈍角に開き台形状に歪みそうである。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。確認できる壁高は30cm前後を測る。

方位 N-64° E。 **面積** 残存20.34㎡

床面 炭化物粒等の見られる凹凸の多い不整な床面だった。住居東側周辺を除き深さ最大25cmの掘り方があった。東壁下に溝状の窪みがあるが、30号住居掘り方等で確認された溝の続きで本住居の壁溝とはならない。

ピット 北西隅寄りに径37×29cmの楕円形で床面からの

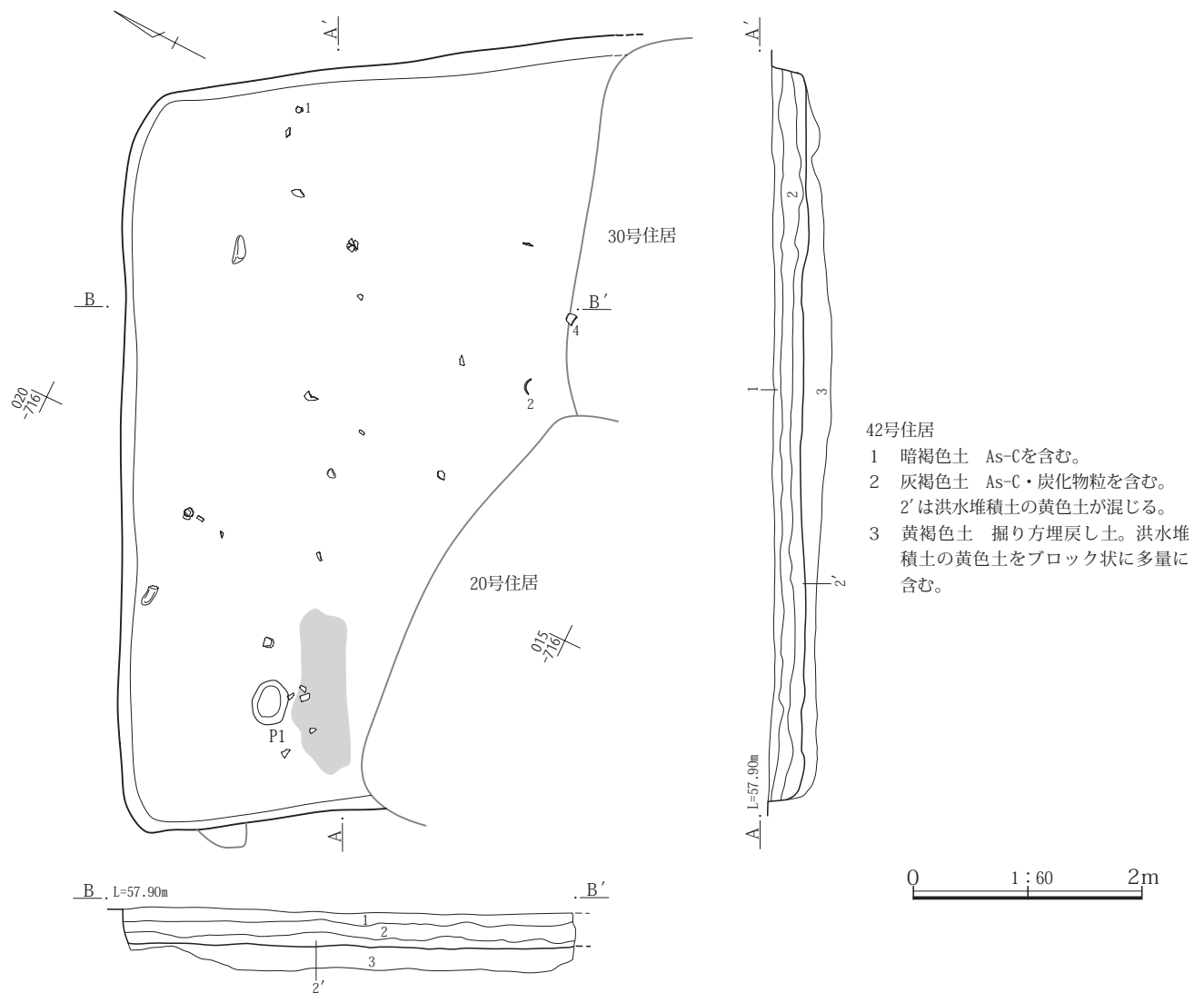
深さ19cmのピットを確認している。配置や規模から柱穴とは考えにくい。掘り方調査時にもピット状のわずかな窪みを確認したが、明瞭なものではない。

炉 西壁寄りP1南脇の床直上に広範囲に炭化物粒が分布していたが、炉と確認はできなかった。

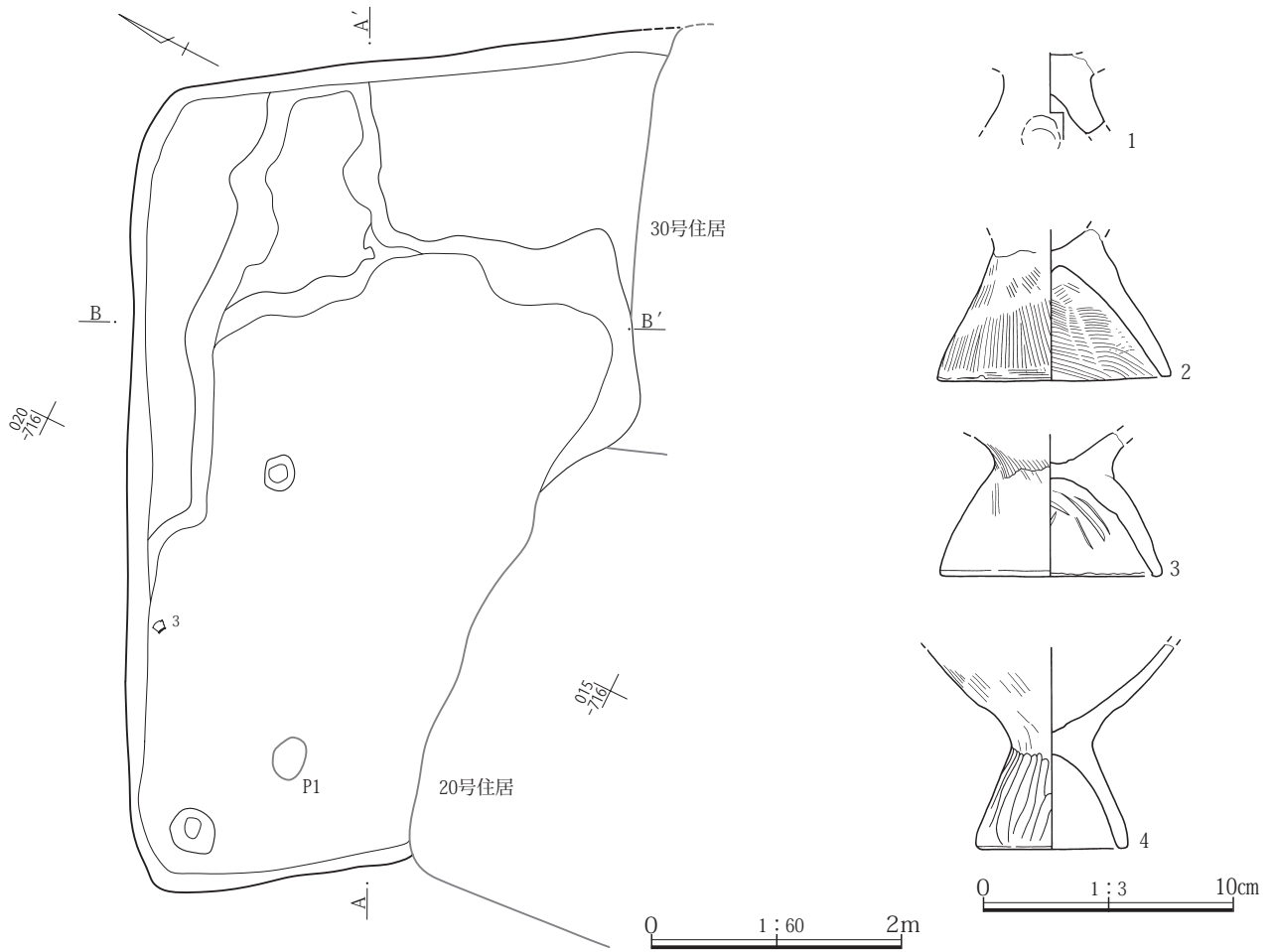
その他 3・20・30号住居に前出し、49・50号住居に後出している。壁溝は確認できない。

遺物 完形近くまで復元できた遺物がなかった。台付甕を中心に土師器4点を図示した。高杯1と台付甕2が床上5cm前後の出土で、台付甕4は床上16cmの破片が30号住居出土破片と接合している。台付甕3は掘り方調査時の出土である。図示した以外に重量で0.9kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。



第210図 2区42号住居



第211図 2区42号住居掘り方および出土遺物

43号住居(第212・213図 PL. 36-⑦・⑧、81

遺物観察表429頁)

中世館堀の1号溝屈曲部分と重なり、18号住居にも大きく壊され全容は把握できない。噴砂の痕跡が比較的良く見られる。

位置 021～027-730～737グリッドにある。

規模形状 1棟の住居であれば東西軸長7.3m以上、南北軸長6.4m以上の大型住居となる。北西隅部分は不明瞭で規模の推定を困難にしている。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。高さ6cm前後の浅い壁である。

方位 N-61° W。面積 残存24.55㎡

床面 細かな凹凸があるが、全体ではほぼ水平な床面である。深さ10cm前後の掘り方が全面に確認できる。P1上層には貼床状の埋戻し土が見られる。

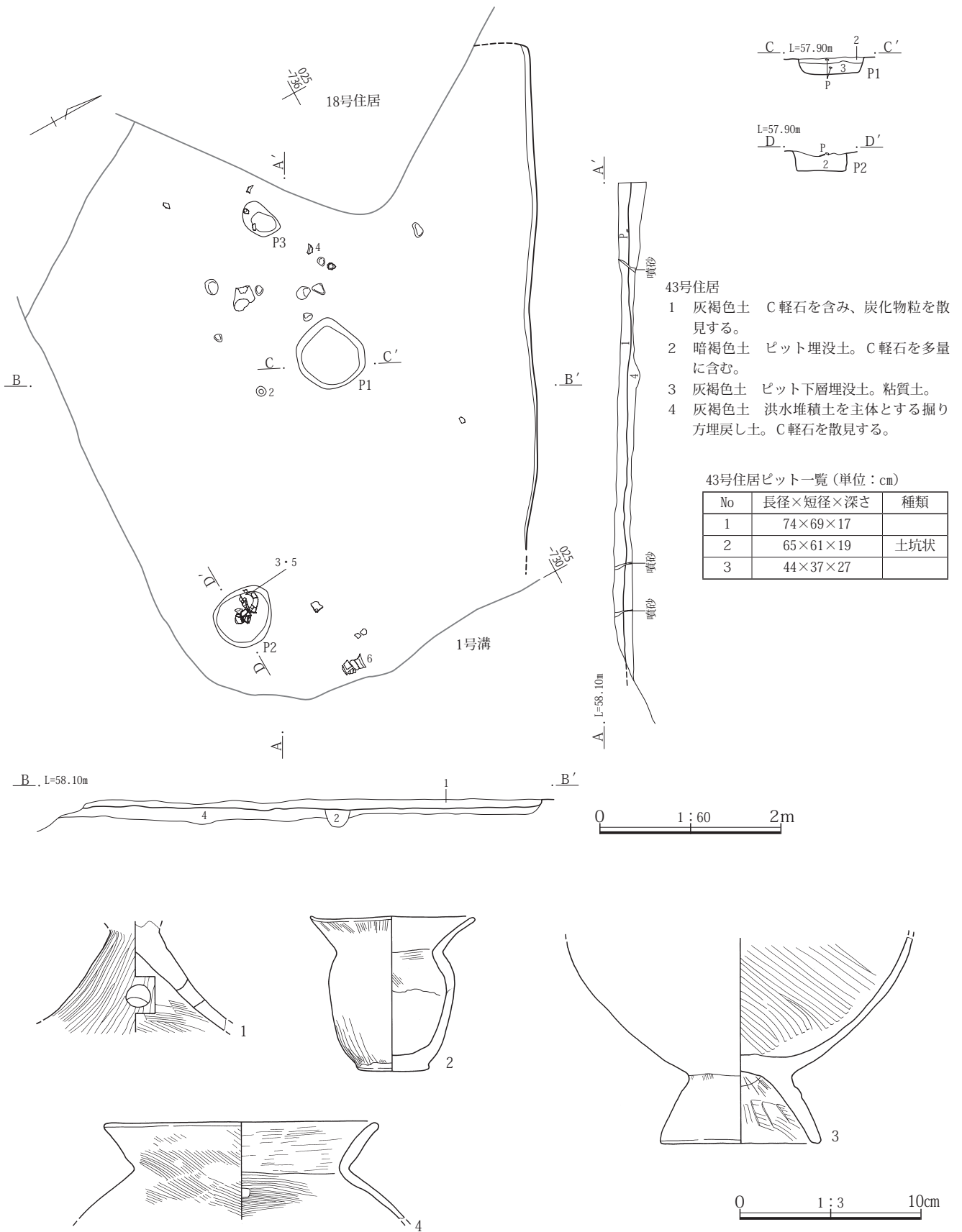
ピット 3基のピットを確認している。P1・2は底面

の平坦な土坑状でP3は柱穴状であるが、配置や形状から主柱穴と考えられるピットはない。

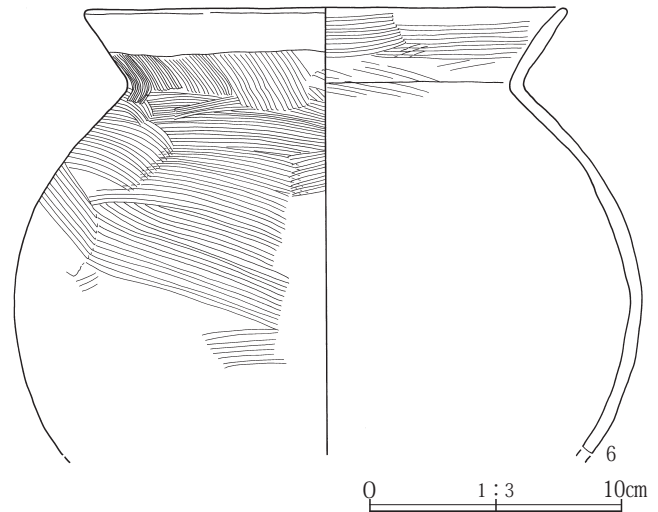
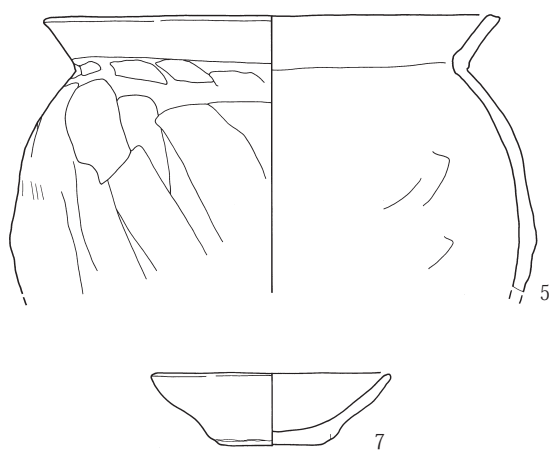
その他 18号住居・1号溝に前出している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 浅い遺構であるが遺物は比較的豊富で7点の土師器を図示した。P2内に遺物が多く、台付甕3・甕5が出土している。床直上の遺物はなく鉢2・甕4が床上3cmの高さの出土である。手捏ね土器7が掘り方調査時の出土で、他は床面より10cm以上高いか埋没土取り上げの遺物である。図示した以外に重量で4.7kgの土師器を出土しているが、本住居北側の3号土器集中地点(本文357頁)の土器も含まれている。

所見 不明瞭な部分が多く、1棟の住居である確証はないが、出土遺物は4世紀代である。



第212図 2区43号住居および出土遺物(1)



第213図 2区43号住居出土遺物(2)

45号住居(第214図 PL. 37-① 遺物観察表429頁)

2区東側の住居間重複の多い一画の南東隅にあり、本住居南側は集落が途切れている。北側を19・37号住居に壊され、全容は把握できない。

位置 013～016-723～725グリッドにある。

規模形状 長軸長3.4m以上、短軸長2.7mの長方形を呈す小型住居である。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は20cm前後である。

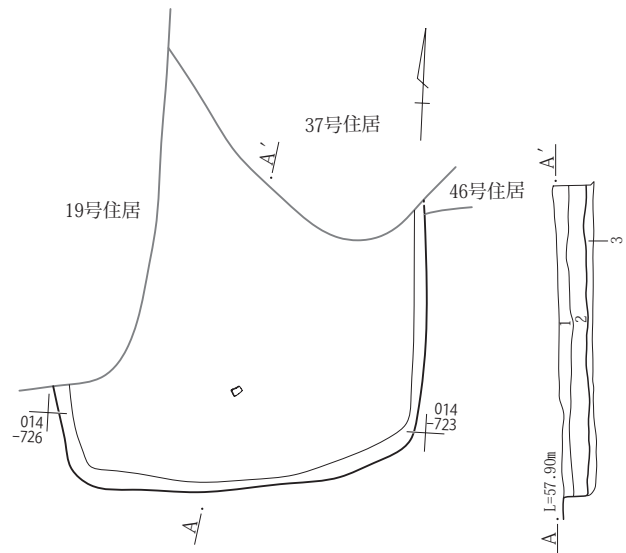
方位 N-5° W。面積 残存5.30㎡

床面 細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床面である。全体に深さ5cm前後の平坦な掘り方がある。

その他 19・37号住居に前出し、46号住居に後出している。炉・壁溝・ピット等は確認できない。

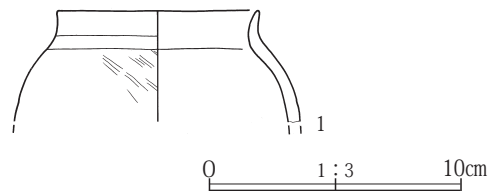
遺物 出土遺物は少なく図示できたのは埋没土内出土の甕1のみで、他に重量で0.4kgの土師器が出土した。

所見 時期決定のための資料をもたないが、後出する住居は4世紀代であり、2区の集落でも最も古い住居の中の1棟と推定できる。



45号住居

- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色土を含む。
- 2 灰褐色土 洪水堆積土の粘質土でAs-C・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 3 黄褐色土 掘り方埋戻し土で洪水堆積土の砂粒を含む。



第214図 2区45号住居および出土遺物

46号住居(第215図 PL. 37-② 遺物観察表429頁)

重複が多く不明瞭な部分があるが、全容は推測できる。

位置 015～024-719～726グリッドにある。

規模形状 長軸長7.5m、短軸長5.4mの長方形を呈して

いる。西辺がやや短い台形状に歪むと思われる。各辺には屈曲があり、整美さに欠ける。

埋没土・壁 水平に近い堆積で人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は最も深い東辺・西辺で30cmを測る。

方位 N-20° W。 面積 復元40.01㎡

床面 細かな凹凸が多く不整だが、全体では水平な床面である。ほぼ全体に深さ5cm前後の平坦な掘り方がある。

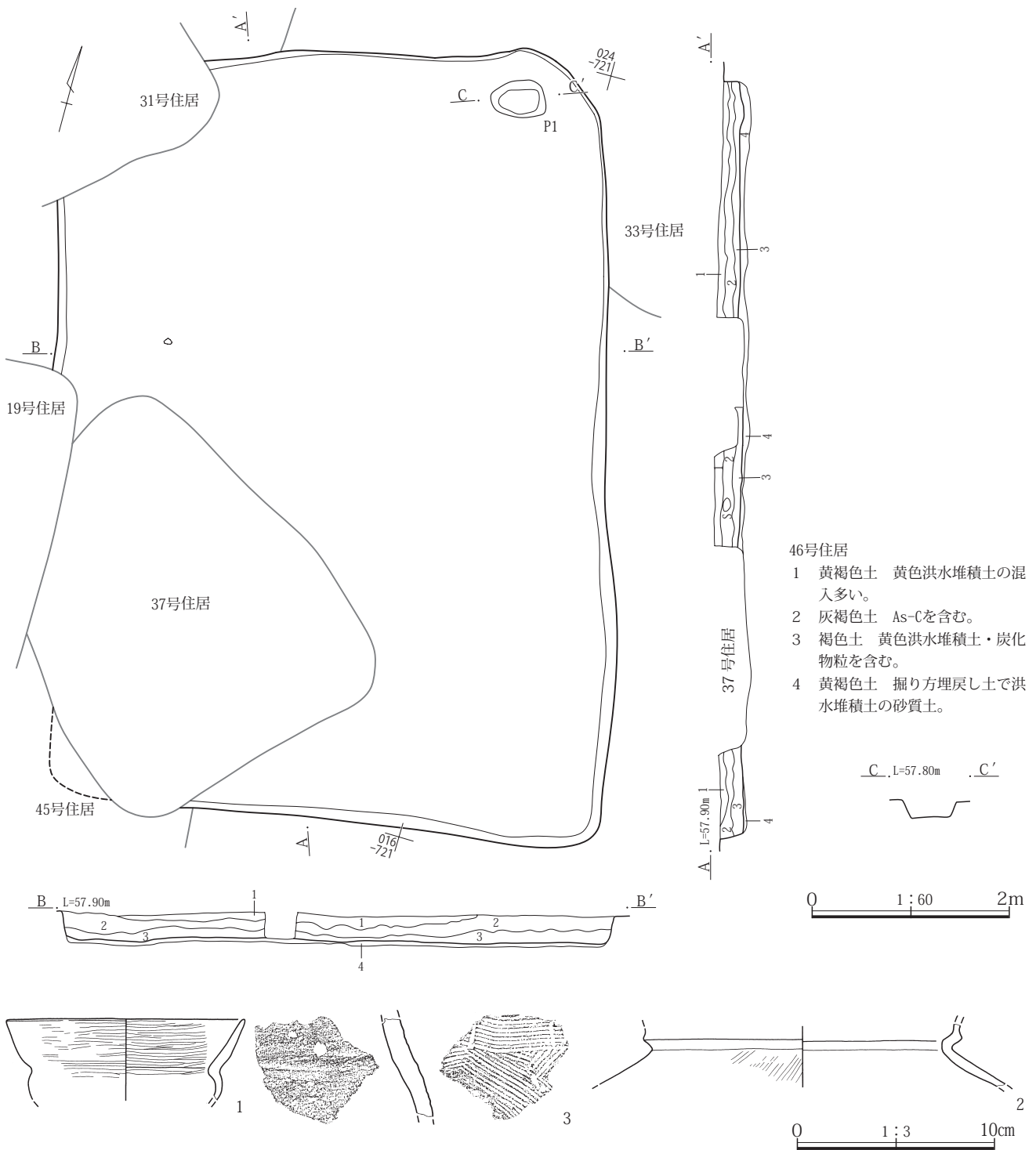
ピット 北東隅にP1を確認している。径53×37cm、床面からの深さ17cmの不明瞭な施設で、配置から貯蔵穴の可能性はあるが柱穴とは考えにくい。

その他 31・33・37号住居等に前出し、49号住居に後出

している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 埋没土内出土の埴1と台付甕2土師器2点および弥生土器片3を図示した。これ以外に重量で0.7kgの土師器を出土している。

所見 土師器2点は埋没土内出土の小破片であるが、時期は同一で、本住居を4世紀代と推定できる。



第215図 2区46号住居および出土遺物

47号住居(第216図 PL. 37-③ 遺物観察表429頁)

2区北東隅で確認した住居で大半が調査区域外となり、住居南東側の一部しか調査できていない。試掘坑で南壁の一部を失っている。

位置 029～032-696～700グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.7m以上、南北軸長1.7m以上の規模である。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁高は10cm前後である。

方位 N-57° W。面積 残存5.84㎡

床面 調査範囲ではほぼ水平な床面であった。全体に深

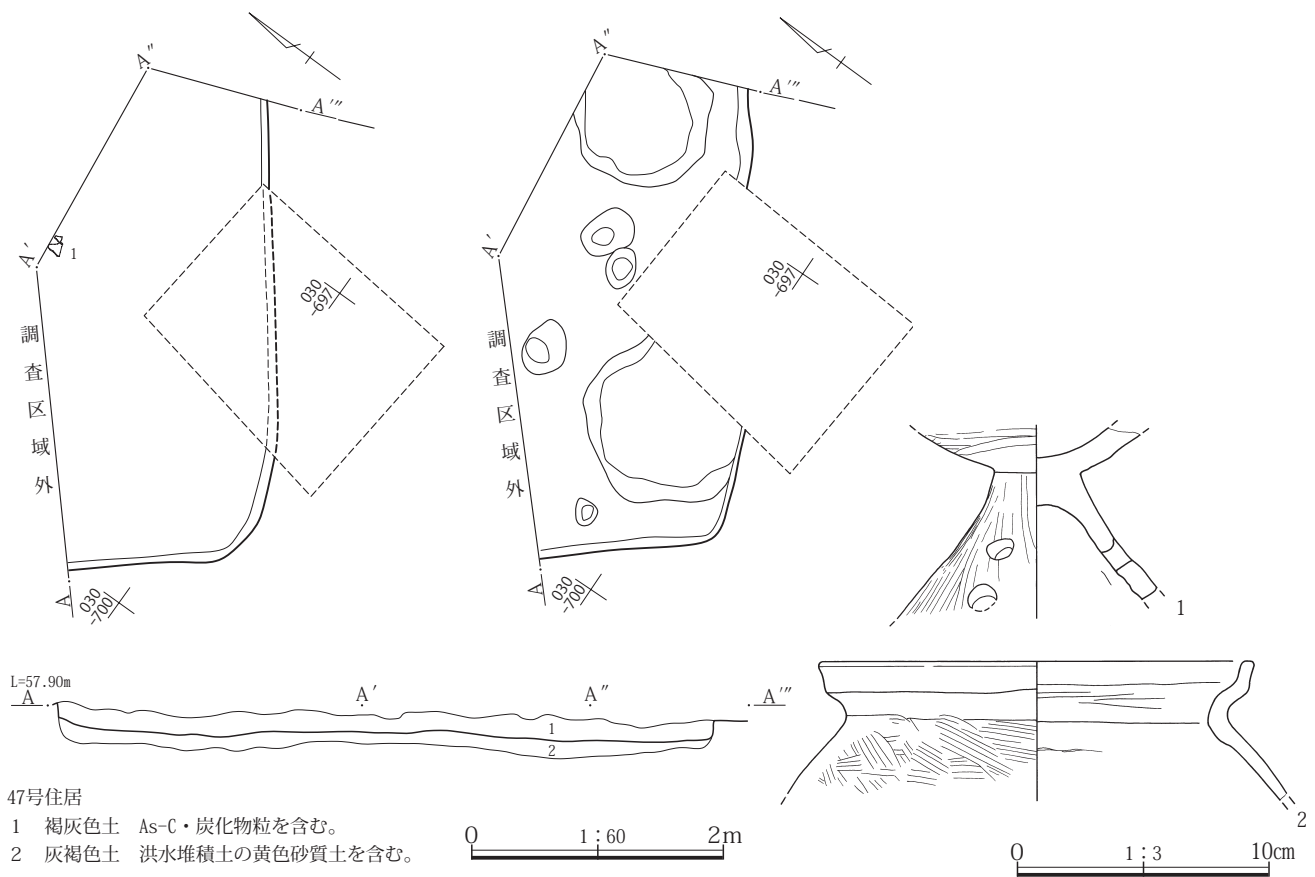
さ10cm前後の掘り方があり、深さ20cm前後の土坑状に窪む部分が2カ所あった。

ピット 掘り方調査時にピット状の窪みを多数確認しているが、いずれも深さ15cm以下の不明瞭なものでピットとして扱わなかった。

その他 炉・壁溝等は確認できない。

遺物 土師器2点を図示した。高杯1は調査範囲北隅の床直上出土、台付甕2は埋没土扱いの遺物である。図示できた遺物量に対しそれ以外に遺物は比較的多く重量で1.6kgの土師器を出土している。

所見 台付甕を伴う4世紀代の住居である。



第216図 2区47号住居および出土遺物

48号住居(第217図 PL. 37-④・⑤、81・82

遺物観察表429頁)

2区東寄りの北側調査区境付近で南隅付近のみ確認できた遺構で、きわめて不明瞭である。

位置 027～029-714～717グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.2m以上、南北軸長1.3m以上の規模である。

埋没土・壁 水平に近い堆積で人為的な埋戻しの痕跡は

確認できない。壁高は20cm前後である。

方位 N-47° W(南西辺)。面積 残存1.84㎡

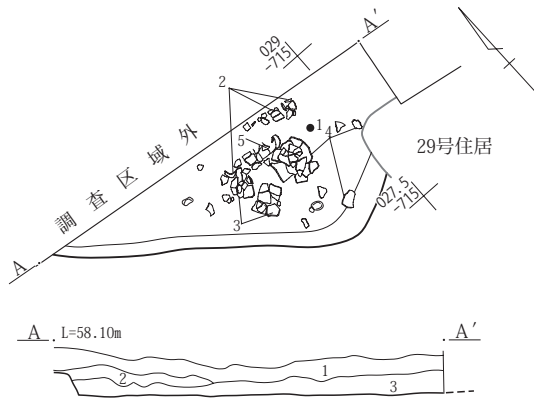
床面 凹凸の多い床面で調査範囲内でも東側が10cm前後低くなっている。掘り方は全面に見られ、西側が13cm前後、東側が5cm前後の深さである。

その他 29号住居に前出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 狭い範囲の遺物だが完形近くまで復元できた比較

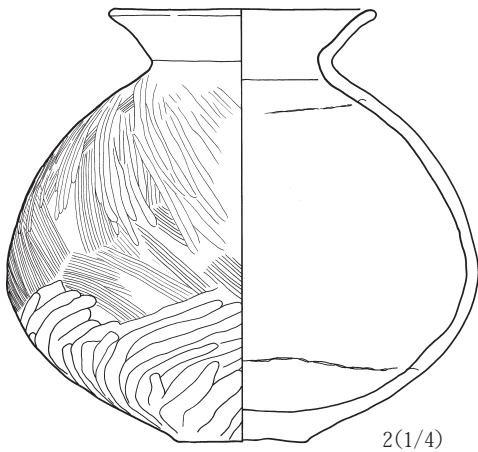
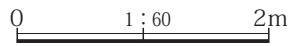
的大型の壺類を含め土師器5点を図示した。床直上で出土した遺物はなく、床面より14～25cm高い位置の遺物である。図示した以外に重量で0.9kgの土師器を出土している。

所見 出土遺物は本住居に伴うか埋没途中に置かれたものか判断できなかったが、最大径が胴部下位にある壺3を伴う4世紀代の土師器である。

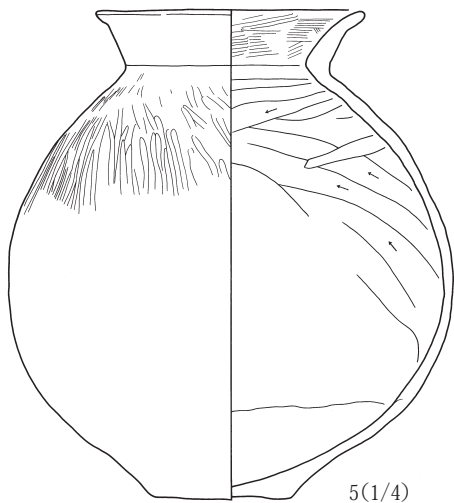


48号住居

- 1 灰褐色土 As-C・炭化物粒を含む。
- 2 黄褐色土 洪水堆積土の黄色土を含む。
- 3 灰褐色土 As-Cを散見する。



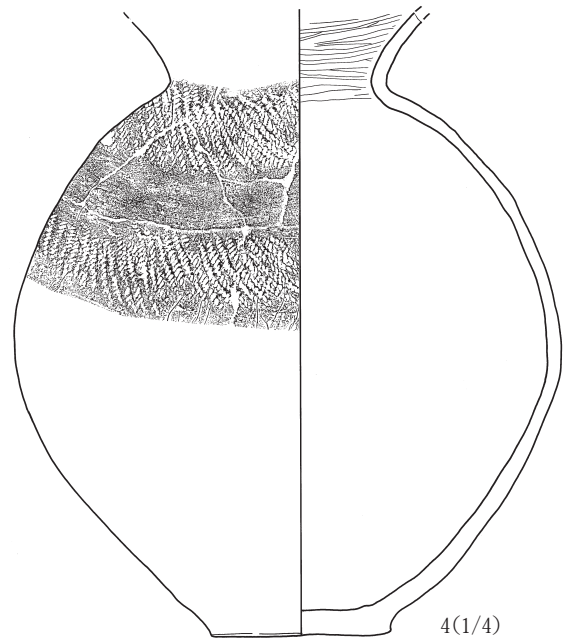
2(1/4)



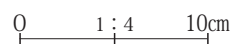
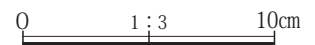
5(1/4)



3(1/4)



4(1/4)



第217図 2区48号住居および出土遺物

49号住居(第218図 PL. 37-⑥ 遺物観察表430頁)

2区東側の住居間重複の多い一画にあり、20・42・46号住居などに広く壊されている。

位置 013～021-713～720グリッドにある。

規模形状 南北軸長7.4mで東西軸長も同規模の正方形に近い形状の大型住居が想定される。北東隅が鈍角に開いており台形状に歪むと思われる。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は20cm前後あり、最も深い東辺で28cmを測る。

方位 N-8° W。 **面積** 残存21.77㎡

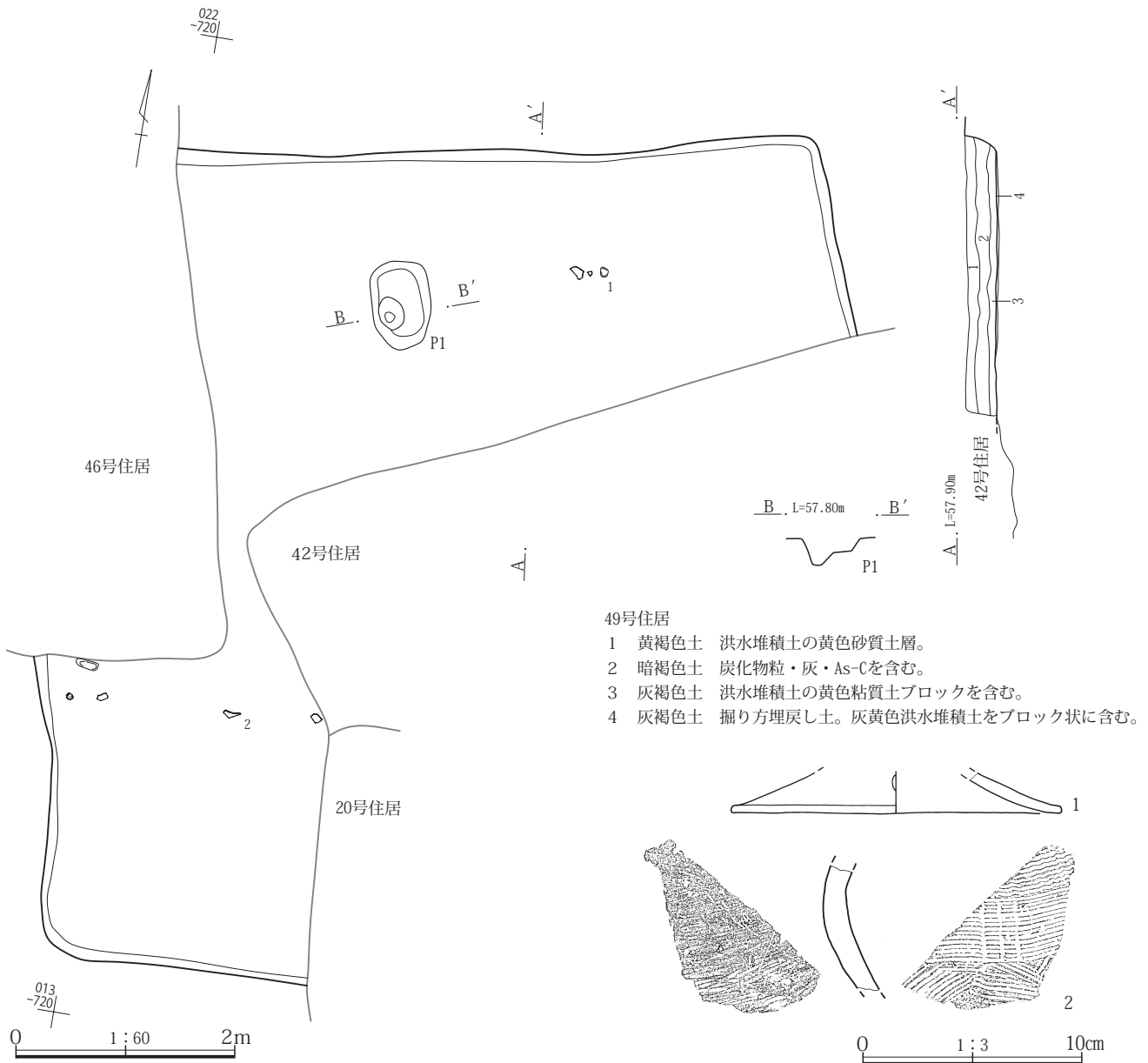
床面 比高差最大9cmの波打つような凹凸がある。掘り方は認められない。

ピット 北辺中央下から径80×57cmのP1を確認している。このピットは2段底状で、上面は住居床面からの深さ10cm前後の土坑状を呈し、南西隅付近に住居床面からの深さ25cmの柱穴状に窪んでいる。炉が想定される位置にあるが、被熱痕や灰・炭化物粒の混入は見られない。

その他 20・42・46号住居に前出し、50号住居に後出している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 図示できた土師器は埋没土内出土の器台1のみで、埋没土内の弥生土器片も併せて示した。図示した以外にも重量で0.6kgの土師器を出土しており、接合率の低い住居だった。

所見 確実に本住居に伴う遺物を持たないが、出土破片や重複住居の時期から4世紀代の住居と推定できる。



第218図 2区49号住居および出土遺物

50号住居(第219図 PL. 37-⑦ 遺物観察表430頁)

4区東側中央の住居間重複の激しい一画にあり後出住居に囲まれているが、比較的深い遺構で住居規模形状の概略は把握できた。

位置 016～023-709～715グリッドにある。

規模形状 長軸長6.2m、短軸長4.5mで、各辺が直線的な整美な長方形を呈している。南東辺がやや鈍角に開き気味で台形状に歪むようだ。

埋没土・壁 壁際の一部が埋没した後、水平に堆積する2区に多い堆積状態である。壁高は20cm前後で、最も深い東辺で28cmを測る。

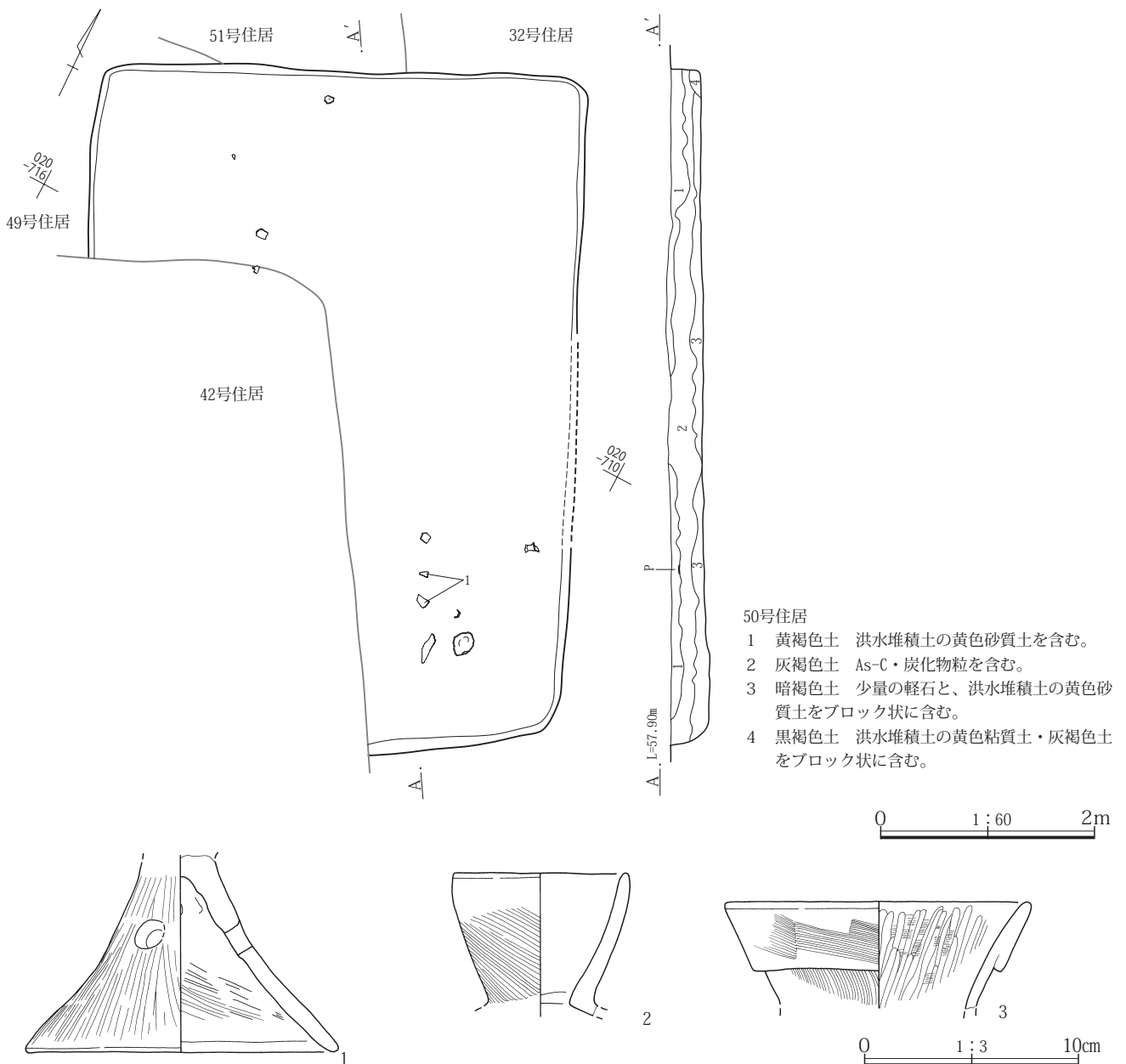
方位 N-27° W。 面積 復元 27.26㎡

床面 北・東壁下でやや高いが、他はほぼ水平な床面である。部分的に深さ5cm前後の掘り方が見られる。

その他 32・42号住居に前出し、51号住居に後出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物量は多いが図示できた土器は3点のみだった。高杯1は南寄りの床上14cmの破片が43号住居破片と接合したもので、他は埋没土内扱いの破片だった。これ以外に重量で0.5kgの土師器を出土している。

所見 確実に本住居に伴う遺物をもたないが、4世紀代の多数の住居が後出しており、4世紀前半の時期が推定できる。



- 50号住居
- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を含む。
 - 2 灰褐色土 As-C・炭化物粒を含む。
 - 3 暗褐色土 少量の軽石と、洪水堆積土の黄色砂質土をブロック状に含む。
 - 4 黒褐色土 洪水堆積土の黄色粘質土・灰褐色土をブロック状に含む。

第219図 2区50号住居および出土遺物

51号住居(第220・221図 PL. 37-⑧、82

遺物観察表430頁)

2区東側の住居間重複の激しい地点にあり、四隅を削られている。

位置 021～027-712～719グリッドにある。

規模形状 東西軸長6.4m、南北軸長5.8m以上で、正方形に近い形状の大型住居が想定される。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は25cm前後である。

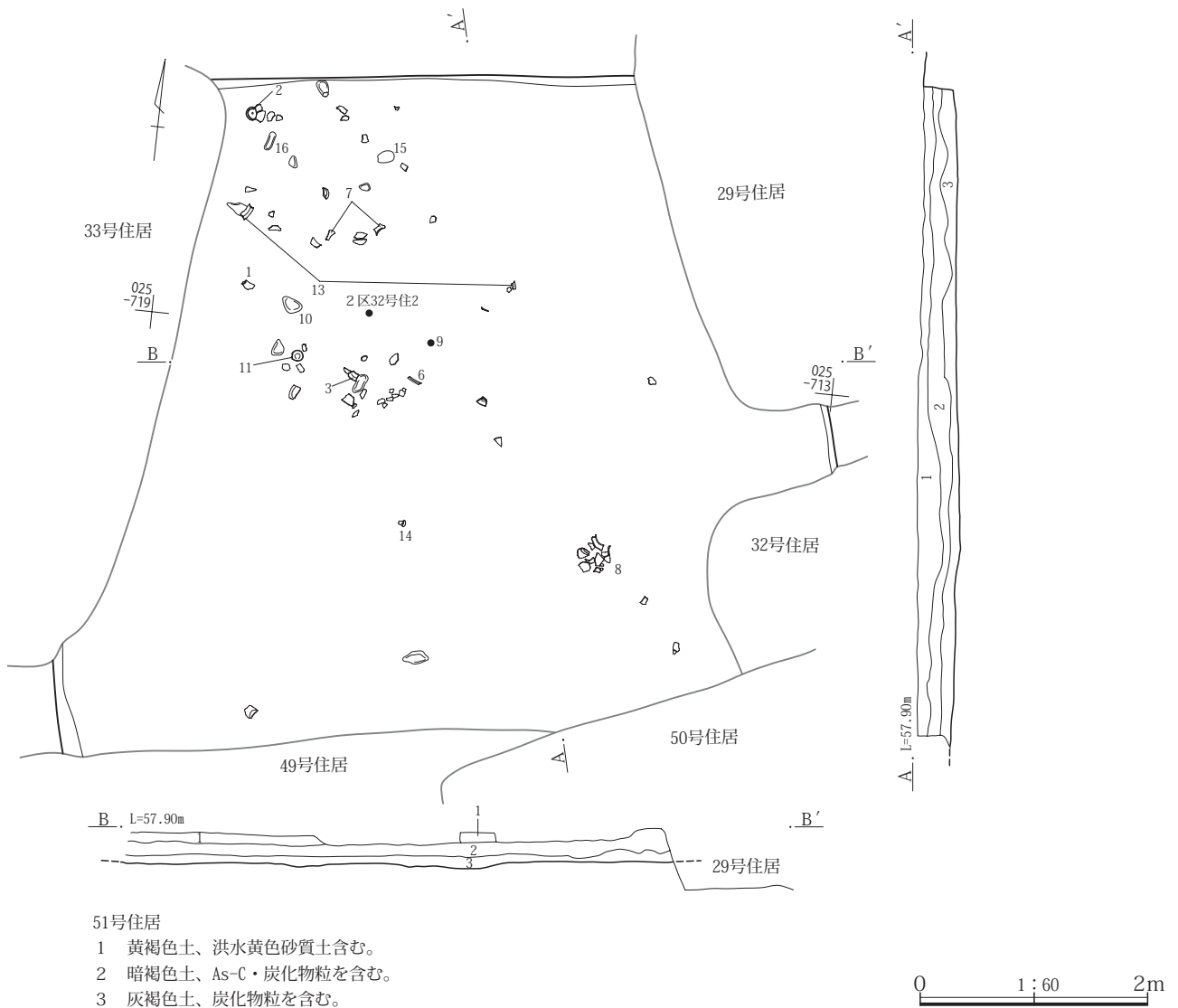
方位 N-15° W。面積 残存28.18㎡

床面 凹凸の多い床面で全体では中央付近が低い傾向があり、壁際と5cm前後の比高差がある。掘り方は古墳時代初頭の水田に伴う水路(本文345頁)と重なり不明瞭だが、深さ5cm前後の掘り方が広く見られる。

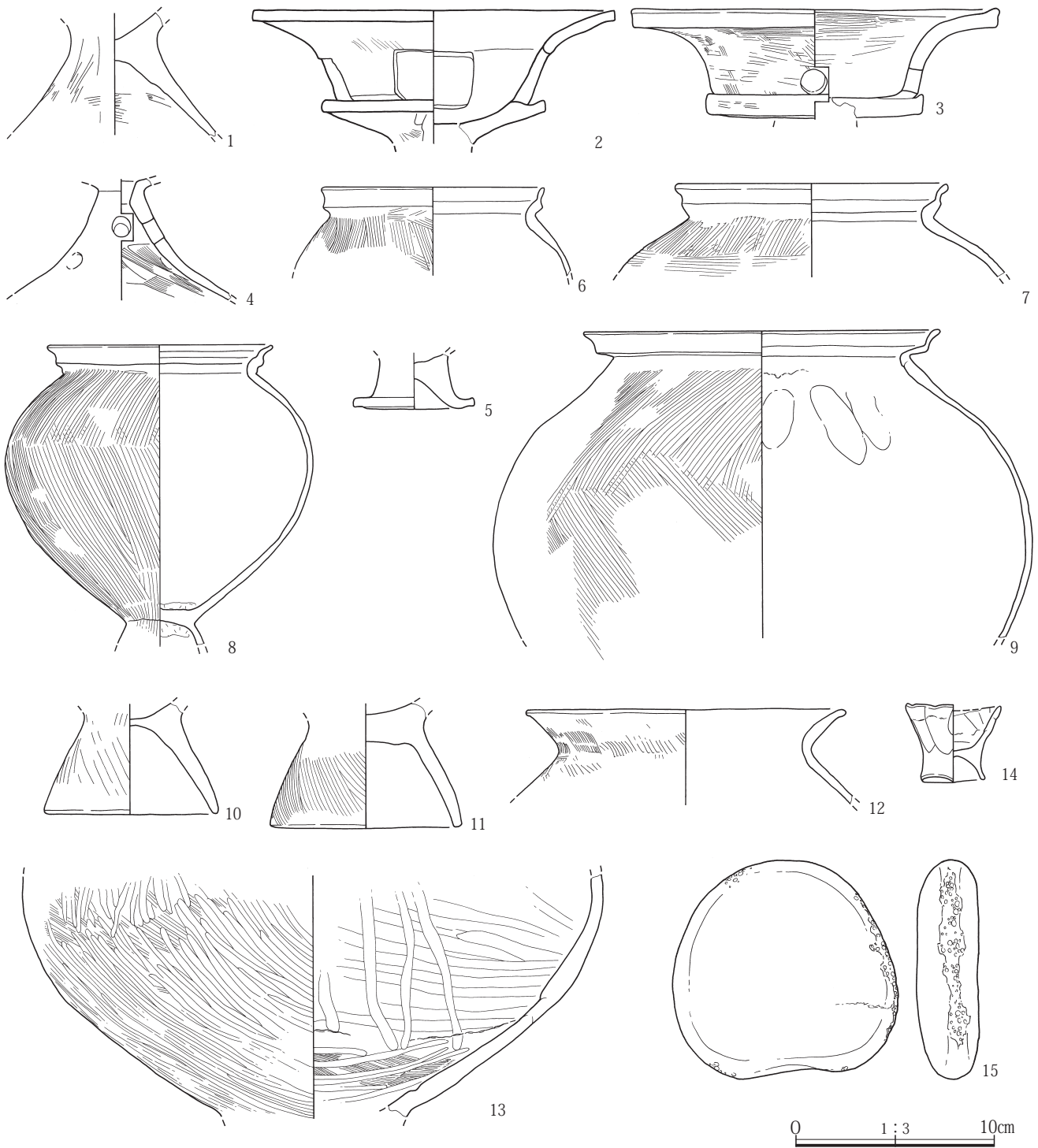
その他 29・32・33・50号住居等に前出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 多量の遺物が住居ほぼ全域から出土し、土師器14点と石製品1点を図示した。特筆されるのが北陸地方の影響を受けた器台(装飾器台)2・3が見られることだ。2は住居北寄り、3は中央でどちらも床直上の出土であり、3は20・30・42号住居出土破片とも接合している。他に高杯1、台付甕7・8・11、甕12、手捏ね14が床直上出土もしくは床直上出土片を含む土器である。台付甕6・10は掘り方調査時の出土である。図示した以外に重量で5.0kgの土師器を出土している。

所見 多数の4世紀代の住居が後出し、4世紀前半の時期が相定される。



第220図 2区51号住居



第221図 2区51号住居出土遺物

52号住居(第222図 PL. 38-①、82 遺物観察表430頁)

調査区西側北隅にあり、住居北辺周辺は調査区域外となり全容を把握できていない。

位置 028～033-747～753グリッドにある。

規模形状 長軸長6.1m以上、短軸長4.1mの南北に細長い長方形を呈している。

埋没土・壁 水平に近い堆積で人為的な埋戻しの痕跡は

確認できない。壁高は20cm前後である。

方位 N-24° W。面積 残存18.78㎡

床面 南側へ低く傾斜していて、北側と8cm前後の比高差がある。

ピット 南東隅付近でP1を確認している。径71×64cmの楕円形で深さ33cmを測る。壁から少し離れるが入口脇の貯蔵穴状施設のようなだ。

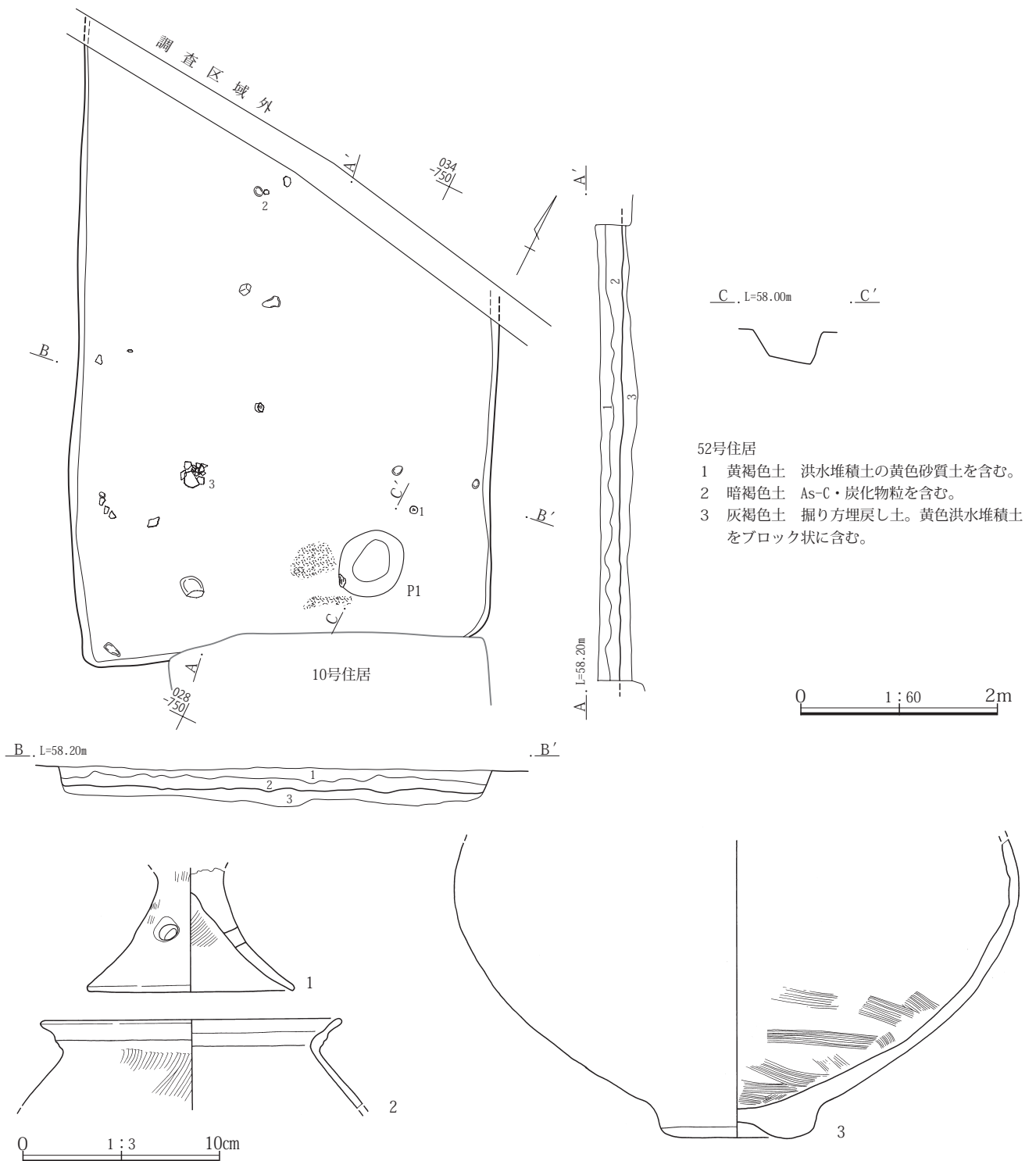
第V章 古代の遺構と遺物

炉 南壁寄りのP1西側に隣接した床面に灰がまとまって見られた。炉が想定される状況だが、住居南隅という配置から炉とは考えにくい。

その他 10号住居に前出している。壁溝は確認できない。
遺物 住居のほぼ全域に散るようにして出土した遺物から土師器3点を図示した。完形近くまで復元できた土器

はなく、いずれも床面から17cm以上高い位置での出土である。図示した以外に重量で2.4kgの土師器を出土している。

所見 確実に本住居に伴う遺物を持たないが、図示した土器は4世紀代の土師器である。



第222図 2区52号住居および出土遺物

53号住居(第223・224図 PL.38-②、82

遺物観察表431頁)

住居や溝との重複が多く、全容は不明瞭である。対向する南東辺と北西辺が平行せず、複数の遺構重複の可能性はある。第223図点線内は床面が周辺より3～5cm低い部分である。2層土がこの部分上面に見られ、前出する遺構存在の可能性を考えた。この内側の想定号住居を53A号住居、南西側外側の住居を53B号住居とし、本文ではA号住居・B号住居と呼称した。

位置 011～017-733～743グリッドにある。

規模形状 1棟の住居であれば南東辺から北西辺まで8.0mの距離がある。本遺跡最大級の規模である。重複

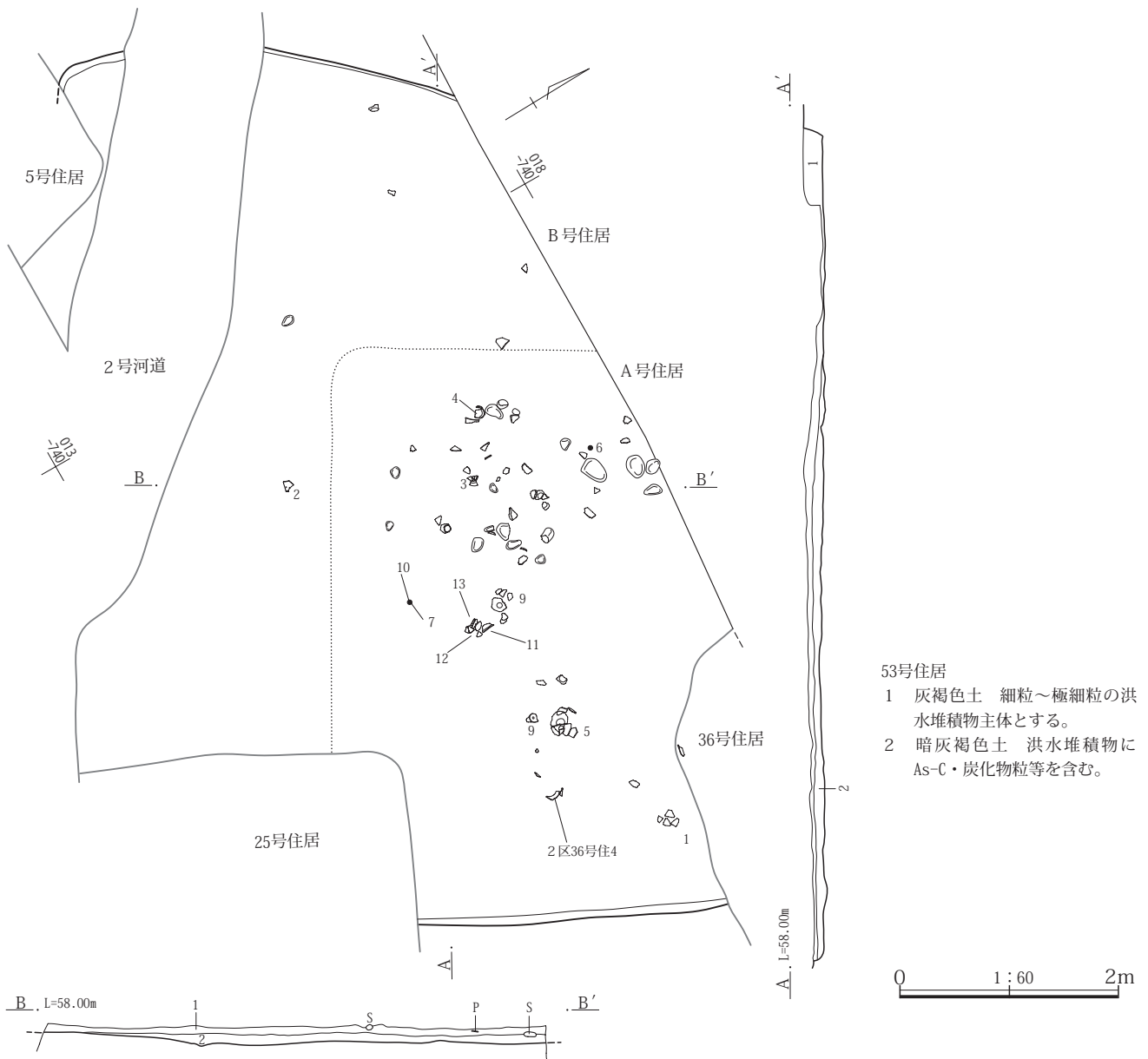
住居と考えた場合、A号住居は一辺5m前後の住居が想定できる。B号住居は南側の境界が不明瞭だが、北西辺から南東側へ6m以上の大型住居が想定される。

埋没土・壁 ほぼ水平な堆積で人為的埋戻しの痕跡は確認できない。壁高はA号住居南東辺で19cm、B号住居北西辺で4cmを測る。

方位 N-59°W(A号住居北西辺)。

面積 全体残存34.40㎡ A号住居残存15.47㎡

床面 A号住居部分は比較的平坦である。B号住居が後出するなら2層土上面が床面になるはずだが、踏み固めや焼土・灰等の散布は見られない。A号住居の北東寄りとB号住居の北西寄りに深さ6cm前後の掘り方がある。



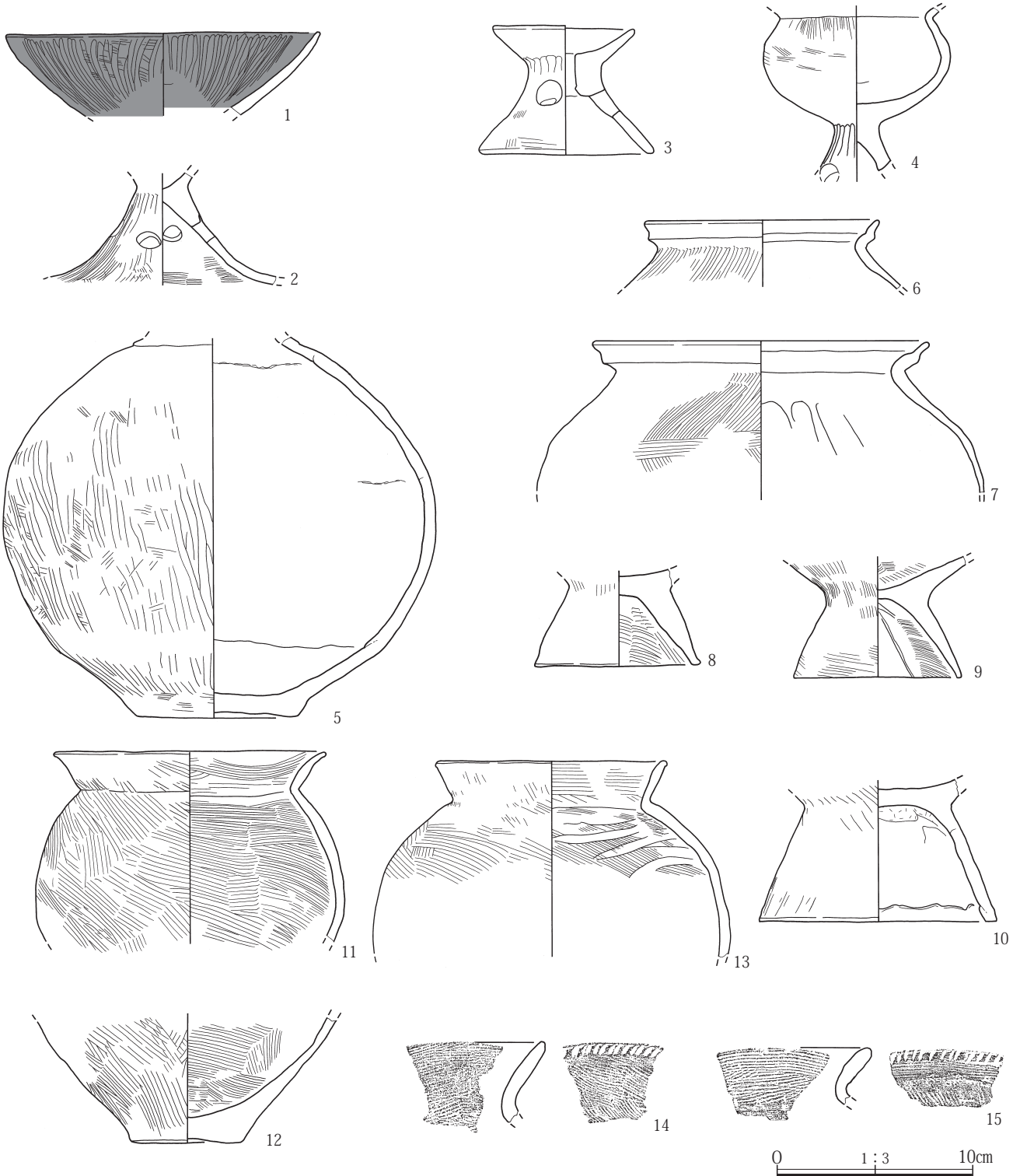
第223図 2区53号住居

その他 5・25・36号住居に前出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 A号住居を想定した部分を中心に多量の遺物を出土した。土師器15点を図示したが、出土位置を示した土器はすべてA号住居の範囲内で壁際から離れた位置の出土である。床直上出土土器は高杯2があり、器台3や台付鉢4など供膳土器は床上5cm以内の高さの出土であ

る。甕類には完形近くまで復元できた土器はない。11・13など床上6cmの高さだが、床上9cmの7・10はB号住居床面に想定される高さに近い。図示した以外に重量で5.8kgの土師器を出土している。

所見 A号住居内は土器だけでなく、礫の混入も多い。出土遺物の時期は4世紀代である。



第224図 2区53号住居出土遺物

54号住居(第225図 PL. 38-③)

流路や重複住居に壊され、南辺の一部を確認したのみのきわめて不明瞭な遺構である。直線的な長い壁があり、住居として扱った。

位置 015～018-742～748グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.5m以上の規模が確認できる。

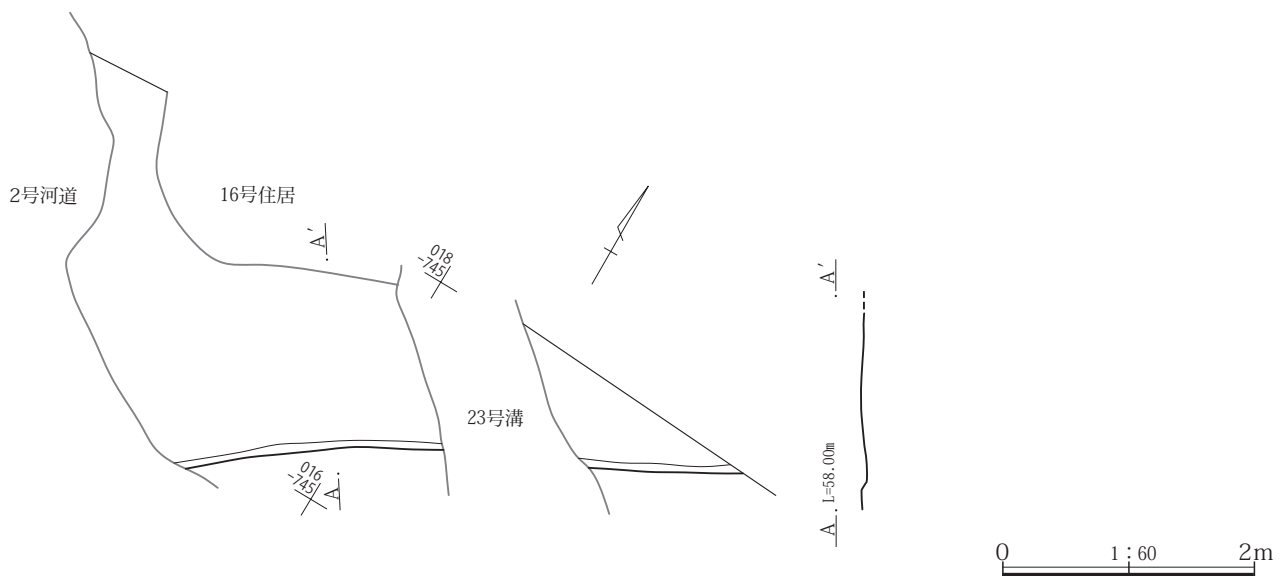
埋没土・壁 埋没土の記録を欠く。壁高は壁際で窪みがあるため一部で深さ6cmを測るが、住居床面は壁外地山より3cm前後の深さである。

方位 (南辺)N-59° E。 **面積** 残存6.21㎡

床面 緩やかな凹凸があり、全体では地山傾斜に沿って東側へ低く傾斜し西隅と10cmの比高差がある。掘り方は見られない。

その他 16号住居に前出している。炉・壁溝・ピット等の施設は確認できない。土師器甕類の破片を数片出土したが、図示できるものはなかった。

所見 時期決定を行う遺物を持たない。後出する16号住居は4世紀の住居である。



第225図 2区54号住居

55号住居(第226図 PL. 38-④・⑤)

調査区の北隅にあり住居北隅は調査区域外で、南隅は18号住居、西隅は56号住居に大きく壊されている。

位置 027～032-733～741グリッドにある。

規模形状 東西軸長推定6.2m、南北軸長5.2m以上で北側へ広がる台形状に歪むようだが、複数の遺構重複の可能性もある。

埋没土・壁 埋没土は単層で重複の痕跡は見つからない。壁高は最も深い西辺で35cmを測る。

方位 N-30° W(北東辺)。 **面積** 残存20.36㎡

床面 細かな凹凸のある床面で、北東辺下のみやや低くなっている。住居粗掘り時の窪みのような深さ5cm前後の掘り方が部分的に見られ、床面が低くなっていた北東辺下では10cm前後深くなっている。

ピット 掘り方調査時に東隅寄りで径67×43cmの楕円形

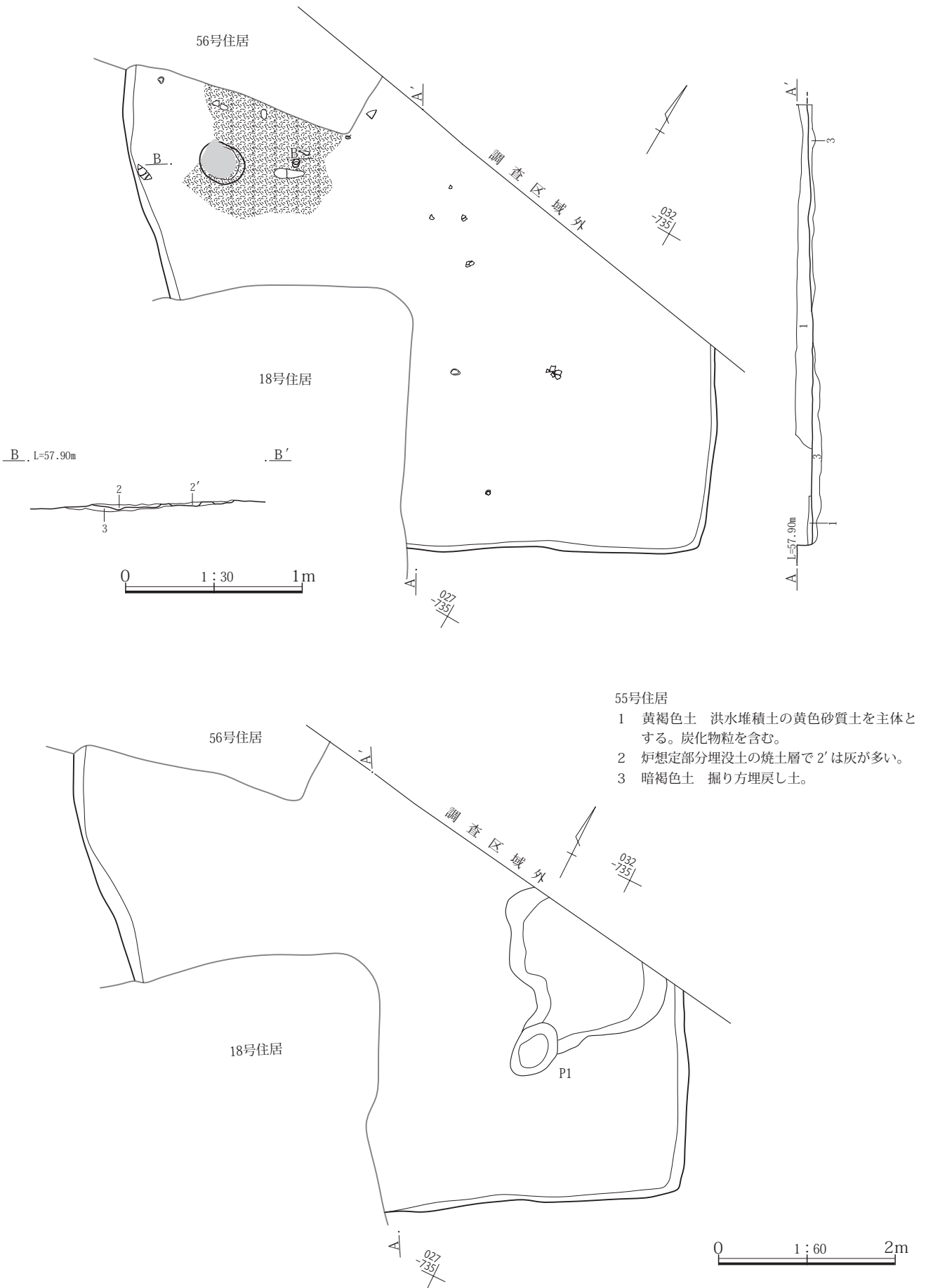
を呈した床面からの深さ31cmのピットを確認している。配置より支柱穴の内の1本となる可能性がある。

炉 西隅寄りに広い灰分布範囲があり、西側に焼土がまとまって確認できる。焼土下には径53×42cm、深さ3cm前後の不明瞭な窪みとなり炉の可能性もある。炉の位置としては住居隅に寄り過ぎて違和感があるが、長さ40cmの枕石のような礫も焼土の東側に見られる。

その他 18・56号住居に前出している。壁溝は確認できない。

遺物 本住居出土として整理した土師器は重量で1.5kgの量だが、後出する56号住居重複部分の遺物がかかり含まれる可能性がある。確実に本住居内の出土遺物で図示できるものはなかった。

所見 時期推定の資料となる遺物をもたない。



55号住居

- 1 黄褐色土 洪水堆積土の黄色砂質土を主体とする。炭化物粒を含む。
- 2 炉想定部分埋没土の焼土層で2'は灰が多い。
- 3 暗褐色土 掘り方埋戻し土。

第226図 2区55号住居

56号住居(第227・228図 PL. 38-⑥・⑦、82・83

遺物観察表431・432頁)

調査区北隅にあり、住居の大半が調査区外で全容は把握できていない。西側を流路で削られているが、比較的深い住居で床面まで影響は至っていない

位置 030～033-738～746グリッドにある。

規模形状 東西軸長6.5m、南北軸長2.5m以上の規模である。隅の丸みが少なく各辺も直線的で整美な形状だが、台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 埋没土は壁際から自然堆積したように見える。壁高は最も深い南辺で29cmを測る。

方位 N-85° E。面積 残存11.30㎡

床面 灰・粘土等の散布が見られる本遺跡内では明瞭な床面であった。ほぼ平坦で貯蔵穴周辺が3cmほど高くなる傾向があった。床面からの深さ最大15cmの掘り方が部分的に見られる。

貯蔵穴 南東隅付近にある短軸80cmで南北に長く、床面からの深さ25cmの土坑状施設は配置より貯蔵穴の可能性はある。住居廃絶時に開口していた施設で周辺に粘土散布が見られた。掘り方調査時に確認した床面からの深さ

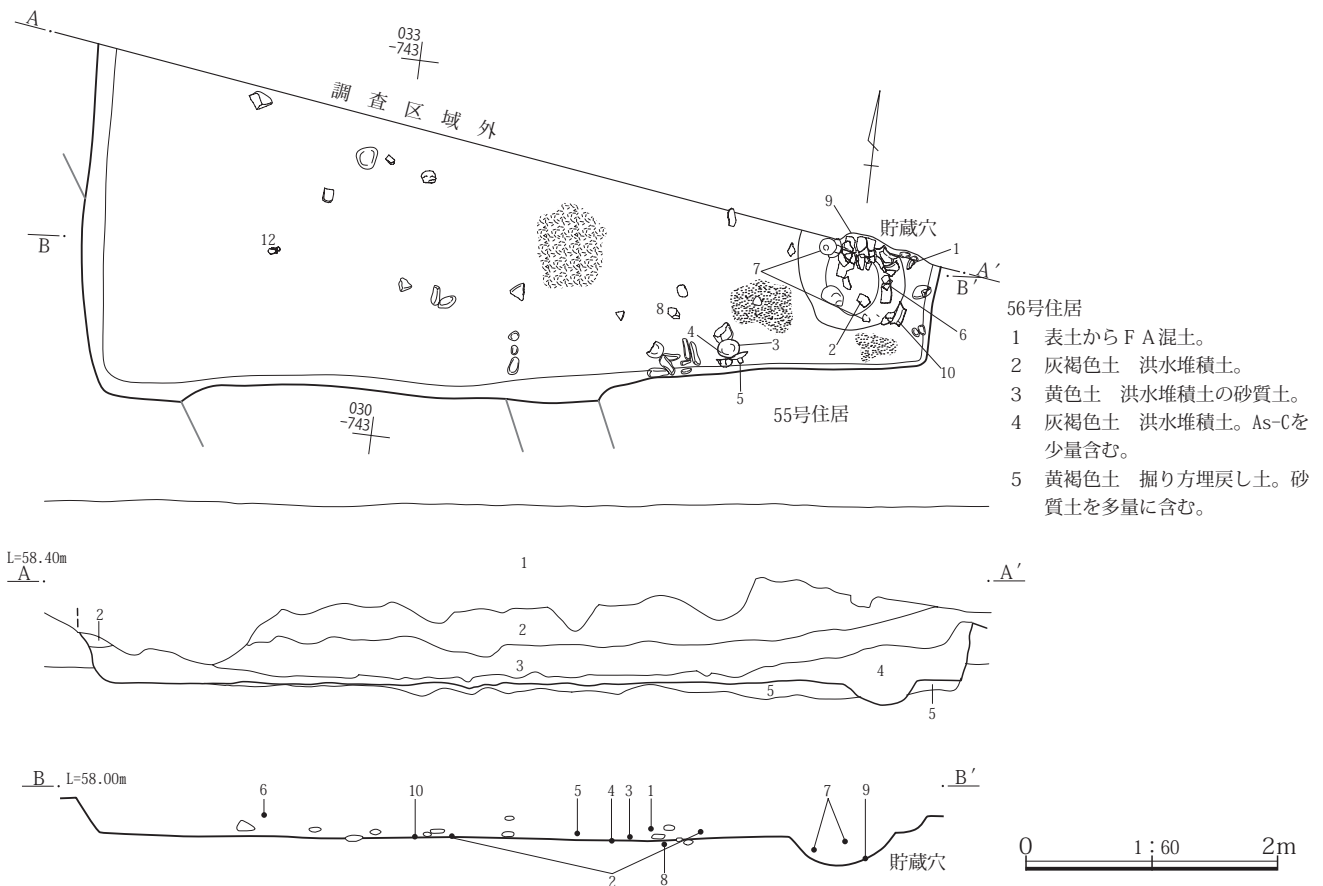
49cmのP 3も南壁際東寄りにある貯蔵穴の可能性はある。P 3は住居廃絶時には埋没していたようだ。

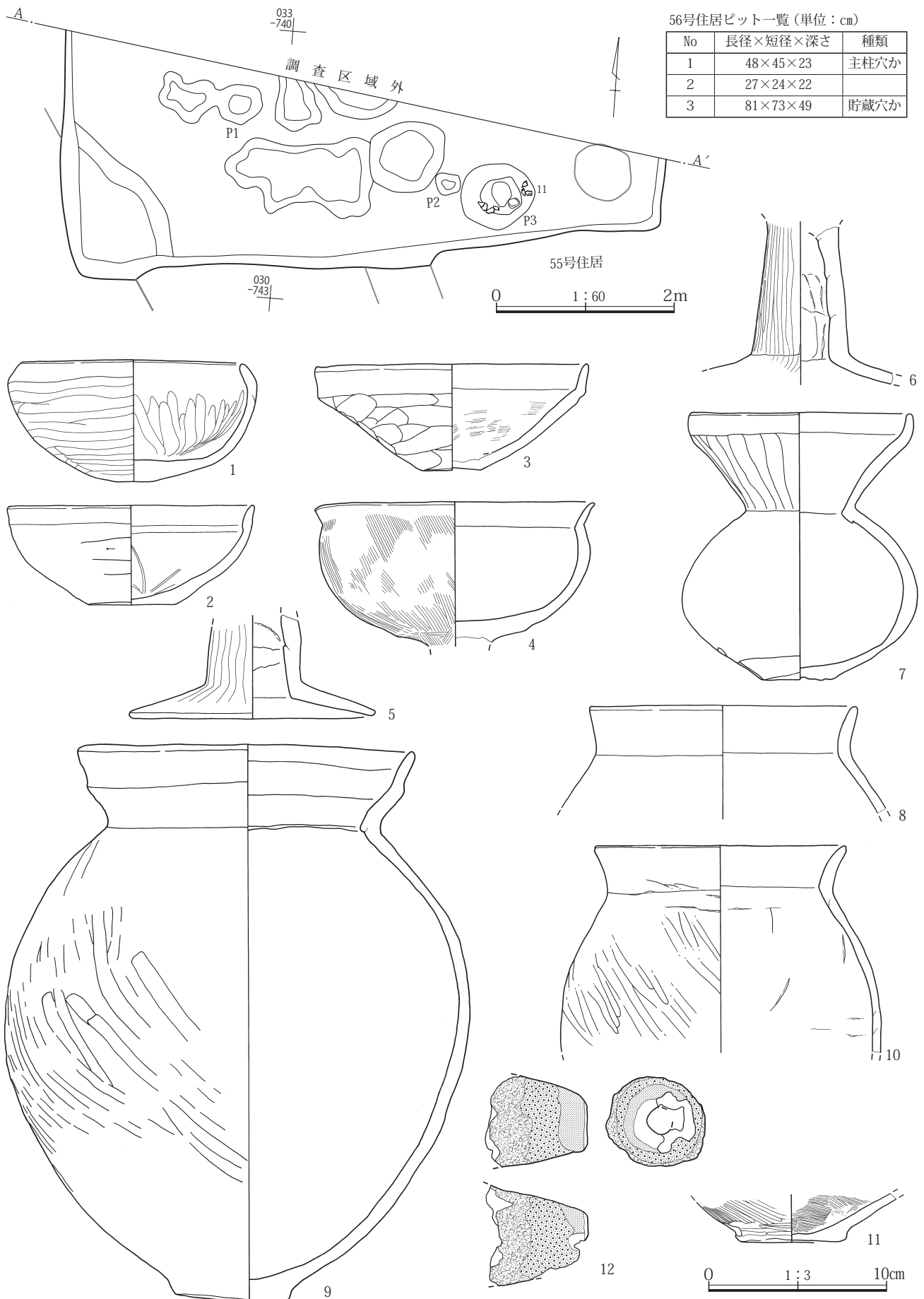
ピット 掘り方調査時に2基のピットを確認した。深度に乏しい不明瞭な施設だが、P 1は配置より支柱穴となる可能性がある。

その他 55号住居に後出している。炉・壁溝は確認できない。

遺物 貯蔵穴とその周辺を中心に比較的多い遺物を出土した。甕9は貯蔵穴内、鉢2、高杯6は貯蔵穴上とその周辺の床面レベルで、杯1と埴7は床上8cm前後の高い位置での出土である。壺11はP 3内、甕8は掘り方調査時に出土した。羽口12は前記土器群と離れた床上19cmの出土で後出する流路の影響を考慮すべき遺物である。供膳具3～5が南壁際の55号住居床面レベル付近でまともに出土しており、同住居からの混入も想定すべき遺物である。南壁際には菰編石状の細長い礫がまともに出土しているが、床面より8cm前後高い位置にあった。図示した以外には重量で1.3kgの土師器を出土している。

所見 高杯が長脚化する4世紀後半から5世紀初頭にかけての住居と考えられる。





第228図 2区56号住居掘り方および出土遺物

57号住居(第229・230図 PL. 38-⑧)

遺物観察表432頁)

2区東側の住居群の中で、最も南側で確認した。住居南側を28号溝に壊され全容を把握できていない。

位置 007～011-707～713グリッドにある。

規模形状 東西軸長5.1m、南北軸長2.3m以上の規模である。本住居を削った最大幅1.8mの28号溝の規模から本住居の南北軸は4m未満であることが分かり、東西に長い長方形住居となる。

埋没土・壁 埋没土の記録に欠く。壁高は30cm前後で一様である。

方位 N-56° E。 **面積** 残存9.07㎡

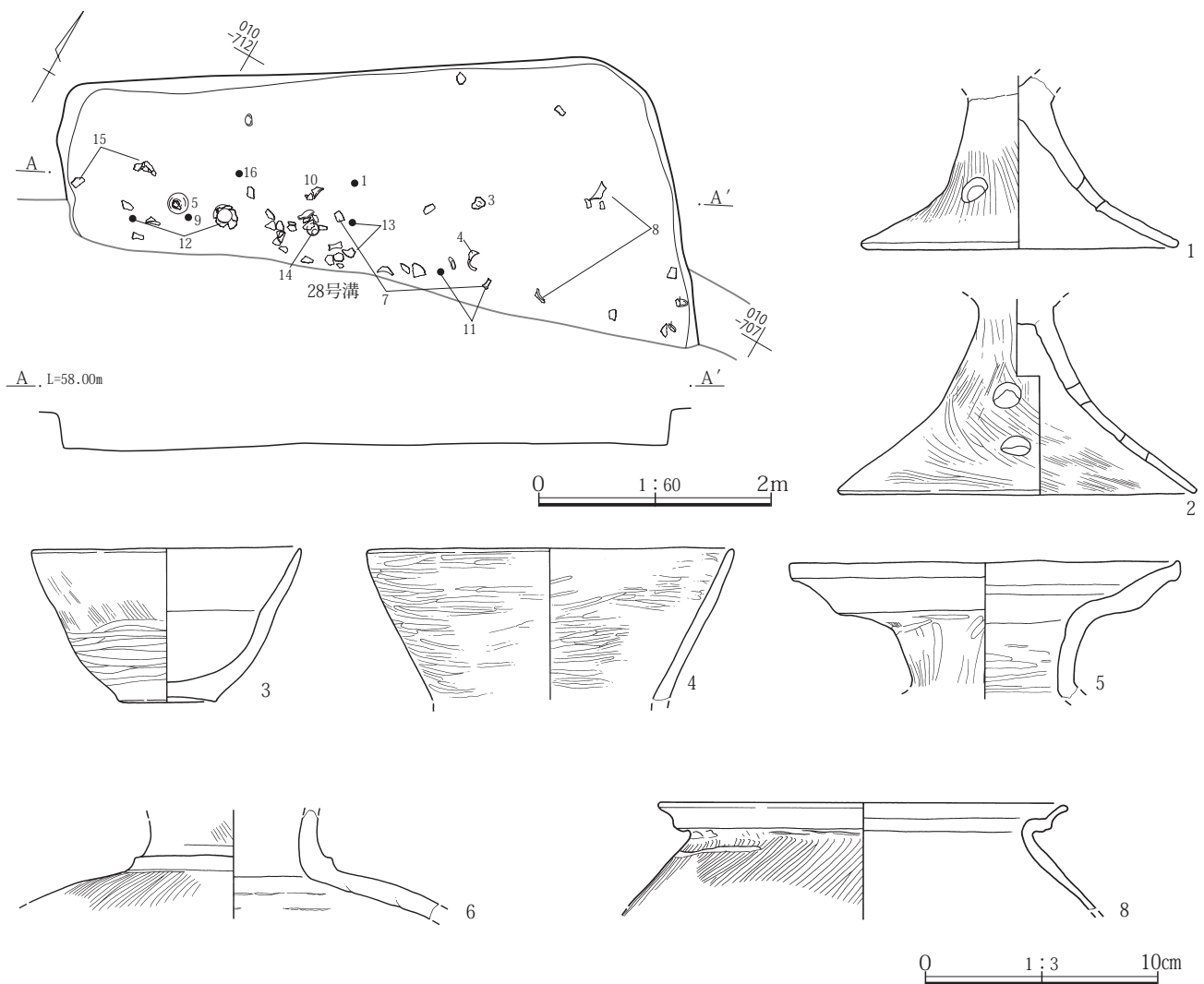
床面 調査範囲では中央がやや高くなり、壁際と3cmの比高差がある。掘り方は認められない。

その他 28号溝に前出している。炉・壁溝・ピット等の

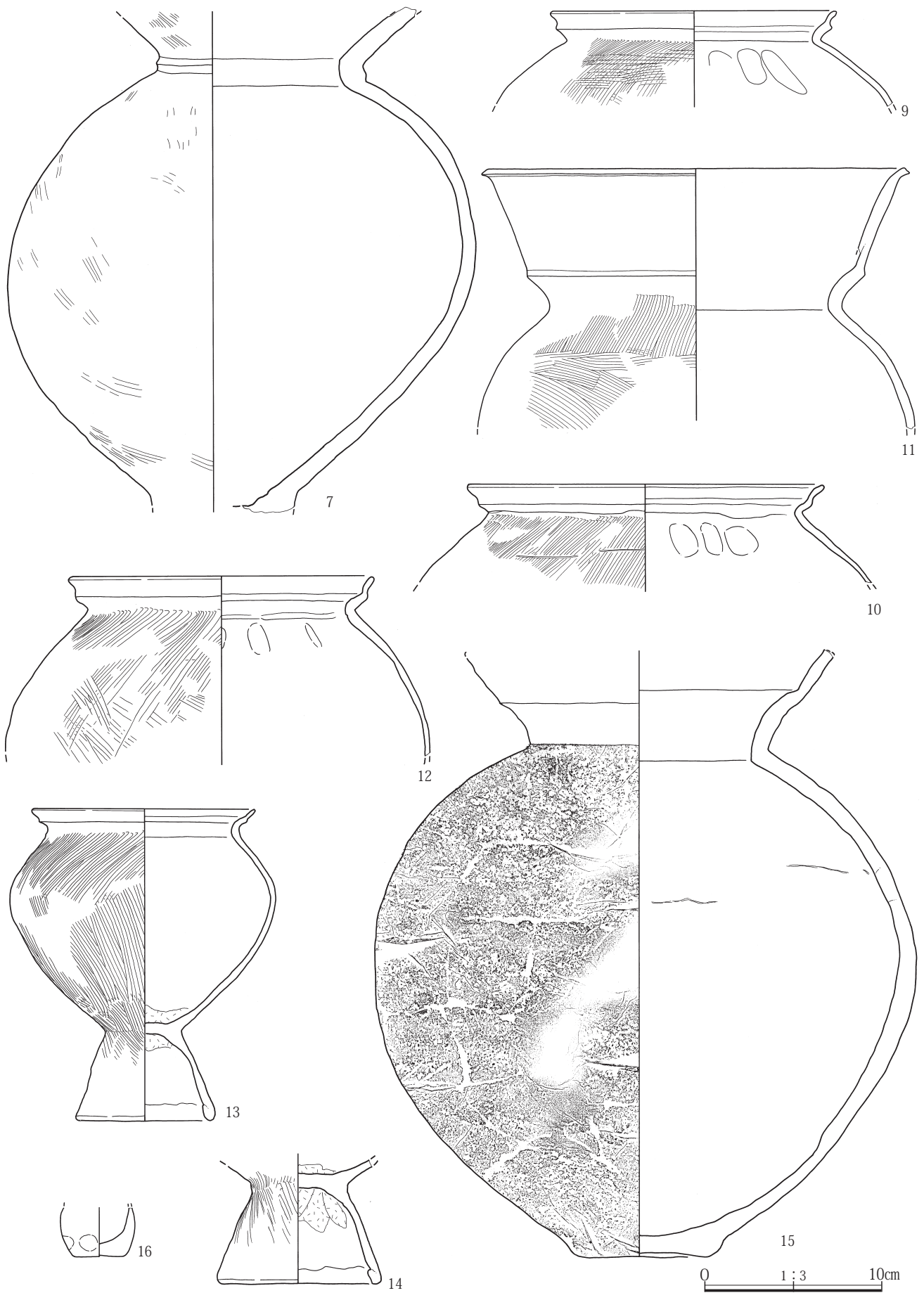
施設は確認できていない。

遺物 全体を調査できない住居としてはきわめて多量の遺物を出土し、土師器16点を図示した。床直上の出土遺物に器台1、鉢3、埴4、台付甕9があり、壺5も床面近くの出土である。床面から10cm前後からそれ以上高い位置の出土土器は大半を占め、壺7、台付甕8・10・12～14、甕11、手捏ね16があたる。壺15は床直上から床上15cmまで、さらに4・8号住居出土破片までが接合した。図示した以外に甕類を中心に重量で4.2kgの土師器を出土している。

所見 壁際の出土遺物が少なく、住居中央付近の上層・中層から多量に遺物が出土していた。埋没過程で混入したような様相である。出土遺物は4世紀代で、中層遺物には台付甕13のように最大径が胴部上半にある4世紀後半の土器が見られる。



第229図 2区57号住居および出土遺物(1)



第230図 2区57号住居出土遺物(2)

(4)古墳時代の竪穴住居

3区の竪穴住居

3-2区西隅では泥流下に築かれた畑の上面から4棟の竪穴住居を調査した。西側の4区へ続く集落の東隅部分にあたる。2区に比べ50cm前後標高の高い地点にあるが、住居は少なく住居間の重複はない。2区と異なり古墳時代に途切れた集落が平安時代に再び築かれ1・2号住居を調査した(本文128頁)。古墳時代集落と平安時代集落の間には泥流層があるが、集落東限は両時代ともほぼ同一の占地である。

3号住居(第232・233図 PL.19-④~⑥、84

遺物観察表432頁)

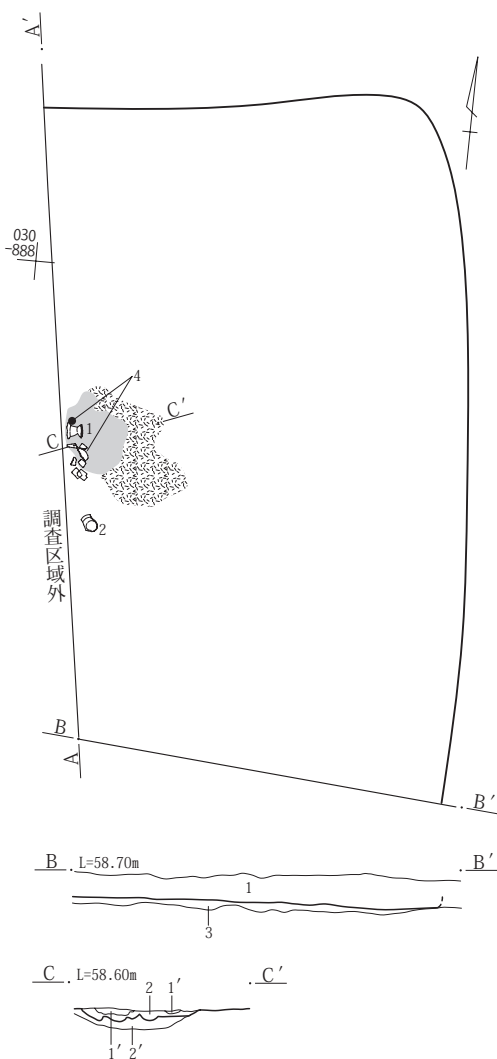
調査区の南西隅にあり、大半が調査区域外となって住



第231図 3区古墳時代住居配置図

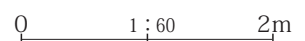
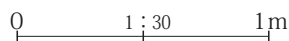
居北東隅周辺のみ確認である。

位置 026~031-884~887グリッドにある。泥流層を挟んで上面には平安時代の2号住居がある。



3号住居

- 1 にぶい黄褐色土 住居埋没土と思われるシルト質土。しまり弱い粘性土。1'は灰・炭化物粒の混入が多い。
- 2 赤褐色土 炉下層土。被熱したシルト質土。焼土小ブロックが不均等に混じる。2'は黄色味を帯びる。
- 3 褐灰色土 掘り方埋戻し土。シルト質土。しまり、粘性あり。黄灰色シルトブロックを散見する。



第232図 3区3号住居

規模形状 南北軸長5.6m以上、東西軸長3.2m以上の規模で想定される炉の位置より南北に長い長方形を呈す住居と思われる。

埋没土・壁 不明瞭な埋没土で床面および地山との区別は難しく、確実な壁の立ち上がりを確認できなかった。

方位 (東壁)N-9°W。 **面積** 残存16.80㎡

床面 東側へ低く傾斜していて、調査範囲西隅と7cm前後の比高差がある。ほぼ全体に深さ3~8cmの不規則な掘り方がある。ピット状のわずかな窪みがあるが、主柱穴には不適当な配置である。

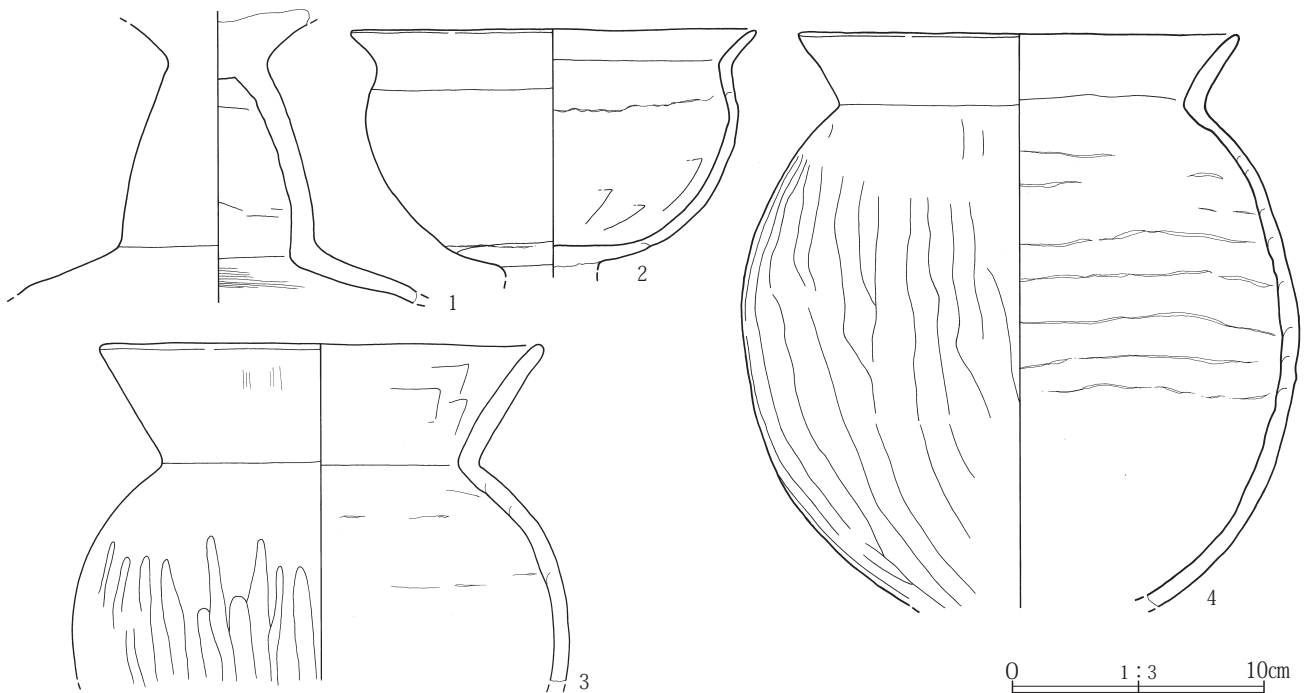
炉 調査範囲の西隅に焼土・灰が集中する部分があり、

炉が想定される。焼土範囲は60cm×40cmの南北に長い楕円形で、下に深さ3cm前後のわずかな窪みがあり、被熱の痕跡も認められる。

その他 4~6号住居より高い位置で確認された住居で床面もそれら住居より50cm前後高いが、出土遺物から後出住居ではないようだ。壁溝・ピットは確認できない。

遺物 出土遺物は少ないが、4点の土師器を図示できた。1~3は炉周辺の床直上で出土した。4が周辺に散乱した破片から復元できた甕である。

所見 炉周辺の出土土器より5世紀代の住居と想定できる。



第233図 3区3号住居出土遺物

4号住居(第234・235図 PL. 39①~③、84・85
遺物観察表433頁)

位置 040~044-879~883グリッドにある。

規模形状 長軸長3.6m、短軸長2.8mの小型住居で、各辺が直線的な比較的整美な長方形を呈している。

埋没土・壁 壁際からの自然堆積状だが、比較的急激に埋没している。壁高は25cm前後でほぼ一定である。

方位 N-75°E。 **面積** 9.68㎡

床面 凹凸が多く、全体では北側へ低く傾斜し南隅と6cmの比高差がある。掘り方は見られない。床直上にしまりの強い薄い層(4層)があるが、貼床ではなく、住居使用の中で灰などが踏み固められた層と考えられる。

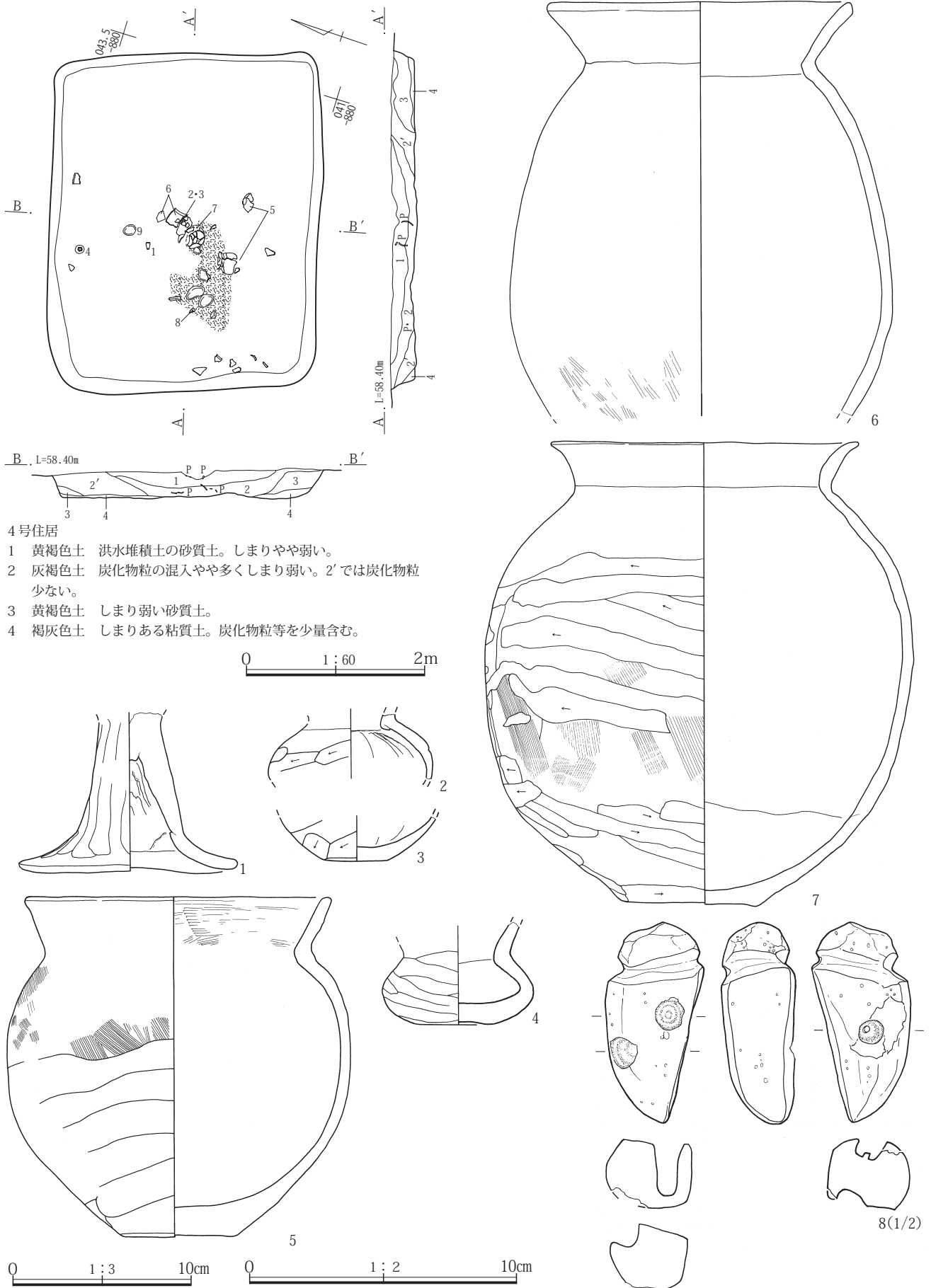
炉 住居中央西寄りの床直上は炭化物粒が多く、この分

布範囲西側に被熱した礫も見られ、ここに炉が想定される。平坦で掘り込みの痕跡や床面被熱の痕跡はない。

その他 壁溝・ピット等の施設は確認できない。

遺物 住居中央の炉想定部分周辺に出土遺物は多く、土師器7点と石製品2点を図示した。甕5~7は炉周辺で出土しているが、床直上資料は底部を欠く6で、7は床から5cm、5は床から12cm浮いた状態だった。高杯1は住居中央付近の床直上、他は床から12cm以上浮いた状態だった。石製品2点のうち8は住居中央付近、9は北壁寄りの床ほぼ直上出土である。図示した以外に重量で2.5kgの土師器を出土しており遺物の少ない3区住居では5号住居に次ぐ量である。

所見 甕類の形態から5世紀代の住居と想定される。



4号住居

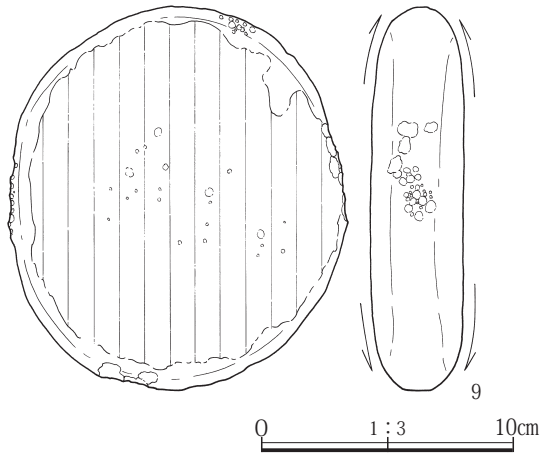
- 1 黄褐色土 洪水堆積土の砂質土。しまりやや弱い。
- 2 灰褐色土 炭化物粒の混入やや多くしまり弱い。2'では炭化物粒少ない。
- 3 黄褐色土 しまり弱い砂質土。
- 4 褐灰色土 しまりある粘質土。炭化物粒等を少量含む。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

0 1:2 10cm

第234図 3区4号住居および出土遺物(1)



第235図 3区4号住居出土遺物(2)

5号住居 (第236～239図 PL. 39-④～⑦、85・86
遺物観察表433・434頁)

4区に見られる4棟の住居(19・20・24・25号住居)同様、初現期のカマドを持つ住居である。カマドやピットを共有しながら北辺・東辺側に拡張を行ったようで、最終段階の外側住居を5号A号住居(本文中ではA号住居)、前出する内側住居を5号B号住居(同じくB号住居)とした。

5号B号住居

位置 030～040-872～881グリッドにある。

規模形状 長軸長7.2m、短軸長6.7mの南北にやや長い方形を呈している。

埋没土・壁 A号住居で記す。

方位 N-66° E。カマド方位 N-86° E。

面積 42.61㎡

床面 凹凸の多い床面でカマド周辺が全体的に高く、周辺と5cm前後の比高差がある。深さ4～15cmの掘り方が全体にあり、床面の高いカマド周辺で掘り方がやや深くなっている。

壁溝 B号住居では北壁下を除く一部で確認できる。幅8～20cm、深さ3～6cmの規模である。

ピット 4支柱穴を確認した。住居規模に比して深度に乏しい。上面に貼床面のような土層がある。柱穴はB号住居の施設でA号住居は柱穴なしの住居となることも想定されるが、踏み固めは顕著ではない。

貯蔵穴 住居南東隅にある。上面径104×95cm、深さ35cmの規模で底面は平坦さに欠き、深度に乏しい典型的貯蔵穴とは異なる施設だが、遺物の出土は多い。出土遺物は底面に達していないものがあり、住居廃絶時には開口

していたが埋もれかけていたと推測できる。

カマド 東辺隅寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面と同レベルである。東西に長い縦長の燃烧部である。煙道は壁外へ53cm張出しているが、住居軸より南側に傾いている。

その他 水田に後出し、3号畑に前出している。

5号A号住居

位置 B号住居に等しい。

規模形状 長軸長7.5m、短軸長7.4mの東西にやや長い方形を呈している。南辺は北辺より60cm短く、台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 埋没土は住居中央付近に盛り上がる部分があるなど、自然堆積と若干異なる堆積が確認できる。壁高は最も深い北辺で52cmを測る。

方位 B号住居に同じ。

面積 47.55㎡ B号住居より約5㎡広い。

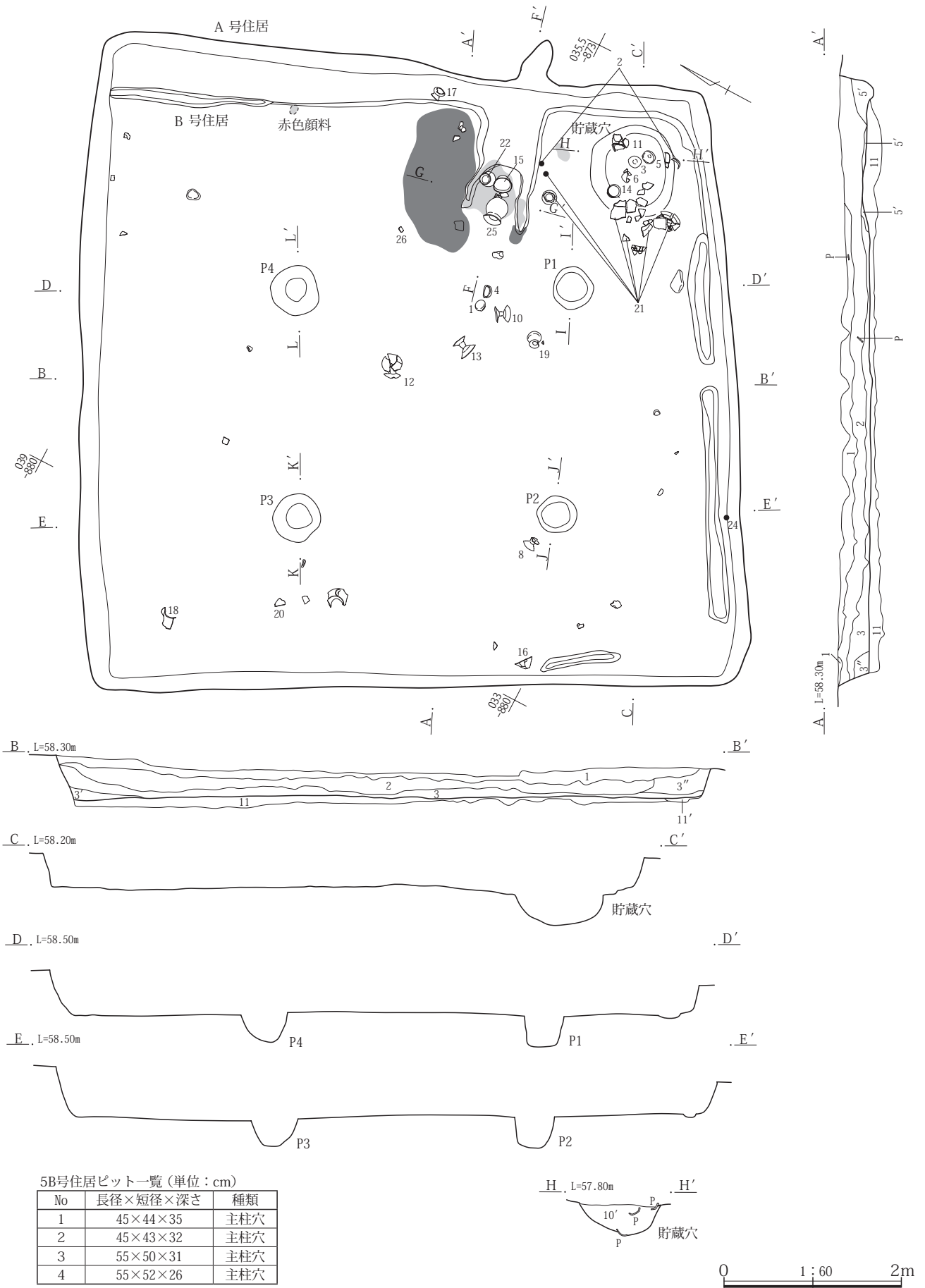
床面 A号住居床はB号住居床より最大で3cm高い部分があり、砂質土で埋めている。拡張した部分に掘り方は見られない。

カマド・ピット・貯蔵穴 B号住居と共有している。

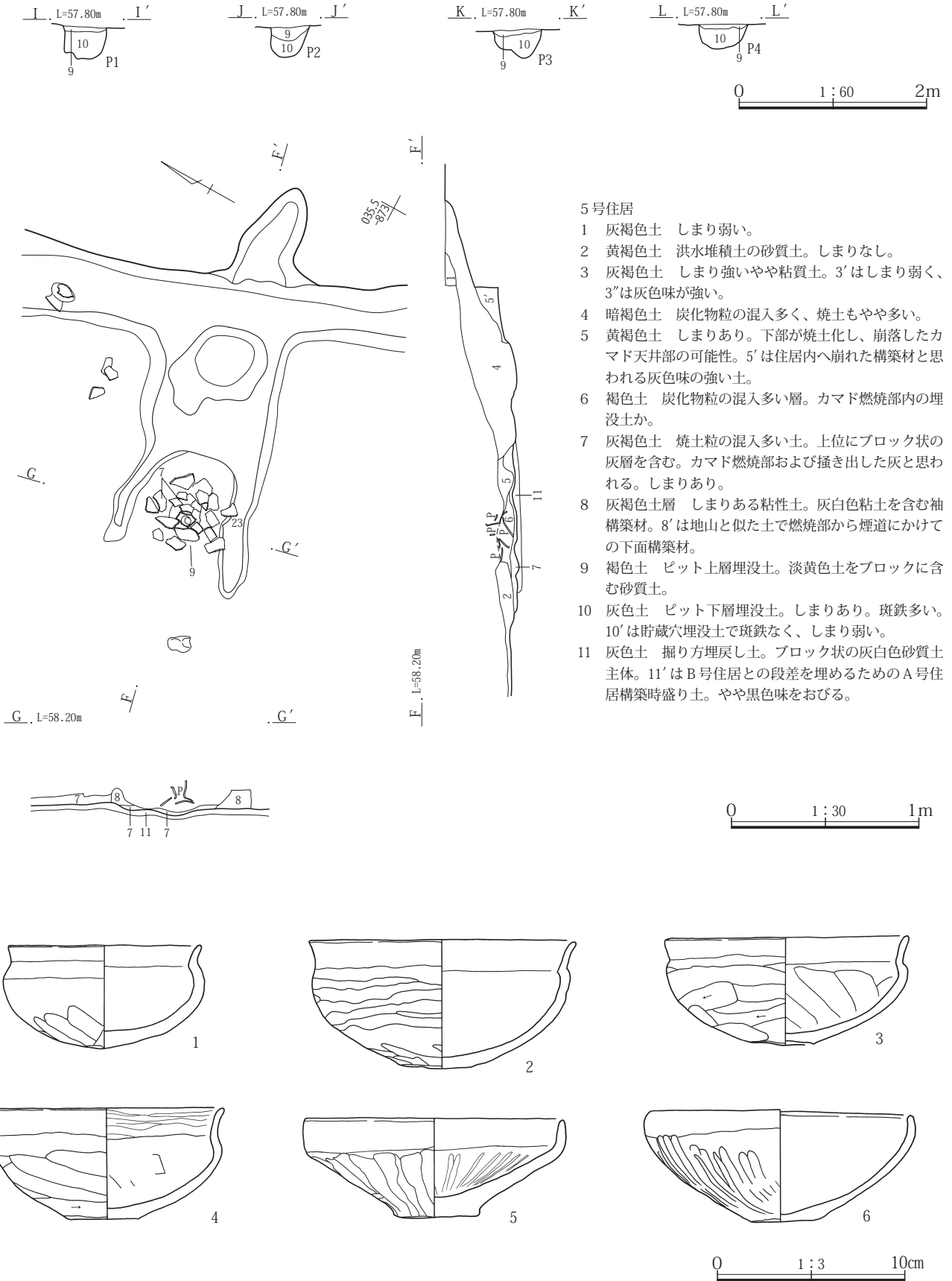
その他 壁溝は見られない。

遺物 多量の遺物を出土し、土器25点と石製品1点を図示した。図示した以外の土器片は重量2.8kgで接合率の極めて良い住居であった。カマド内から高杯7・9が出土しており、支脚に使用されたものと思われる。甕22・25がカマド内から出土するが、甕21はカマド南の貯蔵穴周辺に散った状態であった。高杯11・鉢14は貯蔵穴に流れ込むようにして出土した。床面からの深さは5～8cmの位置である。カマド前から住居中央にかけて高杯や鉢類が集中して出土したが、初現期のカマドを持つ住居出土遺物で唯一図示に耐える須恵器19もこの中の床上3cmの出土である。住居中央付近の遺物だが鉢1・4や高杯10と共にカマド前に散乱する本住居に伴う遺物と考えたい。

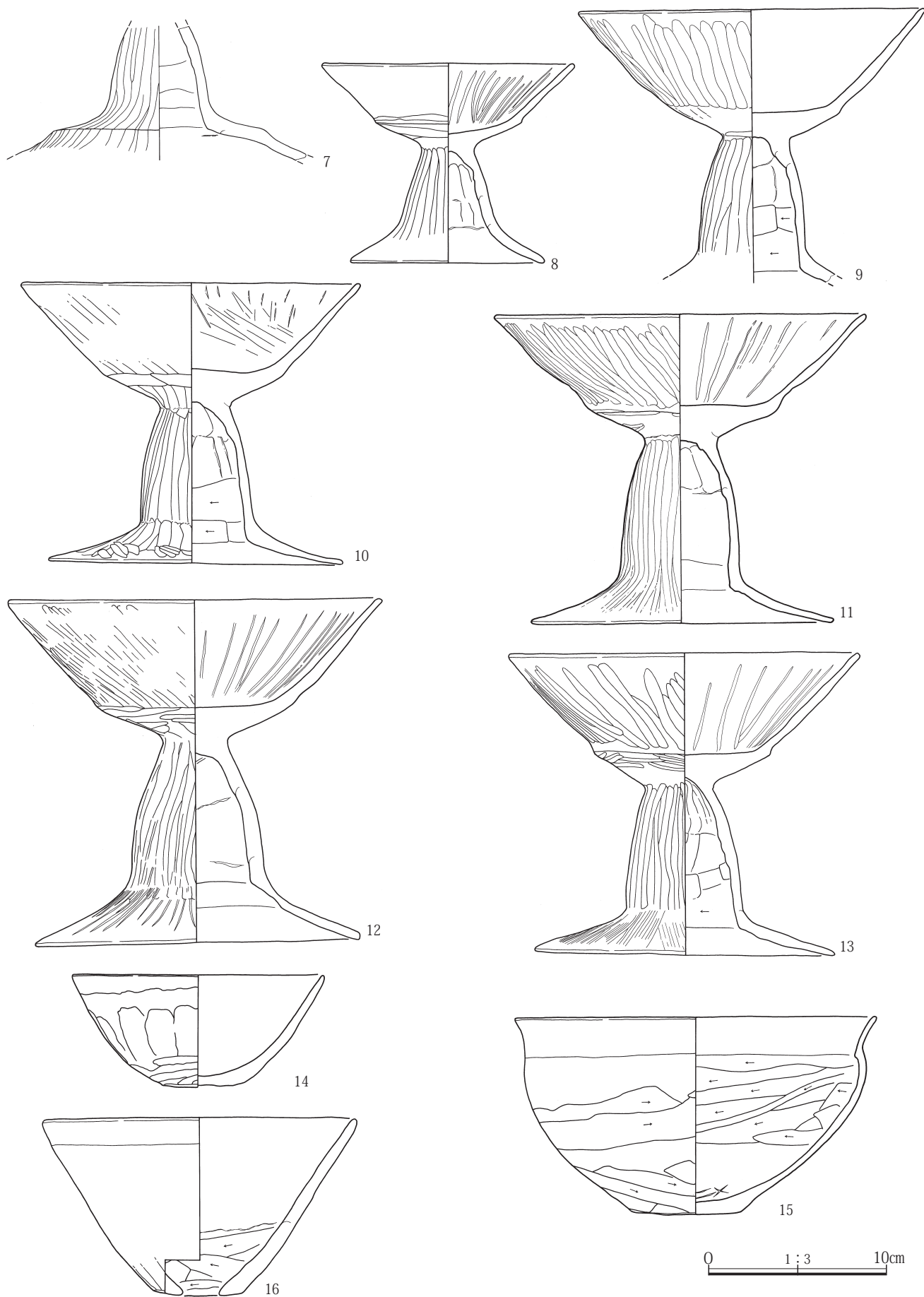
所見 初現期のカマドと豊富な遺物のある本遺跡内でも最も良好な資料を提供する住居である。5世紀代の特徴を残す高杯に刷毛目の残る単口縁の甕、および須恵器などが共伴する5世紀末ころの住居である。



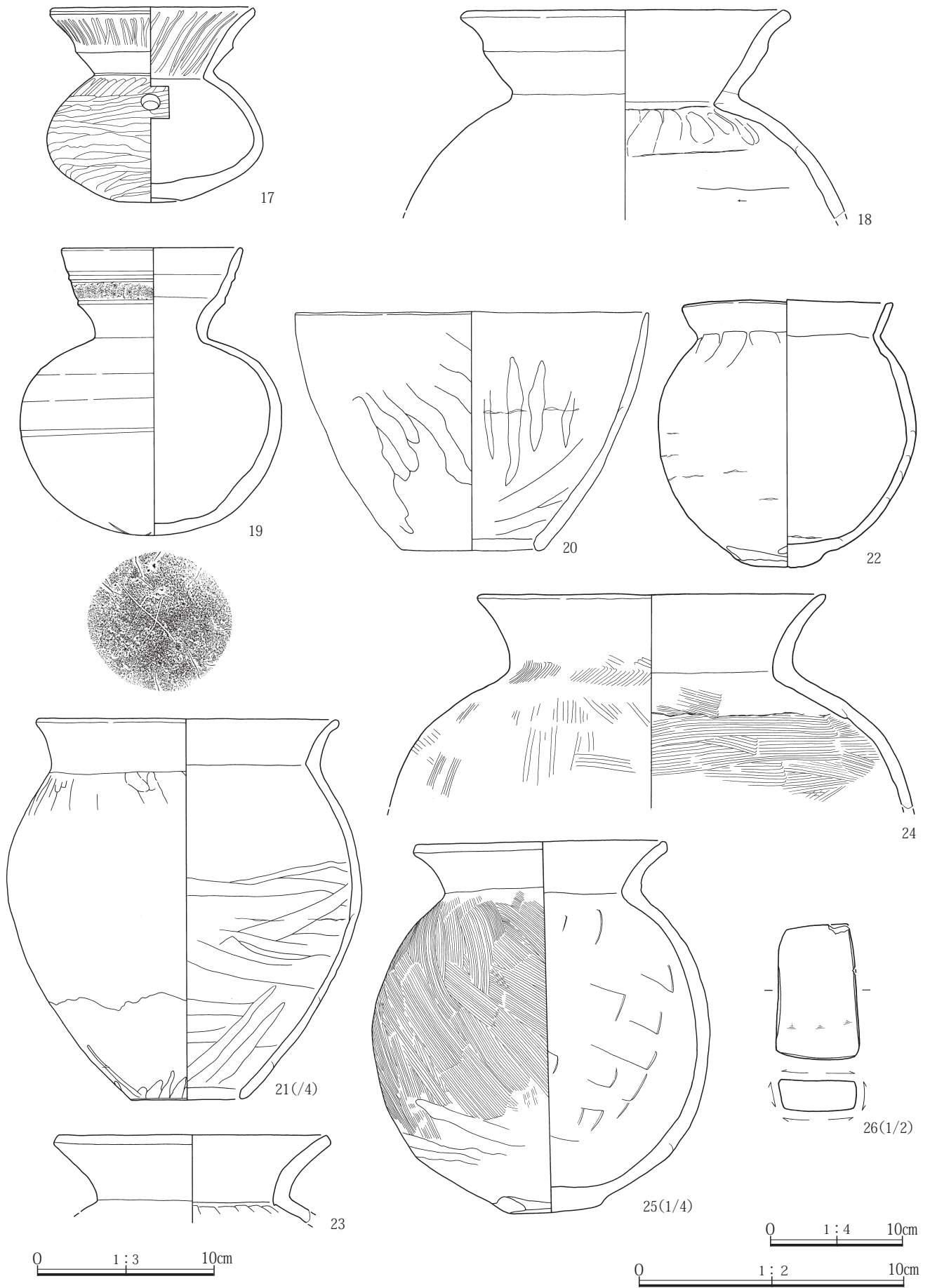
第236図 3区5号住居



第237図 3区5号住居カマドおよび出土遺物(1)



第238图 3区5号住居出土遺物(2)



第239図 3区5号住居出土遺物(3)

6号住居(第240図 PL.39-⑧、87 遺物観察表434頁)

3-2区北西隅にあり大半が調査区域外となって、南東隅付近のみ確認できた住居である。

位置 046～048-887～890グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.5m以上、南北軸長1.7m以上の規模である。残存する両壁は湾曲気味である。

埋没土・壁 床直上を除き単層の埋没土である。壁高は50cm前後を測り本遺跡住居の中ではきわめて深い。

方位 (西壁)N-41° W。面積 残存2.71㎡

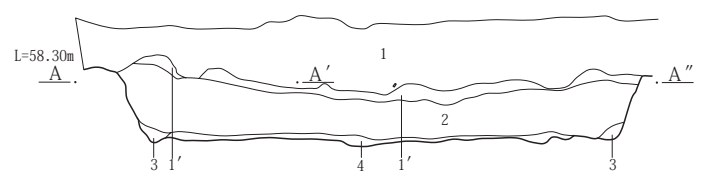
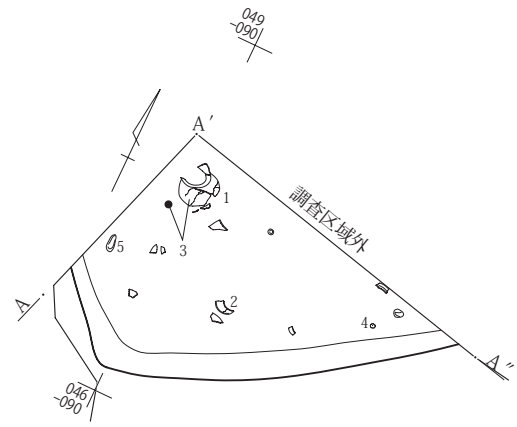
床面 凹凸の多い不整な床である。埋没土最下層(4層)は層厚5cm前後でややしまりあり、貼床の可能性ある。この層下に住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度の不明瞭な掘り方があるようだ。

壁溝 埋没土最下層が貼床であれば、西壁下に壁溝があった可能性があるが、明瞭にできなかった。

その他 炉・ピット等は確認できない。

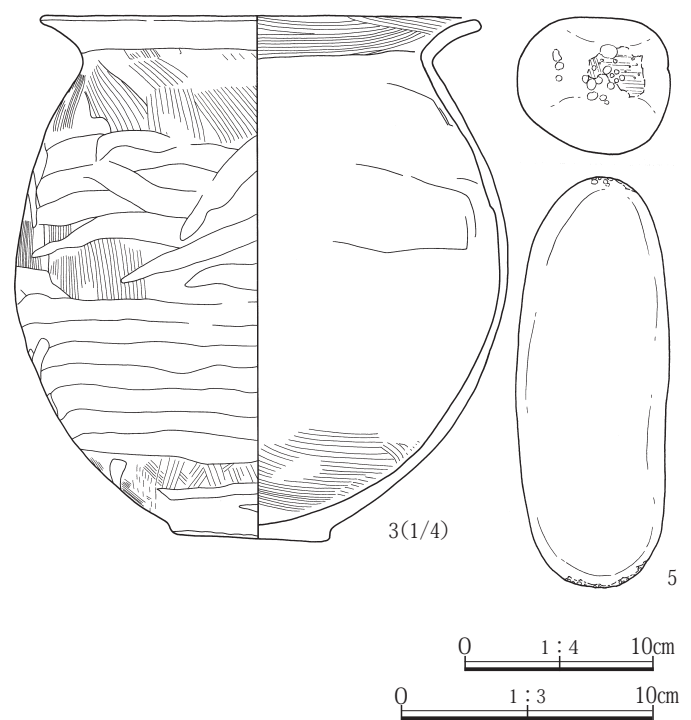
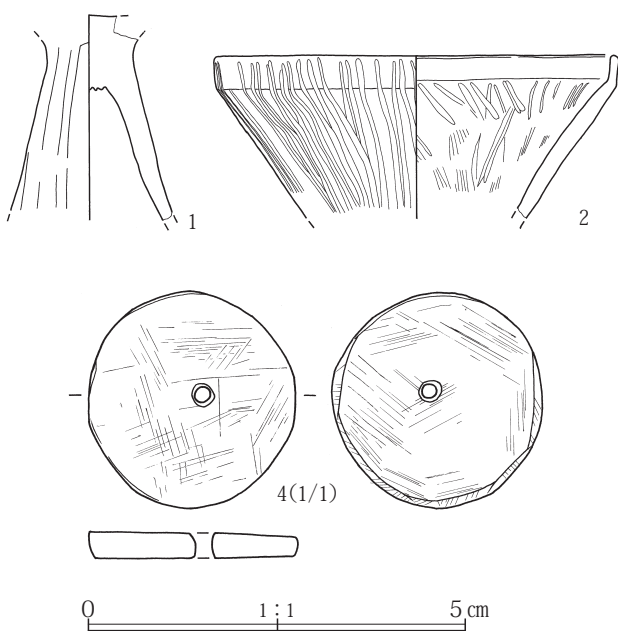
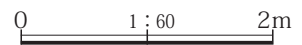
遺物 出土遺物は少ないが、土師器3点と石製品2点を図示した。土器および石製の有孔円盤4はいずれも床面より12cm以上、敲石5は床面より20cm高い位置での出土ある。図示した以外に重量で0.7kgの土師器が出土している。

所見 本住居に確実に伴う資料を持たないが、出土土器は4世紀後半頃の時期である。



6号住居

- 1 褐色土 住居上の堆積土。しまりあり、ブロック状の黄褐色土を部分的に多量に含む。1'は砂質でやや明度高い。
- 2 暗灰色土 住居埋没土で砂質土。しまりあり。
- 3 灰色土 壁崩落土。砂質土でややしまり欠く。
- 4 灰色土 粘質土。床面直上のややしまり強い層で貼床の可能性ある。

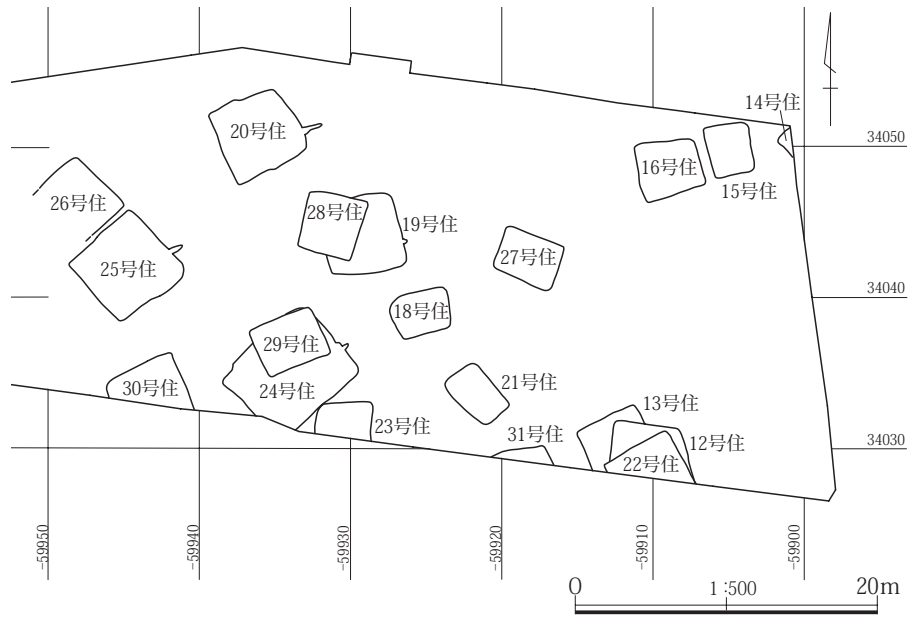


第240図 3区6号住居および出土遺物

(5)古墳時代の堅穴住居

4区の堅穴住居

3区の西側に続く集落で19棟の住居を調査した。集落は2面にわたって確認され、古い時期の集落(22・23・27～31号住居)は小区画水田の上面に築かれている。この集落が一旦泥流に没した後、新しい時期の集落(12～21・24～26号住居)が築かれる。この集落もさらに泥流で埋没した後に畑となり、平安時代に再度集落となる変遷の激しい一画である。住居の分布を見ると、集落は4区西隅にある流路東側にあつて、北西から南東方向へ向かって帯



第241図 4区古墳時代住居配置図

状に多く見られる。自然堤防上の微高地が存在していたもので、集落は北西側・南東側へ広がると思われる。

12号住居(第242・243図 PL. 40-①、86・87

遺物観察表434頁)

4区南東隅にあり、南側は調査区域外で全容を把握できていない。ごく浅い住居だが壁の立ち上がりは把握できたようだ。

位置 027～031-907～912グリッドにある。

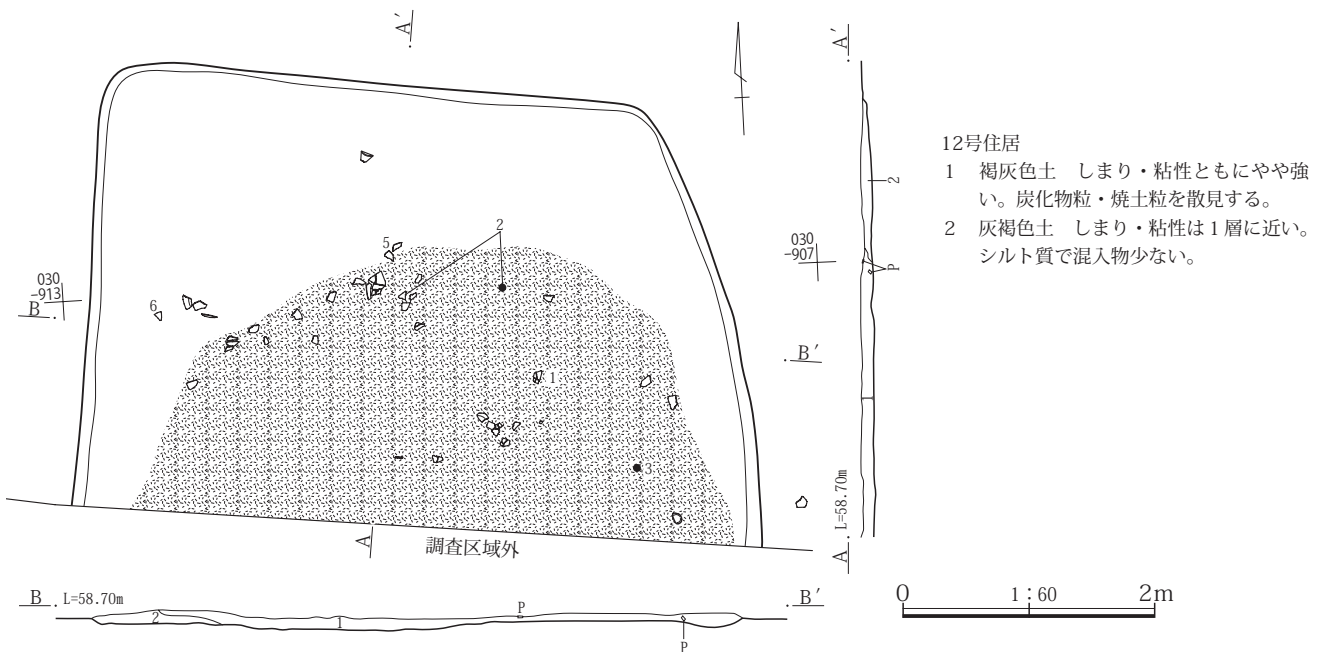
規模形状 東西軸長南側で5.2m、南北軸長3.4m以上の

規模である。北辺が4.2mで著しく短く、平面形状は台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 浅い住居で壁高は最も深い北辺の一部でも7cmしかない。

方位 (西辺)N-6°E。面積 残存16.82㎡

床面 調査範囲では住居中央付近が壁際より7cm前後低くなっている。壁直下を除いた広範囲の床直上に灰の散



第242図 4区12号住居

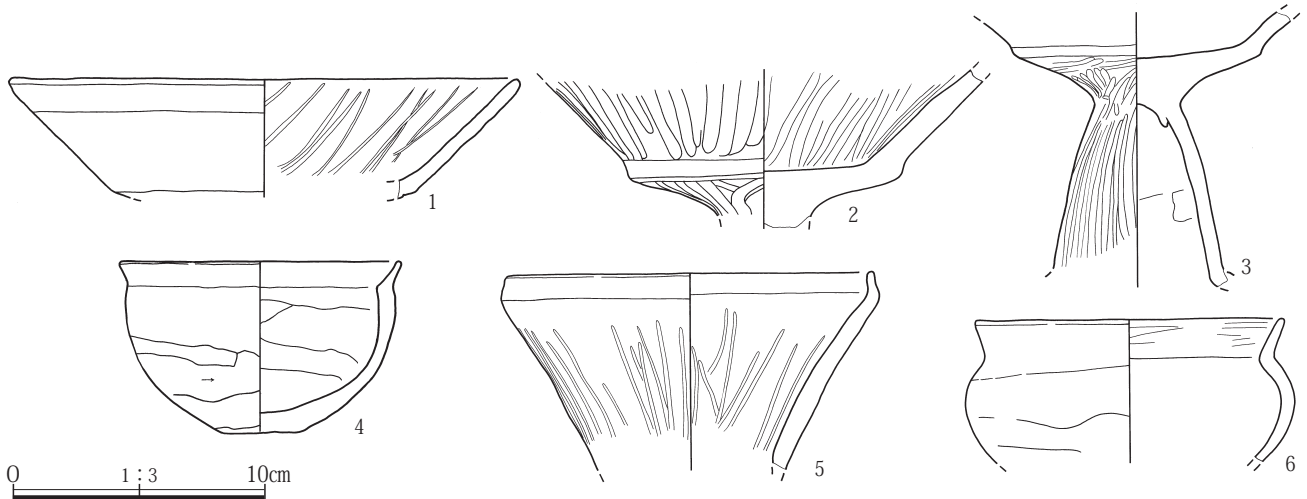
布が見られる。掘り方は認められない。

その他 13・22号住居に後出している。炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 壁際の遺物が少なく、住居中央灰散布範囲の外側を廻るように遺物の出土が多かった。高杯1～3および埴5はいずれも床直上で出土している。ただし本住居床

面に近い遺物が22号住居と接合する例が多数あり、本住居に伴う遺物と確定できるものがない。図示した以外に重量で約7kgの土器が出土し、内1.5%が須恵器である。

所見 本住居の時期を特定する資料に欠くが、出土遺物は5世紀代の範囲にあるようだ。



第243図 4区12号住居出土遺物

13号住居(第244図 PL. 40-②)

4区南東隅にある、壁溝のみ確認の住居である。

位置 028～032-910～914グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.2m、南北軸長3.8m以上の規模である。残存する二隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整美な形状である。

埋没土・壁 壁は残存せず、埋没土の観察はない。

方位 N-65° E。 **面積** 残存5.72m²

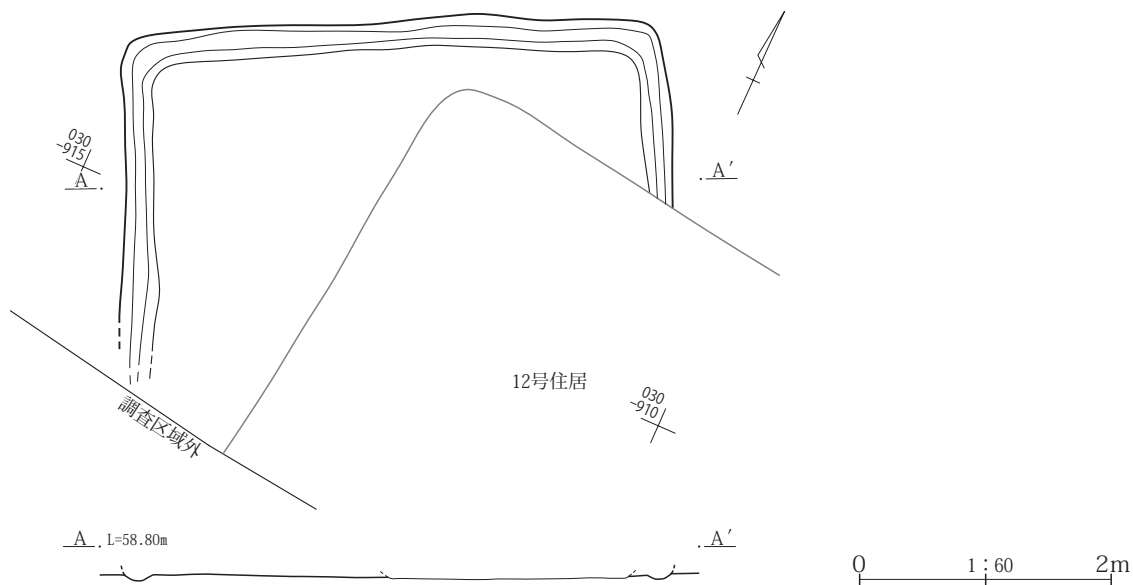
床面 ほぼ水平な底面であるが床面の根拠となる硬化や散布物は見られない。掘り方はない。

壁溝 幅13～21cm、深さ2～5cmの歪みが少ない壁溝が残存部分で全周している。

その他 12号住居に前出している。炉・柱穴等の施設は観察できない。

遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。

所見 遺構形状から古墳時代前期の住居と推定できる。



第244図 4区13号住居

14号住居(第245図 PL. 40-③)

平安時代5号住居の床下にあたる4区南東隅にあり、遺構西隅周辺を確認したのみである。底面が比較的平坦で掘り方が見られることから住居として扱った。

位置 049～051-900～901グリッドにある。

規模形状 南西辺側軸長1.3m以上、北西辺側軸長1.0m以上の規模である。各辺は直線的で残存する西隅は丸みが少なく、比較的整美である。

埋没土・壁 南側から埋没しているようで人為的埋戻しの可能性がある。壁高は最も深い南西辺で20cmを測る。

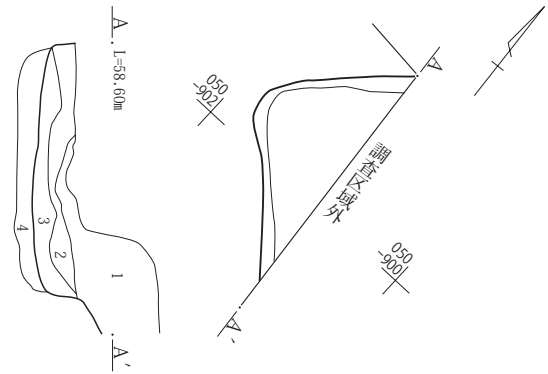
方位 (南西辺)N-43° W。 面積 残存0.55㎡

床面 残存部分では壁際がやや高くなっている。深さ15cm前後の掘り方が全体にある。掘り方埋戻し土は炭化物粒の混入より地山と区別した。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

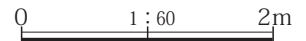
遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。

所見 時期特定の遺物を欠くが、確認面より5世紀前後の遺構である。



14号住居

- 1 褐灰(7.5YR5/1) シルト質の洪水堆積土で砂粒を含む。粘性ややあり。斑鉄あり。
- 2 灰黄褐(10YR5/1) 粘性土。不均等に斑鉄あり。
- 3 褐灰(7.5YR6/1) シルト質で粘性あり。黄橙色土をブロック状に混入する。
- 4 褐灰(5YR5/1) 掘り方埋戻し土。少量の炭化物粒と粗砂を混入する。しまり・粘性あり。



第245図 4区14号住居

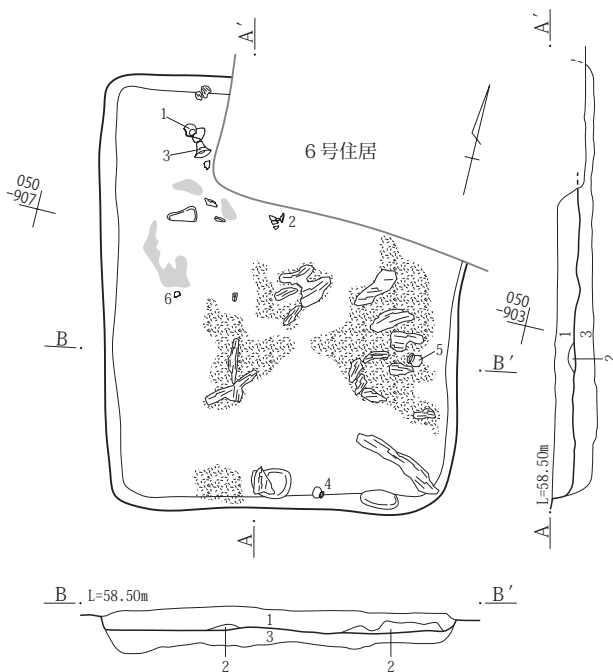
15号住居(第246・247図 PL. 40-④・⑤ 遺物観察表435頁)

焼失住居と思われ、床直上に広く炭化材や灰が散っている。6号住居に北東隅付近を削られているが、掘り方で規模を明らかにできた。

位置 047～051-903～906グリッドにある。

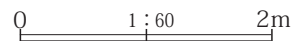
規模形状 長軸長3.2m、短軸長2.65mの長方形を呈している。南辺が北辺より短い逆台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 埋没土はほぼ単層である。壁高は10cm前後



15号住居

- 1 明褐色土 ややシルト質土。しまり・粘性に富む。焼土粒を散見する。
- 2 黒褐色土 炭化物粒の多い層。径5～20mmの炭化材が混じる。
- 3 灰黄褐色土 ややシルト質の掘り方埋戻し土。しまりあり。焼土粒・炭化物粒を散見する。



第246図 4区15号住居

で、最も深い南辺で18cmを測る。各辺は直線的で比較的整美な形状である。

方位 N-13° W。 面積 掘り方6.56㎡

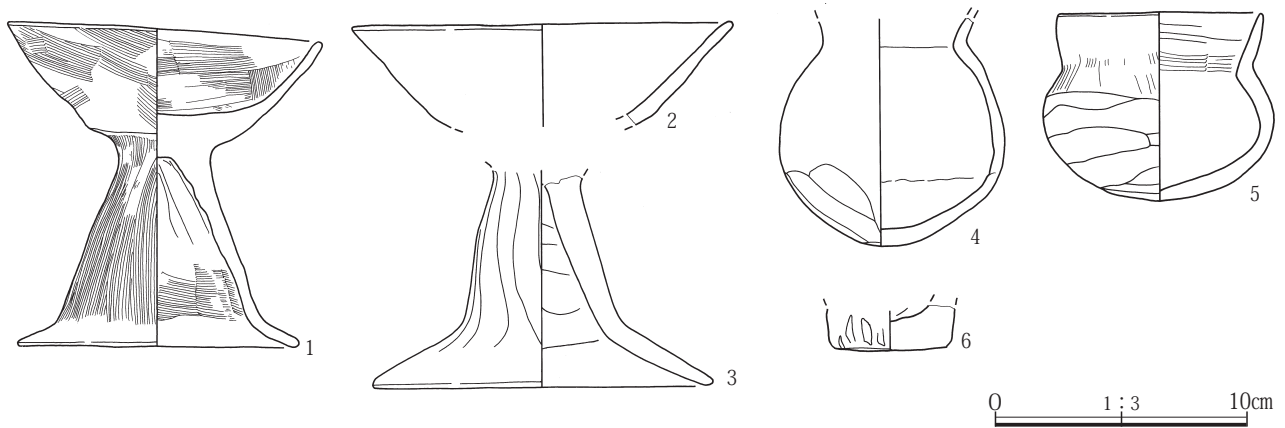
床面 細かな凹凸が多いが、ほぼ水平な床面である。全体に深さ15cm前後の掘り方があり、土坑状にやや深くなる部分がある。

その他 6号住居・3号掘立柱建物に前出している。炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。南壁中央直下の扁平川原石は長さ32cmの台石状だが、床上8cmの高さに浮いた状態の出土で床面に敷かれたものではない。

炭化材 南東隅の材は長さ78cmあり、両端とも床上8cmの高さの水平な状態で出土した。中央南東寄りの材は長さ40cm前後で、床上3cm前後のやはり床に水平な状態での出土である。

遺物 住居北側を中心に出土した6点を図示した。いずれも床直上から床上3cmの高さでの遺物で、本住居に確実に伴う遺物である。図示以外には甕類破片が少量出土しただけで、復元率の高い住居であった。

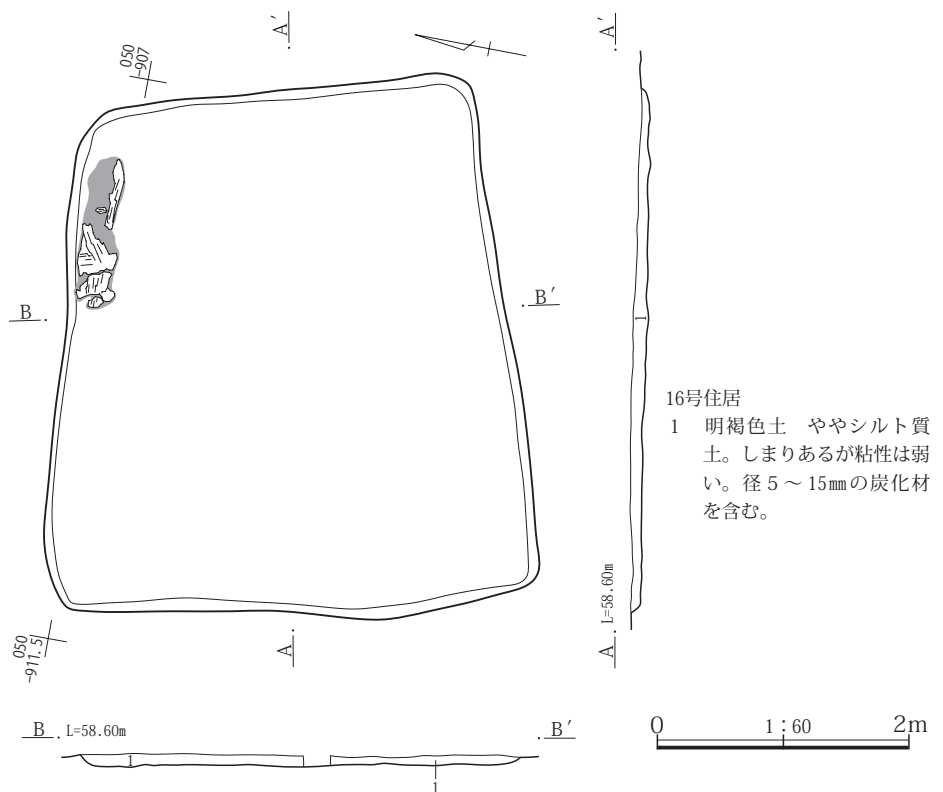
所見 高杯は古墳時代中期の特徴を持ち、本住居は5世紀代に位置づけられる。



第247図 4区15号住居出土遺物

16号住居(第248図 PL. 40-⑥)

北壁下に炭化材がまとまって出土するほか、埋没土内に炭化物粒の混入が多い。焼失住居の可能性はある。



第248図 4区16号住居

位置 046～050-906～911グリッドにある。

規模形状 長軸長4.0m、短軸長西側で3.7mの東西に長い長方形を呈している。東辺が西辺より80cm短い台形状に歪んでいる。各辺は比較的直線的である。

埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程を想定できる資料はない。壁高は7cm前後で一様である。

方位 N-79° E。 **面積** 13.68㎡

床面 細かな凹凸が多く、東側へ低くやや傾斜していて西壁下と5cmの比高差がある。掘り方は見られない。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。本住居の上面畑耕土には焼土粒の混入が多く見られた。畑面は住居床面より30cm前後の高さがあるが、焼土は住居範囲外にも広がっており、耕作により埋没土が拡散した可能性がある。

炭化材 北壁下の炭化物は床面直上から床上4cmの高さの出土で、最大で56cmの長さが確認できる。細かな炭化物は住居内のほぼ全体に見られる。

遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。上面畑の耕作土内からやや多量の遺物が出土しており、本住居の遺物が含まれるはずである。

所見 時期特定の遺物を欠くが、確認面より4～5世紀前後の住居である。

18号住居(第249図 PL.40-⑧、87 遺物観察表435頁)

確認段階で床面に達していて、住居プランは掘り方の形状に拠った。

位置 037～040-923～927グリッドにある。

規模形状 長軸長3.8m、短軸長2.8mの東西に長い長方形を呈している。各隅の丸みが強く、特に北西隅付近は不整である。

埋没土・壁 壁はほとんど確認できていない。

方位 N-72° E。 **面積** 掘り方10.31㎡

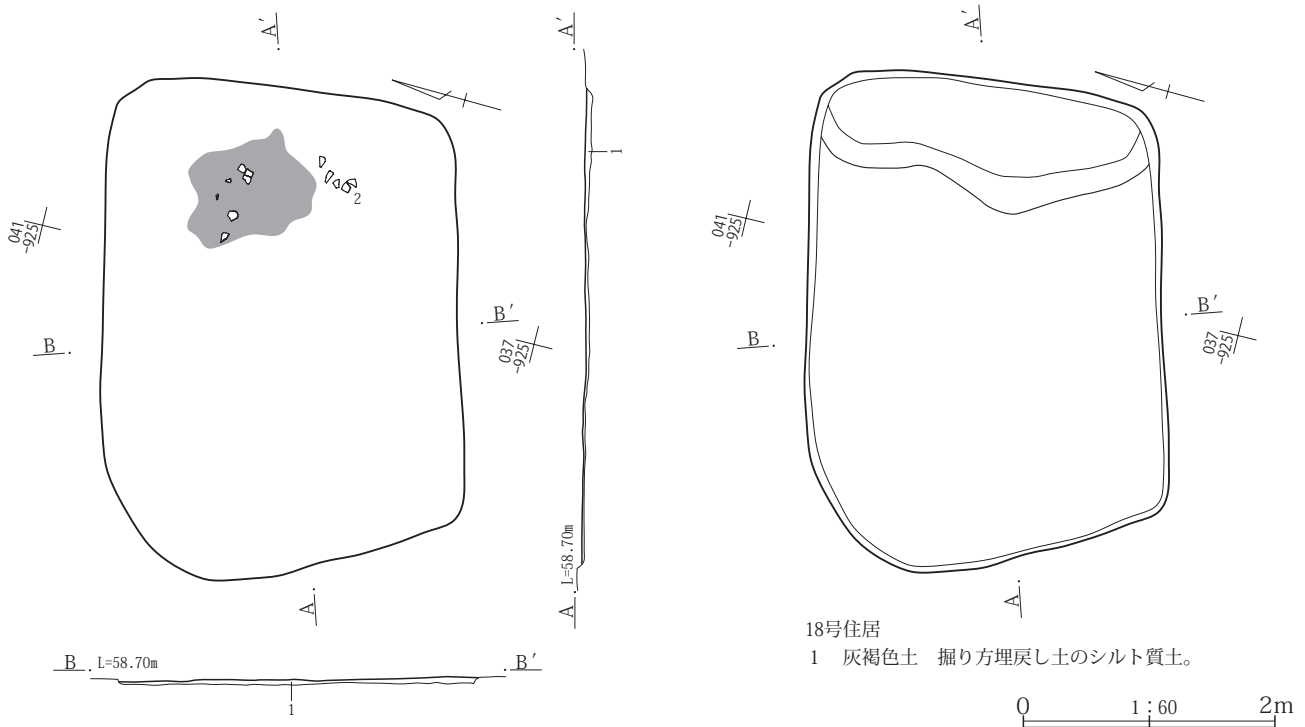
床面 東辺付近は炭化物粒の散布があり、床面が一部で残存していることを確認できるが、西側は不明瞭である。浅い掘り方が見られ、東側では壁に沿って土坑状にやや深くなっている。

炉 住居中央東寄りの炭化物粒等の散布地点より、この位置に炉があったことが想定されるが、被熱面や掘り込みの窪みは確認できなかった。

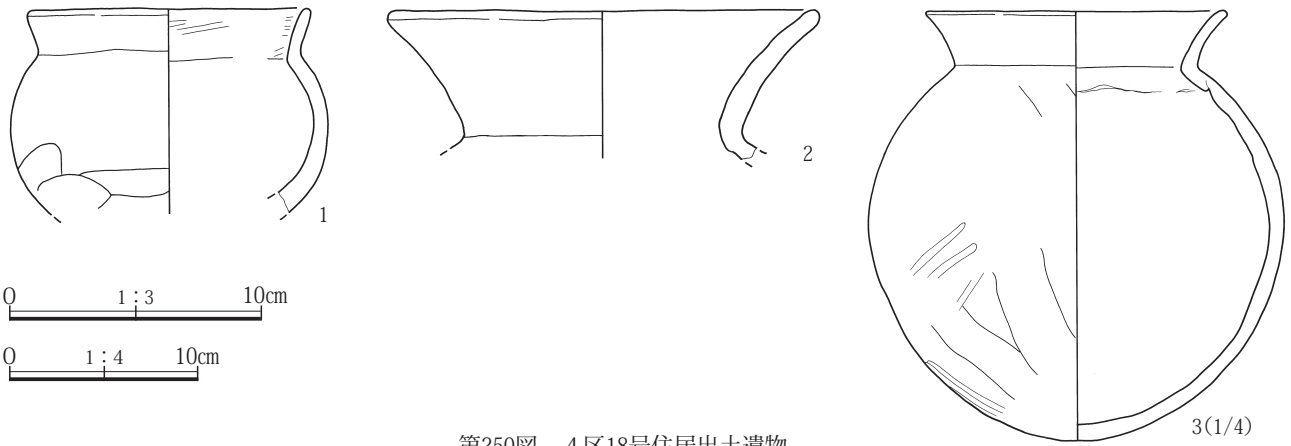
その他 柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 炭化物粒集中出土地点付近出土の3点を図示した。いずれも床直上の出土である。図示した以外の破片は重量0.5kg以下で少ない。甕類主体である。

所見 北西隅の歪みは掘り方の形状によるもので、床面レベルでは丸みの少ない隅と思われる。

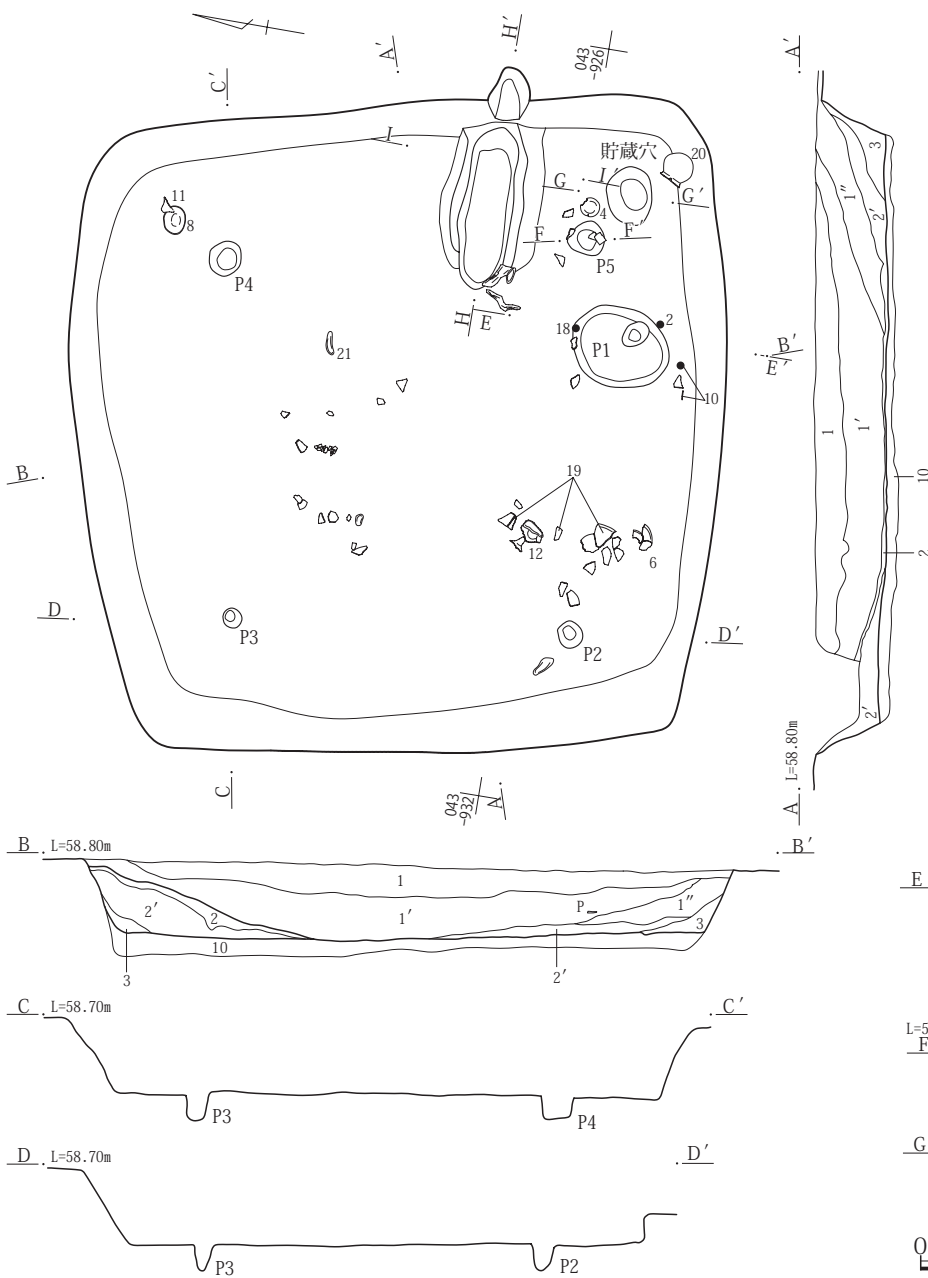


第249図 4区18号住居



第250図 4区18号住居出土遺物

19号住居(第251～254図 PL. 41-①～④、87～89
遺物観察表435・436頁)



19号住居

- 1 黄灰色土 シルト質土。しまりある弱粘性土。炭化物粒を散見する。1'にはぶい黄橙色シルト土が目立ち、1''はAs-Cと思われる軽石を散見する粘性土。
- 2 黄灰色土 しまり・粘性に富むシルト質土。炭化物粒・焼土粒を多量に含む。2'はやや砂質で粘性弱く炭化物粒の混入少ない。2''は灰色味を帯び、白色軽石粒・炭化物粒を多く含む。
- 3 灰褐色砂層 しまりあり、粘性なし、砂質。
- 10 灰褐色土 掘り方埋戻し土。しまりある粘性土。炭化物粒の混入多く、ブロック状のAs-Cを不均等に含む。

19号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	80×65×31	土坑か
2	21×20×18	支柱穴
3	15×15×20	支柱穴
4	27×25×19	支柱穴
5	29×27×15	支柱穴

第251図 4区19号住居

4区では4棟の初現期カマドを持つ住居が菱形の配置を作るように集中して確認されたが、本住居はその中の東側にある。

位置 041～046-926～932グリッドにある。

規模形状 東西軸長東側で4.65m、南北軸長4.6mのほぼ正方形だが、西辺が東辺より40cm短い台形状に歪んでいる。各辺は外側へ膨らむようにやや湾曲気味である。

埋没土・壁 壁側より自然堆積状の埋没過程が確認できる。比較的深い住居で壁高は50cm前後あり、最も深い北辺で71cmを測る。

方位 N-78° E。 **面積** 19.70㎡

カマド方位 N-90° E。

床面 北側へ低く傾斜していて、南隅と7cm前後の比高差がある。深さ7～13cmの掘り方が全体に見られる。

ピット 4支柱穴(P1～4)が見られるが、住居規模に比べ貧弱な施設である。正方形を画するための配置はP1よりP5が支柱穴に適しているようだが、P1は本住居支柱穴の中で最も深く、20・24号住居の支柱穴配置など、

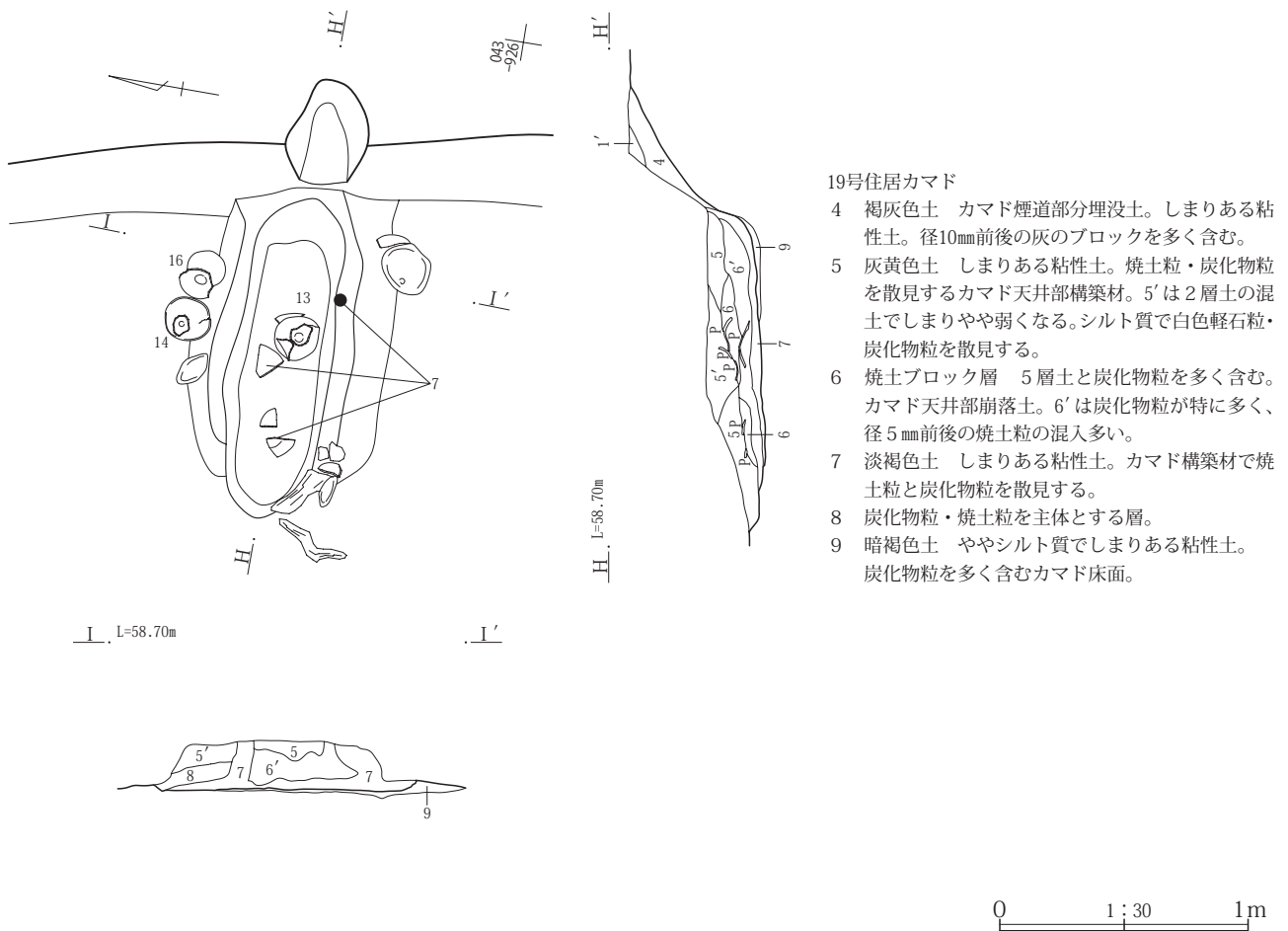
本遺跡には類例がある。南東隅の貯蔵穴も規模は柱穴と変わらず、底面も不整で不明瞭である。

カマド 東辺南寄りにある。住居の軸方向より南へ偏った軸方向にあり、捻じれたように見える。燃焼部は住居内にあり、袖先端は住居内120cmの位置に達している。火床は部分的に小さく窪むが、住居床面とほぼ同レベルである。煙道の壁外への張出しは25cmを測る。

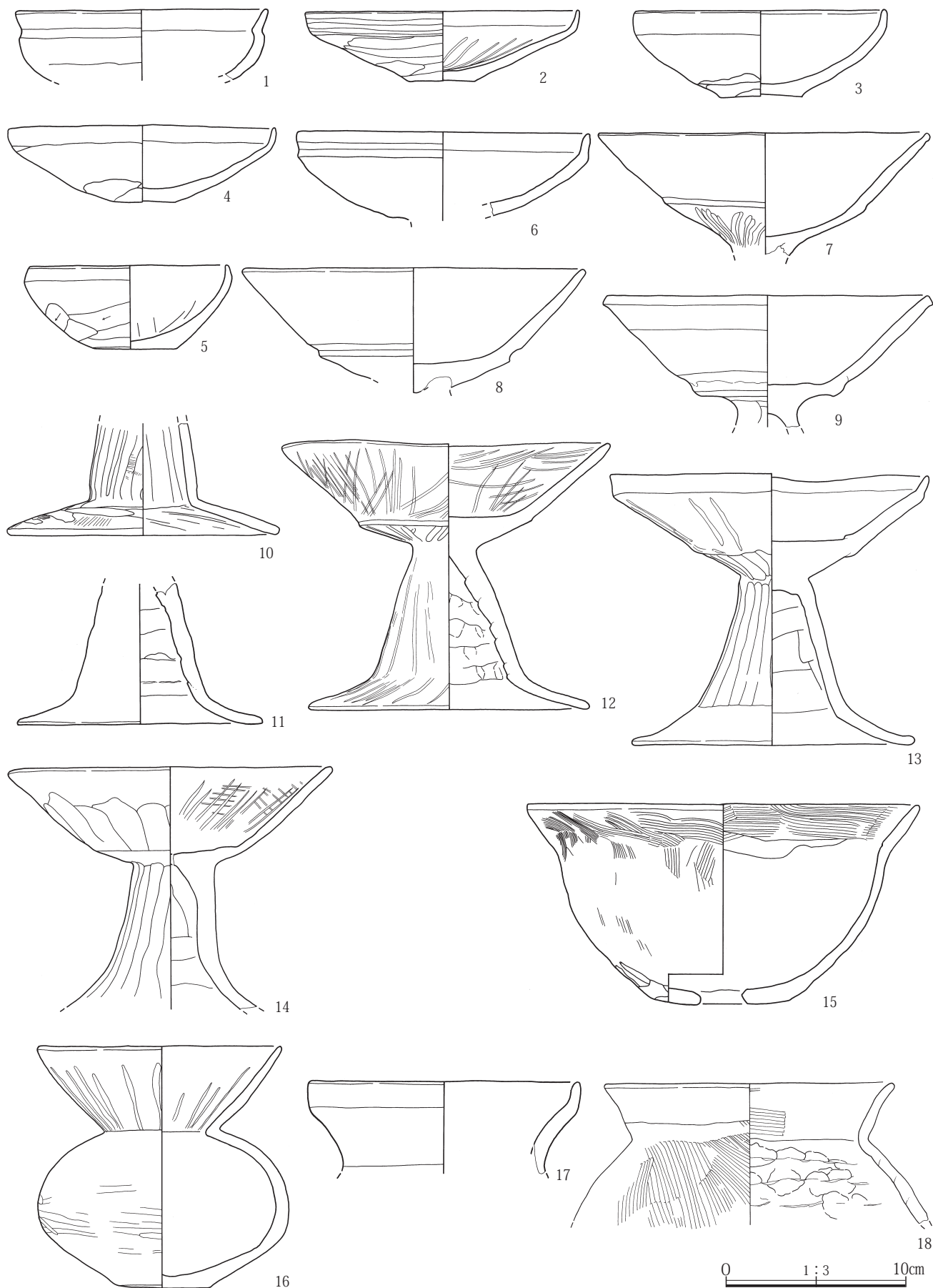
その他 壁溝は確認できない。

遺物 出土遺物は多く、住居全体に散乱する土器20点と石器1点を図示した。7・13の高杯2点がカマド内の出土である。支脚の転用されたものであろう。14・16はカマド北脇に置かれるようにして出土した。甕20はカマド南の南東隅付近床直上で有孔鉢15とともに出土した。甕19はカマドから離れた南西隅寄りから出土である。図示した以外にも甕類を中心に重量で6.8kgの土器が出土し、そのうち1.7%の須恵器が含まれている。

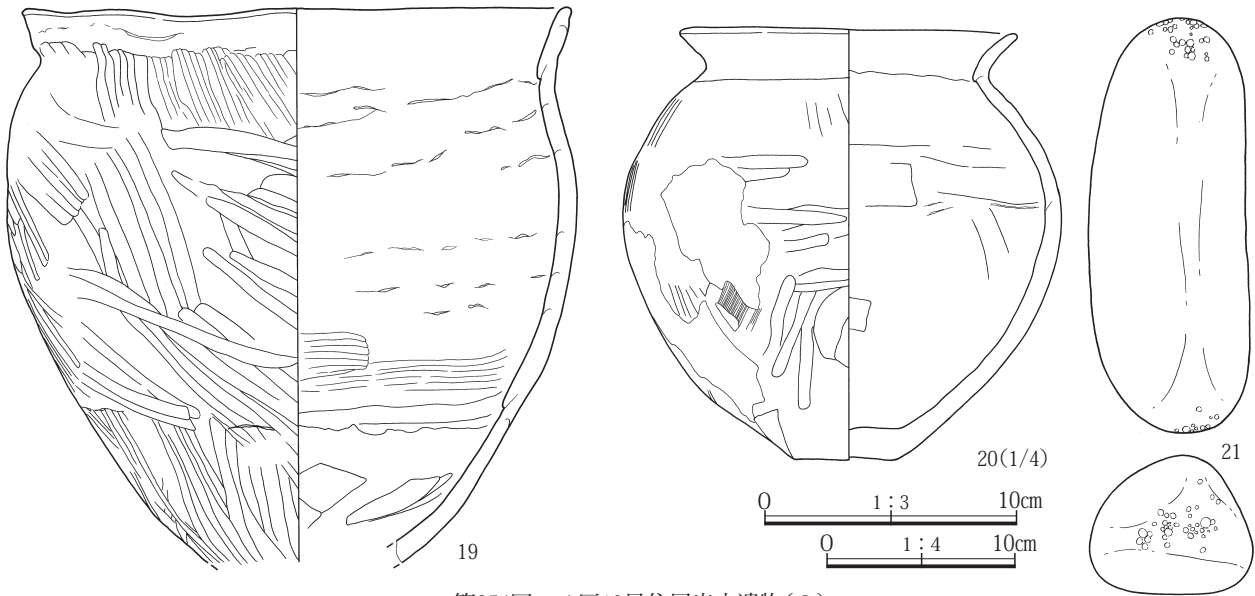
所見 土師器杯類に須恵器模倣杯がなく、高杯の形状などからも5世紀代の住居であろう。



第252図 4区19号住居カマド



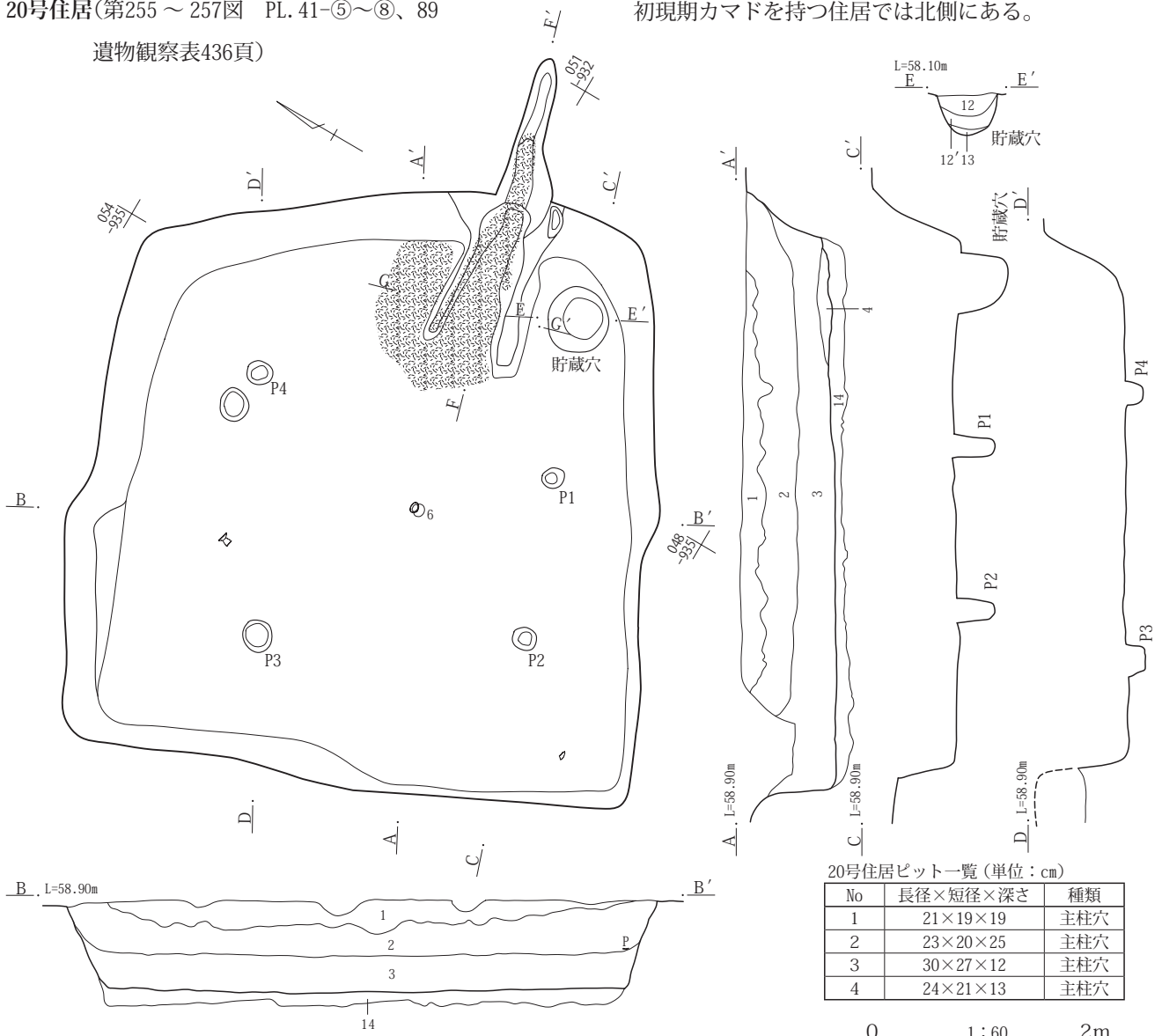
第253图 4区19号住居出土遺物(1)



第254図 4区19号住居出土遺物(2)

20号住居(第255～257図 PL. 41-⑤～⑧、89
遺物観察表436頁)

初現期カマドを持つ住居では北側にある。



第255図 4区20号住居

位置 047～053-933～939グリッドにある。

規模形状 東西軸長北側で4.3m、南側で4.9m、南北軸長西側で4.7mの規模で、各辺の長さが一様でない台形状に歪んだ形状である。

埋没土・壁 水平に近い堆積の部分が多く、人為的な埋戻しの痕跡は見られない。壁は上方で開き気味である。深度に富む住居で壁高は75cm前後を測る。

方位 (西辺)N-62° E。面積 20.60㎡

カマド方位 N-75° E。

床面 カマド周辺を除くと比較的平坦な床面で、深さ5～15cmの貼床が全面にある。

ピット 4支柱穴(P1～4)を確認した。カマド寄りのP1が著しく西側へ逸れているが、この歪みは19号住居にも見られる。

貯蔵穴 南東隅にある。小規模な施設だが柱穴より深い。

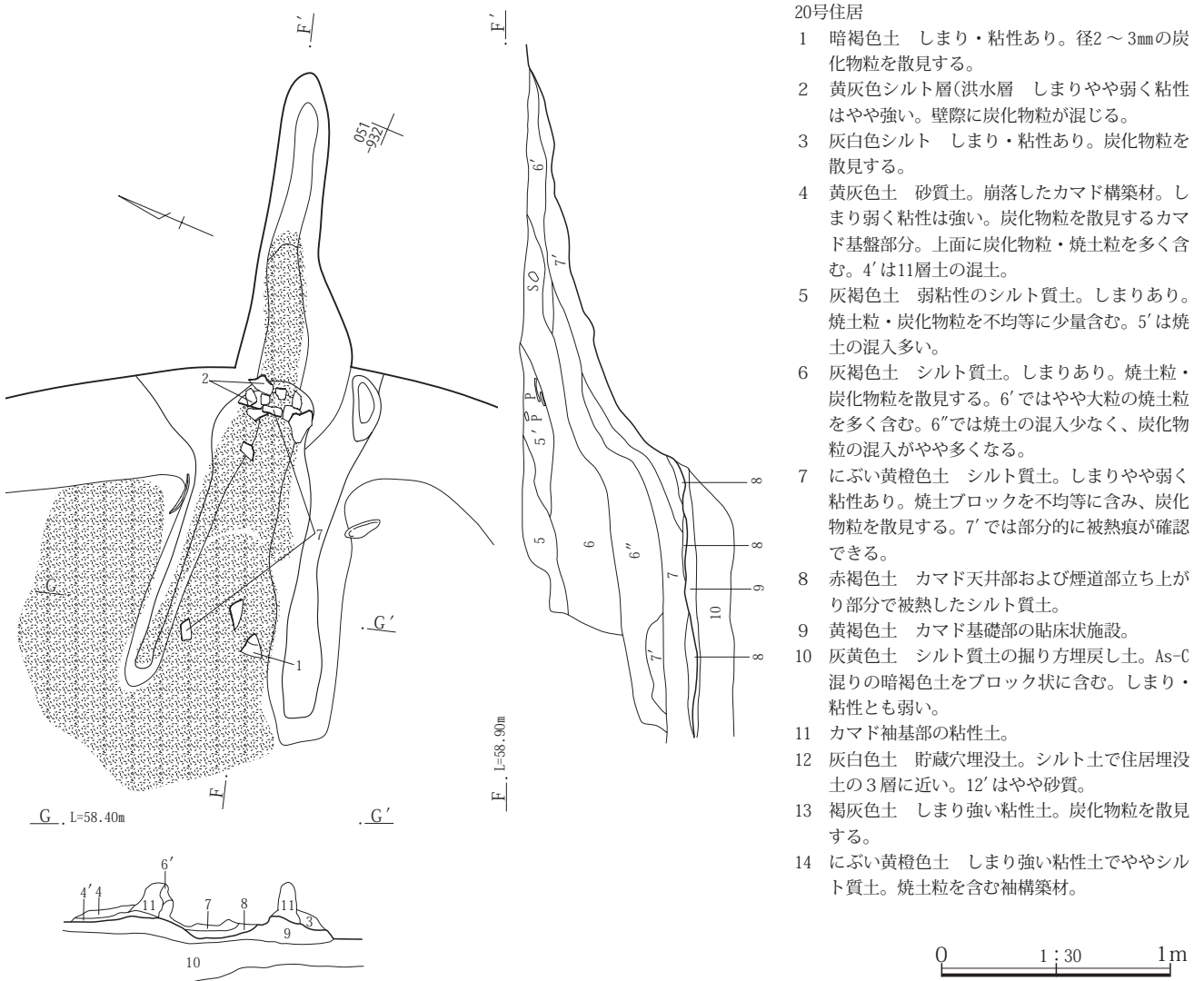
カマド 東辺南寄りにカマドが設けられ、カマドが住居

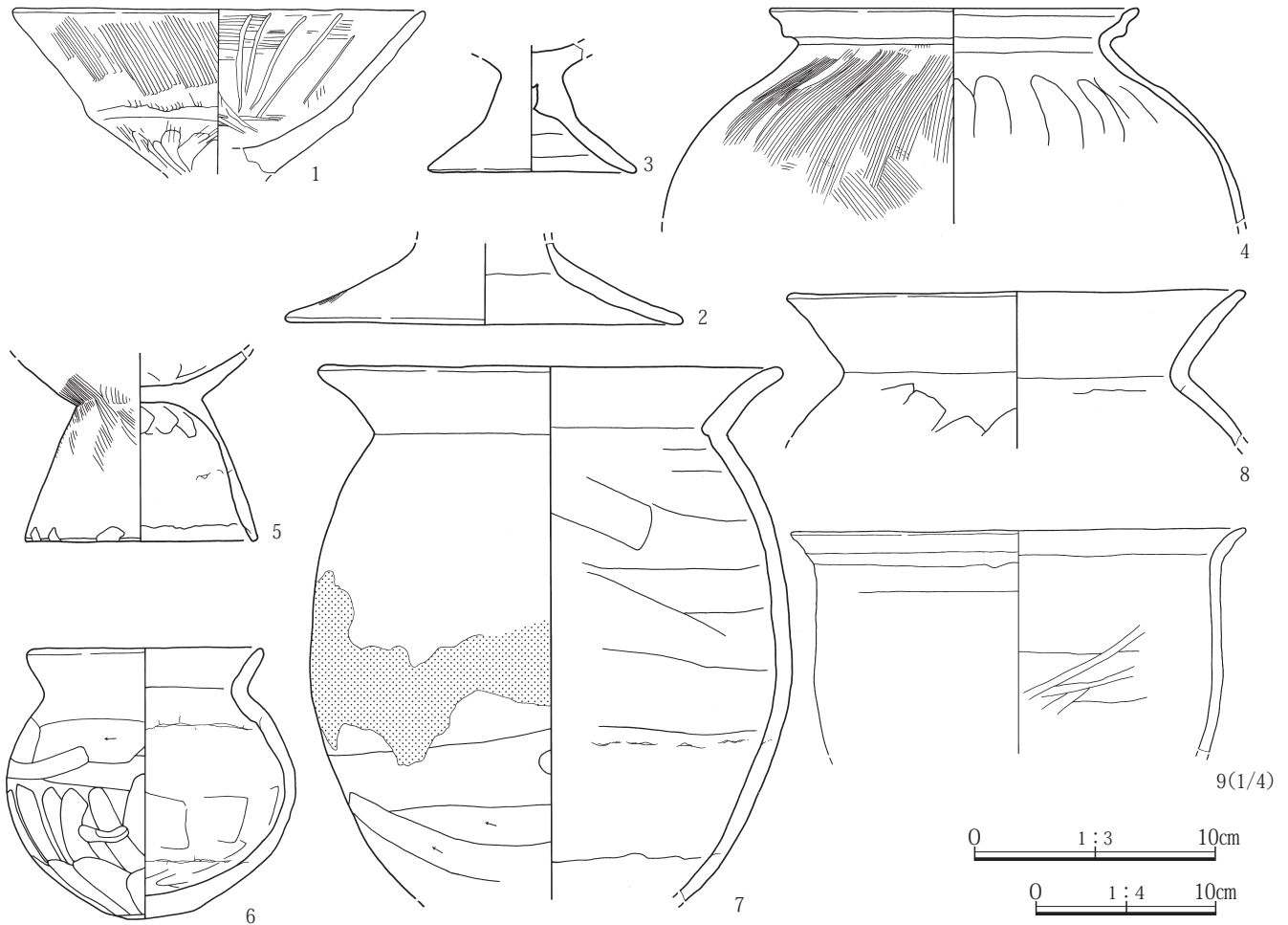
軸方向より南へ偏った軸方向にあるなど19・24号住居に類似した施設である。燃烧部は住居内にあり、灰や炭化物粒がカマド前やカマド北側に散っている。袖先端は住居内130cmの位置に達している。煙道の壁外張出しが120cmと長いことが19号住居と大きく異なっている。

その他 壁溝は見られない。

遺物 カマド周辺出土を中心に土器9点を図示した。カマド内から高杯1・2と甕7を出土している。高杯は19号住居同様支脚に転用したものであろう。小型甕6は住居中央の床上30cm以上浮いた状態の出土である。4・5の台付甕は埋没土内の遺物で混入品であろう。図示した以外にも遺物の出土はやや多く、甕類を主体に重量で約7kgの土器があるが、初現期カマドを持つ住居中、唯一須恵器片の出土が見られなかった。

所見 5世紀の住居であるが、4世紀代遺物の混入が目立つ。





第257図 4区20号住居出土遺物

21号住居(第258図 PL. 42-①)

4区で確認した他の住居と比較すると、同様の住居とするには躊躇を伴う細長い遺構である。

位置 031～035-919～923グリッドにある。

規模形状 長軸長3.8m、短軸長2.4mの長方形で、南東辺が北西辺より20cm短い台形状に歪んでいる。南西辺が湾曲し、全体をやや歪めている。

埋没土・壁 埋没土は単層であった。壁は浅く、壁高は5cm前後である。

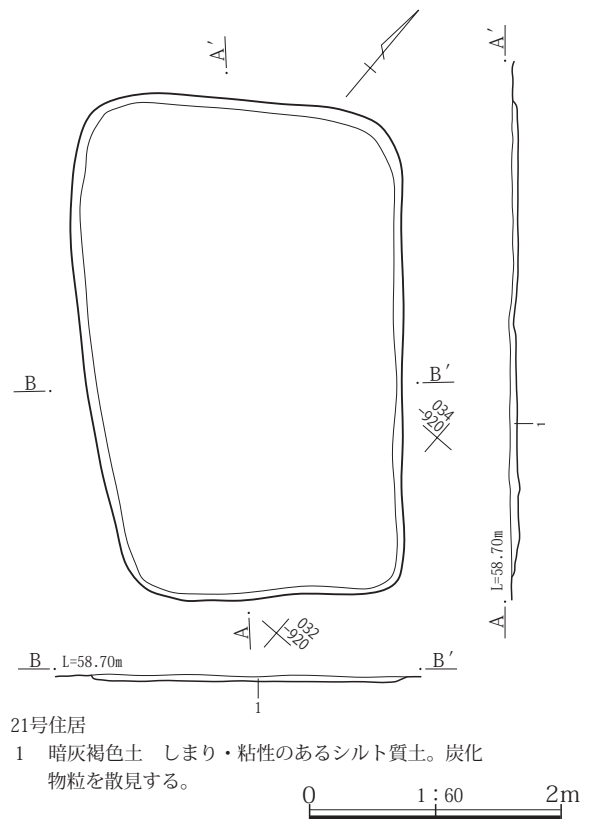
方位 N-41° W。面積 8.81㎡

床面 細かな凹凸が多く中央付近がわずかに高いが、ほぼ水平な床面である。掘り方は見られない。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。

所見 時期特定の遺物を欠くが、確認面より4世紀前後の遺構である。



21号住居

1 暗灰褐色土 しまり・粘性のあるシルト質土。炭化物粒を散見する。

第258図 4区21号住居

22号住居(第259～262図 PL. 42-②～④、89・90

遺物観察表436・437頁)

3面調査時に住居の存在を確認したが、想定した床面より大幅に下がる床面があることを4面の調査で確認した住居である。

位置 027～030-907～913グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.7m、南北軸長3.6m以上の規模がある。残存部分では各辺は直線的で、各隅の丸みも少なく整美な形状である。

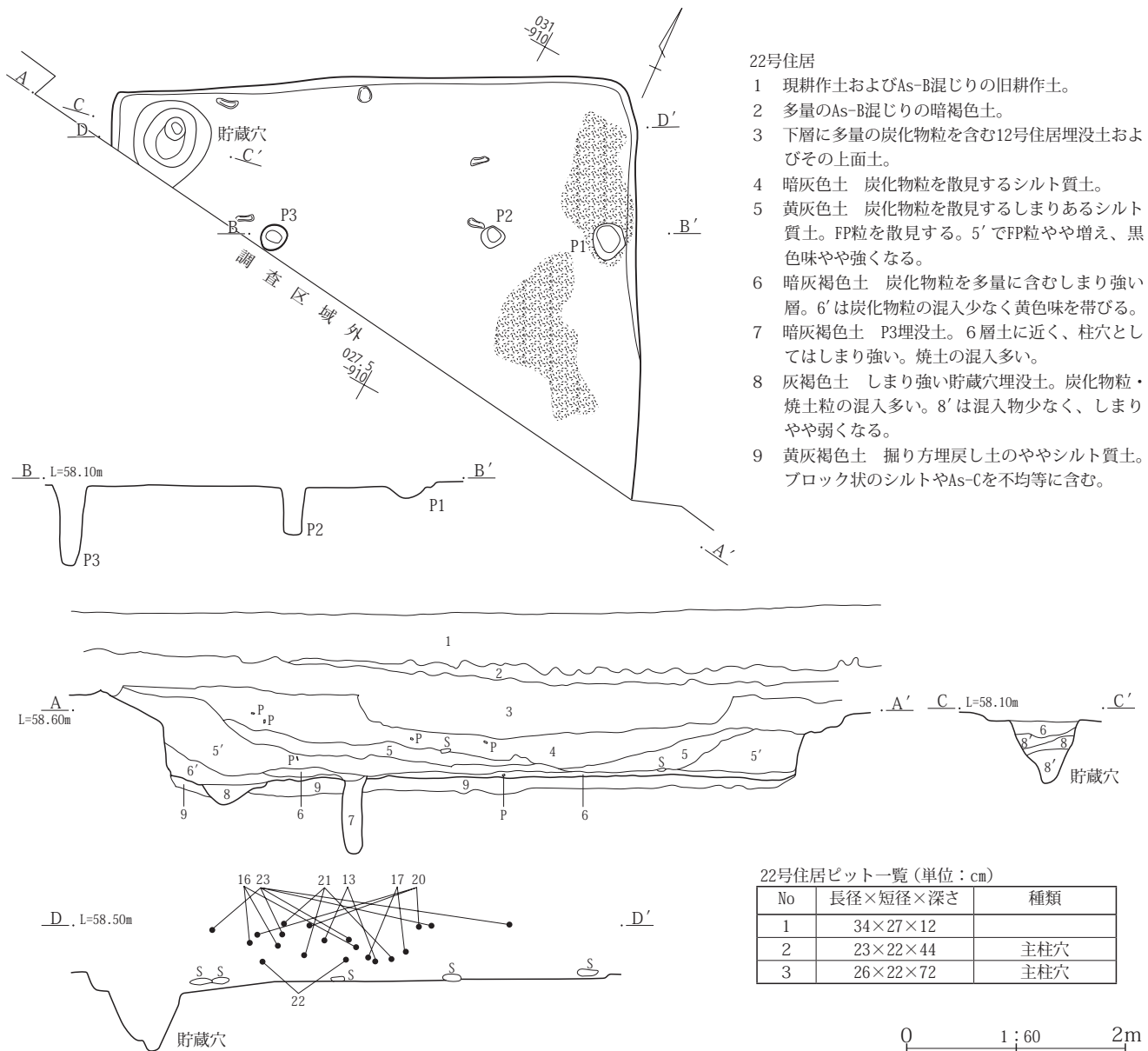
埋没土・壁 炭化物粒の混入の多い埋没土であった。特に4層下面は遺物の混入も多く、当初この層下側で住居床面を想定していた。断面から確認できる壁高は東辺で55cmを測る。

方位 N-30° W。面積 残存10.15m²

床面 炭化物粒混入の多いしまり強い土(6層)上面を床面と考えたが、凹凸が多くあまり明瞭な床面ではなかった。東壁下など一部に踏み固められた灰が見られ、床面らしい部分も残存している。6層下にも平坦な面があり、6層を挟んだ2枚の床面の可能性がある。全面に深さ15cm前後の掘り方が見られた。

ピット P2・3は4支柱穴の北側2本と思われる。東壁直下のP1は支柱穴柱筋延長上の壁柱穴の位置にあるが、浅く不明瞭な施設である。

貯蔵穴 住居北西隅に貯蔵穴と思われる窪みを確認した。東西方向の径70cmで上面は広いが、底面は狭い。床面からの深さ54cmを測る。



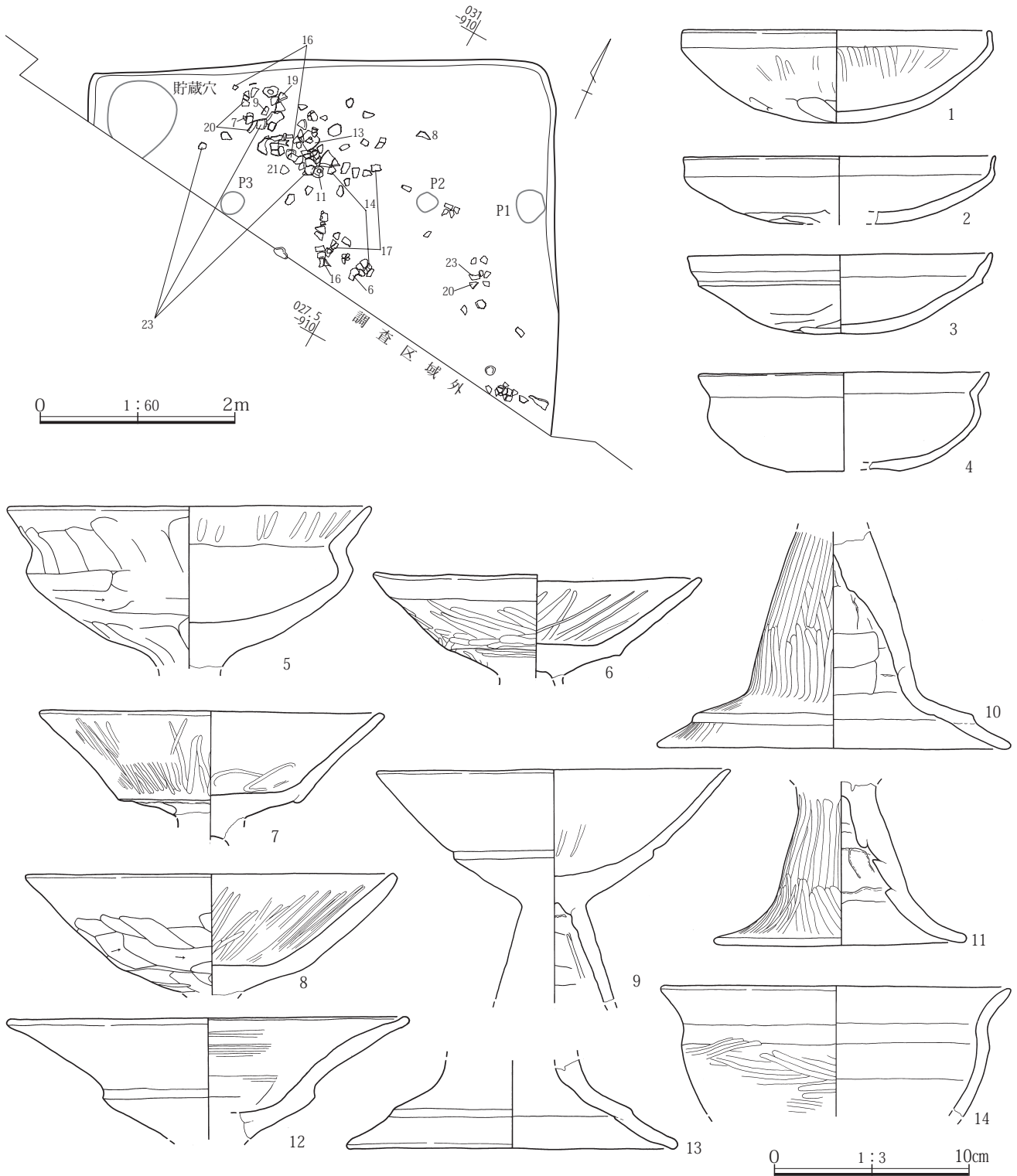
第259図 4区22号住居

その他 12号住居に前出している。炉の痕跡や壁溝は確認できない。床面直上から若干高い位置にかけて細長い川原石の出土が多かった。

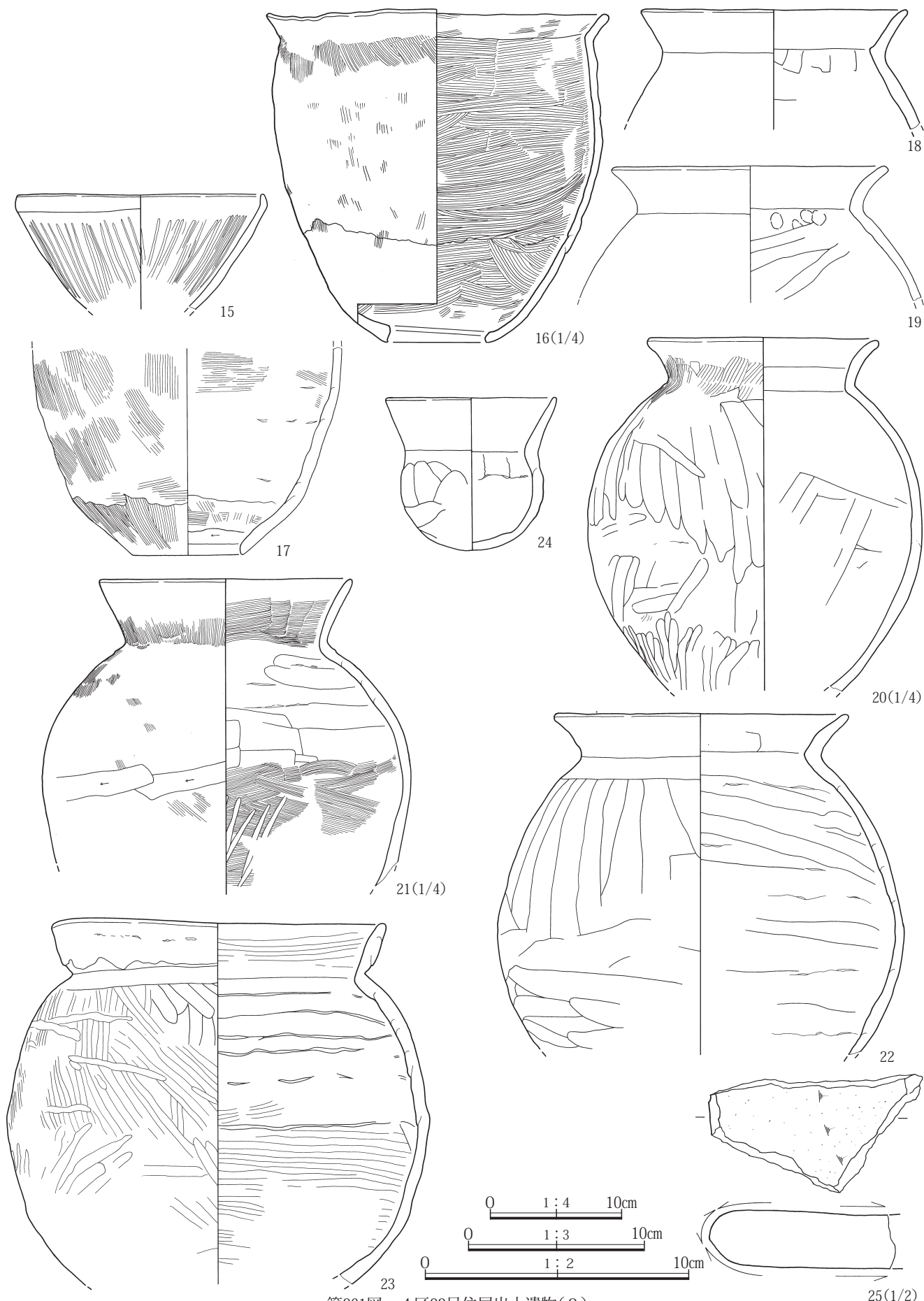
遺物 住居内の全域から多量の遺物を出土し、土器24点と石製品1点を図示した。広範囲に散乱した破片が接合するものが多く、本住居使用の什器と確認できる遺物が

ない。また、他の住居と接合する土器もきわめて多かった。1・20・21・23は12号住居と、10は3区6号住居出土破片と接合している。図示した以外にも遺物の出土は多く、重量で本遺跡住居では最多の約19kgの土器があった。須恵器片が含まれるが全体の0.6%である。

所見 出土土器は5世紀代が主体である。



第260図 4区22号住居遺物出土状態および出土遺物(1)



第261图 4区22号住居出土遺物(2)

23号住居(第262図 PL. 42-⑤)

床面が不明瞭で、掘り方のみ確認できた住居である。南側は調査区域外で全容を明らかにできていない。

位置 030～033-928～932グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.5m、南北軸長2.3m以上の規模である。北西隅が鈍角に開き歪んだ方形である。

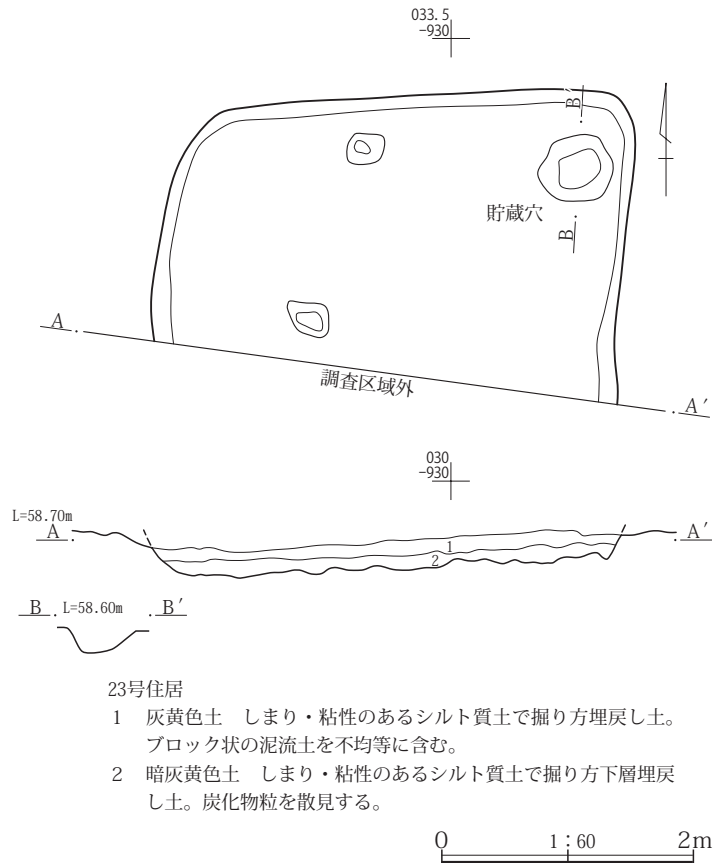
方位 N-4° E。 **面積** 残存7.18㎡

床面 全体に20cm前後の厚さの掘り方埋戻し土がある。部分的にピット状の窪みがあるが掘り方底面からの深さ10cm未満の不明瞭な窪みである。

貯蔵穴 北東隅に径50cmの不整円形を呈した掘り方底面からの深さ18cmの窪みがある。底面は平坦ではないが配置より貯蔵穴と思われる。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。



第262図 4区23号住居

24号住居(第263～266図 PL. 42-⑥～⑧、90・91

遺物観察表437・438頁)

南隅を流路に壊されているが、全容は推測できる。

位置 031～039-929～938グリッドにある。

規模形状 長軸長6.4m、短軸長5.6mの長方形を呈している。カマドのある古墳時代住居では最も大きい。各隅は直角、各辺は直線的で比較的整美な形状である。

埋没土・壁 壁際から均等に埋もれていて、人為的な埋戻しの痕跡は見られない。壁高はほぼ一様で40cm前後である。

方位 N-50° E。 **面積** 復元33.74㎡

床面 北西側へやや低く傾斜し、南東側と5cm前後の比高差がある。全体に深さ20cm前後の掘り方がある。

ピット 4支柱穴(P1～4)を確認した。住居規模に比べ小さな柱穴である。P1が南東側へ大きく逸れるのは本遺跡該期住居の特徴である。

貯蔵穴 東隅のカマド袖に隙間なく接する位置で確認した。径105×96cmの楕円形で深さ56cmを測る底面が平坦

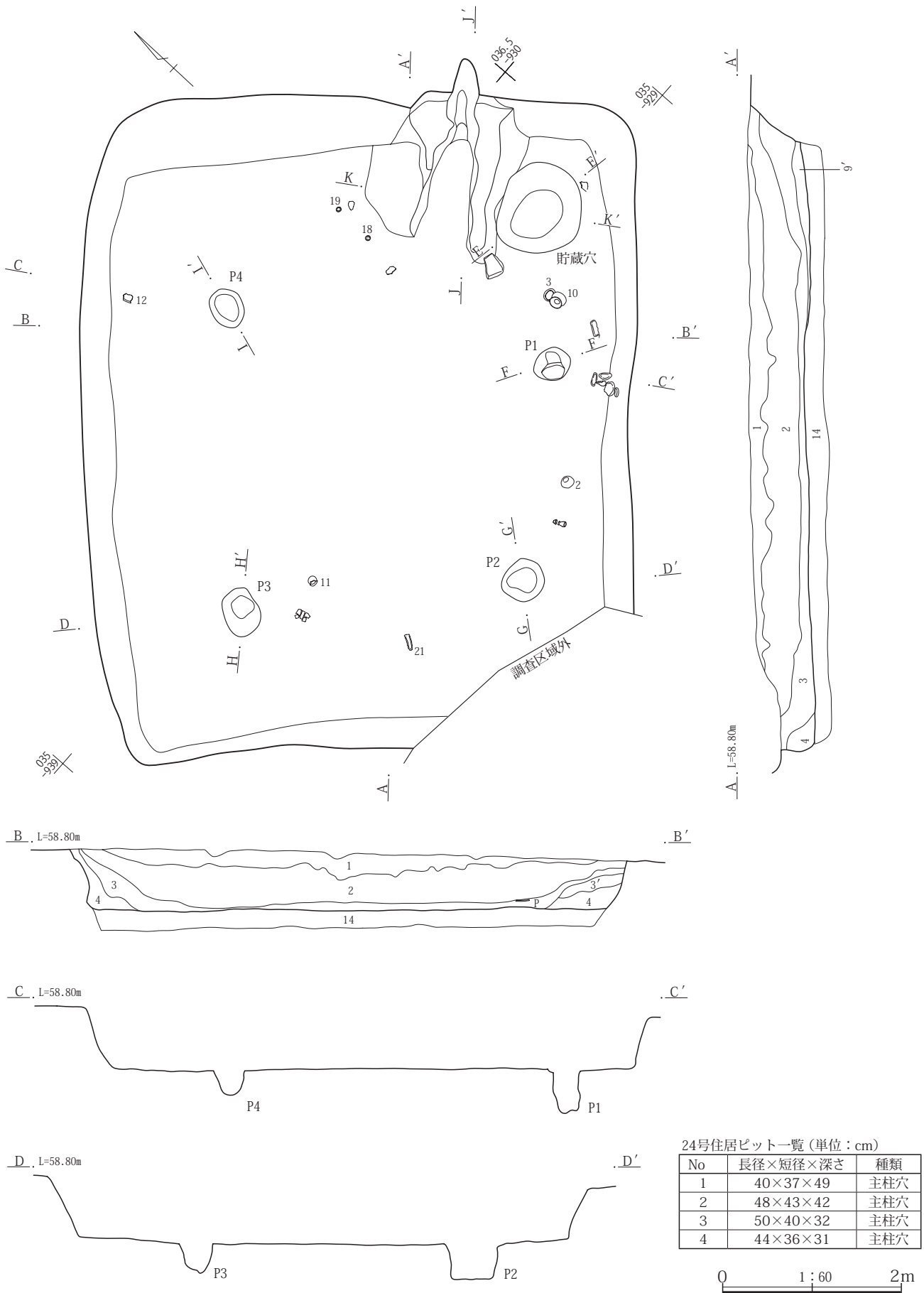
な施設である。

カマド 東辺南寄りにカマドが設けられ、カマドが住居軸方向より南へ偏った軸方向にある。燃烧部は住居内にあり、袖先端は住居内140cmの位置に達している。煙道の壁外への張出しは40cmを測る。カマド前面から北西袖周辺に炭化物粒の散布がやや多かった。

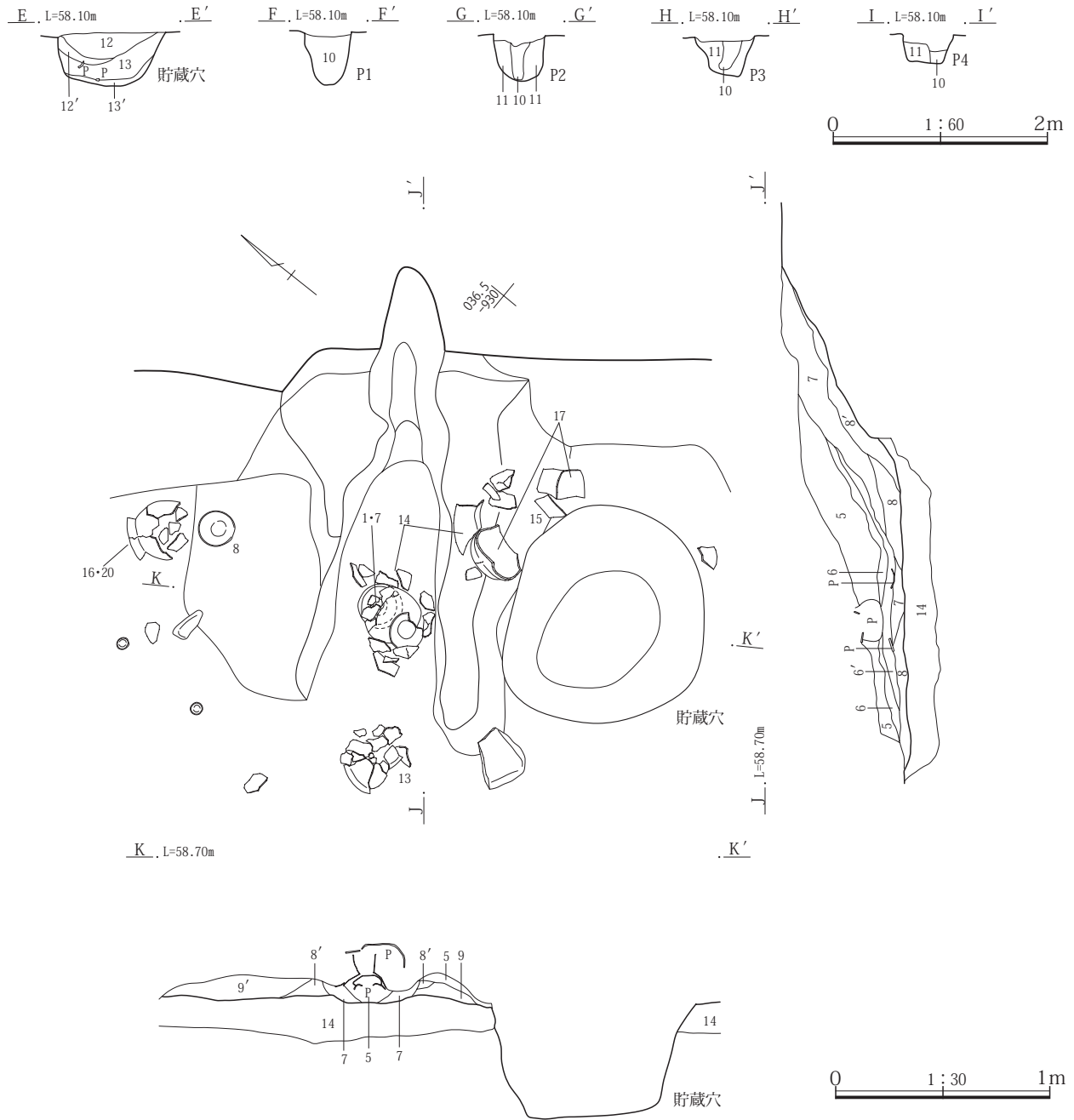
その他 壁溝は観察できない。

遺物 カマド周辺を中心に多量の遺物が出土し、土器20点と石製品1点を図示した。カマド内から高杯7が出土しているが19・20号住居などと同様支脚に転用したものであろう。カマド内には鉢1・甕14、カマド前面から甕13が出土している。カマド両袖脇の遺物が多く、北西袖脇から8・16・20、南東袖脇から15・17が出土している。南東壁直下では2・3・10の出土がある。図示した以外にも出土遺物は多く、重量で7kgを超える土器がある。須恵器も微細片が1点見られる。

所見 出土遺物は須恵器や模倣杯出現前で、5世紀代後半頃の住居と推定できる。



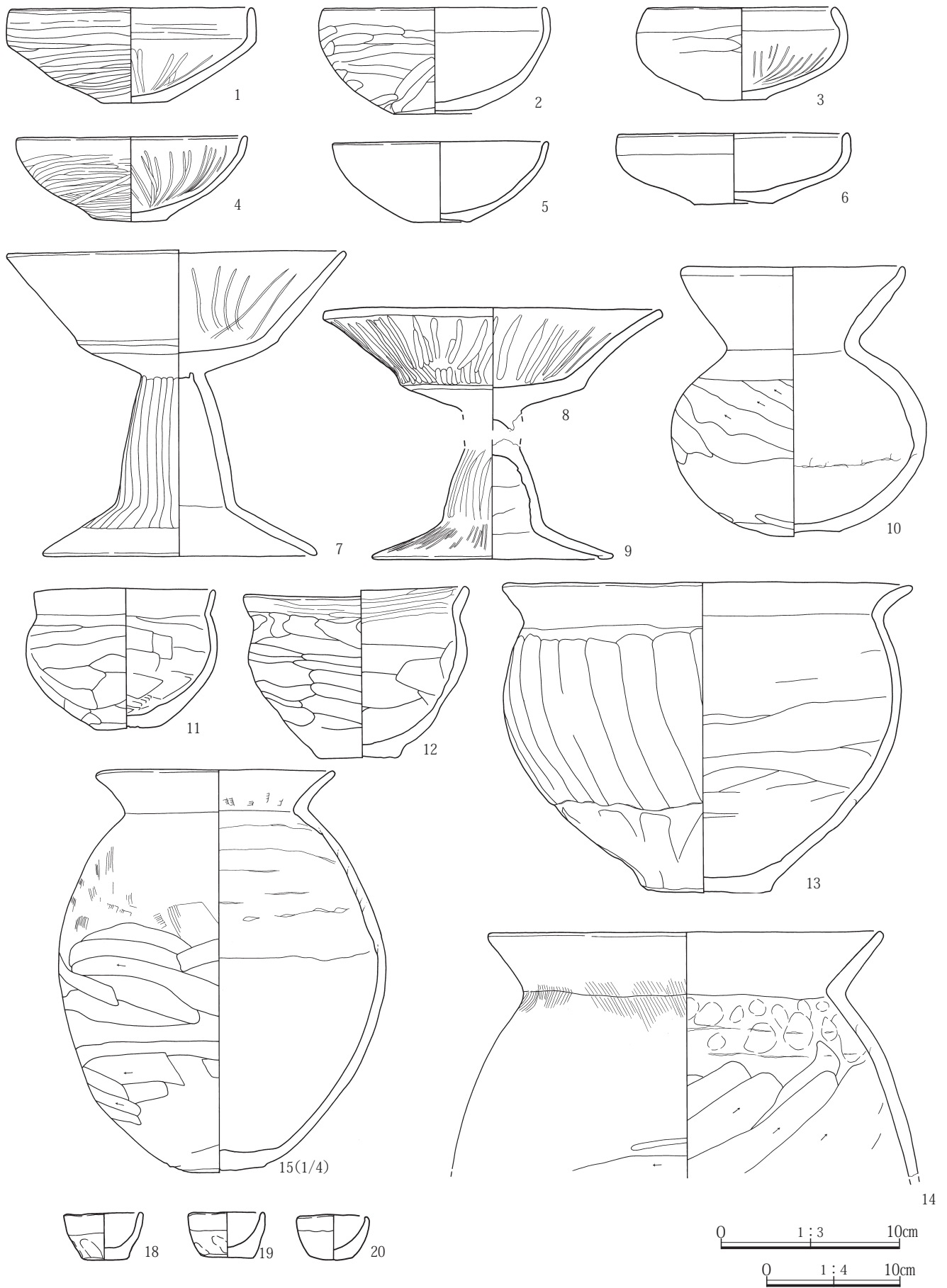
第263図 4区24号住居



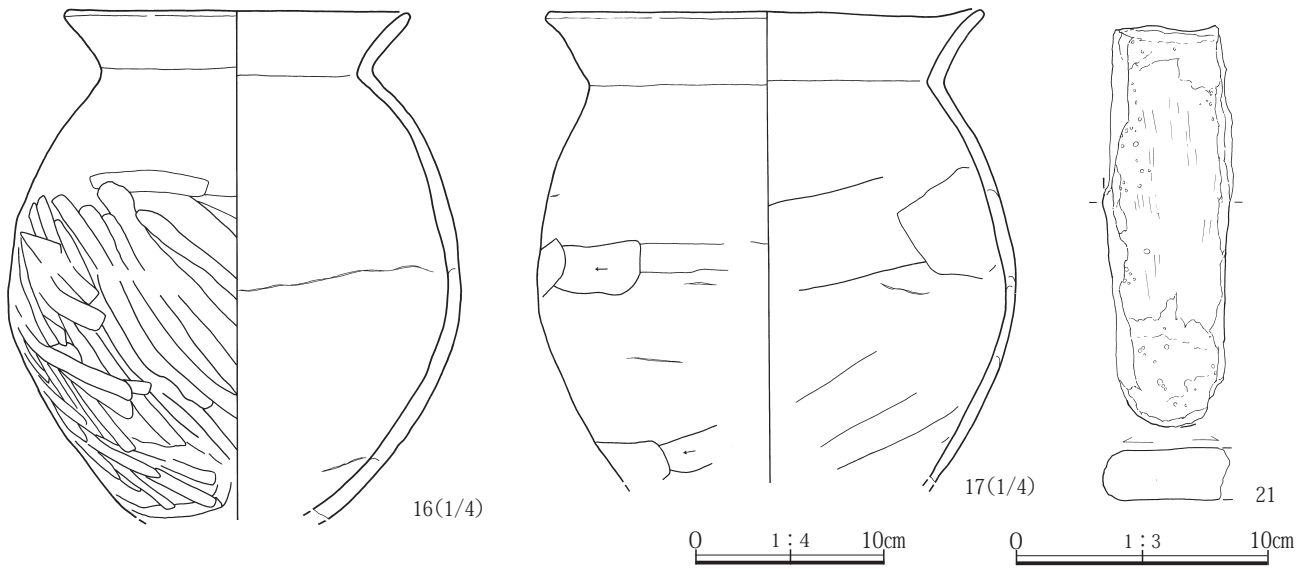
24号住居

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 ややシルト質土でしまり・粘性あり。FA泥流と思われる小ブロックを少量含む。炭化物粒と焼土粒を散見する。</p> <p>2 にぶい黄褐色土 洪水堆積土のシルト質土。しまり・粘性あり。炭化物粒を散見する。</p> <p>3 灰褐色土 シルト。しまり・粘性あり。炭化物粒・焼土粒を多量に含む。3'は焼土の混入少なく、やや粘性に欠ける。</p> <p>4 黄灰色土 しまりのある砂層土で粘性は弱い。炭化物粒を散見する。</p> <p>5 灰褐色土 カマド上面埋没土で3層に近い。炭化物粒・焼土粒の混入はあまり多くない。</p> <p>6 にぶい黄褐色土 カマド天上部構築材。しまりある粘性土。6'は被熱硬化部分。</p> <p>7 にぶい黄褐色土 しまり弱いカマド燃焼部・煙道部の埋没土。</p> <p>8 火床および煙道部分下層埋没土。炭化物粒・灰・焼土主体で6'では焼土多い。</p> | <p>9 シルト質土のカマド袖構築材で炭化物粒・灰・焼土等の混入多い。9'は崩落土が互層状に堆積している。</p> <p>10 褐灰色土 ビット柱痕部分埋没土。しまりある粘性土。炭化物粒の混入多い。</p> <p>11 黄灰色土 シルト質土。黄灰色土 ビット埋戻し土。しまり・粘性あり。焼土粒と炭化物粒を散見する。</p> <p>12 黄灰色土 貯蔵穴埋没土のシルト質土。12'には焼土・炭化物の混入がやや多い。</p> <p>13 灰褐色土 シルト質土。しまりある粘性土。焼土粒・炭化物粒を散見する。13'は黒色味をおびる。</p> <p>14 黄灰色土 シルト質土。掘り方埋戻し土でしまり強い。焼土粒・炭化物粒を散見する。</p> |
|--|---|

第264図 4区24号住居断面およびカマド



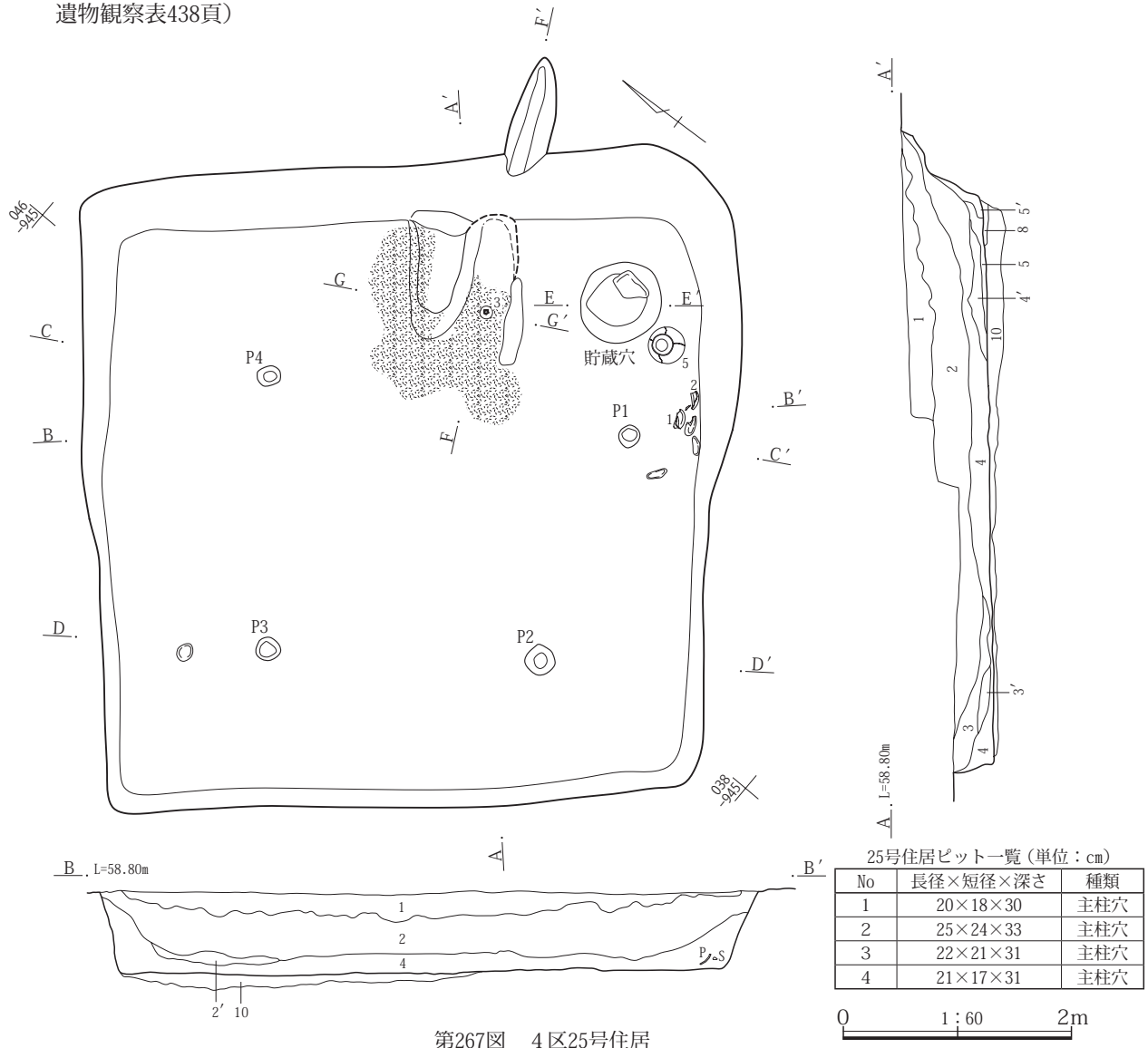
第265図 4区24号住居出土遺物(1)



第266図 4区24号住居出土遺物(2)

25号住居(第267～269図 PL. 43-①・②、92
遺物観察表438頁)

初現期カマドを持つ住居のうち最も西側にある。



第267図 4区25号住居

位置 038～045-941～948グリッドにある。

規模形状 軸長5.0m前後で、各隅は直角に近く各辺は直線的で、整美な正方形を呈している。

埋没土・壁 壁際から均等に埋もれていて、人為的な埋戻しの痕跡は見られない。壁高は70cm前後で最も深い北東辺で80cmを測る。

方位 N-51° E。 面積 25.01㎡

カマド方位 N-64° E。

床面 細かな凹凸があって西側へ低く傾斜し、東隅と6cmの比高差がある。南隅周辺を除いて深さ最大14cmの掘り方がある。

ピット 規模が近似する4支柱穴(P1～4)を確認した。P1が南東側へ大きく逸れている。

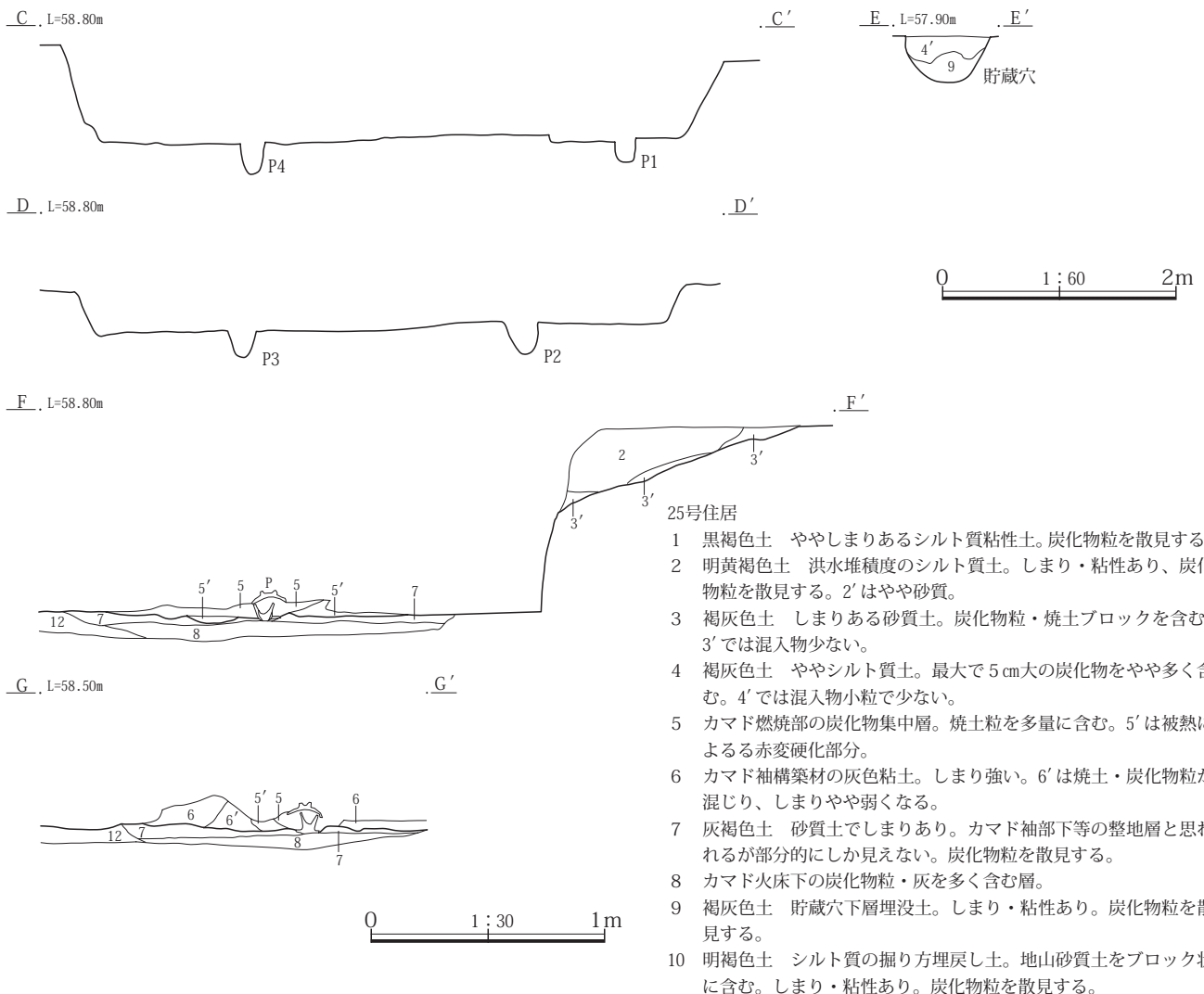
貯蔵穴 東隅で確認した。径70cmの円形で、床面からの深さは49cmを測る。底面は平坦さを欠いている。

カマド 東辺やや南寄りにカマドが設けられ、カマドが住居軸方向よりやや南へ偏った軸方向にある。燃烧部は住居内にあり、南袖は大半を失っているが袖先端は住居内140cmの位置に達している。煙道の壁外への張出しは85cmを測る。

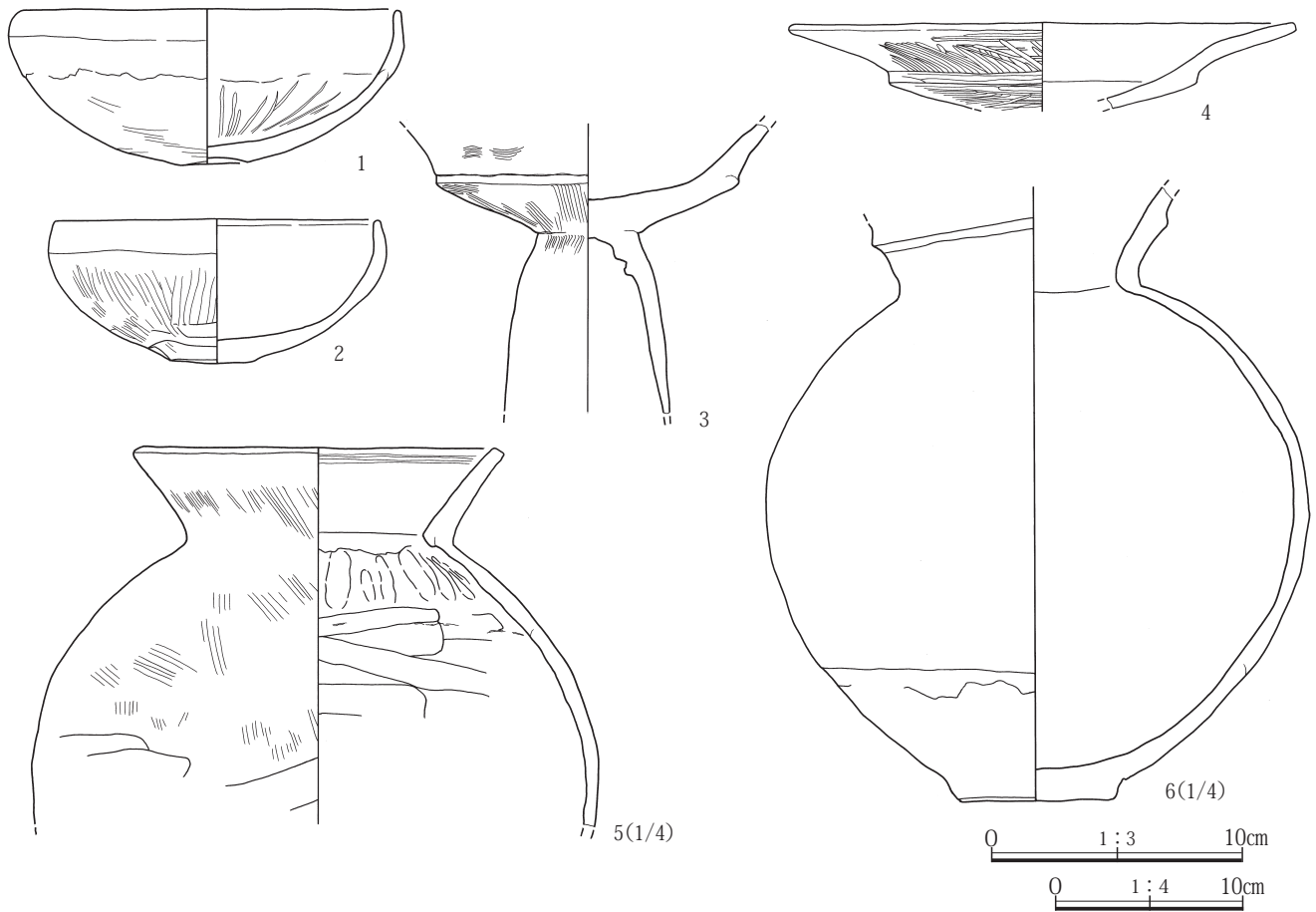
その他 壁溝は観察できない。

遺物 南東壁下の遺物を中心に土器6点を図示した。本遺跡初現期カマドの特徴として火床上から高杯を出土するが、本住居は高杯3がこれにあたる。南東壁下からは1・2・5が出土した。杯類2点は床面から4～9cm浮いた状態だが、壁際遺物であり本住居に確実に伴う遺物と考えたい。図示した以外に重量で約2.8kgの遺物を出土した。須恵器も少量見られる。

所見 出土土器には模倣杯の見られない、5世紀後半の住居と想定される。



第268図 4区25号住居断面



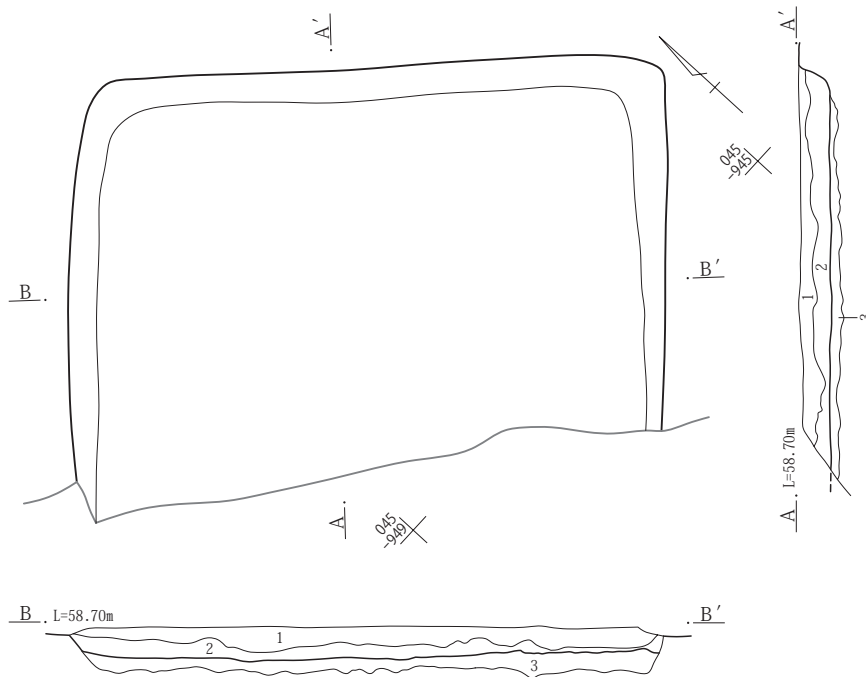
第269図 4区25号住居出土遺物

26号住居(第270・271図 PL. 43-③ 遺物観察表438頁)
南隅を流路に壊され、全容を把握できない。南東辺は
25号住居北西辺と平行で極めて近接した位置にあるが重

複はない。

位置 044 ~ 049-945 ~ 950グリッドにある。

規模形状 北東辺側軸長4.4m、北西辺側軸長3.1m以上



26号住居

- 1 暗灰褐色土 シルト質土。しまりある弱粘性土。
- 2 灰黄色土 シルト質土。しまりある非粘性土。炭化物粒を散見する。下層ほどやや砂質となる。
- 3 明褐色土 掘り方埋戻し土。砂質土でしまりあり。層底部付近に炭化物粒が見られる。

第270図 4区26号住居

の規模である。残存する二隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整美なプランである。

埋没土・壁 壁高は20cm前後である。

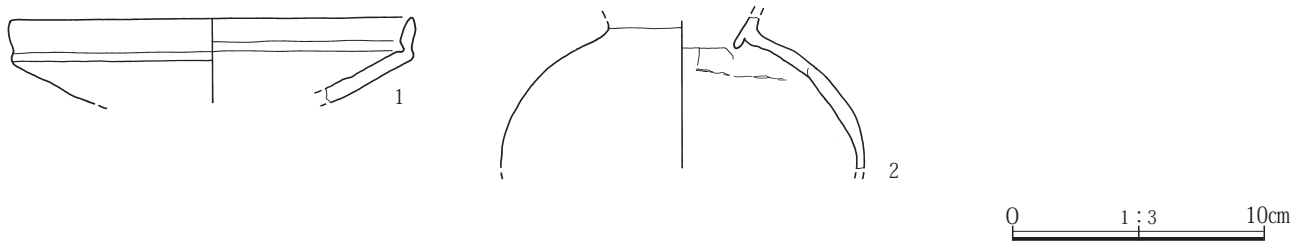
方位 N-46° E。 **面積** 残存12.99㎡

床面 ごく細かな凹凸は多いが、全体では水平な床面である。深さ15cm前後の掘り方がほぼ全体で見られる。

その他 炉・柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 埋没土内出土の土師器2点を図示した。いずれも小破片からの復元で確実に本住居に伴う資料とは決定できない。図示した以外の土器も少なく、重量で0.9kgに満たなかった。須恵器は見られない。

所見 時期決定の資料に欠くが、出土遺物には6世紀代の土器が見られる。



第271図 4区26号住居出土遺物

27号住居(第272図 PL. 43-④)

掘り方面の確認であったが、炉の痕跡らしいわずかな被熱痕を確認している。

位置 040～044-915～920グリッドにある。

規模形状 長軸長3.6m、短軸長2.95mの東西に長い長方形を呈している。南辺に細かな屈曲があるが各隅の丸みが少なく、比較的整美な形状である。

埋没土・壁 床上埋没土は残存しない。掘り方壁高は浅く、5cm前後であるが住居壁のように垂直に近い立ち上がりと思われる。

方位 N-70° W。 **面積** 12.64㎡

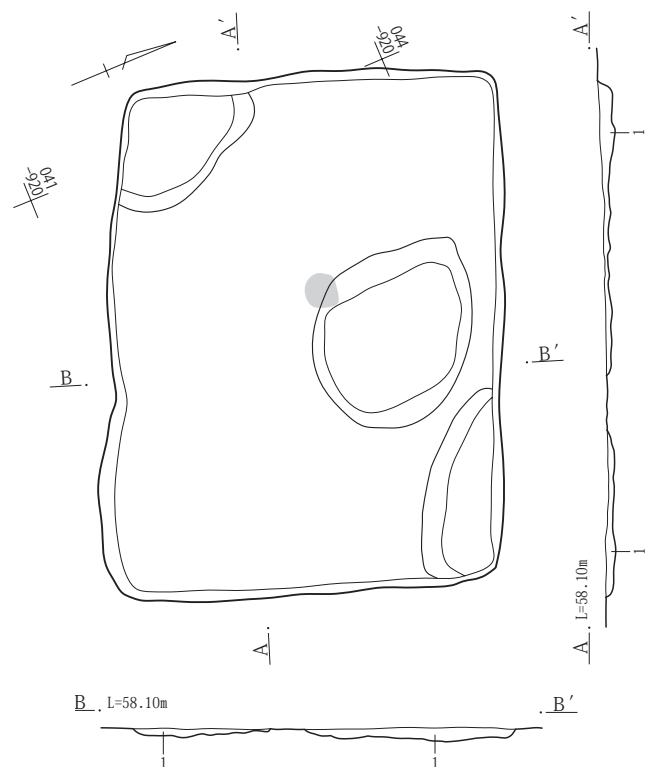
床面 掘り方のみ確認である。壁際で深くなる傾向があり、掘り方底面にあたる深さ10cmほどの土坑状の窪みを確認した。

炉 住居中央西寄りの確認面(掘り方埋戻し土内)で径30cmほどの被熱により赤変した部分が見られた。炉の痕跡と思われる。

その他 柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

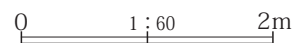
遺物 図示できる遺物はなかった。土師器甕類小破片がわずかに出土している。

所見 時期決定の資料を持たない。住居軸方向が周辺住居と異なっており、類例のない時期の住居となる可能性がある。



27号住居

1 灰褐色土 しまり・粘性のある掘り方埋戻し土。As-Cを少量、不均等に含む。炭化物粒を散見する。



第272図 4区27号住居

28号住居(第273図 PL. 43-⑤・⑥、92 遺物観察表438頁)

明瞭な床面を把握できないまま炉と思われる複数の焼土面を確認し、その面を床として図示した住居である。4区古墳時代の住居では少ない例で長軸方向が北に寄っている。

位置 042～047-928～933グリッドにある。

規模形状 長軸長東側で3.95m、短軸長北側で3.7mの長方形を呈し、北辺が南辺より長く逆台形状にやや歪んだ住居である。

方位 N-18° E。面積 14.19㎡

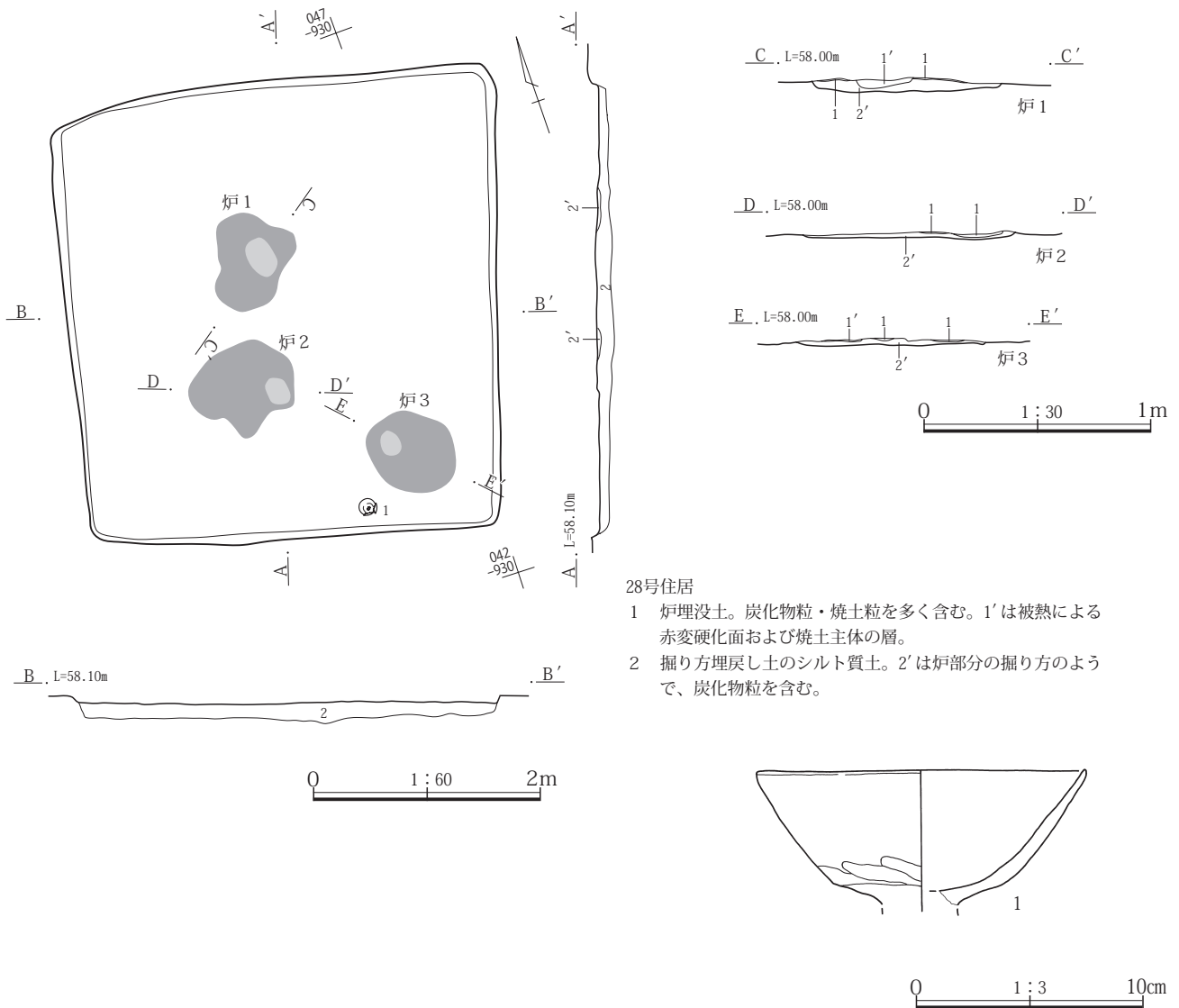
床面 細かな凹凸があるがほぼ水平な床面で、深さ12cm前後の掘り方が全面にある。

炉 住居中央から南側へかけて、3カ所の焼土集中部分を確認し、炉1～3とした。炭化物粒混じりの窪みの上に焼土が乗るが床面が直接被熱する部分ではなく、炉としてはやや不明瞭である。炉1が最も炉に適した位置にある。

その他 19号住居に前出している。柱穴・壁溝等の施設は観察できない。

遺物 南壁直下出土の土師器高杯1を図示した。図示した以外の出土遺物はない。

所見 土師器1点からの時期推測だが、4世紀末から5世紀前半にかけての住居と思われる。カマドを持つ住居との重複例で本遺跡ではカマド出現直前の時期を推測する資料である。



28号住居

- 1 炉埋没土。炭化物粒・焼土粒を多く含む。1'は被熱による赤変硬化面および焼土主体の層。
- 2 掘り方埋戻し土のシルト質土。2'は炉部分の掘り方のように、炭化物粒を含む。

第273図 4区28号住居および出土遺物

29号住居(第274図 PL. 43-⑦)

床面は把握できず、掘り方底面部分の記録である。

位置 034～039-931～936グリッドにある。

規模形状 長軸長4.3m、短軸長3.3mの東西に長い長方形を呈している。各辺は直線的で整美な形状である。

方位 N-67° E。 面積 13.96㎡

底面 細かな凹凸が多いが、掘り方底面としては平坦である。炭化物粒を散見する灰褐色土で埋め戻していた。

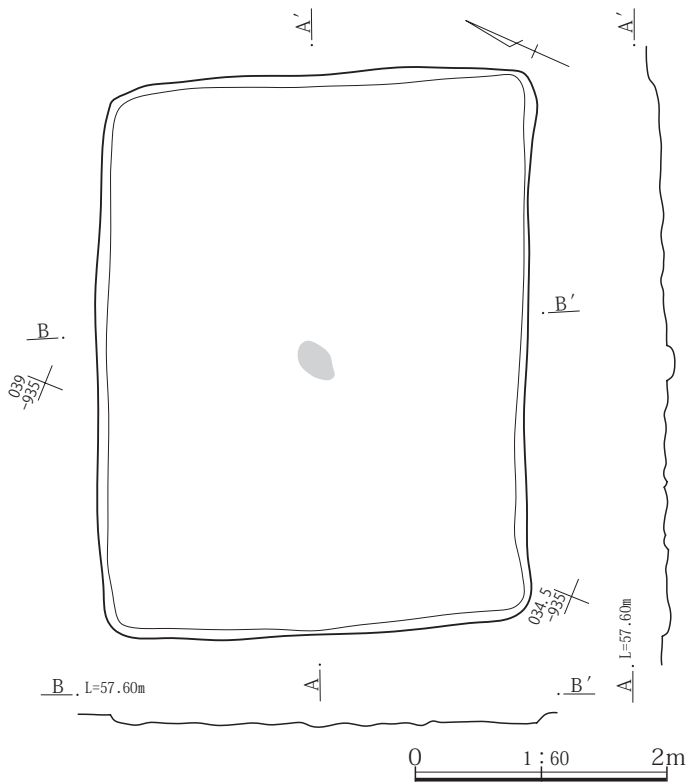
床面からは7cm以上の深さである。

炉 中央付近に径35×22cmの被熱によると思われる赤変部分がある。炉痕跡の可能性はあるが、不明瞭である。

その他 柱穴・壁溝等の施設痕跡は観察できない。

遺物 小破片を含め本住居からの出土遺物はない。

所見 時期推定の資料をもたないが、住居規模は27号住居に近似している。



第274図 4区29号住居

30号住居(第275・276図 PL. 43-⑧ 遺物観察表439頁)

南側は調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 033～036-940～946グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.2m以上、南北軸長3.5m以上の規模である。

埋没土・壁 壁際から均等に埋もれていて、人為的な埋戻しの痕跡は見られない。壁高はほぼ一様で25cm前後である。

方位 N-21° W。 面積 残存7.94㎡

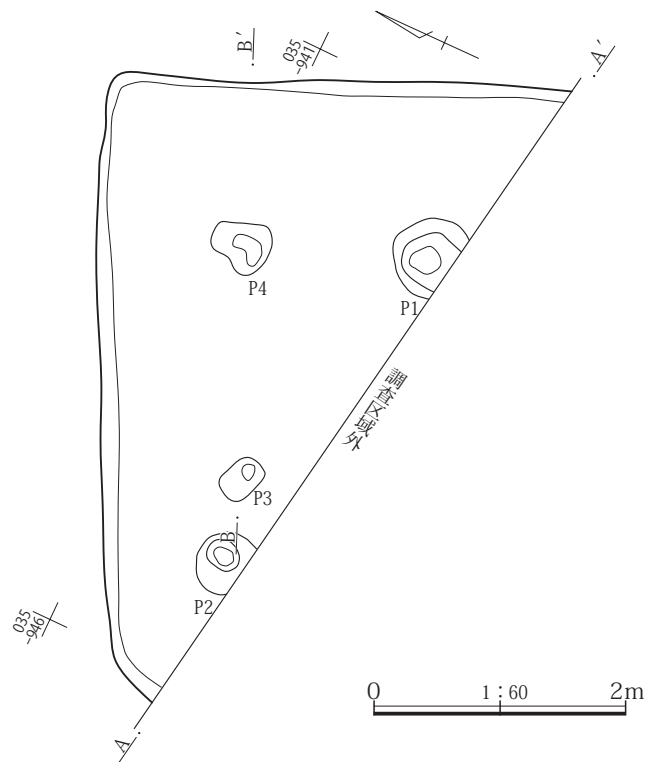
床面 住居中央が窪み、壁際と5cm前後の比高差がある。凹凸もやや多い。深さ20cm前後で一定した掘り方が全体に見られる。

ピット 4基のピットを確認した。配置よりP2・4は主柱穴と思われる。

その他 炉・壁溝等の施設痕跡は観察できない。

遺物 埋没土内出土の甕1を図示した。図示した以外では土師器甕類小破片がわずかに出土している。

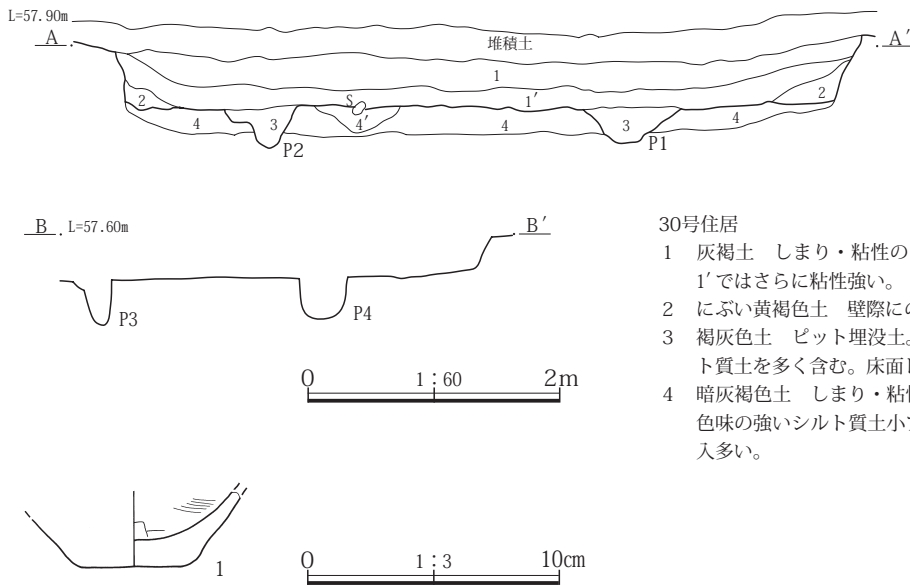
所見 時期推定の資料をもたない。4区下面で確認した本住居の他、22・29号住居は軸方向が近似していて、近接した時期の住居と推測できる。



30号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	67×(48)×22	主柱穴か
2	52×(36)×30	主柱穴
3	37×25×38	主柱穴か
4	48×36×35	主柱穴

第275図 4区30号住居



30号住居

- 1 灰褐色土 しまり・粘性のあるシルト質土。炭化物粒を散見する。1'ではさらに粘性強い。
- 2 にぶい黄褐色土 壁際にもみられるやや砂質土。
- 3 褐灰色土 ピット埋没土。しまり・粘性あり。ブロック状のシルト質土を多く含む。床面レベルに薄い炭化物粒の層あり。
- 4 暗灰褐色土 しまり・粘性のある掘り方埋戻し土。炭化物粒や黄色味の強いシルト質土小ブロックを散見する。4'は炭化物粒の混入多い。

第276図 4区30号住居断面および出土遺物

31号住居(第277図 PL. 43-⑧、92 遺物観察表439頁)

調査区南隅にあり、北辺側一部のみ確認であった。

位置 029～030-916～920グリッドにある。

規模形状 北辺軸長2.7m以上、東辺軸長1.2m以上の規模である。北東隅は鈍角に開き気味で不整な方形になり、西側が隅に近いようで小型の住居と思われる。

埋没土・壁 水平に近い堆積で炭化物等住居埋没に多く見られる混入物がない。壁高は15cm前後である。

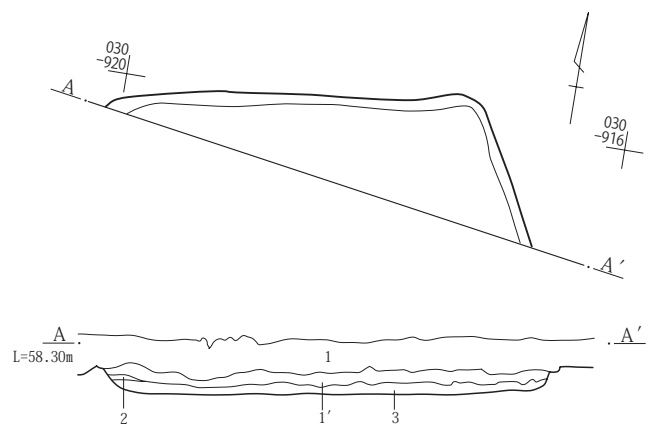
方位 (東辺)N-31° W。面積 残存1.42㎡

床面 ほぼ水平な床面で、壁際がわずかに高くなっている。掘り方は見られない。

その他 残存範囲に炉・ピット・壁溝等の施設は確認できない。

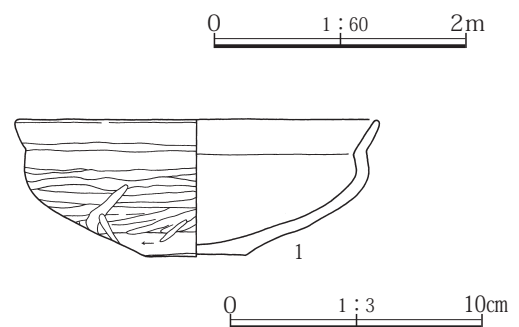
遺物 上層付近より1点のみ鉢1を出土している。他の破片の出土はない。

所見 時期推定の資料を持たないが、図示した遺物は5世紀代の土器である。



31号住居

- 1 灰白色土 洪水堆積のシルト。しまりある粘性土。1'は住居上層埋没土でやや黒色味を帯び、As-Cを含む。
- 2 黄灰色土 砂質土。しまり強い。
- 3 暗灰褐色土 As-C混土。しまりある粘性土。



第277図 4区31号住居および出土遺物

3 古代の区画と溝

3区西隅から4区にかけて、平安時代には溝で区切られた複数の方形区画が存在する可能性があり、この項で該当する溝を他の溝(本文337頁以降)と分けて一括して扱った。区画の概要は以下で記し、次に個別の溝について記した。

第1区画 3-2区には直線的な南北走向の1号溝とそれに直行する4号溝がある。4区には3-2区4号溝から続くと思われる8号溝が北側へ直角に折れて11号溝直前で止まる。これら溝で囲われた区画を第1区画とした。16m四方のほぼ正方形区画となる。

第2区画 第1区画西側には南を9号溝、北を11号溝で区切られた区画が続くようで、西側の境界は把握できなかったが南北幅は16mになる。ここを第2区画とした。区画内には1号掘立柱建物や7号住居が区画溝に沿って配置されている。

第3区画 11号溝北側は明確な区画溝が存在しないが、6号住居のように11号溝に沿った配置の遺構があり、区画が存在することを想定して第3区画を設けた。

第4区画 4区北隅の2号掘立柱建物の南側柱筋は、東側にある10号溝の延長線上にある。第3区画までの地割

と合致していないが、それらに前出する区画があることを想定して第4区画を設けた。南側にある8・9号住居がこの区画に沿って配置された可能性もある。

第5区画 3-2区の1号溝と4号溝が交差する地点の南側に3A号溝・3B号溝とした不明遺構があり、杯類を中心に多量の遺物を出土している。第1・第2区画の南側にも区画があって、区画北西隅の祭祀痕跡がこれらの遺物となる可能性を考え、この一画を第5区画とし、3A号溝・3B号溝をこの項で扱った。

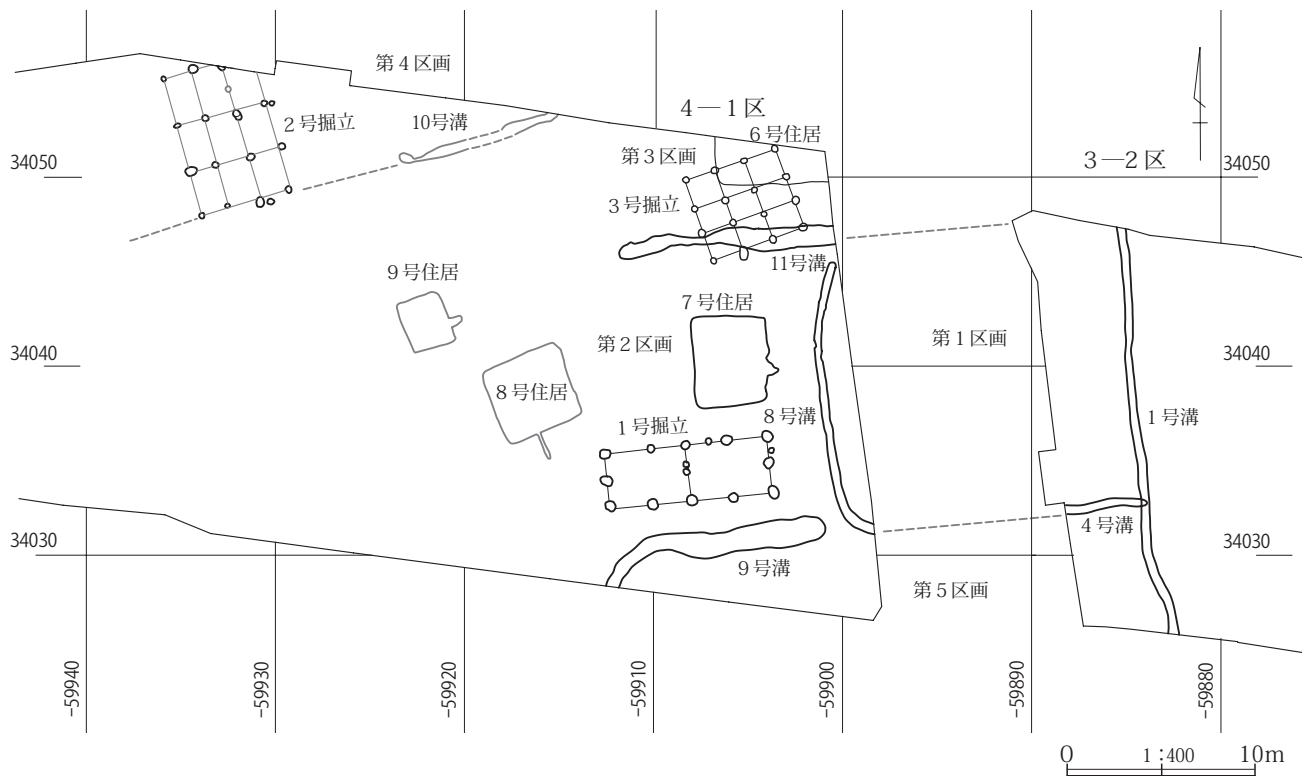
第5区画の東西幅は現状で28mを測る。

3-2区1号溝(第279図)

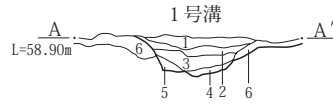
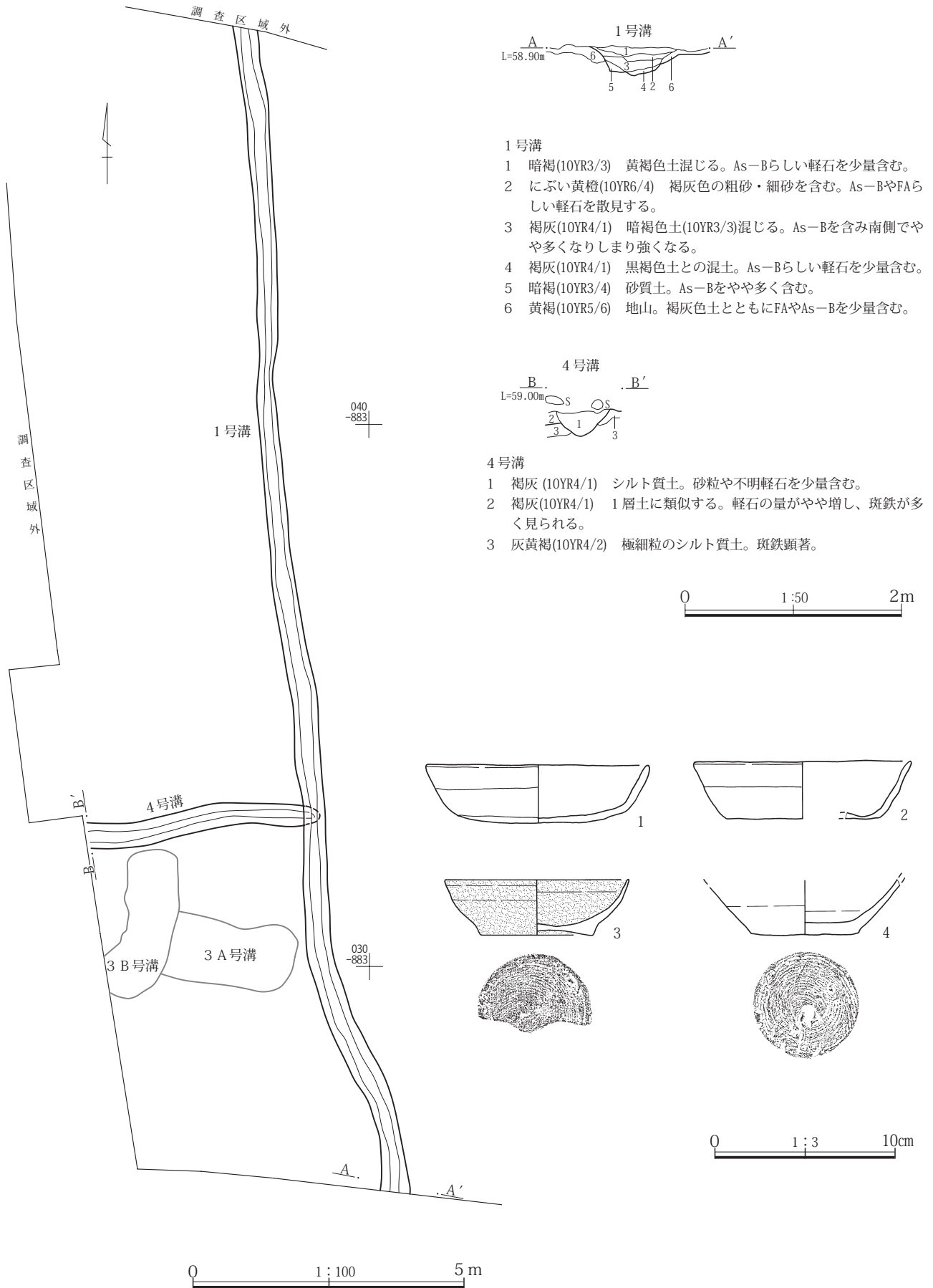
古代の区画を作ると想定される溝全体の東隅にある直線的な溝であるが、時期想定に疑問を残している。南北両側とも調査区域外となり全容を把握できていない。

位置 北側は047-884グリッド、南側は025-882グリッドとともに調査区境となる。

形状規模 大半の部分でほぼ直線的だが、南側で緩やかに東側へ傾いた後、調査範囲南隅で走向を戻している。確認できた長さは21.8m、幅26~55cm、深さ8~12cmを測る。底面レベルは10cm前後の比高差の波打つような凹凸があり、水路的ではない。

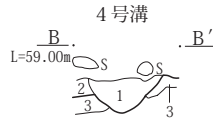


第278図 古代の区画溝配置図



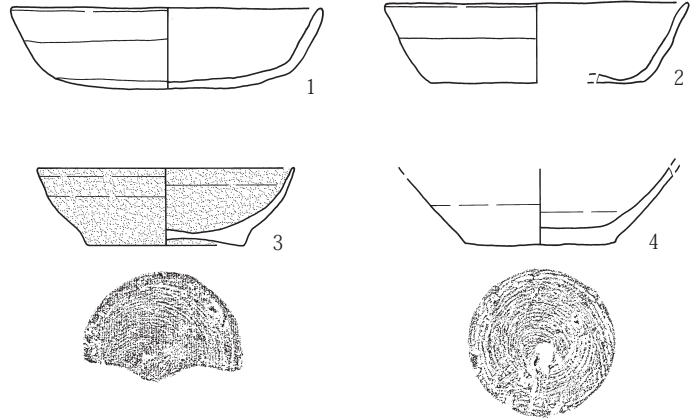
1号溝

- 1 暗褐(10YR3/3) 黄褐色土混じる。As-Bらしい軽石を少量含む。
- 2 にぶい黄橙(10YR6/4) 褐灰色の粗砂・細砂を含む。As-BやFAらしい軽石を散見する。
- 3 褐灰(10YR4/1) 暗褐色土(10YR3/3)混じる。As-Bを含み南側でやや多くなりしまり強くなる。
- 4 褐灰(10YR4/1) 黒褐色土との混土。As-Bらしい軽石を少量含む。
- 5 暗褐(10YR3/4) 砂質土。As-Bをやや多く含む。
- 6 黄褐(10YR5/6) 地山。褐灰色土とともにFAやAs-Bを少量含む。



4号溝

- 1 褐灰(10YR4/1) シルト質土。砂粒や不明軽石を少量含む。
- 2 褐灰(10YR4/1) 1層土に類似する。軽石の量がやや増し、斑鉄が多く見られる。
- 3 灰黄褐(10YR4/2) 極細粒のシルト質土。斑鉄顕著。



第279図 3-2区1・4号溝および出土遺物

方位 N-7° E (中央～北側)

埋没土 南隅ではA s-B混土の地山を削り込んだA s-B混じりの埋没土を確認している。古代の溝とするには問題のある部分である。中央から北側にかけての直線部分では観察を欠いている。

備考 第1区画、第5区画の東側を画している。さらに古代の区画全体の東端となりそうな施設であるが幅・深度とも乏しい。ただし南隅でA s-Bに後出しており古代の溝区画としては矛盾する。出土遺物はない。

3-2区4号溝と4区8号溝(第280図PL.44-③・④、
92 遺物観察表439頁)

区境の現道を隔てた連続する溝と思われ、一括して説明を加える。本文では区名を省略し3-2区4号溝を4号溝、4区8号溝を8号溝とした。

位置 4号溝は東隅が032-883グリッドで3区1号溝底の下4cm前後の高さから分岐し、032-888グリッドで調査区境となる。8号溝は031-898グリッド調査区境で表れ、北側へ屈曲して4区11号溝の南約1mの045-900グリッドを北隅としている。

形状規模 4号溝は小さく蛇行し、調査範囲で長さ4.3m、幅38～48cm、深さ7～14cmを測る。8号溝は南西隅で丸みをもって屈曲し、直線的に北側へ延び、北隅では弱く東側へ屈曲している。調査できた範囲の長さ15.3m、幅30～57cm、深さ6～11cmを測る。底面レベルに両溝を繋ぐ齟齬はない。

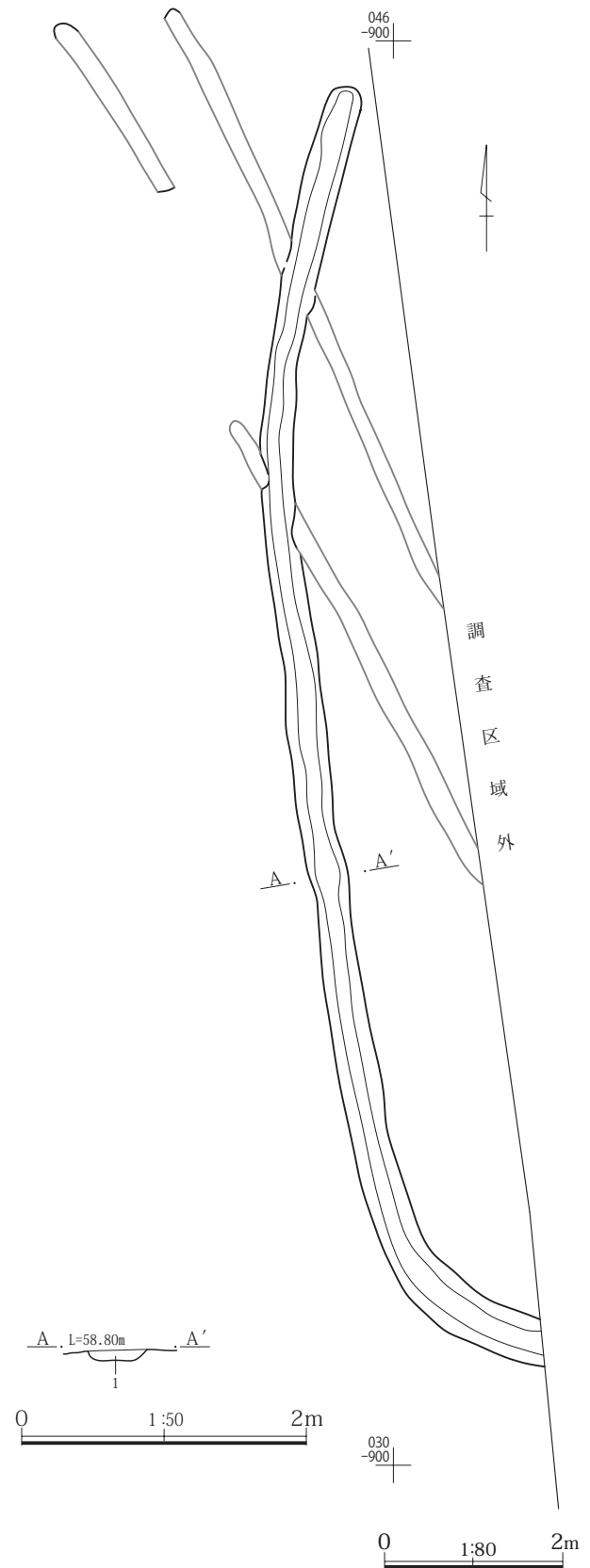
方位 4号溝N-83° E

8号溝中央N-9° W、北側N-15° E

埋没土 両溝とも単層で水流や人為的埋戻しの痕跡は観察できない。

出土遺物 4号溝埋没土内から出土した土師器杯2点と須恵器杯2点を図示した。図示した以外に土師器と須恵器が重量で4号溝から0.25kg、8号溝から0.28kg出土している。

備考 3-2区1号溝と近似した規模である。4号溝の遺物は南側にある3号溝周辺から混入したものと思われる9世紀の杯類である。



8号溝

1 褐灰色土 しまりあり、粘性あり、炭化物をまばらに含む。

第280図 4区8号溝

4区9号溝(第281・82図 PL.44-⑤・⑥ 遺物観察表439頁)

4区南東隅付近で確認した。3-2区4号溝とともに第5区画の北側を画すると思われる。

位置 南隅は028-911グリッドで調査区境に接している。東端は030-901グリッドにあり、8号溝の南西隅から約1m離れている。

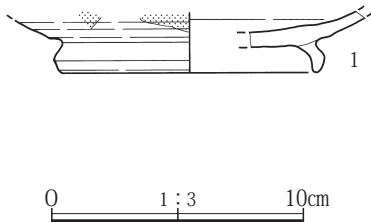
形状規模 調査範囲西隅で丸みもちながら南側へ屈曲している。確認できた長さは12.4m、幅は狭い西側で78cm、広い中央部分で153cmを測る。深さは9~17cmで幅狭な西側が浅い。

方位 N-81° E 南西隅N-33° E

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡は観察できない。

出土遺物 埋没土内の灰釉陶器碗1点を図示した。図示した以外に重量で約1kgの土器を出土したが灰釉陶器類3%、須恵器20%で土師器の出土が多かった。

備考 1号掘立柱建物の南面を画するような配置にある。また、8号溝南側から続く区画溝として走行からは違和感はない。底面レベルは細かな凹凸があり一方へ向かう傾斜は見られず、排水溝にはならないようだ。出土遺物は9世紀末から10世紀にかけての年代が想定できる。12・13号住居など5世紀代の住居に後出している。



第281図 4区9号溝出土遺物

4区11号溝(第282図 PL.44-⑧)

調査区北東隅で確認した。

位置 西端は045-911グリッドにあり、東隅は046-900グリッドで調査区境となる。9号溝北側15m付近にあり、走行がやや異なるが平行するような配置にある。

形状規模 直線的で西隅がやや南側へ傾斜している。調査できた範囲で長さ11.05m、幅中央付近で116cm、西側で73cm、深さ6~13cmを測る。幅狭な西側で深度を増している。直線的に東側へ続けば確認されるはずの3-2区北西隅付近に本溝延長部分は確認できない。

方位 N-85° E 西隅はやや南側へ傾く。

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡は観察できない。9号溝埋没土に類似している。

備考 3号掘立柱建物は本溝を跨ぐように作られている。出土遺物はない。

4区10号溝(第282図 PL.44-⑦)

調査区中央北隅で確認した溝で、調査用トレンチで中央付近を失っている。

位置 西端は050-923グリッドにあり、北東隅は053-915グリッドで調査区境に接し全容を把握できない。

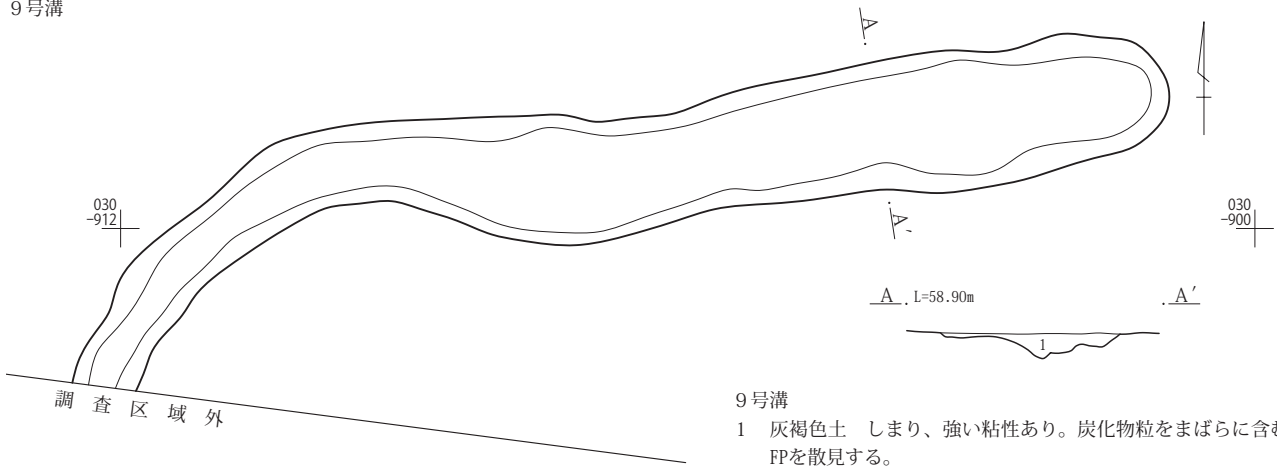
形状規模 調査できた範囲では直線的な溝だが、全体的に不整で、特に西隅は北側へ屈曲している。ピット状の窪みと重複するような不自然な曲がり方である。東隅は北側へ曲がる可能性がある。全体の長さ8.4m、幅60cm前後で西隅付近のみ一部15cmほどに狭くなる部分がある。深さ4~7cmで全体に浅い。

方位 N-74° E

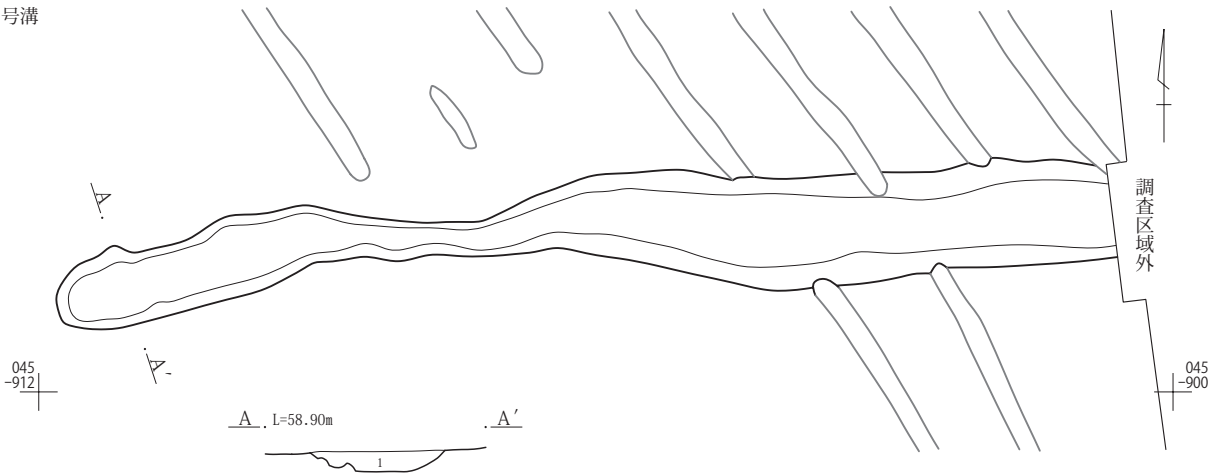
埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡は観察できない。

備考 本溝の走向に沿って西側に延長部分を想定すると2号掘立柱建物南側柱筋と重なる。底面レベルは比高差10cmを超える凹凸があり水路的ではない。出土遺物はない。

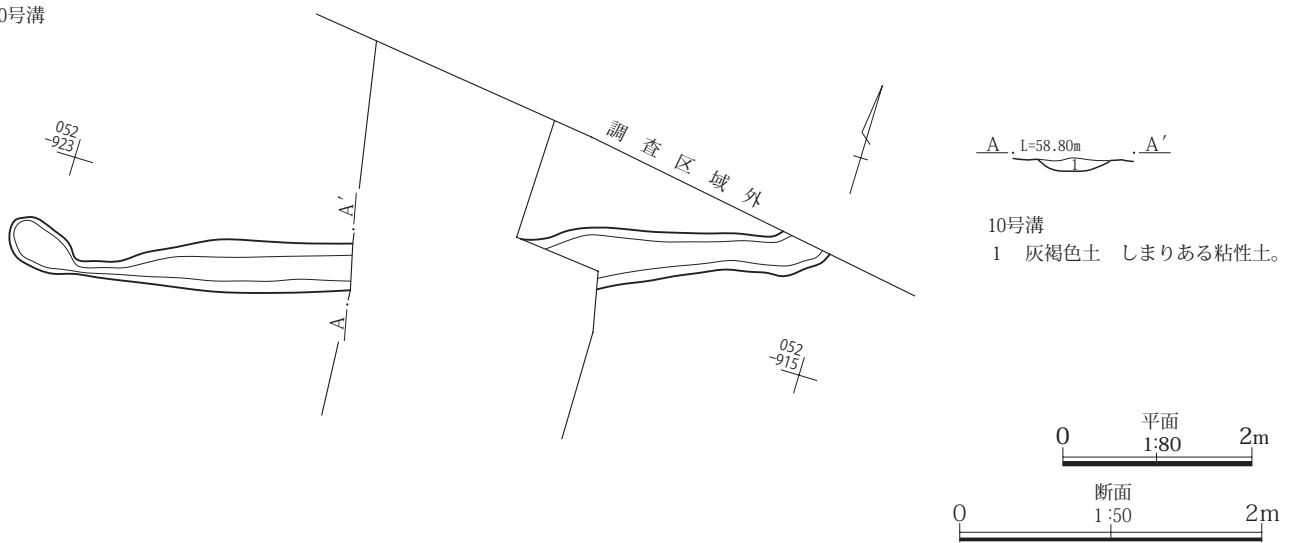
9号溝



11号溝



10号溝



第282図 4区9・11・10号溝

3-2区3号溝(第283・284図 PL.44-①・②、
92・93 遺物観察表439頁)

3区と4区境の南側へ繋がる地点を第5区画としたが、この北西隅付近にある。区画溝ではなく遺物を集中出土した窪みにあたり、溝らしい施設ではない。東側の窪みを3A号、西側の屈曲する部分を3B号溝とし、本文ではA号溝・B号溝とした。

位置 A号溝は029～030-884～886グリッドの範囲にあり東隅は1号溝と10cmの間隔で接している。B号溝は029～032-886～887グリッドの範囲にあり、北隅での4号溝との間隔は5cmしかない。

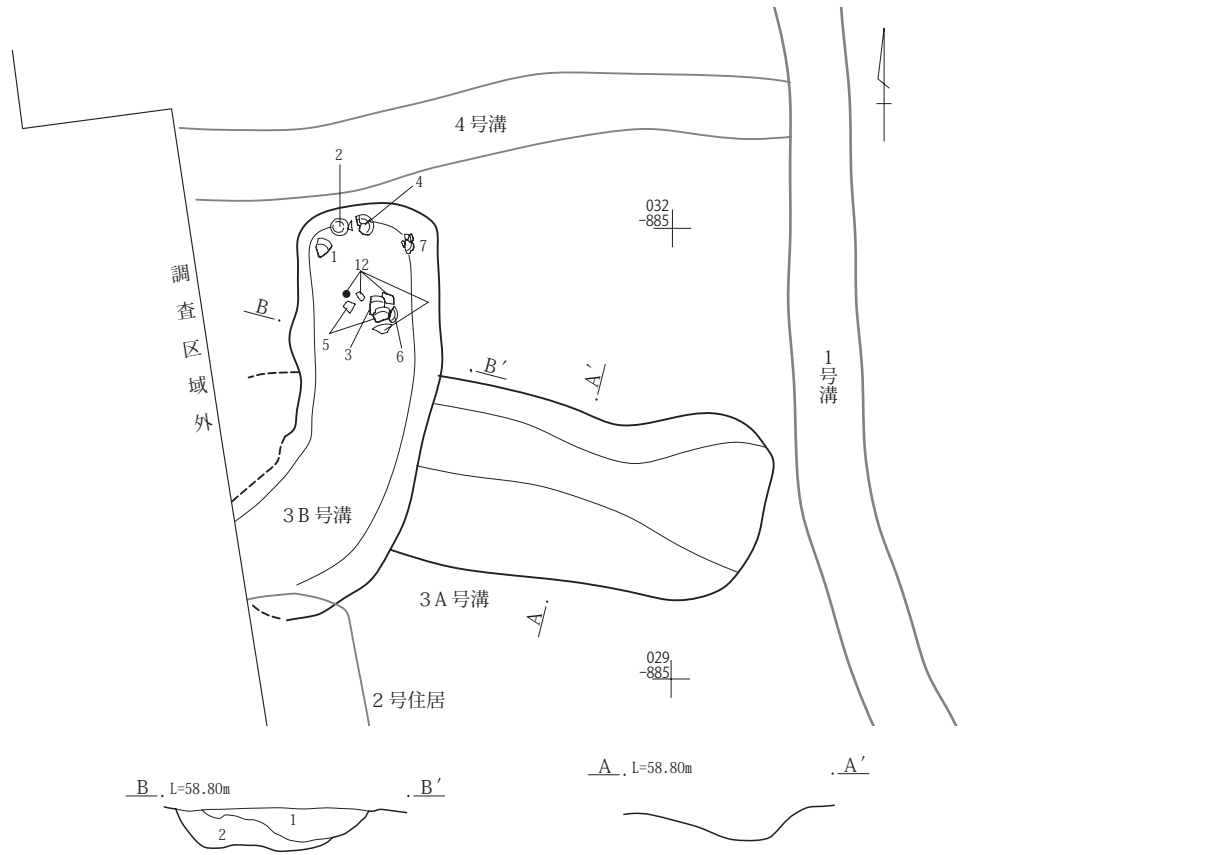
形状規模 A号溝は長さ2.2m、幅1.15mの東西に長い長方形の土坑状の施設で西側はB号溝と重なる。深さ11～21cmで底面はほぼ平坦である。B号溝西側にも不明瞭に窪んだ部分があるが、本溝と繋がるか明瞭にできなかった。B号溝は南北走向部分で長さ2.8m、幅0.9mの規模で南端では西側へ屈曲している。A号溝重複部分では同溝より10cm前後深い。深さは南側で12cm、北側で23

cmを測る。底面は北側へ深く傾斜して南隅と11cmの比高差がある。

方位 A号溝N-76° W B号溝N-5° E

埋没土 B号溝は西側から堆積し、人為的な埋戻しの可能性がある。A号溝は埋没土の記録を欠くが1・4号溝とは異なる。

出土遺物 B号溝北隅から多量の杯類を出土し12点を図示した。杯2・3・5や須恵器椀12など完形に近い土器が含まれている。杯3・5・6、須恵器椀12の中央寄りの土器は底面から5cm前後、杯1・2・4・7の壁際の土器は底面から12cm前後高い位置の出土である。溝に直接伴う遺物ではなく、後から廃棄された遺物であろう。A号溝埋没土からはB号溝と同時期と思われる土師器杯1とともに、須恵器甕2が混在していた。図示した以外にB号溝では重量で1.1kgの土器を出土している。ほとんどが杯類で土師器は9割を占めていた。同様にA号溝の土器は1.0kgで土師器杯類主体という遺物の傾向はB号溝と酷似していた。



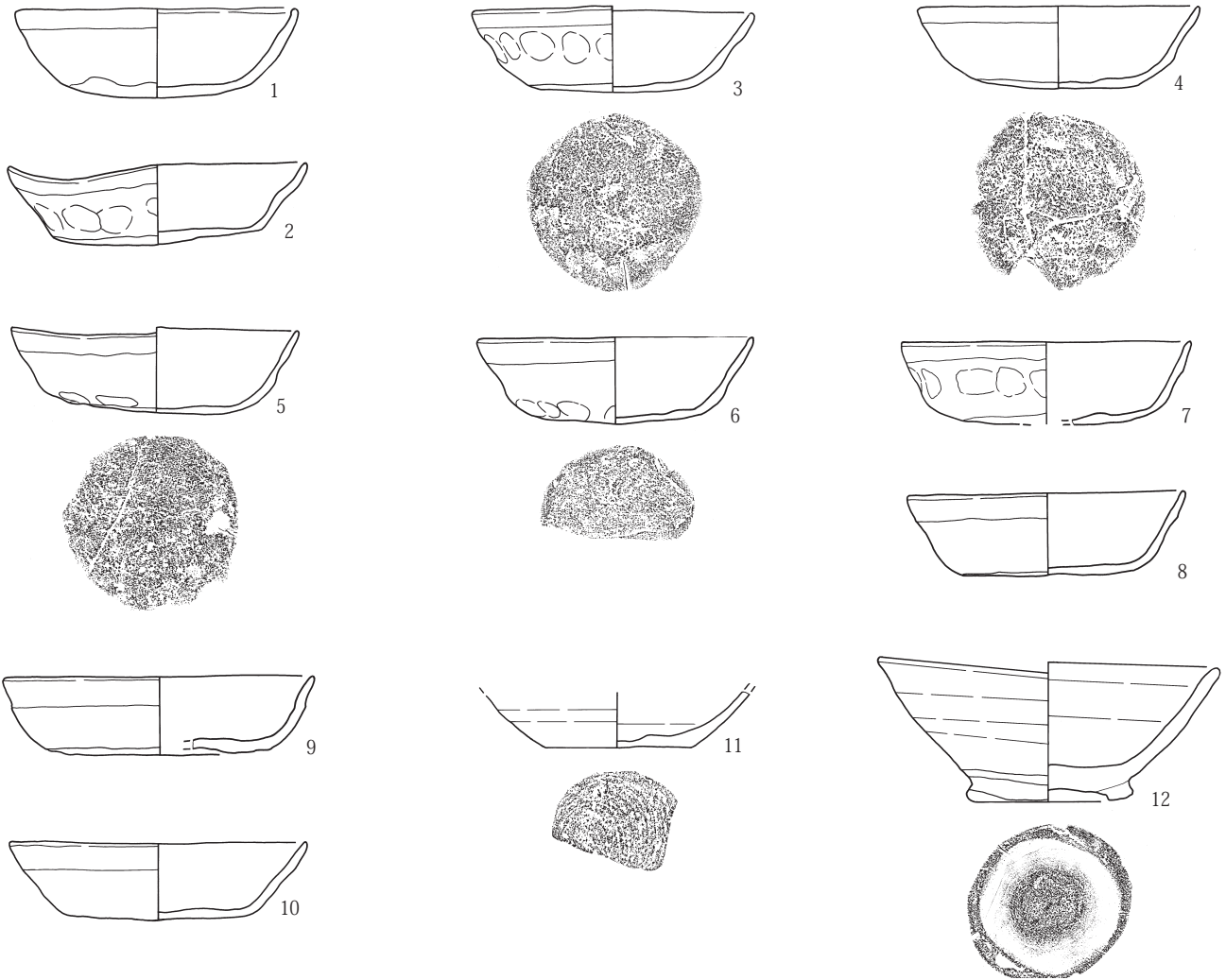
- 3号溝
1 暗褐色(10YR3/3) シルト質土中にFAと思われるパミスを見出す。
2 にぶい黄橙(10YR6/4) 褐灰色土を含み、FAを見出す。

第283図 3-2区3号溝

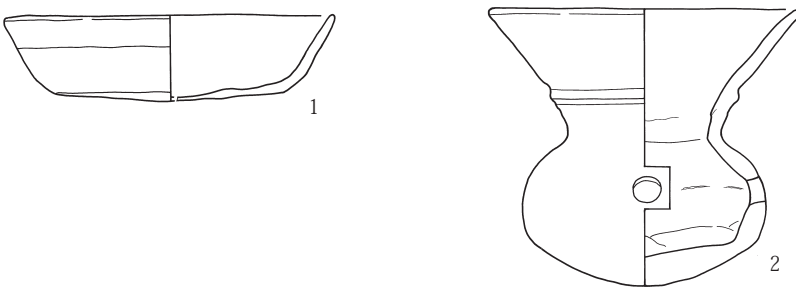
備考 B号溝は2号号住居に前出している。9世紀後半から10世紀前半にかけての遺物が見られるが、この時期の集落出土土器で杯類は須恵器が優勢であるが本遺構では破片類を含め土師器主体となっている。煮沸土器がほとんど見られず、竪穴住居の土器セットとは明らかに異

なる。墨書土器や土製品・石製品など特殊遺物をもたないが、祭祀的性格が想定される遺物群である。1・4号溝および本溝に囲われた面積約3.5㎡の方形区画ができるが、この部分に特筆すべき痕跡は認められない。

3B号溝



3A号溝



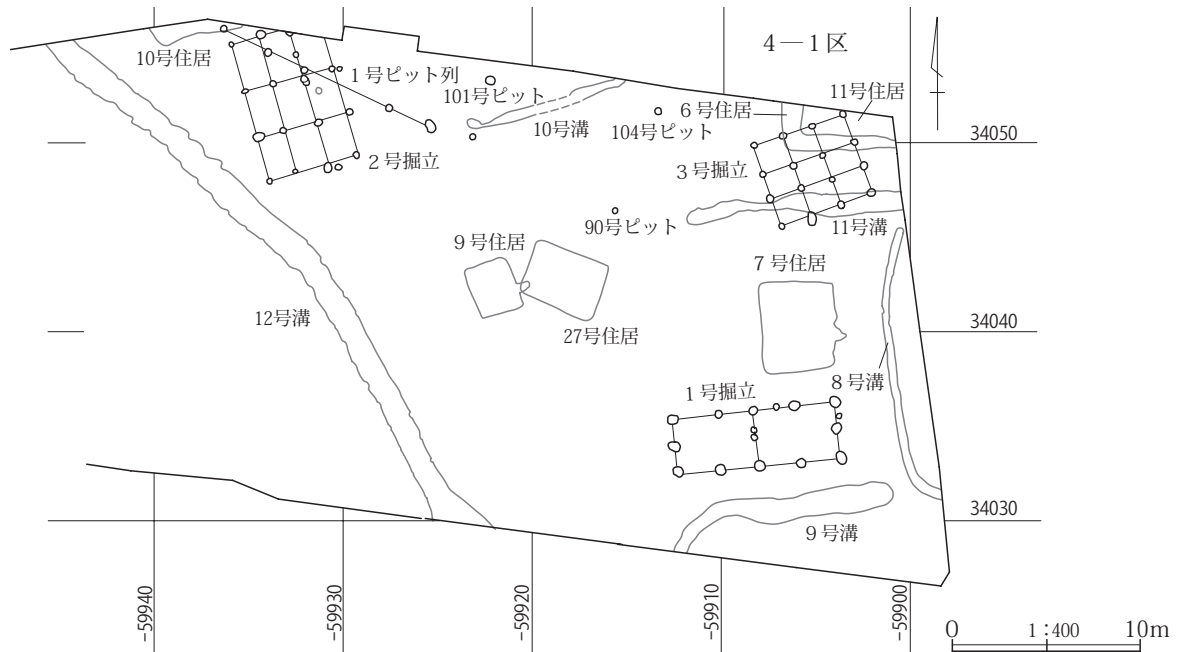
0 1:3 10cm

第284図 3-2区3号溝出土遺物

4 掘立柱建物とピット列

古代の掘立柱建物は4区で3棟、ピット列は4区で1条確認している。ピットは第1面の調査より確認されているが、遺構確認の難しい本遺跡にあってピットの掘り込みを上面から把握できなかった部分も多く、1・2号建物のように全容を明らかにするのに複数の調査面を経たものもある。

第285図に4区の掘立柱建物とピット列の配置図を近



第285図 4区掘立柱建物配置図

1号掘立柱建物(第286・287図 PL. 45、93

遺物観察表439・400頁)

概要 4区南東隅付近で確認した。各柱穴は深度に富んだ明瞭な建物である。南側柱列のP 7～11および12・16は第1面で確認されていたが、北側柱列P 1～3・5や6などはH r - F Aに伴う泥流面まで見つからなかった。建物の全容を把握するのが遅れたが、第1面にあたる遺構と判断した。

位置 032～036-903～912グリッドにある。

重複 平安時代の面で重なる遺構はない。7号住居が北側に隣接している。

規模形状 桁行8.7m、梁間東側3.1m・西側2.9mを測る。桁行が梁間のほぼ3倍の細長い建物である。

軸方向 N-5° W。 **面積** 26.1㎡

柱穴 大きさは一定していない。P 1・2の断面やP 6・7などの底面に柱痕が確認できる。深さは上面から一度

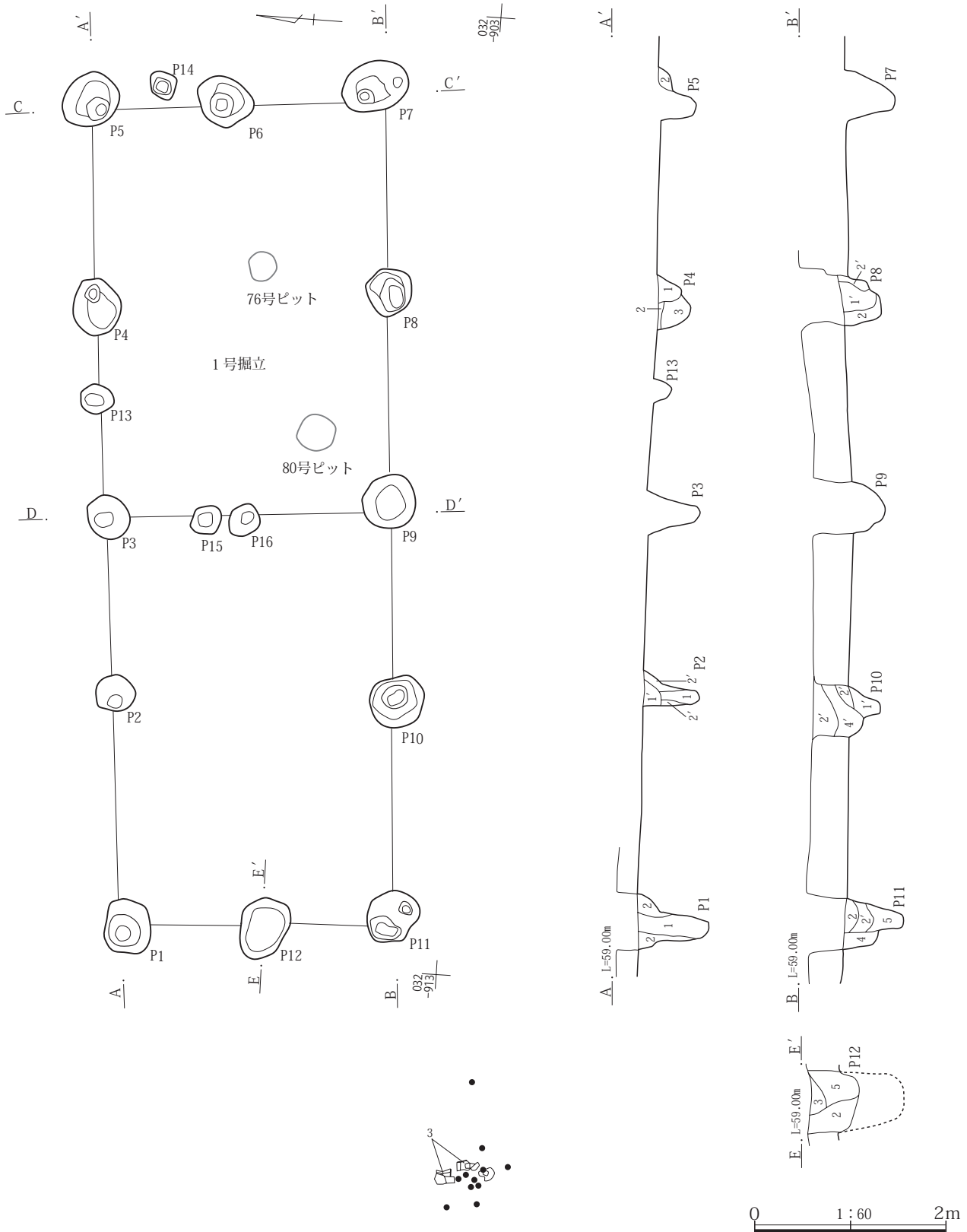
接する他のピットと共に1～3面の調査面から合成して示した。この区に見られる区画溝や主な竪穴住居等も各調査面から合成し、併せて示した。

本文中、掘立柱建物は建物と略した。各建物柱穴間計測値は、心々距離を表している。歪んだ柱間の場合には歪みを矯正せずに測定しており、柱間距離を足しあげたものと梁間・桁行の長さは一致しない場合がある。面積計測にも距離測点を用いている。軸方向は梁方向もしくは建物短軸方向の角度である。

で完掘できなかったものや、下面で確認して30cm前後しか把握できないものがあり、計測値には第1面からの修正深度を加えた。

遺物 P 11の西側1.5m付近に遺物の集中出土地点がある。第1面では本建物がこの遺物に最も近い遺構であり、遺物出土状態を併せて掲載した。本遺構に確実に伴う遺物とは言えないうえ時期差が大きい。この遺物集中出土地点出土の甕3とP 11南側2m付近出土の灰釉陶器皿1・土師器杯2を第287図に示した。

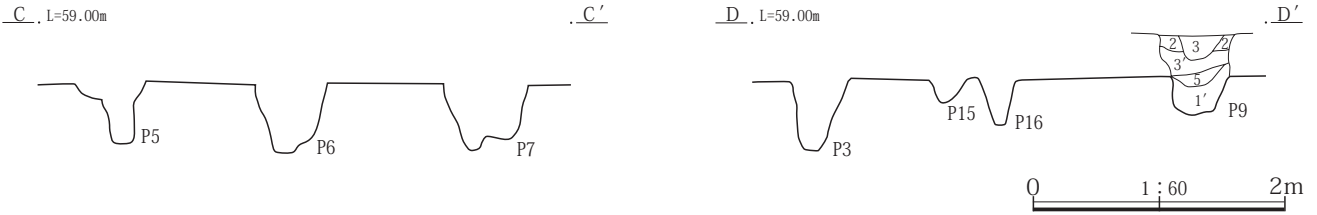
所見 9号溝が本建物の南側にある。柱穴と溝上端との間隔は約1.5mで、ほぼ平行している。本建物はこの溝と係わりのある占地にあるようだ。また、9号溝に加えて東側の8号溝と北側の11号溝で囲われた区画を第2区画と呼んだが(271頁)、本建物はこの区画南側を占める中心的な施設と推定できる。



1号掘立柱建物

- 1 暗灰褐色土 柱痕部分と思われるしまりやや弱い部分。粘性あり。1'ではややしまりあり。
- 2 明灰褐色土 しまりある粘性土。FPを散見する。2'では炭化物粒が混じる。
- 3 灰褐色土 しまりある粘性土。炭化物・焼土粒を多く含む。FP軽石粒を散見する。3'では焼土少なく炭化物粒の混入多い。
- 4 褐灰色土 粘性土だが、黄色味の強い粗粒砂の混入が多い。4'には炭化物粒が混じる。
- 5 明黄褐色土 しまり強い粘性土で褐色土ブロックを含む。

第286図 4区1号掘立柱建物

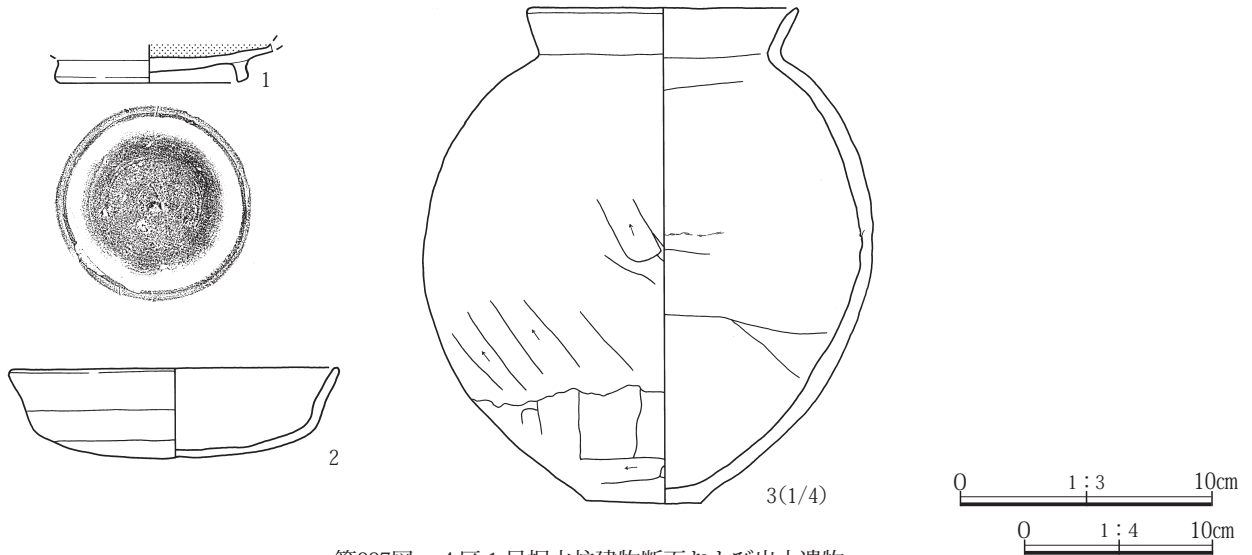


1号掘立柱建物計測値

No.	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	修正深度	備考	写真 PL. 45
1	035-912	52×47×46	87	2面で確認 断面に柱痕	②
2	035-909	52×48×62	75	2面で確認 断面に柱痕	③
3	035-908	40×37×59	71	2面で確認	④
4	035-905	49×48×30	67	3面で確認 底面に柱痕	
5	035-903	65×40×70	88	2面で確認 断面に柱痕	⑤
6	034-903	38×36×71	85	2面で確認 断面に柱痕	⑥
7	032-903	71×52×55	92	3面で確認 底面に柱痕	
8	032-905	50×48×46	79	3面で確認	⑦
9	032-907	52×51×65		1面で確認	
10	032-909	72×60×62		1面で確認 掘り直しか 底面に柱痕	
11	032-912	67×59×22	117	1面で確認 13住に後出 28号ピットと重複	⑧
12	033-912	43×32×30	133	1面で確認 20号ピットと重複 3面で修正	
13	035-907	37×31×30		3面で確認 本建物に含まれない可能性	⑨
14	035-903	32×29×39		3面で確認 本建物に含まれない可能性	
15	034-908	33×29×23		3面で確認 本建物に含まれない可能性	
16	034-908	65×42×62		1面で確認	⑩

1号掘立柱建物 柱間一覧

No-No	距離(m)	備考
1-2	2.4	北側柱
2-3	1.9	北側柱
3-4	2.4	北側柱
4-5	1.95	北側柱
5-6	1.3	東側柱
6-7	1.5	東側柱
7-8	2.1	南側柱
8-9	2.1	南側柱
9-10	2.1	南側柱
10-11	2.1	南側柱
11-12	1.4	西側柱
12-1	1.5	西側柱
2-10	2.9	
3-15	1.5	
16-9	1.5	
4-8	3.2	
12-16	4.3	
16-6	4.4	

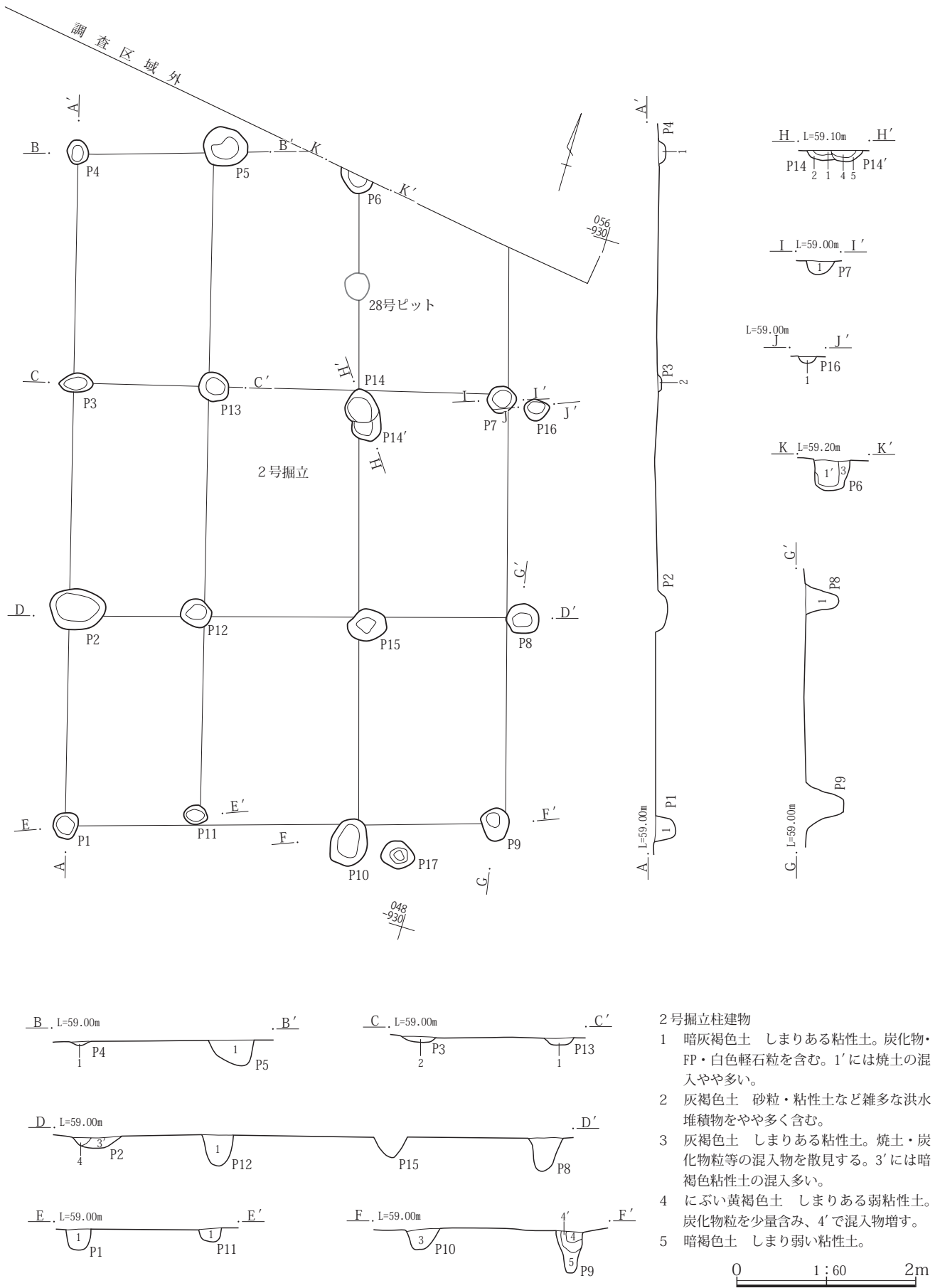


第287図 4区1号掘立柱建物断面および出土遺物

2号掘立柱建物(第288図 PL. 46)

概要 調査範囲の中央北隅にあって、北東隅の一部が調査区域外となるが、おおよその形状を把握できた。3間×3間の南北に長い総柱建物を想定したが、古代の総柱

建物としてはやや整美さに欠ける。P2・9・13～15を第1面で確認しているが、他はHr-F Aに伴う泥流面での確認であった。側柱部分のほとんどが第1面で確認できていないことになるが、1号建物同様に最初に確



第288図 4区2号掘立柱建物

第V章 古代の遺構と遺物

認められた第1面の遺構として扱う。

位置 048～055-929～935グリッドにある。

重複 20号住居・1号ピット列に後出している。また北東側の3号住居と北西側の10号住居が近接した位置にある。どちらの住居も本建物の柱筋と平行する位置に壁がある。竪穴住居上屋の広がりを見ると本建物と同時存在は難しいが、近接した時期の遺構と考えられる。

規模形状 桁行7.6m、南側梁間4.9mを測る。西辺を除いて柱筋から逸れる柱穴が多く、特に北辺・南辺の齟齬が大きい。

軸方向 N-72° E。 **面積** 推定37.2㎡

柱穴 大きさは一様ではない。特に深度に乏しいものが

2号掘立柱建物計測値

No.	位置	長軸×短軸 ×深さ(cm)	修正 深度	備考	写真 PL. 46
1	047-933	29×28×23		2面で確認	②
2	050-934	61×45×24		1面で確認 土坑状 20住に後出	
3	052-935	38×22×8		2面で確認 20住に後出	
4	055-935	27×24×9	22	2面で確認	
5	055-934	50×43×34	45	2面で確認	③
6	055-932	[22]×36×14	24	2面で確認 調査区境にあり未完掘	④
7	053-930	30×29×18	24	2面で確認	⑤
8	051-929	37×32×28		1面で確認	⑥
9	049-929	38×31×52	60	3面で修正 平面66×40cm	
10	048-930	54×40×24	32	2面で確認 土坑状	⑦
11	048-932	24×21×16	27	2面で確認	
12	050-932	33×30×34	41	2面で確認	⑧
13	052-933	35×31×14		1面で確認	⑨
14	053-931	36×34×22		1面で確認 P14'と重複	
15	050-931	43×37×30		1面で確認	⑩
16	053-930	26×24×15		2面で確認	⑤
17	048-930	34×32×24	36	1面で確認 本建物に含まれない可能性	⑦

3号掘立柱建物(第289図 PL. 47)

概要 4区北東隅付近で確認した。1面調査時には全く確認できなかった施設であり、1号・2号建物に前出すると思われる。3間×3間の東西方向にやや長い方形総柱建物である。なお、本建物南側に焼土が堆積する部分があった。本建物に伴う焼土であると確認はできないが、本建物が最も近接した遺構で確認面が同一であり、焼土範囲を併せて記した。

位置 045～051-901～908グリッドにある。

多い。明確に柱痕の確認できるピットはなかった。

所見 南側の柱筋は10号溝を南西方向に延長した部分におおよそ合致している。同溝の北側を第4区画と呼んだが、本建物はこの区画内西側にある主要な施設と考えられる。隣接する10号住居は軸方向からは本建物と近接時期の遺構となる可能性があり、同住居の時期から本建物は9世紀前半を中心とする時期の遺構と想定したい。

2号掘立柱建物 柱間一覧

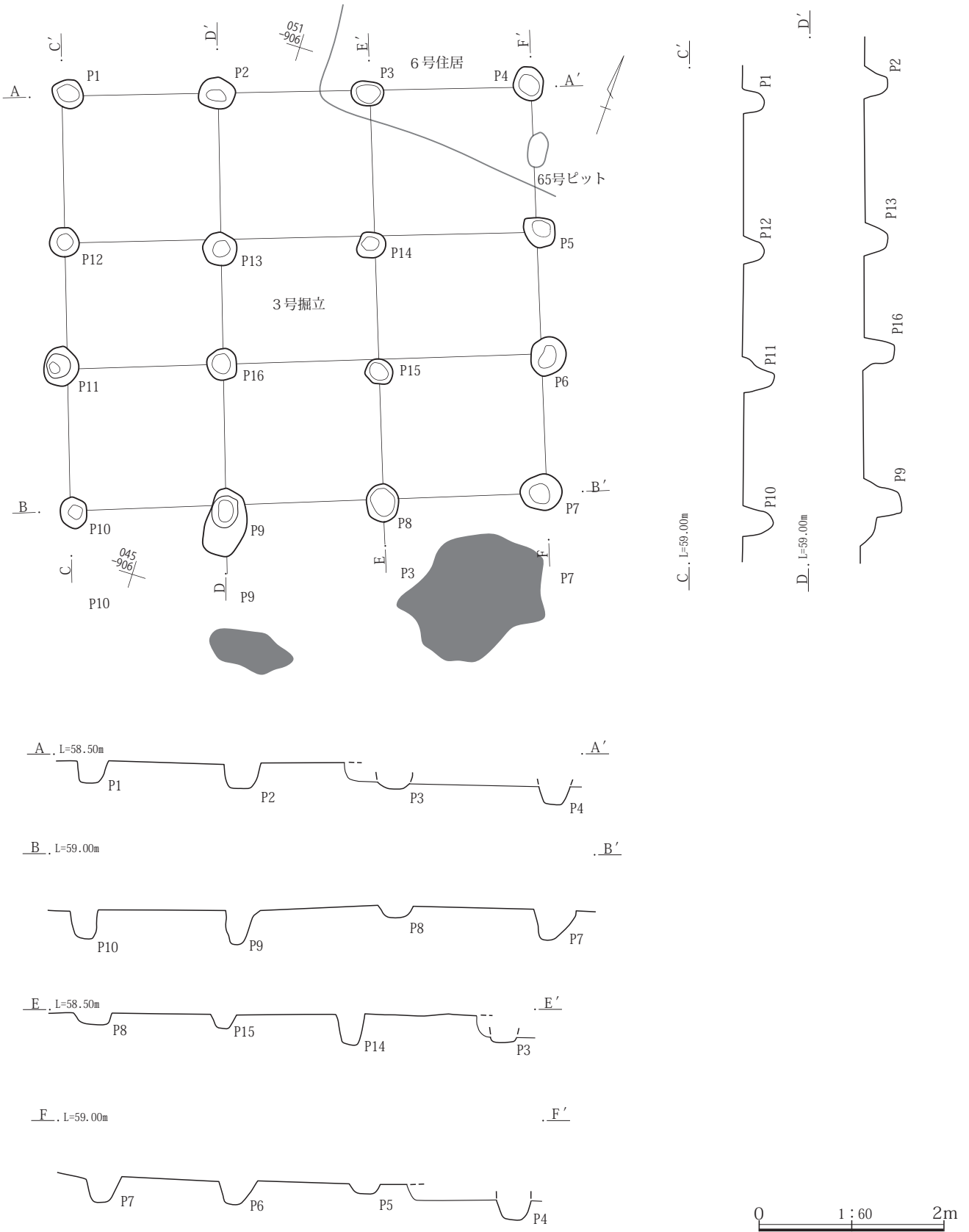
No-No	距離(m)	備考
1-2	2.4	北側柱
2-3	2.4	北側柱
3-4	2.4	北側柱
4-5	1.7	東側柱
5-6	1.5	
6-14	2.6	
14-7	1.6	
7-8	2.5	南側柱
8-9	2.3	南側柱
9-10	1.7	西側柱
10-11	1.75	西側柱
11-1	1.5	西側柱
11-12	2.3	
12-13	2.5	
13-5	2.7	
10-15	2.5	
15-14	2.5	
14-6	2.6	
2-12	1.35	
12-15	1.9	
15-8	1.8	
3-13	1.55	
13-14	1.65	
14-7	1.6	

重複 6号住居・11号溝に前出し、15・16号住居に後出している。

規模形状 桁行北側5.1m・南側5.2m、梁間東側4.4m・西側4.5mを測る。本遺跡の建物の中で、柱筋から逸れる柱穴が最も少ない遺構である。

軸方向 N-20° W。 **面積** 22.9㎡

柱穴 埋没土はややしまりある灰褐色粘性土で、炭化物粒・F P粒を散見する。P11を除いて底面に柱痕が確認できるものはなかった。P9以外は近似した規模の柱穴



第289図 4区3号掘立柱建物

第V章 古代の遺構と遺物

であるが、確認面からの深さは一様ではない。

遺物 柱穴内出土遺物はなかったが、本建物周辺からは遺物の出土がきわめて多く、調査段階でも遺物包含層として扱った一画である。それらを第365図に示した。この中の灰釉陶器6・7等が本建物に伴う遺物となる可能性がある。

所見 古代の区画溝の可能性のある11号溝が本建物の上を横切るように作られ、同区画以前の建物であることが

分かる。ただし2号建物の軸方向には沿っているようで、同建物と近似した時期、10号溝を区画溝とする時期の建物となる可能性がある。

3号掘立柱建物計測値

No.	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	備考	写真 PL. 47
1	049-908	33×31×25	16住に後出	②
2	050-906	39×34×29	6住に前出	
3	050-905	36×26×16	6住に前出 15住に後出	
4	051-903	36×32×21	6住に前出	③
5	049-902	33×32×10	83号ピットに近接	
6	048-902	44×38×31		④
7	047-902	45×38×56	11溝に前出	
8	046-903	41×33×14	11溝に前出	
9	045-905	73×43×46	南側に広い張り出し 別遺構の重複か	⑤
10	045-906	32×29×34		⑥
11	046-907	43×38×40	西寄りに柱痕状の窪み	⑦
12	048-907	32×31×23	16住に後出	⑧
13	048-906	38×35×26	15住に後出	⑨
14	049-904	32×28×22		
15	047-904	31×26×31		
16	047-905	35×31×37		⑩

3号掘立柱建物 柱間一覧

No-No	距離(m)	備考
1-2	1.6	北側柱
2-3	1.6	北側柱
3-4	1.8	北側柱
4-5	1.55	東側柱
5-6	1.4	東側柱
6-7	1.5	東側柱
7-8	1.7	南側柱
8-9	1.7	南側柱
9-10	1.6	南側柱
10-11	1.6	西側柱
11-12	1.4	西側柱
12-1	1.6	西側柱
3-14	1.7	
14-15	1.4	
15-8	1.4	
2-13	1.7	
13-16	1.3	
16-9	1.6	
5-14	1.9	
14-13	1.6	
13-12	1.7	
6-15	1.85	
15-16	1.7	
16-11	1.8	

1号ピット列(第290図 PL. 48-①・②)

概要 4区中央北隅で確認した。規模の近似した5基のピットがほぼ1列に並び、ピット列として扱った。泥流下面の調査に至るまで確認できなかった施設であり、1～3号建物に前出する。

位置 050～055-925～936グリッドにある。

重複 2号建物・10号住居に前出している。

規模形状 P1-3間は4.85mを測り、この柱筋を東側へ延長した位置にP4・P5がある。P3-4間は4.8m、P4-5間は2.3mでP3-4間にピットが1基存在していた可能性もある。またP5に99～101号ピットを加えた建物が存在する可能性もある。

軸方向 N-25° W。

柱穴 断面の観察を欠いている。P5以外は平面・深さとも近似した規模の柱穴である。P5は2基のピットの重複の可能性があり、その場合深度に富む北側部分が別ピットとなりそうだ。

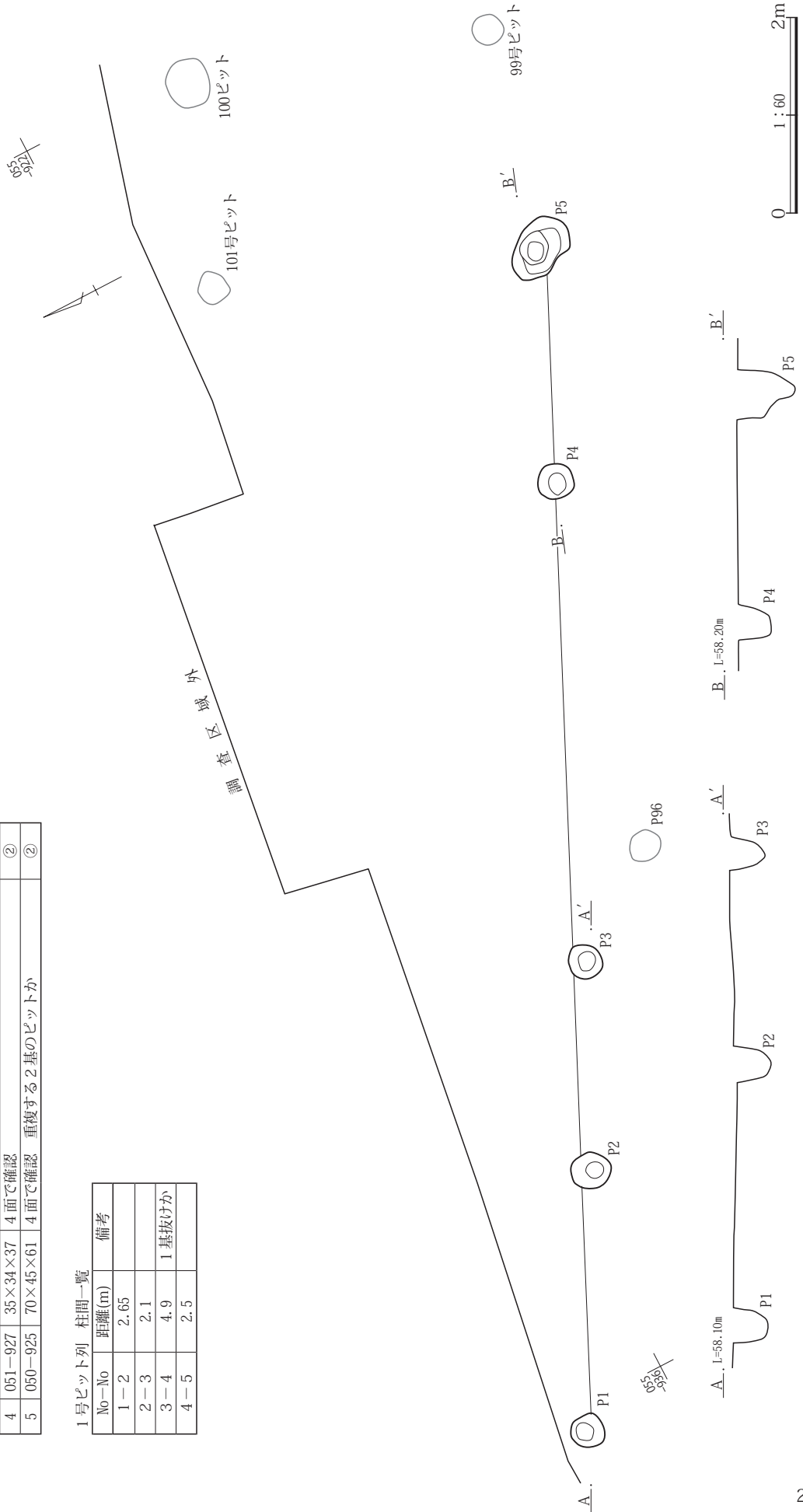
所見 本ピット列の軸方向に近い遺構は27・28号住居など古墳時代の遺構がある。また、本ピット列の柱筋を東側へ延長するとP5から約10.5mの位置に90号ピットがある。さらに90号ピットから柱筋を北側へ直角に曲げると約6mの位置に104号ピットがある。柱で囲った大規模な方形区画が存在した可能性もあろう。

1号ピット列計測値

No.	位置	長軸×短軸 ×深さ(cm)	備考	写真
1	055-936	36×34×34	4面で確認 11号住居に前出	PL. 48 ①
2	054-933	42×37×37	4面で確認	①
3	053-931	35×34×30	4面で確認	①
4	051-927	35×34×37	4面で確認	②
5	050-925	70×45×61	4面で確認 重複する2基のピットか	②

1号ピット列 柱間一覧

No-No	距離(m)	備考
1-2	2.65	
2-3	2.1	
3-4	4.9	1基抜けか
4-5	2.5	



第290図 4区1号ピット列

5 ピット

中世面では多数のピットを調査しているが、古代面の施設として扱ったピットは少なく、2区4基、3区5基、4区36基をここで一括して扱った。ピット番号は上面からの通し番号としたため、古代のピットは1から始まっていない。特に中世ピットの多かった2区は580号ピットからの開始である。掘立柱建物やピット列として扱った遺構を除外したため多数の欠番を生じている。個別ピットの測量図は第292・293図に、計測値等のデータは第17表に一括して記した。

不規則であるがピットが並ぶ2区を第291図に、掘立柱建物周辺にピットが多数見られる4区を第294図にそれぞれ配置図で記した。図示できた出土遺物は2点だけであるが、第295図に記した。

土層説明は以下の共通層名を用いた。算用数字は基本的な土層の内容、アルファベット小文字は付帯する特徴で組み合わせてピット共通土層として使用した。

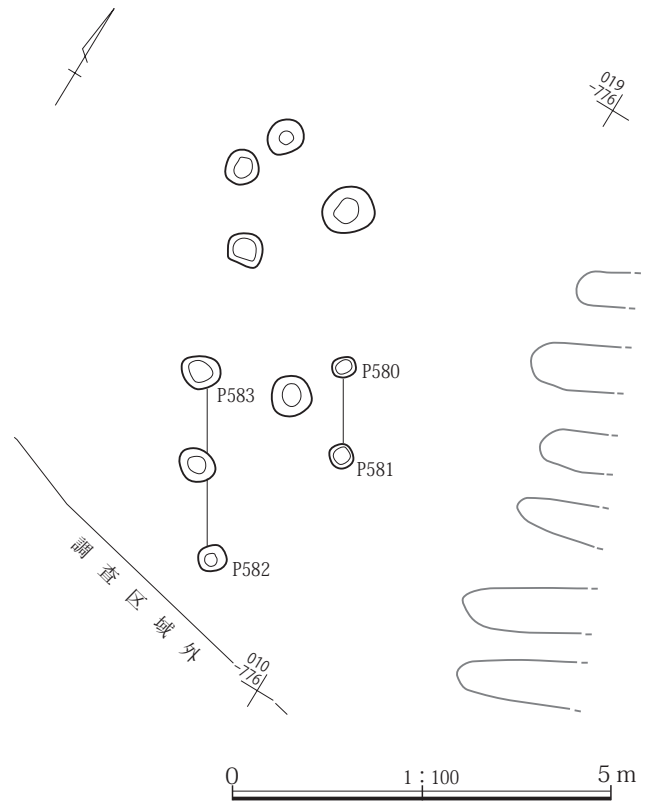
- 1 灰褐色土 細粒砂主体の洪水堆積物。
- 2 黄褐色土 洪水堆積物の砂質土。
- 3 褐灰色土 しまり強い砂質土。
- 4 暗褐色土 粘質土。

(付帯項目)

- a H r - F P 粒を含む。
- b 浅間山給源と思われる不明軽石を含む。
- c 黄褐色砂質土を含む。

2区のピット(第292図)

中世方形館のある2区には500基を超えるピットがあるが、2面以降では極端に少なくなる。泥流上の畑が確認できた2面調査時に1号畑の西側に10カ所の窪みがまわって確認できた地点がある。中世面ではほとんど遺構を確認できなかった地点である。ここで確認した4基を580～583号ピットとした。1号畑(新畑)確認面で調査した深さ20cm以上の柱穴状施設である。他は1号畑(旧畑)確認時に調査した深さ10cm未満の不明瞭な窪みでピットとして扱わなかった。掘立柱建物を復元することはできなかったが、第291図のように580-581号ピット、583-582号ピットの柱筋が1号畑の畝間方向とほぼ直交しており、同畑脇に小規模な施設があった可能性がある。



第291図 2区ピット配置図

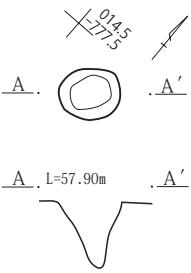
3区のピット(第292図)

3-2区は泥流下調査面で重複する31・35号ピットを確認した。畝間状の痕跡上に古墳時代中期の住居が見られる面であり、本ピットは4号住居北西側1.1mの位置にある。同住居の四隅を結んだ対角線の北西側延長線上にあり壁柱穴の可能性はある位置だが、住居規模に比して住居から離れすぎ、形状も柱穴的ではない。4区のピット群とは現道を挟んで12m前後の距離にある。35号ピットから出土した土師器鉢1を第295図に示した。

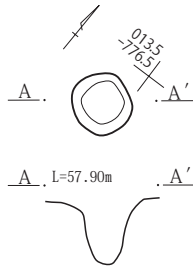
3-1区では調査区の西隅で3基を調査した。3-2区ピットと同一の調査面である。付近は3区の住居から東側へ離れた位置にあり、2区からも離れた集落域外にあたる。3基のピットは調査区北西隅にあたる8号畑の西側にあり2区のピット群と似た状況だが、柱痕も確認できず、調査できた範囲では建物を想定する配置にない。

2区ピット

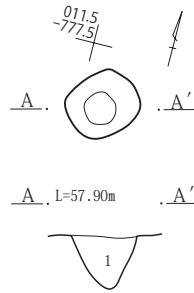
580号ピット



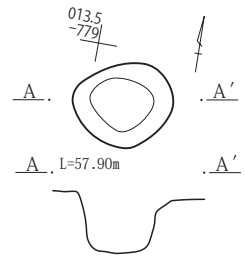
581号ピット



582号ピット

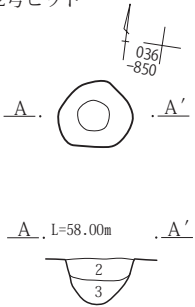


583号ピット

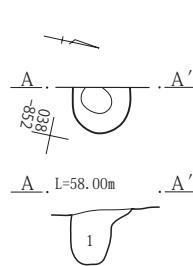


3-1区ピット

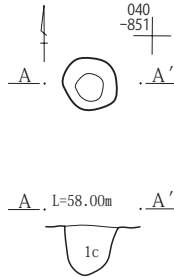
32号ピット



33号ピット

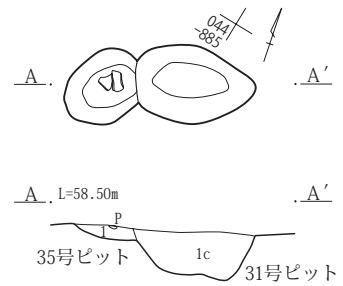


34号ピット



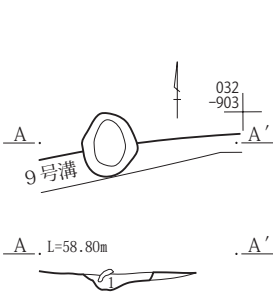
3-2区ピット

31・35号ピット

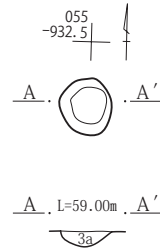


4区ピット

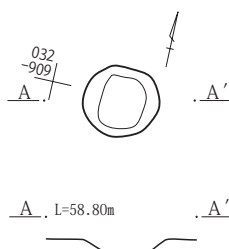
16b号ピット



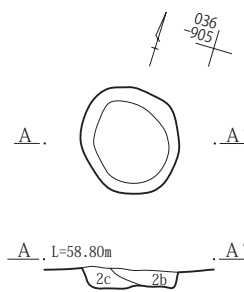
28号ピット



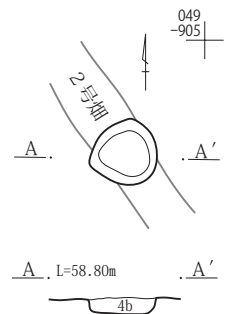
41号ピット



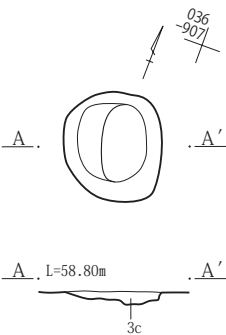
43号ピット



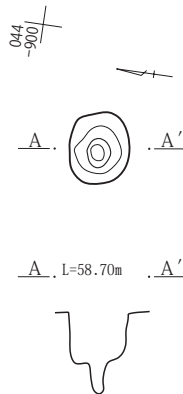
45号ピット



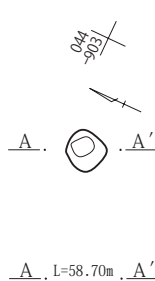
46号ピット



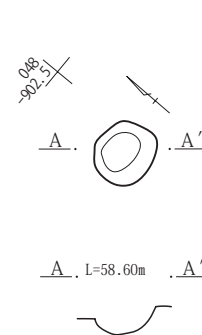
48号ピット



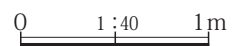
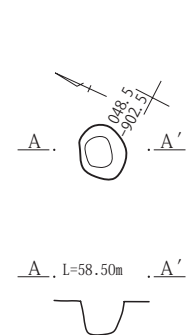
49号ピット



53号ピット

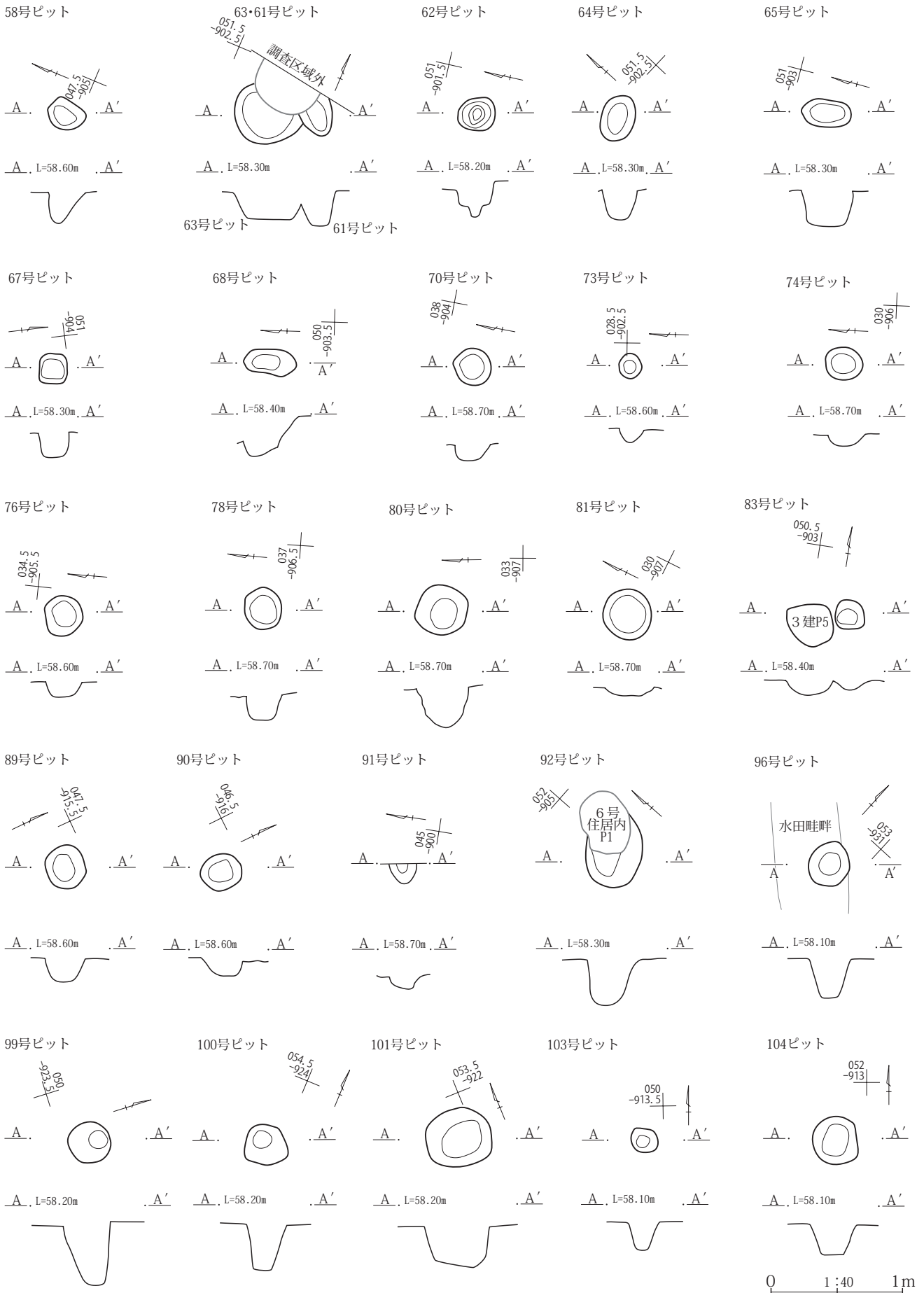


56号ピット



第292図 ピット(2~4区)

第V章 古代の遺構と遺物



第293図 ピット(4区)

4区のパット(第292～295図 PL. 48、93)

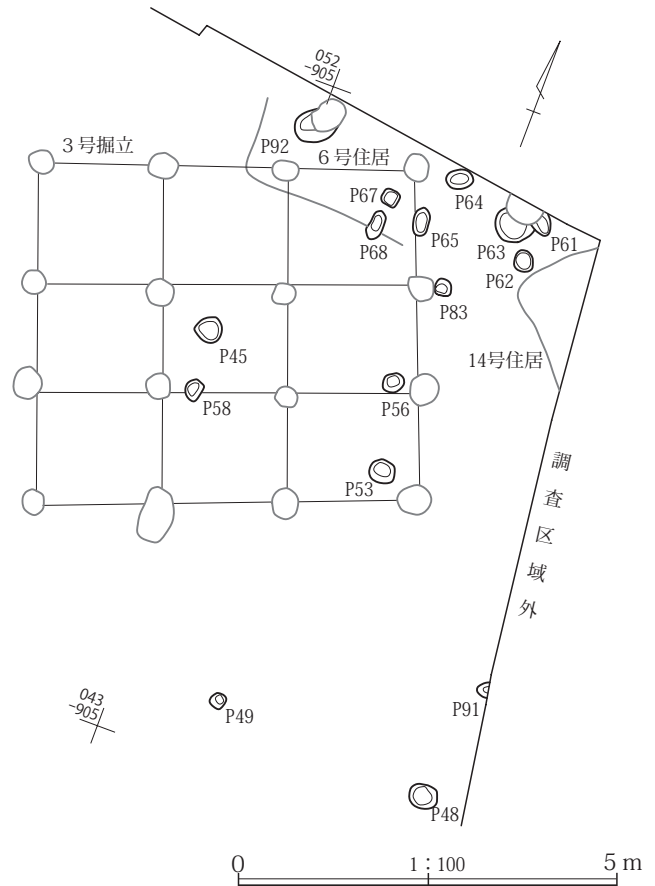
遺物観察表440)

古代の掘立柱建物やピット列は4区に集中しているが、古代のパットも大半がこの区にあり36基を確認している。4区は土地利用が最も頻繁に変化する地点である。調査1面では中世と平安時代の遺構、2面では泥流上の集落と畑、3面は泥流下の集落、4面はさらにその下の古墳時代前期の水田と集落を確認している。4区の古代のパットは2～4面で確認されているが、不明瞭な泥流内であって、下層に至らないと確認できないピットがあることは掘立柱建物の調査時にも見られた。図示したピットが確実に調査面に伴う遺構であるか明確でない。掘立柱建物やピット列周辺で確認される例が多いが、深度に乏しく柱穴的ではないピットも多い。

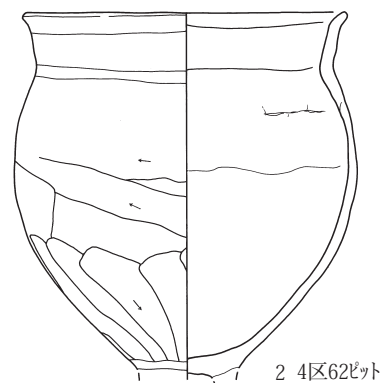
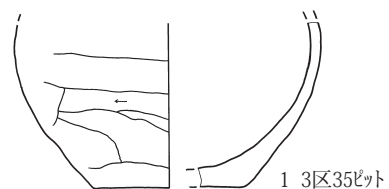
ピットが最も多く確認できた3号掘立柱建物周辺の配置を第294図に示した。付近は遺物の出土が多く炭化物粒や焼土が集中分布するなど、住居など確認できなかった別の遺構の存在も想定される。竪穴住居柱穴や掘立柱建物であったピットが混じる可能性がある。また56・58・83号ピットのように3号掘立柱建物柱穴脇に沿うような配置にあるものや、同建物南側の49・48・91号ピットのように3基が直角の配置に並ぶものがある。しかし91号ピットは深度に乏しく、これらの配置だけで建物を想定することはできなかった。

調査区南東の1号掘立柱建物周辺では東側柱列を南北に延長すると、70号ピットが北側の、73号ピットが南側の延長線上に重なり、関連する施設となる可能性がある。他にも建物等と関連する可能性のある遺構が多数存在するはずである。

62号ピットから出土した破片が完形近くまで接合復元された台付甕2を295図に示した。口縁部が「コ」の字状の9世紀前半の土器である。



第294図 4区ピット配置図



0 1:3 10cm

第295図 ピット出土遺物

第V章 古代の遺構と遺物

第17表 古代のピット一覧表

2区のピット (cm)

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ	埋没土・柱痕・遺物	備考	挿図	写真
580	014-777	円形	32×28×22	底面に柱痕の可能性	泥流上で確認	第292図	
581	013-776	円形	32×32×25		泥流上で確認 580号ピットの南東1.1m	第292図	
582	011-777	円形	37×35×31		泥流上で確認	第292図	
583	013-778	不整楕円形	51×43×34		泥流上で確認 580号ピットの南西1.9m 583号ピットの南東2.5mにあり建物柱穴の可能性	第292図	

3区のピット (cm)

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ	埋没土・柱痕・遺物	備考	挿図	写真
31	043-884	不整楕円形	61×41×29	土師器片	泥流下で確認 35号ピットと重複 新旧不明	第292図	
32	035-850	円形	38×35×30		泥流下で確認	第292図	
33	038-852	円形か	30×[24]×30		泥流下で確認 西隅は調査区域境にかかり未完掘	第292図	
34	039-851	円形	29×28×28		泥流下で確認	第292図	
35	043-885	楕円形	45×36×12	下層から土師器鉢1	泥流下で確認	第292図	

4区のピット (cm)

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ	埋没土・柱痕・遺物	備考	挿図	写真
16b	031-903	円形	33×30×31		2面で確認 9号溝北隅と重複	第292図	
28	054-932	円形	31×28×9		2面で確認 2号掘立区画内	第292図	
41	031-908	円形	41×38×11	須恵器片1、土師器片1	2面で確認 1号掘立南側に隣接	第292図	
43	035-905	円形	57×52×31	土師器小片2	2面で確認 2号掘立区画内	第292図	
45	048-905	不整円形	36×34×19		2面で確認	第292図	③
46	035-906	円形	59×52×23	土師器小片1	2面で確認 1号掘立区画内 2基のピットの可能性	第292図	
48	043-900	楕円形	38×32×44	②層 底面に柱痕	3面で確認	第292図	④
49	043-903	円形	23×21×34	①層	3面で確認 3号掘立南側に隣接	第292図	⑤
53	047-902	円形	35×32×14	①層	3面で確認 3号掘立区画内	第292図	
56	048-902	円形	29×25×20	②層	3面で確認 3号掘立区画内	第292図	⑥
58	047-905	楕円形	27×22×20	②層	3面で確認 3号掘立区画内	第293図	
61	051-901	楕円形	[25]×24×28	①層	3面で確認 3号掘立東側に隣接 63号ピットと重複	第293図	
62	050-901	円形	29×25×24	①層 底面に柱痕 土師台付糞2	3面で確認 14住西隅に隣接 6住に前出	第293図	
63	050-901	円形か	48×[35]×21		3面で確認 3号掘立東側に隣接 6・11住に前出 61号ピットと重複	第293図	
64	051-902	楕円形	33×26×24	①層	3面で確認 3号掘立東側に隣接 6・11住に前出	第293図	
65	050-903	楕円形	38×20×26	①層	3面で確認 3号掘立東柱筋上 6住に前出	第293図	
67	050-903	隅丸方形	22×21×16	①層	3面で確認 3号掘立区画内	第293図	
68	050-903	楕円形	40×20×31	①層	3面で確認 3号掘立区画内	第293図	
70	037-904	円形	27×27×12	②層	3面で確認 1号掘立東柱筋の北側延長線上	第293図	⑦
73	028-903	円形	20×17×11	②層	3面で確認 1号掘立東柱筋のほぼ南側延長線上	第293図	
74	030-906	楕円形	28×24×8	②層	3面で確認 1号掘立南側に隣接	第293図	
76	034-905	円形	31×30×14	②層	3面で確認 1号掘立区画内	第293図	
78	037-906	円形	32×28×18	②層	3面で確認 1号掘立北側に隣接	第293図	⑧
80	033-907	円形	38×37×30	②層	3面で確認 1号掘立区画内	第293図	⑨
81	029-907	円形	39×37×7	②層	3面で確認 1号掘立南側に隣接	第293図	
83	049-902	円形	21×22×6	①層	3面で確認 3号掘立P5東に接する	第293図	
89	047-915	円形	33×30×17		3面で確認	第293図	⑩
90	046-915	円形	30×28×12		3面で確認 1号柱列P5の東側約6m	第293図	⑪
91	045-900	楕円形か	21×[15]×8	①層	3面で確認 東側は調査区境にかかり未完掘	第293図	
92	051-904	楕円形か	[58]×42×32		3面で確認 6住ピットに先出	第293図	
96	052-931	円形	33×31×30		4面で確認 1号ピット列南側に隣接	第293図	
99	050-922	円形	32×30×47		4面で確認 1号ピット列北側に隣接	第293図	
100	052-921	円形	50×45×32		4面で確認 1号ピット列北側に隣接	第293図	
101	050-922	円形	32×30×47		4面で確認 1号ピット列P5から北側直角に屈曲の位置	第293図	
103	049-913	円形	22×19×22		4面で確認	第293図	
104	051-913	円形	37×35×23		4面で確認	第293図	

・ []は残存値。

・ 4区ピット埋没土のうち、図示していないが遺構掘り下げの際に観察のあるものを以下の番号で加えた。

①層：灰褐色やや砂質土。②層：灰褐色やや粘性土。共通してしまりがあり、F Pや炭化物粒を散見する。

・ 写真はすべてP L.48。

6 土坑

中世面で確認された以外の土坑数は少なく、2区で15基、3-1区で9基、3-2区で3基、4-1区で3基を調査した。集落に伴うものはほとんどなく、畑上や畑周辺で確認されている。ピット同様区ごとに中世面から通し番号を付しているため、各区とも途中から番号が始まっている。各土坑の測量図は第297～299図に、計測値等の内容は第18表に一括して記した。

埋没土の記載については以下のような土坑共通の算用数字の土層番号をつけ、付帯事項をアルファベットで追記した。それ以外の土層について個別の土坑に記した。

- 1：灰褐色土 しまりやや強い砂質土層
- 2：灰褐色土 粘性土層
- 3：黄褐色土 しまりやや弱い砂質土層
- 4：暗褐色土 弱粘性土層
- 5：灰白色土 泥流堆積土でF Pらしい軽石を含む

(付帯事項)

- a：炭化物粒を含む b：F Pらしい軽石を含む
- c：C軽石を含む d：不明白色軽石を含む
- e：D-4ブロックを含む
- f：暗灰色土ブロックを含む

2区の土坑(第297・298図)

F A泥流上の畑調査時に50～56号土坑を、古墳時代集落を調査した第3面で57～65号土坑を確認した。

50～52号土坑は1号新畑上にある近接した土坑で、特に50・51号土坑の間隔は上端でも10cm未満である。53・54号土坑は1号新畑北東縁部の畝付近にある。特に54号土坑は畝間と軸方向を並べていて畑と近接した時期の遺構の可能性はある。

58号土坑は古墳時代前期の30号住居に後出している。65号土坑も30号住居と重複しているが先後関係は確認できなかった。59～64号土坑は調査区北側の住居が途切れる一画で集中して確認した。59・60号土坑は中世館堀に大きく壊されている。このうち60号土坑は古代の土坑では最大規模で、小型の竪穴住居に近い。底面は平坦で上層からであるが遺物の出土もやや多く、柱穴等の施設

は一切確認されていないが住居に近い性格の遺構であった可能性がある。61～64号土坑は近接して確認した小型土坑で63・64号土坑は接するように並び、63号土坑は61号土坑の南側15cmに近接している。

3区の土坑(第298・299図)

3-2区第3面は泥流上の畑面に後出する古墳時代の集落を調査したが、この面で4～6号土坑を確認した。5号土坑は5号住居と重複している。

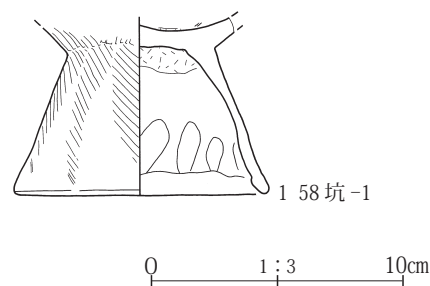
住居の見られない3-1区も3-2区と同じ面での確認で分布は西側に偏っていて7～11・13・14号土坑を確認した。調査区東側では12・15号土坑が離れた位置に点在していた。円形・楕円形の土坑が主体であるが、軸方向や分布に規則性はないようである。10・11・15号土坑が畑区画内にあるが、他は畝間が確認できない地点に分布していた。13・14号土坑が40cmの近接した間隔にあったが、他は隣接する土坑から1m以上離れた位置にあった。

12号土坑は遺構のない北寄りの一画にあり、ピットとあまり差のない小規模な施設である。

4区の土坑(第299図)

6～11号住居および畑確認面で調査した第2面・泥流上面の土坑に12・13号土坑がある。どちらも小型で柱穴を一回り大きくした規模で、特に12号土坑は柱穴と抜柱痕のような形状である。

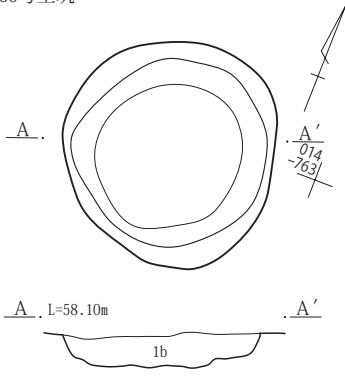
古墳時代時代前期を主体とする集落を確認した泥流下面では調査区東隅で14号土坑を調査した。隅丸長方形を呈した施設である。ただし調査区境の土層から上面径2.5mを超える大きな施設であった可能性がある。



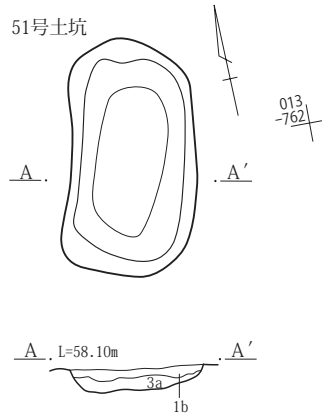
第296図 土坑出土遺物

2区土坑

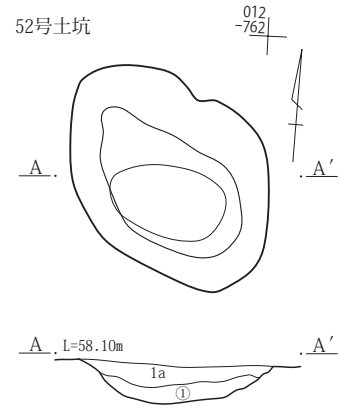
50号土坑



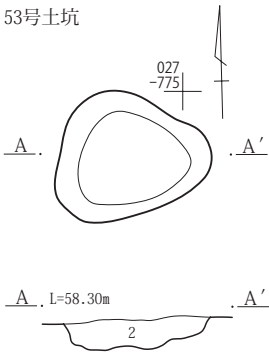
51号土坑



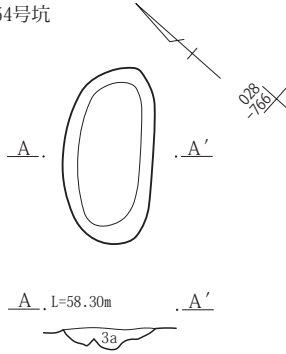
52号土坑



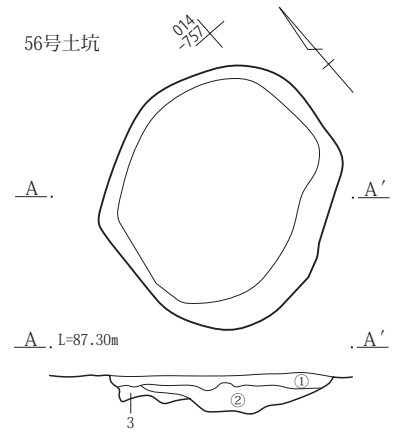
53号土坑



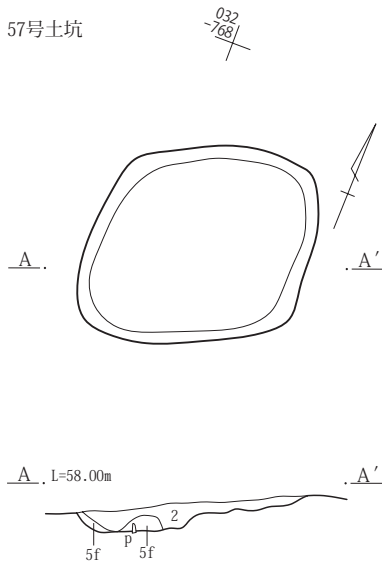
54号坑



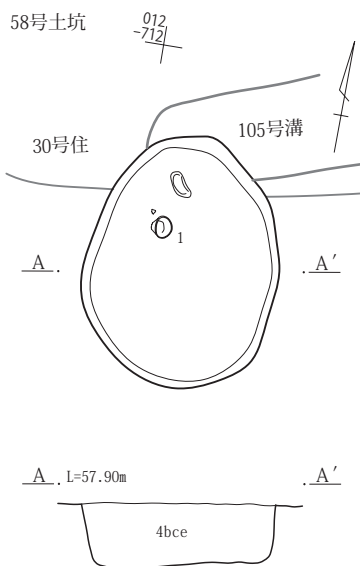
56号土坑



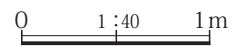
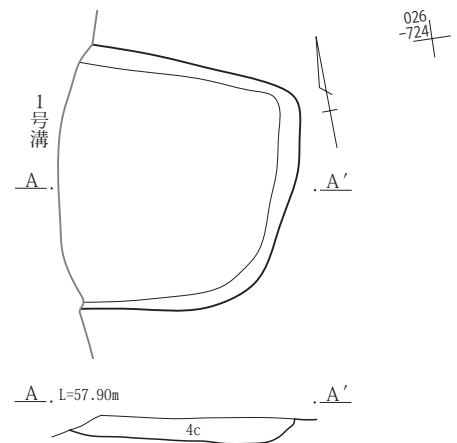
57号土坑



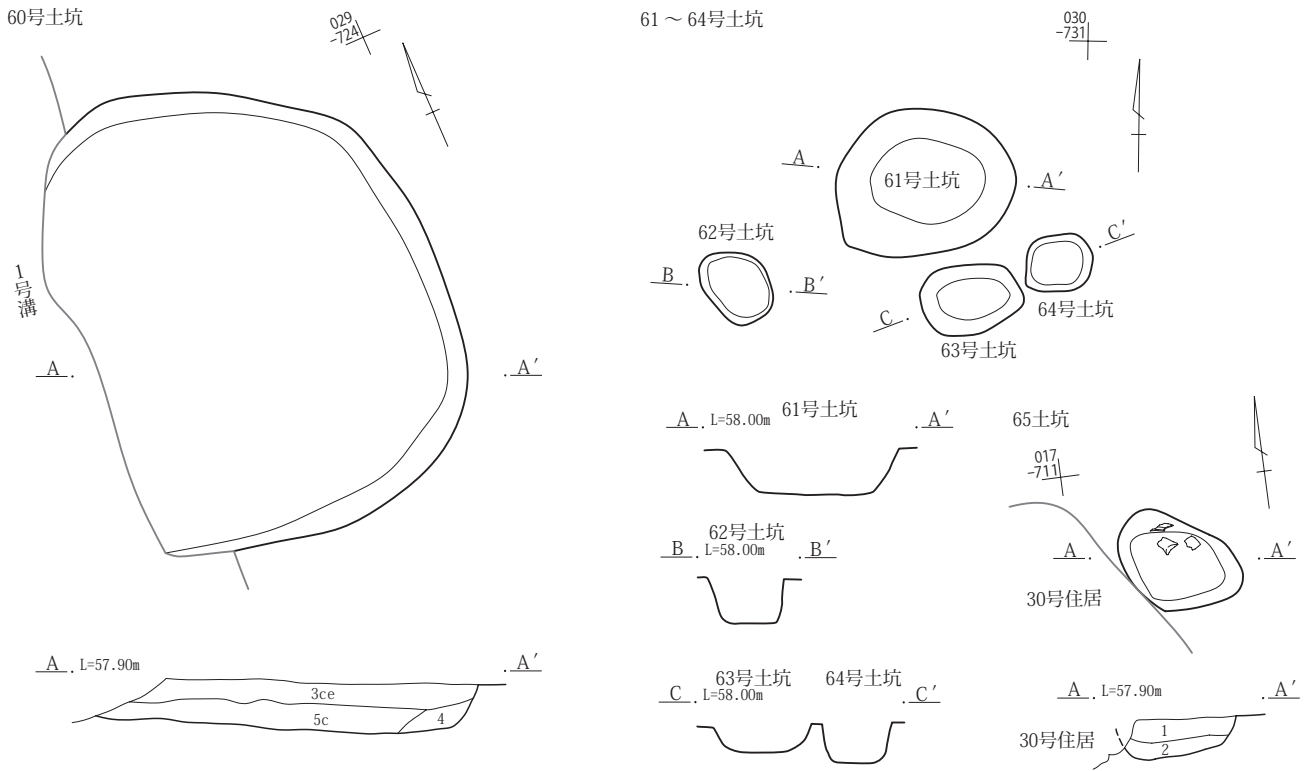
58号土坑



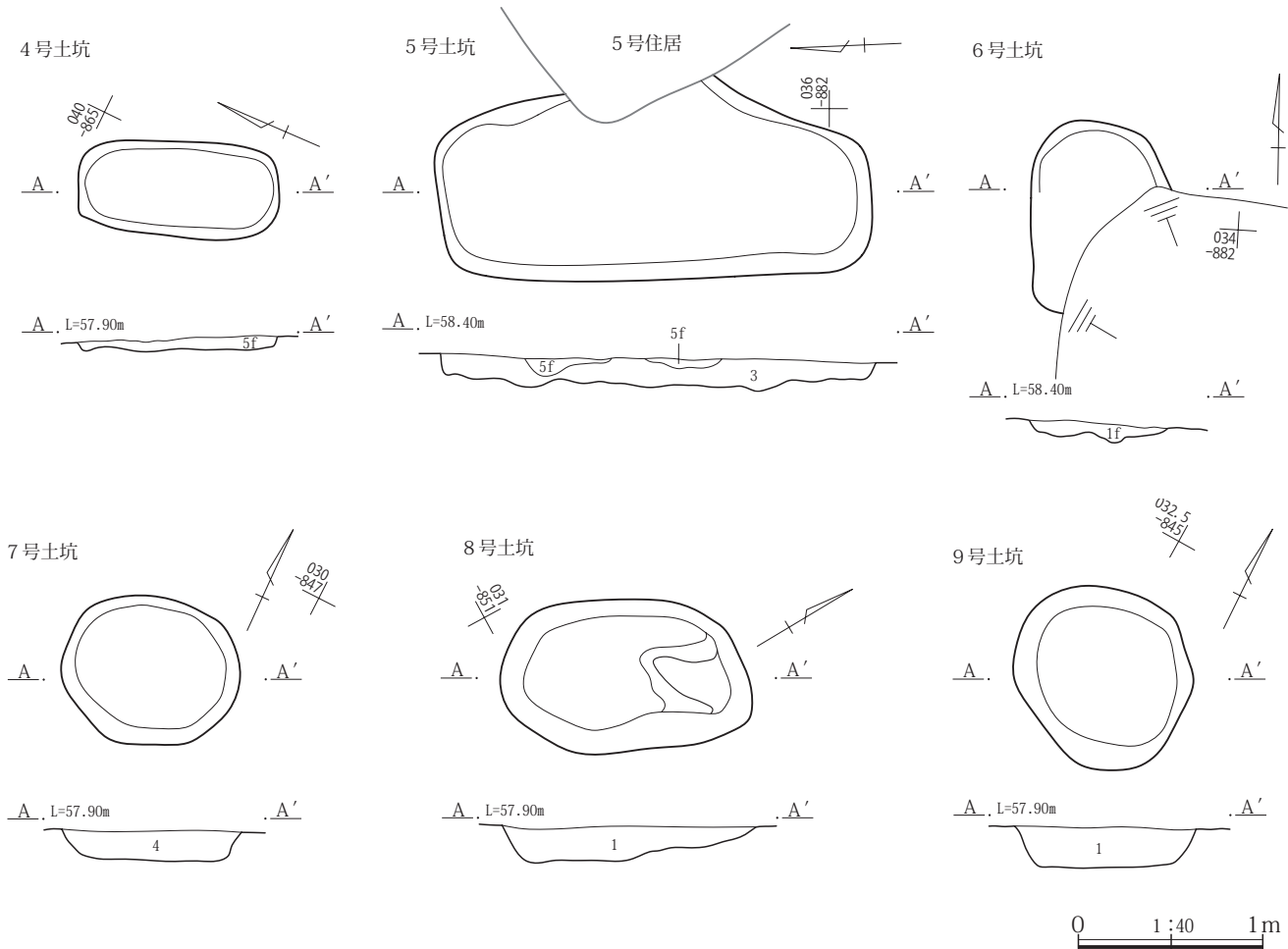
59号土坑



第297図 土坑(2区)

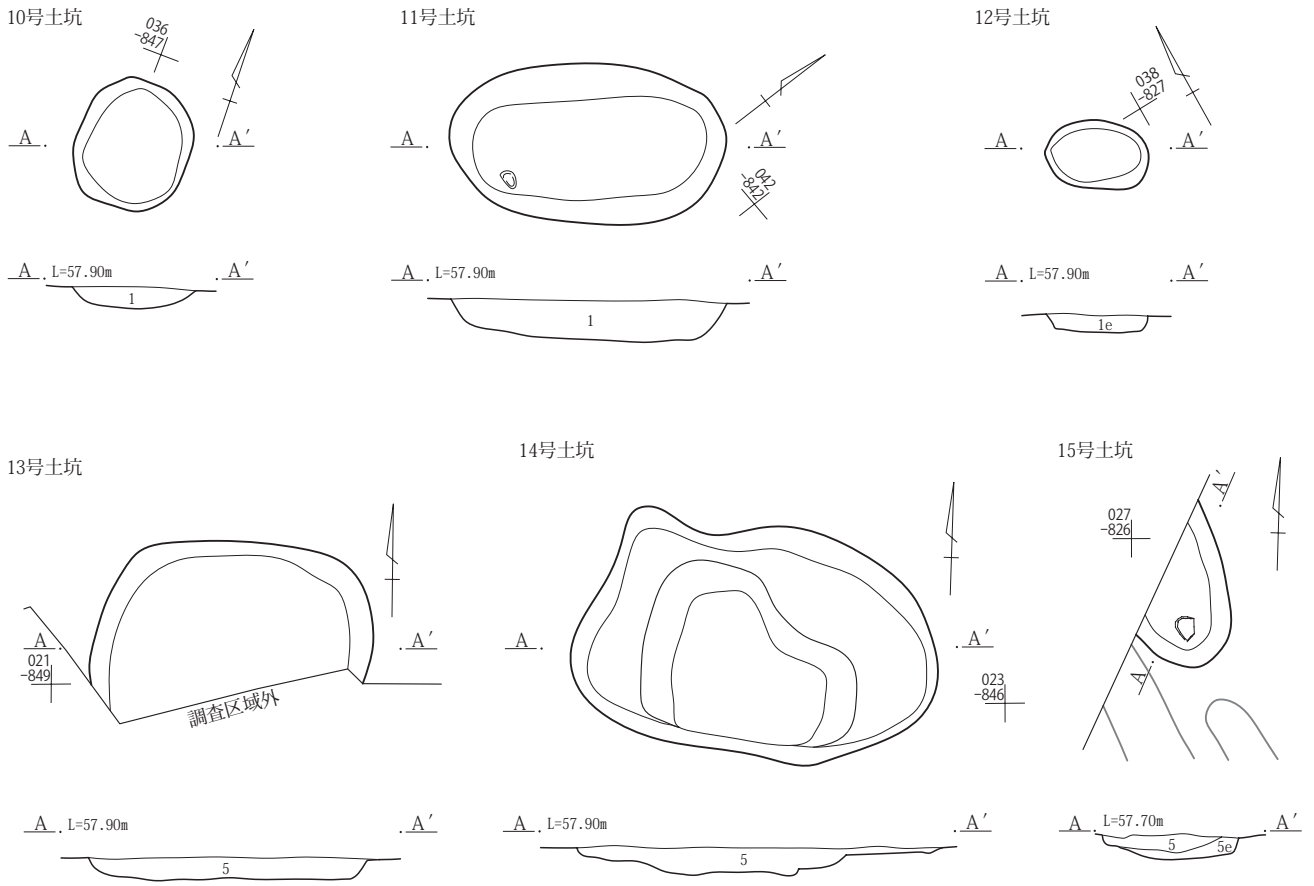


3区土坑

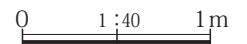
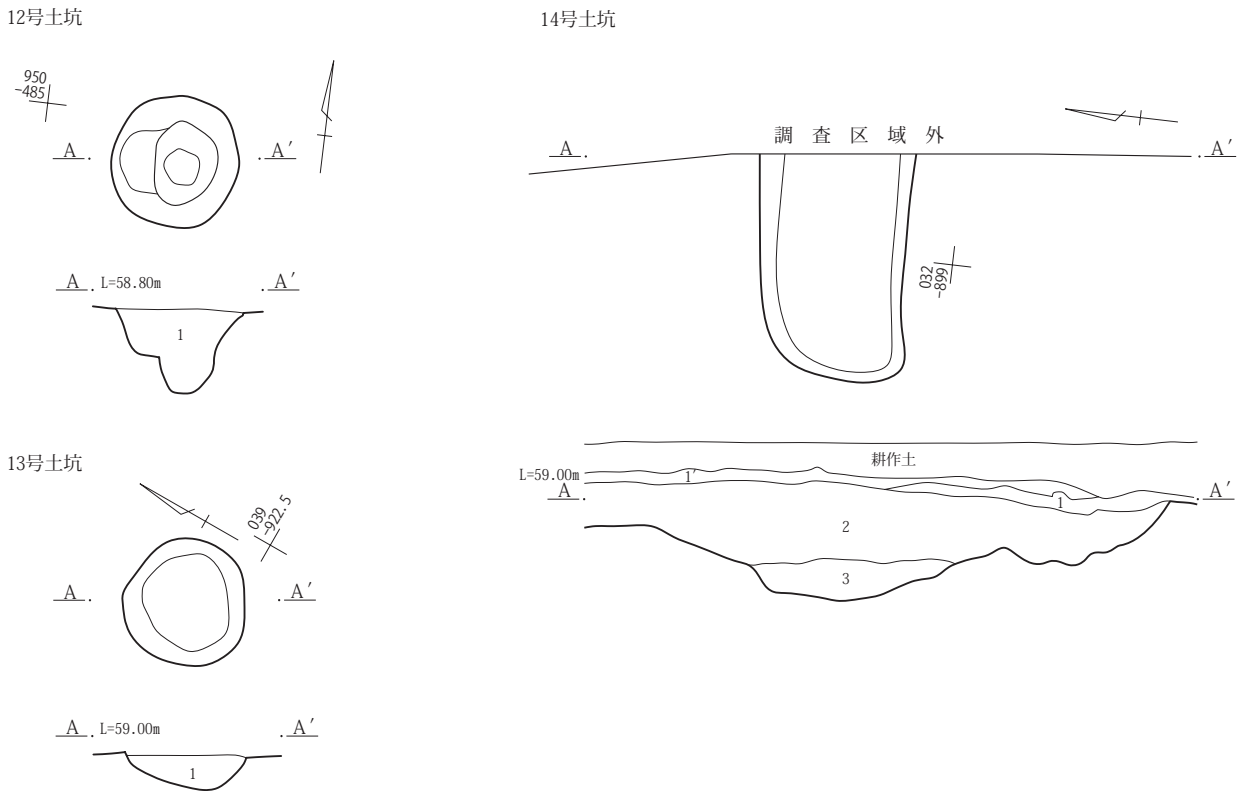


第298图 土坑(2·3区)

第V章 古代の遺構と遺物



4区土坑



第299図 土坑(3・4区)

第18表 古代の土坑一覧表

2区

No.	挿図	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真	形状			
50	図297 PL-49①	013-763 G 円形	119×113×16		2面で確認 1号畑に後出
51	図297 PL-49②	012-763 G 隅丸長方形	125×68×12 N-16° E		2面で確認 50号土坑の南東側に近接 1号畑に後出
52	図297	011-762 G 不整楕円形	133×96×15 N-64° W	①灰色火山灰 ブロック(FA)	2面で確認 1号畑に後出
53	図297 PL-49③④	026-765 G 不整三角形	85×68×19		2面で確認 1号畑縁部 1号畑縁部付近の畝先部分
54	図297 PL-49⑤	028-766 G 不整長方形	94×49×11 N-53° E		2面で確認 1号畑縁部の畝上付近 53号土坑の北西1.7m
56	図297	013-757 G 不整楕円形	140×117×25 N-60° E	①灰色火山灰細砂 ②灰色火山灰(FA)	2面で確認
57	図297 PL-49⑥	031-767 G 隅丸菱形	117×103×22 N-68° E	土師器微細片	3面で確認 26号溝の西側30cmに隣接
58	図297	010-711 G 不整楕円形	134×102×32 N-13° W	土師器台付甕1 他にも土師器片	3面で確認 30号住居に後出
59	図297	025-725 G 長方形か	[127]×132×18 N-76° W		3面で確認 中世館堀に西半を壊される
60	図298 PL-49⑦	026~029-724~725 G 不整円形	248×[187]×28 N-3° E	上層から土師器片	3面で確認 中世館堀に西半を壊される 59号土坑の北側0.5m
61	図298 PL-49⑧⑨	029-731 G 不整楕円形	88×79×28 N-70° W		3面で確認
62	図298 PL-49⑧	028-732 G 不整楕円形	43×32×25 N-32° W		3面で確認
63	図298 PL-49⑧⑩	028-731 G 不整楕円形	53×39×16 N-69° E		3面で確認
64	図298 PL-49⑪	028-731 G 不整長方形	35×30×21 N-88° E		3面で確認
65	図298 PL-49⑫	016-710 G 不整楕円形	68×44×27 N-88° E	土師器片	3面で確認 30号住居の東側に近接

3区

No.	挿図	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真	形状			
4	図298	038-864 G 隅丸長方形	108×52×10 N-25° W	土師器微細片	3面で確認 単独
5	図298	035-881 G 隅丸長方形	234×100×15 N-3° E	土師器片	3面で確認 5号住居の西隅と重複・後出か 重複部分の壁が崩れる。
6	図298	033-882 G 隅丸長方形か	[98]×76×11 N-0°		3面で確認 5号土坑の南1.2m 南側を大きく壊される
7	図298	028-847 G 不整円形	96×79×18 N-64° E	土師器片	3面で確認
8	図298	030-849 G 楕円形	133×82×21 N-30° E		3面で確認
9	図298	031-844 G 不整円形	101×96×22 N-31° W		3面で確認
10	図299	035-846 G 楕円形	71×63×10 N-20° W		3面で確認
11	図299	040-842 G 楕円形	145×85×23 N-39° E		3面で確認
12	図299	037-827 G 楕円形	54×36×9 N-61° W		3面で確認
13	図299	020-847 G 隅丸方形か	149×[81]×14 N-90°		3面で確認 南側は調査区域外
14	図299	022-846 G 不整楕円形	183×120×18 N-75° W		3面で確認
15	図299	026-825 G 楕円形か	[75]×46×14 N-23° W	土師器片	3面で確認 調査区内の残土搬出路境界にあり北西側を失う

4区

No.	挿図	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真	形状			
12	図299 PL-49⑬⑭	045-904 G 円形	71×67×50 N-6° W		2面で確認 2基の遺構または柱穴と抜柱痕の可能性
13	図299	038-922 G 円形	68×67×19 N-60° E		2面で確認
14	図299 PL-49⑮	032-898 G 隅丸長方形か	[119]×81×14 N-85° E		3面で確認 東側は調査区域外

7 井戸

井戸は2区で3基、3-2区で1基・5区で3基確認しているが3-2区東隅で確認された1号井戸が出土遺物から確実な古代の井戸で、他に古代の井戸となる可能性ある2区4号井戸をこの項で扱った。

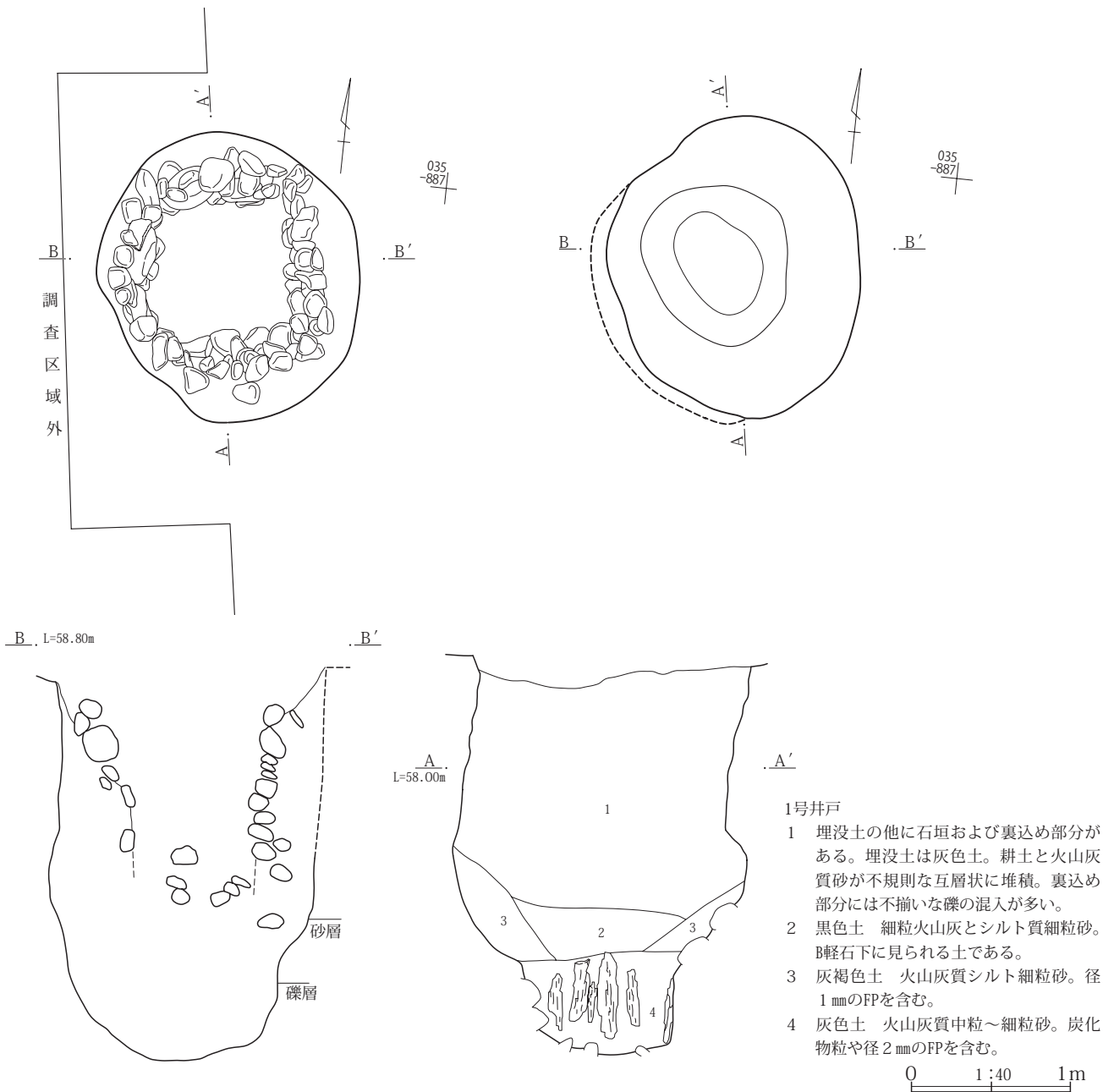
1号井戸(第300・301図 PL.50-①・②、93

遺物観察表440頁)

4区中央から3-2区東隅にかけては平安時代の集落が広がっているが、本井戸はこの集落の東隅にある。ま

た、平安時代には溝で区切られた区画が存在していた可能性があるが、本井戸は1号区画と名付けた区画の南東隅にあっている。最も近接した住居は南側3mに位置する3区2号住居だが、この住居との間には区画溝である4号溝があり同一区画にはならない。

古代の井戸としては珍しい石組みの見られる井戸である。埋没土や出土遺物から平安時代の施設と考えた。砂質地山のため、井戸枠は必須であったと思われる。上層に石組みが残り、一辺80cm前後の方形開口部である。下層では縦位の板状木枠の痕跡が見られ(A断面参照：板材部分は見通し図。北隅板材のみ断面)、方形の板枠が



第300図 3-2区1号井戸

あったものと思われる。中層付近にも石組みがあったようだが壁面がタナ落ちし、木枠上側付近(4層上面付近)に崩れていた。石組みには長さ25cm前後の川原石を小口積みしている。裏込めにも同規模の礫が多数みられ、数度の積み直しがあったと思われる。

確認面から約2mの深さで礫層にあたっているが、この層を50cm前後掘り込んで底面としている。

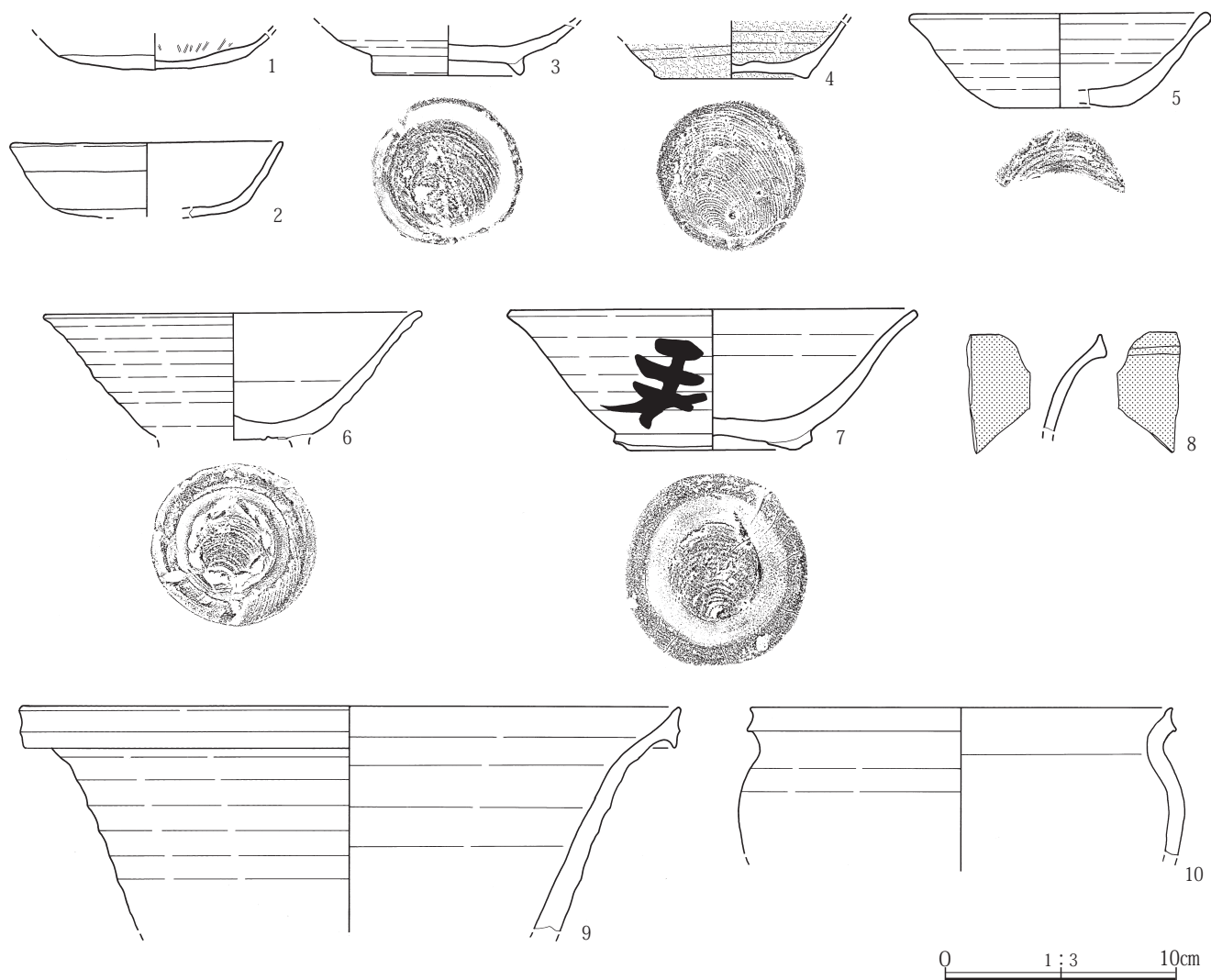
位置 034-888グリッドを中心とする位置にある。

規模形状 掘り方は長軸長1.88m、短軸長1.67mの不整円形を呈し、確認面からの深さ2.58mを測る

埋没土 A s - Bの混入は見られず、平安時代末までに埋没した施設と考えられる。中層付近まで互層状の堆積で、人為的な埋戻しの痕跡はみられない。

遺物 多量の土器が出土し杯類を中心に10点を図示した。1は上層から、他は中層付近の埋没土内から出土している。7は体部外面に墨書がある。図示した以外に3000gを超える土器類が出土し、須恵器はその内35%を占める。土師器には刷毛目のある甕など古式土師器類の混入も多い。破片を含め下層出土の遺物は少ない。図示できた土師器は杯類に偏ったが破片類も甕類より杯類が多く、住居内の出土土器傾向とは異なっている。

所見 調査時点では湧水量にやや乏しい井戸であった。出土遺物は6・7のように器高があり粗雑な高台の10世紀前半代の椀が見られる。本井戸の周辺には多量の杯類を出土する3B号溝があり、杯類の出土が偏る一画となっている。



第301図 3-2区1号井戸出土遺物(1)

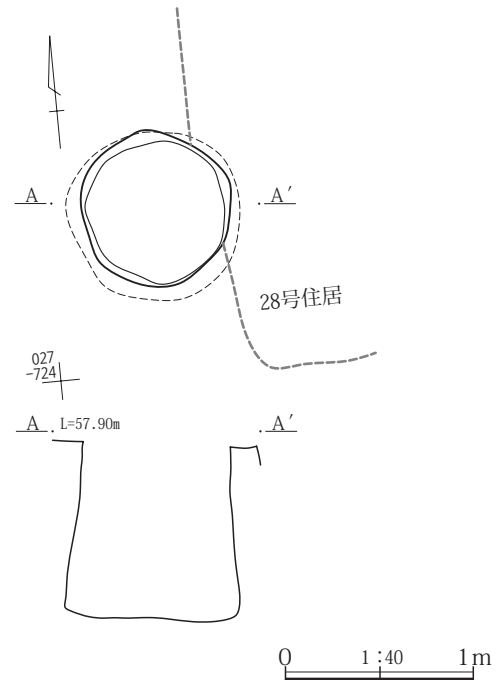
2区4号井戸(第302図 PL. 50-③)

古墳時代調査面で確認した遺構である。井戸と確定する要件を満たしていないが、調査時の名称に沿ってここで扱う。形状・規模など中世の井戸とあまり変わらず、詳細な時期を決められない遺構である。

位置 027-723グリッド。2区中央北隅の、中世方形館外側部分にある。

規模形状 径82×79cmのほぼ円形を呈している。底面は平坦で、底径は89×87cmの円形となり開口部より広い。確認面からの深さは94cmを測る。フラスコ状土坑と呼ばれる縄文時代の遺構に近いような形状である。

所見 壁面は直線的にオーバーハングし、タナ落ちの痕跡もなく湧水点も不明瞭で、井戸と確定する根拠に欠く。出土遺物に数片の土師器があるが、図示に耐える遺物はなかった。埋没土の記録を欠くが、遺構確認時に28号住居に後出するが把握できている。壁面の崩落がなく、井戸であっても長期間の使用はなく、比較的短期に埋め戻されたと思われる。



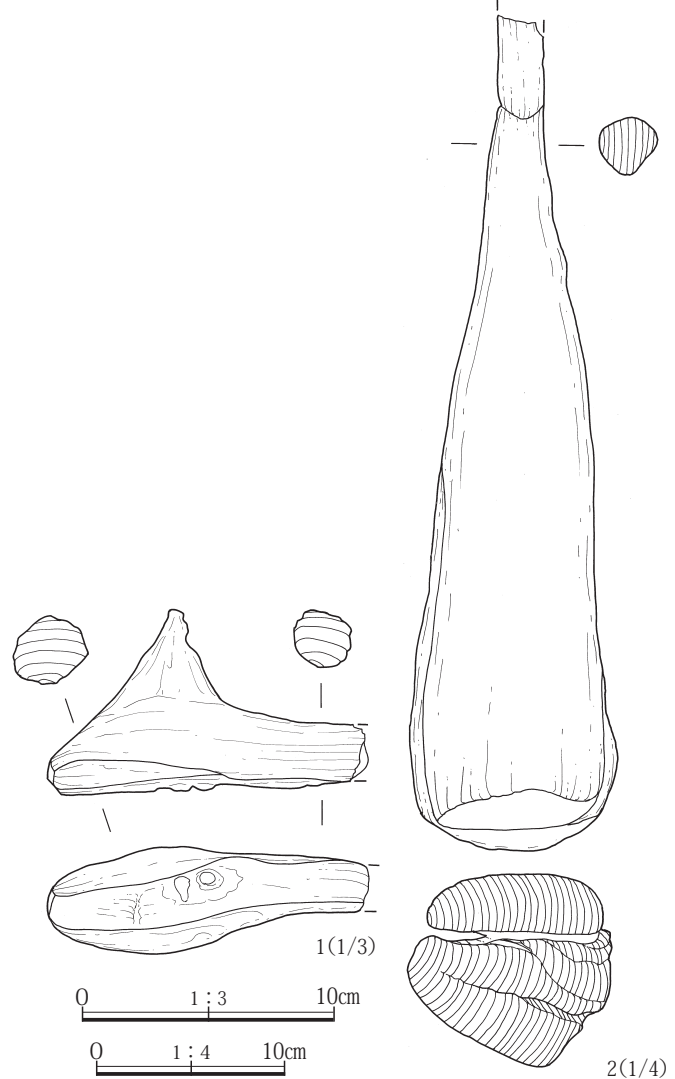
第302図 2区4号井戸

8 木製品(第303図 PL. 64 遺物観察表446頁)

2区流路跡出土の木製品2点をここで扱う。2区1号畑の西側にある流路の北隅で2点並ぶようにして出土した。樹種が同一だが別個体である。F A 泥流の下を若干掘り下げた高さでの出土で、5世紀代の土師器が出土する層位である。極端な磨滅はないので、上流から流され漂着した遺物ではなく、近節する地点、おそらく本遺跡内で廃棄された遺物と考えたい。

1は両端を欠き加工痕も不明瞭で装着痕等は皆無だが、鉄斧等を装着した柄と思われる。

2は縦杵の半欠品のような形状であり、1m近い長さの製品だったと想定できる。柄の部分が細く、杵として実用できたのか不明な製品である。端部に埋没以前にできたと思われる大きな亀裂があり、残存状態は良くない。



第303図 2区出土遺物(木器)

9 畑

古代の畑は全ての調査区で確認できた本遺跡で最も広範囲の遺構である。さらに調査面は4期以上あって、時期ごとに確認できた調査区は異なる。3-1区でAs-B直下、1~4区では泥流上、3~5区では泥流下の畑があり、特に5区では降下Hr-F A直下の明瞭な畑が見つかった。

なお、遺構図の各畝間には丸数字を付して説明の助としている。

(1) As-B直下の畑

概要

畑畝間内にAs-Bの1次堆積層を含む畑をこの項で扱った。畝に相当する平坦な位置にもAs-Bの1次堆積層が確認できる部分があり、畝の高まりがほとんど残存しない畑だったことが分かる。この面の畑が確認できたのは3-1区のみである。畝間方向は2区や3-2区および4区の泥流前後の畑とも近似し、さらに古墳時代の水田畦畔にもつながるようで、この地点の伝統的な地割に沿ったものと推測できる。

畑は3-1区調査区中央から西側にかけて確認されているが、調査工程の中で設定した調査区南側の排土搬出



第304図 3-1区5・6号畑

路下へも延びるため、車両通過の影響を受けて一部で不明瞭になった部分がある。南隅に細い畑境の隙間があり、畑境北側の広い部分を5号畑、南側のごく狭い部分を6号畑と呼称した。また調査区北側中央付近にある畝間の痕跡か耕作痕か判断できない畑状の遺構を7号畑とした。どの畑でも遺物は出土していない。

5号畑(第304図 PL.50-④)

南側は6号畑と接し、一部で畑南限を確認できる。北側・西側は調査区境まで畑が続いている。東側は徐々に残存状態が悪くなり、境界は明確にできない。

位置 北隅044-845、南隅019-839、東隅027-830、西隅039-852。

規模 残存部分で長さ27.3m以上、幅19.2m以上の規模が確認できる。

確認面積 337.9㎡

畝間方向 N-17° W 南隅では若干西へ偏る。

畝・畝間 畝は確認できない。畝間⑤~⑦が23m以上の長さがあり、⑦は両隅が確認できないが残存25.2mを測る。本遺跡内でも長さのある畑である。畝間は細かな蛇行が多いが、幅は25~35cm前後でほぼ一定である。畝間の深さは2cm前後の部分がほとんどで一部深くなる部分でも6cm以内である。畝幅は55~80cmで、60~75cmがほとんどである。

地山傾斜 南東側へ低い4/1000

備考 畝間はA s-Bを被覆しているが深度に乏しく、畝も高まりを失っており、A s-B降下時には廃棄されていた埋没途中の畑と考えたい。

6号畑(第304図)

5号畑の南側に、同畑とは20~50cmほどの狭い畑境の隙間を隔てて作られた畑でA s-Bを直接被覆している。調査できた範囲はわずかで、確認できた畝間も8本のみであった。北側の5号畑との境付近は明瞭だが、南側は調査区境と接している。東側も残存状態が悪く、畝間⑧が畑の東端にあたるか判断できなかった。

位置 北隅020-835、東隅018-832、西隅019-837。

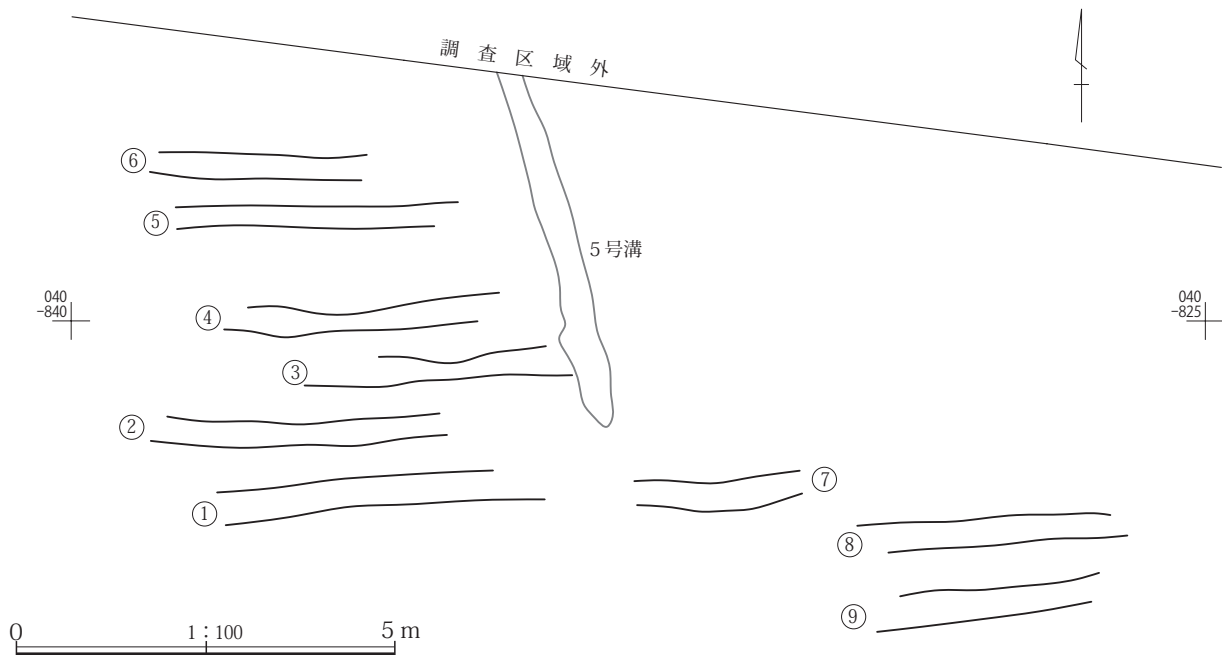
規模 残存部分で推定できる規模は、長さ3.6m以上、幅4.6m以上の範囲である。

確認面積 7.3㎡

畝間方向 N-25° W

畝・畝間 畝は確認できず、畝間に細かな蛇行があるのは5号畑と同じである。畝間の長さは最も長く確認できたものでも⑥・⑦の2.7mである。畝間幅は30cm前後だが、畝幅60~65cmで5号畑よりわずかに狭い。畝部分として残存する範囲が特に狭くなっている。畝間の深さは2cm前後の浅い部分が多く、5号畑同様である。

備考 A s-Bの堆積状態も5号畑と同じである。



第305図 3-1区7号畑

7号畑(第305図)

5号畑の東側で確認した畝間と思われる痕跡である。地山との土色の違いから9本の畝間を確認した。5号畑と重複がなく、これに後出する可能性がある。変色部分はほとんど深さがなく、また埋没土であるか上面の影響を受けた変色であるかの判断もできなかった。

位置 北隅042-836、東隅037-826、西隅038-839。

規模 残存部分で東西長13m以上、南北幅6.3m以上の規模が確認できる。

確認面積 38.0㎡ **畝間方向** N-88° E

畝・畝間 畝間は途切れた部分が多いが同一の畑で、⑥と①は繋がるものと思われる。確認できる長さは①の4.2mが最も長く、⑦を併せると7.5mになる。畝間幅は30cm前後で痕跡部分としては広めである。畝幅は④・⑤間のみ135cmと広いが、他は65～90cmで一様ではない。

備考 上面にAs-Bが被覆しているか明瞭ではなく時期推定の根拠を持たないが、座標北からは垂直方向に近い走行であり、5・6号畑と同時存在していたとは考えにくい。この方向で築かれた中世館に伴う区画に沿った耕作痕跡の可能性もある。

(2) 泥流の前後で確認された畑

概要

HR-F Aに伴うと思われる泥流層(以下FA泥流層と略す)下からは全調査区から畑または畑に係わる耕作痕が確認されている。土地利用の変遷を辿るためこれらを1区より順に一括して扱った。畑は区ごとに上位調査面から通し番号を付けたため、As-B降下前後の畑が確認された3-1区では8号畑から始まっている

FA泥流層上は比較的長期間安定していた面のようで、平安時代集落の他、畑跡が確認されている。FA泥流層下で確認された畝間もしくは耕作痕を扱うが、時期は明瞭でない。1区～4区で確認されている本遺跡では最も広範な範囲の畑面である。

FA泥流以前の畝間が泥流等で埋もれている畑は3-2区、4-1区、で確認され、特に5区では降下HR-F Aに被覆された畑面が確認されている。

1区の畑

1区は中央から東側の大半を流路によって削平され、遺構が残るのは西側の小範囲である。畑はこの面のみで、3枚の畑を想定した。確認できたものは畝間もしくは耕作痕のみで、畝は把握できていない。最も西側で確認した幅太の畝間状施設を1号畑とした。東隣では細長い畝間状施設が直行して確認され、平面図上では小区画水田のような形状に見える。畝間方向南北の畑を2号畑、畝間方向東西の畑を3号畑と呼称した。両畑の先後関係は確認できていない。

この地点周辺の地形は南側へ低い緩やかな傾斜面である。いずれの畑からも遺物の出土はない。また、泥流下からは古墳時代の集落が確認されている。

1号畑(第306図 PL.54-①)

南側・北西側を流路で削られ明瞭ではない。東側は徐々に残存状態が悪くなり、畑隅は不明である。

位置 北隅017-671、南隅010-671、東隅014-667、西隅011-675。

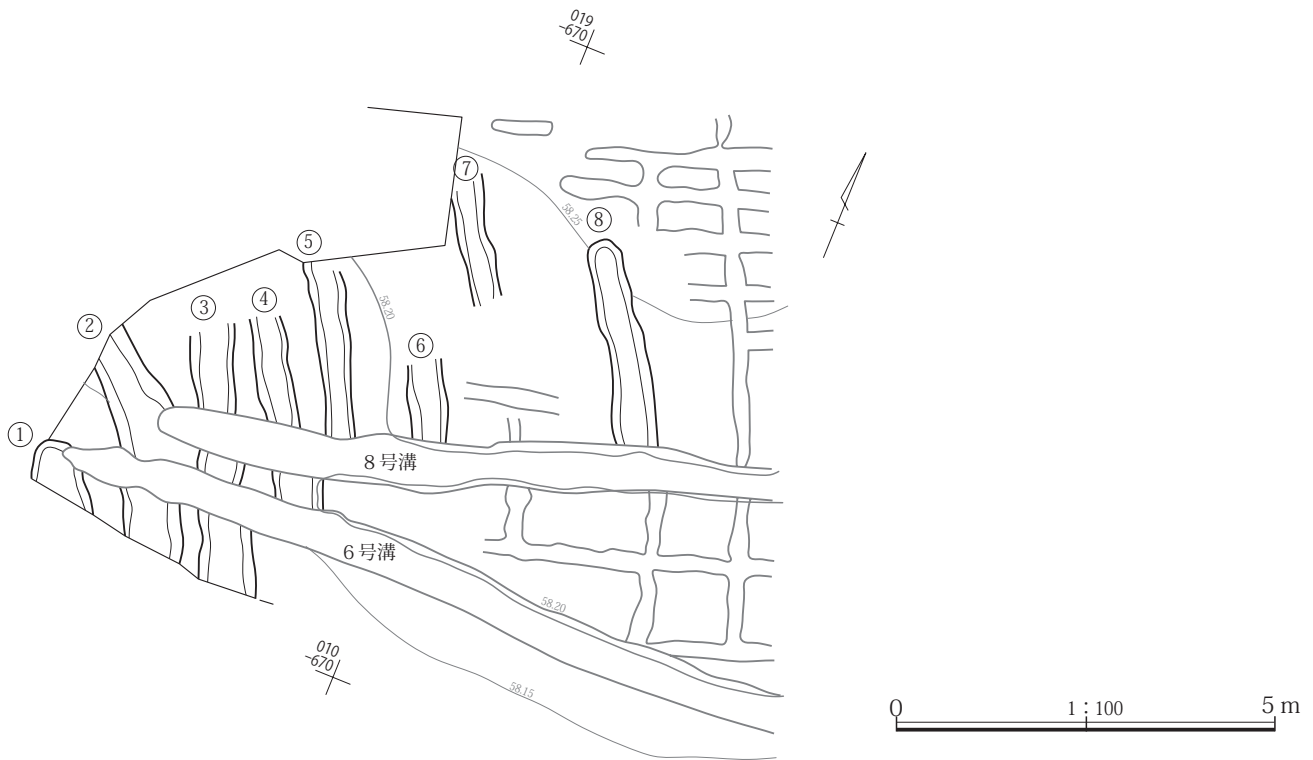
規模 8条の畝間を確認した。東西8.4m、南北5m前後の範囲のみの確認である。

確認面積 33.6㎡

畝間方向 ③N-25° W ④N-31° W

畝・畝間 35～75cmの畝間幅があり、1区の畑では突出して広い。畝間②は北側で形状が乱れ、他の畝間も方向がやや不一致となっている。畝幅は畝間⑤を境に東西で間隔が異なり、西側では90cm前後、東側では110cm以上となる。畝間は全体に短く、③が長さ3.4mで最も長い。深さは5～9cmで6cm前後の部分が多い。

備考 6・8号溝に後出している。2号畑と畝間方向が比較的近似し、畝間⑦・⑧は2号畑西隅畝間とほぼ同じ位置にある。両畑は近接した時期の遺構と思われる。



第306図 1区1号畑

2号畑(第307図 PL. 54-①)

1号畑東に広がっている。直線的で連続する痕跡で畝間として扱ったが、幅狭で溝状の耕作痕と区別できていない。畝間⑨・⑩および⑫・⑬で間隔が極端に狭くなり、2時期以上の畑となる可能性がある。

位置 北隅020-665、南隅012-666、東隅015-655、西隅014-669。

規模 15条の畝間を確認した。南北長7.5m、東西幅13.7mの範囲があり1区で最も広い畑であるが、畑の輪郭を想定できる部分はない。

確認面積 74.6㎡

畝間方向 ③N-24° W ②' N-15° W

畝・畝間 畝間幅17～33cm、平均25cm未満で本遺跡内でも細い畝間である。畝幅は80cm前後がほとんどであるが、畝間⑨-⑩間や⑫-⑬間では40cm前後、⑬-⑭間が102cmで一様ではない。畝間③が長さ7.1mで2号畑では最も長い。深さは1～7cmで3cm前後の浅い部分が多い。

地山傾斜 南東側へ低い21 / 1000

備考 6・8号溝に前出している。畝間①・②は1号畑の畝間と一部で重複している可能性がある。

3号畑(第307図 PL. 54-①)

2号畑とは87～94°の角度で交差しているが、新旧関係は不明である。8号溝が本畑畝間とほぼ同じ走行で畑区画内の南側を横切っている。2号畑に近似した幅狭な痕跡で、同溝同様に耕作痕の可能性があって明確に畝間とする根拠をもたない。

位置 北隅019-664、南隅012-666、東隅015-660、西隅017-670。

規模 畝間10本が東西9.8m、南北7.4mの範囲にある。

確認面積 62.8㎡

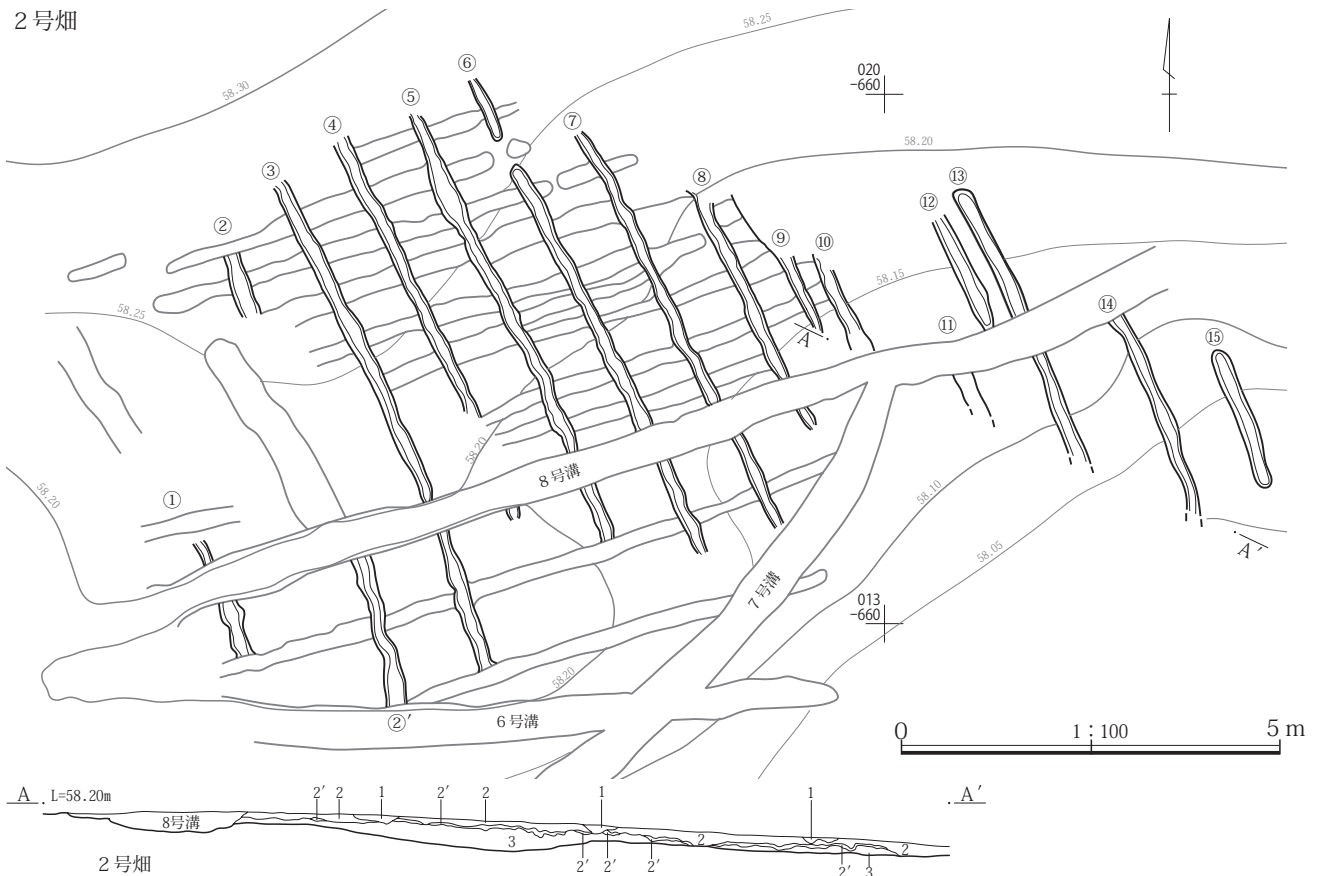
畝間方向 ②N-70° E 全体が近似した方向にある。

畝・畝間 23～30cmの畝間幅で2号畑に近い。畝幅は8号溝を境に異なり、北側は50～90cm、南側は110cm前後で広がる。畝間②が長さ8.5mで最も長い。深さは1～7cmで3cm前後の部分が多い。⑤・⑥間に斜行する畝間が見えるなど不明瞭な部分もある。

地山傾斜 南東側へ低い16 / 1000

備考 2号畑とはほぼ直角に交差しており、近接する時期の遺構と思われる。8号溝は埋没土が若干異なるが、本畑と同時存在の可能性もある。その場合8号溝の南北で異なる畑になるとと思われる。

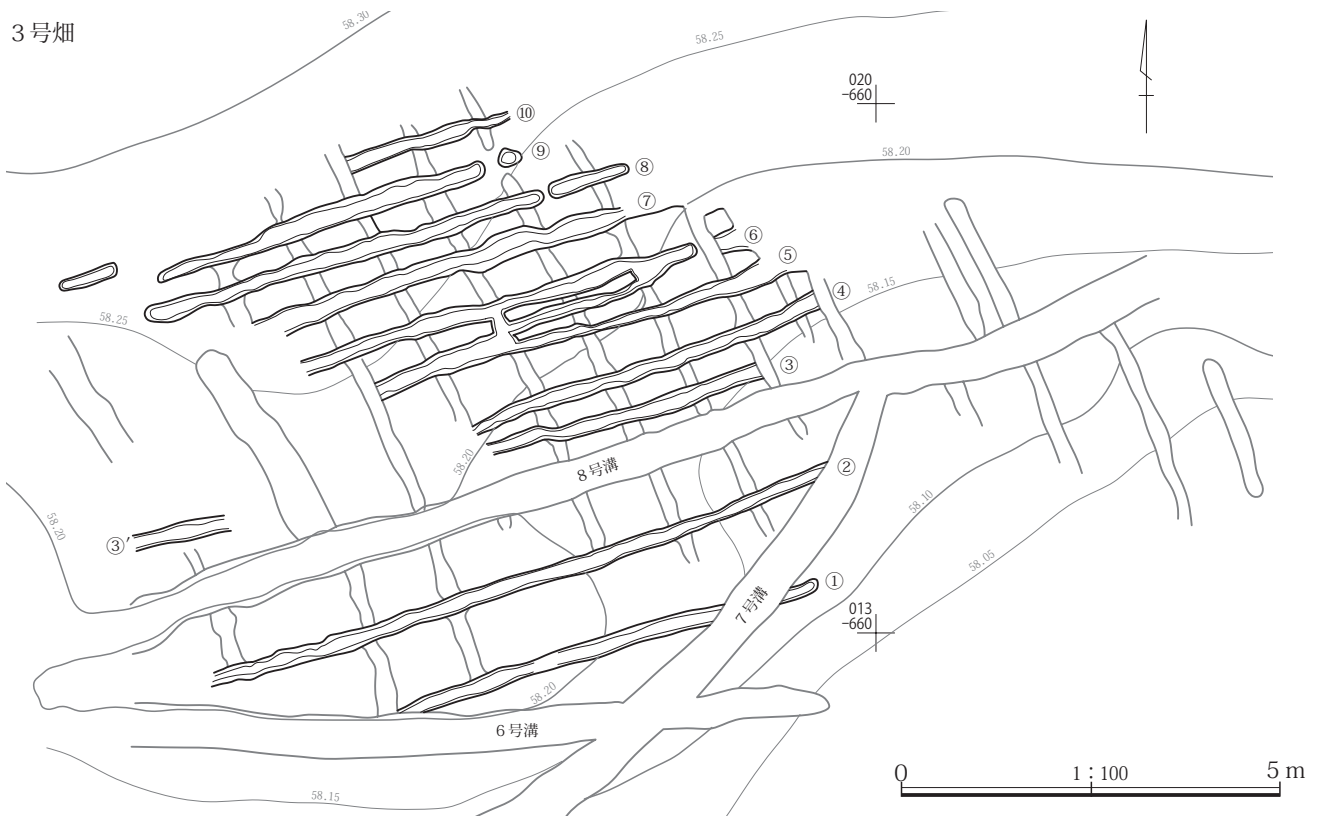
2号畑



2号畑

- 1 暗褐色土 畑畝間内の埋没土。
- 2 黄褐色土 FA泥流と思われるシルト質の洪水堆積土層。2'は泥流下に見られる黒色味の強い部分。
- 3 灰褐色土 シルト質の洪水堆積土層。

3号畑



第307図 1区2・3号畑

2区の畑

古墳時代前期から中期にかけての集落が泥流に埋没した後、2区は畑地となる。流路で削られた調査区西隅や南東隅では遺構は確認できなかったが、南側中央など集落より広範囲に畑が広がる部分もある。残存状態が良く、天地返しのような作業痕跡が確認できる部分と痕跡をわずかに残すのみの部分があり、1時期の畑ではない。畑耕作土としては土師器片の出土がやや多いのは下面に密集した集落が存在するためである。

1号畑(第308・309図 PL.53-②~④)

2区中央西寄りにある、畝の高まりを確認できる明瞭な畑である。中央付近を中世館堀の1号溝に、南側を蛇行する21号溝に削られている。南側は調査区境にかかり北隅は不明瞭だが、東西両側では畑輪郭がほぼ把握できる。Hr-F A層を挟んで比較的長い期間耕作が行われた一画のようで、新旧2面にわたる畝間を確認でき、それぞれに分けて図示し説明を加えた。

(旧畑)

4層下の畑面である畝間②が新畑に削られるが、他は新畑畝の位置に残存している。

位置 北隅031-731、南隅008-763、東隅013-758、西隅023-776。

規模 23条の畝間が南北24.2m、東西12.6mの範囲にある。新畑より北側へ広く、畝間も2条多く確認できる。

確認面積 260.2m²

畝間方向 ①7N-62° E ①N-65° E

畝・畝間 70cm前後の畝間幅、110cm前後の畝幅で比較的均質である。直線的ではなく北側に膨らむように湾曲気味となる。畝間は両端が確認できる部分が多く、②が長さ12.6cmで最も長い。畝の高さは5~16cmで12cm前後の部分が多い。

(新畑)

2層(Hr-F A混じり)上の畑面である。

位置 北隅031-769、南隅008-764、東隅013-758、西隅027-776。

規模 21条以上の畝間が南北23.1m、東西15.0mの範囲にあり、旧畑より西側に広いが東側にはやや狭い。

確認面積 254.2m²

畝間方向 N-63° E(旧畑にほぼ同じ)

畝・畝間 70cmの畝間幅、110前後の畝幅で旧畑に等しい。畝間はやや長く、畝間⑥が長さ14.8mで最も長い。深さは5~21cmで15cm前後の部分が多い。

地山傾斜 西側へ低い17/1000

備考 旧畑畝部分に新畑畝間が築かれ、畝間②を除くと旧畑畝間は削られずに残っている。新旧両畑は天地返し・サクの切り替えと呼ばれる同一畑の作業痕跡である。1号畑全体で重量で180gの土師器が出土している。

2号畑(第310図 PL.53-①)

1号畑と3号畑の間にある。ごく短い2~4条の溝状の窪みが4カ所で確認できた畑畝間痕跡と思われる遺構でブロック状のHr-F Aを含んでいる。各畝間の方向が北に近く、いずれの畝間も比較的近接した時期のものと考え、2a畑から2d畑の名称を付けた。文中ではa~d畑と呼称する。各畝間の掘り上がり形状は異なるが、c畑①-a畑③-b畑④と繋げても齟齬がなく、同一の畑となる可能性もある。

位置 北隅032-742、南隅018-742、東隅021-739、西隅025-751。

規模 同一畑であれば全体の南北長13.8m以上、東西幅8.5mの規模である。個別畑ではa畑長さ3.5m・幅4.0m、b畑長さ2.1m以上・幅2.6m、c畑長さ1.6m・幅3.8m、d畑長さ1.4m・幅4.0mのごく狭い範囲である。

畝間方向 a畑N-9° W b・c畑N-12° W d畑北側N-17° W

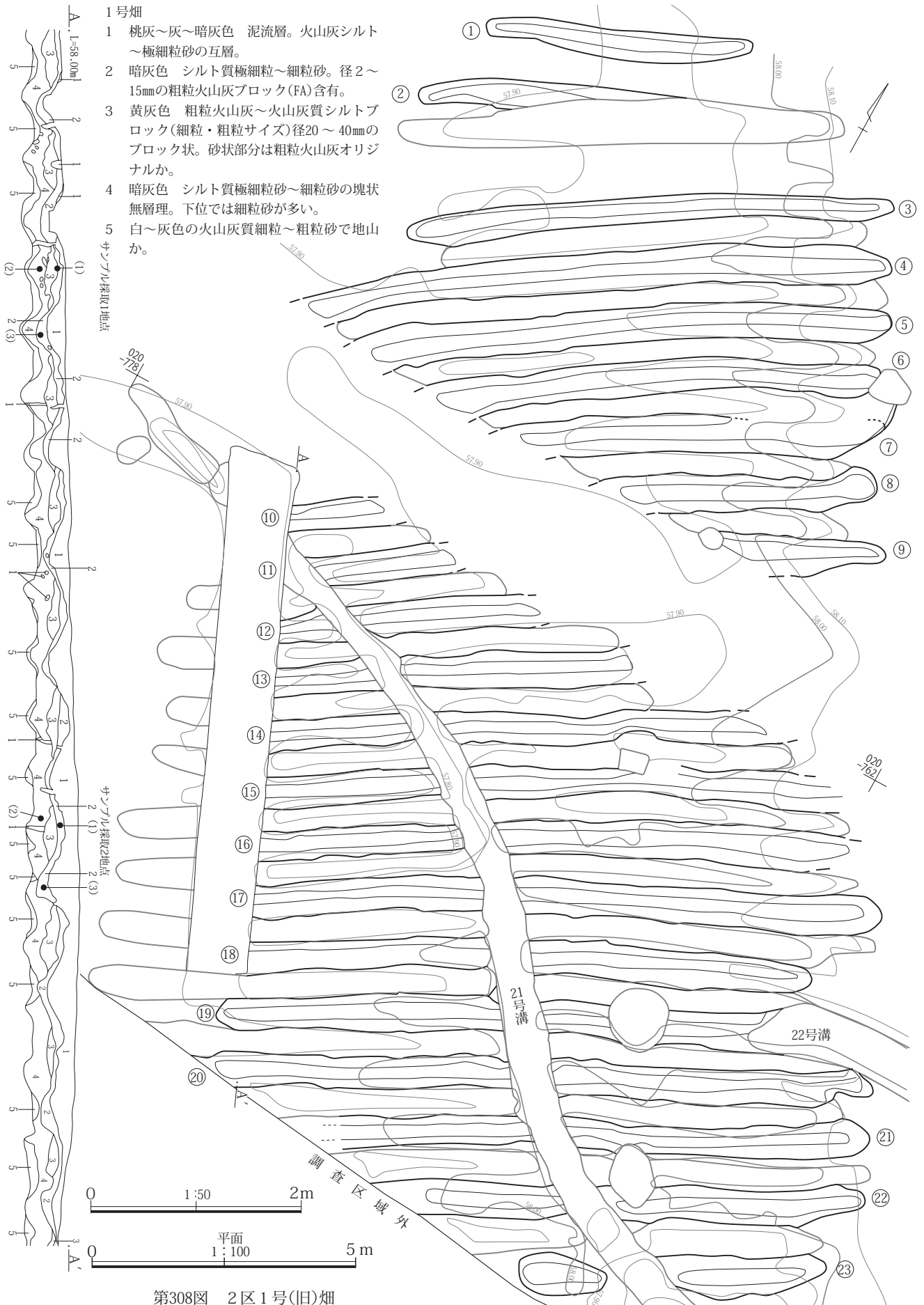
畝・畝間 畝間の形状は一樣ではない。畝間幅はa畑②・③が広く60cm前後、d畑が狭く18cm前後である。畝幅は110cm前後で比較的近似している。畝間はa畑③が長さ3.4mで最も長い。深さは10cm前後の部分が多い。

地山傾斜 南東へ低い8/1000 d畑付近は傾斜が強い。

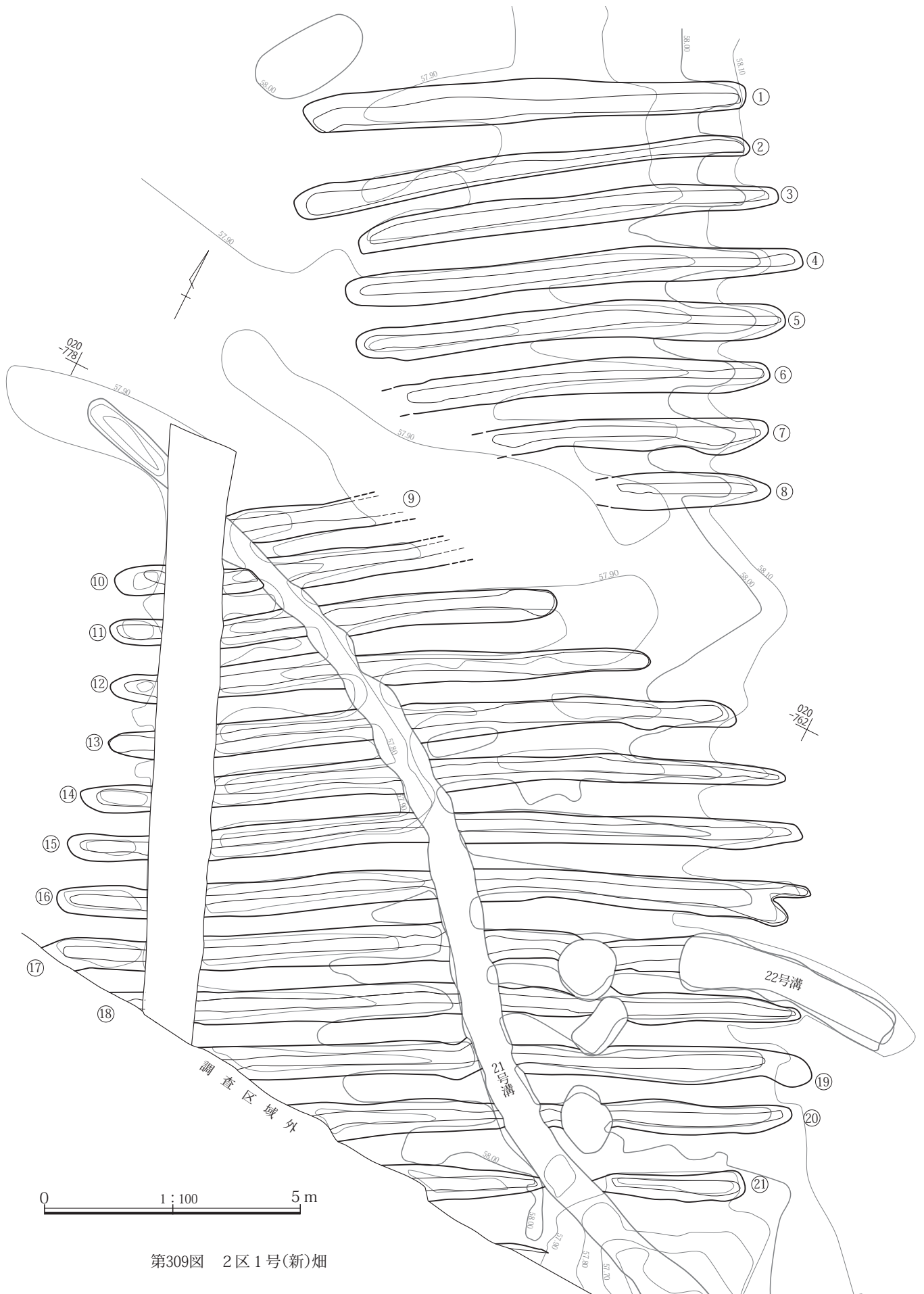
3号畑(第311図 PL.53-①・⑤)

調査区東側で確認した広範な畑でブロック状のHr-F Aを鋤き込んでいる。一部畝の高まりが残っていた。軸方向は3区の畑に近似している。北・東側は調査区境にかかる。南側は流路埋没土にかかり明瞭ではない。①~⑧は中世館堀の1号溝にかかり北側が途切れる。

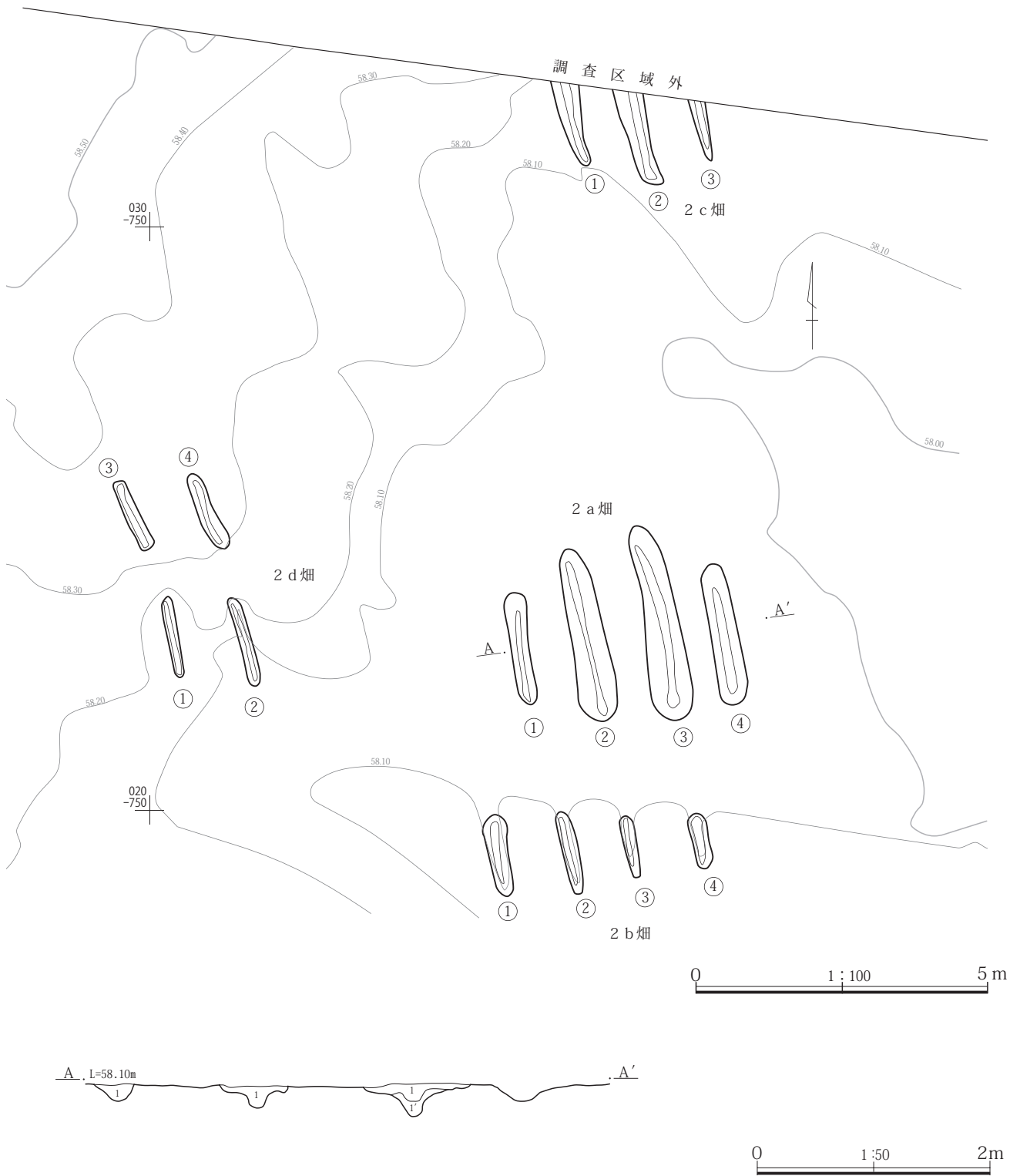
位置 北東隅032-698、南隅007-719、南東隅016-691、西隅014-736。



第308図 2区1号(旧)畑



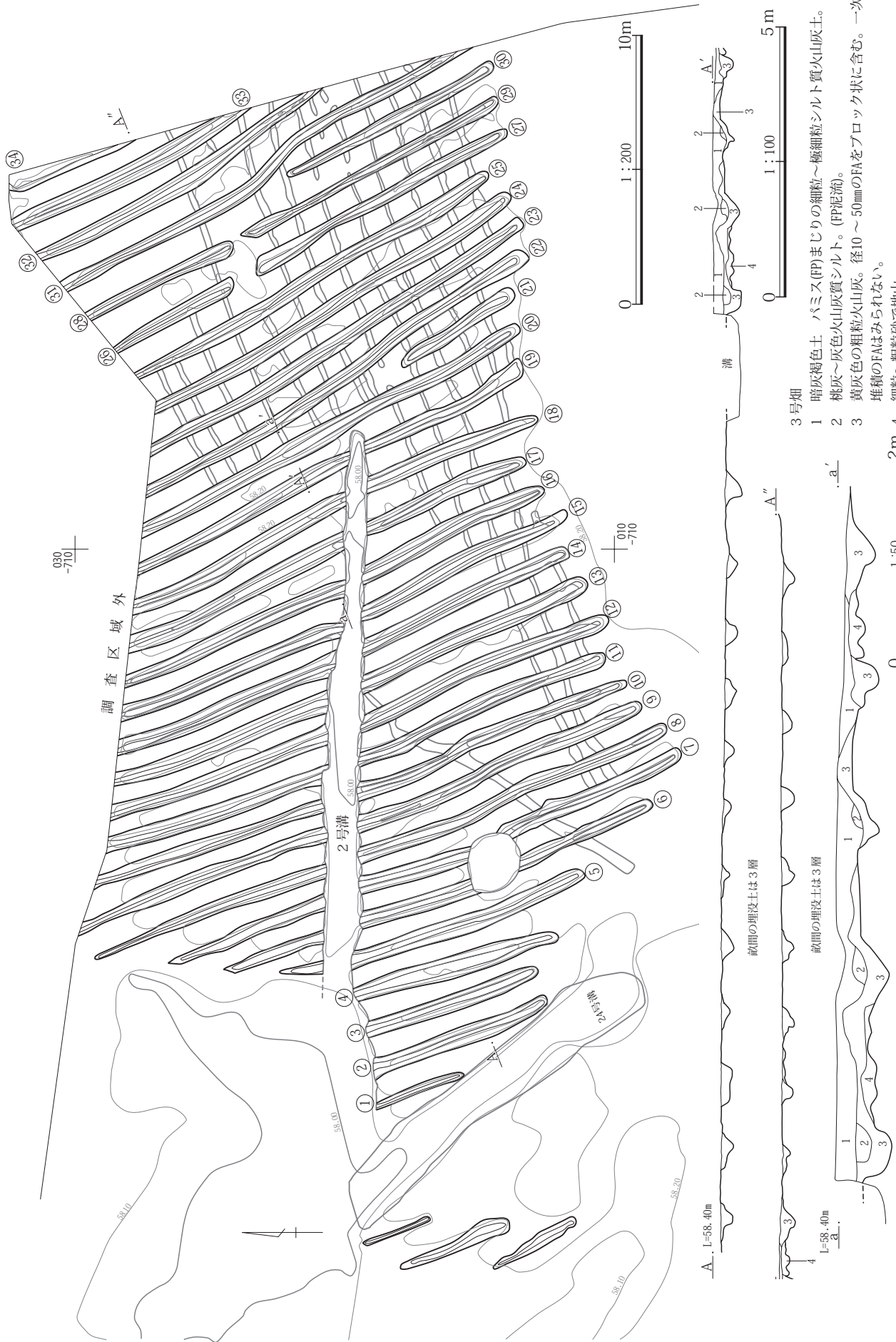
第309図 2区1号(新)畑



2a畑

- 1 灰褐色土 畑耕作土。粗粒火山灰ブロック、径10～50mmのFAブロック混じり灰色火山灰土。1層では層状にFAが重なるが、1'では明瞭でない。

第310図 2区2号畑



第311図 2区3号畑

規模 32条以上の畝間が南北長25.1m、東西幅37.1mの範囲にある。

確認面積 680.9㎡

畝間方向 ⑧N-22° W ⑭N-31° W

畝・畝間 ⑳・㉑のように途中で止まり、東隣の畝間が隙間を避けるように蛇行しており、畝間の設定が西側から行われたことが分かる。㉒・㉓は南側㉔・㉕へ続くのか、掘り上がりどおり地山の高まり部分で途切れるか判断できなかった。畝間幅は70cm前後、畝幅120cm前後である。畝間⑧が長さ22.9cmで最も長い。⑮・⑰の東側など畝の残存する部分では高さ30cm前後あり、畝間のみの部分でも15cm前後の深さがある。

地山傾斜 波打つような凹凸があるが、全体では南側へ低い3 / 1000前後の傾斜となり平坦面に近い。

備考 3・4号畑併せて重量で330gの土師器を出土している。細かな屈曲や方向など畝間の形状は一致していない部分があるが、全体での違和感はなく1時期の畑であろう。

4号畑(第312図 PL.53-⑤)

3号畑に直行するような畝間方向の、同畑に後出すると調査段階で確認した畑である。

位置 北隅027-703、南隅010-719、東隅017-691、西隅010-719。

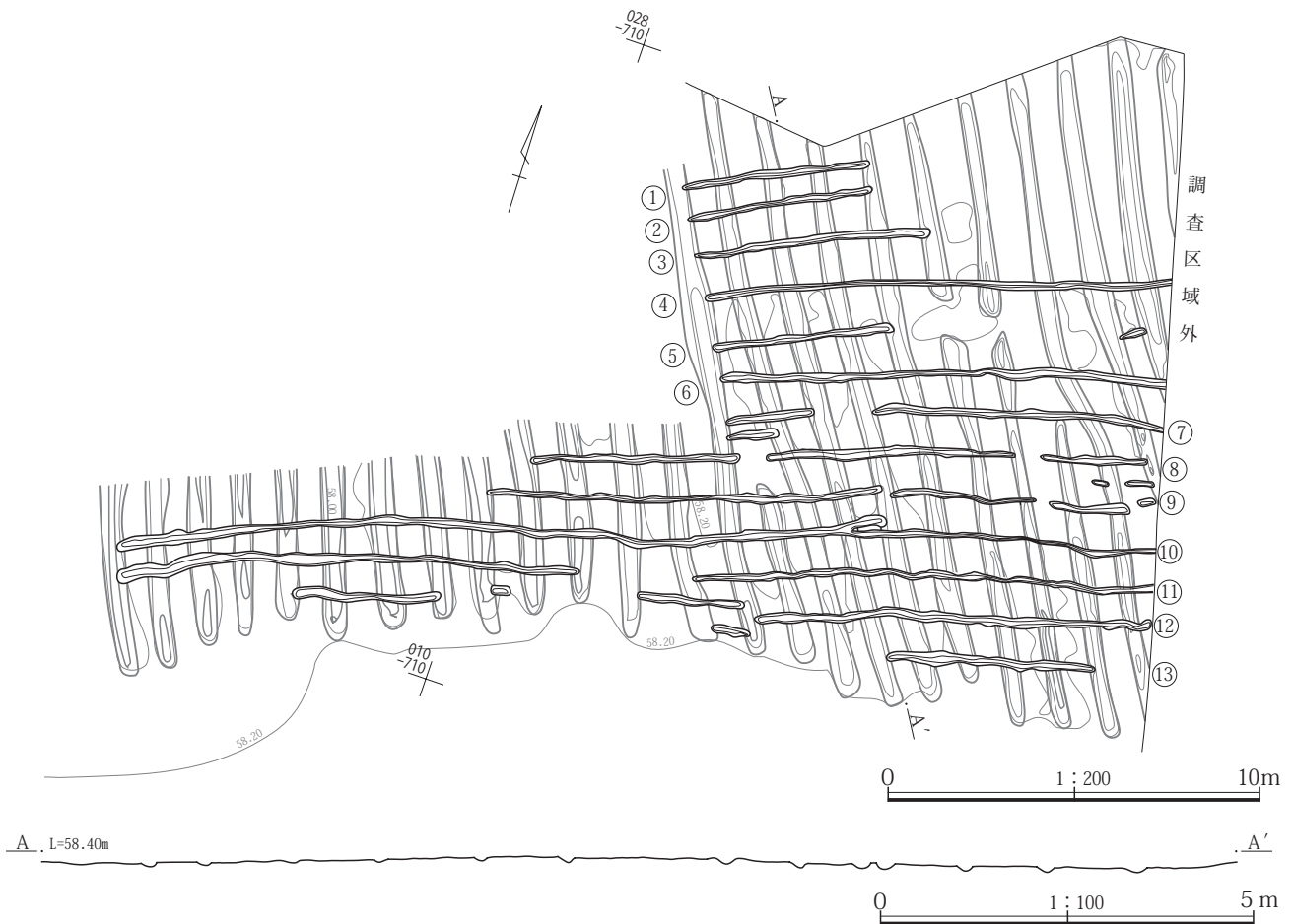
規模 13条以上の畝間が東西長25.1m以上、南北幅9.5mの範囲にある。北側の畝間は西隅が揃っており、畑西隅が捉えられているようだ。鍵の手状に畑境が巡る変則的な畑となる可能性がある。

確認面積 221.9㎡

畝間方向 ⑥N-72° E ③N-65° E

畝・畝間 畝は確認できない。畝間はやや蛇行気味で、幅は22～41cmと耕作痕のように狭いが、畝幅は110cm前後ある。畝間⑩が長さ28mで最も長い。深さは2～26cmで8cm前後の部分が多い。

備考 ⑧・⑨間等の畝下に相当する位置に帯状の窪みが無断に確認できる部分があり、耕作痕と思われるが4号畑に前出する畝間があったことも想定できる。



第312図 2区4号畑

3-2区の畑

調査区中央付近で確認し、1～4号畑とした重複する畑である。明瞭な鍵層がなく切り合い前後関係把握の根拠に欠く部分があるが、比較的短い時期に畝間の位置を動かしながら畑耕作を続けた痕跡であろう。第315図の土師器甕は1～3号畑調査時の出土遺物である。3区畑は他に出土遺物がないが、唯一の土器が図示に耐える古墳時代土師器甕であった。

他に北西隅の5号畑と3面調査時に確認した6号畑がある。

1号畑(第313図 PL.54-②)

集落の東側で確認した南北方向に畝間のある畑である。南北両側は調査区境となり、東西両側は畝間外端まで確認できたようだ。重複の激しい中央付近では明瞭にできなかったが、2面調査時に1面の畝間と連続する変色部分を確認し、薄線で表現した。同一の畝間と考えるが、北側の畝間は蛇行が大きいなど疑問点も残る。また、畝間⑭以西と⑥以東では規模形状が異なり別の畑となる可能性があるため、以西のa畑、以東のb畑に分けて説明する部分がある。

位置 (a畑)北隅046-880、南隅024-870、東隅027-866、西隅038-881。

規模 a畑は7条以上の畝間が南北長25.1m、東西幅7.8mの範囲にある。b畑は4条以上の畝間が長さ21.3m、幅4.9mの範囲で確認できる。

確認面積 a畑193.4㎡

畝間方向 N-29°W

畝・畝間 a畑では畝間幅22～53cmで30cm前後の部分が多いが、b畑は畝間⑱の幅73cmを最大に、幅太の部分が多い。a畑畝幅は110cm前後で、b畑は後出する2号溝に沿うように蛇行が大きく一様ではないが120～140cmの部分が多い。a畑は畝間⑤・⑬を繋いだ長さ25.4m以上を測る。深さは6cm前後の部分が多い。

地山傾斜 捻じれるような歪みがあるが、全体ではおおよそ南側へ低い4/1000

備考 a畑は平安時代の1号住居に、b畑は2号溝に前出している。⑭は北側へ分岐するような部分があり、他の畑面が存在する可能性もある。

2号畑(第314図)

1面調査時に確認した東西方向に畝間を築いた畑で1号畑に後出する。1号畑同様中央付近で不明瞭になっている。東隅は確認できた範囲が直線的にならび、畑の隅を把握できたようだ。1号畑の範囲内で確認されていて、2区3・4号畑と同一の状況である。畝間⑳と㉑の間に隙間があってここを境に畝幅が畑北側と南側で異なり、さらに南隅付近では確認できた畝間が密集しており、2時期以上の畑であることが想定できる。

位置 北隅042-877、南東隅026-868、西隅036-881。

規模 26条以上の畝間が東西長9.6m、南北幅20.4mの範囲にある。

確認面積 147.2㎡

畝間方向 ⑱N-56°E ㉑N-52°E

畝・畝間 畝間幅は22～40cmで狭いが、⑦・⑬・⑯のように南側にやや太い部分がある。畝幅は一様でなく南側で70～90cm、北側で110cm前後の部分が多い。畝間㉑が長さ9.4mで最も長い。深さは1～14cmで5cm前後の部分が多い。畝間底面は1号畑畝間より5cm前後高い位置にある。

備考 畝間は幅に対して深度に富む部分があり、耕作痕が含まれている可能性がある。

3号畑(第315図 PL.54-④)

2面調査時に確認できた畑で、1号畑畝下から本畑の畝間が確認されている。1号畑・2号畑で不明瞭だった部分がこの畑にあたるようだ。比較的残存状態は良いのだが、畝間各隅が確認できたは思えない。1号畑の畝間窪み・変色部分として残る部分を薄線で示した。

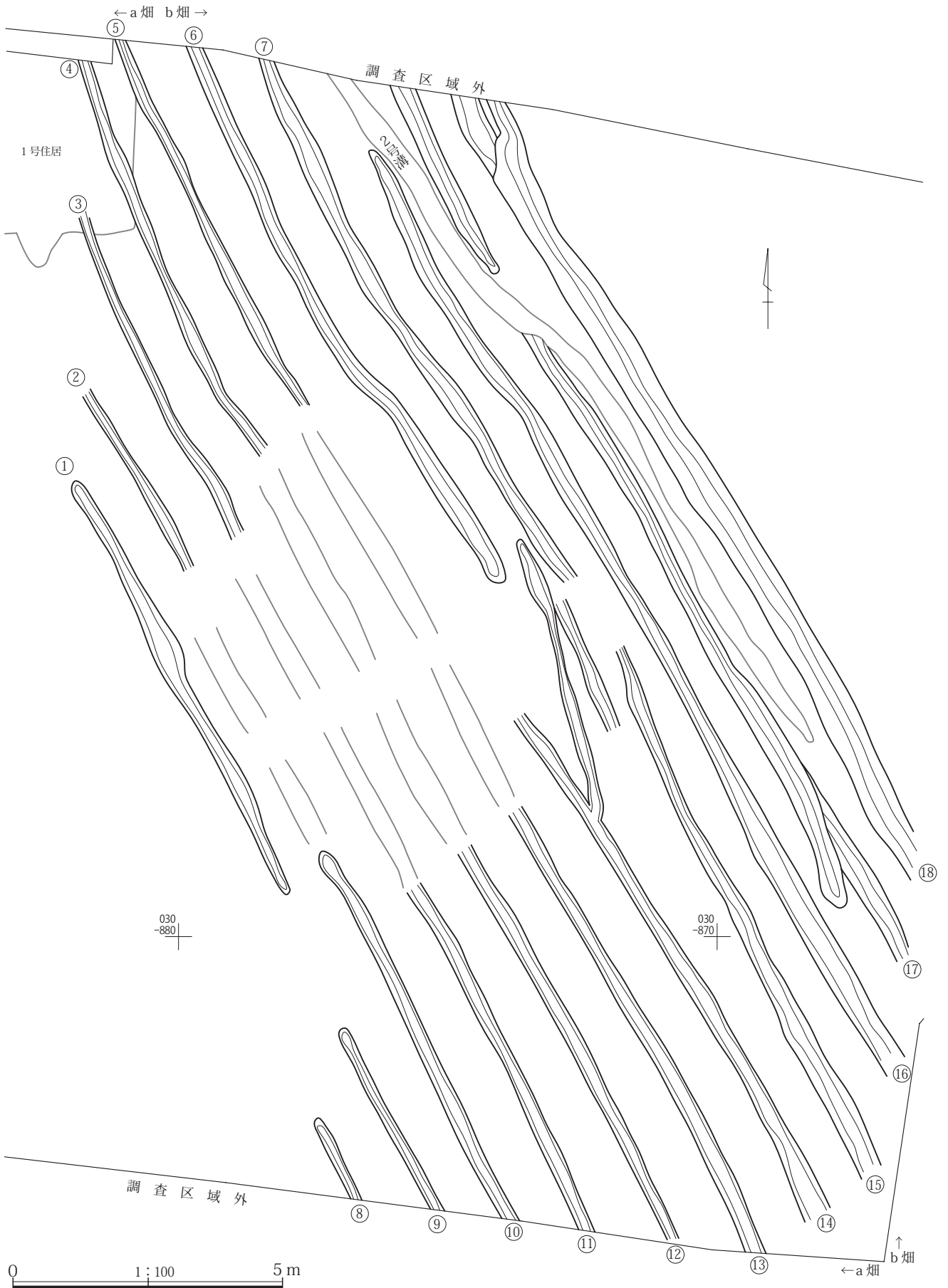
位置 北隅041-878、南東隅030-868、西隅038-881。

規模 8本の畝間が、南北長14.9m、東西幅9.0mの範囲にある。1号畑の範囲内である。

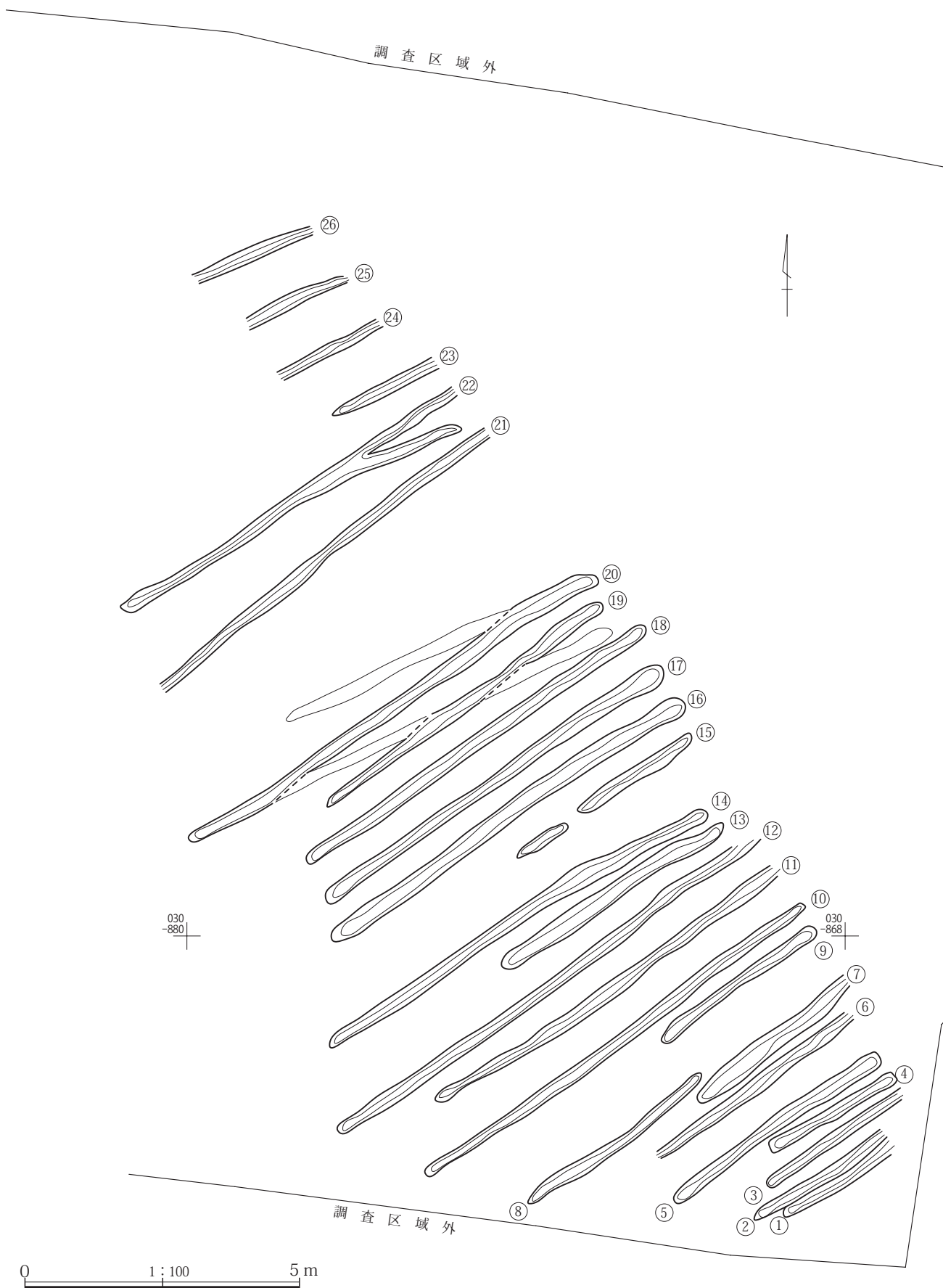
確認面積 97.3㎡ **畝間方向** N-28°W

畝・畝間 比較的直線的な畝間だが⑥以東は東側に膨らむように湾曲している。30～49cmの畝間幅で畝幅は110cm前後である。畝間⑦が長さ12.1m以上で最も長い。深さは2～25cmで15cm前後の部分が多い。

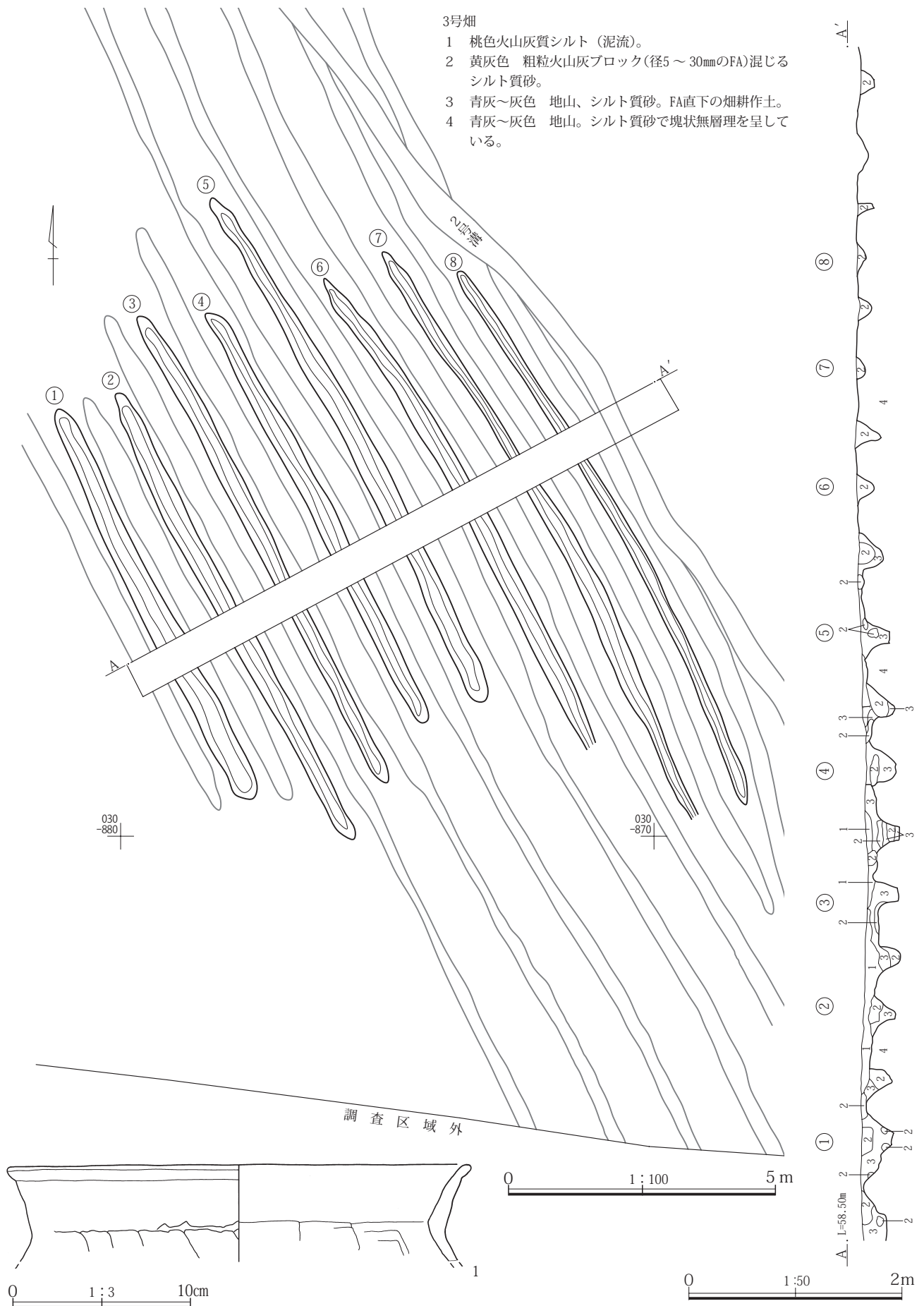
備考 1号畑畝間の間を充填するように掘られていて、1号畑は本畑のサク替え・天地返しのような作業後の畑面になると思われる。



第313图 3-2区1号畑



第314図 3-2区2号畑



第315図 3-2区3号畑および出土遺物

4号畑(第316図 PL. 54-⑤)

1面2号畑に前出し畝間方向の近似した畑であるが、3号畑が1号畑の畝相当部分に規則的に畝間が配置されるのとは異なり、2号畑畝間下で確認されるものがある。畝間②⑦⑧は2号畑の畝間⑤⑩⑫にそれぞれ重複している部分が多い。

位置 北隅033-869、南隅024-871、東隅030-866、西隅030-874。

規模 10条の畝間が東西長7.8m、南北幅7.3mの範囲にある。2号畑の範囲内である。

確認面積 42.4㎡ **畝間方向** N-59° E

畝・畝間 直線的な畝間で幅25～41cmと細く、畝幅も65～100cm前後でやや狭い。2号畑に近似した規模である。畝間の長さは近似しているが⑦が長さ7.4m以上で最も長い。深さは5cm前後の部分が多い。

備考 畝間底面レベルは2号畑より10cm前後あるが、2号畑調査時の耕作痕部分が含まれる可能性がある。

5号畑(第316図 PL. 54-⑥)

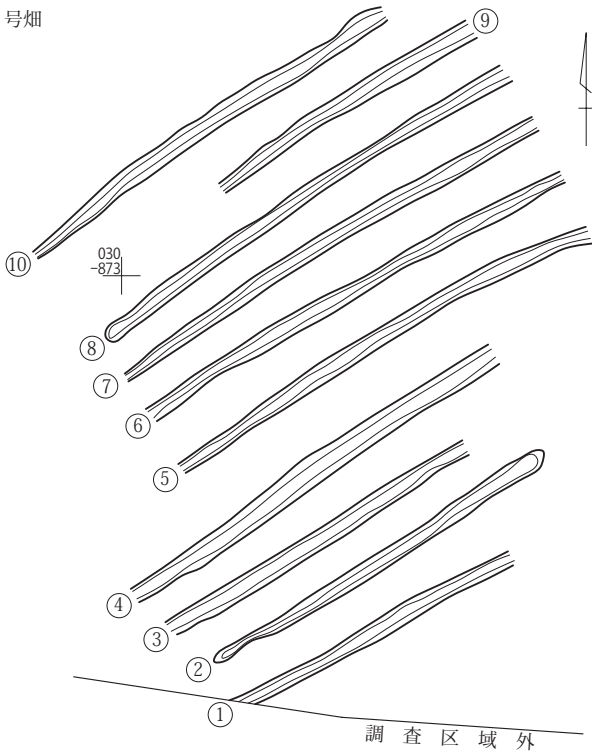
調査区北西隅付近にある畑で、1面では土坑など中世別遺構があった地点である。1号畑等が確認できた面より斜面を隔てて30cm前後高い位置にある。北・西側は調査区境で東側は斜面に達し、南側は各畝間隔のようだが明瞭ではない。1号・3号畑と畝間方向が近似し、同時期の遺構と考えられる。

位置 北隅048-889、南隅033-886、東隅045-883、西隅040-889。

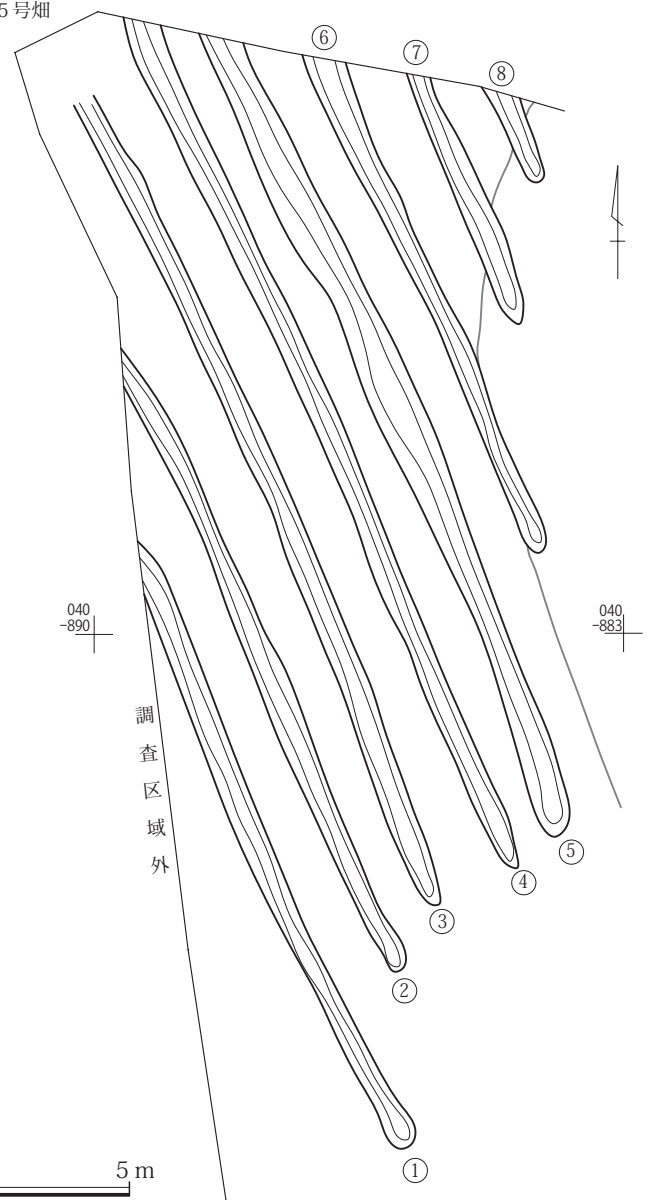
規模 8条の畝間が南北長15.2m、東西幅7.6mの範囲にある。

確認面積 67.6㎡ **畝間方向** N-25° W

4号畑



5号畑



第316図 3-2区4・5号畑

畝・畝間 畝間幅は⑤のみ68cmで広いが、他は45cm前後で同様である。畝幅も100cm前後でほぼ一样になる。畝間④が長さ12.3cmで最も長い。深さは15cm前後の部分が多い。

地山傾斜 東側へ低い16 / 1000

備考 古墳時代の6号住居に後出している。

6号畑(第317図)

1～5号畑に前出する集落(4～6号住居)と同じ3面で確認した遺構で、これら住居に前出し、As-Cの混じる黒色土上の水田には後出する畑である。変色部分として確認したもので、畝間の深さなどは分かっていない。畝間方向は比較的近似するが、畝幅・畝間幅など一様でなく複数の畑と思われるが、後出する畑に6号畑と近似した畝方向の畑は調査されていない。

北隅にある①～③は畝間西隅が確認される畑でa畑とした。④は幅80cmの畑境のような隙間を隔てて③の西側へ続く隣接畑の一部と思われる。a畑の南にあり畝幅の広い⑤～⑨をb畑、その南の⑩～⑮をc畑とした。東隅

にある⑯～⑱をd畑とした。

位置 全体では北隅047-884、南隅028-878、東隅034-860、西隅841-889の範囲にある。

規模 b畑は東西長18.6m、南北幅7.4mで最も規模が大きく、次いでc畑は東西長12.5m以上の規模がある。

確認面積 a畑30.5㎡、b畑127.5㎡、c畑45.5㎡、d畑20.1㎡

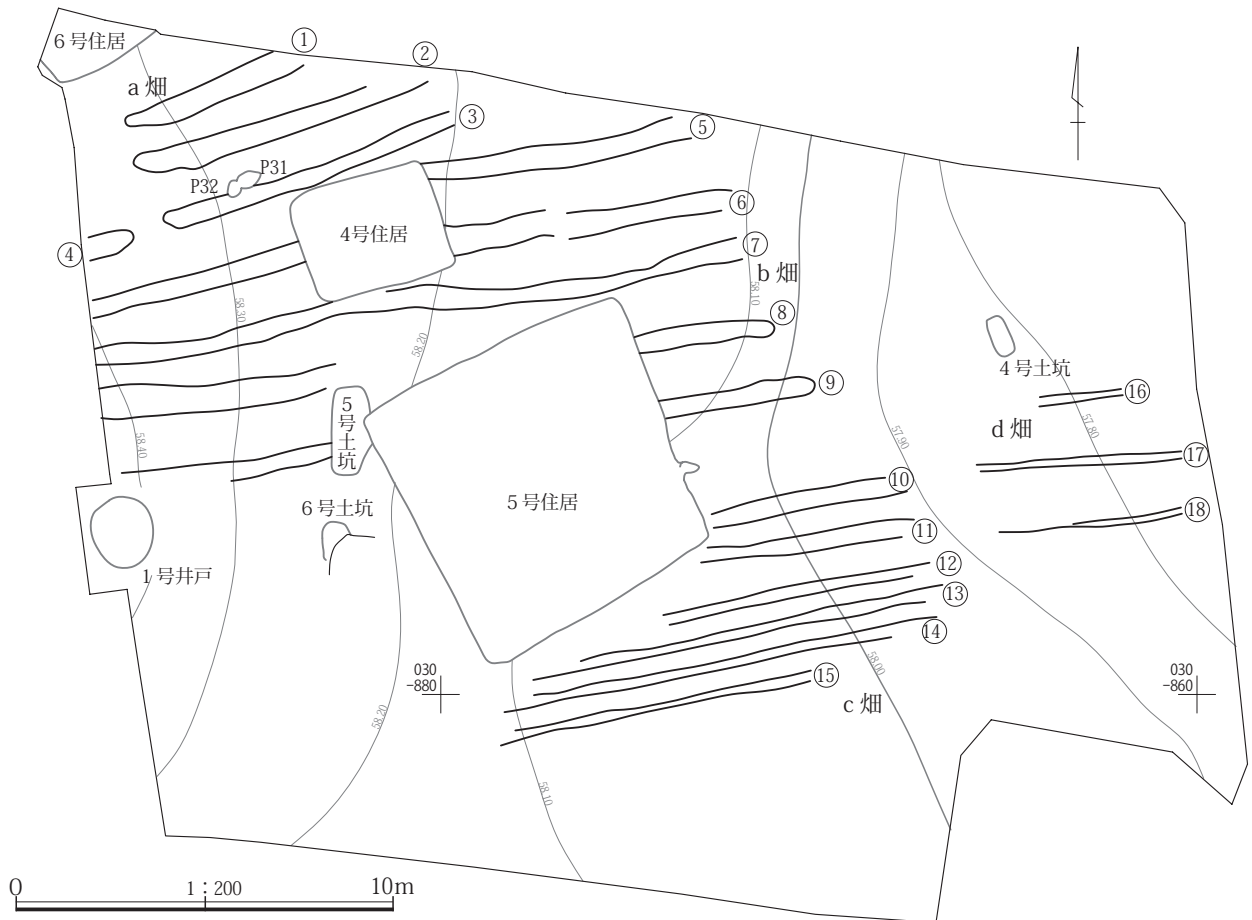
畝間方向 a畑N-65° E b畑N-76° E

c畑N-76° E d畑N-85° E

畝・畝間 a畑は畝間幅52～73cm、畝幅150cmで広い。b畑も畝間幅59～82cm、畝幅180cmでa畑以上に広い。一部で蛇行している。③は長さ17.5mで6号畑中最も長い。c畑南側のみ畝幅70cm前後で狭くなっている。d畑は畝間幅は6号畑中最も狭いがb畑と近似した畝幅170cm前後である。

地山傾斜 東側へ低い22 / 1000

備考 畝間方向からb・c畑は同一の畑となる可能性がある。c畑で畝幅が短いのは重複する畝間があるか耕作痕が見えているものと思われる。



第317図 3-2区6号畑

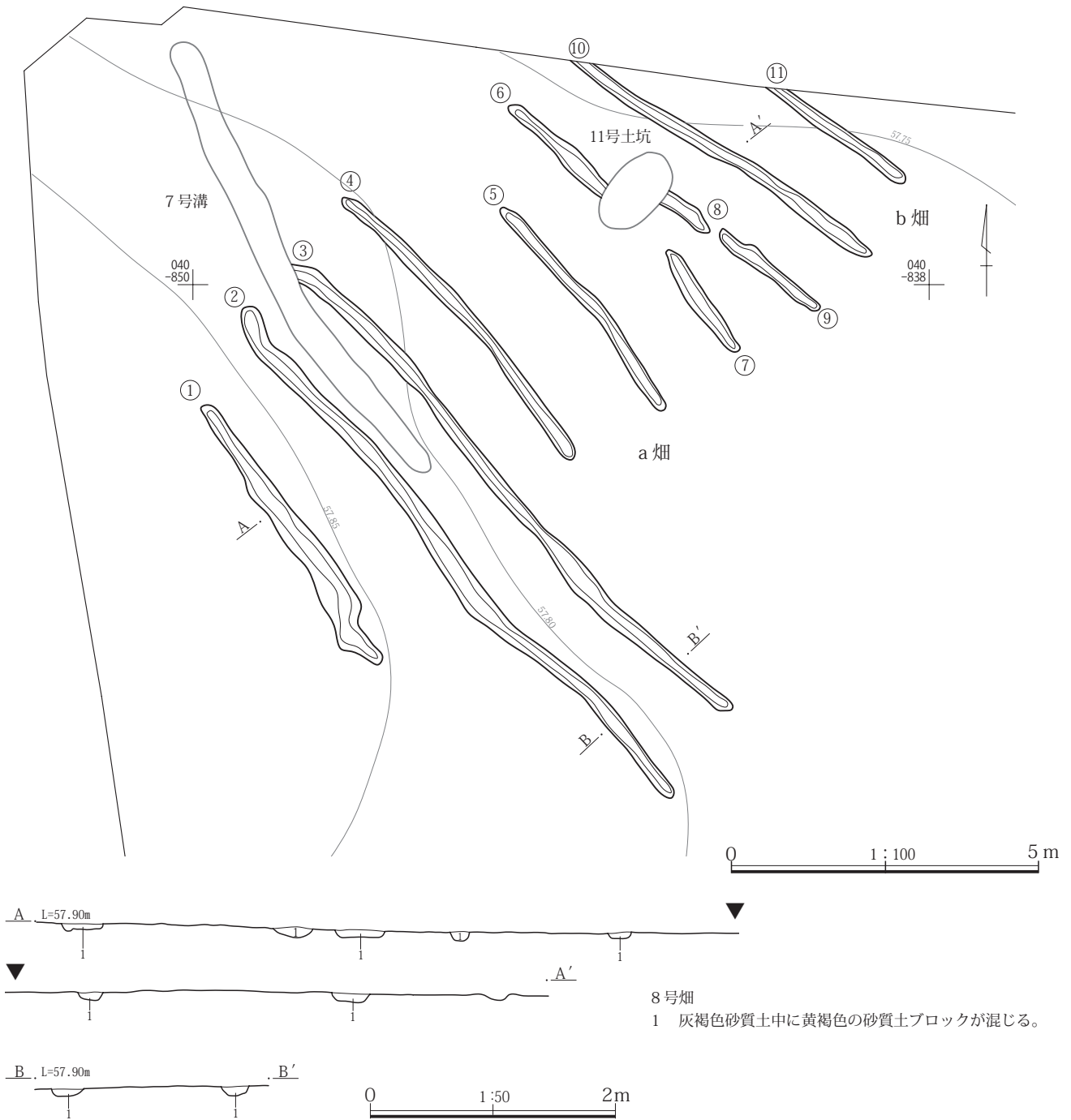
3-1区の畑

本遺跡で唯一A s - B下の畑が確認された3-1区であるが、泥流上の畑は確認できなかった。また、泥流下の集落もなく、比較的遺構の少ない一画であるがC混土上の明瞭な水田が確認されている。その水田上で確認された平行する溝状痕跡である。調査工程の中で設定した調査区南側の搬出路境付近で齟齬が生じている。北西隅を8号畑、中央を9号畑、東隅を10号畑とした。

8号畑(第318図)

調査区北西隅付近で確認されたもので、畝間の痕跡が耕作痕なのか明確に区別はできない。北側は調査区域外となる。走行方向に差があり2枚の畑跡と思われ南西側の①~⑦をa畑、北東側の⑧~⑪をb畑とした。

位置 a畑は⑥・⑦が同一畝間の可能性があり、6条以上の畝間が北隅041-847、南隅031-842、東隅039-841、西隅038-849の範囲にある。b畑は3条の畝間が



第318図 3-1区8号畑

南東隅139-839、西隅042-844の範囲にある。

規模 a畑長さ10.5m、幅7.9m、b畑長さ5.8m、幅2.8mを測る。

確認面積 a畑55.1㎡、b畑16.6㎡

畝間方向 a畑N-41° W、b畑N-56° W

畝・畝間 a畑は蛇行が多い。畝間の長さはa畑では②・③が10mを越え、他の5m前後の畝より突出して長い。ただし南東側はやや屈曲し、方向はb畑に近似している。畝幅は①②間や④⑤間で160cm前後と長くなるが、130cm前後の部分が多い。畝間幅①～③は45cm前後だが、④以东は30cm前後で細くなっている。畝間の深さは4～6cmでほぼ一様である。

b畑は直線的で⑩が残存部分で5.8mを測る。畝幅は130cm前後でa畑に近似する。

地山傾斜 北東側へ低い8 / 1000

備考 北西側畝端部は不揃いながら近似した位置にあり畑輪郭を把握できたようだ。南東側隅も並んでいて畑輪郭のように見えるが、②・③が突出し北西隅からの長さが5mあまりと短く、疑問点が多い。

9号畑(第319図)

調査区中央南側で確認した。調査工程上の調査区境を挟んで畝間がずれ、走行方向も一様でなく2時期以上の畑となる可能性がある。畝③と⑩は直線的で、同一の畝間と考え、①～③および⑩・⑪をa畑とした。④～⑧をb畑としたが、⑨はどちらに入るか判断できなかった。b畑は8号畑と同じ埋没土である。

位置 a畑は③と⑩が同一で4条以上の畝間を確認し、北隅が座標値036-936、南隅が019-931になる。b畑は6条以上の畝間を確認し、北東隅025-933、西隅025-941になる。

規模 a畑は南北長17m以上、東西幅約5m分が確認できる。b畑は南北長3.6m、東西幅7.7mの範囲である。

確認面積 a畑53.3㎡、b畑19.4㎡

畝間方向 a畑N-5° W、b畑N-9° E。

畝・畝間 畝幅はa畑で160cm前後、b畑で140cm前後となる。畝間幅は⑧～⑩で25cm前後、他は30～36cmを測る。畝間の長さは、a畑で②が11.5m、③と⑩を繋げた畝間が15.6mを測る。b畑は⑧が3.9mで最も長い。畝間の深さは2～5cmでa畑のほうがやや深めである。

地山傾斜 南側へ低い4 / 1000

備考 方向が北側から大きく振れない畑は中世を除くと4-1区4号畑に類例があり、水田上の畝間や耕作痕の特徴である。

10号畑(第320図 PL.54-⑧)

調査区東側で確認した。調査工程上の調査区境を挟んで畝間の様相が異なり、不明瞭な畑である。畝間と耕作痕が混在するか、2時期以上の畑面になると思われる。走行方向は8号畑に近い。北側①～④の隅部分の各畝間縁部が揃って北西隅を把握できa畑とした8号畑と同じ埋没土である。南側は細かな耕作痕のような窪みが多数あって不明瞭で全体をb畑とした。

位置 20条以上の畝間が北隅038-820、南隅020-824、東隅023-816、西隅024-828の範囲にある。

規模 ②が①から繋がる連続する畝間になりそうで、a畑は長さ15.6m、幅6.3mを測る。b畑は幅10.6mで北側は不明、南側は調査区境となる。

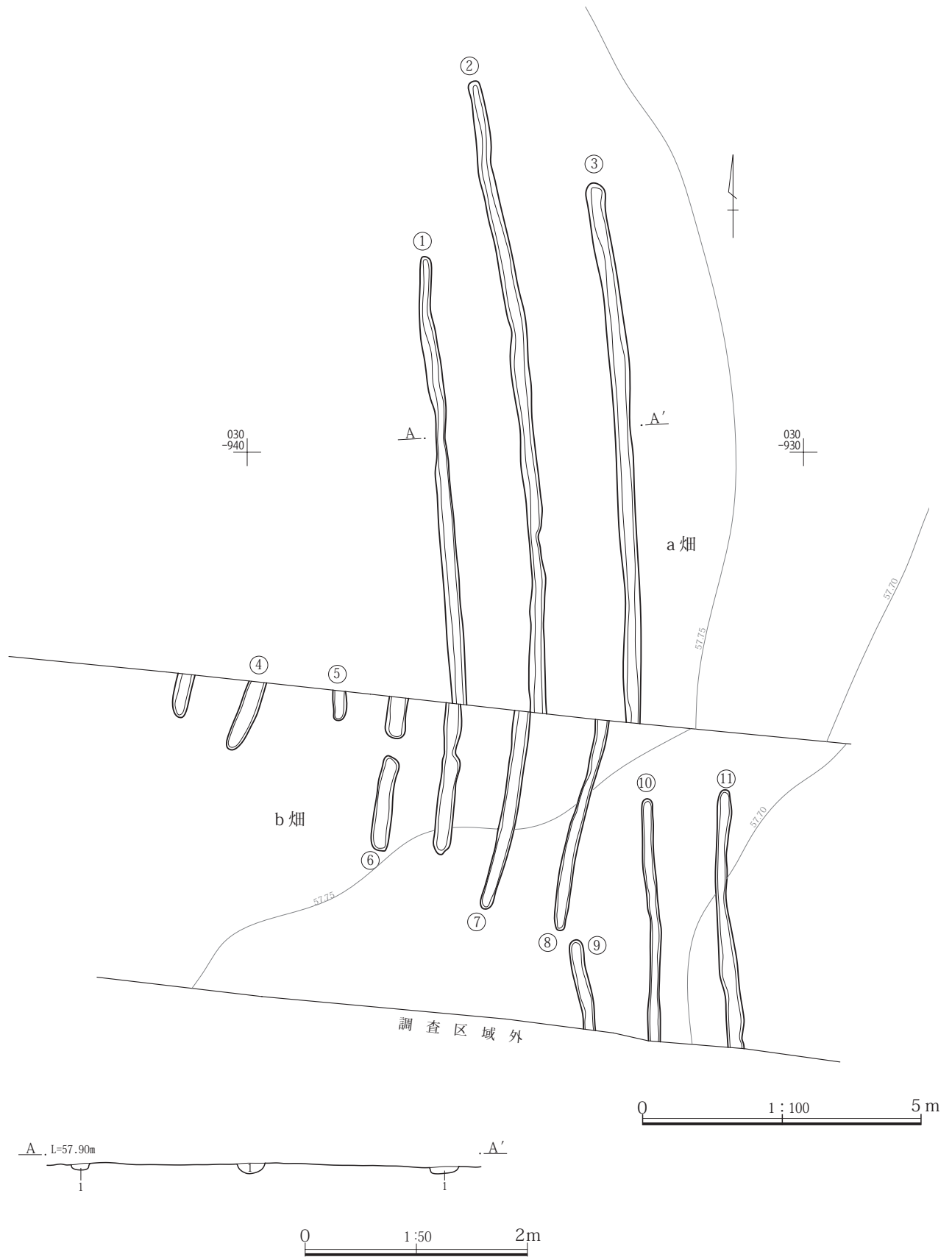
確認面積 a畑68.9㎡、b畑64.2㎡

畝間方向 a畑③N-38° W、b畑N-36° W前後。

畝・畝間 畝間の長さは、①が9.7mで②へ繋がるなら15.6mになる。b畑では⑩が5.8mあり、北側の窪みを加えると6.8mになる。畝幅はa畑で150～205cmと幅広である。この間隔をb畑②以西にあてはめると⑩・⑬・⑯が繋がるように見える。畝間の深さは1～8cmで3cm前後の部分が多い。

地山傾斜 南東側へ低い18 / 1000

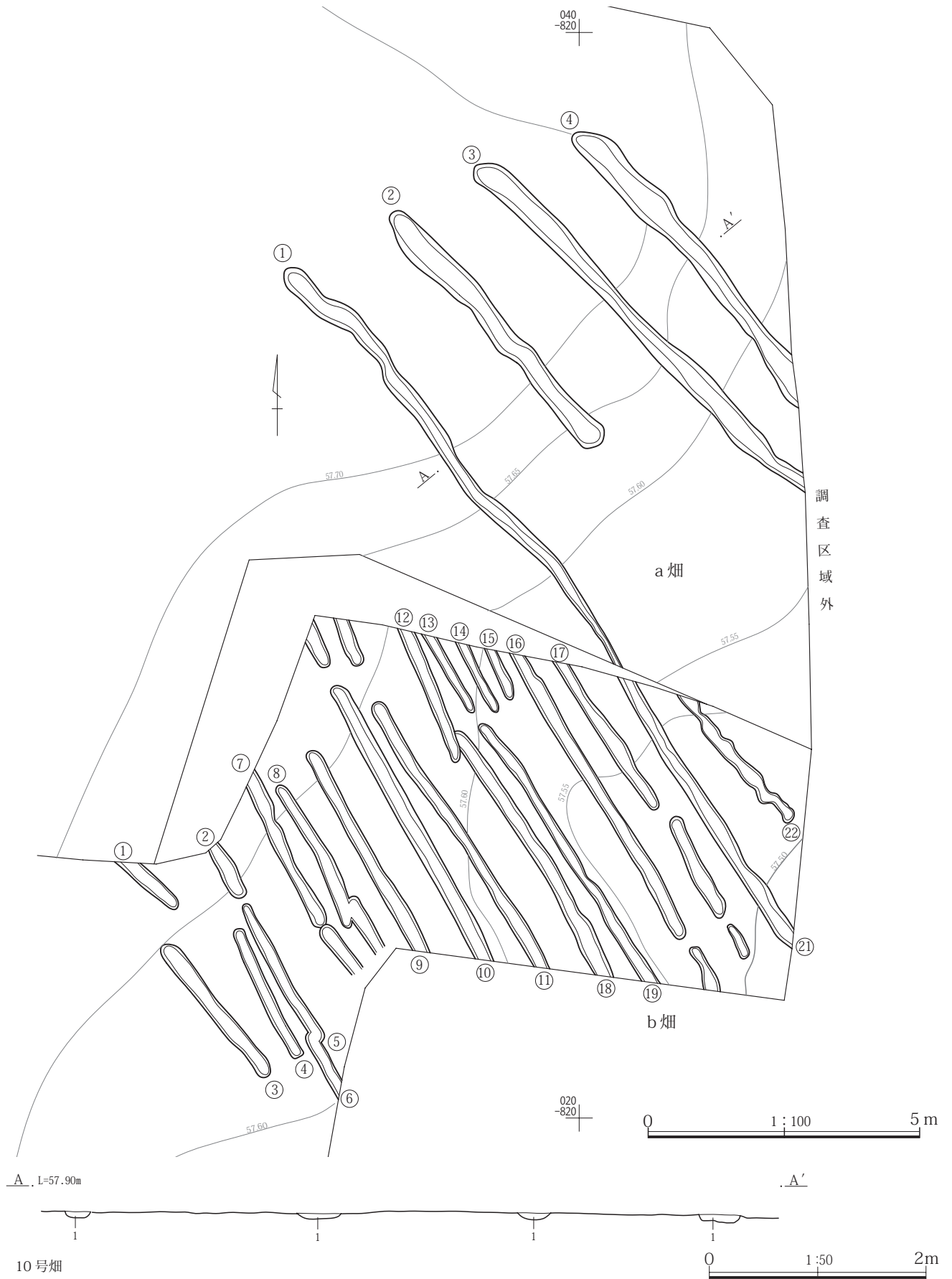
備考 ⑬～⑯の耕作痕状の窪み、⑪・⑰の方向が西へ振れる畝間が別があり、3時期以上の畑が想定できる。



9 a号畑

1 灰褐色砂質土中の黄褐色の砂質土ブロックが混じる。

第319図 3-1区9号畑



調査区域外

a畑

b畑

A, L=57.90m

A'

10号畑

1 灰褐色砂質土中の黄褐色の砂質土ブロックが混じる。

第320図 3-1区10号畑

4区の畑

第2面(泥流上)とした調査面中央付近から、畝間埋没土にH r - F Aを不均等に含む広い畑があった。畝間埋没土はH r - F A降下後の耕作土で、畝もH r - F A降下後に作られたと判断できこの畑を1号畑とした。1号畑の東西両隣に畝間方向を違える畑があり、東側を2号畑・西側を3号畑とした。畑調査時に多量の遺物を出し図示した2点を第324図に示した。古墳時代の須恵器杯蓋2は本遺跡では数少ない遺物で他にも須恵器の出土が多かった。

この他に水田上に残る畝間状の痕跡を4号畑とした。

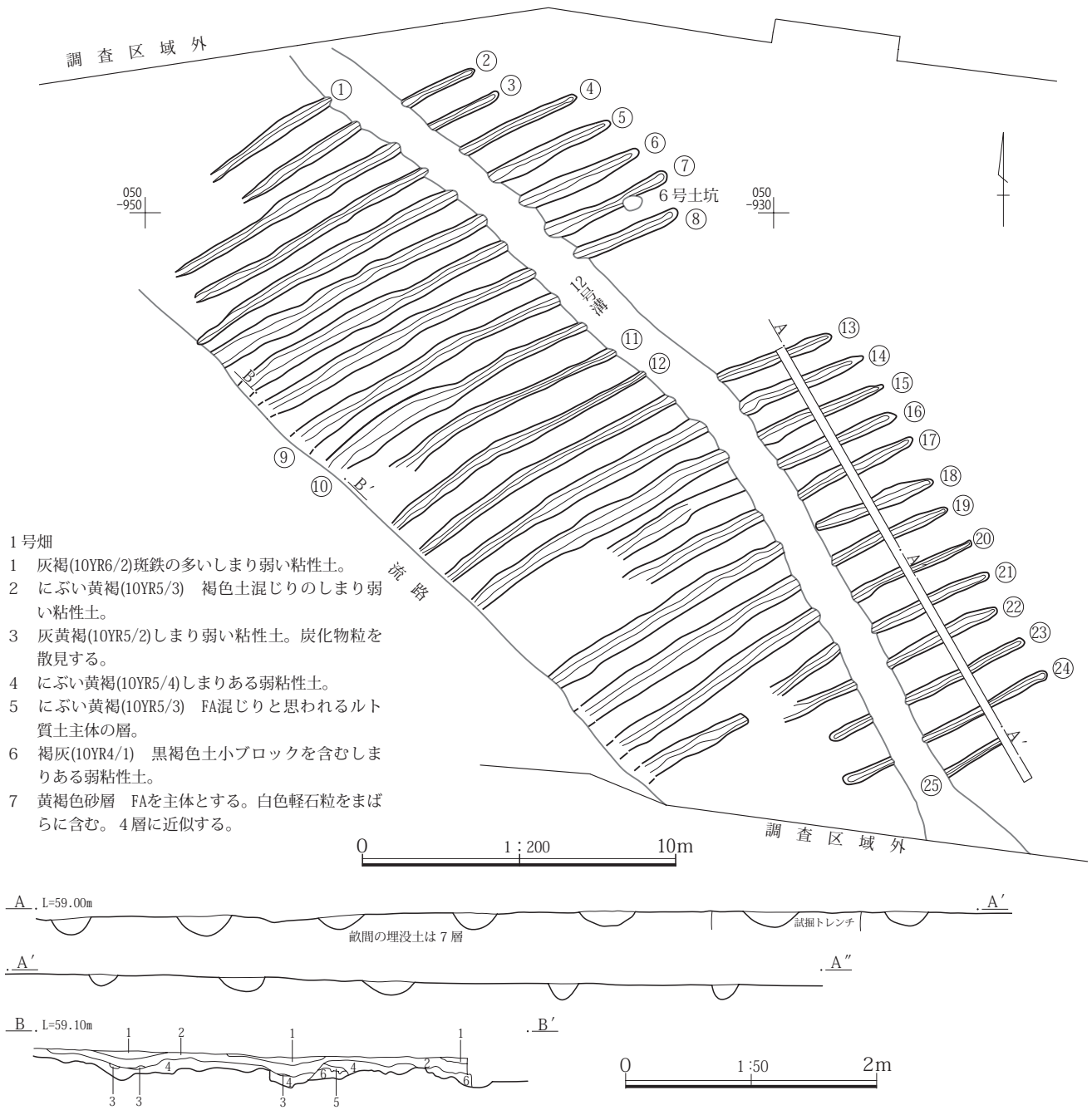
1号畑(第321図 PL. 52-②)

南西側を流路で削られているが、北東側は畑端部を明瞭に把握できる。北西側・南東側は徐々に残存状態が悪くなり、畑の輪郭を明らかにできなかった。平安時代の遺物を出土する12号溝が後出する。

位置 北隅052-910、南隅031-927、東隅035-921、西隅048-949。

規模 25条の畝間を確認した。東西長は17m以上、南北幅は29m以上を測る。

確認面積 380.7㎡



第321図 4区1号畑

畝間方向 N-63° E ⑦西隅N-59° E

畝・畝間 畝は確認できない。畝間は直線的だが、南西側では北側に膨らむように小さく湾曲する部分がある。長さは⑦・⑭などが残存する部分で15m前後ある。畝間幅は38～85cmで65cm前後の部分が多い。畝幅は120cm前後で均一である。畝間の深さは2～22cmで10cm前後の部分が多い。畝下部分には耕作痕らしい筋状の痕跡がわずかに観察できる部分がある。

地山傾斜 中央付近が高く、北西・南東両方向へ低く緩やかに傾斜している。

備考 畑内としては出土遺物がきわめて多く、重量で3.1kgの土師器と0.1kgの須恵器がある。平安時代の遺物を出土する12号溝が後出する。

2号畑(第322図 PL.52-③)

1号畑の東側に広がる畑で、1号畑とは直角に近い畝間方向であり、近接した時期に存在した可能性がある。東側に隣接する3-2区の1・3・5号畑などの畝間方

向に近似した走行である。北側・東側は調査区境となり、南側は不明瞭で畑輪郭を把握できていない。

位置 北隅052-910、南東隅036-899、西隅044-921。

規模 18条の畝間が南北長20.0m以上、東西幅19.7mの範囲にある。西側に畝間痕跡の可能性のある窪みが続くが明瞭でない。

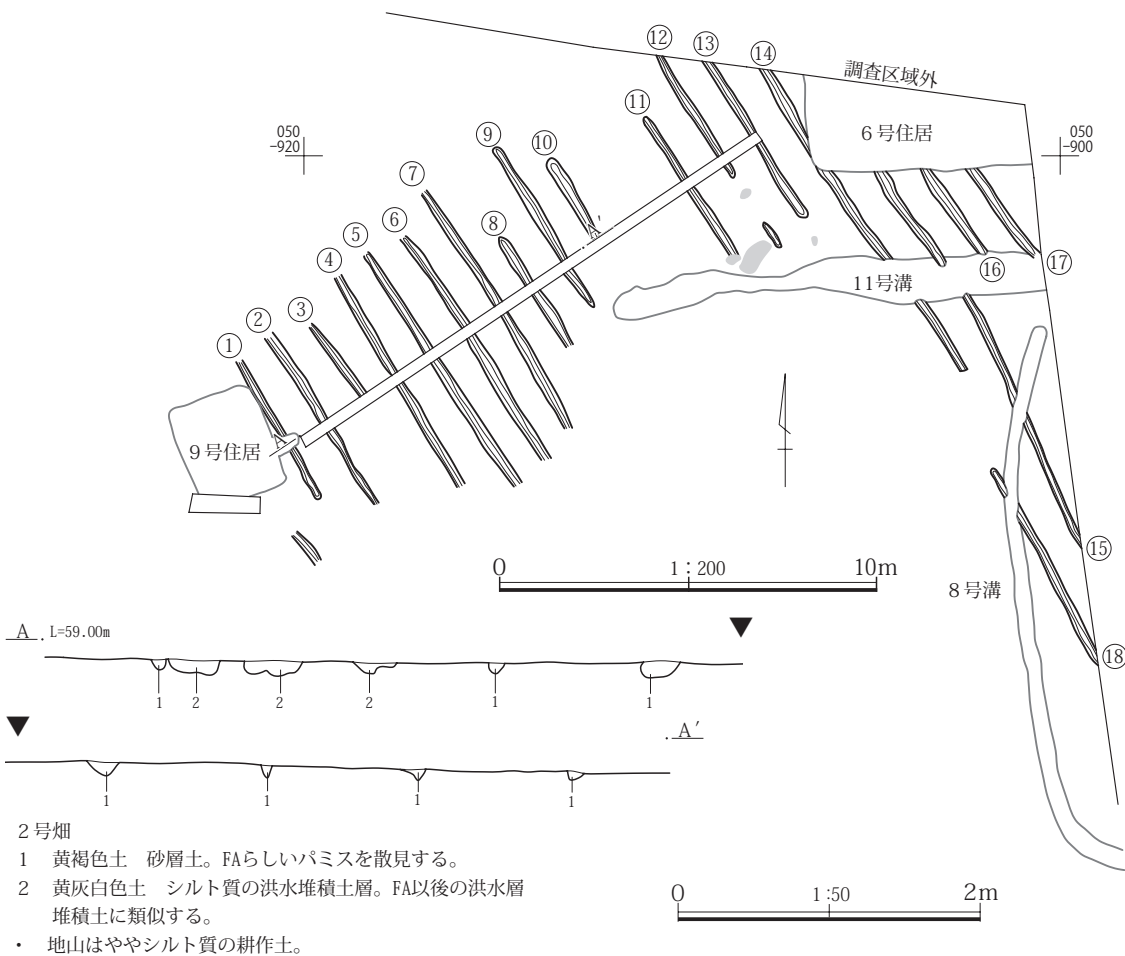
確認面積 160.1㎡

畝間方向 N-32° W ⑮南側N-24° W

畝・畝間 畝間幅20～39cm、畝幅110cm前後を測る。畝間⑮が11.3mで最も長い、⑭と⑯が繋がれば長さ18mとなる。深さは4～11cmで6cm前後の部分が多い。

地山傾斜 凹凸があるが全体では東へ低い6/1000

備考 出土遺物が多く、重量で1.6kgの土師器と0.5kgの須恵器がある。平安時代の遺物を出土する12号溝が後出する。6号住居等の平安時代住居に前出し、古墳時代前期の27号住居に後出している。⑩・⑪間が2.7mあり、この中に未確認の畝間1条または2条が加わることを想定した場合、どちらも他地点の畝幅と合致しない。⑩以西と⑪以东が別の畑となる可能性がある。



3号畑(第322図 PL. 52-④・⑤)

1号畑より40cm以上低い流路下で確認した畑である。流路による削平の少なかつた部分に残存したもので、畝間の端が確認できたものではない。1号畑と畝間方向が近似しているが、H r - F Aの混入は確認できず同時期の遺構か判断できない。

位置 北隅053-956、南隅039-953、東隅049-951、西隅051-959。

規模 13条の畝間が長さ7.7m、幅14.5mの範囲にある。

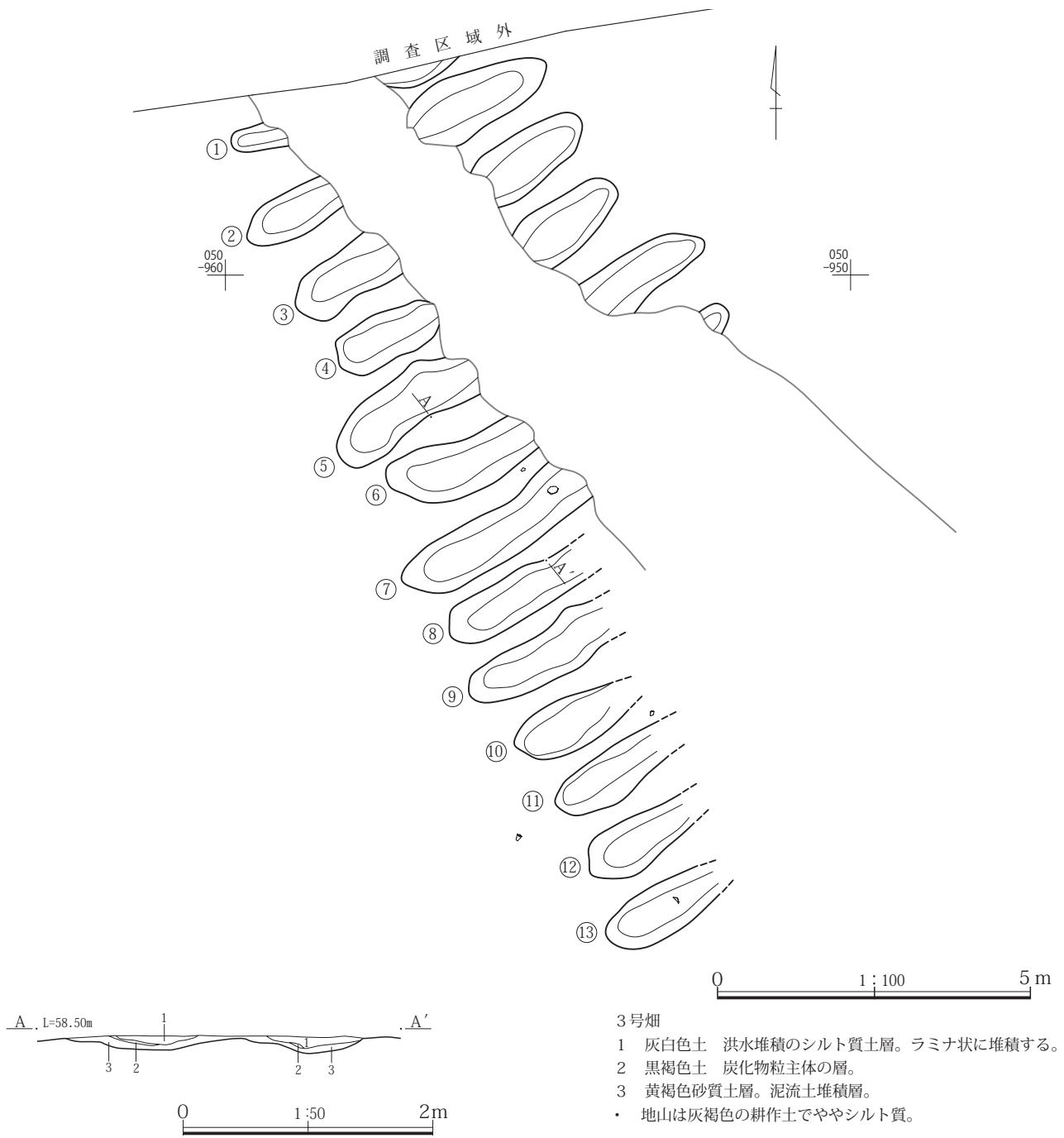
確認面積 60.8㎡

畝間方向 N-54° E。1号畑に比較的近い。

畝・畝間 畝は確認できない。畝間幅73~105cmで、120cm前後の畝幅に比して広がっている。畝間⑤が長さ6.8mで最も長い。深さは3cm前後の部分が多く、広い幅に比べ深度に乏しい。

地山傾斜 凹凸が激しいが全体では南へ低い17 / 1000

備考 畑調査時に重量で0.4kgの土器が出土し、須恵器片もわずかに見られる。畝幅に対し畝間が著しく広いのは、重複する数次の畝間が現れたものと推定できる。



第323図 4区3号畑

4号畑(第324図)

A s - Cの混じる黒色土上に作られた小区画水田に後出して確認された。畝間か耕作痕か区別のできなかつた南北方向に刻まれた細かな溝状の痕跡である。上面の畑の畝方向とは異なり、北からの偏角の少ない痕跡で、近似した方向の畑に2区2号畑や3-2区9号畑がある。

位置 北西隅053-925、南西隅045-926、東隅050-917
ですべて水田区画上。

規模 7条の畝間が南北長8.9m、東西幅9.0mの範囲にある。西側へ広がる可能性がある。

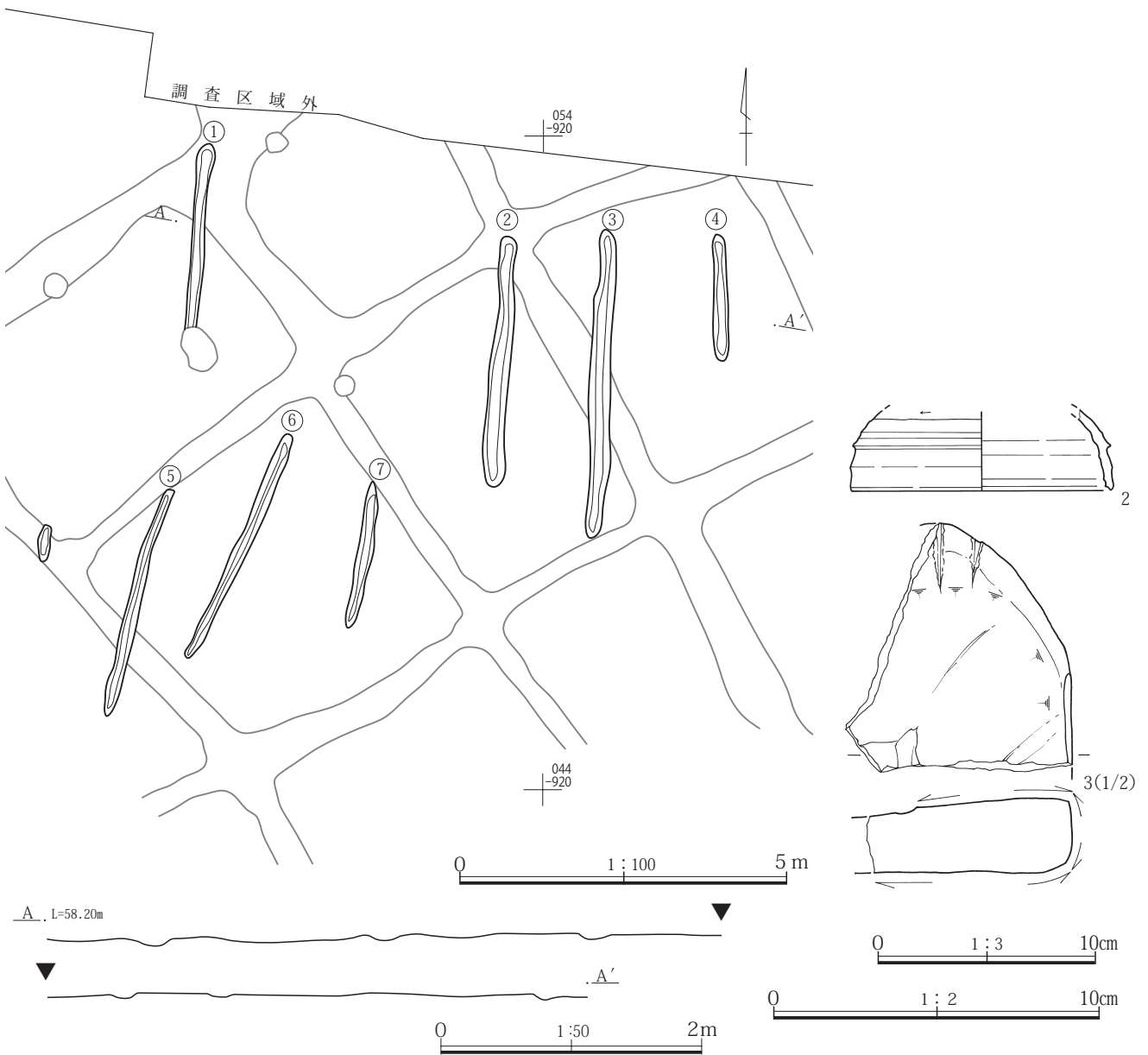
確認面積 50.6㎡

畝間方向 ③N-3° E ⑥N-16° E

畝・畝間 畝間⑥は方向が大きく異なり、この畑には伴わないと思われる。⑤・⑦も①~④に比べわずかに傾いている。各畝間の規模は畝間幅30cm前後の一定した規模で、畝幅130~150cmの幅広の畑となる。

地山傾斜 南西側へ低い9/1000

備考 水田の畦畔方向と泥流直下の畑は北西側へ傾いた方向を基本としている。本畑や3-1区9号畑はこの間にあるが北からの傾きの少ない方向を基本とし、発生原因に不明な点が残る。古墳時代前期の住居に北側からの傾きの少ないものが若干見られ、8~11号溝などが作る古代の区画にも見られる。



第324図 4区4号畑と4区出土遺物

5区の畑

5区で畑を調査したのはこの面のみだが、H r - F Aの一次堆積層を被覆した比較的残存状態の良い畑がほぼ全面に広がり、現道を越えた5-2区へも続いている。本遺跡で最も広範囲に広がる畑面となった。

調査区西側の畑境には広い間隔があり作業道状のスペースが南北方向に繋がっている。この道を境として西側にある畑のうち北側を1号畑、南側を2号畑とした。道東側の畑は、北側を3号畑、南側を4号畑とした。現道を挟んだ南側の畑も4号畑の続きと考えられる。

1号畑(第325図 PL.51-②)

調査区北西隅で確認された。畝の高まりを明瞭に確認できる本遺跡では数少ない例である。畑南東側輪郭を把握できるが、直線的ではなく西側へ膨らむように弧状に湾曲している。南西側輪郭も弱い弧状の湾曲が見られる。

畑東側に1条の畝間と直交する方向の小溝があるが、道の側溝状の施設と思われる。畝間とこの溝には最大50cmの間隔がある。

位置 北西隅084-097、東隅081-081、南隅073-086。

規模 7条の畝間が南北長9.3m、東西幅15.2mの範囲にある。

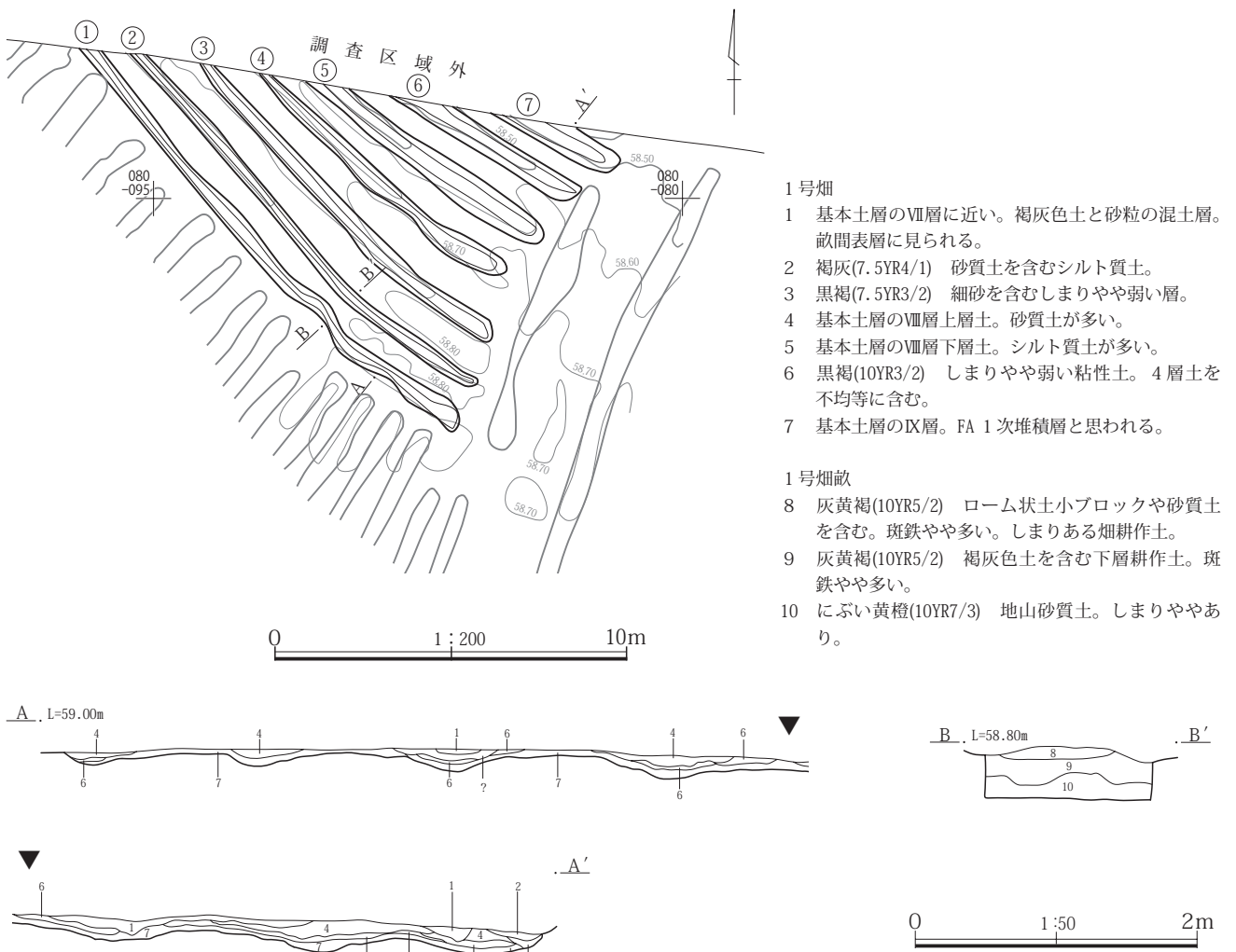
確認面積 75.9㎡

畝方向 ⑤N-51° W ①西側N-40° W

畝・畝間 畝間の一部で蛇行している。畝間幅45~97cm、畝幅130cm前後でやや幅広の遺構である。畝間①が長さ15.1m以上で最も長い。畝の高さは5cm前後で最大13cmを測る。

地山傾斜 北東側へ低い27 / 1000

備考 H r - F Aの一次堆積層を畝・畝間ともに直上に被覆している。



第325図 5区1号畑

2号畑(第326図 PL.51-②)

調査区南西隅で確認した畑である。畑北東側・南東側の輪郭を把握できる。南西隅も畝間が一系列に並んでおり、隅まで把握できたと思われる。東隅の畝間⑳は、1号畑同様の道側溝となる可能性があるが、他の畝間と相違ない規模である。北東側は1号畑と接し、50cm前後の間隔があるが、畝間②・③は1号畑畝間①と接している。畝間は部分的に2段に並ぶ変則的な畑である。

位置 北西隅084-099、東隅071-086、南隅063-089。

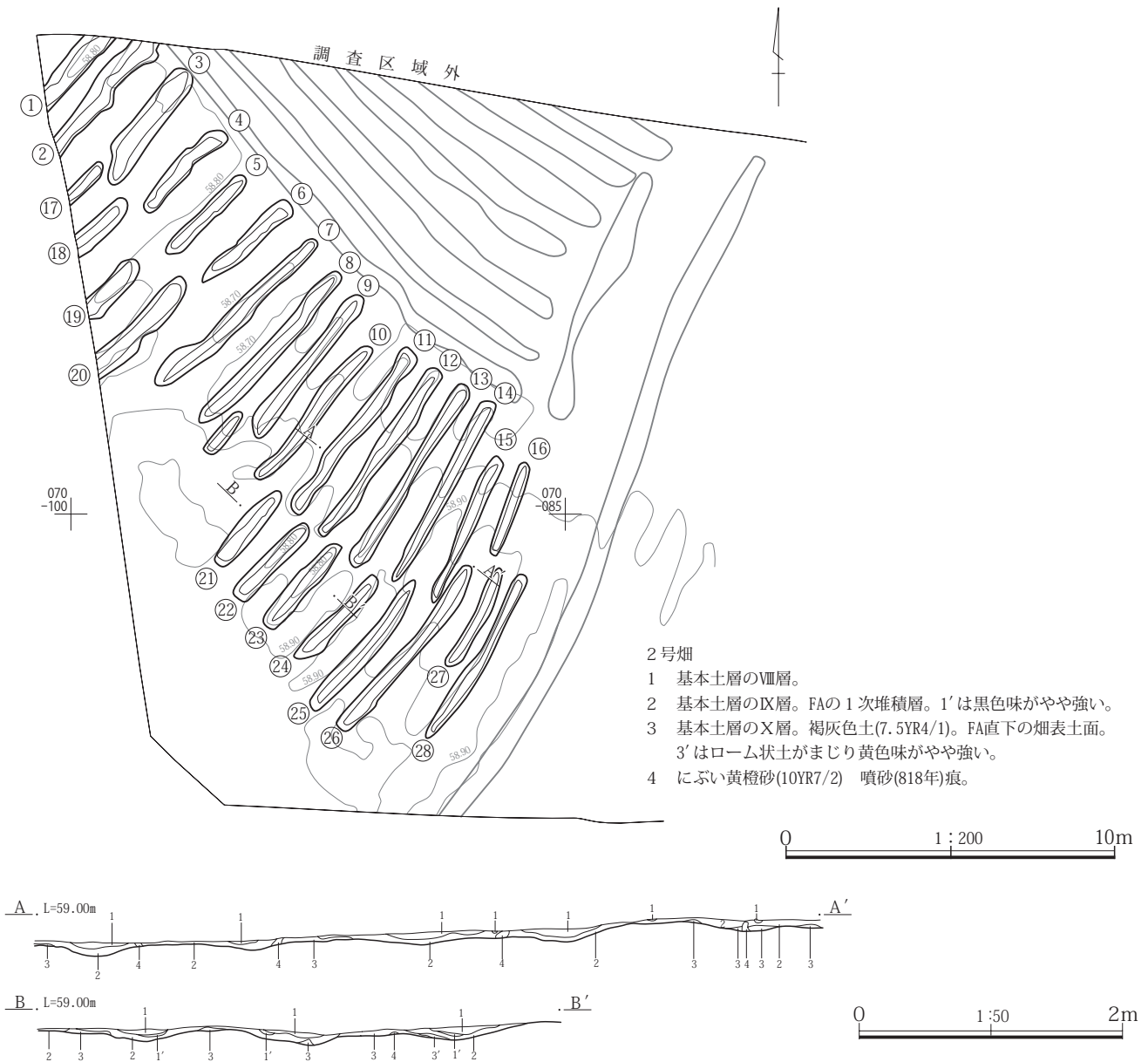
規模 28条の畝間が南北長11.5m、東西幅22.5mの範囲にある。

確認面積 156.5㎡

畝間方向 ⑦N-48° E ⑬N-33° E

畝・畝間 ③~⑥と⑬~⑰、⑪~⑭と⑳~㉓が対になるように2段に分かれている。また、南西側の畝間は北東側畝位置に続くような配置になり、全体の畝間は互い違いに配されている。⑮・㉔以東の畝間も不規則だが対になる可能性がある。畝間幅は60cm前後の部分が多く、北東側・南西側で差はない。畝間の長さは⑦以東で北東側が広く、⑥以西で南西側が広い。畝幅は⑧を境に西側で150cm前後の広い部分が多く、東側では100cm前後の部分が多くなっている。

地山傾斜 細かな凹凸が多く、全体ではほぼ平坦である。



第326図 5区2号畑

3号畑(第327図)

調査区北隅で長い畝間が3条だけ確認できた変則的な畑である。北東側にこの畝間の続きと思われる4条の带状変色部分があり薄線で示した。畝間痕跡と思われる変色部分を含めて3号畑とした。

位置 北西隅081-080、北東隅074-049、南隅072-056。

規模 3条の畝間と4条の畝間痕跡が東西長28.8m、畝間南北幅2.7m、畝間痕跡南北幅3.6mの範囲にある。

確認面積 90.5㎡

畝間方向 東側N-56° W 西側N-78° W

畝・畝間 畝間は「く」の字状に屈曲するような蛇行が見られるが、幅57~84cm、深さ5cm前後で形状に大きな差はない。畝幅は110cm前後でほぼ一定している。長さは畝間①が25.7mで最も長い。畝間痕跡は幅が一様でないが、畝幅は3号畑とほぼ同じである。4号畑北隅とは70cm前後の比較的広い間隔がある。

地山傾斜 凹凸が多いが全体では北側へ低い15 / 1000

4号畑(第328図)

5-1区の過半を占め、5-2区へも続く可能性のある広大な畑である。西側の1・2号畑の境には道がある。道に接した畝間①は道側溝の可能性はあるが、形状に他の畝間と差異はない。以下の説明では5-1区部分をa畑、5-2区部分をb畑として分けた。

(a畑)

位置 北隅080-079、南隅059-043、東隅065-039、西隅060-089。

規模 35条の畝間が南北長24.6m、東西幅43.3mの範囲にある。

確認面積 616.5㎡

畝間方向 N-25° E

畝・畝間 途中で途切れる畝間があるが、欠ける部分を挟んだ形状や走行に齟齬はなく、同一の畝間と思われる。西側では弱い蛇行があるが、中央から東側は直線的な畝間である。畝間幅53~80cm、畝幅125cm前後の部分が大半で、比較的一定した形状である。畝間①が全長22.1mで最も長い。畝の高まりが部分的に見られ、高さ9~15cmを測る。

地山傾斜 北側へ低い15 / 1000

(b畑)

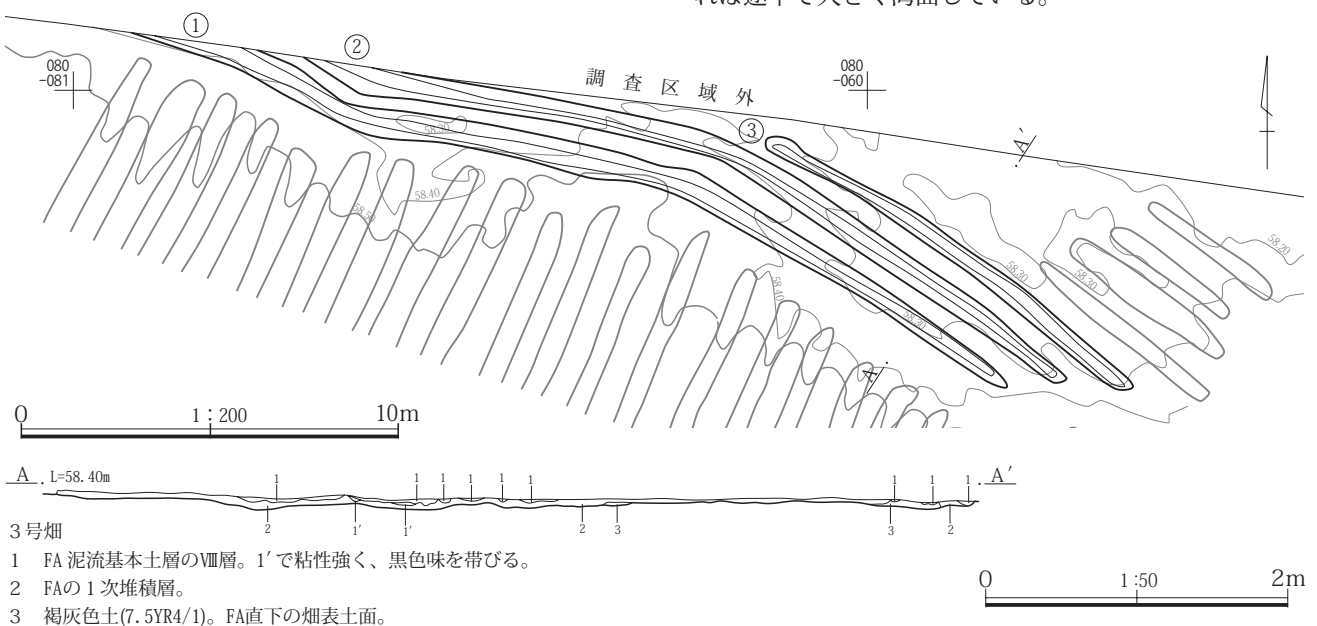
備考 東隅042-026、西隅044-057。

規模 南北長は最大で2.3mしか確認できない。東西幅30.6mを測る。a畑から続くなら長さ21m以上の畝間となる。

確認面積 28.3㎡

畝方向 東隅N-21° E 中央N-5° E

畝・畝間 畝間幅80cmを超えるものが多く、a畑より広めだが、畝幅は同規模である。反面、畝間幅35cm前後の狭い部分もある。畝間方向がa畑と異なり、同一畑であれば途中で大きく湾曲している。



第327図 5区3号畑



第328図 5区4号畑

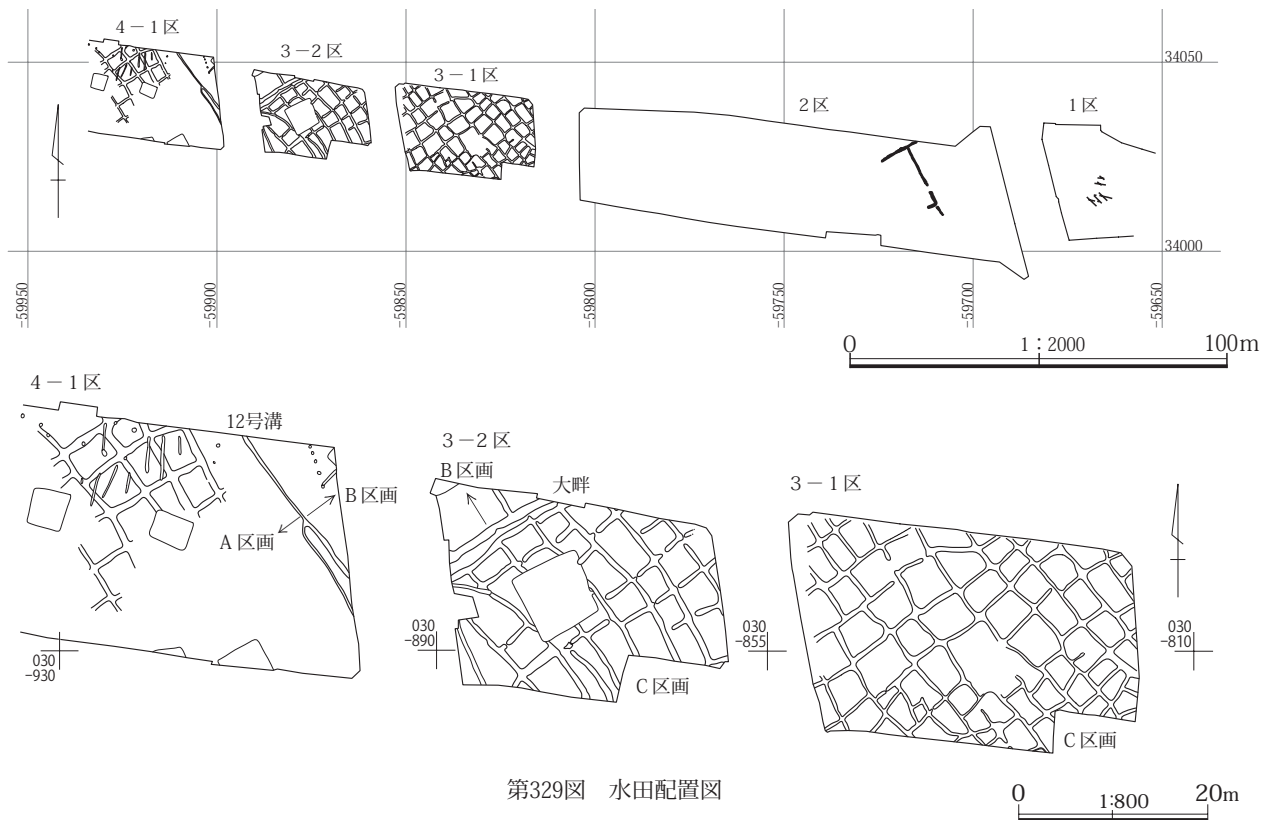
10 水田

(1) 概要

3区全域と4区東隅にかけて東西約110mの範囲に水田畦畔が確認される。1枚の水田面積が10㎡前後のいわゆる小区画水田である。As-Cを鋤き込んだ土壌を耕作土とし、この上を洪水土が覆っている。耕作土は遺跡基本土層の第XI層土にあたり、以下、本文ではXI層土と呼称する。XI層土が調査区内で確認できるのは3・4区以外には、大規模な集落のある1区東隅から2区中央にかけてである。ここは4世紀代の住居が多数あり、3・4区より早く水田上に集落が築かれたため水田が不明瞭になったと想定している。

確認された3・4区水田は水路で区切り、3カ所の大区画に分けられる。

A区画 4区東隅にある12号溝は埋没土にXI層土が見られ、水田の導水路・排水路として使用されたと推定される。この溝西側をA区画と呼称する。



第329図 水田配置図

(2) A区画の水田(第330図 PL. 55-①)

4区12号溝西側のA区画は、4区中央付近で畦畔痕跡が部分的に確認された地点で、南北畦畔、東西畦畔とも5条を確認した。北側は調査区境に達し、南側は途中で

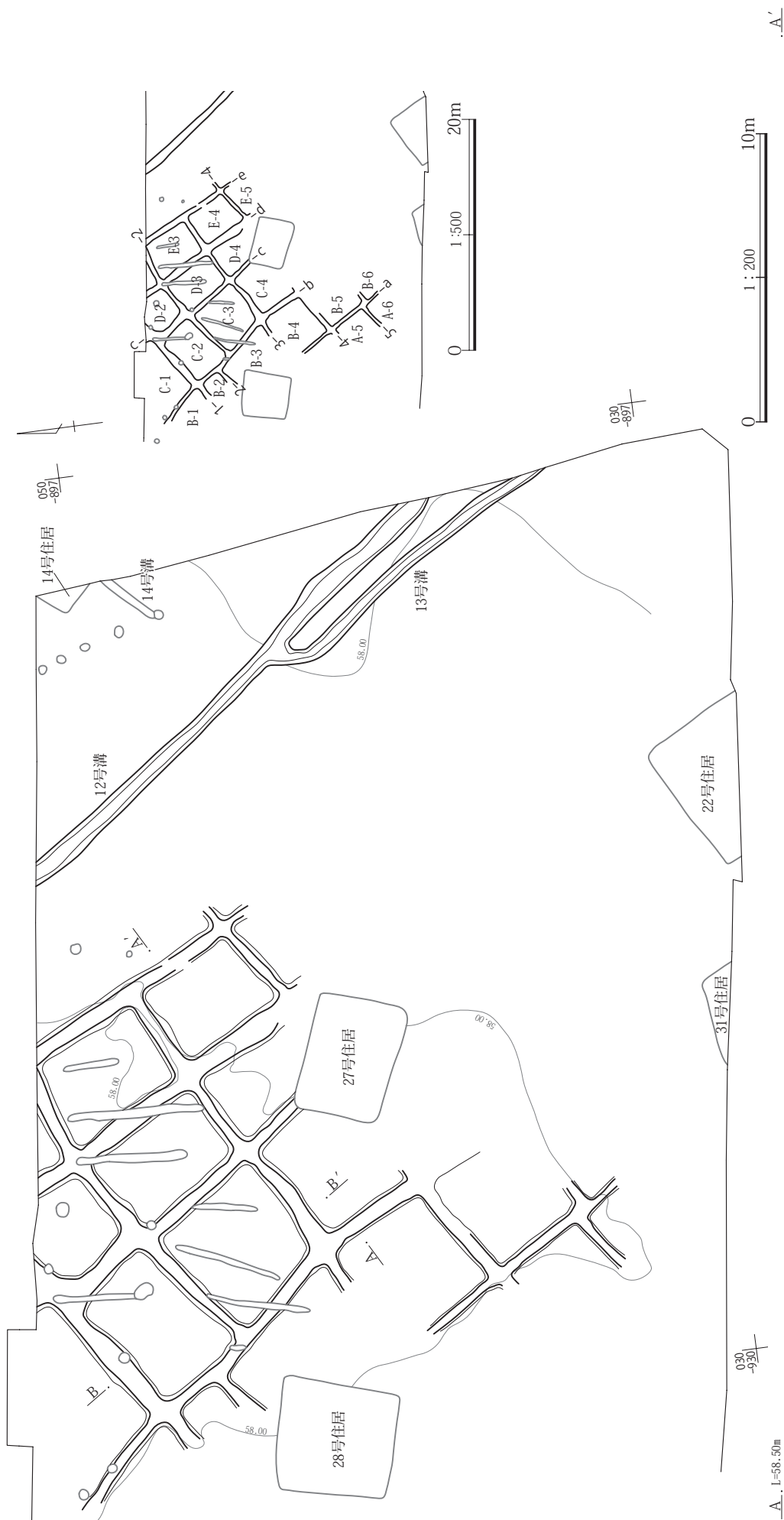
B・C区画 3区にはほぼ全体に水田が広がっているが、このうち3-2区北寄りの大畔北西側をB区画、南東側をC区画と呼称する。B区画では残存状態が悪く、畦畔が1条確認できただけで全容は不明である。C区画は3-1区から3-2区に広がり、本遺跡で確認できた水田の大半を占めている。周辺の地山は北西側が若干高く南東側へ向かって少しずつ低くなる、ごく緩やかな傾斜がある。この傾斜に沿って南北方向の畦畔が築かれている。

区画毎に確認した南北畦畔にアルファベット小文字を、東西畦畔に算用数字を付して説明の補助とした。また個別田面には田面南東側の畦畔交点による呼称を用いた。例示すると南北畦畔bと東西畦畔3が交差した北西側の田面はアルファベット大文字を使いB3と呼称した。

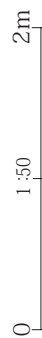
なお、1・2区で集落下から部分的に確認した溝が水田区画にかかわる溝や畦畔脇の窪みとなる可能性があり、1区から4区までの全容を第329図上に記した。水田面上および耕作土内の出土遺物はなかった。

不明になる。本遺跡内では比較的歪みの少ない直線的な畦畔である。水口や畦畔脇の水流痕は確認できない。

畦畔 幅45～105cm、田面からの高さは1～2cmの部分が多く、明瞭なものではなかった。畦畔1を挟んで畦畔



10 水田



第330図 4区水田

cに屈曲があり田面の規模が異なっている。A区画を大区画としてその中に中区画が存在するなら畦畔1がその境界になると思われる。東西畦畔では畦畔2の屈曲が多く、B2とB3が著しく規模の異なる田面となりそうである。畦畔b中央付近でN-39°W、畦畔eでN-27°Wの走向である。

面積 田面の全体を把握できたのは5枚のみで、復元した2枚を足した面積の平均は11.60㎡であった。最も広いC3田面が15.20㎡だが、B3・C1田面はさらに広く、C区画水田よりやや広い傾向がある。

地山傾斜 南東側へ低い3/1000前後で平坦な地点である。

(3)大畔(第331図 PL.56-③)

3-2区北西隅にある大畔は2.2~2.7mの幅があるが、中央に溝(9号溝)があるため、溝両側の南北両畦畔は他の畦畔と幅はあまりかわらない。また北側畦畔は南側畦畔より2~9cm高い。溝は北東側へ低く傾斜しているが、北東隅では緩やかになる。全体で16cmの比高差があり12/1000の傾斜となる。溝底と南側畦畔との比高は10cm前後で北東隅付近のみ2~4cmと浅くなる。南側畦畔がC区画水田d畦畔と交差する付近で水口状の窪みがあるが、周辺は全体にやや盛り上がる地点で、不明確な窪みである。走向N-58°Eで4区12号溝とほぼ垂直である。

(4)B区画の水田(第331図)

北側で確認した1条の直線的な南北畦畔のみであり、全容は不明である。この畦畔南側延長部分をC区画内で追っても連続する南北畦畔は見られず、この畦畔がA区画水田で想定したような中区画を作る施設になるか判断できなかった。

畦畔は西側田面から3cm前後、東側田面から5cm前後の比高差があるが、周辺は両側ともあまり平坦ではなく、水田面らしくない。

畦畔 調査できた範囲の畦畔は長さ3.2m、幅55cm前後で、田面からの高さは2~3cmである。走行方向はN-30°Wで、大畔にほぼ直交している。

地山傾斜 畦畔西側では北東側へ低い19/1000前後、畦畔東側は調査範囲が狭いが北側へ低い37/1000前後

となり、周辺の傾斜と異なっている。

その他 大畔西隅付近が北側へ向かって膨らんでおり、B区画内にもう1本の南北畦畔が存在する可能性があるが、調査範囲内では明らかにできなかった。

(5)C区画の水田(第331~334図 PL.55-②・③、56-①~④)

3-1区から3-2区へ繋がる広い範囲で確認できた水田である。3-1区南東側に大畔を挟んで広がっている。大畔中央の9号溝はC区画水田の導水路であったと思われる。

3-1区は南北畦畔が西側にある畦畔aを除いてやや東側へ膨らむように湾曲している。規則的な配置が見られるが、畦畔c'は畦畔bとcの間に割り込むような不規則な配置になっている。上面にある10号溝の影響を受けた硬化部分で畦畔ではない可能性もある。走向は畦畔aがN-43°W前後、畦畔fの北側でN-45°W、南側でN-24°Wである。

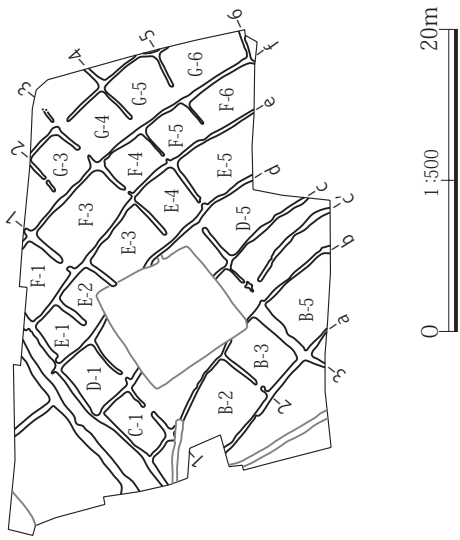
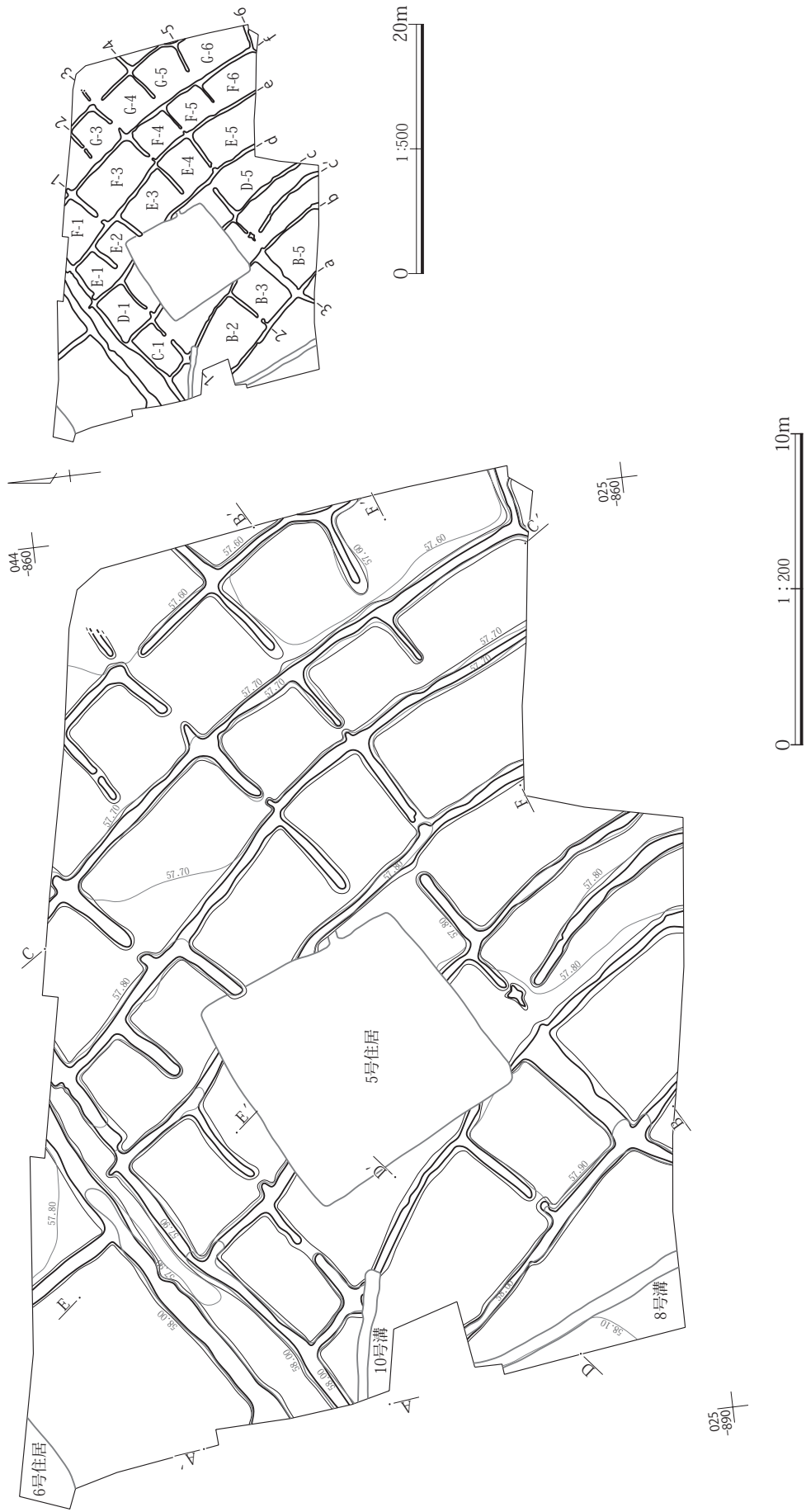
東西畦畔は西側に水口が多く見られることが特徴である。田面のレベルから、水は北西側から南東方向へ流れることが分かる。畦畔間は平行ではなく、畦畔2と3は南西側に開き、畦畔5と6は北東側へ開くなど不規則になっている。

畦畔 幅は40~65cmで、南西側b3・b5面の間にある6畔では1mを超える部分もある。田面からの高さは3~12cmで本遺跡の中では最も良好である。南側に高い地点が多い。

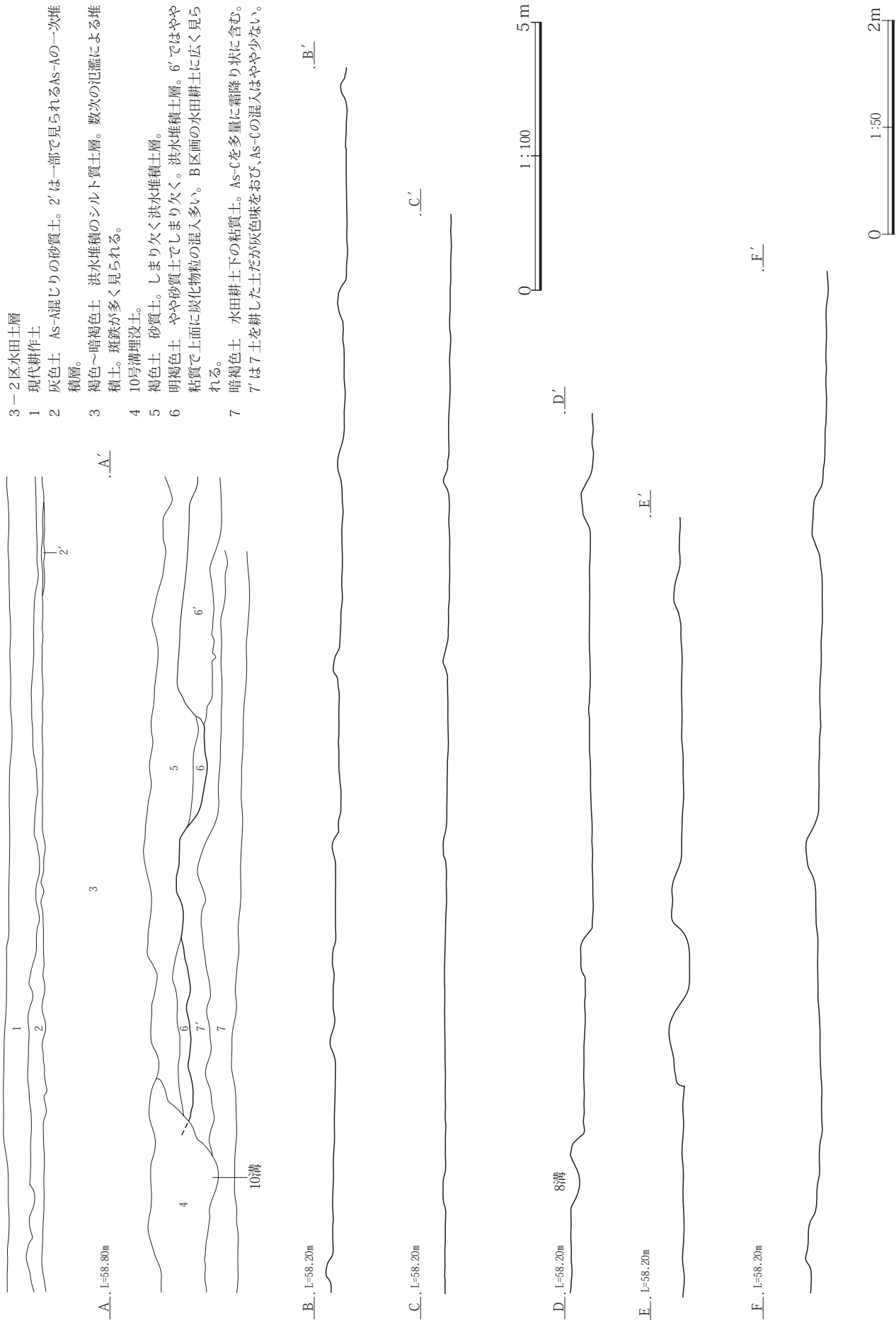
面積 田面の全体を把握できたのは復元した5枚を加えて37枚で、面積は最大20.54㎡、最少1.58㎡と差が著しく大きい。狭小田面は南側に多い。平均面積は9.13㎡である。

地山傾斜 東側に低い19/1000前後。

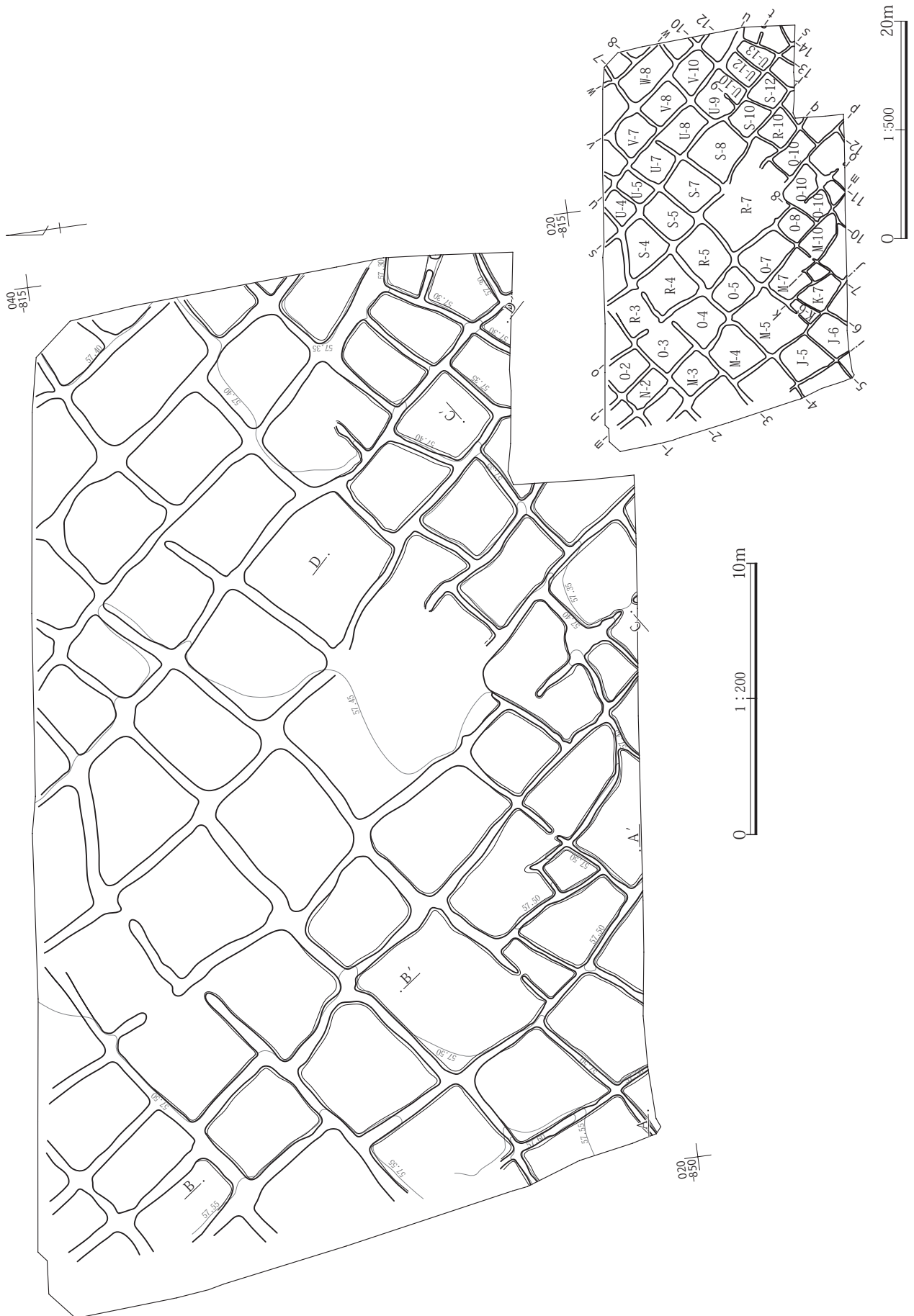
3-2区では南側に掘削土搬出用の作業道を設定したため、調査は2回に分けて行った。車両による土圧の影響を受けたためか確認できた水田の形状に相違点が見られるが、残存状態は南側のほうが良く、より旧状を留めていると思われる。北東側では畦畔の痕跡が捉えられたのみで、畦畔の高さは確認できない部分が大半であった。北側は畦畔が整って田面もやや広めだが、確認できなかった細かな畦畔が存在していた可能性がある。水口は



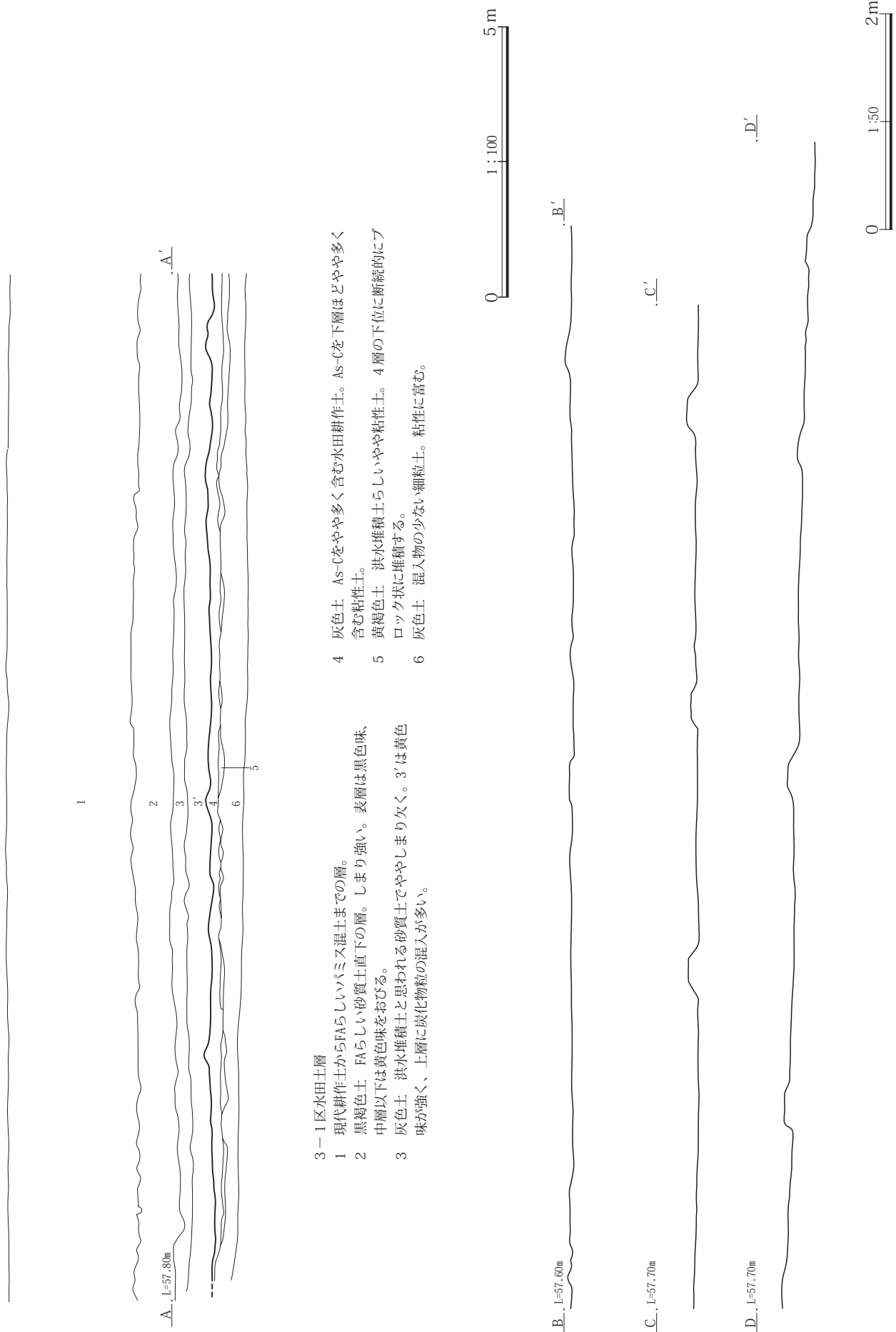
第331图 3-2区水田



第332図 3-2区水田断面



第333图 3-1区水田



第334図 3-1 区水田断面

第19表 3・4区水田計測値一覧表

4区

田面名称	南北軸長 (cm)	東西軸長 (cm)	中央付近 標高(m)	面積 (㎡)	備考
A-5	288	—	58.00		
A-6	—	—	58.00		
B-1	—	—	57.99		
B-2	160	—	58.03		
B-3	480	—	58.06		
B-4	355	393	58.03	13.87	面積復元
B-5	337	—	58.02		
B-6	—	—	57.98		
C-1	—	517	58.06		
C-2	277	450	58.05	13.05	
C-3	395	394	58.04	15.20	
C-4	317	390	58.04		
D-2	280	290	58.05	7.20	面積復元
D-3	407	267	58.01	10.93	
D-4	—	225	58.03		
E-2	—	—	58.01		
E-3	397	284	58.02	11.49	
E-4	340	268	57.96	9.47	
E-5	—	274	57.94		

3区

田面名称	南北軸長 (cm)	東西軸長 (cm)	中央付近 標高(m)	面積 (㎡)	備考
A-3	—	—	57.97		複数枚の水田
B-1	—	—	57.96		
B-2	—	374	57.91		
B-3	290	390	57.86	10.93	面積復元
B-5	—	360	57.82		
C-1	198	396	57.93	7.33	
C-2	—	372	57.90		
C-3	—	294	57.83		
C-5	—	118(313)	57.74		()内はbまで
C'-5	—	135	57.90		C-5と同一か
D-1	222	350	57.88	8.54	
D-2	—	344	57.87		
D-3	—	314	57.75		
D-5	—	274	57.72		
E-1	212	286	57.80	6.07	
E-2	263	277	57.74	7.30	面積復元
E-3	447	282	57.72	12.90	面積復元
E-4	271	352	57.68	9.79	
E-5	—	309	57.63		
F-1	370	332	57.72		
F-3	583	309	57.70	18.32	
F-4	310	242	57.63	7.41	
F-5	287	232	57.62	6.85	
F-6	—	244	57.63		
G-2	268	—	57.65		
G-3	244	318	57.61	7.93	
G-4	343	316	57.59	10.97	
G-5	334	338	57.58	11.44	
G-6	505	307	57.59		
H-3	—	—	57.61		
H-4	346	—	57.53		
H-5	—	—	57.58		
I-5	414	—	57.55		
I-6	—	—	57.46		
J-2	—	—	57.54		
J-3	423	—	57.54		
J-4	393	320	57.53		
J-5	340	327	57.53	10.50	
J-6	270	—	57.46		
J-7	—	—	57.42		
K-6	88	245	57.50	2.28	
K-7	332	194	57.46	6.28	
L-7	125	120	57.43	1.58	
L-8	380	255	57.44		

3区

田面名称	南北軸長 (cm)	東西軸長 (cm)	中央付近 標高(m)	面積 (㎡)	備考
M-1	—	—	57.52		
M-2	364	199	57.51	7.13	面積復元
M-3	342	260	57.48	8.87	
M-4	355	388	57.51	13.39	
M-5	401	510	57.52	20.54	
M-7	430	266(197)	57.50	9.63	()内は南端
M-10	385	185	57.46	6.86	
N-1	—	150	57.52		
N-2	382	193	57.49	7.19	
O-1	—	—	57.50		
O-2	380	253	57.51	9.31	
O-3	362	377	57.46	13.25	
O-4	338	376	57.48	12.94	
O-5	350	260	57.49	8.72	
O-7	449	290	57.47	12.43	面積復元
O-8	242	245	57.43	5.83	
O-10	226	188	57.39	3.79	
O-11	108	170	57.39	1.98	
O-12	—	—	57.39		
P-10	360	208	57.43	6.97	面積復元
P-12	333	240	57.30		
Q-8	—	228	57.41		
Q-10	362	172	57.36		
Q-12	—	220	57.29	6.78	
R-2	—	—	57.50		
R-3	290	378	57.47	10.83	面積復元
R-4	420	397	57.47	16.98	
R-5	370	463	57.48	16.98	
R-7	—	483	57.45		複数枚の水田
R-8	—	194	57.44		
R-10	260	235	57.37	6.14	
R-12	—	220	57.32		
S-3	—	502	57.47		
S-4	340	400	57.47	13.20	
S-5	280	439	57.48	12.05	
S-7	336	419	57.46	14.06	
S-8	443	406	57.47	17.50	
S-10	270	239	57.38	6.44	
S-12	250	249	57.34	6.00	
S-13	154	—	57.30		
S-14	—	—	57.26		
T-14	165	255	57.34		
T-15	—	—	57.25		
U-3	—	—	57.44		
U-4	197	285	57.45	5.47	面積復元
U-5	185	299	57.45	5.66	
U-7	315	313	57.47	9.29	
U-8	423	255	57.37	10.87	
U-9	223	320	57.37	7.07	
U-10	135	340	57.33	4.80	
U-12	160	296	57.31	4.57	
U-13	150	312	57.29	4.40	
U-14	136	—	57.28		
V-4	—	—	57.45		
V-5	225	—	57.44		
V-7	345	300	57.45	9.41	
V-8	380	258	57.43	9.62	
V-10	350	270	57.35	9.07	
V-13	—	190	57.35		
W-7	—	302	57.46		
W-8	515	265	57.44	13.10	
W-10	194	—	57.36		
W-13	—	—	57.34		
X-7	—	—	57.40		
X-8	195	—	57.36		
X-10	—	—	57.41		

畦畔3の東側や畦畔5の中央で見られる部分があるが、規則的な配置は確認できなかった。

畦畔 幅は30～70cmで南側に幅狭な部分が多い。高さは3～12cmだが、畦畔脇には窪んだ部分が多く、水田中央付近と畔の比高差は3cm程度の地点がほとんどである。

面積 田面の全体を把握できたのは46枚で、確認できた範囲での面積は最大20.54㎡、最少1.58㎡、平均は9.20㎡である。

地山傾斜 東側から南東側へ低い8／1000前後。

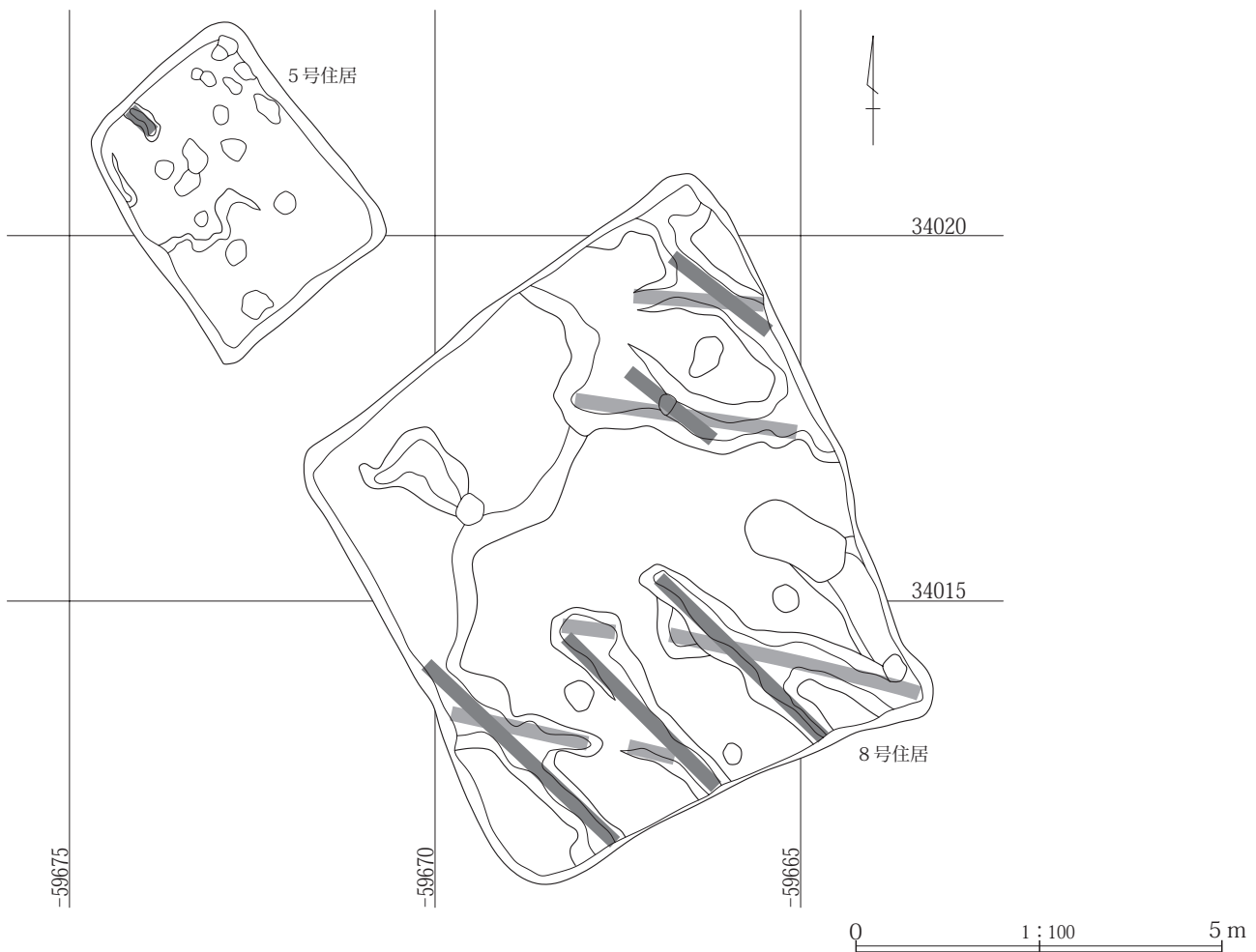
(6) 2区住居下の溝

2区東側で住居の掘り方調査時に確認された窪みを繋げると、直交する3条の溝となった。これらの溝は3・4区水田区画と同じ走向にあり、水田に係わる施設と考えられる。溝の項の29号溝(345頁)に説明を記した。

(7) 1区住居下の溝(第335図)

8号住居の掘り方から3・4区の南北畦畔に近い走向(N-47°W前後)の溝状の窪みが南側で3条、北側で2条確認されている。これを第335図の濃いトーンで表した。溝の間隔は1.5m前後で水田畦畔の間隔に近い。畦畔上の高まりではなく溝状の窪みであり、3・4区では畦畔脇の窪みは確認されていないので直接水田と結びつける根拠とはならないが、畦畔に関わる施設となる可能性がある为本項で扱った。また、5号住居の北西側にある3号住居掘り方調査でも北壁下から類似した窪みがわずかにあり、8号住居から続く可能性があるので第335図に合わせて掲載した。

なお、8号住居には軸方向を変えた類似する溝状の窪みがあり、これを薄いトーンで表した。軸方向はN-77°Wで類似した水田畦畔はないが、溝の間隔は1.6m前後で近似している。新旧は不明だが、近似した時期に水田が存在した可能性がある。



第335図 1区住居下の水田痕跡

11 溝

古代の溝は全調査区で見られる施設で形状や想定される機能・確認された面も一様ではない。時期はA s - B下および平安時代の集落に伴う溝が最も新しく、次いで古墳時代の泥流上に築かれた溝、泥流下で確認できた溝、最も古い泥流下集落の下や水田に伴う溝までの4時期が考えられる。ただし、複数の時期にまたがるものや時期を明瞭にできなかった溝も多く、この項で一括して扱った。溝も他の遺構同様に区ごとに中世面から通し番号を付しており、各区とも途中の番号から始まっている。

(1) 1区の溝

泥流上で6～8号溝、泥流下で9号溝を調査した。6～8号溝は1区西側にある泥流上2面畑に後出して開削された施設である。同一面で確認されているが6号溝は他の溝と方向が不一致で同時存在は考えにくい。9号溝は古墳時代集落の南隅を画するような位置にある。

6号溝 (第336図 PL. 57-①)

西隅がやや不明瞭だが、全容が把握できたようだ。

位置 西端は011-674グリッドに、東端は011-660グリッドにある。

形状規模 ほぼ直線的な溝である。全長13.9m、幅35～60cm、深さ12～21cmを測る。幅は7・8号溝とほぼ同一だが、深さがある。底面レベルは高低差13cmの不規則に波打つような凹凸がある。

方位 N-87° E

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。7・8号溝に近似している。

備考 座標北からほぼ直角の走向で、このような走向の施設は本遺跡では中世に多く見られるが、埋没土は古代の遺構と同じである。底面は凹凸があって水路的ではない。7号溝に後出すると思われるが断面の観察を欠く。出土遺物はない。

7号溝 (第336図 PL. 57-①)

位置 北東端は016-659グリッドで8号溝から分岐している。調査段階で南西側は流路によって削平されて010-666グリッド以南は不明になると想定したが、不明に

なる地点付近は25cm低位での第3面調査で9号溝が確認されている。この溝まで繋がっていた可能性がある。

形状規模 南東側に膨らむように弱く湾曲する溝で、確認できた範囲で長さ8.5m、幅38～60cm、深さ2～9cmを測る。底面は比較的広い。

方位 N-39° E

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 溝全体では地山の傾斜に沿って南側が低くなっているが、底面レベルは高低差16cmの波打つような凹凸があり水路的ではない。出土遺物はない。

8号溝 (第336図 PL57-①)

3号畑の畝間走向に平行した溝で畝間と重複する部分はないが、同畑の地割に沿って開削されたと考えられる。1・2号畑の畝間に後出する。

位置 西端は012-673グリッドにある。東端は017-653グリッド付近で流路に接近し、分からなくなる。

形状規模 7号溝と重複する部分で若干屈曲するが、比較的直線的な溝である。確認できた範囲で長さ18.0m、幅47～70cm、深さ6～11cmを測る。底面は比較的広い。

方位 N-72° E

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 底面レベルの最も高い地点が中央付近にあり、水路的ではない。礫類の出土がやや多い。

9号溝 (第336図)

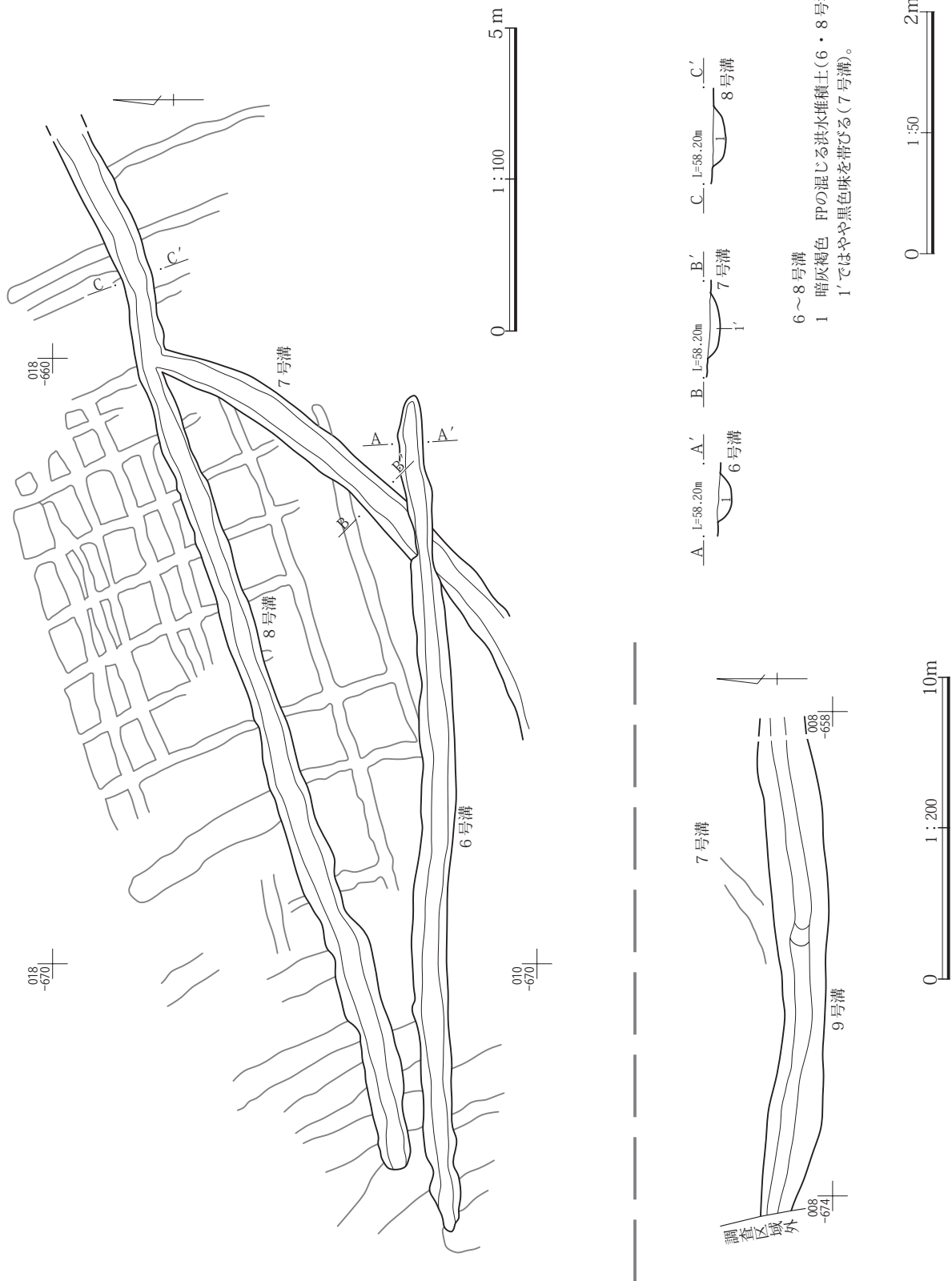
1区の東側の泥流下調査面(第3面)で古墳時代集落の南隅で確認した。

位置 西端は008-674グリッドで調査区境となり、東端は008-659グリッド以東で流路によって不明瞭になる。2面の調査では流路を想定した地点である。

形状規模 南側に膨らむやや湾曲する溝で、確認できた範囲で長さ15.8m、幅103～192cmを測る。中央付近に長さ約3mの範囲で掘り残しのような高まりがあり、両脇の溝底部より15cm前後高くなっている。確認面からの深さは掘り残し状の高まり部分で35cm、他の部分で51～55cmを測り、1区の他の溝に比べ幅・深度に富むが底面は比較的狭い。

方位 東側N-84° E、西側N-79° W

備考 上面は流路の影響を受けていて、当初はさらに幅



第336図 1区6~9号溝

広の溝であった可能性がある。底面は平坦ではなく、水路的ではない。集落の南隅にあり住居との重複がないので集落を画す溝となる可能性がある。本溝西側延長部分は、走向がやや異なるが2区28号溝に繋がると思われる。ここでは住居との重複が見られる。埋没土の記録を欠いている。出土遺物はなく、この点では集落と同時期の溝らしくない。

(2) 2区の溝

第1面には中世館があり多数の溝が調査されているが、第2面以降でも確認された溝は多い。泥流上で21～26号溝、泥流下の集落面で27・28号溝、集落下で29・30号溝を調査した。26号溝は時期不明である。

21号溝 (第337図 PL. 57-②)

2区西側の1号畑(泥流上の畑)に後出する溝である。

位置 西端は018-777グリッドにある。東隅は006-755グリッドで止まるようだが、付近で調査区境となり南側は不明瞭だ。

形状規模 ごく緩やかにS字状に屈曲する溝で全長26.2m、幅は西側で狭く55cm前後、東側で広く80cm前後で最大107cm、深さ15～26cmを測る。底面は地山傾斜に沿って東側へ低くごくわずかに傾斜する。

方位 西側でN-67° E、中央付近でN-43° E

埋没土 Hr-F Pの混入が観察できる。単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 1号畑と重複する部分では細かく波打つような凹凸があり水路的ではないが、東隅流路付近では一気に40cmほど降下している。区画溝と想定するが溝を挟んだ両方向の様相にほとんど差異はない。調査面が異なるが泥流下で確認できた集落範囲はおおよそ本溝の位置を南西側限界としている。出土遺物はない。

22号溝 (第337図 PL. 57-③)

2区西側の1号畑(泥流上の畑)に後出する溝である。

位置 西端014-762グリッド、東隅014-757グリッドで21号溝とは最短で3.5mの距離がある。

形状規模 東隅が南へ小さく屈曲する溝で、全長7.7m、幅74～115cm、深さ17～21cmを測る。

方位 N-85° E

埋没土 単層で21号溝に近似している。

備考 軸方向は中世館の南側堀に近い。平安時代末以前の新しい時期の遺構となる可能性もあるが、埋没土からは区別できなかった。土師器片をわずかに出土しているが図示できる遺物はなかった。

23号溝 (第338図 PL. 57-④・⑤)

2区中央付近の第2面調査時に確認した溝である。北端は中世館堀の1号溝に壊されているが調査区内にあるようで、全容を推測することができる。

位置 西北端は019-749グリッドで1号溝に重複し、南東端は010-737グリッドにある。

形状規模 北東側に膨らむやや湾曲する溝で、残存長14.3m、幅95～140cm、深さ50cm前後を測る。

方位 全体ではN-52° E前後となっている。

埋没土 Hr-F A泥流土がラミナ状に堆積する部分があるが水流の痕跡は明確ではない。

備考 本溝は2号畑の南限を画す位置にあるが、走行からは同畑に関連する施設には見えない。底面レベルはほぼ水平である。土師器片をわずかに出土しているが、図示できる遺物はなかった。

24号溝 (第338図 PL. 57-⑥ 遺物観察表440頁)

走向は若干異なるが23号溝北東側約7mの位置に並んで確認された溝である。北西側は調査区境に達していて全容は把握できない。中世館堀の1号溝に壊されている。

位置 北西端は030-745グリッド付近で調査区境となり、南東隅は流路上の008-725グリッドにある。

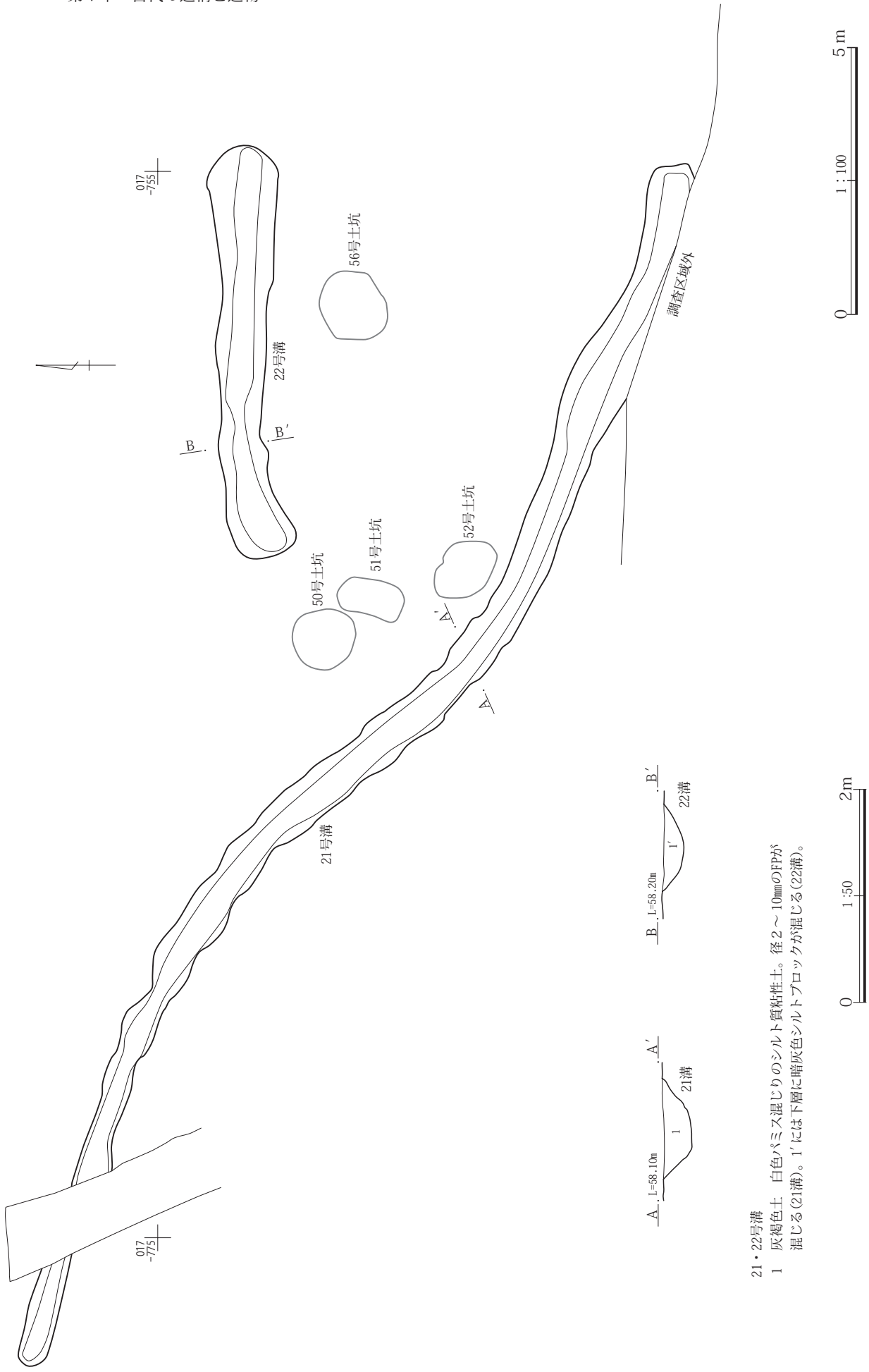
形状規模 確認できた範囲は長さ30.4mで1・2区では最も長い。幅130～225cmで中央付近が細く、深さ34～75cmで中央付近が浅い。全体では直線的だが、細かな凹凸の多い不整な平面形状である。

方位 N-40° W

埋没土 Hr-F Pの混入が観察できる。単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

出土遺物 埋没土出土の1を図示した。図示した以外にも少量の土師器片の出土がある。

備考 2・3号畑に後出すると思われる。底面レベルは地山の傾斜に沿って南東側へ低くなっているが一定ではない。

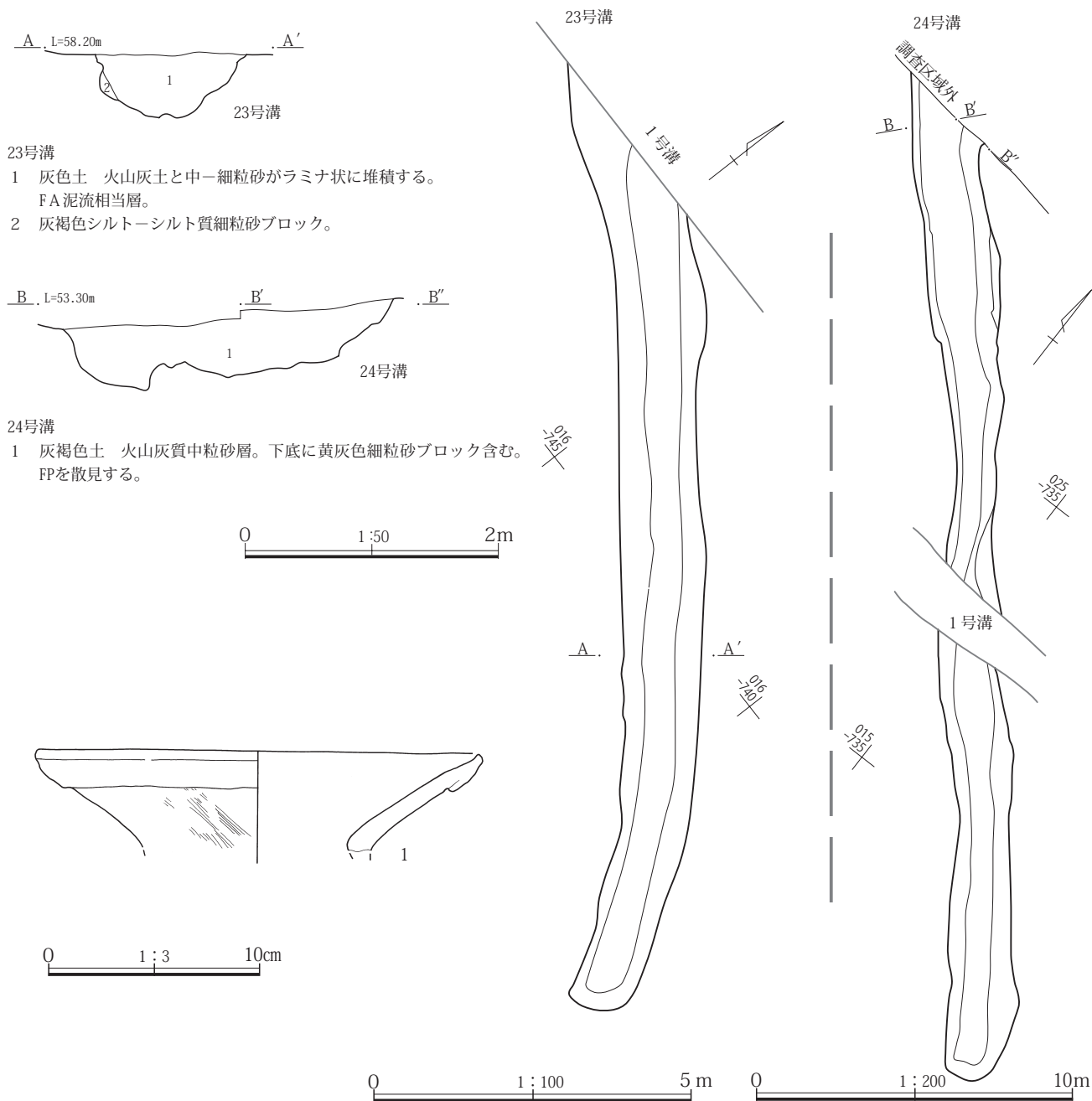


21・22号溝

- 1 灰褐色土 白色パミス混じりのシルト質粘性土。径2～10mmのPPが混じる(21溝)。1'には下層に暗灰色シルトブロックが混じる(22溝)。



第337図 2区21・22号溝



23号溝
 1 灰色土 火山灰土と中一細粒砂がラミナ状に堆積する。FA泥流相当層。
 2 灰褐色シルト-シルト質細粒砂ブロック。

24号溝
 1 灰褐色土 火山灰質中粒砂層。下底に黄灰色細粒砂ブロック含む。FPを散見する。

第338図 2区23・24号溝および出土遺物

25号溝 (第339図 PL. 57-⑦)

3号畑に後出し、地山傾斜にはほぼ垂直方向に開削された溝である。

位置 北東端は018-715グリッドで中世の16号溝から分岐するような位置で確認された。南西隅は流路上の011-720グリッドにある。

形状規模 北半では屈曲の多い不整な溝である。全長9.7m、幅25~58cm、深さ10~15前後を測る。

方位 北隅付近はN-38° E、南側はN-17° E。

埋没土 ブロック状の混入物を含み、人為的埋戻しの可

能性がある。水流の痕跡はない。

備考 平面の屈曲に加え、底面レベルにも緩やかに波打つような凹凸があり水路的ではない。出土遺物はない。

26号溝 (第339図 PL. 94 遺物観察表440・441頁)

古墳時代の集落を調査した第3面で確認した遺構で、2区中央西寄りの流路の間に見られる溝である。確認範囲の中央付近を中世館堀の1号溝に壊されている。隣接する流路と同じ走向にあり、自然の水路の可能性もあるが、断面形状がほぼ均等で人工の施設と考えた。

位置 両側を流路に削られた平坦面にある。北西側は035-768グリッドで調査区境に達し、南東隅は012-751グリッドで流路と交わり分からなくなる。

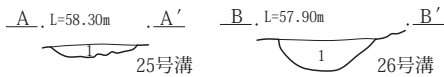
形状規模 全体に緩やかな屈曲がある。確認できた長さは29.1mで24号溝に次ぎ、幅は33~83cm、深さ8~15cmを測る。長さに対して深度に乏しい。

方位 N-37° W

埋没土 Hr-FPの混入が観察できる。単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

出土遺物 出土遺物は多く埋没土内の土師器6点を図示した。高杯や甕など住居出土と差異のないセットである。図示した以外にも重量で約2.5kgの土師器があり、溝出土遺物量としては際立って多い。

備考 底面レベルは、南半では南東側へ向かって下がっているが、北半では中央付近が高く水路的ではない。本溝下から8・34号住居などを確認している。出土遺物はこれら住居に伴っていた可能性がある。

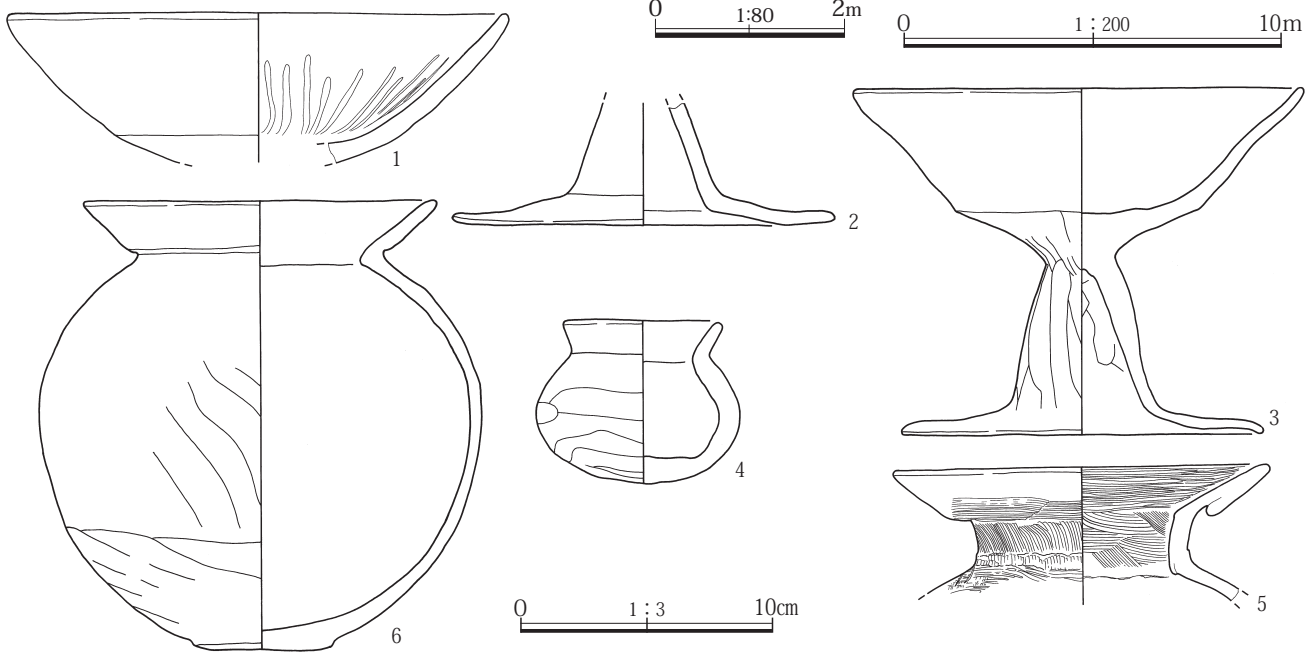
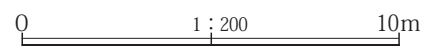
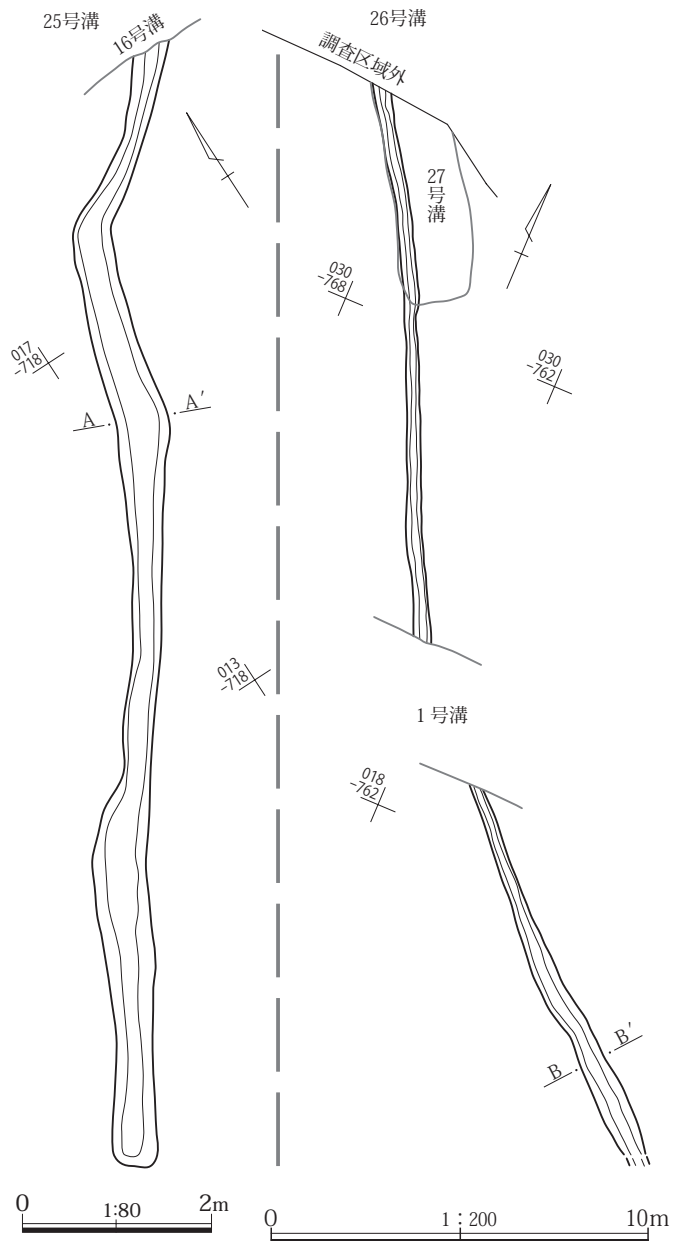


25号溝

1 暗灰色土 火山灰質シルト。径10~20mmのFAブロックの混じる細粒砂との混土。

26号溝

1 灰色土 パミス混じりの火山灰質シルト-砂。径10mm前後のFP混じる。



第339図 2区25・26号溝および出土遺物

27号溝 (第340図 PL. 57-⑧ 遺物観察表441頁)

26号溝の下から、同溝西壁をそのまま西壁にするような位置で確認された。土坑状の遺構だが26号溝の配置を決めた施設と思われ、調査時名称をそのまま使用し、溝の項で扱った。

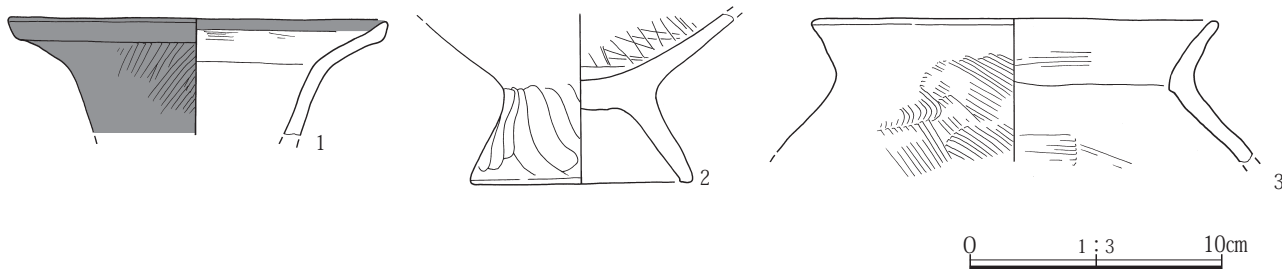
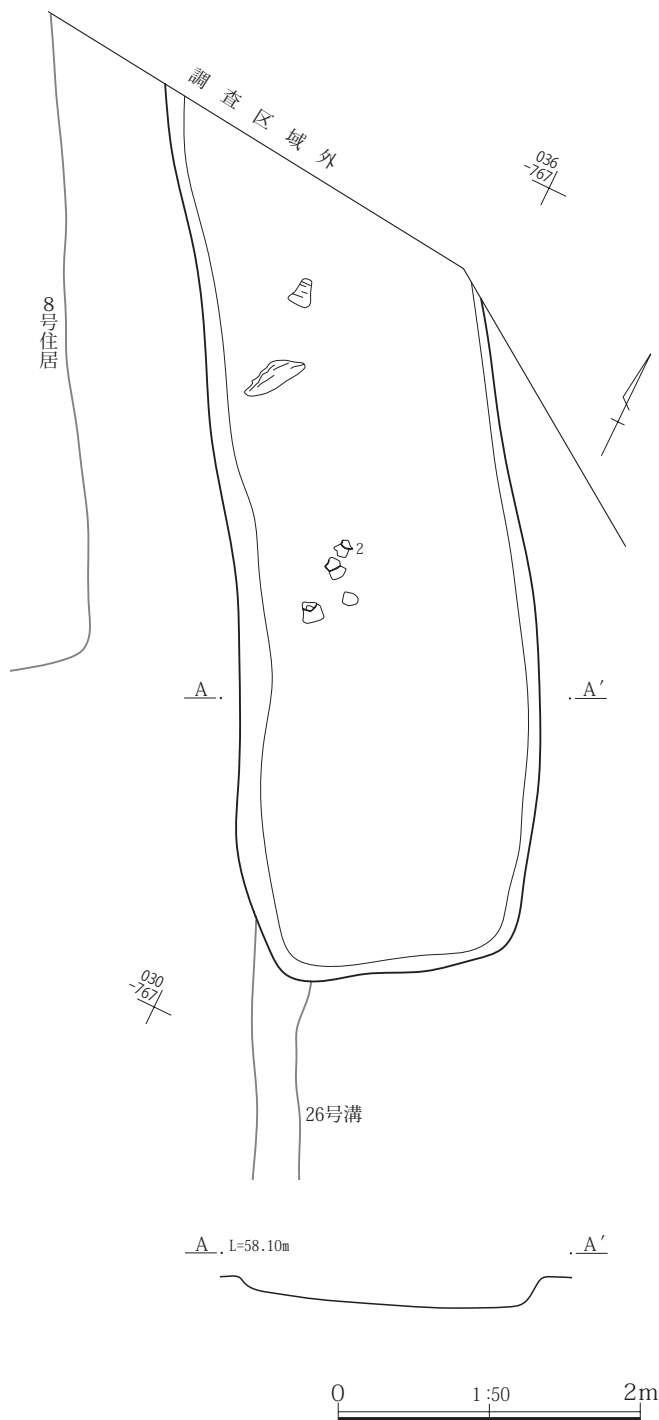
位置 北側は035-768グリッドで調査区境となり、南隅は030-765グリッドにある。

形状規模 長辺が東側へ膨らむように小さく湾曲し整美さに欠ける長方形を呈すと思われる。調査範囲では長さ5.35m以上、最大幅1.95m、深さ20cm前後の規模である。底面はほぼ水平で中央部分がやや窪み、壁際と2cm前後の比高差がある。

長軸方位 N-34° W。26号溝の重複部分とほぼ一致している。西側80cm前後の位置に隣接する8号住居東壁とも平行に近い間隔で並んでいる。

出土遺物 多量の土師器を出土し3点を図示した。2は中央付近床上8cmの出土で、他は埋没土内の遺物である。図示した以外に重量で2.5kgの土師器を出土している。甕類の破片が大半であった。

備考 26号溝に前出している。埋没土の記録を欠く。出土遺物は底面より10cm前後高い位置であり埋没過程で周辺の住居遺物を投げ込んだような状態だった。遺構の時期を確実にする遺物を伴わないが、4世紀代の土師器が主体である。



第340図 2区27号溝および出土遺物

28号溝 (第341図 PL. 58-①、94 遺物観察表441頁)

2区東南隅の、集落と流路の境付近にある溝である。

位置 東側は011-690グリッドで調査区境となり、西隅は004-716グリッドで流路部分に重なって分からなくなる。

形状規模 ほぼ直線的な溝で、確認できた長さは26.9m、幅104～178cm、深さ17～55cmを測る。

方位 N-75° E

出土遺物 土師器 1は西側の下層出土である。図示した以外の遺物は出土していない。

備考 埋没土の記録を欠いている水田に伴うと思われる29号溝および古墳時代前期の22・39・57号住居に後出している。底面レベルは20cm前後低くなっているが配置や規模から1区9号溝に繋がると思われる。両者を繋いだ場合、確認できた部分のみで40mを超える長さになる。9号溝では集落の南隅にあって住居との重複はなかったが、本溝は複数住居との重複があり、古墳時代前～中期を通じて集落南側を区切る溝とはならない。底面のレベルは10cm前後の比高差で波打つような緩やかな凹凸があり水路的ではない。

30号溝 (第341図)

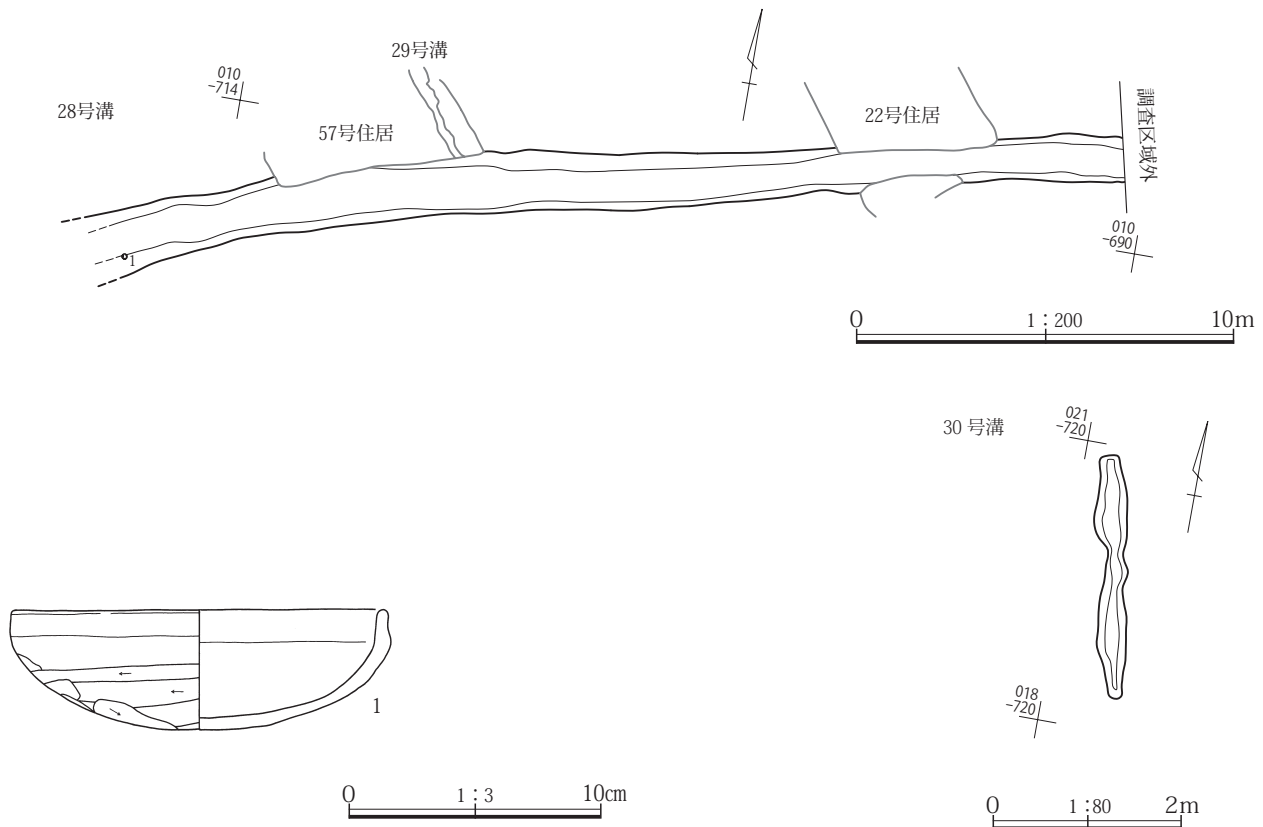
49号住居の床下調査で確認した小規模の施設である。住居壁溝としては配置から不自然で、29号溝同様に集落に前出する溝として扱った。

位置 北端は020-719グリッド、南隅は018-719グリッドにある。

形状規模 直線的な溝で全長2.6m、幅は一定せず17～36cm、深さ5～8cmを測る。

方位 N-12° W

備考 底面は細かな凹凸があり、全体では南側へ低くわずかに傾斜している。水田に伴う水路を想定した29号溝に規模は類似するが、走向が異なり、同時存在の施設とは考えにくい。埋没土の記録を欠いている。出土遺物はない。



第341図 2区28・30号溝および出土遺物

29号溝 (第342図 PL. 58-②)

2区の集落掘り方調査時に見つかった窪みが溝状に繋がりが、T字状の配置が確認できた。層位および走向から3・4区で調査した水田に関連した水路と想定した。南北走向部分を29A号溝、北側で確認した東西走向部分を29B号溝、30号住居と重複する部分で29A号溝から西側へ分岐する部分を29C号溝とし、この項ではA溝・B溝・C溝と呼称する。

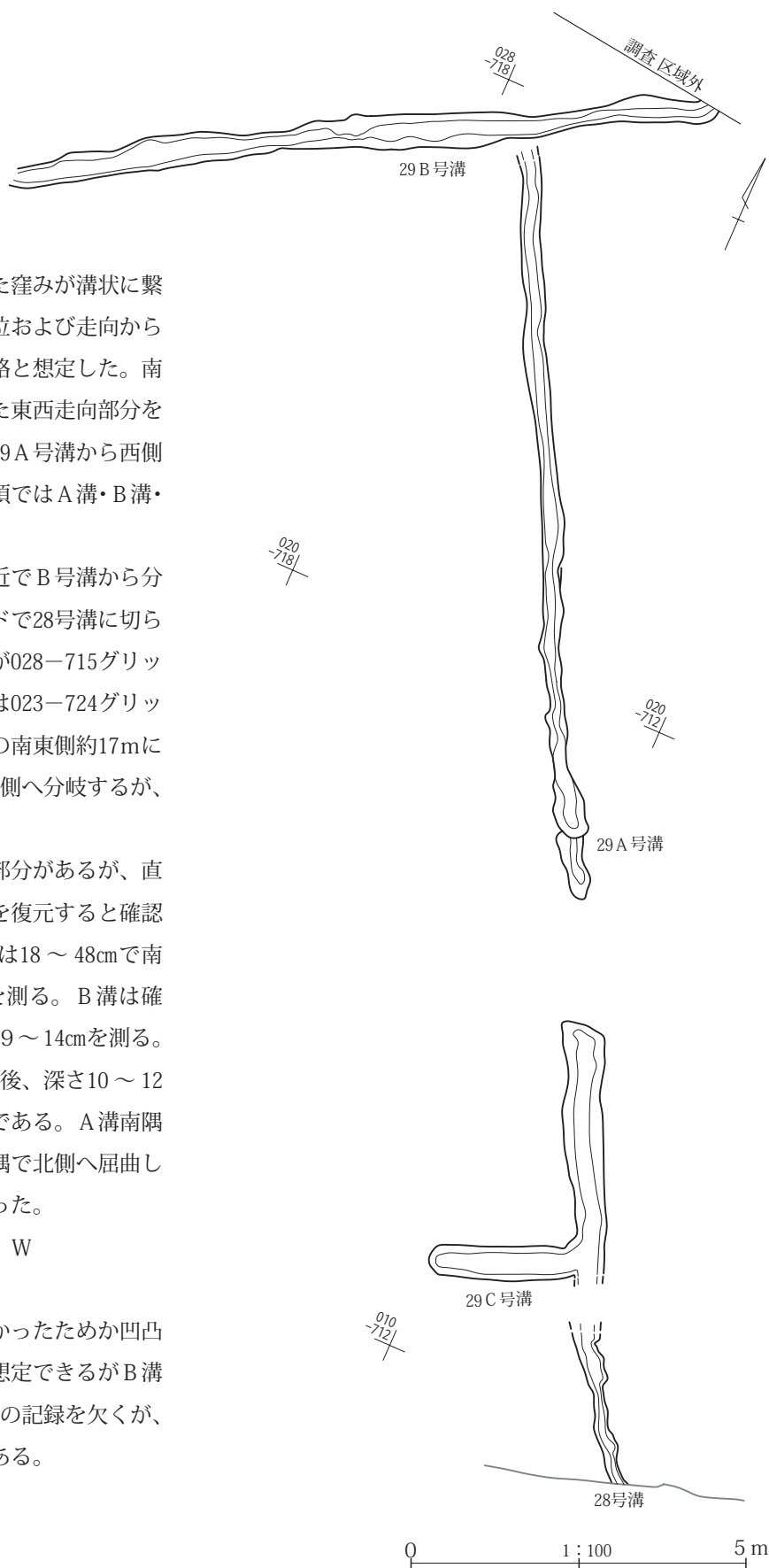
位置 A溝北端は027-716グリッド付近でB号溝から分岐するようだ。南端は009-707グリッドで28号溝に切れ、その先は確認できない。B溝は東側が028-715グリッド付近で調査区境に接している。西隅は023-724グリッド付近で分からなくなる。C溝はB溝の南東側約17mにあり、012-709グリッドで29A溝から西側へ分岐するが、2mほどで分からなくなる。

形状規模 A溝は途中で確認できない部分があるが、直線的に繋がる溝と思われる。この部分を復元すると確認できた範囲で長さは19.8mである。幅は18～48cmで南側に幅太部分がある。深さ9～12cmを測る。B溝は確認できた長さ10.4m、幅23～52cm、深さ9～14cmを測る。C溝は確認できた長さ2.2m、幅50cm前後、深さ10～12cmでA溝との近接部分と近似した規模である。A溝南隅は東側へ弱く曲がっている。B溝は東隅で北側へ屈曲している可能性があるが明瞭にできなかった。

方位 A溝N-27°Wで南隅はN-34°W

B溝N-61°E、C溝N-65°E

備考 底面レベルは地山の把握が難しかったためか凹凸が激しい。A溝は南東側へ低い傾斜が想定できるがB溝は不明である。出土遺物はない。埋没土の記録を欠くが、住居掘り方埋め戻し土に近似した土である。



第342図 2区29号溝

(3) 3区の溝

3区では多岐にわたる時期の溝を調査したが溝の数は少ない。3-1区は今回の調査で唯一As-B下の畑が確認できたが、これに近接した時期の5・6号溝を調査した。他に泥流下の畑に伴う7号溝がある。

3-1区では古代の区画溝と想定される1・3・4号溝があるが、4区の溝同様古代の区画の項(271頁)で扱った。2号溝は泥流上の畑に後出する。As-C混土を耕作土とした水田調査では、水田に後出する8・10号溝と水田に伴う9号溝を確認した。

3-1区の溝

5号溝 (第343図)

3-1区は調査工程の都合で北側と南側を分けて調査した。この時に確認した2条の溝(調査時南側は14号溝とした)は途中で不明瞭部分を挟むが、走向や底面レベルから同一の溝と判断できる。この項では北側をA溝、南側をB溝と呼称する。

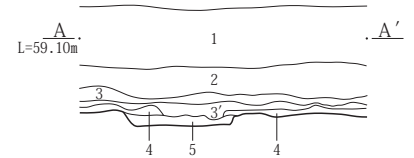
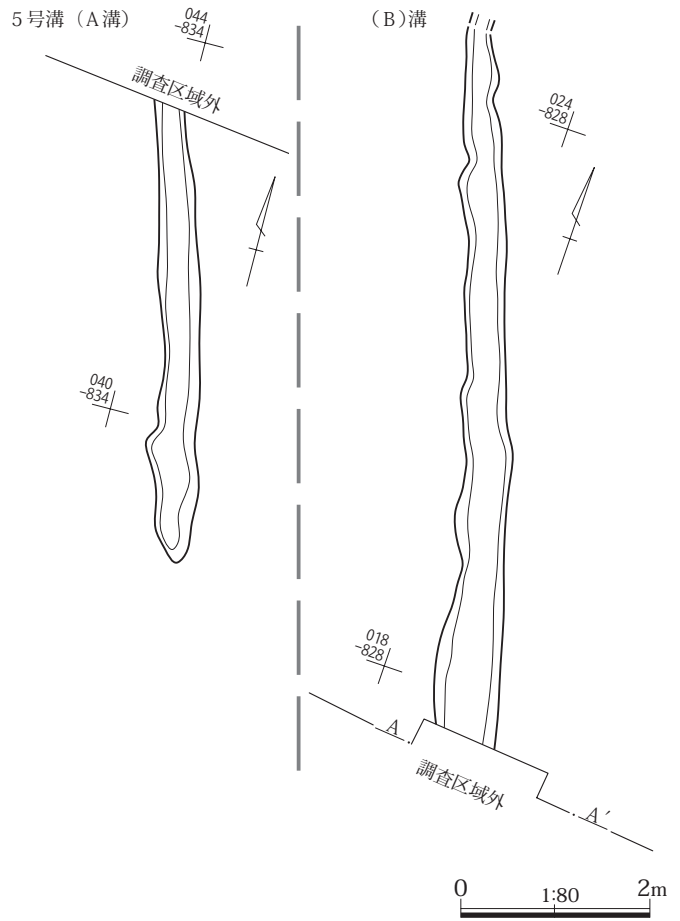
位置 A溝北側は832-038グリッドで調査区境となり、南隅は043-834グリッドにありそれ以南で不明瞭になる。B溝南側は017-826グリッドで調査区境となり、北隅は024-829グリッドにありそれ以北で不明瞭になる。

形状規模 残存部分では両溝とも直線的な溝である。長さはA溝4.9m、B溝部分で7.5m、A B両溝併せた全体では26.7mで途中約14mの不明部分を挟んでいる。幅は27~70cmでB溝部分に幅広部分が多い。深さは2~5cmで両溝とも浅い。

方位 A溝N-15°W、B溝N-17°W

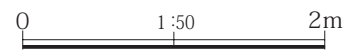
埋没土 As-B下畑耕作土と同質の埋没土で水流の痕跡はみられない。As-B降下時には埋没していた。

備考 底面レベルは緩やかに波打つような凹凸があるが、両溝併せた全体でも5cm前後の比高差しかない。畝間の痕跡を確認した7号畑を縦断し、同畑に後出すると思われる。5・6号畑の畝間方向に近い走向で、畑境の区画溝や道側溝の可能性はある。出土遺物はない。



5号溝

- 1 灰色土 As-Aらしい軽石混じる現代耕作土。
- 2 灰褐色土 洪水層か。しまりのない砂質土。
- 3 灰褐色土 砂質土。灰色味の強いAs-B混土。3'は黒色味・しまりともに強い。
- 4 As-Bの一次堆積層。
- 5 暗褐色土 粘質土。As-B直下の畑耕作土と同じ。



第343図 3-1区5号溝

6号溝 (第344図)

A s - B 下の調査面で確認した溝で、A s - B 降下時には埋没していた溝である。

位置 北西側は042-832グリッドで、南東側は029-819グリッドで両側とも調査区境となり全容は把握できない。直線的に南東側へ延びれば2区へ続くはずだが、確認されていない。

形状規模 ほぼ直線的な溝で、全長22.0m、幅35～68cm、深さ2～6cmを測る。

方位 N-53° W

備考 底面レベルはほぼ水平で比較的凹凸は少ない。規模の大きな遺構だが周辺では類例のない走向の溝である。7号畑の東縁部を画すような位置にあるが同畑畝間方向とは大きく傾き、同時存在と断定はできない。埋没土の記録を欠く。出土遺物はない。

7号溝 (第344図)

調査時には第3面と名を付けた水田に後出する不明瞭な畑畝間調査面で確認した溝である。

位置 北西端は043-849グリッド、南東端は037-846グリッドにある。

形状規模 屈曲部を通る実長8.1m、幅38～57cm、深さ6～9cmで幅・深さとも差が少ない。

方位 北側N-30° W、南側N-39° W 南側で小さく屈曲し、7号畑と同じ走向となる。

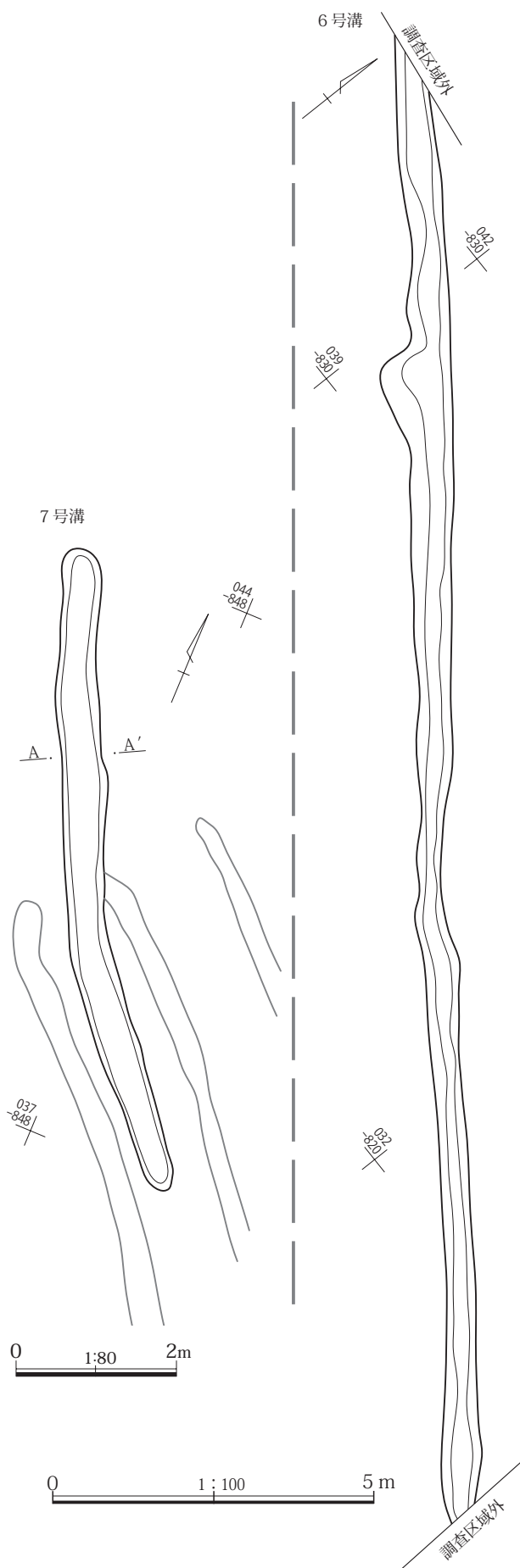
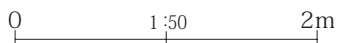
埋没土 洪水堆積土を埋没土としている。ブロック状の混入物があり、人為的な埋戻しの可能性がある。

備考 8号畑の畝部分にあり同畑に後出するようだが、南側走向が畝間と同じで近似する時期の溝と考えられる。出土遺物はない。



7号溝

1 灰褐色土 砂質土。黄褐色砂質土ブロック混じる。



第344図 3-1区6・7号溝

3-2区の溝

2号溝 (第345図 PL. 58-③)

泥流上で確認された1号畑に後出する溝であるが、同畑の畝間と重なり合って不明瞭な部分がある。

位置 北西側は045-876グリッドで調査区境となる。南東隅は031-866グリッド付近で分からなくなる。

形状規模 不規則で緩やかな屈曲のある不整な溝である。確認できた長さは17.6m、幅31~58cm、深さ7~12cmを測る。屈曲のある溝としては規模は比較的一定である。底面レベルは緩やかな凹凸があるが全体では地山傾斜に沿って南東側へ低く傾斜し、北西側と10cmの比高差がある。

方位 両端を結んだ走向でN-35° W

埋没土 洪水堆積土で人為的埋戻しの痕跡はない。底面付近に水成堆積痕のようなシルト質土が水平堆積する。

備考 1号畑の畝間に沿うような走向で、同畑の区画が残っていた時期の遺構である。出土遺物はない。

8号溝 (第346図)

A s - C 混じりの耕土上で水田畦畔とともに確認した。

位置 北端は033-887グリッドで、南隅は026-884グリッド付近でそれぞれ調査区境にかかり、全容は把握できない。

形状規模 直線的な溝で、確認できた範囲で長さ7.5m、幅31~58cm、深さ3~7cmを測る。

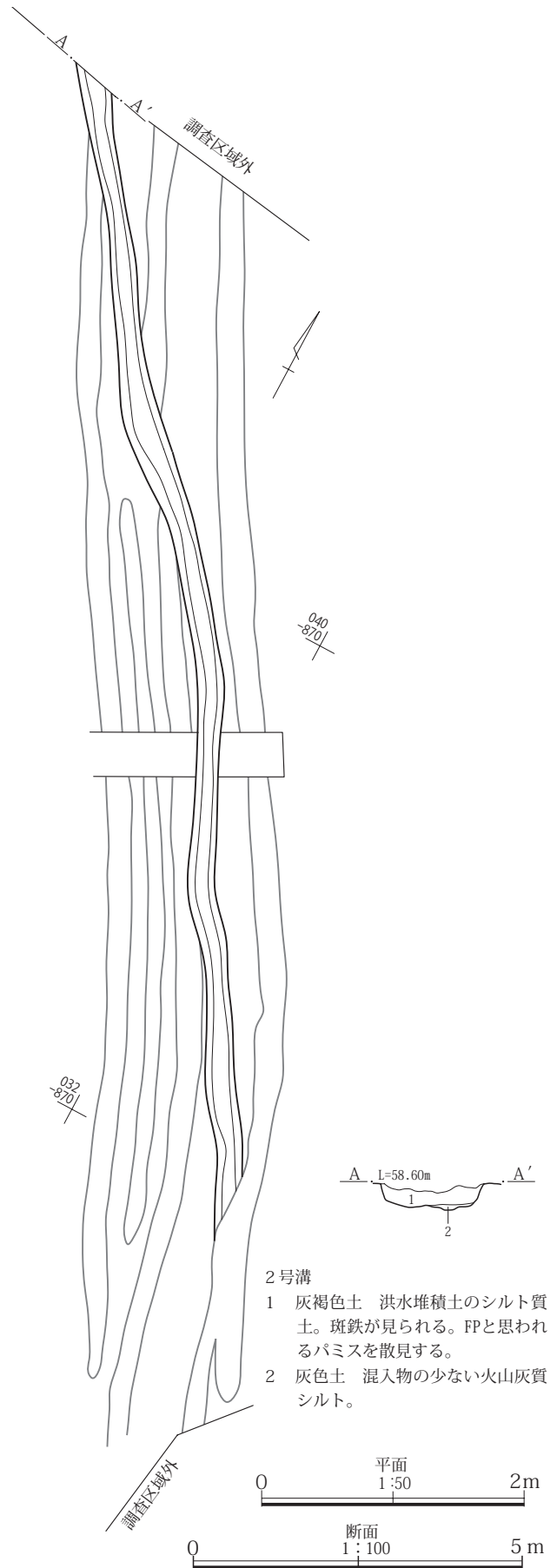
方位 N-23° W

備考 水田に後出する溝で走向は上面で調査した畑(3・5号畑)の畝間に近く、水田南北畦畔や4区12号溝など水田に関わると想定される溝よりやや北側を向いている。底面レベルは緩やかな凹凸があるが全体では地山傾斜に沿って南側へ低く傾斜している。埋没土の記録を欠く。出土遺物はない。

10号溝 (第346図)

位置 西側は036-888グリッドで調査区境になりその先は不明となる。東隅は035-884グリッドで畦畔を壊した地点で止まっている。

形状規模 調査範囲では直線的な溝で、長さ4.6m、幅32~45cmを測る。深さは7cmで東隅付近は浅くなる。底面は細かな凹凸があるが全体ではほぼ水平である。



第345図 3-2区2号溝

方位 N-78° W

備考 水田に後出する。水田畦畔や畑畝間に本溝と近似する走行方向の施設は見られない。埋没土の記録を欠く。出土遺物はない。

9号溝 (第346図 PL.56-③)

B区画水田とC区画水田の境となる大畔(本文330頁)中央付近に作られた水路である。西側の4区に繋がるはずだが確認できなかった。

位置 南西側は037-888グリッド、北東側は045-877グリッドでそれぞれ調査区境となり全容は把握できない。

形状規模 若干の屈曲が中央付近にあり、北東側には堰状の施設が想定される幅狭部分がある。確認できた長さは13.5m、幅は狭い中央付近で45cm、最も広い西側で168cmを測る。畔上面からの深さは9~13cmである。

方位 N-59° E

備考 底面レベルは地山傾斜に沿って均等に北東側へむかって低くなり、南東隅と14cmの比高差がある。埋没土の記録を欠く。出土遺物はない。



第346図 3-2区8~10号溝

(4) 4区の溝

泥流上の溝には8～12号溝があるが、このうち8～11号溝は古代の区画を形成し、3－2区の溝に繋がると思われ271頁で扱った。13～15号溝は泥流下の水田とそれに後出する古墳時代前期の集落調査時に確認した溝である。

12号溝(第347・348図 PL.58-④、94

遺物表観察441頁)

1号畑に後出して地山の傾斜に沿って開削された溝である。西側の流路と平行した走向である。南隅で小さく屈曲するが、直線的に続く浅い溝がありこの部分を12B号溝(本文ではB溝)として説明を加える。

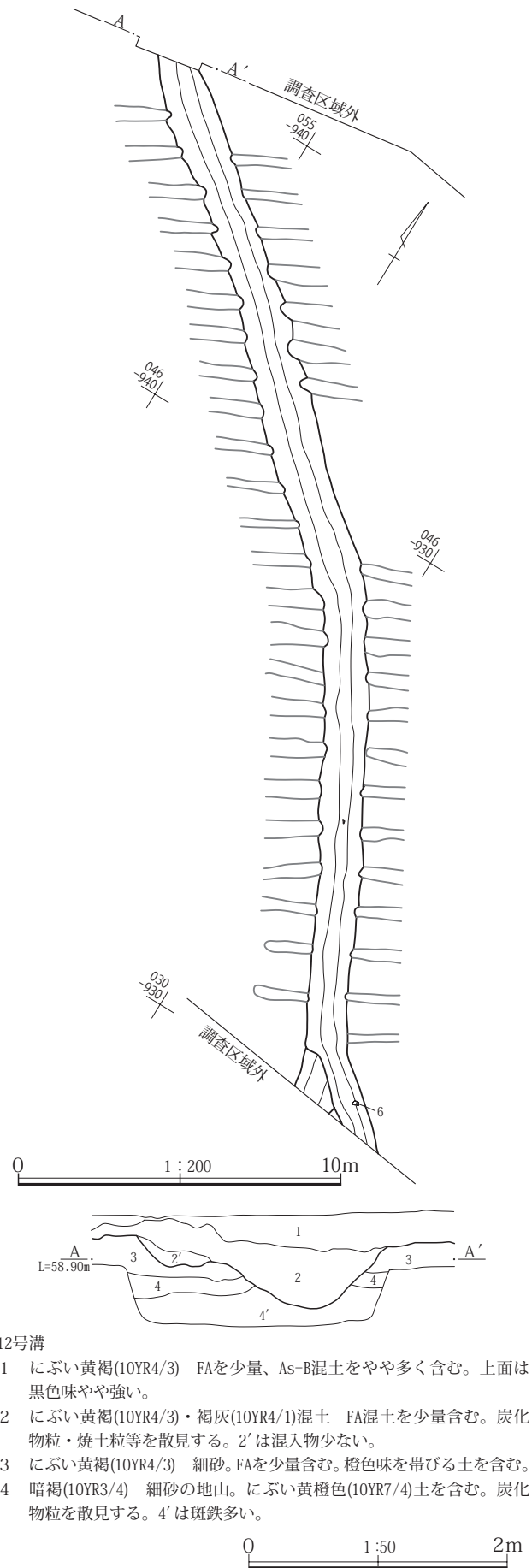
位置 北西端は055-943グリッドで、南東隅は043-930グリッドでそれぞれ調査区境に接しており、両端とも溝の始点は捉えられていない。

形状規模 043-930グリッドで小さく屈曲し、全体では逆「く」の字状を呈している。032-924グリッド付近で分岐するが、直線的に南側へ続くB溝は底面が高く12～15cmの比高差がある。調査できた範囲で長さ34.1m、幅110～161cm、深さ32～52cmを測る。B溝は幅140cm前後、深さ32cmである。

方位 北側N-49° W、南側N-31° W

埋没土 洪水堆積土のシルト質土でほぼ単層である。北隅での観察では溝の掘り直し等の痕跡はなく、この地点からの推測では浅い南隅B溝は前出と思われる。

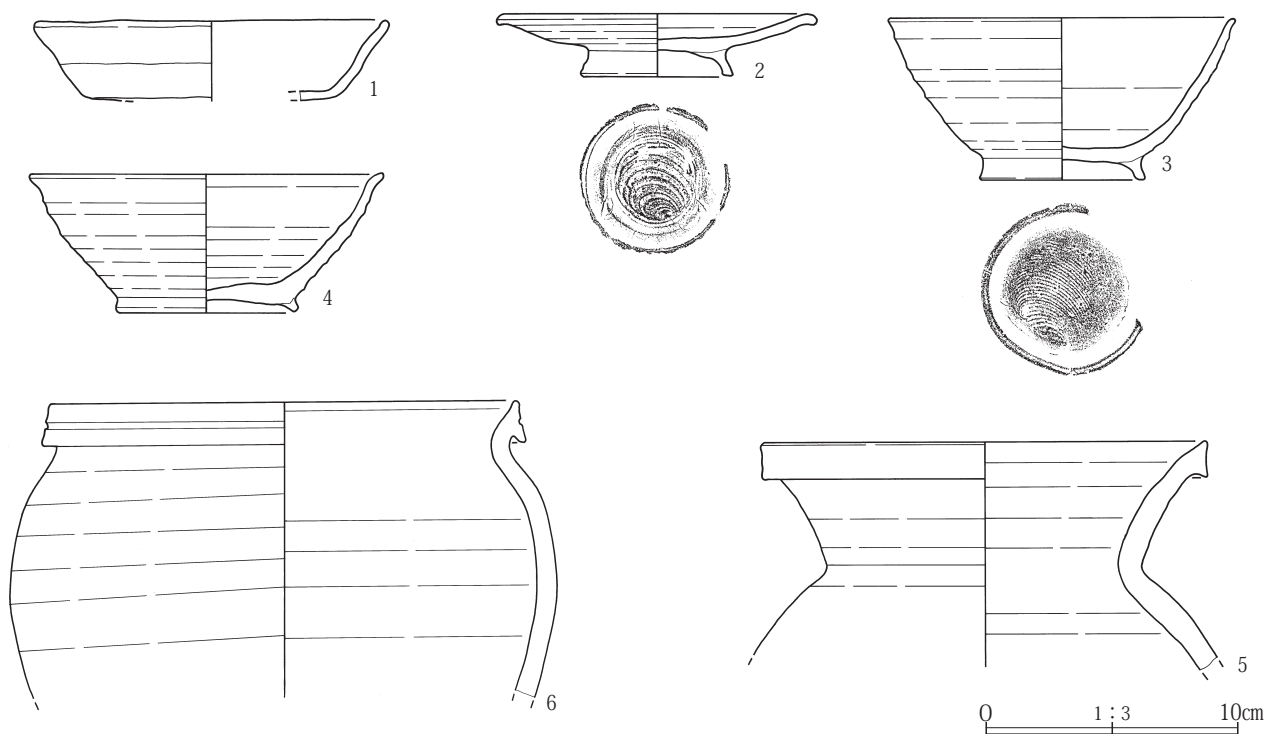
出土遺物 出土遺物は多く須恵器を中心に6点を図示した。須恵器甕6が南隅の底面ほぼ直上で出土し、他は埋没土内の出土である。図示した以外にも出土遺物は多く重量で約3.5kgの土器を出土した。須恵器が最も多く、灰釉陶器も1/7を占めていて、住居の割合と差異がある。
備考 底面レベルは地山の傾斜に沿って南側へ低くなり、北側と15cmの比高差を持つ水路的な施設である。平安時代の集落はすべて本溝東側にあり、住居との重複がないのに集落と同じ9世紀を中心とする出土遺物もやや多い。8～11号溝(本文271頁)より規模は大きい区画溝の一部となる可能性がある。



12号溝

- 1 にぶい黄褐(10YR4/3) FAを少量、As-B混土をやや多く含む。上面は黒色味やや強い。
- 2 にぶい黄褐(10YR4/3)・褐灰(10YR4/1)混土 FA混土を少量含む。炭化物粒・焼土粒等を散見する。2'は混入物少ない。
- 3 にぶい黄褐(10YR4/3) 細砂。FAを少量含む。橙色味を帯びる土を含む。
- 4 暗褐(10YR3/4) 細砂の地山。にぶい黄橙色(10YR7/4)土を含む。炭化物粒を散見する。4'は斑鉄多い。

第347図 4区12号溝



第348図 4区12号溝出土遺物

13号溝(第349図 PL. 56-⑦)

水田の南北畦畔と同じ走向にあり水田ではこの溝を区画境とした(本文228頁)。調査範囲の中ほどで13B号溝が二股状に分岐している。

位置 北西端は052-909グリッド、南東側は037-899グリッドで調査区境となり全容は把握できない。

形状規模 直線的な溝で調査範囲では長さ18.9m、幅49~97cmを測り、13B号溝分岐点以南で幅太になっている。深さは6~13cmを測る。

方位 N-37° W

埋没土 分岐点付近の断面から上層は13B号溝に後出することが分かるが、下層では区別できなかった。

備考 緩やかな凹凸があるが、北側では地山の傾斜に沿って南東側へ低くなり、北西隅と10cmの比高差がある。水流は確認できないが水路的な溝である。南側では細かな凹凸がありやや不整となる。出土遺物はない。

13B号溝(第349図)

位置 北西端は042-903グリッドで13号溝から分岐し、033-898グリッドで調査区境となる。

形状規模 分岐後はほぼ直線的な溝で、南隅付近は西側

に向かってやや湾曲している。調査できた範囲で長さ11.4m、幅45~58cm、深さ4~9cmを測る。13号溝北側と近似した規模である。

方位 N-32° W

埋没土 13号溝下層と同じである。

備考 底面レベルは比高差7cmの凹凸があり、水路的ではない。出土遺物はない。

14号溝 (第349図)

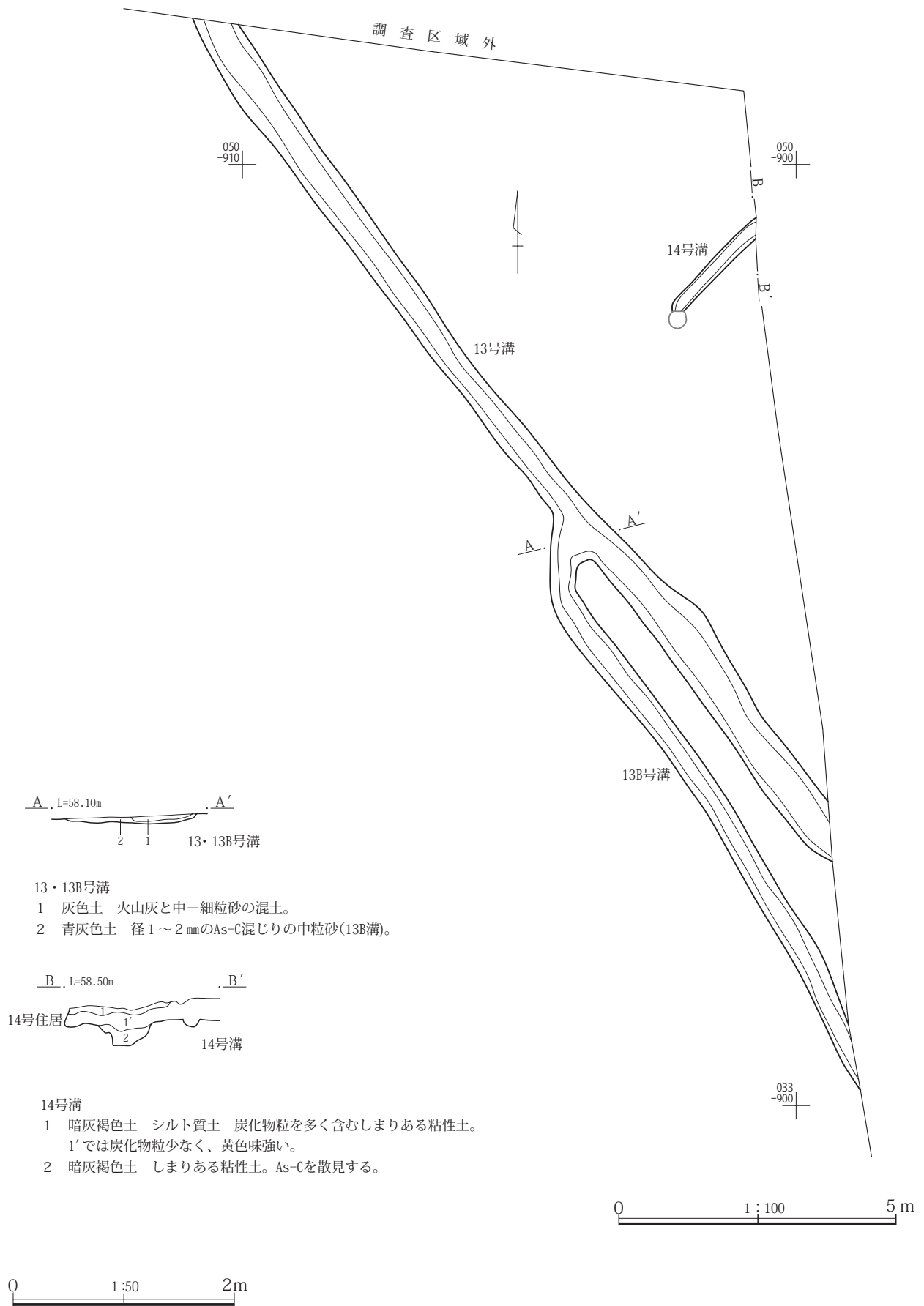
位置 南西端は047-902グリッドにあり、北東側は049-900グリッドで調査区境となる。

形状規模 直線的な溝で、調査できた範囲では長さ2.2m、幅25~30cm、深さ6~10cmを測る。確認面では13号溝より幅狭だが、壁際断面から13号溝と近似した上幅であることが分かる。

方位 N-45° E

埋没土 洪水堆積土の単層で、水流や人為的埋戻しの痕跡は確認できない。

備考 調査範囲では底面レベルはほぼ水平である。水田東西畦畔にやや近い走向で水田に伴う施設と考えたい。出土遺物はない。



第349図 4区13・14号溝

(5) 5区の溝

5区は1面調査で中世と古代の面が表れ、時期が明確でない遺構が多い。出土遺物から南西隅にある9・10号溝を古代の遺構と判断しこの項で扱った。

9号溝 (第350図 PL.94 遺物観察表441頁)

位置 北側は070-098グリッドで、南側は060-092グリッドで調査区境となり全容は把握できない。現道を挟んだ南側調査区でも本溝延長部分は確認できない。

形状規模 南寄り小さく屈曲し「く」の字状になる。調査できた範囲では長さ10.9m、幅68~116cm、深さ23~27cmを測る。底面は波打つよう比高差8cmの凹凸があり水路的ではない。

方位 N-33° W 南隅N-16° W

埋没土 混入物からAs-B以前と思われる。一部で水平堆積の痕跡がある。

出土遺物 中央付近の底面直上出土の転用品1を図示した。図示した以外にも土師器を少量出土している。

備考 10号溝に前出する。

10号溝 (第350図)

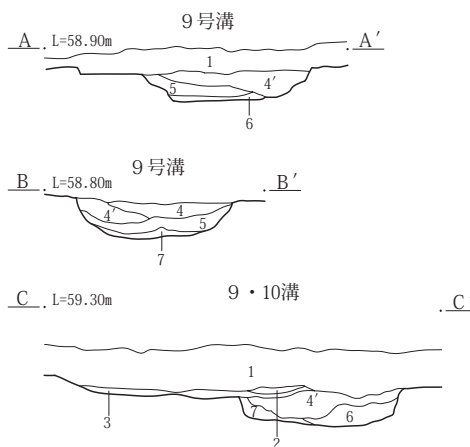
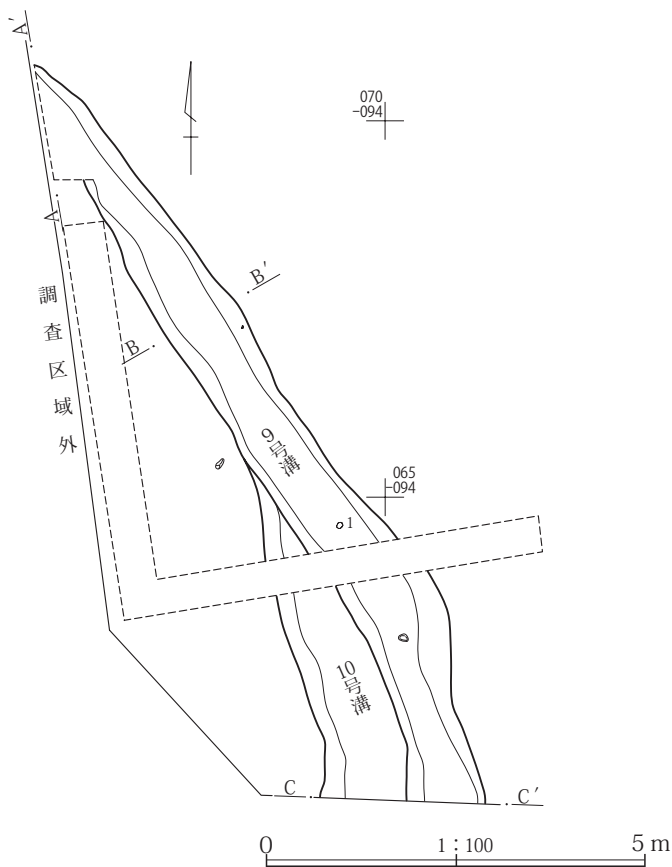
位置 北端は064-095グリッドで9号溝から分岐し、南側は060-093グリッドで調査区境となる。

形状規模 東側上面は9号溝と重複し幅は明確ではない。確認できた範囲で長さ3.8m、幅107cm、深さ13cm前後である。断面から幅150cm前後となりそうである。9号溝より9~20cm浅い。

方位 N-15° W

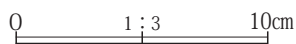
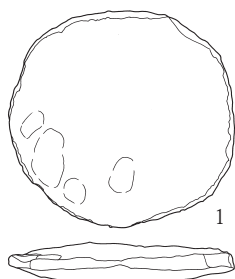
埋没土 埋没土からAs-B以前と思われる。

備考 9号溝に後出する。出土遺物はない。



9号溝

- 1 灰褐色~黒褐色の洪水堆積土層
- 2 にぶい褐(10 YR5/3) 黄褐色土小ブロックを含むしまりやや弱い層。10号溝上層埋没土か。
- 3 褐灰(7.5 YR5/1) 斑鉄の見られる炭化物粒を少量含む層。10号溝埋没土。
- 4 灰黄褐(10 YR6/2) しまりある粘性土。斑鉄顕著。炭化物粒を少量含む。4'はやや砂質。
- 5 褐灰(10 YR5/1) ブロック状の黄褐色土や黒色土を含む。
- 6 黒褐(10 YR3/1) しまりやや弱い粘性土。小ブロック状の暗褐色土や黄褐色土および炭化物粒を含む。
- 7 にぶい黄橙(10 YR6/7) しまりやや弱い砂質土。黒褐色土を少量含む。



第350図 5区9・10号溝および出土遺物

12 遺構外の遺物

2区を中心に、4～5世紀代の遺物が広く散布し、遺構として把握できなかったが特に集中して出土する地点があった。ここでは3カ所の集中出土地点と流路脇の集中地点についてそれぞれ概要を記した。

次に4区北東側は平安時代の遺物が比較的多く散布しており、調査段階では包含層として扱った。特に遺物の多い北東隅周辺の遺物出土状態と遺物を記した。

最後に遺構や特定の地点出土として扱えなかった遺跡内全地点の古代遺物を一括して1区より順に示した。

1号土器集中地点 (第351・352図 PL.58-⑤、94 遺物観察表441・442頁)

2区南東隅付近の、住居を想定したが遺構の把握ができなかった地点である。2区集落の南限にある22・39号住居の間に位置し、北側に28号溝がある。調査段階での

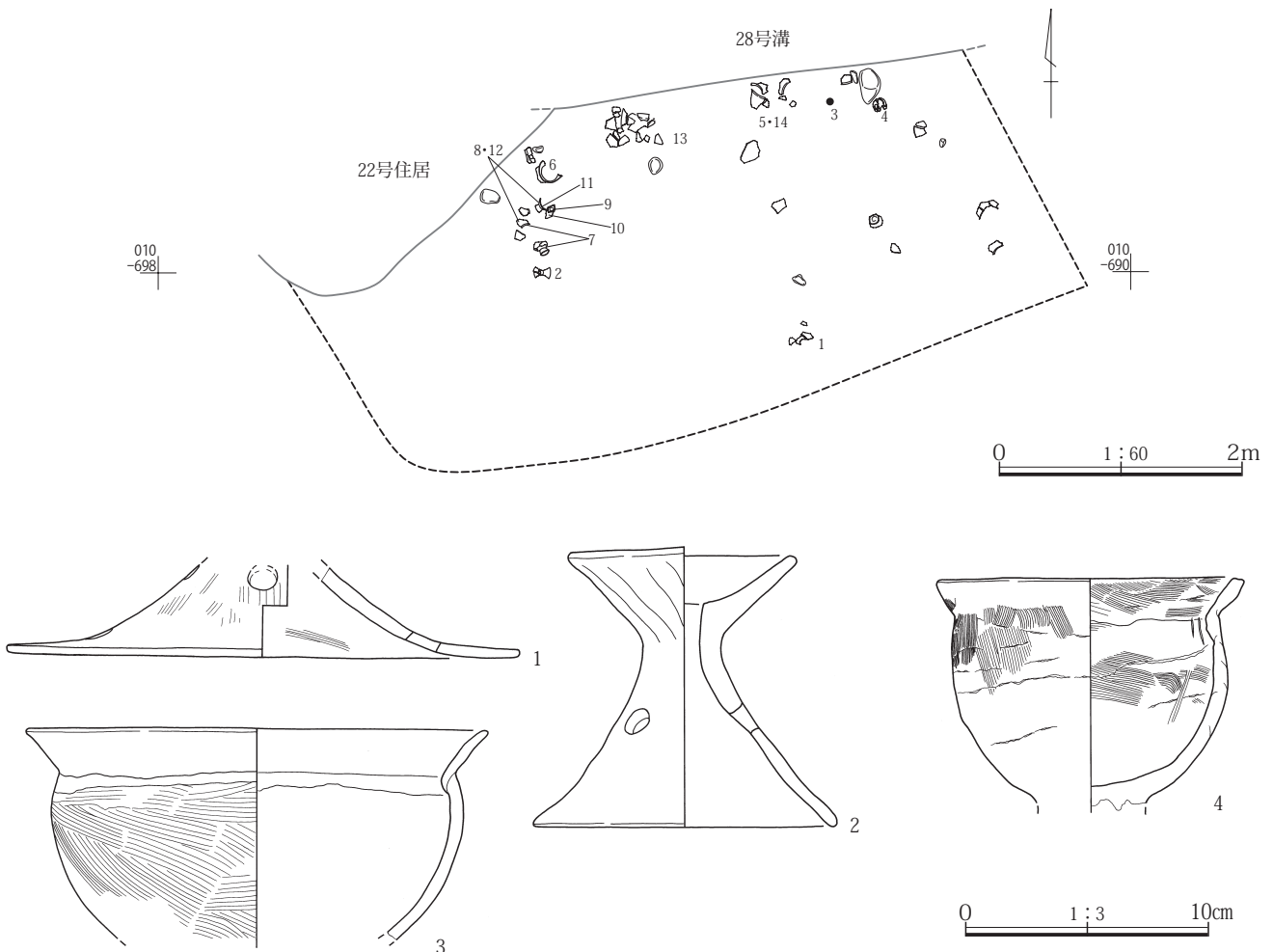
住居想定範囲を参考に図示した。

位置 東隅010-690、西隅010-695。

概要 周辺に広く遺物が散在する一帯だが、東西5m、南北2.5mほどの範囲に見られる遺物集中地点である。東側へ低く傾斜する斜度13/1000前後の緩斜面で、踏み固めや焼土等の散布はないが凹凸は少なく住居床面の可能性は残る。

遺物 14点の土師器を図示した。甕類の出土が多く、特に7～10のような小型台付甕類に完形付近まで復元できた個体の多さが顕著だった。小型台付甕類は地点西側からまとまって出土している。図示した遺物はいずれも確認面直上での出土であった。図示した以外に重量で3.1kgの土師器を出土し、大型の川原石も見られた。

備考 遺物の時期は4世紀代で混入品がなく、離れた地点から接合する遺物も少ない。遺物が流れ込んだ状況ではなく、元位置に置かれた状態と想定できる。



第351図 2区1号土器集中地点および出土遺物(1)



第352図 2区1号土器集中地点出土遺物(2)

2号土器集中地点 (第353図 PL.95
遺物観察表442頁)

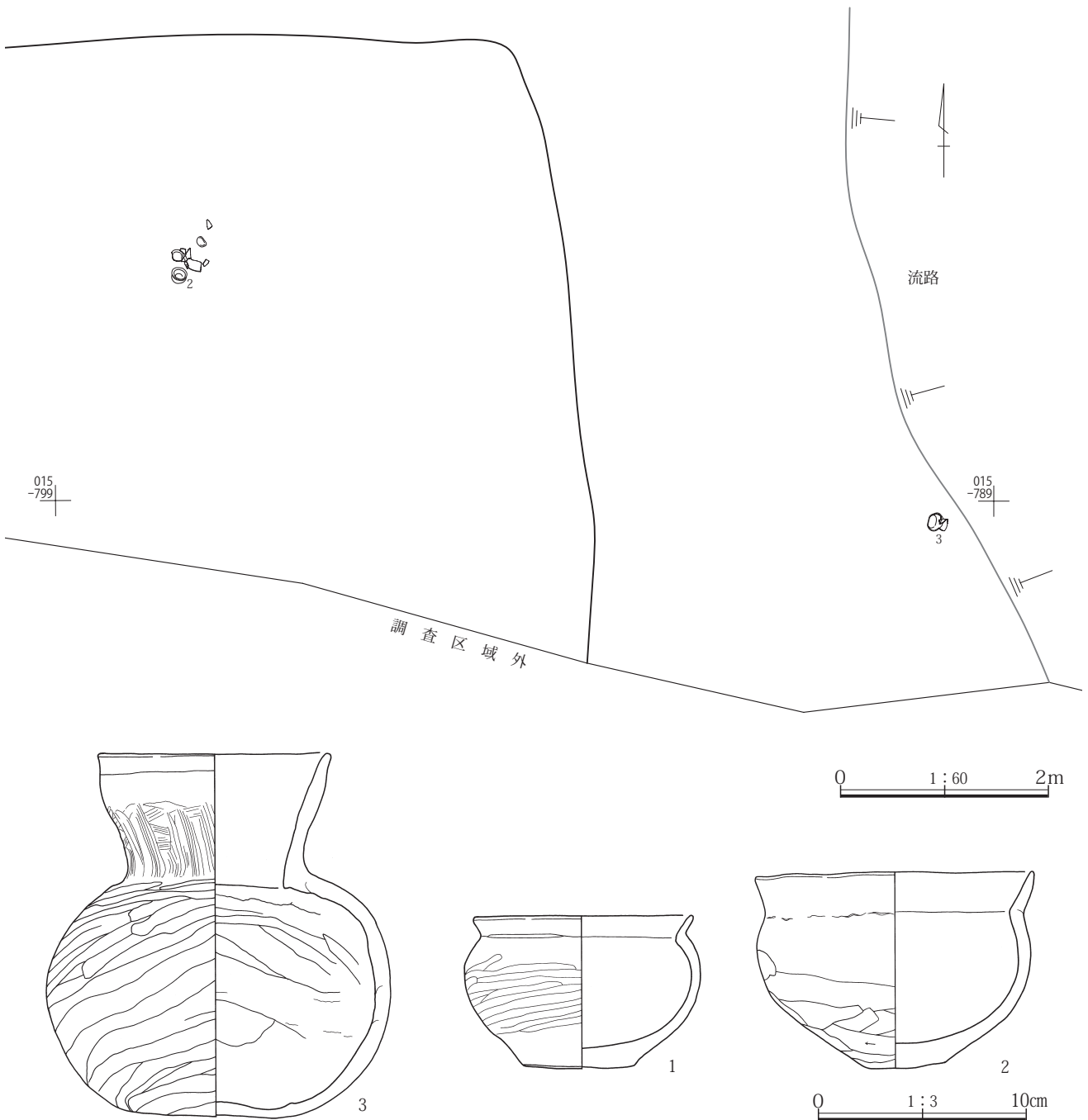
2区南西隅付近の、周辺に全く遺構が確認されていない一画にある。際立って遺物の多い地点ではないが、周辺に遺物出土のない中でやや特異な状況にあり、2号土器集中地点として図示した。南側・西側は調査区境に接し、東側は流路に削られている。1号土器集中地点同様に当初は住居確認を試みており、その際の想定範囲を参考に図示した。

位置 東隅014-789、西隅017-796。

概要 流路の影響の強い一画にある。周辺には遺物の散布がきわめて少ない。床面のような平坦面はなく、住居の存在は想定できない。

遺物 完形に近い土師器3点を図示した。埴3は他の土器群から8m離れた3号流路際の出土で同一の遺物群としては扱えない。供膳土器に偏ったが図示した以外に出土した重量で0.5kgの土師器は甕類が主体である。

備考 遺物は流路付近の出土だが磨滅は少なく元位置のまま出土したと推定できる。5世紀代の土師器である。



第353図 2区2号土器集中地点および出土遺物

3号土器集中地点 (第354・355図 PL. 58-⑥、95
遺物観察表442頁)

2区中央北隅にある。東側に中世館堀の1号溝があり、西側に55号住居・南側に43号住居がある。住居の密集する中の空白のような一画であり、61～64号土坑が中央付近にある。

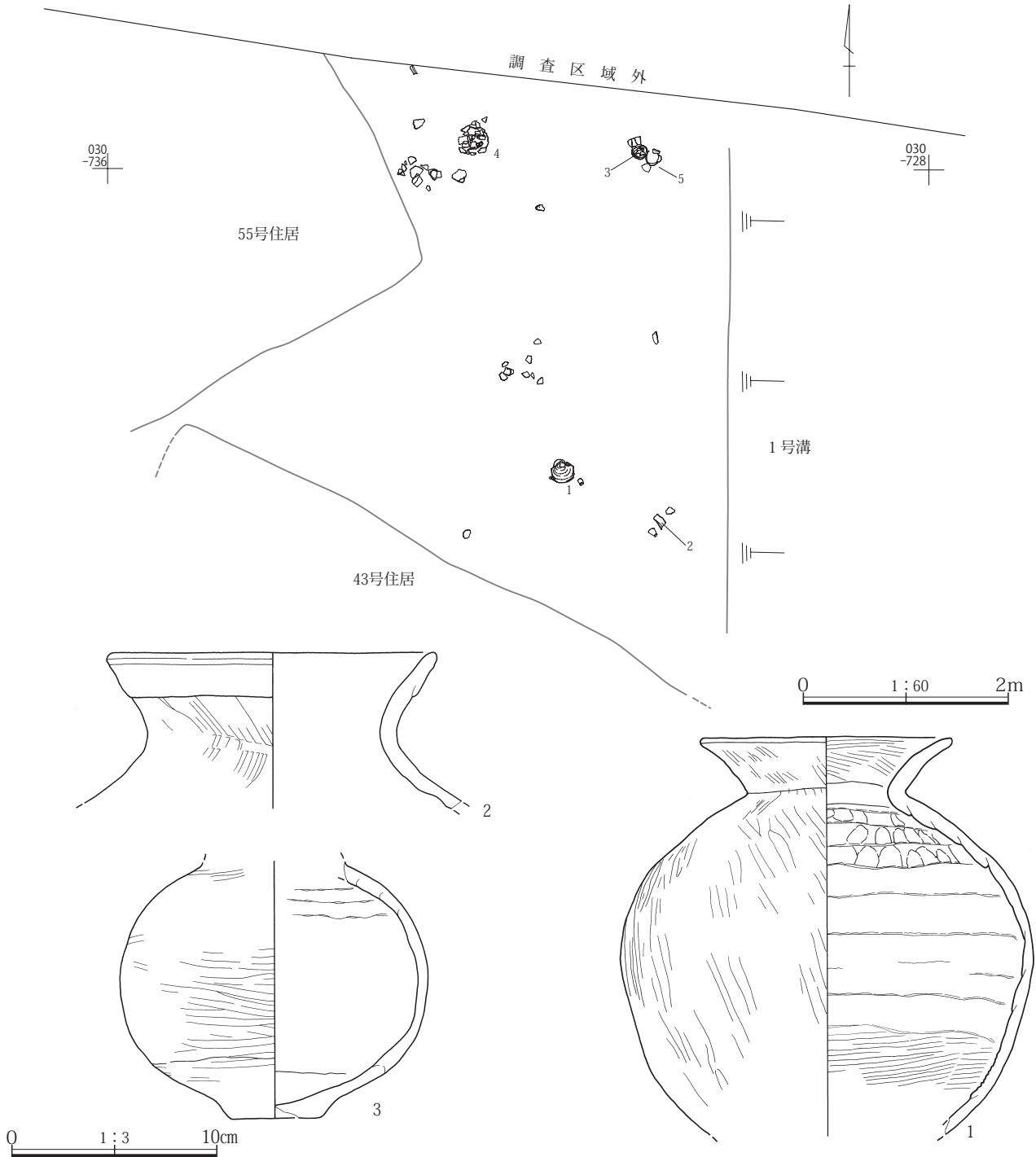
位置 北東隅030-730、北西隅030-733、南隅026-730。

概要 1号溝西側の東西幅約3m、南北幅約5mの住居

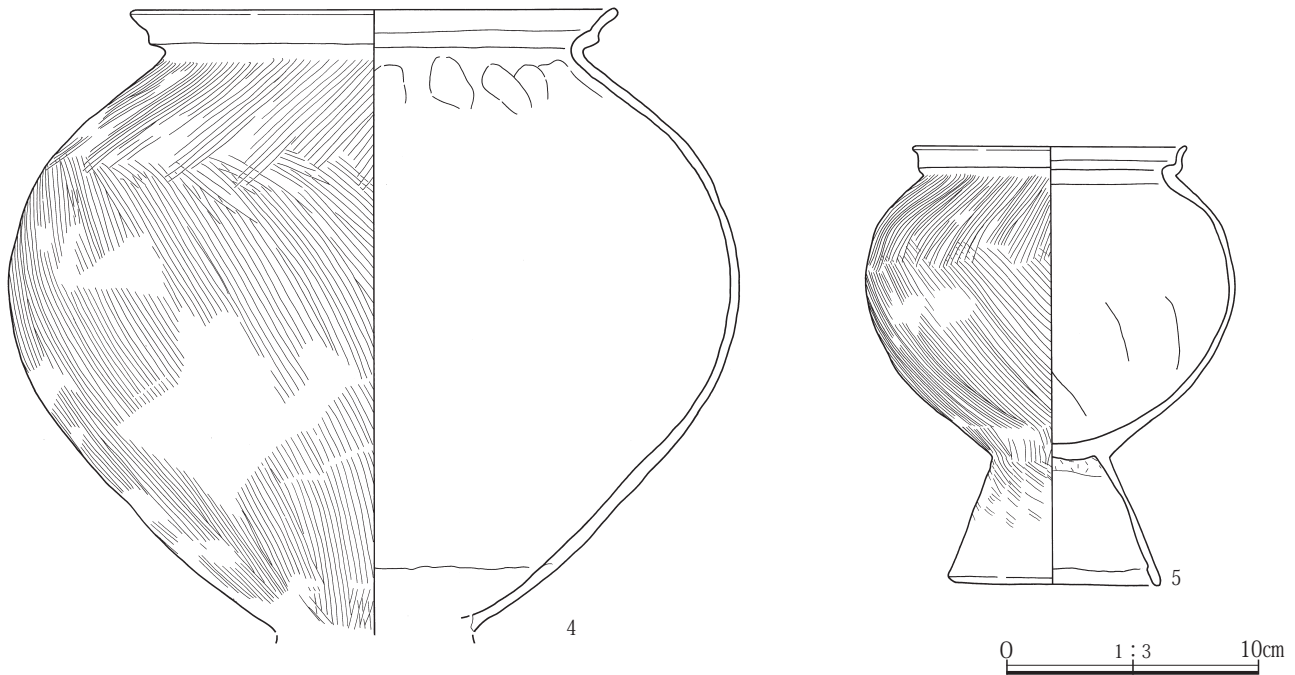
空白部分にあたる。平坦な確認面で住居が存在した可能性があるが、踏み固めや焼土等散布の痕跡はない。

遺物 土師器5点を図示した。壺3・台付甕5は2個体が並ぶようにして出土している。いずれの土器も確認面直上の高さでまとまって出土している。

備考 図示したのは5世紀代の遺物で、隣接する43号住居と同時期である。破片は離れた地点で接合するものがなく、元位置のまま出土したと想定できる。



第354図 2区3号土器集中地点および出土遺物(1)



第355図 2区3号土器集中地点出土遺物(2)

流路脇土器集中地点 (第356～360図 PL. 58-⑦・⑧、
95～97 遺物観察表442～444頁)

2区集落の西限を区切るような流路跡があり、調査段階で3号流路と呼称した。その東側緩斜面の広範囲から多量の遺物が出土した。遺物は水流による磨滅が見られず、完形近くまで復元できる土器も顕著だった。甕類も豊富に見られ供膳土器に偏るような祭祀が想定できる遺物の組み合わせではないが、集落では破片のみの出土だった装飾器台の完形品が出土するなど特徴的な遺物が見られる。特に遺物が集中していた2地点については地点A・Bとして部分図を別に示した。

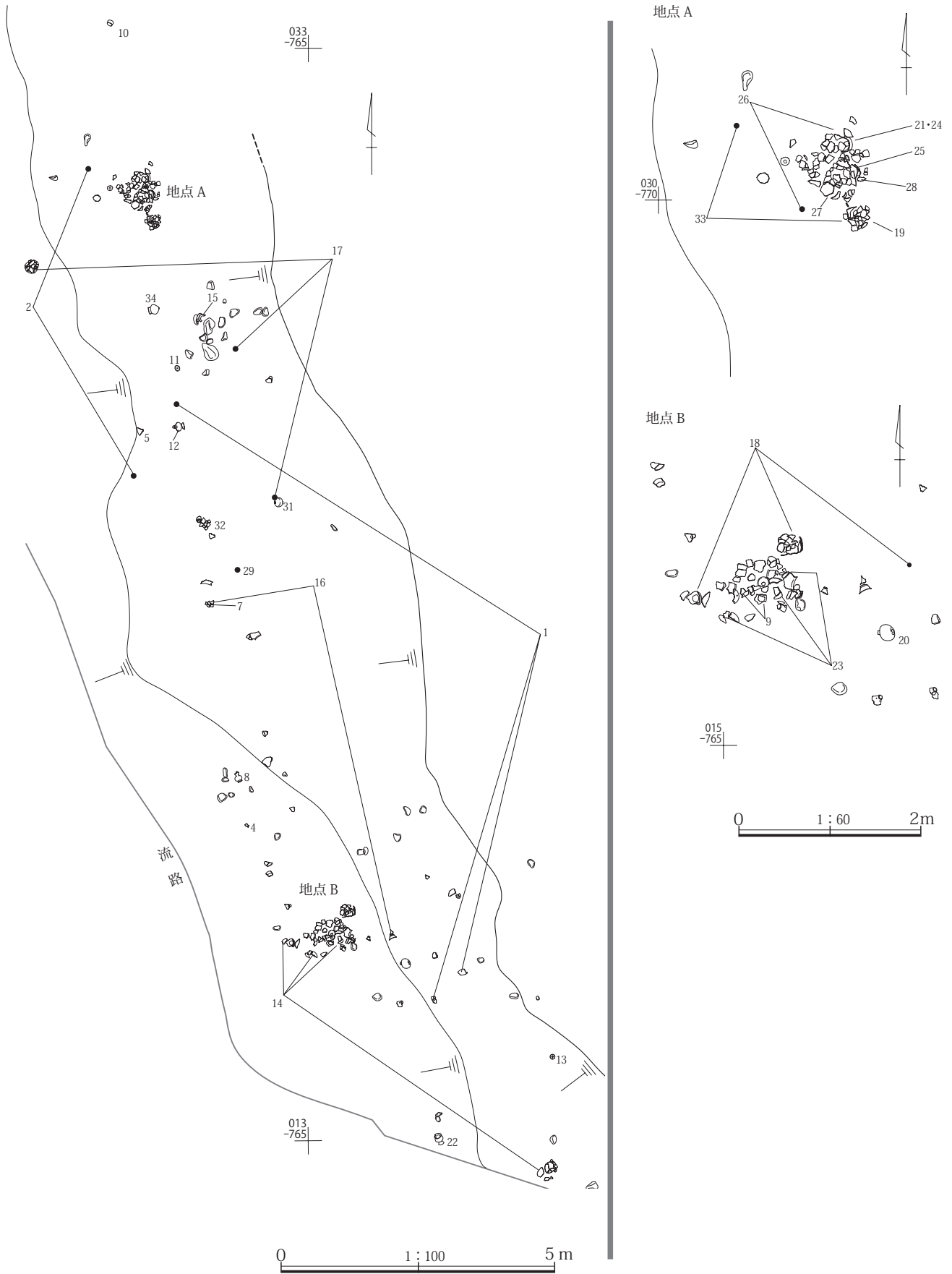
位置 北隅033-768、南隅012-760。

概要 川原石が不均等に混じっていたが、集石状にまとまって見られる部分もあった。特に顕著なのは027-766グリッド付近を中心とする径約1.5mの範囲は人為的に礫が集められたようだ。

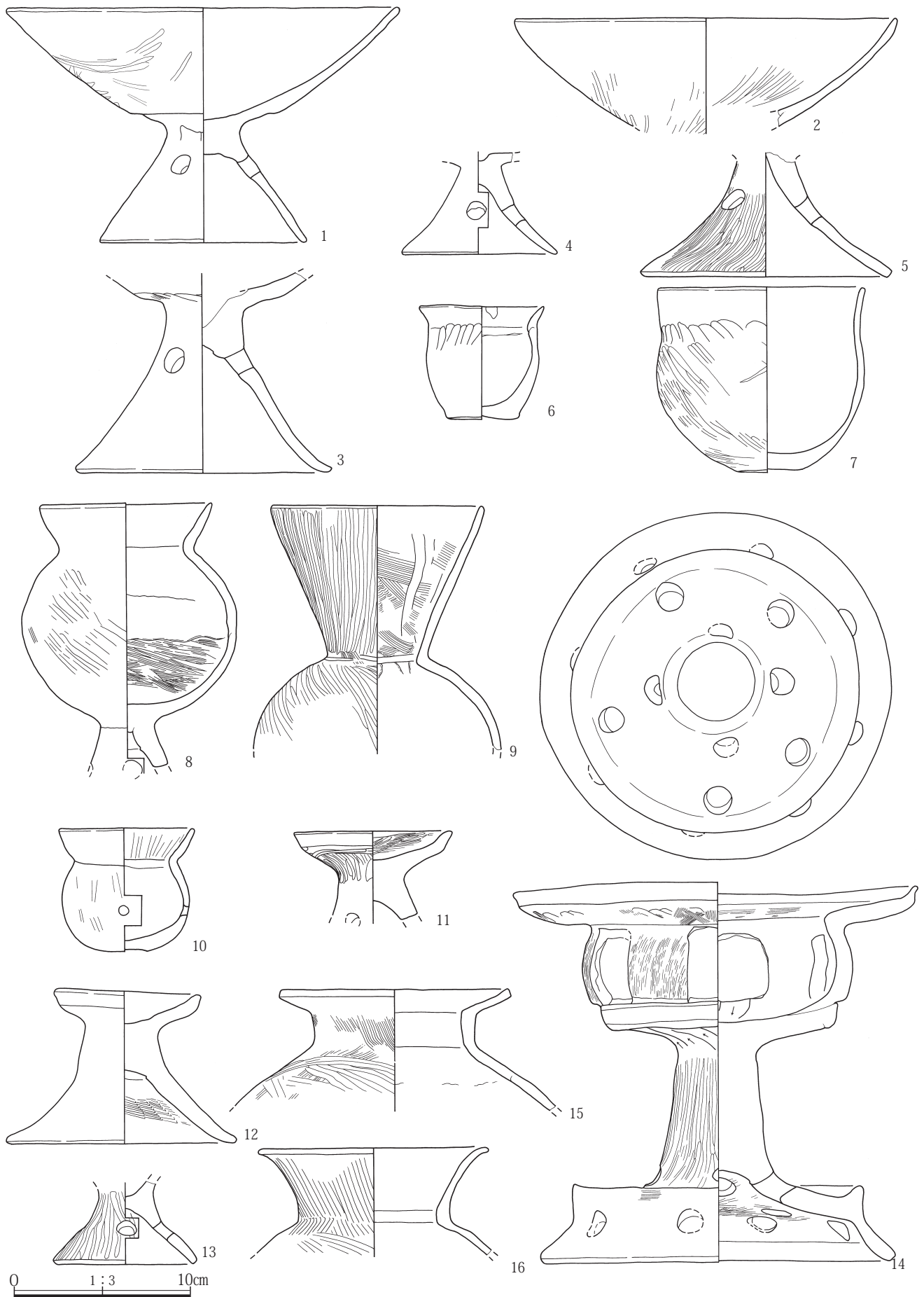
遺物 きわめて多量の遺物を出土し、土師器34点と石製品1点を図示した。地点Aは030-768グリッドを中心とする調査範囲北側の集中地点である。礫集中地点の北西2mの位置にある。個体数は最も多かった場所で高杯2、壺19、台付甕21・24～28、甕33が図示できた。煮沸土器が集中していた地点と言えよう。地点Bは016-764グリッドを中心とする調査範囲南側の集中地点である。埴

9と壺18が中央にあり南東側へ少し離れて壺20が出土した。本遺跡で唯一完形近くまで復元できた器台14がこの中に散乱し、南東側へ5m以上離れた位置の破片とも接合している。供膳土器主体の集中地点である。その他の土器は散在していて顕著な出土傾向は指摘できないが、礫集中地点南側に高杯1・2・5、器台11・12など高杯・器台が多いようだ。高杯1は南側へ12m近く離れた地点の破片とも接合している。図示した以外に重量で17.4kgの土師器を出土している。

備考 出土土器類は一部に離れて接合するものがあったが大半はまとまった状態で出土し、水流に洗われた痕跡もなく、流路脇に置かれた状態で出土したものである。3号流路には幾条もの流路変更があるようで全体では幅15m近い規模があるようだが、常時水流があったのか不明である。6世紀前半の泥流により埋没しており、水量の豊富な水路であったとは考えにくい。それでも2区の集落の西限を区切る規模があり、数条は貴重な水源であり氾濫は集落の驚異であったと思われる。水辺の祭祀行為が行われた場所と想定することは矛盾がない。出土遺物は供膳から煮沸まであって極端な偏りはないが、地点Aからまとまって出土した甕類を除外すれば全体では杯・器台類・壺類が目立っている。時期は4世紀代を中心とし、集落が続く5世紀代の遺物は少ない。



第356図 2区流路脇土器集中地点



第357図 2区流路脇土器集中地点出土遺物(1)



第358図 2区流路脇土器集中地点出土遺物(2)



第359図 2区流路脇土器集中地点出土遺物(3)



第360図 2区流路脇土器集中地点出土遺物(4)

4区包含層 (第361・362図 PL.97 遺物観察表444頁)

4区東側は広範囲に遺物の散布が見られ、北東隅周辺はトレンチ調査時に石帯の出土があり、包含層として詳細に周辺の遺物出土状態を記録した。特に遺物出土量の多かった部分をここで扱う。包含層下から確認した3号掘立柱建物および古墳時代の15・16号住居の輪郭を併せて図示した。

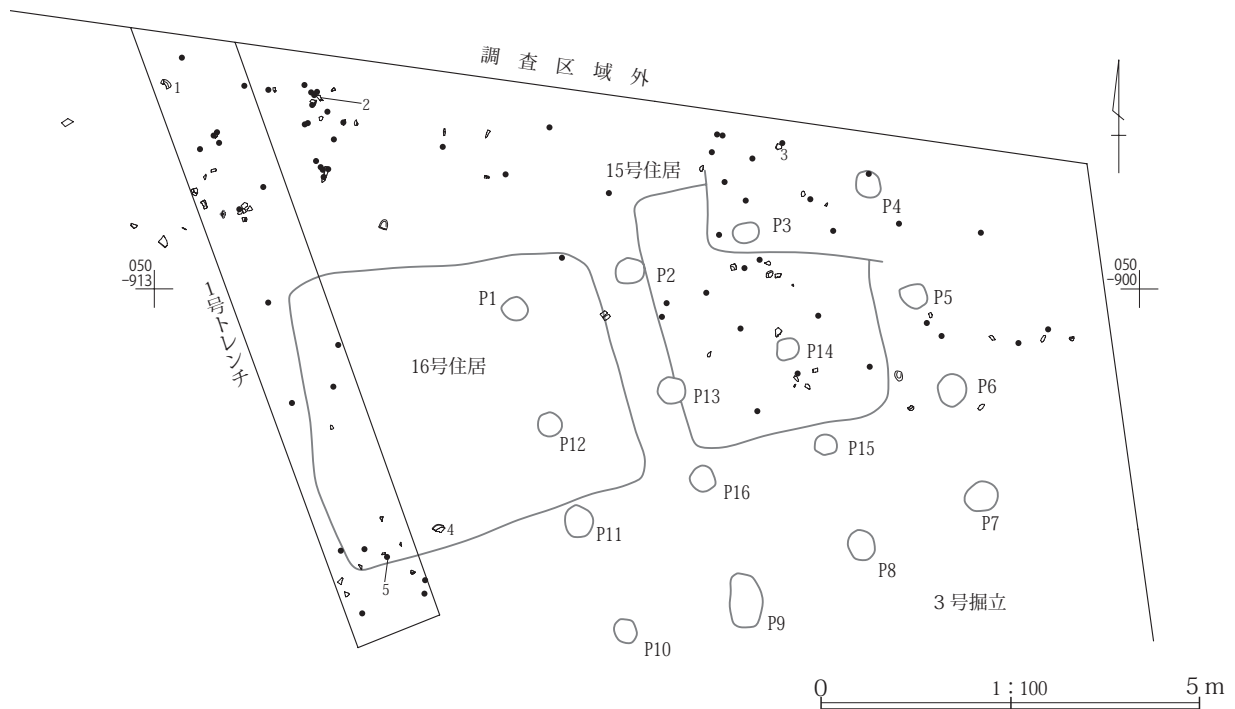
位置 (図示範囲)東隅049-901、北東隅052-914、南西隅045-910。

概要 3・4区には溝で区切られた区画があると想定したが(本文271頁)、この一画は第3区画に相当する。焼土や炭化物粒の混じる、遺跡内ではやや特異な土質の一画であった。遺物は特に集中地点を持たず広範囲に散乱

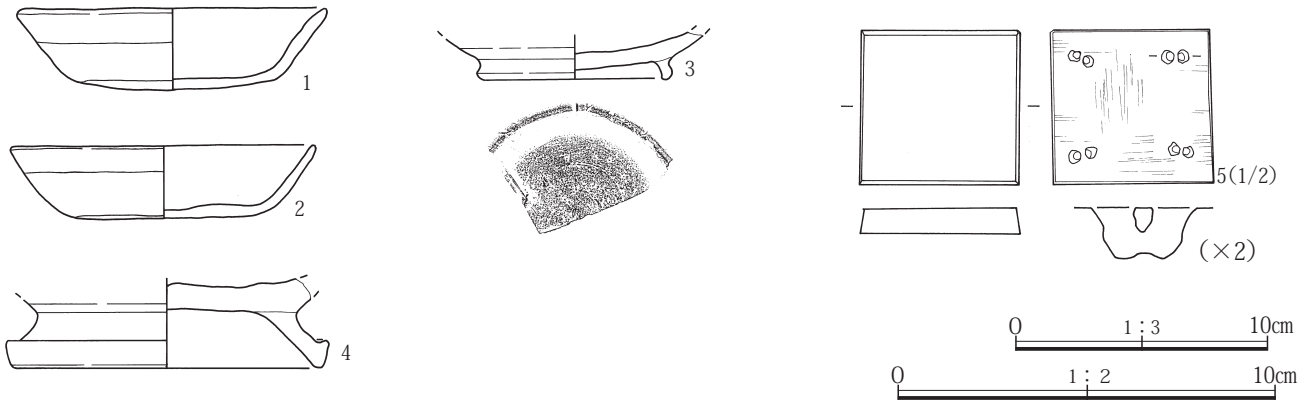
するような状態で出土している。

遺物 土器4点と石製品1点を図示した。4・5が16号住居上面の出土だが、同住居に伴う遺物ではない。完形の石製巡方5は潜り孔の穿孔状況を調べるためシリコン材を注入して計測した断面拡大図(×2)を併せて示した。土器類は全体的に小破片での出土が多かった。図示した以外に多量の遺物を出土しており、この地点出土遺物のみではないが包含層として扱った遺物は重量で土器約20kg、須恵器9kg、灰釉陶器0.2kgを測る。

備考 石製巡方は9世紀以降の律令官人に用いられたと考えられる遺物である。本遺跡の性格を検討するうえで重要な遺物なのだが遺構に伴っていない。至近の位置にあるのは3号掘立柱建物である。



第361図 4区包含層



第362図 4区包含層出土遺物

その他の遺物 (第363～366図 PL. 97・98
遺物観察表444～446頁)

遺構に伴わない古代の遺物を一括して以下に記す。1区は土器2点を図示したが、すり鉢1は遺構のない平安時代の遺物である。2区は土器27点と石製品1点を図示した。この区にも遺構のない平安時代遺物9～12が出土しているが、主に中世遺構の混入品である。その他は4世紀代の土師器が主体である。3区・4区は古墳時代と平安時代の土器が混在している。3区は土器4点、4区は土器・土製品16点と鉄器3点を図示した。5区は平

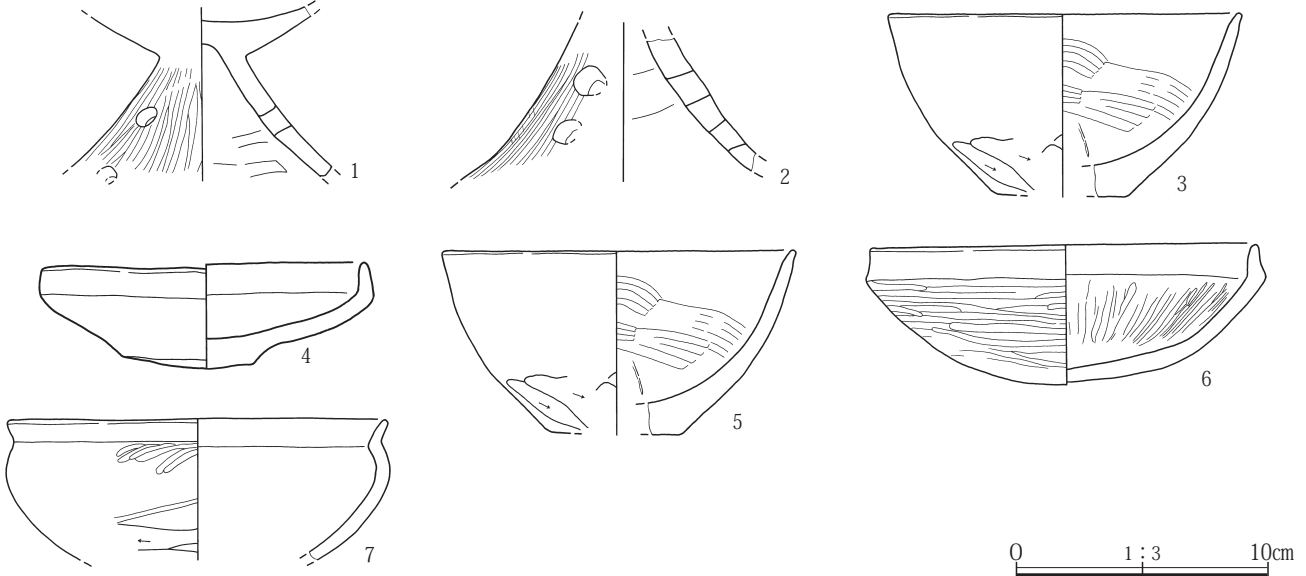
安時代の遺物で土器・土製品6点を図示した。

全体の出土量や傾向を概観すると、重量で東側集落の位置する1区3.2kg、2区35.5kgで住居軒数に比例するような出土量である。2区には流路内や土器集中地点として扱った土器が別に20kg以上あり、どちらも須恵器はごく少ない。西側集落のある3区で土師器4.1kg・須恵器0.8kg、4区土師器53.3kg・須恵器20.1kg(前述の包含層遺物を含む)、5区8.3kg・須恵器0.3kgで東側集落に比して遺物量が多い。4区の須恵器の多さは図示できなかった厚手の甕破片が多数含まれたことによる。

1区



2区

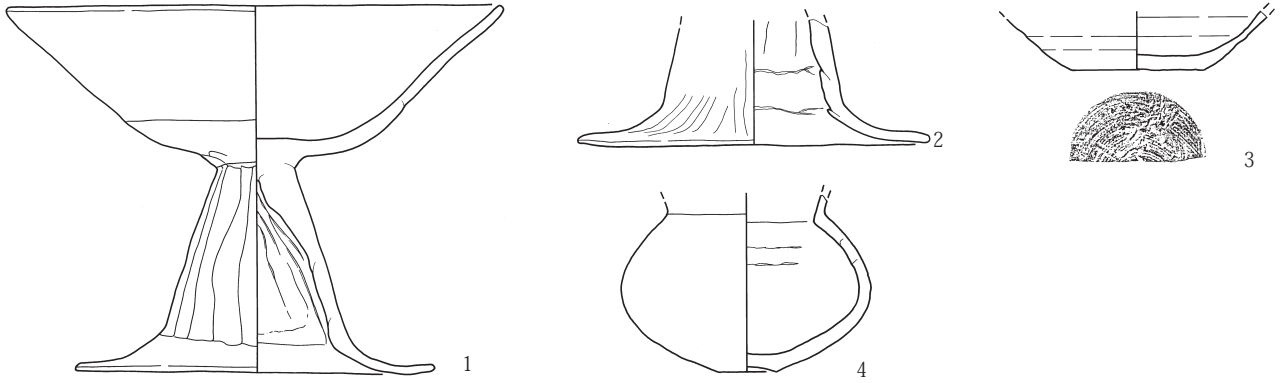


第363図 その他の遺物(1区・2区(1))

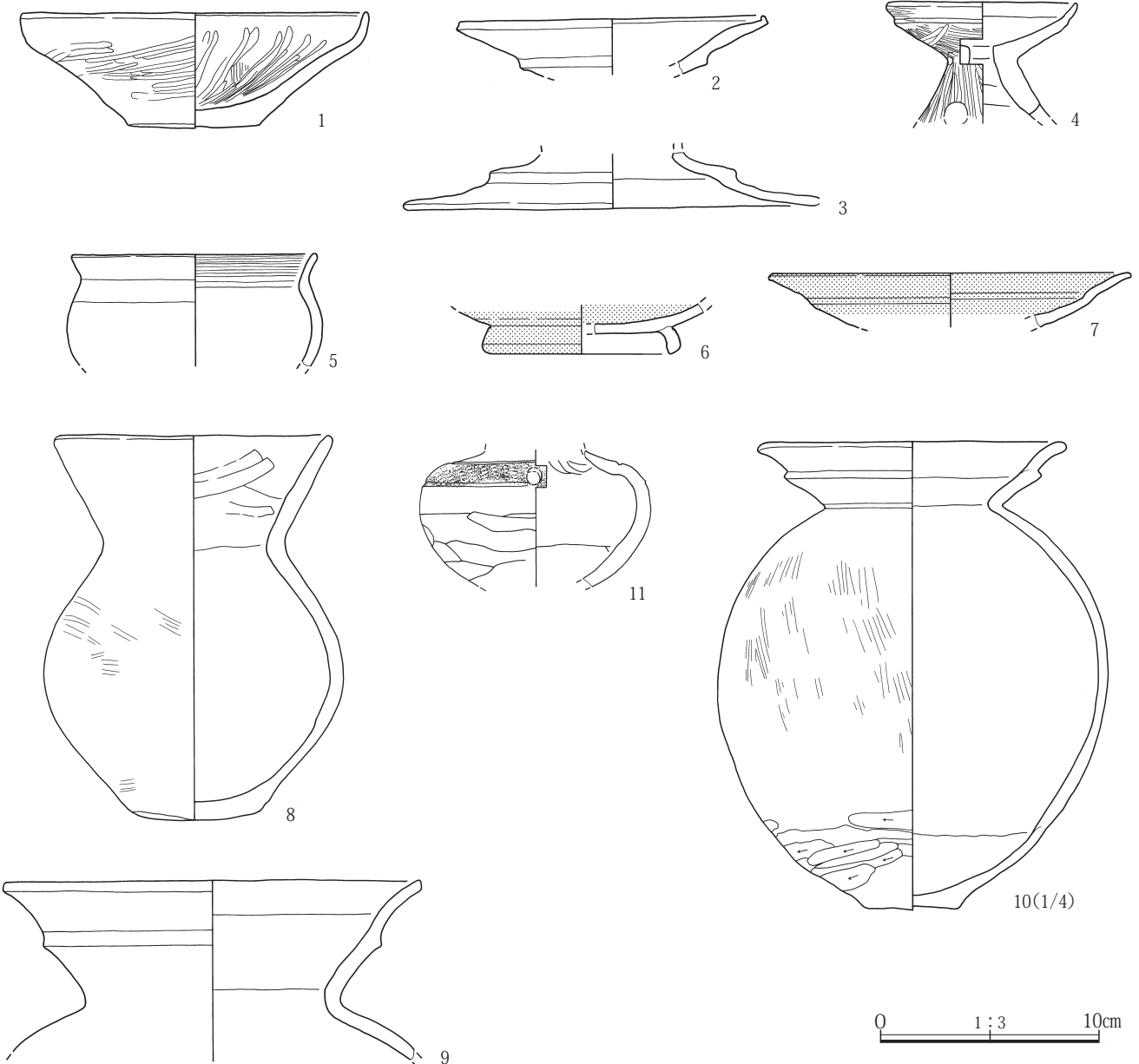


第364図 その他の遺物(2区(2))

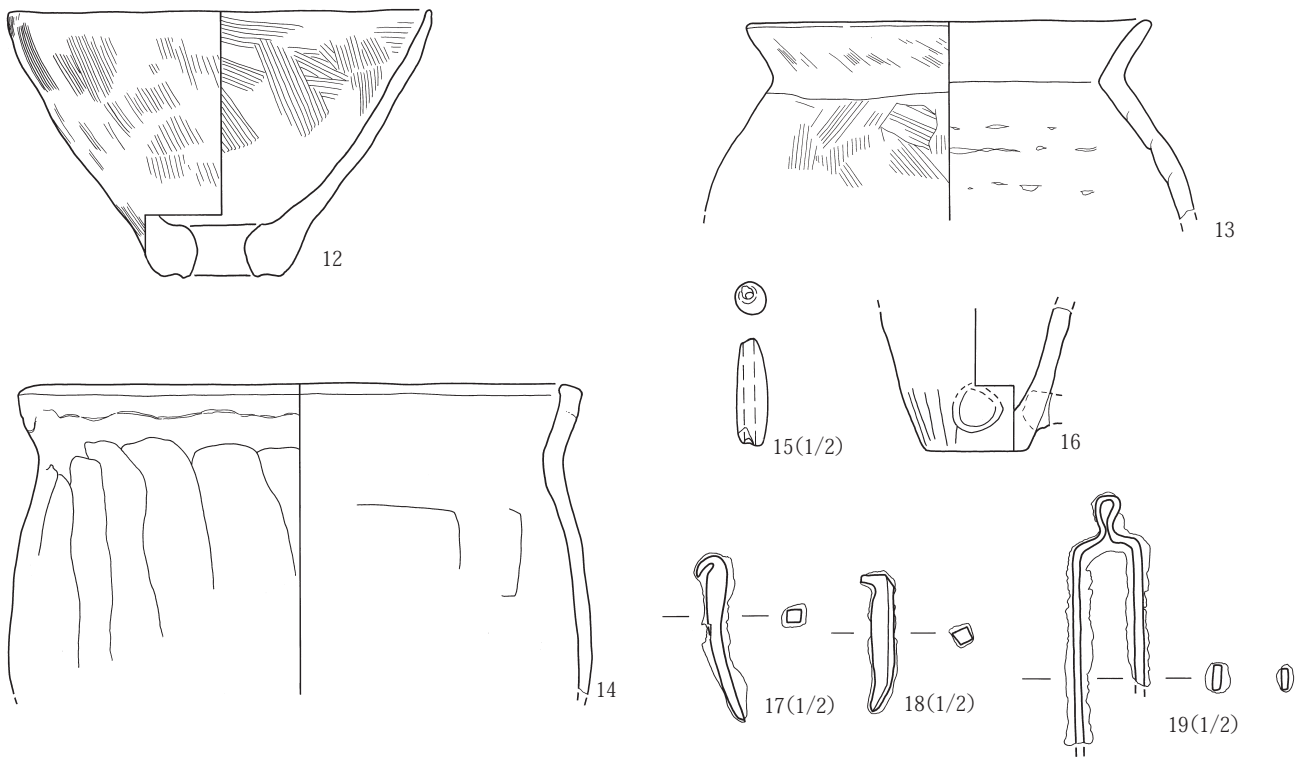
3区



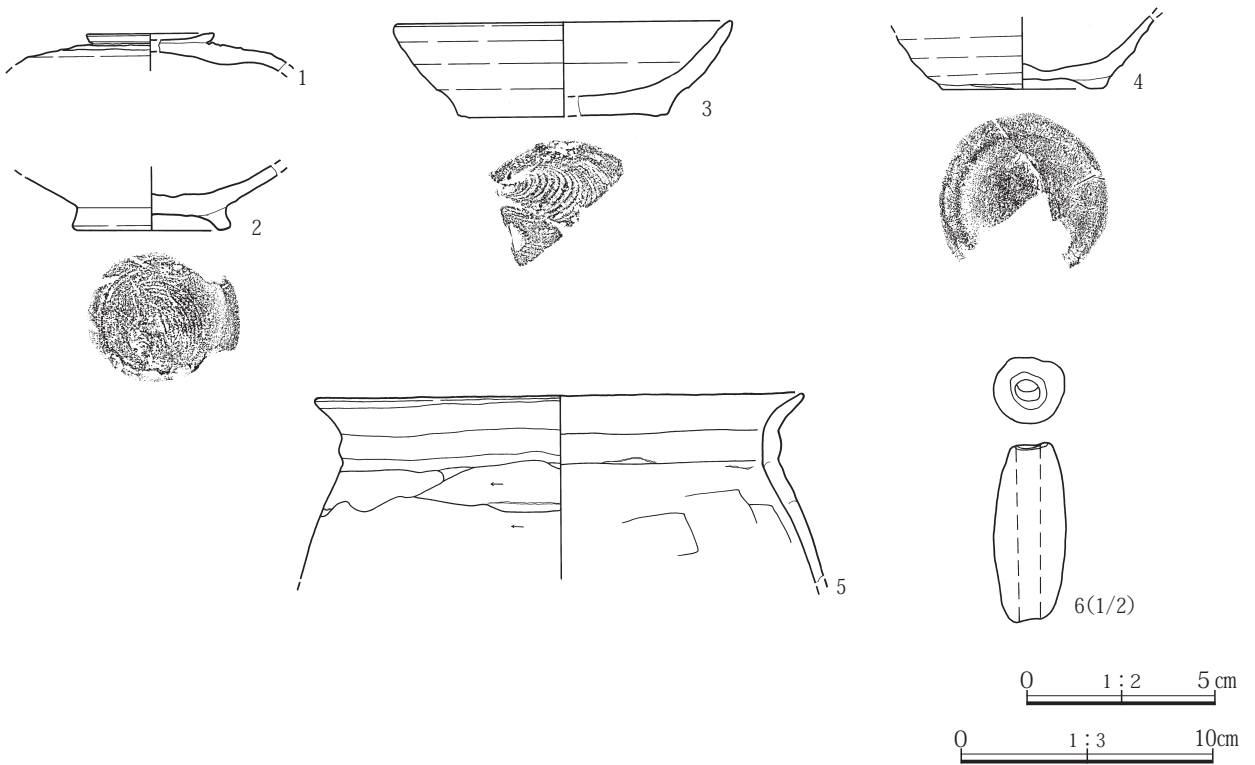
4区



第365図 その他の遺物(3区・4区(1))



5区



第366図 その他の遺物(4区(2)・5区)

第VI章 自然科学分析

1 分析の目的

阿弥大寺本郷遺跡の発掘調査および整理事業の過程の中で、①テフラ分析、②植物遺体分析、③種子同定と珪酸体分析、④木製品および種子同定の4種類の分析作業を委託した。

①のテフラ分析は発掘調査中の2区畑で見られた上下2面の畑を被覆する火山灰や泥流の原因を探るため、地質調査とテフラ分析を火山灰考古学研究所へ委託し、早田勉氏より報告を得た。結果は下面の畑は5世紀初頭に比定される榛名山二ツ岳の降下テフラ(Hr-F A)直下に当たることが把握できた。上面畑を被覆する泥流については確定的な結論が導かれなかったが、Hr-F Aに伴う泥流である可能性が高いという報告であった。

5区の畑では火山灰を被覆した状態で泥流を迎え、2区の畑は火山灰を鋤き込んだ作業後に泥流を受けている。その時間差が降灰と泥流との間隔を示すものとして興味深い資料となった。

②の植物遺体分析では、2区の1号畠と1号河道から植物遺体が出土しているが、両遺構共に古墳時代に属し、畠の作物の特定、及び遺跡周辺の植生の復元に資するため、これらの同定、分析作業を行った。その結果、1号畠からはヨシ属、ウシクサ族(ススキ族を含む)、イチゴツナギ亜科(オオムギ族を含む)の順に含有量の多い植物遺体の検出され、1号河道ではヨシ属の含有量が多く、タケ亜科やウシクサ族もわずかに含まれるという同定結果が得られた。また後者の微細物分析からは被子植物が14分類群が検出された他、昆虫類等の出土も確認された。こうした同定、分析結果から2区1号畠跡ではコムギやオオムギが栽培された可能性はあるものの栽培植物の特定には至らなかった。しかしながらこの同定結果に基づく考察によって1号畠でイネを栽培していた可能性は低く、麦類の栽培の可能性のあったことが指摘されており、往時の畠作が陸稲以外にも主食作物の栽培をしていたことが窺われる分析結果となった。また2区1号河道跡からはヨシなどが繁茂していたことが窺われ、古墳時代後期初頭の本遺跡付近はマツ属やコナラ亜属の林が

あり、所謂里山のような植生があったことが想定されるものであった。

③の種子同定と珪酸体分析では平安時代の3区5号住居出土の種子の同定を行い、古墳時代中期の本遺跡の食料の一端を探り、水田遺構の作物を探るため、種子と珪酸体分析を行った。その同定の結果、5号住居の竈左側よりイネが確認され、灰からはオオムギ族やキビ属が確認された。これらは野生種との識別は難しいとされるが、5号住居に於いては竈横にコメを貯蔵し、オオムギ族やキビ属を調理していたこと窺われる同定結果であった。また水田遺構での珪酸体分析では、イネやタケ亜科、ヨシ属等が確認されたが、イネは栽培が判断される基準を大きく下回っていたため、明確に稲作が行われたと判断するには至らない結果となった。しかし、一方で同定資料の採取箇所と比較によって、洪水層下に於いて稲作が行われた可能性も指摘されている。

④木製品および種子同定では、中世の井戸である2区1号井戸出土遺物である曲物底板2点、井戸枠と認識される木質、及び古墳時代の2区西側流路出土の横杵と柄の材質を把握する目的で樹種同定を行い、平安時代の3区1号井戸出土の種子について同定作業を実施した。その結果、樹種同定のうち2区1号井戸の曲物底板はヒノキ科と同定され、一般的な中世の曲物底板と同様針葉樹を用いていたことが確認された。また同井戸出土の井戸枠と推定された木質はクリが用いられており、2区西側河道出土の横杵と柄は共にクヌギ節と同定されたが、これらは本県の多くの木製品や焼失家屋の炭化材と同様に広葉樹を用いていることが確認されるものであった。

種子同定では、クリ、スモモ、エゴマ等の種子が多く、平安時代の本遺跡に於いてこれらが食用に供されていたことが示された。本県に於いては広葉樹が多く見られるのであるが、モミ属の総苞が確認されたことで針葉樹が近隣にあったことが確認された。また2区1号井戸出土の井戸枠材に伴って発見された1点の種子がヒョウタン類と同定され、3区1号井戸でもヒョウタン類が出土している。従ってふくべへの使用が窺われる。

尚、②～④はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

2 テフラ分析

1. はじめに

阿弥大寺本郷遺跡2区における発掘調査では、2層準から畠遺構が検出されている。ここでは、その層位の解明のために実施した地質調査およびテフラ分析の結果について報告を行う。調査分析の対象地点は、基本土層断面南壁2、自然流路1谷底部、古墳時代畠①、そして自然流路1谷斜面部の4地点である。各地点での土層の層序と対応関係を第367図に示す。

2. 土層の層序

(1) 基本土層断面南壁2 (第367図, Loc. 1, 写真1)

基本土層断面南壁2では、下位より炭化物混じり暗灰色砂質土(層厚5cm以上)、白色細粒軽石混じりでかすかに成層した黄灰色砂質火山灰層(層厚4cm, 軽石の最大径2mm)、砂混じり暗灰色泥層(層厚0.2cm)、桃色シルト層(層厚7cm)、暗灰色泥層(層厚0.1cm)、若干黄色がかかった白色砂層(層厚0.2cm)、桃色シルト層(層厚2cm)、桃灰色砂質シルト層(層厚3cm)、桃色シルト層(層厚3cm)、淘汰の良い灰色砂質シルト層(層厚7cm)、桃色シルト層(層厚5cm)、成層した桃灰色シルト層(層厚2cm)、桃色シルト層(層厚3cm)、灰白色砂層(層厚0.2cm)、桃灰色シルト層(層厚4cm)、若干黄色がかかった白色砂層(層厚0.3cm)、桃灰色シルト層(層厚4cm)、暗桃色シルト層(層厚7cm)、黄白色砂層(層厚0.1cm)、桃灰色シルト層(層厚9cm)が認められる。下位より4層目の桃色シルト層以上の堆積物は側方への連続が良く、南壁においては西半以上の範囲で追跡が可能である。

本地点の西隣では、その上位に下位より黒灰色泥層(層厚0.2cm)、砂まじり灰白色凝灰質シルト層(層厚0.1cm)、暗灰色泥層(層厚0.1cm)、黄白色シルト層(層厚0.2cm)、黄灰色シルト層(層厚0.6cm)、黄白色シルト層(層厚0.3cm)、黄灰色シルト層(層厚6cm)、白色砂層(層厚0.2cm)が認められる。

基本土層南壁2では、その上位に、さらに下位より白色粗粒火山灰混じり灰色シルト層(層厚11cm)、白色軽石混じり黄灰色シルト層(層厚21cm, 軽石の最大径4mm)、白色軽石混じり灰色シルト層(層厚12cm, 軽石の最大径3mm)、暗灰色粘質土(層厚12cm)、黄灰色粗粒火山灰混

じり暗褐色土(層厚3cm)、黄色がかかった灰色粗粒火山灰層(層厚6cm)、暗灰色砂質土(層厚2cm)、砂混じり灰褐色土(層厚8cm)、黄色がかかった灰色土(層厚8cm)、黄色土(層厚7cm)、白色粗粒火山灰混じり灰色土(層厚5cm)、灰色作土(層厚5cm)が認められる。

(2) 自然流路1谷底部(第367図, Loc. 2)

畠遺構の層位に関係する土層をよく観察できた自然流路1谷底部では、下位より砂混じり黒灰色泥層(層厚5cm以上)、白色軽石混じりでかすかに成層した青灰色砂質火山灰層(層厚2cm, 軽石の最大径8mm)、桃色シルト層(層厚0.8cm)、層理が発達した青灰色シルト質砂層(層厚6cm)、桃色シルト層(層厚3cm)、植物の葉からおもに構成される黒泥層(層厚0.1cm)、桃色シルト層(層厚3cm)、植物の葉からおもに構成される黒色泥層(層厚0.1cm)、桃褐色シルト層(層厚4cm)、層理が発達した桃灰色砂質シルト層(層厚3cm)、桃色シルト層(層厚2cm)、層理が発達し黄色がかかった灰白色砂層(層厚2cm)、桃色シルト層(層厚16cm)、灰白色砂層(層厚0.3cm)、桃色シルト層(層厚2cm)、灰白色砂層(層厚0.1cm)、桃色シルト層(層厚12cm)、灰白色砂層(層厚2cm)、桃色がかかった灰色砂質シルト層(層厚10cm)、桃灰色シルト層(層厚7cm)、灰白色砂層(層厚6cm)、黄色がかかった灰色砂質シルト層(層厚8cm)、桃灰色シルト層(層厚5cm以上)が認められる。

(3) 古墳時代畠①(第367図, Loc. 3, PL. 105③④)

古墳時代畠①の土層断面では、下位と上位の畠遺構の断面が認められる。ここでは、灰色土(層厚5cm以上)を切って下位の畠が作られており、その上位に、下位より成層したテフラ層(層厚4.5cm)が認められた。このテフラ層は、下位より白色軽石を含みかすかに成層した灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm, 軽石の最大径6mm)、若干黄色がかかった淘汰の良い褐色粗粒火山灰層(層厚1.5cm)、桃灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。その上位には、さらに桃灰色砂質シルトブロック層(層厚4cm)、桃灰色砂質シルトブロックに富む灰色土(層厚4cm)、灰

色土(層厚4cm)が認められ、灰色土の上面が上位の畠の耕作面となっている。この上位の畠は、桃色シルト層(層厚3cm以上)で覆われている。

なお、古墳時代畠では、畠⑤のウネ部や畠④から畠⑤にかけてのサク部(いずれも上位の畠)のように、上面に炭化物を含む黒灰色の砂質土(層厚0.2mm)が認められることがある。

(4)自然流路1谷斜面部(第367図, Loc. 4)

自然流路1谷斜面部では、断面が畠遺構に似た微高地の断面を観察できた。ここでは、下位より灰色砂質土(層厚3cm以上)、暗灰色砂質土(層厚0.3cm, 上面が下位畠の面に相当?)、かすかに成層した黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚4cm)、黒泥層(層厚0.2cm)、桃灰色シルト層(層厚1cm)、黒泥層(層厚0.2cm)、灰色砂層(最大層厚4cm)、黒灰色砂質土(層厚0.2cm, 上面が上位畠面?)、桃色シルト層(層厚8cm)、暗灰色泥層(層厚0.1cm)、白色砂層(層厚0.1cm)が認められる。これらの堆積物のうち、少なくとも最上位の白色砂層を除く堆積物は噴砂により切られている。

3. テフラ検出分析

(1)分析試料と分析方法

基本土層断面南壁2の土層のうち、テフラ層や特徴的なテフラ粒子を含む可能性が考えられた試料14、試料8、試料2、試料1の4試料について、含まれるテフラ粒子の特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を適量(5~8g)秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を第20表に示す。基本土層断面南壁2で採取された試料のうち、試料14にはスポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。その斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料8には、白色の軽石型ガラスが少量含まれている。鉱物としては、角閃石や斜方輝石が含まれている。

試料2には、淡褐色の軽石(最大径3.1mm)や軽石型ガラスが多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料1にも、この淡褐色の軽石(最大径4.8mm)や軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この試料には、ほかにごくわずかながら、光沢をもち灰色がかった白色の軽石(最大径2.0mm)や軽石型ガラスが少量含まれている。

4. テフラ組成分析

(1)分析試料と分析方法

基本土層断面南壁2(試料13)や、古墳時代と推定されている畠遺構の層位に関係して検出されたテフラ層(古墳時代畠①の試料4)、さらにそれらの上位の水成堆積物(基本土層断面南壁2の試料11, 試料5)を対象に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を実施して、テフラ粒子の特徴を定量的に把握した。テフラ組成分析の方法は次のとおりである。

- 1) 試料を8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴について概査。
- 5) 分析篩を用いて1/4-1/8mmと1/8-1/16mmの粒子を篩別。
- 6) 偏光顕微鏡により1/4-1/8mmの250粒子を観察して、火山ガラスの色調・形態別比率を求める(火山ガラス比分析)。
- 7) 偏光顕微鏡を用いて、1/4-1/8mmの重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を明らかにする(重鉱物組成分析)。なお、基本土層断面南壁2の試料11に含まれる粒子は非常に細粒で、しかも重鉱物が少ないことから、1/8-1/16mmの重鉱物250粒子を検鏡の対象とした。

(2)分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図2に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表2と表3に示す。分析対象試料のうち、基本土層断面南壁2の試料13には、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが少量含まれている(1.6%)。重鉱物としては、比率が高い順に角閃石(55.2%)、斜方輝石(20.0%)、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 19.6%)、単斜輝石(3.6%)が含まれている。また、角閃

石の中には、赤色の酸化角閃石も含まれている(2.4%)。

基本土層断面南壁2の試料11には、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型ガラスが少量含まれている(0.8%, 0.4%)。重鉱物としては、比率が高い順に角閃石(74.8%)、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 14.4%)、斜方輝石(9.6%)、単斜輝石(0.8%)が含まれている。また、角閃石の中には、赤色の酸化角閃石も含まれている(2.4%)。

基本土層断面南壁2の試料5には、分厚い中間型、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型ガラスが少量含まれている(各0.4%)。重鉱物としては、比率が高い順に角閃石(40.0%)、斜方輝石(30.4%)、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 16.4%)、単斜輝石(12.0%)が含まれている。また、角閃石の中には、赤色の酸化角閃石もわずかに含まれている(0.8%)。

古墳時代島①の試料4には、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが少量含まれている(1.2%)。重鉱物としては、比率が高い順に角閃石(48.4%)、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 29.2%)、斜方輝石(18.0%)、単斜輝石(2.8%)が含まれている。また、角閃石の中には、赤色の酸化角閃石も含まれている(2.0%)。

5. 火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定

(1) 測定試料と分析方法

基本土層断面南壁2と、古墳時代島①で認められたテフラ層(基本土層断面南壁2の試料13および古墳時代島①の試料4)と、指標テフラ層との同定精度を向上させるために、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製MAIOT)を利用して、火山ガラス、斜方輝石、単斜輝石の屈折率を測定した。火山ガラスについては、1/8-1/16mm粒径の火山ガラスの測定を実施した。一方、鉱物については、1/4mmより大きな粒子の中から実体顕微鏡下で斜方輝石と普通角閃石をピックアップした後に、めのう乳鉢を利用して軽く粉砕して測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を、群馬県域に分布する古墳時代以降の指標テフラの屈折率特性とともに、第23表に示す。基本土層断面南壁2の試料13に含まれる火山ガラス(n)、斜方輝石(γ)、普通角閃石(n2)の屈折率は、順に1.499-

1.502 (30粒子)、1.707-1.712 (30粒子)、1.671-1.688 (32粒子)である。

また、古墳時代島①の試料4に含まれる火山ガラス(n)、斜方輝石(γ)、普通角閃石(n2)の屈折率は、順に1.500-1.503 (26粒子)、1.707-1.711 (29粒子)、1.671-1.688 (33粒子)である。

6. 考察

(1) おもな指標テフラと下位の古墳時代島遺構の層位

テフラ組成分析と屈折率測定の対象となった基本土層断面南壁2の試料13と、古墳時代島①の試料4が採取されたテフラ層については、いずれもスポンジ状に発泡した白色の軽石や軽石型ガラスを含むこと、斑晶に角閃石を特徴的に含むこと、さらに火山ガラスや鉱物の屈折率特性などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)に同定される。ただ、特徴的な成層構造が認められることから、より後者の残存状況が良い。

また、基本土層断面南壁2の試料14からテフラ検出分析により検出されたスポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石型ガラスは、岩相から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010)に由来すると考えられる。以上のことから、下位の古墳時代島遺構の層位は、As-Cより上位で、Hr-FA直下にあると考えられる。

さて、基本土層断面南壁2では、Hr-FAの上位に、非常に薄い腐植質堆積物(層厚0.1mm)を挟んで、全体として桃色がかった成層した氾濫堆積物が堆積している。この堆積物を構成する個々の堆積物は少なくとも2区の西半部で追跡が可能で、側方への連続が非常に良い。

これらの個々の堆積物は、周囲より低い自然流路1の谷底部においても、層厚は増すことはあるものの、とくに顕著な粗粒化傾向は認められず、全体として非常に細粒である。この堆積物の間には、2層準に腐植質堆積物の薄層が認められる(層厚0.2mm以下)。この堆積物は、おもにヨシと思われる草本の葉からなる。なお、自然流路1内では、Hr-FAの直上でこの成層した氾濫堆積物の下位に、さらにHr-FAの二次的な堆積物である水成堆積物が認められる(層厚6.8cm)。

また、基本土層断面南壁2の西隣りでは、この成層した氾濫堆積物の上位に、砂まじり灰白色凝灰質シルト層を挟在する腐植質堆積物の薄層(層厚0.3mm)がある。この腐植質堆積物は、さらに下位の氾濫堆積物とは色調を異にする全体として黄色で、成層した細粒の氾濫堆積物により覆われている。また、この堆積物には、白色の軽石や粗粒火山灰が目立つ。

その上位には、テフラ検出分析の結果から、試料2付近に高純度の浅間Bテフラ(As-B, 噴火年代:1108年, 荒牧, 1968, 新井, 1979)、また試料1付近に浅間A軽石(As-A, 噴火年代:1783年, 荒牧, 1968, 新井, 1979)の降灰層準がある。

(2) 上位の古墳時代畠遺構の層位

次に、上位の古墳時代畠遺構の層位について考えてみたい。畠遺構の部分だけをみると、下位にあるHr-FAと上位の古墳時代畠遺構上面の間には、十分な厚さの耕作土があって、比較的長期間の時間間隙が存在しているかのように見える。しかしながら、耕作土に関しては人為によるもので、その層厚は時間間隙の推定にはさほど有効とはならない。

前述のように、上位の古墳時代畠遺構を覆う比較的厚い成層した氾濫堆積物を、堆積物の残存状態が非常に良い自然流路1谷底部でみると、それはHr-FAの水成二次堆積物を直接覆っており、それらの間には顕著な時間間隙を示す堆積物や浸食の痕跡は認められない。氾濫堆積物の間には2層準に腐植質堆積物が認められるが、それらの層厚は非常に薄い。しかも、それらを構成するのはおもに草本類の葉で、間に浸食の痕跡などが認められないことも合わせると、Hr-FA降灰から上位の古墳時代畠遺構を覆う比較的厚い成層した氾濫堆積物の形成までは、比較的短時間のうちのできごとであったように思われる。

さて、発掘調査の際には遺構として認められていないようであるが、自然流路1の斜面部で畠の断面と似た微高地の断面が認められた。ここでは、自然流路1の谷底部と同じように、下位の比較的厚い成層した氾濫堆積物に挟在される2層準の腐植質堆積物が認められ、そのうち上位の腐植質堆積物の直上に微高地を構成する砂質堆積物(層厚4cm)が認められる。そして、その上面には古

墳時代の畠遺構の上面で認められるような黒灰色砂質土の薄層がある。

これらの砂質堆積物と黒灰色砂質土の組み合わせを、上位の畠に関係したものとみると、その層位は下位の比較的厚い成層した氾濫堆積物の中にあることになる。そして、この氾濫堆積物は、火山ガラスや鈹物など構成物のHr-FAとの類似性も考慮すると、Hr-FAの噴火に関係した火山泥流堆積物(早田, 1989など)の可能性もある。

ここで問題となるのは、基本土層断面南壁2の西で認められる上位の成層した氾濫堆積物である。この堆積物と下位の氾濫堆積物には、含まれる白色の軽石や粗粒火山灰の量が異なり、色調や重鈹物組成の傾向にも若干違いが認められる。薄いながら間に腐植質堆積物があることも考慮すると、下位と上位の成層した氾濫堆積物については起源を異にする可能性がある。非常に薄いために層相などでの確認が困難ではあるが、腐植質堆積物中に挟在され、スポンジ状の軽石型ガラスや角閃石で特徴づけられる、砂まじり灰白色凝灰質シルト層(基本土層断面南壁2の試料8)が、もし6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)の最上部(I19, Soda, 1996, 早田, 2006)であれば、上位の成層した氾濫堆積物はHr-FPの噴火に関係した火山泥流(早田, 1989, 2006など)の可能性も考えられる。

いずれにしても、今後も周辺遺跡などでの堆積物の層序や層相の確認を行って、とくに古墳時代畠のうち上位の畠の層位に関して調査を継続する必要がある。

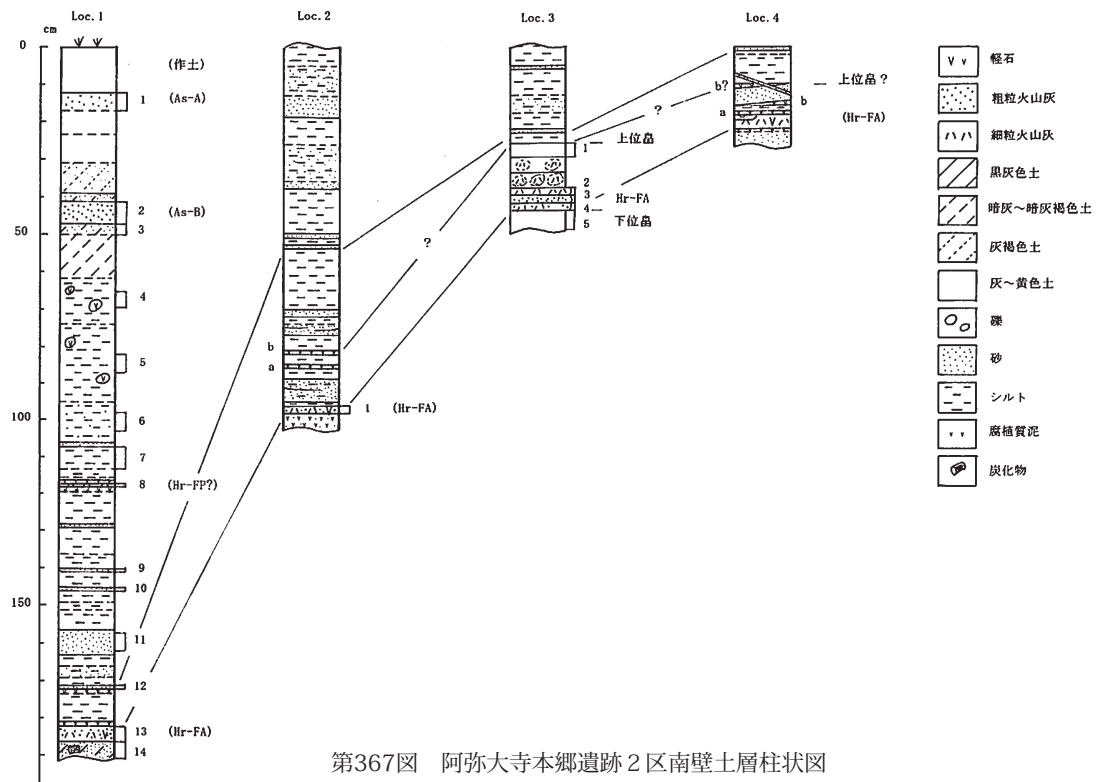
7. まとめ

阿弥大寺本郷遺跡2区において、地質調査、テフラ検出分析、テフラ組成分析、火山ガラスや鈹物の屈折率測定を実施した。その結果、下位より浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、榛名二ツ岳榛名テフラ(Hr-HA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)を検出することができた。発掘調査で検出された古墳時代の2層準の畠遺構のうち、下位の畠遺構の層位はHr-FA直下と推定される。一方、上位の畠遺構に関しては、今後の周辺での検討が必要ではあるが、現段階においてはHr-FAの火山泥流堆積物の直下あるいはその間に層位がある可能性も否定できない。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no. 53, p. 41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no. 14, p. 1-45.
 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラスー日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 336p.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学ー考古学研究に關係するテフラのカタログー. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865-928.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教

育委員会編「荒砥北原遺跡・今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p. 103-119.
 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向ー中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落 との關係ー. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p. 17-22.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p. 297-312.
 早田 勉(1993)古墳時代におこった榛名二ツ岳の噴火. 新井房夫編「火山灰考古学」, 古今書院, p. 128- 150.
 早田 勉(2006)古墳時代の榛名大噴火ー火山灰からさぐる噴火のうつりかわり. かみつけの里博物館編「は るな30年物語」, p. 54-66.
 Soda, T. (1996) Explosive activities of Haruna Volcano and their impacts on human life in the 6th century A.D. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., no. 31, p. 37-52.



第367図 阿弥大寺本郷遺跡2区南壁土層柱状図

数字はテフラ分析の資料番号.

Loc.1: 基本土層断面, Loc.2: 自然流路1谷底部,

Loc.3: 畠①, Loc.4: 自然流路1谷斜面部.

第VI章 自然科学分析

第20表 テフラ検出分析結果

地 点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
基本土層断面南壁2	1	**	淡褐, 白	4.8, 2.0	**	pm	淡褐, 白
	2	**	淡褐	3.1	***	pm	淡褐
	8				*	pm	白
	14				*	pm	灰白

***: とくに多い, **: 多い, *: 中程度, *: 少ない. 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, pm: 軽石型, md: 中間型.

第21表 火山ガラス比分析結果(1/4-1/8mm)

地 点	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合 計
基本土層断面南壁2	5	0	0	0	1	1	0	248	250
	11	0	0	0	0	2	1	247	250
	13	0	0	0	0	4	0	246	250
古墳時代島①	4	0	0	0	0	3	0	247	250

bw: バブル型, pm: 軽石型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状.

数字は粒子数.

第22表 重鉱物組成分析結果

地 点	試料	ol	opx	cpx	am (oxy, ho)	bi	opq	その他	合 計
基本土層断面南壁2	5	0	76	30	100 (2)	0	41	3	250
	11*	0	24	2	187 (6)	0	36	1	250
	13	0	50	9	138 (6)	0	49	4	250
古墳時代島①	4	0	45	7	121 (5)	0	73	4	250

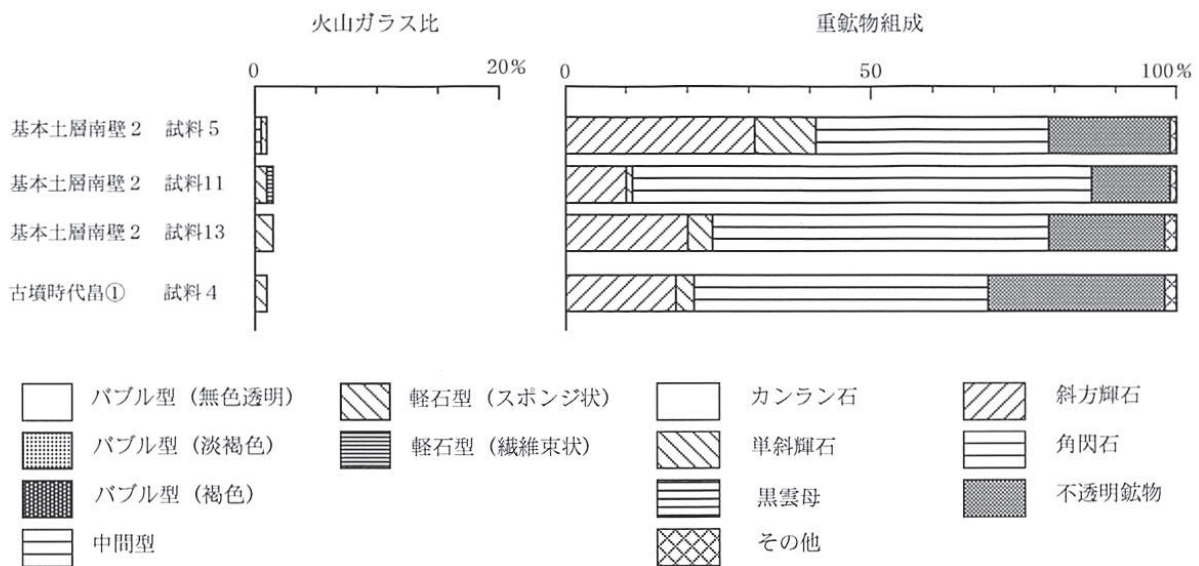
ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, oxy, ho: 酸化角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物(おもに磁鉄鉱).

数字は粒子数. *: 1/8-1/16mm. ほかは1/4-1/8mm.

第23表 屈折率測定結果

地点名	試料・テフラ	火山ガラス		斜方輝石		角閃石	
		屈折率(n)	測定点数	屈折率(γ)	測定点数	屈折率(n2)	測定点数
基本土層断面南壁2	13	1.499-1.502	30	1.707-1.712	30	1.671-1.688	32
古墳時代島①	4	1.500-1.503	26	1.707-1.711	29	1.671-1.688	33
指標テフラ	浅間 A (As-A)	1.507-1.512		1.707-1.712			
	浅間 B (As-B)	1.524-1.532		1.708-1.710			
	榛名ニツ岳伊香保(Hr-FP)	1.501-1.504		1.707-1.711		1.672-1.677	
	榛名ニツ岳渋川(Hr-FA)	1.500-1.502		1.707-1.711		1.671-1.695	
	榛名有馬(Hr-AA)	1.500-1.502		1.709-1.712		1.671-1.677	
	浅間 C (As-C)	1.514-1.520		1.706-1.711			

屈折率測定は, 温度変化型屈折率測定装置(MA10T)による. Hr-AAの屈折率特性は町田ほか(1984), ほかは町田・新井(2003).



第368図 テフラ組成ダイアグラム

資料11の重鉱物組成は1/8-1/16mm. ほかは1/4-1/8mm.

3 2区古墳時代畠遺構の植物遺体分析

はじめに

阿弥大寺本郷遺跡(伊勢崎市葦塚町地内)は、現在の利根川と広瀬川低地帯に挟まれた完新世の段丘面上に立地する。発掘調査の結果、本遺跡からは古墳時代前期の水田跡や古墳時代中期の集落、古墳時代後期の畠跡、奈良～平安時代の集落等が確認されている。今回の分析対象とされた2区では、古墳時代の榛名山の噴火による榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA:新井, 1979; 早田, 1989)で埋没した畠跡を復旧し、再び畠として利用したと考えられる畠跡群が検出されている。さらに、この畠跡西側からは河道跡が検出されており、河道内にはHr-FAおよび榛名山の噴火に伴うラハール堆積物が埋積する。なお、矢口(2011)によれば、Hr-FAの噴出年代については、これまでに須恵器の年代観等から5世紀末～6世紀初頭、6世紀第1四半期等の年代が提示されており、放射性炭素年代測定からも5世紀末～6世紀初頭の年代が示されている。

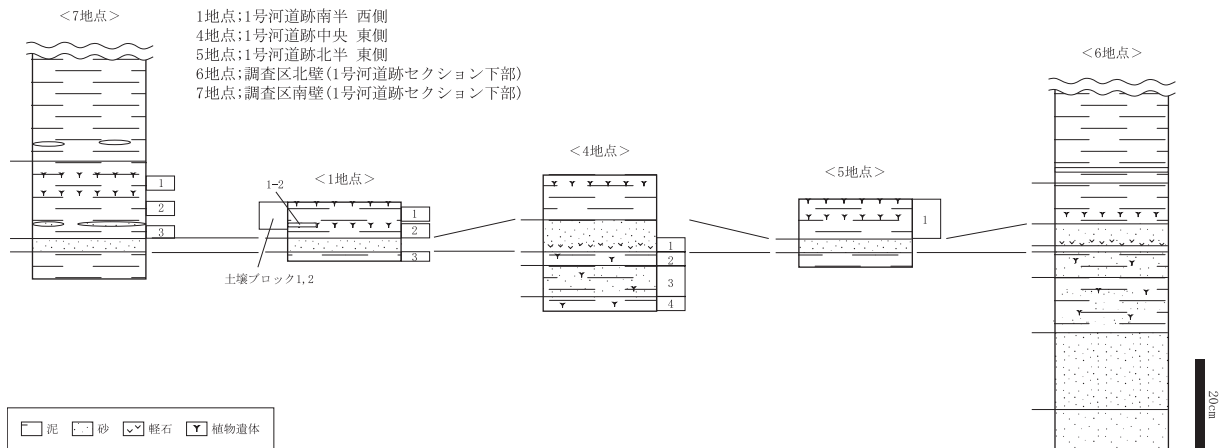
本報告では、2区より検出された畠跡の栽培植物および当時の周辺の植生の検討を目的として、畠を構成する堆積物、隣接する河道跡の埋積物、さらに、1号畠跡のサク(畠間)から出土した炭化物や1号河道跡より出土した植物遺体を対象に自然科学分析調査を実施した。

1. 古植生および栽培植物

1. 試料

(1) 試料

試料は、2区1号畠跡および1号河道跡より採取した土壌である。以下に、各遺構より採取した試料の概要を記す。



第369図 1号河道跡の主な試料採取地点の模式柱状図

1) 1号畠跡

1号畠跡は、北東-南西方向を主軸とする畠跡群によって構成される。当遺構の堆積物の観察は、畠跡群と直交するように設定されたセクションベルトを対象とした。本地点の堆積層は、下位より灰～暗灰色泥、部分的に(平行)葉理が残る砂の偽礫および白色の軽石が混じる砂、灰～暗灰色砂混じり泥、灰白～褐灰色泥からなる。これらの堆積物は、発掘調査所見から、それぞれHr-FA降灰前の畠跡を構成する堆積物、Hr-FA、Hr-FA降灰後(復旧後)の畠跡を構成する堆積物、榛名山の噴火に伴うラハール堆積物に相当する。

土壌試料の採取は、上述したセクションベルトの任意の地点2箇所(1地点、2地点)を対象とし、それぞれ復旧後の畠跡のウネ上部(試料番号1)とサク上部(試料番号3)、さらにHr-FA下位の復旧前の畠跡を構成する堆積物(試料番号2)を対象としている。

2) 1号河道跡(採取地点162頁)

1号河道跡は、南北に流路をもつ小規模な河川跡である。本遺構の埋積物は、調査区北壁の観察では、下位より比較的淘汰の良い砂や泥と、その互層からなる河川堆積物、上述したHr-FAに対比される白色の軽石が混じる比較的淘汰の良い砂、植物遺体層(厚さ最大1cm程度)が挟在し、みかけ塊状を為す灰～褐灰色泥、さらに褐灰～黄灰色泥に大きく区分される。

土壌試料の採取は、上述した分析目的を踏まえ、白色軽石が混じる砂層下位の河川堆積物(暗褐灰色泥～砂混じり泥)と、同上位の植物遺体層が挟在する灰～褐灰色泥を対象とし、層位サンプルあるいはブロックサンプルとして採取している。試料採取位置を示した各地点の模

式柱状図を第369図に示す。

2. 分析方法

(1)花粉分析

試料約10gを秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛, 比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス(無水酢酸9, 濃硫酸1の混合液)処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2)植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は、100単位として表示し、100個/g未満は「<100」と表示する。また、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(3)微細物分析

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実や木材、炭化材などの植物遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から実施し、個数を数えて表示する。炭化材等は、容量と70℃ 48時間乾燥後の重量、最大径を併記する。

分析後は、抽出物を分類群毎に容器に入れて保管し、種実遺体は約70%のエタノール溶液で液浸保管する。

3. 結果

(1)花粉分析

結果を第23表、第370図に示す。産出した花粉化石の保存状態は、いずれの試料も悪い。植物遺体層(1地点1-2)を除く3試料では分析残渣に微粒炭や炭化していない植物片が多く含まれ、花粉化石が相対的に少ないことから、定法の3~4倍のプレパラートについて検鏡を行った。一方の植物遺体層は、ほとんどが微粒炭からなり、花粉化石は非常に少ない。

花粉化石が検出された3試料(4地点;2、7地点;1,3)は、いずれもシダ類孢子的割合が高い。木本花粉はモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属等の針葉樹花粉と、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属等の広葉樹花粉が検出される。これらの試料における針葉樹花粉と広葉樹花粉の比率はほぼ同程度である。また、出現率の高い分類群でも10%~20%であり、際立って多産する分類群が少ない。

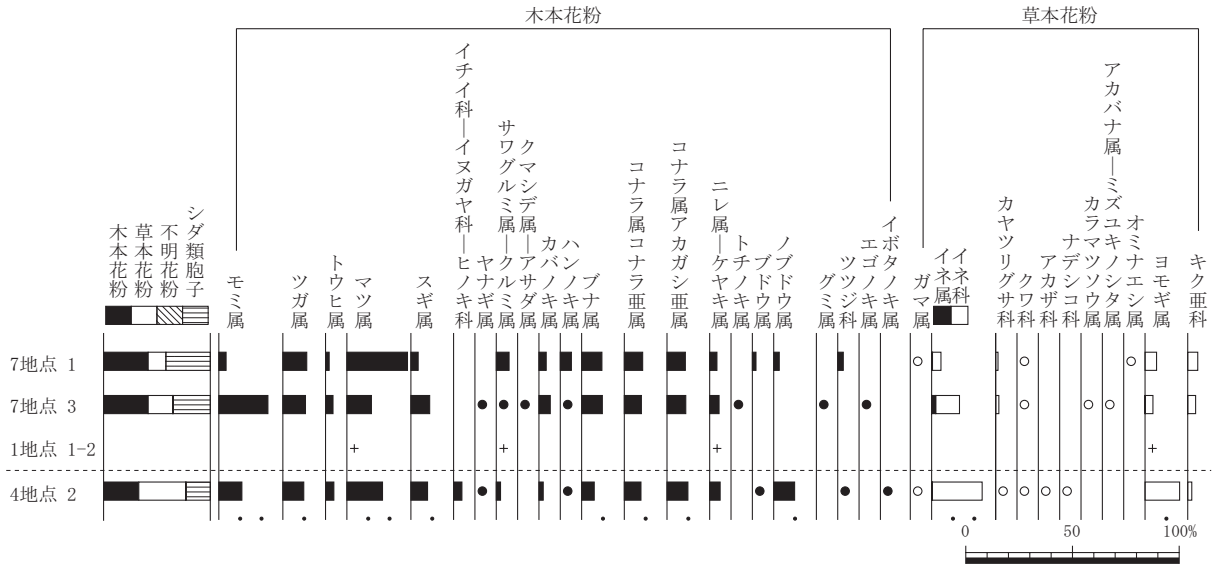
草本花粉は、試料によって組成が異なり、4地点;2ではイネ科とヨモギ属が多産する。また栽培種のイネ属も検出されるが、僅かである。7地点;1・3は、イネ科、ヨモギ属、キク亜科が検出される。イネ科とヨモギ属は4地点;2と比べ低率であり、イネ属も検出されるが微量である。

(2)植物珪酸体分析

結果を第24表、第371図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を記す。

1) 1号畠跡

植物珪酸体含量は、1地点が1.3万個/g、2地点が4,700~1.3万個/gである。いずれもヨシ属の含量が高く、次いでメダケ属(ネザサ節)を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、オオムギ族を含むイチゴツナギ亜科等が検出される。1地点;1ではオオムギ族の外穎殻(粗殻)に形成される珪酸体(穎珪酸体)も認められる。なお、オオムギ族には、栽培植物のコムギやオオムギ等が含まれるが、現段階では形態による野生種との判別は困難である。

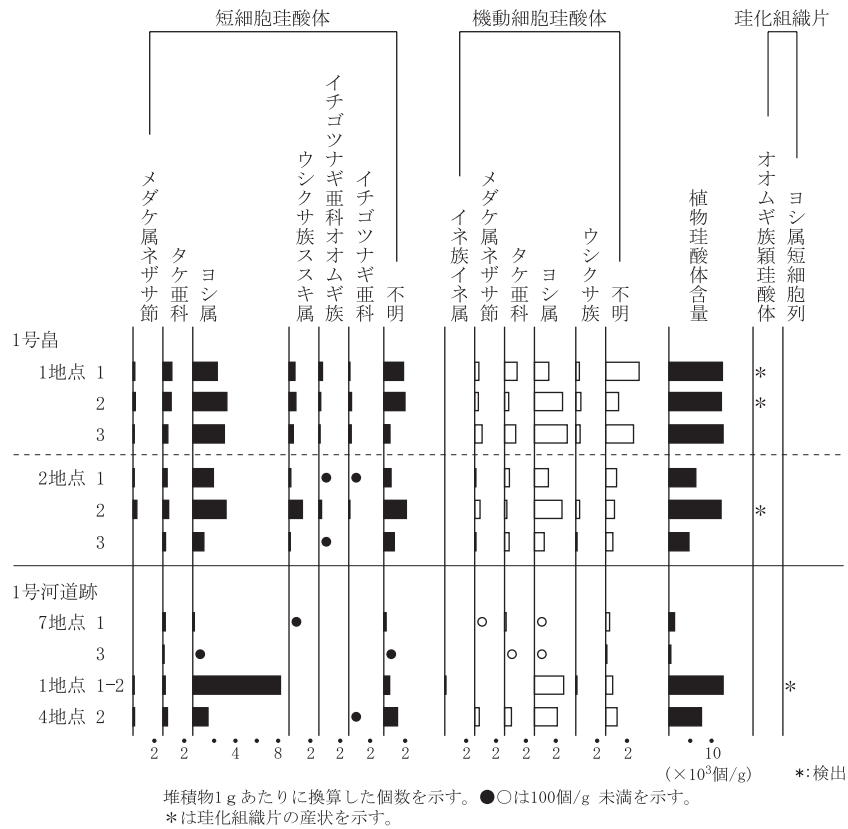


出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。●○は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料について検出された種類を示す。

第370図 花粉化石群集

第24表. 花粉分析結果

分類群	試料名	1号河道跡			
		1地点 1-2	4地点 2	7地点 1	7地点 3
木本花粉					
モミ属		-	11	4	26
ツガ属		-	10	13	12
トウヒ属		-	4	2	4
マツ属		4	17	33	13
スギ属		-	8	4	10
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	4	-	-
ヤナギ属		-	1	-	1
サワグルミ属-クルミ属		1	2	7	1
クマシデ属-アサダ属		-	-	-	1
カバノキ属		-	2	4	6
ハンノキ属		-	1	6	1
ブナ属		-	6	11	11
コナラ属コナラ亜属		-	8	10	9
コナラ属アカガシ亜属		-	10	10	10
ニレ属-ケヤキ属		1	5	4	5
トチノキ属		-	-	-	1
ブドウ属		-	1	2	-
ノブドウ属		-	10	3	-
グミ属		-	-	-	1
ツツジ科		-	1	3	-
エゴノキ属		-	-	-	1
イボタノキ属		-	1	-	-
草本花粉					
ガマ属		-	1	1	-
イネ属		-	1	1	5
イネ科		-	72	11	30
カヤツリグサ科		-	1	3	4
クワ科		-	2	1	1
アカザ科		-	2	-	-
ナデシコ科		-	1	-	-
カラマツソウ属		-	-	-	1
アカバナ属-ミズユキノシタ属		-	-	-	1
オミナエシ属		-	-	1	-
ヨモギ属		1	50	15	10
キク亜科		-	6	13	10
不明花粉		1	2	-	1
シダ類孢子					
ヒカゲノカズラ属		-	1	-	-
ゼンマイ属		-	2	2	-
他のシダ類孢子		5	67	113	94
合計					
木本花粉		6	102	116	113
草本花粉		1	136	46	62
不明花粉		1	2	0	1
シダ類孢子		5	70	115	94
総計(不明を除く)		12	308	277	269



第371図 植物珪酸体含量

第25表. 植物珪酸体含量(個/g)

分類群	1号島						1号河道跡			
	1地点			2地点			1地点	4地点	7地点	
	1	2	3	1	2	3	1-2	2	1	3
イネ科葉部短細胞珪酸体										
メダケ属ネザサ節	200	200	100	100	400	-	100	100	-	-
タケ亜科	800	800	500	400	500	200	200	400	200	100
ヨシ属	2,300	3,200	3,000	1,900	3,100	1,000	8,200	1,400	100	<100
ウシクサ族ススキ属	600	600	400	200	1,300	100	-	-	<100	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族	300	200	100	<100	300	<100	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	100	300	200	<100	100	-	-	<100	-	-
不明	1,800	2,000	600	700	2,100	1,000	500	1,300	200	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	100	-	-	-
メダケ属ネザサ節	400	300	700	100	500	100	-	400	<100	-
タケ亜科	1,200	400	1,000	500	200	400	-	600	100	<100
ヨシ属	1,300	2,600	3,100	1,300	2,600	900	2,700	2,100	<100	<100
ウシクサ族	300	500	400	-	400	100	100	-	-	-
不明	3,100	1,200	2,600	1,000	800	700	700	1,100	400	100
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	6,200	7,300	4,900	3,400	7,700	2,400	9,100	3,400	700	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,400	5,100	7,800	2,900	4,500	2,300	3,600	4,300	700	200
植物珪酸体含量	12,600	12,400	12,700	6,300	12,200	4,700	12,700	7,700	1,400	400
珪化組織片										
オオムギ族類珪酸体	*	*	-	-	*	-	-	-	-	-
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-

珪化組織片 - : 未検出, * : 検出

2) 1号河道跡

植物珪酸体含量は、400～1.3万個/gであり、試料によって含量に多寡が認められる。最も含量が高い1地点;1-2は、ヨシ属の含量が極めて高く、タケ亜科(メダケ属を含む)やウシクサ族等も僅かに検出される。本試料からは、栽培種のイネ属も僅かに検出される。次いで含量が高い4地点;2も、検出される分類群は1地点;1-2と同様であり、ヨシ属の産出が目立つ。7地点;1・3は、タケ亜科やヨシ属等がわずかに産出するのみである。

(3) 微細物分析

結果を第26表に示す。1号河道跡の植物遺体層(1地点;1-2)と4地点;3の2試料からは、被子植物14分類群(木本のバラ属、草本のツユクサ、エノコログサ属、イネ科、ミクリ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、ミズ属、ミゾソバ近似種、タデ属、ナデシコ科、スミレ属、ナス科、キク科)の種実遺体59個が抽出・同定された。この他に、イネ科の稈を含む多量の炭化物(約100cc)、不明炭化物、木材、木の芽、双子葉類の葉片、植物のトゲ、昆虫類等

も確認された。

種実遺体は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、炭化した6個(エノコログサ属、イネ科)を除くと比較的良好な保存状態である。以下に、試料別の検出状況を記す。

・1地点;1-2

試料150cc (197.03g)より、常緑または落葉低木のバラ属1個、草本のイネ科28個(うち3個炭化)、カナムグラ1個、ミズ属4個、キク科1個、計35個の種実遺体と、イネ科の稈42個を含む炭化材80cc (7.22g、最大径2.8cm)、不明炭化物4個(0.01g)、木材2.5cc、双子葉類の葉片4個、植物のトゲ1個、昆虫類26個が確認された。

・4地点;3

試料200cc (300.07g)より、草本11分類群(ツユクサ、エノコログサ属、イネ科、ミクリ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、ミゾソバ近似種、タデ属、ナデシコ科、スミレ属、ナス科) 24個(うち3個炭化)の種実遺体と、イネ科の稈17個を含む炭化材21cc (1.95g、最大径3cm)、

第26表. 微細物分析結果

種類	部位	状態	1号河道跡								備考	
			1地点				4地点					
			1-2		3		3		3			
数量 [個]	容量 [cc]	重量 [g]	径 [cm]	数量 [個]	容量 [cc]	重量 [g]	径 [cm]					
種実遺体												
木本												
バラ属	果実	完形		1					-			
草本												
ツユクサ	種子	完形		-					1			
エノコログサ属	果実	完形	炭化	-					1			
イネ科	果実	完形		25					5			
		完形	炭化	3					2			
ミクリ属	果実	完形		-					1			
カヤツリグサ科	果実	完形		-					2			
		破片		-					2			
カナムグラ	果実・核	完形		-					1			
	核	破片		1					-			
ミズ属	果実	完形		3					-			
		破片		1					-			
ミゾソバ近似種	果実	破片		-					3			
タデ属	果実	完形		-					2		2面, 表面微細網目	
ナデシコ科	種子	完形		-					1			
スミレ属	種子	完形		-					1			
ナス科	種子	完形		-					2			
キク科	果実	破片		1					-		冠毛	
炭化材												
イネ科	稈	破片	炭化	42	5	0.42	2.20		17	4	0.52	1.90
4mm以上			炭化	-	30	3.03	2.80		-	3	0.15	3.00
4-2mm			炭化	-	25	1.90	-		-	5	0.26	-
2-1mm			炭化	-	12	1.07	-		-	5	0.37	-
炭化植物主体(1mm以下)			炭化	-	8	0.80	-		-	4	0.65	-
その他												
不明炭化物			炭化	4	-	0.01	-		-			
木材				-	2.5				-	3.0		
木の芽				-					11			
双子葉類				4					-			
葉		破片										
植物のトゲ				1					-			
昆虫類				26					69			
残渣				-	3	0.88	-		-	7	2.04	-
分析量					150	197.0				200	300.1	
												植物片、砂礫 湿重

木材3cc、木の芽11個、昆虫類69個が確認された。種実遺体のうち、エノコログサ属とイネ科2個には炭化が認められる。また、多年生の抽水植物(根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物(角野, 1994))であるミクリ属が1個、湿生植物のミゾソバ(近似種)が3個確認された。

1)種実遺体の記載

・バラ属(*Rosa*) バラ科

果実は灰褐色、長さ4.2mm、幅2.8mm、厚さ2.2mm程度の三稜状倒卵体。側面観は半広卵形。腹面は鈍稜があり、稜上に浅い1個の縦溝がある。果皮表面は粗面。

・ツククサ(*Commelina communis* L.) ツククサ科ツククサ属

種子は灰黒褐色、長さ3.0mm、幅3.8mm、厚さ1.9mm程度の歪な半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。背面と側面の表面には、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面には円形の小孔が散在する。

・エノコログサ属(*Setaria*) イネ科

果実は炭化しており黒色、長さ2.3mm、径1.3mm程度の半楕円体。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・イネ科(Gramineae)

形態上差異のある複数種を一括している。果実は淡～灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1.7～3.0mm、径0.7～1.2mm程度の半狭卵体。頂部に2花柱が残存する個体がある。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。ヨシ属やススキ属などの標本との比較を試みたが、種類の特定には至らなかった。

・ミクリ属(*Sparganium*) ミクリ科

果実は淡灰褐色、長さ3.9mm、径1.9mm程度の紡錘状楕円体。頂部は伸び、基部は切形。果皮は海綿状で表面には数本の縦隆条が配列する。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

形態上差異のある複数種を一括している。果実は淡～灰褐色、径1.5～1.8mm程度のレンズ状または三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分は切形またはやや伸びる。基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。

・カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

核は暗褐色、径3.5～4.5mm、厚さ1.5mm程度の側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。基部はやや尖り、縦方向に一周する稜に沿って半分以下に割れた個体がみられる。頂部に淡黄褐色、径1mm程度のハート形の臍点がある。表面は粗面で断面は柵状。灰褐色で薄く粗面の果皮が付着する個体が見られる。

・ミズ属(*Pilea*) イラクサ科

果実は灰褐色、長さ1.3mm、幅0.7mm程度の偏平な非対称倒卵体。頂部、基部はやや尖る。果皮表面は粗面で微細な瘤状突起が散在する。

・ミゾソバ近似種(*Polygonum cf. thunbergii* Sieb. et Zucc.) タデ科タデ属

果実は淡灰褐色、完形ならば長さ4.5～6mm、径3～4mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で径0.8mm程度の萼がある。果皮は柔らかく、表面には微細な網目模様がある。破片は稜に沿って割れた1片で、大きさは4.2mm程度。

・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実は黒褐色、長さ3.2mm、径1.7mm程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形で灰褐色の萼がある。果皮表面には微細な網目模様がある。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子は灰褐色、径0.9mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・スミレ属(*Viola*) スミレ科

種子は淡灰褐色、長さ1.6mm、径1.3mm程度の広倒卵体。基部は尖り湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・ナス科(Solanaceae)

種子は淡灰褐色、長さ1.2mm、幅1.5mm程度の偏平で歪な腎臓形。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・キク科(Compositae)

果実の破片(冠毛部分)が検出される。冠毛は、径0.5mm程度で果実頂部から多数伸びており、淡褐色で長さ2.5mm程度の線状を示す。

4. 考察

(1) 古植生

1号河道跡埋積物の木本花粉の組成は、針葉樹花粉と広葉樹花粉がほぼ同率であり、際立って多産する分類群が認められない。古墳時代～古代頃の調査成果が得られている館林市の池沼群(辻ほか, 1983)や前橋市の二宮千足遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992)等を見ると、針葉樹が少なく、コナラ亜属を中心とする広葉樹の割合が高い。今回の試料は、これらの事例と比べ針葉樹花粉やシダ類の割合が高いが、これは針葉樹花粉やシダ類胞子が広葉樹花粉に比べて風化に強い(中村, 1967など)ことや、花粉化石の保存が悪いことが一因と考えられる。

分析対象とした堆積物は、河道堆積物および榛名山の噴火に伴うラハール堆積物と考えられることから、集水域および榛名山麓を含む広範囲の植生を反映していると推定される。また、調査地周辺は、発掘調査結果により古墳時代前期より集落域、あるいは生産域としての土地利用が明らかとされていることから、植生干渉が進んでいたと考えられる。これらの点を考慮すると、花粉化石で検出されたマツ属、クルミ属、カバノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属等は、集水域の河川沿いや斜面地等の開発が及びにくい場所に生育していたと考えられる。マツ属やコナラ亜属等には二次林を構成する分類群も含まれることから、これらの分類群を含む林分が周辺に分布した可能性もある。また、モミ属、ツガ属、スギ属、ブナ属等は、周辺の山地や山麓等の植生に由来すると考えられる。

一方、草本花粉は、イネ科やヨモギ属、キク亜科等が検出された。これらは、河道周辺や畠跡に草地を形成していた分類群に由来するとみられる。特にキク科は虫媒花で生産量、飛散量が小さいにもかかわらず産出したことから、近傍に多く生育していたと考えられる。イネ科は、植物珪酸体の産状から、水湿地性のヨシ属をはじめとして、周辺に生育したタケ亜科やススキ属等に由来すると考えられる。さらに、河道埋積物(4地点:3)からは抽水植物のミクリ属、湿生植物のミゾソバ(近似種)、湿～中生植物のツユクサ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、カナムグラ、タデ属、ナデシコ科、スマレ属、ナス科等の種実遺体が確認された。これらの分類群

は、当時の河道周辺の水湿地を含む草地環境に由来すると考えられる。

なお、砂層上位の灰～褐灰色泥に挟在する植物遺体層からは、花粉化石はほとんど検出されなかったが、イネ科の果実やイネ科の稈を含む多量の炭化した植物遺体が検出された。植物遺体層中の植物遺体については、後述した分析調査によりヒゲシバ亜科やダンチク亜科に属するイネ科植物が含まれることが明らかとされている。植物珪酸体分析結果や植物遺体の出土状況を考慮すると、これらの植物遺体は、集水域を含む河道付近に生育したヨシ属等を含むイネ科植物に由来すると考えられる。

(2) 栽培植物

1号畠跡における栽培植物の検討を目的として実施した植物珪酸体分析では、栽培種に由来する分類群は検出されなかった。また、畠跡耕作時の堆積物に対比されると考えられる1号河道跡埋積物の調査では、大型植物遺体中には栽培種に由来する分類群は確認できなかった。花粉・植物珪酸体では栽培種のイネ(イネ属)が確認されたものの、いずれも産出が僅かであったことから、1号畠跡における稲作の可能性は低いと考えられる。

なお、1号畠跡からはオオムギ族の葉部およびオオムギ族の穎珪酸体に類似する植物珪酸体が検出された。オオムギ族は、前述したように栽培種と近縁の野生種との区別が困難であるため、栽培の有無を言及することは難しい。群馬県内では、下芝天神遺跡や下芝上田屋遺跡(高崎市)において本遺跡と同様の形態の畠跡が検出されており、この畠跡を対象とした分析調査ではイネとともにムギやヒエが栽培されていた可能性が指摘されている(株式会社古環境研究所, 1998)。本遺跡では、オオムギ族は畠跡のみから検出されるという傾向が窺えることから、上記した調査事例と同様にムギ類の栽培や利用の可能性を示す事例として注目される。

II. 植物遺体分析

1. 試料

試料は、1号畠跡の復旧後の畝跡のサク(畝間)および1号畠跡周縁部より出土した炭化物と、1号河道跡の砂層上位の灰～褐灰色泥に挟在する植物遺体層に確認された植物遺体である。以下に、各地点の試料の概要を記す。

(1) 1号畠跡

1号畠跡より出土した炭化物は、Hr-FA降灰後の畝跡のサク(畝間)および、同じ検出面に相当すると考えられる1号畠跡周縁部より確認されている。炭化物試料は、現地において計18箇所から出土した炭化物について確認を行い、形状が比較的明瞭な炭化物10点を分析試料として採取している。

(2) 1号河道跡

試料は、1地点および5地点の砂層上位に確認された植物遺体層を挟在する灰～褐灰色泥(第369図)である。上記した2箇所では、発掘調査時に植物遺体層の面的な広がりが確認されていたことから、形状が明瞭で保存状態が良好と考えられる植物遺体が確認される箇所、あるいは植物遺体が密集する箇所よりそれぞれ土壌ブロック(1地点1-1, 1-2、5地点1-1, 1-2)として取上げている。

なお、1号畠跡の炭化物および1号河道跡の植物遺体については、室内にて肉眼および実体顕微鏡等で観察を行った結果、単子葉類(特にイネ科の稈(茎))の特徴が認められた。したがって、本項目では、イネ科植物に由来すると仮定して、外観や組織形態の観察等による種類の検討を行った。さらに、1号畠跡の炭化物試料については、光合成の様式により異なる安定同位体比の検討により、植物遺体の由来の検討を試みた。

2. 分析方法

(1) 外観・組織観察

肉眼および実体顕微鏡を用いて、植物遺体の外部形態および組織形態の観察を行う。さらに、特徴的な組織形態を持つ植物遺体については、走査型電子顕微鏡により観察を行う。

(2) 灰像分析

試料を過酸化水素水と塩酸で漂白し、この処理によって得られる灰像(珪化組織片)を光学顕微鏡で観察する。確認された灰像の同定については、Metcalf (1960)や近藤(2010)等を参考とする。

(3) 安定同位体対比分析

全窒素・全炭素の分析には自動窒素/タンパク分析装置 Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific社製)を用いる。試料をスズコンテナに封入し、超高純度酸素と共に分析装置の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用し

て試料を燃焼・ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。このときの炉の燃焼温度は1,000℃、還元炉温度は680℃、分離カラム温度は45℃である。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムで取り除いた後、分離カラムでCO₂とN₂を分離し、熱伝導性検出器でそれぞれ定量を行う。

安定同位体比分析にはDELTA V (Thermo Fisher Scientific社製)を用いる。上記の処理過程において、分離したCO₂とN₂をHeキャリアガスと共にインターフェイスを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定する。

3. 結果

(1) 1号畠跡

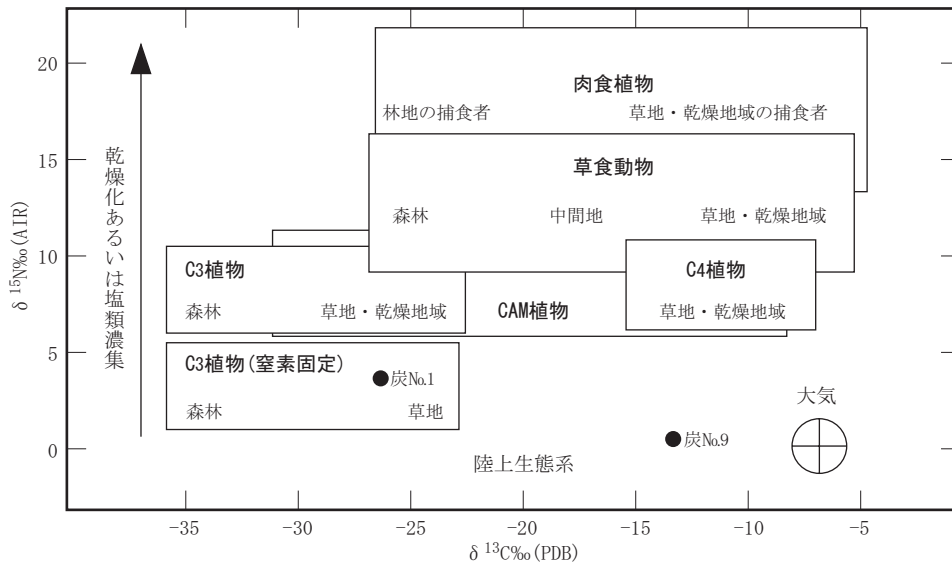
1号畠跡の炭化物試料は、粉末あるいは膜状を呈する状態が悪い試料を除くと、細長く、扁平を呈する炭化物(幅1cm前後、長さ2～10cm程度)が多く認められた。これらの炭化物の表面には、長軸方向に縦長の細胞が配列し、繊維状に見える組織(幅10～数10μm程度)が観察された。また、木材組織に見られる軸方向に対して直行する組織(放射組織)は確認されないことから、木材由来の炭化物ではないと判断される。分析は、炭化物の外観および保存状態の観察結果から、全体の形状が明瞭な炭化物(炭No.1)と約1cm角程度の茎(稈)の表面と断面の観察が可能な炭化物(炭No.9)の2試料を対象とした。

・炭No.1

試料は、長さ約8cm、幅約1cmの茎の側面が観察される炭化物である。マイクロスコブ観察では、茎の長軸方向に繊維状の組織(PL. 102-1)が確認された。断面の電子顕微鏡観察では、円形の断面をもち、細胞壁が厚い細胞と比較的細胞壁が薄く断面が大きい細胞が横に連なる組織が観察された(PL. 102-2)。これらは、植物の茎や葉等の表皮下に形成される厚壁組織と皮層の一部と考えられ、皮層や維管束鞘に由来するものと推定される。

・炭No.9

試料は、長さ、幅ともに約1cmの繊維状の組織(PL. 102-3)が確認される炭化物である。断面は、厚さが最大約2mmを測り、中空で押し潰されたレンズ状を呈する(PL. 102-4)。炭化物の断面の電子顕微鏡観察の結果、多角形の断面をもつ、管状の細長い細胞が確認された(PL. 102-5, 6)。なお、炭No.1では細胞壁が厚い細胞と比



陸上生態系における $\delta^{13}\text{C}$ と $\delta^{15}\text{N}$ の分布は (Pearsall, 2000) に拠る。

第372図 安定同位体比分析結果

較的細胞壁が薄く断面が大きい細胞が異なる組織の層として区別できたが、炭No.9では不明瞭であった。断面の形状から埋積過程で組織構造が圧縮・変形したことが推定されるが、炭No.1とは異なる植物の組織に由来する可能性もある。

(2) 1号河道跡

1号河道跡埋積物の灰～褐灰色泥に挟在する植物遺体層中の植物遺体は、扁平で細長く、全体的に黒～黒灰色を呈する。これらの植物遺体は、若干光を透過することから畠跡試料に比べ炭化の度合いが低いと考えられる。

各試料の植物遺体の外観観察の結果、長軸方向に対して垂直に線状の組織を有し、外形態上の特徴からイネ科の稈(茎)の節と考えられる植物遺体(PL. 103-1)、長方形の組織と長方形の組織より幅が狭く細長い繊維状の組織を有する植物遺体(PL. 103-4など)、さらに、薄い板状を呈し、表面に複数の溝(幅0.2mm前後)が並列する植物遺体(PL. 103-2, 3)等が観察された。

本分析では、上述した植物遺体のうち、長方形の組織を有する植物遺体と、薄い板状を呈し、複数の溝が並列する植物遺体を対象とした。

・1号河道跡 1地点;1-1

試料は、長さ約6cm、幅約1cmを測る植物遺体である。マイクロスコープ観察では、植物遺体表面に長方形の組織(PL. 103-5)と、それよりも幅が狭く(幅10 μm 程度)細長い繊維状の組織(PL. 103-6)が観察された。繊維

状の組織は、長方形の組織を取り除くと確認できる(PL. 103-4)ことから、長方形の組織が繊維状の組織を覆っていることがわかる。長方形の組織の灰像分析の結果、長細胞とケイ酸細胞(短細胞)が配列する細胞列が確認されたが、細胞帯の分化が認められず、機動細胞珪酸体は観察されなかった(PL. 105-1)。以上の特徴から、本試料はイネ科の表皮組織に由来すると考えられる。

・1号河道跡 1地点;1-2

試料は、薄い板状を呈し、複数の溝(幅0.2mm前後)が並列する植物遺体3点(長さ4～6cm、幅約1cm)(PL. 103-2)である。マイクロスコープ観察では、長軸方向に配列する細長い組織(幅10～20 μm 程度)が確認された。また、木材組織に見られる軸方向に対して直行する組織(放射組織)が認められなかったことから、草本植物の表面に見られる表皮組織と考えられる。さらに、この組織について電子顕微鏡観察を実施した結果、大小のケイ酸細胞(短細胞)からなる細胞列や気孔列が確認された(PL. 104-3～5)。

イネ科の葉部の表皮組織は、数列からなる気孔帯と長細胞とケイ酸細胞(短細胞)等が交互する細胞帯からなる組織を有し、葉脈状と葉脈間のケイ酸細胞(短細胞)の大きさが異なるという特徴を示す(Metcalfe, 1960)。したがって、観察対象とした試料はいずれもイネ科の葉部に由来すると考えられる。イネ科の葉は葉身と葉鞘からなるが、灰像分析の結果、葉身に特徴的に形成される

機動細胞列あるいは機動細胞珪酸体が観察されなかった(PL. 105-2)ことから、分析に供した植物遺体はイネ科の葉鞘に由来すると考えられる。また、前述した大きいケイ酸細胞(短細胞)は、短座鞍型(ヒゲシバ型)であることから、ヒゲシバ亜科やダンチク亜科に属するイネ科植物と推定される。

・1号河道跡 5地点;1-1

試料は、長形状の組織が配列する植物遺体2点と薄い板状を呈し複数の溝が確認される植物遺体1点(長さ2~5cm、幅約1cm)である。マイクロスコープ観察では、長形状の組織が配列する植物遺体表面には、表面に突き出た粒状の組織(PL. 104-33)や気孔(PL. 104-34)が確認された。また、複数の溝が確認される植物遺体には、長軸方向に配列する細長い組織(PL. 104-35)が確認された。さらに、後者の植物遺体の電子顕微鏡観察の結果、1地点 1-2と同様に植物珪酸体列や気孔帯が確認された(PL. 104-6)。このような構造は、上記した1地点;1-2と同様であることから、分析に供した植物遺体は、ヒゲシバ亜科やダンチク亜科に属するイネ科植物の葉鞘に由来する可能性がある。

(3)安定同位体比分析

1号畠跡より出土した炭化物2点の安定同位体比(δ 13C, δ 15N)は、炭No.1の δ 13C-PDBが -26.2% 、 δ 15N-Airが -3.74% 、炭化物 No.9の δ 13C-PDBが -13.2% 、 δ 15N-Airが -0.4504% であった。

植物が二酸化炭素(CO₂)として固定(光合成)する場合、海洋生物は海水中に溶存したCO₂を、陸上生物は大気中のCO₂を使う。海水中に存するCO₂と大気中のCO₂では、その中に含まれる安定同位対比(δ 13C)が異なることから、これらを取り込む海洋起源植物と陸上起源植物がもつ δ 13Cはそれぞれ異なる。今回は、陸上生物を対象とした調査であることから、大気中のCO₂を元にした物質循環の中に含まれる。

陸上植物には、光合成を行う様式が大きく3つ(C₃植物、C₄植物、CAM植物)存在する。これらが光合成を行う際の同位体分別がそれぞれ異なるため、陸上起源植物では、光合成の様式によって δ 13Cの値は違ってくる。C₃植物は、陸上のほとんどの植物が含まれ、有用植物としては堅果類や多くの果物をはじめ、ウリ等の野菜類、イネ、ムギ等の穀類が含まれる。C₄植物にはススキ、サト

ウキビ、トウモロコシ、カヤツリグサ等の単子葉植物、アオビユ等の双子葉植物等の乾燥域や熱帯系の植物に多い。CAM植物は、ベンケイソウやサボテン、パイナップルなどの多肉植物に多い(Pearsall, 2000など)。

一方植物の窒素は、大気からの硝酸やアンモニアの降下物、マメ科植物等の窒素固定生物による大気窒素ガスである。土壌に付加された窒素が土壌中で代謝されて植物に吸収されるが、土壌中の窒素代謝はアンモニアの揮散や脱窒作用等により、自然界の窒素同位対比(δ 15N)と比べて高くなるのが普通である。

なお、 δ 13Cは捕食者によって炭素が取り込まれるため、餌となる動植物に由来して変化する。また、 δ 15Nの値は、捕食者と食物の間で同位体分別が大きくなっていくのが特徴である(Pearsall, 2000など)。陸上生物を、 δ 13Cと δ 15NをX Y軸にとった表に落とすと第372図のようになり、種類により異なっていることがわかる(Pearsall, 2000)。 δ 13Cは光合成の様式により大きく異なり、 δ 15Nは植物、草食動物、肉食動物の順に値が高くなり、捕食者と食物の間の同位体分別が大きい。

今回の分析結果を第372図に当てはめると、 δ 13Cは2試料で明らかに異なり、炭No.1がC₃植物、炭No.9がC₄植物の範疇に入る。 δ 15Nの値は2試料ともに小さく、炭No.9は現在の動植物の領域から外れている。この要因としては、分析対象とした部位が茎の細胞壁であることが挙げられる。茎の細胞壁は大部分がセルロースで窒素を含まないため、窒素量が極端に少なくなっていると推定される。

4. 考察

1号河道跡の灰~褐灰色泥に挟在する植物遺体層より抽出した植物遺体の組織学的観察の結果、イネ科の表皮組織およびイネ科の葉部に由来する植物遺体が確認された。イネ科の葉部の形質を有する植物遺体は、灰像分析の結果、ケイ酸細胞(短細胞)に短座鞍型(ヒゲシバ型)が認められたことから、ヒゲシバ亜科やダンチク亜科に属するイネ科植物に由来すると考えられる。さらに、他の植物遺体の径や節の形状、保存状態等からイネ科の中でも大型で強健な種類が想定され、前述した植物遺体層の植物珪酸体(単体)分析結果等も考慮すると、上記した植物遺体はヨシ属に由来する可能性がある。

一方、1号畠跡から出土した炭化物は、植物の種類を特定できる組織学的特徴の確認には至らなかった。ただし、炭No.1は、形状が1号河道跡で検出された植物遺体に類似し、組織の特徴も1号河道跡内の試料で表皮を剥いだ時にみられる繊維状の組織と類似する。これらの特徴や安定同位体比を考慮すると、炭No.1はC3植物に含まれるイネ科に由来する可能性がある。また、炭No.9は、茎の径や組織の特徴から中～大型の草本類であるとみられ、安定同位体比からC4植物の可能性が示唆される。なお、燃え残りやすい点から、イネ科やカヤツリグサ科(これらの植物珪酸体が形成される植物は、燃えても稈(茎)の組織が残りやすい)等が挙げられるが、種類の特定には至らない。

引用文献

- 新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 株式会社古環境研究所, 1998, 下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡の自然科学分析. 「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第231集 下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡 北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集」, 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団, 291-318.
- 近藤錬三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- Metcalf, C. R. 1960. Anatomy of the Monocotyledons, vol. 1. Gramineae. Clarendon Press, Oxford, 713 p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1992, 二宮千足遺跡の古環境解析. 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第125集二之宮千足遺跡 国道17号(上部道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学分析編). 建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団, 61-111.
- Pearsall Deborah M., 2000, Paleoethnobotany A Handbook of Procedures second edition. Academic Press, 700p.
- 早田 勉, 1989, 六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, 297-312.
- 角野康郎, 1994, 日本水草図鑑. 文一総合出版, 178p.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人, 1986, 文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集 館林の池沼群と環境の変遷. 館林市教育委員会, 110p.
- 矢口裕之, 2011, 関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要, 29, 21-40.

4 種子同定(1)と珪酸体分析

はじめに

阿弥大寺本郷遺跡(伊勢崎市葦塚町地内)は、現在の利根川と広瀬川低地帯に挟まれた完新世の段丘面上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、古墳時代前期の水田跡や古墳時代中期の集落、古墳時代後期の畠跡、奈良～平安時代の集落等が確認されている。

本報告では、3-2区より検出された5世紀中頃の竪穴住居跡における植物質食糧、および前述した竪穴住居跡の確認面より下位の確認面から検出された水田遺構(As-C混土水田4、PL.105①②)における栽培植物の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

1. 種実遺体分析

1. 試料

試料は、3-2区 5号住居跡のカマド左脇より採取された土壌(3-2区5号 カマ左 灰)である。試料の肉眼観察の結果、土壌中には炭化物とともに、白～灰色を呈する針状および板状を呈する灰状物質が多く混じる状況が確認された。また後述する炭化種実の検出状況や部位等の状況から、上記した灰状物質中に植物質食糧に由来する組織片の存在が想定されたことから、今回の調査では水洗選別により回収された灰状物質の由来を明らかとするため、以下に示す方法で抽出・同定を試みた。

2. 分析方法

(1)種実遺体分析

土壌試料(1000.73g)を容器に広げて常温で数日乾燥させた後、肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物や土器等の遺物を拾い出す。その後、水を満たした容器に試料を投入し、容器を傾斜させて浮いた灰状物質と炭化物を粒径 $63\mu\text{m}$ の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて灰状物質と炭化物を回収する作業を、灰状物質と炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(30回程度)。さらに残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺

体を拾い出す。種実遺体の同定は、双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から実施し、個数を数えて表示する。種実遺体以外の抽出物と残渣は、 40°C 72時間乾燥後の重量を表示する。炭化材と灰状物質は容量を、炭化材と土器片は最大径を併記する。分析後は、抽出物を分類群毎に容器に入れて保管する。種実遺体は約70%のエタノール溶液で液浸保管する。

(2)灰像分析

上述した方法により回収された灰状物質について、光学顕微鏡下で観察し、珪化組織片の有無を確認する。前述した確認結果に基づき、灰状物質を双眼実体顕微鏡下で観察し、植物遺体に由来すると思われる灰状物質を面相筆を用いて抽出する。マイクロスコープ(KEYENCE, VHX-1000)を用いて灰状物質の外観を記録した後、灰状物質表面を光学顕微鏡下で観察し、確認された珪酸組織を近藤(2010)の分類を参考に同定する。

3. 結果

(1)種実遺体分析

結果を第27表に示す。3-2区 5号住居跡のカマド脇より採取された土壌の水洗選別の結果、栽培種のイネの穎(果)の破片が10個(炭化8個、灰化2個)検出された。この他に、炭化材が 0.27g (1.5cc 、最大径 8.6mm)、不明炭化物(木材組織が確認されない、部位、種類ともに不明の炭化物)が 0.01g 未満、灰状物質が 11.89g (50cc)、土器片が1個(11.63g 、径 35.5mm)確認された。分析残渣は砂礫主体で 3.28g を量る。

・イネ属(*Oryza sativa* L.) イネ科

穎(果)の破片が検出された。穎(果)は、炭化および灰化した破片が認められ、炭化した個体は黒色、灰化した個体は白～灰白色を呈する。破片の大きさは、最大 1.8mm 程度。完形ならば、長さ $6\sim 7.5\text{mm}$ 、幅 $3\sim 4\text{mm}$ 、厚さ 1.5mm 程度のやや偏平な長楕円体で、基部に斜切状円柱形の果実序柄(PL.106-2～4)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は脆く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する(PL.106-1～4)。

第27表. 種実遺体分析結果

状態	3-2区 5住居 カマド付近 炭化物	備考
種実 イネ 穎 破片 炭化 灰化	8 個 2 個	3個：基部
炭化材 炭化	0.27 g 1.5 cc 8.6 mm	最大径
不明炭化物 炭化 灰状物質 灰化	<0.01 g 11.89 g 50 cc	オオムギ族類珪酸体、キビ属短細胞列・短細胞珪酸体、不明珪化組織片検出
土器片	1 個 11.63 g 35.5 mm	
分析残渣(砂礫)	3.28 g	
分析量	1000.73 g	

(2) 灰像分析

水洗(浮遊)選別によって回収された灰状物質(PL. 106-5～6)について、光学顕微鏡下で概査(珪化組織の有無の確認)を行った結果、栽培種のキビ(*Panicum miliaceum* L.; イネ科キビ属)を含むキビ属の葉部に形成される珪化組織(PL. 106-7)と、コムギ(*Triticum aestivum* L.; イネ科コムギ属)やオオムギ(*Hordeum vulgare* L.; イネ科オオムギ属)等を含むオオムギ族(Tribus Hordeae)の類珪酸体が確認された。

この結果を踏まえ、改めて植物遺体に由来すると思われる灰状物質を抽出し、灰像分析を実施した。分析対象とした試料は、複数の繊維が絡み合う状況が観察された灰状物質(PL. 106-8a)、表面に数多くの顆粒状の突起と長軸方向に平行する細い筋が観察された灰状物質(PL. 107-9a, 10a, 11a, 12a)、さらに上記に分類されないものの特徴的な形態を有する灰状物質(PL. 108-13a, 14a)である。

複数の繊維が絡み合う状況が観察された灰状物質(PL. 106-8a)の一部からは、キビ属の葉部に形成される短細胞珪酸体を含む珪化組織片(PL. 106-8b)が確認された。また顆粒状の突起と長軸方向に平行する細い筋が観察された灰状物質(PL. 107-9a, 10a, 11a, 12a)からは、オオムギ族の類に形成される類珪酸体が確認された。これは長細胞に由来する珪酸体で、直線および曲線的な棒状を呈し、周辺が波状の輪郭か、棘状突起物を有する。また、PL. 107-12bの左側には、類珪酸体に並行する気孔列も確認された。特徴的な形態を有する灰状物質(PL. 108-13a, 14a)は、それぞれ珪化組織(PL. 108-13b, 14b)が確認

されたが、分類群の特定可能な形態を有する植物珪酸体は認められなかった。

4. 考察

5世紀中頃とされる3-2区 5号住居跡のカマド左脇より採取された土壌試料からは、栽培種のイネの炭化した穎の破片および灰化した穎の破片が検出された。また、灰状物質からは、オオムギ族の類珪酸体やキビ属の葉部に形成される珪化組織、さらに分類群の特定に至らない珪化組織が確認された。

炉やカマドの埋積物等を対象とした分析には、植物質食料や燃料材の直接的な手掛かりとなる炭化種実や炭化材の抽出・同定が行われることが多い。また、燃料材の検討については、珪化組織片の産状を検討するため灰像分析等も併用する場合があります。周辺に分布した草地に由来すると考えられるイネ科植物の珪化組織片とともに栽培種の非可食部に相当する部位や珪化組織が検出される事例が確認されている(例えば、パリノ・サーヴェイ, 2006・2010)。

今回の灰状物質の調査は、全体の一部を対象としたのみであるが、種実で確認されたイネの類珪酸体が確認されず、オオムギ族やキビ属が確認された点の特徴として指摘される。また、本遺跡の畠跡や河道跡で検出されたタケ亜科やヨシ属、ススキ属等などの周辺の草地に由来する分類群は確認されなかった。オオムギ族やキビ属は、植物珪酸体の形態から野生種との区別は困難であるが、試料の採取地点や観察所見からカマドより掻出された灰等に由来すると推定されること、さらに灰状物質に確認

された植物遺体が栽培種および栽培種を含む分類群に限定される状況等から、検出された珪化組織はムギ類の穎やキビの植物体(葉部)に由来する可能性が高い。また、灰状物質は、稲粃や麦粃等の種実やキビワラ等に由来すると考えられる植物体が、十分な酸素供給下で燃焼した痕跡と推定される。

II. 植物珪酸体分析

1. 試料

試料は、3-2区の北壁(C断面)および南壁(G断面)の堆積層より採取された土壌6点である。これらの土壌試料は、それぞれAs-C混土水田の耕作土あるいは水田底面に相当する堆積物(3-2区北壁 試料番号P0-7a、3-2区南壁 試料番号P0-8a)、水田を覆う堆積物あるいは水田耕作土と想定される堆積物(3-2区北壁 試料番号P0-5a、3-2区南壁 試料番号P0-1a)、さらに、水田上位の洪水層に相当する堆積物(3-2区北壁 試料番号P0-6a、3-2区南壁 試料番号P0-1a)からなる。

2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算：検出密度)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

さらに、主な分類群については機動細胞珪酸体の含量

(個/g)に土壌の仮比重： (g/cm^3) ：今回は1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個体当たりの植物体乾重；単位：10-5g)をかけて、面積 1m^2 で層厚 1cm 当たりの推定生産量 $(\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm})$ を推定した。この時、イネ(赤米)の換算係数は2.94、クマザサ属は0.75、メダケ節は1.16、ヨシ属は6.31である。なおウシクサ族については、ウシクサ族に属するススキ属の換算係数1.24を用いた。

3. 結果(PL.109)

各試料の植物珪酸体含量を表28、主な分類群の推定生産量を表29に示す。また、植物珪酸体含量の層位的変化を第373図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

(1) 3-2区南壁(G断面)

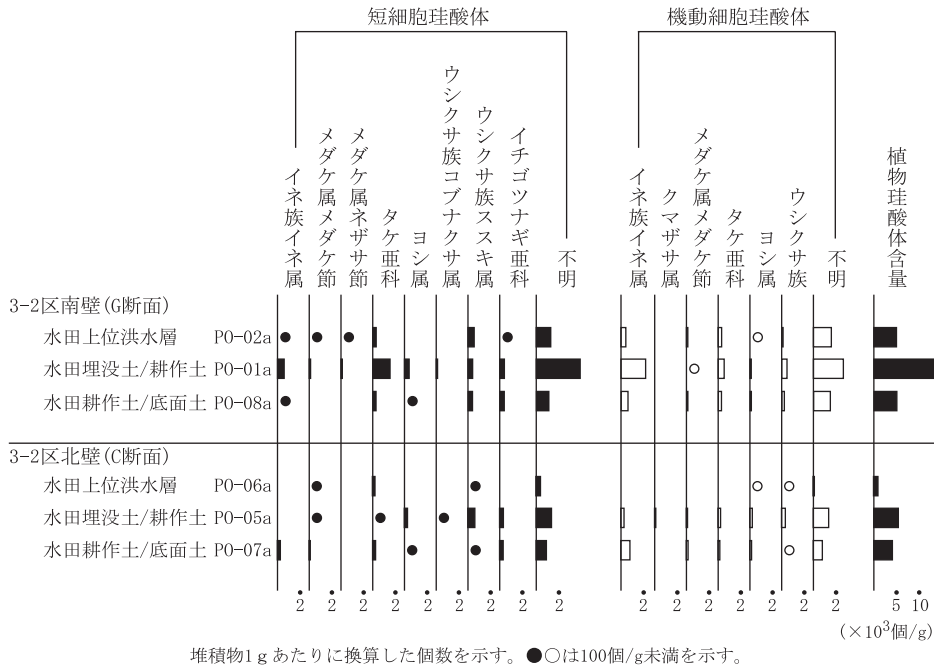
南壁から採取された3試料の植物珪酸体含量は5,000～1.4万個/gであり、P0-1aで最も含量が高い。検出された分類群のうち栽培種についてみると、3試料よりイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、P0-01aが3試料中で最も含量が高く、短細胞珪酸体が約600個/g、機動細胞珪酸体が約2,200個/gである。P0-02aおよび08aは、短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が400～600個/g程度である。栽培種を除く分類群は、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出されるが、概して含量が低い。

(2) 3-2区北壁(C断面)

北壁から採取された3試料の植物珪酸体含量は1,000～5,500個/gであり、南壁試料と比較して全体的に含量が低い。栽培種では、P0-05aとP0-07aよりイネ属が検出される。その含量は、P0-05aでは機動細胞珪酸体が300個/g、P0-07aは短細胞珪酸体が300個/g、機動細胞珪酸体が800個/gである。栽培種を除く分類群では、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出されるが、概して含量が低い。

4. 考察

3-2区のAs-C混土水田とその上位に堆積する洪水層を対象とした植物珪酸体分析の結果、北壁の洪水層(P0-



第373図 植物珪酸体含量

第28表 植物珪酸体含量

分類群	3-2区 (個/g)					
	南壁(G断面)			北壁(C断面)		
	P0-01a	P0-02a	P0-08a	P0-05a	P0-06a	P0-07a
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	600	<100	<100	-	-	300
メダケ属メダケ節	100	<100	-	<100	<100	100
メダケ属ネザサ節	100	<100	-	-	-	-
タケ亜科	1,500	300	300	<100	200	300
ヨシ属	400	-	<100	300	-	<100
ウシクサ族コブナグサ属	100	-	-	<100	-	-
ウシクサ族ススキ属	400	500	400	600	<100	<100
イチゴツナギ亜科	400	<100	400	300	-	300
不明	3,900	1,300	1,100	1,400	400	900
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	2,200	400	600	300	-	800
クマザサ属	-	-	-	100	-	-
メダケ属メダケ節	<100	100	100	100	-	200
タケ亜科	500	300	300	200	-	200
ヨシ属	100	<100	100	200	<100	200
ウシクサ族	500	100	200	300	<100	<100
不明	2,600	1,600	1,500	1,400	100	800
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	7,600	2,400	2,200	2,800	800	2,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,000	2,600	2,800	2,700	200	2,100
総計	13,600	5,000	5,000	5,500	1,000	4,100

第29表. 主な分類群の推定生産量

分類群	3-2区 (kg/m ² ・cm)					
	南壁(G断面)			北壁(C断面)		
	P0-01a	P0-02a	P0-08a	P0-05a	P0-06a	P0-07a
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	0.64	0.13	0.18	0.08	-	0.24
メダケ属メダケ節	0.01	0.01	0.01	0.01	-	0.02
ヨシ属	0.07	0.04	0.07	0.14	0.04	0.10
ウシクサ族	0.06	0.02	0.03	0.04	0.01	0.01

第VI章 自然科学分析

06a)を除く5試料より栽培種のイネ属が検出された。5試料におけるイネ属の植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が100個/g未満～600個/g、機動細胞珪酸体が300～2,200個/gであった。

稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山,2000)。また群馬県内では水田遺構での産状から3,000個/gを基準として検討する場合もある(有限会社古環境研究所,1993など)。

今回の分析結果についてみると、南壁の水田埋没土または耕作土とされる試料(P0-01a)の機動細胞珪酸体含量の2,200個/gが最も高い値であり、上記した判断基準と比較すると概して含量が低い。なお、今回の分析に供された試料は、発掘調査所見に基づいて、水田の耕作土または底面土、水田埋没土または耕作土、水田上位の洪水層と層位的に採取されている。これらの所見に基づき、イネ属の層位的変化(第373図)をみると、南壁では前述したように水田埋没土または耕作土(P0-01a)でイネ属の含量が高い。一方、北壁では洪水層からはイネ属は検出されなかったが、水田の耕作土または底面土、水田埋没土または耕作土よりイネ属が検出され、水田の耕作土または底面土(P0-07a)においてわずかに含量が高い。このような含量の変化を考慮すると、洪水層より下位で稲作が行われていた可能性がある。なお、イネ属の含量が概して低かった要因としては、生産性が低い、あるいは耕作期間が短いといった背景等により土壌中にイネ属の植物珪酸体が蓄積しにくい状態であったことが想定される。

また、栽培種を除く分類群では、タケ亜科(メダケ属やクマザサ属を含む)やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出された。本遺跡の発掘調査で明らかとされている微地形等を考慮すると、今回の調査区は相対的に低所にあたることから、付近には水湿地等を好むヨシ属がみられ、比較的乾燥した場所にはタケ亜科やススキ属が分布したと推定される。

引用文献

- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 近藤鎌三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2006,第5章 平田宮第2遺跡の自然科学分析.山梨県中巨摩郡玉穂町 平田宮第2遺跡 新山梨環状道路建設及び一級河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財調査,玉穂町埋蔵文化財調査報告書 第3集,玉穂町教育委員会・山梨県新環状・西関東道路建設事務所・山梨県峡中地域振興局,32-55.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2010,上窪遺跡の自然科学分析.山梨県中央市 上窪遺跡(5次調査) 新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査,中央市埋蔵文化財調査報告書 第2集,中央市教育委員会・山梨県新環状・西関東道路建設事務所,35-46.
- 杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 有限会社古環境研究所,1993,萩原団地遺跡におけるプラント・オパール分析.山武考古学研究所編「萩原団地遺跡 団地造成工業に伴う高崎市萩原町字伊勢、字出慶寺地区の埋蔵文化財発掘調査報告書」,萩原団地遺跡調査会・高崎市教育委員会,104-109.

5 木製品及び種子同定(2)

はじめに

阿弥大寺本郷遺跡(群馬県伊勢崎市蕪塚町・田中町地内)は、現在の利根川と広瀬川との間に広がる広瀬川低地の微高地上に立地する。本遺跡の発掘調査では、古墳時代前期・中期・後期、古代、中世の各時期の集落をはじめとして水田や畝跡なども確認されている。また、河川氾濫に伴う堆積物、榛名火山の噴火に伴う降下堆積物やラハール堆積物、浅間火山の噴火に伴う降下堆積物等も確認されており、これらの災害イベントと集落の変遷、生産域の転換等の状況も明らかとされている。

本報告では、阿弥大寺本郷遺跡における植物利用の検討を目的として、河道や井戸跡から出土した種実や木製品を対象に、種実同定および樹種同定を実施した。

1. 種実同定

1. 試料

試料は、平安時代の3区1号井戸から出土した種実遺体5試料31個(管理番号3、7、10、12、18)と、中世の2区1号井戸の杵材(管理番号6)に確認された植物遺体片8点である。試料の詳細は結果とともに第30表に示す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れて保管する。水浸試料には、約70%のエタノール溶液を入れて保存する。

3. 結果(PL. 110)

同定結果を第30表に示す。全試料を通じて、木本4分類群(広葉樹のクリ、スモモ、モモ、センダン) 22個、草本3分類群(ヒョウタン類、エゴマ、オナモミ属) 13個、計35個の種実遺体が同定された。種実遺体以外では、木材が3個(管理番号10)、土粒が1個(管理番号18)確認された。

種実遺体群のうち、栽培種は、3区1号井戸からスモモの核が13個(スモモ?を含む)、モモの核が6個、ヒョウ

タン類の果実が3個、エゴマの果実が1個と、杵材からヒョウタン類の果実が8個の、計31個が確認された。栽培種が種実遺体群の88.6%を占める。

栽培種を除いた分類群は、3区1号井戸から、落葉高木のクリの果実が2個、センダンの核が1個、草本のオナモミ属の総苞が1個の、計4個が確認された。

本分析で確認された種実遺体各分類群の形態的特徴等を以下に記す。また、デジタルノギスを用いて計測した、種実遺体の長さ、幅、厚さを表1に示す。

〈木本〉

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実は暗灰褐色、長さ26.9mm、幅27.1mm、厚さ13.3mmの三角状広卵体。一側面は扁平で、反対面は丸みがある。頂部は尖り、基部はやや切形。基部全面を占める着点(座)は、果皮と別組織で灰褐色を呈し、粗く不規則な粒状紋様がある。果皮との接線は波打つ。果皮表面はやや平滑で、微細な浅い縦筋がある。果皮内面には灰黄褐色の種皮があり、毛が残存する。

・スモモ(*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ10.9~15.6mm、幅8.4~13.5mm、厚さ5.8~8.7mmのレンズ状広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で丸い臍点がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

管理番号10から確認された完形個体1個には、背面正中線上に円形の孔がみられ、ネズミ類による食痕と考えられる。また、管理番号18から確認された完形個体1個は、炭化した核と考えられるが、表面に泥が付着しており、状態不良であるため、スモモ?としている。

・モモ(*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ30.4~34.6mm、幅23.8~24.9mm、厚さ15.7~16.0mmのやや扁平な広楕円体。頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

第VI章 自然科学分析

第30表. 種実同定結果

地区	遺構	管理番号	分類群	部位	状態	個数	計測値(mm)			備考	
							長さ	幅	厚さ		
2区	1号井戸	6	ヒョウタン類	果実	破片	8	38.0 +	29.3 +	6.7	最大片, 厚さ:果皮	
3区	1号井戸	3	スモモ	核	完形	1	11.5	9.0	5.8		
					破片	4	11.7	6.3 +	3.8 +	最大片	
		7	クリ	果実	完形	1	26.9	27.1	13.3		
					破片	1	16.5 +	8.3 +	-	平坦面	
		10	スモモ	核	完形		5	15.6	13.5	8.7	
							-	13.9	10.1	7.1	
							-	12.1	9.1	7.1	
							-	10.9	8.4	5.8	
							-	13.7	9.9 +	7.5	背面正中線上:ネズミ類食痕
						破片	2	9.3 +	-	-	最大片
						完形	1	30.4	22.3 +	15.7	背面正中線上:ネズミ類食痕
						半分	1	31.2	23.8	8.0 +	半割面の種子の窪み:長さ23.5mm, 幅11.7mm, 厚さ2.4mm
						破片	2	29.4 +	-	-	
						センダン	核	完形	1	13.4	9.3
		ヒョウタン類	果実	破片	3	17.8	12.0	6.6	最大片, 厚さ:果皮		
		エゴマ	果実	破片	1	2.5	2.2	-			
		オナモミ属	総苞	破片	1	9.6 +	6.0	3.1 +			
		木材	-	破片	3	-	-	-			
		12	モモ	核	半分		2	34.6	24.9	7.8 +	半割面の種子の窪み:長さ23.0mm, 幅13.3mm, 厚さ4.0mm
							-	33.4	24.8	7.9 +	半割面の種子の窪み:長さ22.9mm, 幅12.8mm, 厚さ2.7mm
18	スモモ?	核?	完形		1	13.9	9.0	6.2	炭化?, 表面に泥が付着し、状態不良		
					1	-	-	-			
(種実)合計						35					

*計測はデジタルノギスを使用した。完全な計測値を得られない試料は、残存値にプラス(+)で表示し、大きく欠損する等で計測不可な試料はハイフオン(-)で表示した。

管理番号10から確認された完形個体1個には、背面正中線上に円形の孔がみられ、ネズミ類による食痕と考えられる。また、管理番号10から確認された1個と、管理番号12から確認された2個は、縫合線に沿って割れた半分個体である。半割面は平滑で、中央に長さ22.9～23.5mm、幅11.7～13.3mm、厚さ2.4～4.0mmの半広卵体の窪みがある。

・センダン(*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

核(内果皮)は灰褐色、長さ13.4mm、径9.3mmの楕円体。基部には大きく深い孔がある。背面は浅く広い5～6個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面観は星型。表面は粗面。

〈草本〉

・ヒョウタン類(*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

果実は黄灰褐色、完形ならば球形やナス形、首の長いフラスコ形や細長い形まで様々である。出土果皮片の最大径は3.8×2.9cm、厚さは6.6～6.7mmであった。果皮断面は柵状、表面は平滑で光沢がある。果皮内面は灰褐色、海綿状で、頂部と基部を結ぶ維管束の筋が配列する。いずれの果皮片もゆるやかな丸みを帯びることから、推定される完形の果実は、首の長いフラスコ形や細長い形とは区別される。

・エゴマ(*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica*

Hara) シソ科シソ属

果実は暗灰褐色、完形ならば長さ2.0～2.8mm、幅1.8～2.5mm (笠原, 1982)の倒広卵体で、基部には大きな着点部があり、舌状に突出する。果皮は柔らかく、表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。

出土果皮片は1/3片未満で、残存長2.5mm、残存幅2.2mmであった。

シソ属には、栽培種で軟実のエゴマと、硬実のシソのほかに、硬実の雑草型エゴマがあり、雑草型エゴマの果実の大きさは、エゴマとシソの中間型を示す(新田, 2001)。本分析では、笠原(1982)の基準(長さ1.4～1.5mm、幅1.1～1.2mmをシソ)や、中山ほか(2000)の計測値を参考に、エゴマとしている。

・オナモミ属(*Xanthium*) キク科

総苞は灰褐色、残存長9.6mm、径6.0mmの楕円体。頂部にある長さ0.5mm程度の太い嘴2個を欠損する。表面には長さ0.5～1mm程度の刺が散在し、鉤状に曲がった刺先端部を欠損する。

4. 考察

平安時代の3区1号井戸から出土した種実遺体には、栽培種のスモモ、モモ、ヒョウタン類、エゴマが確認された。また、中世の2区1号井戸の杵材(管理番号6)試料中に確認された植物遺体片はヒョウタン類であった。

上述した栽培種のうち、スモモとモモは、観賞用の他、

果実や種子が食用、薬用、祭祀等に利用される果樹である。ヒョウタン類は果実が食用や容器に利用され、エゴマは果実が食用や油料に利用される。これらはいずれも食用できる栽培種であることから、当時利用された植物質食料と考えられる。2区1号井戸の杵材から出土したヒョウタン類は、破片であったことや加工痕等が確認できなかったため形状等から用途の推定は困難である。また、スモモやモモには、ネズミ類によると考えられる食痕も確認されたことから、遺跡周辺にはネズミ類が生息していたと推定される。

一方栽培種を除いた分類群では、木本のクリやセンダンと、草本のオナモミ属が確認された。クリは、山地や丘陵などに生育する二次林要素の落葉高木であり、遺跡周辺に生育していたと考えられる。クリは、果実内部の子葉が生食可能な有用植物であるが、今回の出土果実は完全な状態を保っており、人による直接の利用の痕跡は認められなかった。センダンは、四国、九州、小笠原および琉球の海近くの暖地の日当たりの良い場所に生育し、本州ではよく植栽される落葉高木であることから、出土核は植栽樹に由来する可能性もある。オナモミ属は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物である。調査区周辺の草地に生育していたと考えられる。

II. 出土木製品等の樹種

1. 試料

試料は、6世紀以降とされる2区西側流路から出土した杵と柄の2点と、中世の2区1号井戸から出土した木釘1点(管理番号5)、杵材4点(管理番号6、14、15、17)および曲物底板2点(管理番号1、2)の計9点である。なお、2区1号井戸の杵材(管理番号6)中には、上述したヒョウタン類とともに木片が認められたことから、木片の調査も合わせて行った。試料の詳細は結果とともに第31表に示す。

2. 分析方法

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴

を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果(PL.111)

同定結果を第31表に示す。木製品および管理番号6の木片は、針葉樹1分類群(ヒノキ科)と広葉樹3分類群(ヤナギ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、クリ)、およびイネ科タケ亜科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科(Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヤナギ属(Salix) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・イネ科タケ亜科(Gramineae subfam. Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞

第31表. 樹種同定結果

地区	遺構	管理番号	器種	木取り	種類
2区	1号井戸	1	曲物底板	板目	ヒノキ科
		2	曲物底板	板目	ヒノキ科
		6	木片		ヤナギ属
			木片		イネ科タケ亜科
		14	杵材	分割材	クリ
		15	杵材	分割材	クリ
17	杵材	分割材	クリ		
2区	西側流路	—	杵	削出丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		—	柄	分割材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

今回の分析に供された試料は、曲物底板、木釘、杵材、杵、柄等の木製品と、杵材試料中に確認された木片とがある。これらの試料からは、計5分類群の樹種が確認された。各分類群の材質についてみると、針葉樹のヒノキ科は、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれ、いずれも木理が通直で割裂性や耐水性が比較的高く、加工が容易である。広葉樹のクヌギ節とクリは、重硬で強度が高く、クリは耐朽性も高い。ヤナギ属は、軽軟で強度や保存性は低い。タケ亜科は、強度や靱性が高く、加工はやや困難である。

6世紀以降とされる2区西側流路から出土した杵は、ミカン割状の分割材を削出丸木状に加工した資料である。柄は、樹木の枝分かれ部分を利用し、本体を分割材状に加工して装着部とし、本体から出る小枝部分を柄(持ち手)とするが、柄の大部分は欠損している。杵と柄は、いずれもクヌギ節であり、強度の高い木材の利用が推定される。クヌギ節は、関東地方の二次林や後背湿地などに普通にみられるクヌギが含まれている。2区では、榛名二ツ岳澁川テフラ(Hr-FA)の噴火に伴うラハール堆積物で埋積した1号河道堆積物の花粉分析結果から、クヌギ節を含むコナラ亜属が集水域の河川沿いや斜面地等に生育していた可能性が指摘されている。この結果から、クヌギ節は、6世紀以降も周囲に生育し、木材の入手は比較的容易であったことが推定される。

なお、群馬県内の木製品の調査事例(伊東・山田, 2012)

をみると、古墳時代から古代頃の杵は、クヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属の利用が比較的多い。柄は、クリの利用が多いが、このほかにもケヤキ、ケンボナシ属、サカキ、サクラ属、ムクロジ、ヤマグワ等の多くの種類が確認されており、杵に比べて利用木材の選択幅が広い。クヌギ節は、いずれの器種にも確認された事例があることから、既存の調査事例から推定される木材利用とも調和的である。

一方、中世の2区1号井戸から出土した曲物底板は、2点ともに板目板であり、ヒノキ科に同定された。この結果から、加工性や耐水性の高い木材の利用が推定される。ヒノキ科は、主に山地に生育する種類であり、遺跡周辺には分布していないと想定される。そのため、木材あるいは製品が搬入された可能性がある。木釘は、削出丸木であり、クリであったことから強度の高い木材を利用したことが推定される。杵材は、断面が六角形状(管理番号14)、角材状(管理番号15)、(柁目)板状(管理番号17)と形状の異なる分割材であったが、樹種は全てクリであった。このことから、強度や耐朽性の高い木材の利用が推定される。木片は、観察した範囲では明瞭な加工痕は確認できなかったため、本来の形状や用途の推定には至らない。木片に認められたヤナギ属は、河畔や低地等、タケ亜科は明るい林床等に生育することから、本遺跡周辺に生育した樹木等に由来する可能性がある。

群馬県内における中世の木材利用をみると、曲物はヒノキの利用例が多く、この他にスギ、アスナロ、モミ属等も確認できる。また、井戸部材は、下村北・砂内遺跡(高崎市)や村西・増殿遺跡(高崎市)でクリの利用が確認でき、同様の木材利用が窺える。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久, 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 笠原安夫, 1982, 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について. 鳥浜貝塚1980年度発掘 調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2—, 福井県教育委員会, 65-87.
- 中山至大・井之口 希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 新田みゆき, 2001, シソとエゴマの分化と多様性. 栽培植物の自然史—野生植物と人類の共進化—, 山口裕文・島本義也編, 北海道大学図書刊行会, 165-175.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴 リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

第Ⅶ章 まとめ

1 弘仁9年の地震の痕跡

① 噴砂痕

本遺跡に於いては噴性確認されている。その分布は西端部を除く4区以東にも見られたが、その分布が濃かったのは西端の5-1区であった。

さて本遺跡の発掘調査にあたっては、試掘調査成果に基づいてAs-B、Hr-FAの両テフラ下、及び古墳時代前期の遺構確認面が当初調査対象とされていた。このうち前、後2者は部分的なものとして想定されていたが、FAの堆積は広範囲に及ぶと認識されていた。既に述べたように、本遺跡で最初に発掘調査に着手したのは西端の5区の中・北部に当たる5-1区であり、ここではFA面を確認面として発掘調査に着手した。部分的に上位面を調査しつつ最終的にその最東部を除き予定通りFAの上面まで土木機械による掘削を行ったのであるが、その確認途上で幅20数cmを測る帯状のプランが確認された。この検出されたプランについては当初溝遺構の可能性を疑ったが、その後掘削等を行って噴砂痕を確認した。

噴砂痕は5-1区東部の1号谷に以西の広い範囲に分布している。その分布状況は第374図に示したが、噴砂痕は調査対象外であったため、この図は航空写真等から起したものであり、従って狭い幅のものは含まれていない。しかしこの図で解るように噴砂痕の方向は5-1区の北半部西部では南北、東部では北北東-南南西方向に、南半部では東西を中心とした方向に走っている。

噴砂痕の幅は1cm~20cmを測った。噴砂痕はこれまでも前橋市の小島田八日市遺跡、富田大泉房遺跡等多くの遺跡で確認されているが、その幅は数cm~10cm程であり、本遺跡の4区以東、或いは利根川の対岸(西側)に位置する玉村町下之宮高俣遺跡で確認された噴砂痕の幅も同様であり、本遺跡の5-1区で確認されたように20cmもの幅を測るものは珍しい。これは下之宮高俣遺跡が前橋台地上に立地し、西端部を除く4区以東が河成段丘上の中洲に立地し、5区が河成段丘上の後背湿地にあることと関連しているものと思慮される。

噴砂痕の平面的概況は以上のようなものであったが、立面的状況は第374図の土層断面図に示した。この土層断面図は5-1区の調査区西壁のものであるが、当然のことながら一定ではなく、蛇行し、或いは斜め方向、或いは枝分かれして噴出先を探っている。その幅は1~15cmであり、また噴砂痕を境にしてFA層面の片側が陥没或いは隆起して5、6cmの段差が見られる箇所もあった。

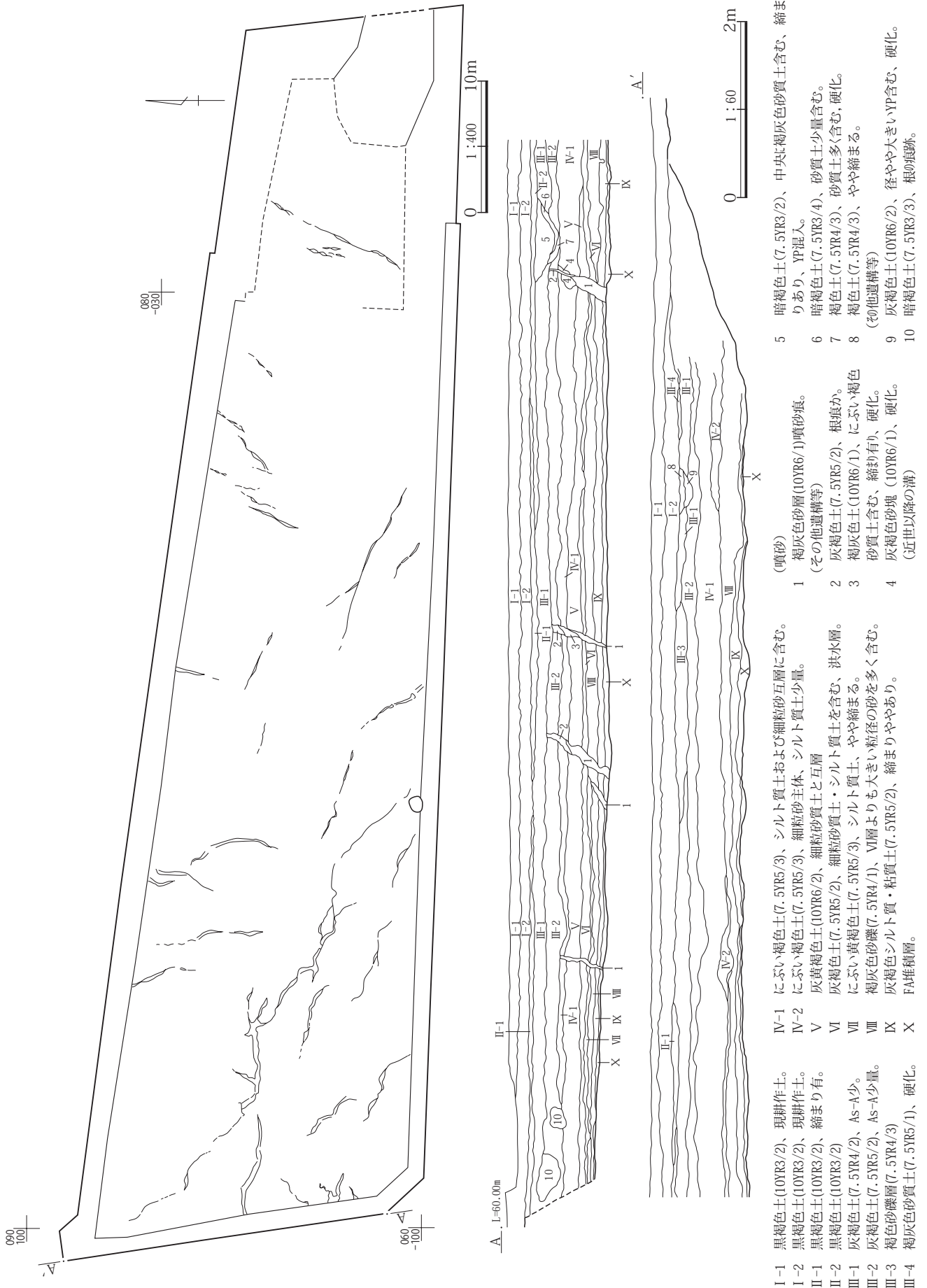
噴砂はFA層(X層)下から噴出し、にぶい褐色シルト質土と砂の互層(IV層)まで伸びており、As-Aを含む褐灰色土層(III)で断たれている。その上には近代や現代の層が乗っている。従って噴砂痕は天明3年以前の所産と判断することができる。

本遺跡の噴砂群の時期は明確ではないが、本地域に於ける大きな地震の記録としては弘仁9(818)年の地震があり、本遺跡の噴砂痕もそのときのものと解釈される。

② 側方流動

上述のように5-1区では噴砂痕を境に両側のFA面に段差が発生した箇所が散見された。これは特に幅の広い噴砂痕に見られたが、円墳状に隆起する箇所があったので以下に報告する。

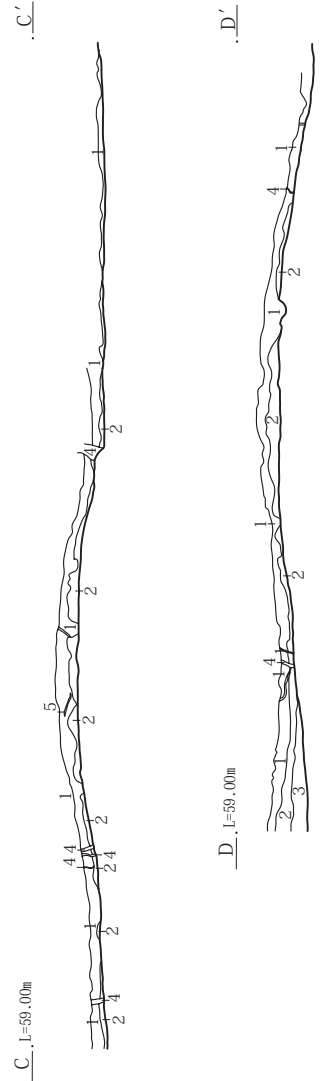
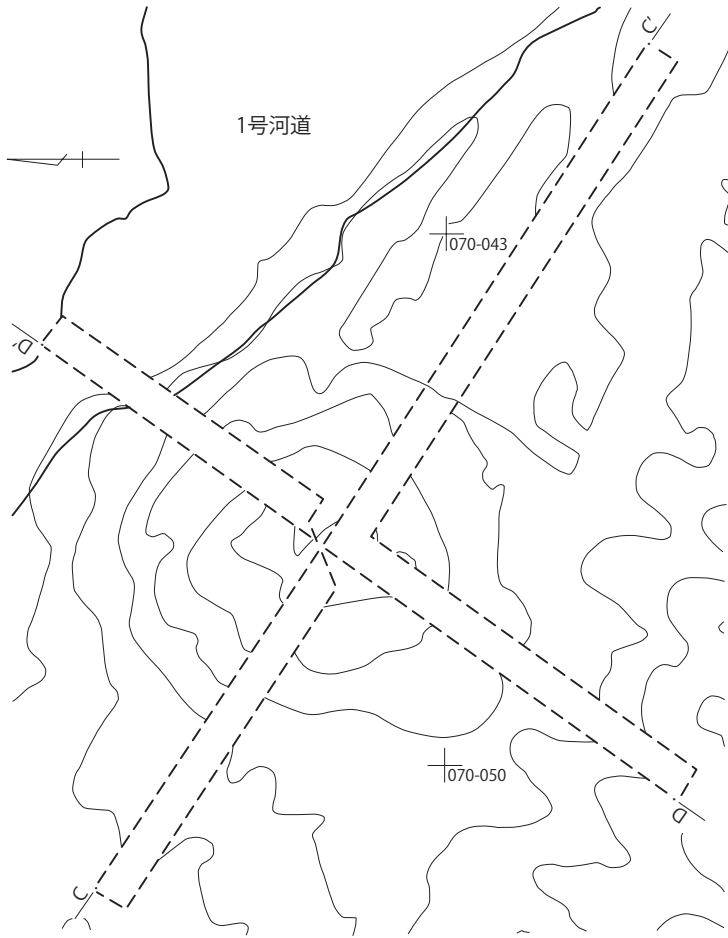
FA上面を表出中、第375図に示したように5-1区中東部北寄りの071-047グリッド付近(第375図の上)と、西南隅部に064-097グリッド付近(第375図の下)に円形プランの盛り上がり確認された(以下便宜的に前者を「1号ドーム」、後者を「2号ドーム」と称する)。このうち2号ドームは過半が西側調査区外に伸びていて全容は把握できなかったが、何れも、ドーム形を呈するものであった。1号ドームはN-31°Eに軸方向を持ち、長軸8m、短軸7m程を測り、高さ35cmを測る。一方2号ドームはN-32°Eに軸方向を持ち、3m幅程を確認したに過ぎないが、恐らく1号ドームと同様の経を持つものと推定されるもので、高さは10cmを測る。また両者共に、周囲は1号ドームで5、6cmを測るほどの僅かに周溝の如き僅かな窪みが見られたが、2号ドームの東側は9・10号溝との重複によって深くなっている。



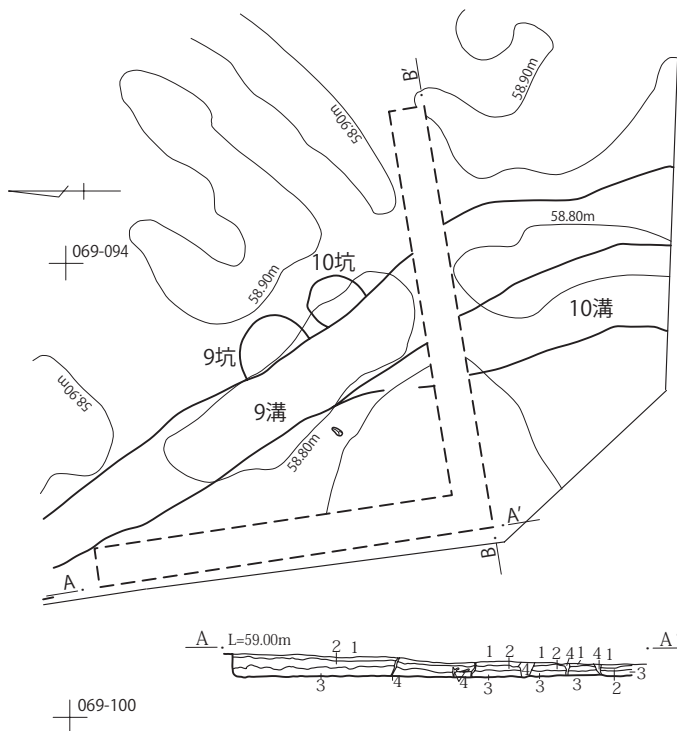
- I-1 黒褐色土(10YR3/2)、現耕作土。
- I-2 黒褐色土(10YR3/2)、現耕作土。
- II-1 黒褐色土(10YR3/2)、縮まり有。
- II-2 黒褐色土(10YR3/2)
- III-1 灰褐色土(7.5YR4/2)、As-A少。
- III-2 灰褐色土(7.5YR5/2)、As-A少量。
- III-3 褐色砂礫層(7.5YR4/3)
- III-4 褐灰色砂質土(7.5YR5/1)、硬化。
- IV-1 にぶい褐色土(7.5YR5/3)、シルト質土および細粒砂互層を含む。
- IV-2 にぶい褐色土(7.5YR5/3)、細粒砂主体、シルト質土少量。
- V 灰黄褐色土(10YR6/2)、細粒砂質土と互層
- VI 灰褐色土(7.5YR5/2)、細粒砂質土・シルト質土を含む、洪水層。
- VII にぶい黄褐色土(7.5YR5/3)、シルト質土、やや縮まる。
- VIII 褐灰色砂礫(7.5YR4/1)、VI層よりも大きい粒径の砂を多く含む。
- IX 灰褐色シルト質・粘質土(7.5YR5/2)、縮まりややあり。
- X FA堆積層。
- (噴砂)
- 1 褐灰色砂層(10YR6/1)噴砂痕。
- (その他遺構等)
- 2 灰褐色土(7.5YR5/2)、根痕か。
- 3 褐灰色土(10YR6/1)、にぶい褐色砂質土含む、締約有り、硬化。
- 4 灰褐色砂塊(10YR6/1)、硬化。(近世以降の溝)
- 5 暗褐色土(7.5YR3/2)、中央に褐灰色砂質土含む、縮まりあり、YP混入。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/4)、砂質土少量含む。
- 7 褐色土(7.5YR4/3)、砂質土多く含む、硬化。
- 8 褐色土(7.5YR4/3)、やや縮まる。(砂他遺構等)
- 9 灰褐色土(10YR6/2)、径やや大きいYP含む、硬化。
- 10 暗褐色土(7.5YR3/3)、根の痕跡。

第374図 5-1区噴砂痕および西壁セクション

北東部



南西隅部



- ①
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2)、明黄褐色土を含む、酸化鉄分多い。
 - 2 灰黄褐色土(10YR5/3)、褐灰色土を含む、酸化鉄分上層より多い。
 - 3 にぶい黄橙砂質土(10YR7/3)、縮りあり、酸化鉄分を含む。
 - 4 噴砂。
 - 5 黒褐色土(7.5YR3/1)、にぶい褐色土を少量含む、縮まりややあり、酸化鉄分見る。
 - 6 褐灰色土(7.5YR4/1)、縮りややあり、酸化鉄分著しい。
 - 7 褐灰色土(10YR4/1)、2層に比し色調暗い、5層の黒褐色土を含む。
 - 8 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)、酸化鉄分6層より少ない、明褐色土塊少量含む。
- ②
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)、FAと黒褐色小塊を含む、縮まりあり。
 - 2 灰褐色土(10YR5/1)、1層砂質土と酸化鉄分塊・黒色土を含む。
 - 3 にぶい黄橙色土(10YR6/3)、砂質土主体、黒褐色土含む。
 - 4 噴砂。
 - 5 橙(Hue5YR6/8)、粘質あり、縮まりややあり。

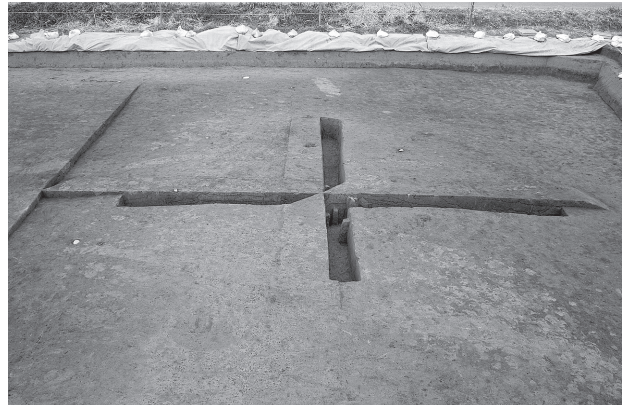
第375図 5-1区の側方流動痕

1・2号ドームは当初その整った形状から古墳の存在を疑ったが、トレンチを設定して掘削を行ったところ、古墳の存在を示すような盛土は確認されず、寧ろプライマリーな土層の堆積が確認された。特に1号ドームでは、土層堆積はその盛り上がりに沿った塑性変形のものとして確認された。従ってこれらは遺構として確認できなかったため、その段階で調査を終了した。

1・2号ドームは整ったドーム状を呈するものであったが、同僚の指摘によりこれらは地震に伴う液状化によって発生する側方流動という現象によるものと判断されるものであった。即ち想定したように弘仁9年の地震に伴うものとするならば、噴砂痕の遺存状況と合わせて考えるならば、河成段丘の後背湿地に当たる当該区域では、階層の流動化が著しく、地盤が水平方向に動き、特に1号ドームでは東接する河道の存在により、整ったドーム形に地盤が変形したものと解釈されるのである。

尚、側方流動による地形変形としての可能性を持つものに、95頁「(1)ピット群」の報文中に記した東に突き出す舌状の微高地を挙げておきたい。繰り返しになるが、4-1区南東部には分布するA s-Bの堆積域の中で半島のように西側から突出する微高地部分があり、当初遺構の存在を疑っていたものである。その規模は基底幅東西10m、南北8.5m、上幅が東西8m、南北4.4m程を測り、確認時の高さは15cm程を測るものであった。この微高地の上にA s-Bは確認されなかったが、既に述べたようにピットの分布がここを中心に認められることから、凡そ中世を前後する時期にはその存在が認識されていたことが思慮されるものであった。

上述のように遺構の存在を疑ったため、この舌状の微高地へは試掘トレンチを設定して土層の確認を行った。その結果、遺構の存在は確認できなかったのであるが、深さ40cm程を掘削調査した南北トレンチでは、部分によって異なるが押しなべて6層程になるシルト質土の堆積を確認することができた。これらのシルト質土の層は概ね平行な堆積を見せていたが、南北共に側寄りでは25cm以下の高低差を以て落ち込むような堆積状態を見せていた。これらの土層の堆積状況は5-2区東部で確認された側方流動の堆積状況ほど明瞭なものではなく、試掘調査も浅いところに留めたため確実なものとは言い難いが、現時点では側方流動の結果現れた地形であった可



4-1区南東部の舌状微高地(西より)

能性のあるものであったことを記しておくこととする。

2 阿弥大寺本郷遺跡出土の人骨及び獣骨

本遺跡に於いては2-1区1号溝、4-1区22・30号住居及び1号谷から骨及び歯牙の出土があった。これらは腐食、粗造化が進み、断片、或いはエナメルキャップのみの出土であり、得られるところは少なかったが、その略報を以下に記す。

2区1号溝からは焼骨1本と獣歯の出土があった。このうち焼骨はヒトのものと判断され、左上腕骨の後面の外側縁下位の可能性が考えられる。また3本以上の馬歯が出土しているが、何れも白歯ではあるものの粗造化が進行していて歯種等は特定できなかった。

4-1区22号住居からは獣歯1本が出土した。獣種は不明だが猪の上顎左の後白歯の可能性が考えられる。

4-1区30号住居からは6片3本以上の獣歯の出土が見られた。これらはエナメル質部分を中心としている。獣種は不明だが、猪等の中型の獣のもので、白歯と見られる。

4-1区1号谷からは5本以上の馬歯の出土が見られた。何れも白歯であるが壊れており、粗造化が進んでいるため歯種は特定できない。

〔参考文献〕

- 加藤嘉太郎(1979)「家畜比較解剖学図説」養賢堂
金子丑之助(1956)「日本人体解剖学 第一巻」南山堂

3 装飾器台の出土状態

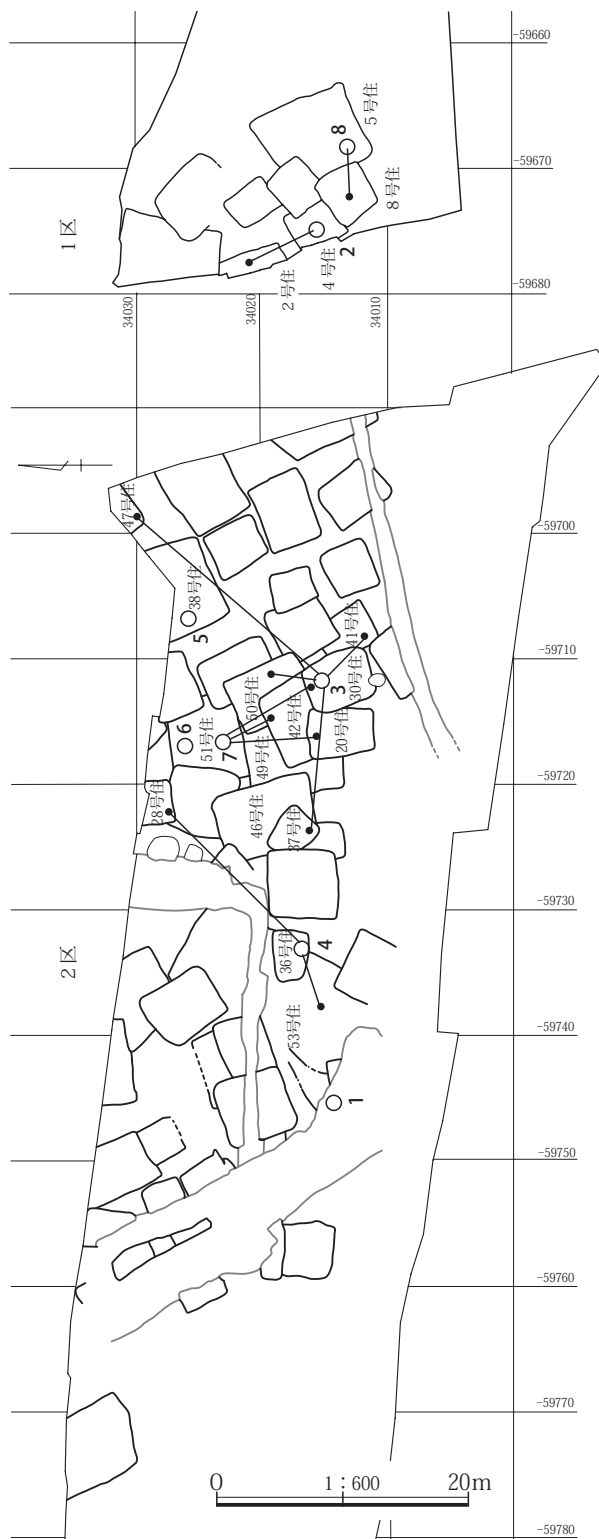
本遺跡の特徴的な遺物として装飾器台がある。流路脇出土の完形品1は、脚部上半が柱状の北陸地方の影響を受けた在地土器である。もう1点、図上では完形近くまで復元できた2区36号住居出土例4は脚部が上側から開く南関東の影響を受けた土器である。本遺跡では2種類の装飾器台が見られる。

これらの土器は特徴的な器形から、特に受け部では破片でも識別が可能で接合が容易だった。装飾器台は4世紀の集落内に広く分布し、本書では2区36号住居例を含め6棟の住居等から出土する8点を図示した。また第32表に一覧を記した。

本書で図示した土器は胎土が類似し、搬入品ではなく在産土器と思われる。反面、受け部透かしの形状が一致せず、方形透かしがあるもの(1・4・6)と円形窓があるもの(2・5・7・8)および受け部に透かしの見られないもの(3)とに分かれる。

特筆すべき点として集落出土品には完形品がないが、住居間接合されるものが多いことである。住居からの出土7例の接合関係を375図に示した。

特徴的な器形のため住居間接合が容易だった点もあるが、出土状態から破片の分配・共有のような行為があった可能性が指摘できるかを検討するための接合概念図である。出土住居は中央東寄りの重複が激しい一面に多く、東西両隅付近でも見られた。結果は重複住居間での接合が主体で、住居重複過程での混入の可能性が高いという状況である。それでも1区例では隣接するが重複のない住居間での接合である。2区では30・47号住居間の20m近い距離を隔てた接合例、および36・28号住居間の12mを超える距離を隔てた接合例もあり、土器自体の祭祀的・威信材の性格に加え、破片についても特殊な扱いをされた可能性を完全に否定するものではないと考える。



第376図 装飾器台出土位置

第32表 出土装飾器台一覧

	遺構番号	部位	受け部	脚部	接合住居	掲載頁
1	流路脇	完形	方透かし	円窓		360
2	1区4住-7	受け部	円窓		1区2住	154
3	2区30住-8	受け部	窓なし		37・41・47・50住	201
4	2区36住-2	ほぼ完形	方透かし	円窓	28・53住、24溝	211
5	2区38住-1	受け部	円窓			213
6	2区51住-2	受け部	方透かし			227
7	2区51住-3	受け部	円窓		20・30・42住	227
8	1区5住-5	受け部	円窓		1区8住	158

4 カマド出現期の竪穴住居

5世紀代の集落の特徴に煙道を備えた明瞭なカマドが確認できることがある。カマドのある住居は6棟で、4区では4棟がまとまって確認され、2・3区では1棟ずつ離れて確認されている。5世紀代の遺物を伴う出現期のカマドである。

6棟の住居およびカマドには共通点が多く、列記すれば以下の通りである。

①いずれもカマドは住居東辺南寄りにある。

②住居軸方向よりカマド軸方向が南に振れる例が4棟あり、それらはいずれも平面図上でも10度以上の明瞭な傾きである。

③柱穴配置は4区住居の全棟がカマド前(住居南東隅)のピット(P1)がカマドから大きく離れて歪んでいる。

④南東隅にカマドのある2区6号住居例以外はすべてカマド南脇に貯蔵穴を備えている。

⑤4区20号住居以外はカマド火床上に土師器高杯を転用した支脚が残存している。4区20号住居もカマド内に高杯破片は出土している。

⑥拡張を行っている3区5号住居以外には模倣杯や須恵器の出土がない。

このうち①～③は連動する事項のように思われる。カマドを南壁側に寄せれば焚口前に南東隅の支柱穴(P1)が近接する。そのためにP1は南西または西側へ偏らせ、焚口が住居中央を向くようにカマドを傾けた可能性を指

摘したい。焚口前の柱はカマド正面で行う作業の障害であろうし、想像をたくましくすれば初めてカマドを据えるに居住者は、カマド焚口と柱が近接することに過剰なほどに神経質であったように思われる。反面、それならなぜ当初からカマドを東辺中央に築かなかったか、等、説明できない事項も多い。

4区の住居(第241図)で見れば、4棟の住居は菱形の配置を取るようにならんでいる。住居間隔が最も狭いのは19・24号住居間の約3mで、4棟は同時存在の可能な配置にある。

カマド出現直前の集落の様相は明瞭にできていない。カマド出現直前に壁際へ炉が移動する例は調査例が増加しているが、本遺跡にそのような住居はない。4区ではカマドのある住居に重複する住居や同時存在が不可能な位置まで近接する住居があるが、いずれも出土遺物が少なく、カマド出現前とそれ以降を時期的に対比するのに十分な資料は得られなかった。

路線幅内という限られた範囲であるが、カマド出現段階の集落の様相が看取できた。カマドがすべて住居東辺にあり、辺中央から逸れた配置に築かれるなど本遺跡の特徴が共通して表れた。加えて4区の住居から既存の建物にカマドを設置したのではなく、住居設計段階からカマドの位置を意識した柱穴配置を行っていることが分かる。出現期カマドを持つ一典型として位置づけられる集落である。

第33表 カマドのある古墳時代住居一覧

住居	カマド位置 東辺長さ	住居軸方向 カマド軸方向	柱穴配置	備考	掲載頁 PL.
2区6住	東辺南隅 4.1m	N-64° E —	未確認	住居東側半分の調査。	168 PL. 28⑤⑥
3区5住	東辺南寄り 6.8m	N-66° E N-86° E	4支柱穴 西寄りほぼ均等	拡張住居で新旧両住居にカマドか。カマド南脇に貯蔵穴。須恵器出土。	240 PL. 39⑤
4区19住	東辺南寄り 4.9m	N-78° E N-90° E	4支柱穴 P1・2西へ寄る	カマド南脇に小貯蔵穴。28住に後出。	251 PL. 41②③
4区20住	東辺南寄り 4.5m	N-73° E N-86° E	4支柱穴 P1西へ寄る	カマド南脇に貯蔵穴。	254 PL. 41⑥⑦
4区24住	東辺南寄り 5.7m	N-50° E —	4支柱穴 P1南西へ寄る	カマド南脇に貯蔵穴。29住に後出、23住に隣接。	260 PL. 42⑧
4区25住	東辺南寄り 4.5m	N-51° E N-64° E	4支柱穴 P1南西へ寄る	カマド南脇に貯蔵穴。26住に隣接。	264 PL. 43②

遺物観察表

遺物観察表

中世陶磁器等胎土説明 A: 黒色鉱物含む。透明鉱物多く含む。鉄分を多く含む粘土粒含む。
 B: 黒色鉱物少量含む。透明鉱物の量は少ない。鉄分を多く含む粘土粒少量含む。
 C: 夾雑物は少なく緻密。鉄分を多く含む粘土粒含む。
 D: 片岩由来と考えられる微細な光る鉱物を多く含む。

1区1号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
1	第15図 PL. 59	在地系土器 皿	1/4	口 底	(11.2) (7.3)	高 —	2.5	体部は外反し、口縁部はやや内湾。底部左回転系切無調整。(橙)	15世紀末～ 16世紀中頃。
2	第15図	製作地不詳陶器 不詳	1/4	口 底	— (5.0)	高 —	—	外面は回転篋削り。内面に鉄釉。残存部外面無釉。(灰白)	江戸時代以降。
3	第15図	在地系土器 皿か	1/2	口 底	— (8.8)	高 —	—	底部形状は大型の皿状。底部左回転系切無調整。内面調整は丁寧で大型の皿と考えられる。(D：橙)	中世。

1区遺構外

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
1	第18図 PL. 59	同安窯系青磁 碗	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	体部は内湾し、内面口縁部下に片彫りによる圏線を廻らし、内側にゆるく屈曲。内面に櫛刃状工具によるジグザグ状文。外面は斜位櫛描文。	I-1c類。12 世紀中頃～後半。

2区1号竪穴

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
1	第22図	中国白磁 碗	体部片	口 底	— —	高 —	—	体部下位内面に篋状工具による細い圏線1条。残存部外面下位は無釉。貫入が入る。焼成不良。(灰白)	11世紀～12 世紀か。
2	第22図 PL. 59	常滑陶器 甕	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	断面は灰白色、器表は褐灰色から灰褐色。口縁部は外反し、端部は平坦で上下端部は明瞭な稜をなす。口縁部上面端部付近は横撫でにより凹線状に窪む。(A：褐灰～灰褐)	13世紀第1四 半期。
3	第22図	在地系土器 皿	底部	口 底	— 5.5	高 —	—	器表摩滅。底部内面強い撫でにより2条の窪み。底部回転系切無調整で筋状の圧痕多く残る。(橙)	中世。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			製作状況・使用状況(材質)	摘 要	
4	第22図 PL. 59	石製品	完形	長 厚	30.0 12.0	幅	18.0	背面側を皿状に窪めるほか、小口部を平坦に整形する。皿状凹部には幅10mm前後のノミの研り痕が残る。(角閃石安山岩)	重量5037.4g

2区3号竪穴

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
1	第23図	龍泉窯系青磁? 碗	体部片	口 底	— —	高 —	—	焼成不良。かなり水摩を受けており、割れ口の角に細かい剝離が認められる。釉も細かい傷により白濁したように見える。内外面無文であろう。(灰白)	中世。
2	第23図	常滑陶器 甕か	1/8	口 底	— —	高 —	—	断面は灰色、器表はにぶい橙色。内面薄く白濁した自然釉かかる。砂底。体部は内湾気味に開く。体部外面は縦位撫で。内面の器表が摩滅するが、推定径が23cmと大きく甕と推定される。(にぶい橙)	中世。
3	第23図	常滑陶器 壺か	1/8	口 底	— —	高 —	—	断面は灰白色、器表付近は灰色、器表は褐灰色。体部下位から底部内面に白濁した自然釉が薄くかかる。(褐灰)	中世。
4	第23図	常滑陶器 壺か甕	肩部片	口 底	— —	高 —	—	断面は灰白色、内面器表は橙色、外面器表は自然釉がきれいにかかる。残存部下位に格子状叩き目。(橙)	中世。
5	第23図 PL. 59	在地系土器 皿	口縁一部欠	口 底	10.3～ 11.3	高 —	2.4～ 2.8	体部やや外反し、口縁部は直線的に開く。器形歪む。底部内面と体部境は不明瞭。底部内面撫で。底部左回転系切無調整で明瞭な圧痕。(B：橙)	15世紀中頃～ 後半。底径6.2 ～6.5
6	第23図 PL. 59	在地系土器 皿	口縁ほぼ欠	口 底	7.4 5.3	高 —	1.3～ 1.8	内面はにぶい黄褐色、外面はにぶい黄褐色から褐灰色。体部から口縁部は外反。口縁端部はほとんど欠損。底部左回転系切無調整。底部と体部境内面はドーナツ状に窪む。口縁端部欠損部は摩滅し、一部に油煙附着。(A：褐灰～にぶい黄橙)	口縁端部に油 煙附着。15世 紀中頃～後 半。
7	第23図 PL. 59	在地系土器 皿	1/4	口 底	(8.5) (5.8)	高 —	1.9	内面はにぶい黄褐色、外面はにぶい黄褐色から褐灰色。体部から口縁部は外反。底部回転系切無調整か。器表の剝離と摩滅が著しい。(A：褐灰～にぶい黄橙)	15世紀中頃～ 後半。
8	第24図	在地系土器 皿	口縁から体 部片	口 底	(9.0) (6.1)	高 —	1.9	体部内湾。内面底部と体部境は凹線状に窪む。底部外面回転系切無調整後に圧痕。体部が外反したり直線的に開く皿に比して胎土に夾雑物含まず、色調も異なる。(C：浅黄橙)	口縁端部に油 煙附着。中世 から17世紀。
9	第24図	在地系土器 皿	口縁から体 部片	口 底	(10.6) (7.0)	高 —	2.3	体部中央付近で屈曲するように外反し、上半は直線的に開く。底部左回転系切無調整。(B：橙)	16世紀。
10	第24図	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	— —	高 —	—	口縁端部内面は丸みを帯びて小さく突き出す。(B：橙)	15世紀か。
11	第24図 PL. 59	在地系土器 片口鉢	片口部片	口 底	— —	高 —	—	還元炎で須恵質に焼き締まる。口縁部は横撫で、外面口縁部下を窪ませる。口縁部は玉縁状をなし、端部は尖り気味。口縁部外面下位は細かい轆轤目状の凹凸が廻る。残存部内面下部は使用により器表摩滅。(B：灰)	14世紀前半 頃。
12	第24図	在地系土器 片口鉢	体部片	口 底	— —	高 —	—	断面は灰色、器表付近はにぶい黄褐色、外面器表は灰色で残存部内面下半は灰色、上半はにぶい黄褐色。器壁は薄く、内面に幅広の4本+αのすり目。(B：灰～にぶい黄褐)	16世紀か。

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
				口 底	—	高			
13	第24図 PL. 59	在地系土器 片口鉢	体部片	口底	—	高	—	断面は黒色、器表付近から器表は灰白色。器壁は薄く、体部外面下端は鋭く括れる。内面には4本一単位のすり目。すり目は大きくうねる温泉マーク状を呈す。内面の使用痕は不明瞭。体部外面の一部と口縁部内外面の器表は斑状の剝離痕多い。(B：灰白)	16世紀～17世紀か。
14	第24図	在地系土器 片口鉢	体部から底 部片	口底	—	高	—	還元炎で焼き締まりの弱い須恵器に近い焼成。砂底。底部から体部下位の器壁は厚い。内面には4本+α一単位のすり目。内面は使用により器表摩滅。(B：灰色)	15世紀か。
15	第24図 PL. 59	在地系土器 火鉢類	口縁部片	口底	—	高	—	断面はにぶい橙色、器表は黄灰色。口縁部は外反。口縁部内面は丸みを持って僅かに突き出る。口縁部に、内面側径7.2mm、外面側径5.9mmの円孔を焼成前に内側からあける。内面に菱形枠内に花卉状文様を施した押印一カ所残る。(D：黄灰)	中世。
16	第24図	在地系土器 火鉢類か	高台片	口底	—	高	—	底部の断面は暗灰色、高台の断面は灰白色、器表はにぶい橙色。直径18cm前後の小型品の高台と考えられる。(D：にぶい橙)	中世。
17	第24図 PL. 59	在地系土器 内耳鍋	1/7	口底	(30.4) (22.0)	高	—	断面は橙色、器表は灰色からにぶい橙色。口縁部下の屈曲は明瞭で口縁部は直線的に開く。体部器壁はやや厚いが、口縁部器壁は薄い。口縁部上面は平坦で外面は外方に張り出す。屈曲部内面の段は低く明瞭。口縁部は横撫で。内面体部以下と体部外面上半は撫で。体部外面下半は窠削り。丸底。(A：灰～にぶい橙)	15世紀末～16世紀中頃。
18	第25図 PL. 59	在地系土器 内耳鍋	1/8	口底	(33.6)	高	—	還元炎。断面はにぶい橙色、器表付近から器表は灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面の段は小さく不明瞭。口縁部上面は平坦で、外面は突き出る。口縁部は横撫で。体部内面と体部外面上半は撫で。体部外面下半は横位窠削り。(D：灰)	15世紀末～16世紀中頃。
19	第24図 PL. 59	在地系土器 内耳鍋	1/8	口底	(33.2)	高	—	断面はにぶい橙色、器表は灰白色から灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。屈曲部内面の段は低いが明瞭。体部内面の撫でと体部外面下半の横位窠削りの後、内面屈曲部下から体部外面上半の横撫で。(D：灰白～灰)	15世紀末～16世紀中頃。
20	第24図	在地系土器 内耳鍋	1/4	口底	(30.0)	高	—	断面はにぶい橙色、器表は黒色。口縁部下で屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。屈曲部内面の段は明瞭で、下部は稜をなす。器壁はやや厚く、口縁部上面は平坦。口縁部外面直下は強い横撫でで窪み、端部が外方に張り出すように見える。口縁部内面の器表は使用痕と考えられる摩滅。(A：黒)	15世紀末～16世紀中頃。
21	第24図	在地系土器 内耳鍋	1/5	口底	(32.0)	高	—	断面中央は灰白色、器表付近は橙色、器表は灰黄色から灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面の段は明瞭。口縁部上面は平坦でやや内傾。端部外面は強い横撫でにより窪ませることで外方に張り出すように見える。口縁部内面は明瞭な稜をなす。(A：灰黄～灰)	15世紀末～16世紀中頃。 体部下位以下に砂の多い粘土を使用。
22	第24図 PL. 60	在地系土器 内耳鍋	1/8	口底	(32.4)	高	—	断面は浅黄色、器表は灰色から暗灰色。器壁は薄い。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面は幅広く明瞭な段をなす。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。内面の器表は摩滅。口縁部は横撫で。体部外面上半はやや雑な撫で、接合痕を挟んだ下半は細かい凹凸面を残す。(D：灰～暗灰)	15世紀末～16世紀中頃。
23	第25図	在地系土器 内耳鍋	1/9	口底	(36.0)	高	—	断面はにぶい赤褐色、器表は黒色。口縁部下で屈曲し、口縁部は僅かに内湾して開く。器壁はやや厚い。口縁部正面は平坦で、外面が外方に張り出す。端部内面は小さく張り出す。屈曲部内面の段は低く明瞭。屈曲部付近以上は横撫で。体部内外面は撫で。	16世紀後半～17世紀初頭か。
24	第25図 PL. 60	在地系土器 内耳鍋	1/8	口底	(31.0)	高	—	断面はにぶい褐色、器表付近から器表は灰色。還元炎。口縁部下で屈曲し、口縁部は僅かに内湾気味に開く。屈曲部内面の段は明瞭で、下部は稜をなす。口縁部上面は平坦で、外面は尖り気味に張り出す。屈曲部下位以上は横撫で。体部外面上半はやや丁寧な撫で。体部外面下半は微細な凹凸面を雑に窠撫で。体部内面は撫で。(B：灰)	15世紀末～16世紀中頃。
25	第25図	在地系土器 内耳鍋	1/5	口底	(26.4)	高	—	断面はにぶい橙色、器表はにぶい橙色から暗灰色。口縁部下で緩く屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部上面は僅かに窪み、内外端部は稜をなす。屈曲部内面の稜は低く明瞭。(D：にぶい橙～暗灰)	15世紀後半～16世紀中頃。
26	第25図 PL. 60	在地系土器 内耳鍋	1/8	口底	—	高	—	断面から内面器表は橙色。外面器表はにぶい赤褐色から黒褐色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。口縁部内面は稜をなす。屈曲部内面の段は不明瞭であるが、下部は明瞭な稜をなす。屈曲部付近以上は横撫で。体部外面上半は雑な撫でで凹凸が残る。体部外面下半は横位窠削り。(D：橙、赤褐～黒褐)	15世紀末～16世紀中頃。
27	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口底	—	高	—	還元炎。断面はにぶい赤褐色、器表付近から器表は灰色。口縁部下はゆるく屈曲し、口縁部は僅かに内湾して開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。屈曲部内面の段差は低く明瞭で、下部は明瞭な稜をなす。屈曲部以上は横撫で。体部内外面は撫で。体部外面下半は微細な凹凸の一部を粗く窠撫で。(B：灰)	15世紀末～16世紀中頃。
28	第25図	在地系土器 内耳鍋	1/7	口底	(35.0)	高	—	還元炎。口縁部下で屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。屈曲部内面の残存が内耳付近のみのため段差は不明。口縁部上面は平坦でやや内傾。(D：灰)	15世紀末～16世紀中頃。
29	第25図	在地系土器 内耳鍋	1/7	口底	(40.0)	高	—	断面中央から外側は橙色、中央から内面側は黄灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方にゆるく張り出す。(D：橙色、黄灰色)	15世紀末～16世紀中頃。
30	第25図	在地系土器 内耳鍋	1/5	口底	(40.0)	高	—	断面はにぶい橙色、器表は黒色。口縁部下で屈曲して外反し、口縁部は直線的に開く。器壁は厚く、口縁部はやや短い。屈曲部内面の段は不明瞭だが、下部は稜をなす。内耳は太く短い、口縁部器壁に貼り付け。口縁部上面は浅く窪む。盤状の内耳か。(A：黒)	16世紀か。
31	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口底	—	高	—	断面は黄灰色、器表は灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面の段は低く不明瞭。口縁部上面は幅狭く平坦。口縁部内面は内側に小さく張り出す。(D：灰)	15世紀後半～16世紀中頃。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
				口底	高	幅		
32	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口底 —	高 —	—	断面は灰白色、器表はにぶい橙色。口縁部下で外反し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は平坦でやや内傾。口縁部外面は直下の強い横撫でにより若干張り出すように見える。体部外面は撫でで成形時の凹凸が残る。(A：にぶい橙)	15世紀後半～ 16世紀中頃。
33	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口底 —	高 —	—	断面はにぶい橙色、器表は灰オリーブから灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部付近はやや肥直し、端部内面は小さく張り出す。屈曲部内面の段差は低く不明瞭。(A：灰オリーブ～灰)	15世紀後半～ 16世紀中頃。
34	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口底 —	高 —	—	断面はにぶい赤褐色、内面器表はにぶい黄褐色、外面器表はにぶい黄褐色から黒褐色。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面はゆるい段が僅かに認められる。口縁部上面は小さく窪み、外面は外方に張り出す。屈曲部以上は横撫で。体部内面と外面上半は撫で。体部外面下半は微細な凹凸を部分的に窺撫で。(B：黄橙～黒褐)	15世紀末～ 16世紀中頃。
35	第25図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 —	高 —	—	断面中央は灰色、断面中央付近は明赤褐色、器表付近から器表は黄灰色。口縁部下で屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。屈曲部内面の段は明瞭で、下部は稜をなす。(B：暗灰黄)	15世紀末～ 16世紀中頃。
36	第26図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 —	高 —	—	断面はにぶい橙色、器表はにぶい橙色から灰色。器壁はやや厚い。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部は幅広く平坦で、外面は外方に張り出す。屈曲部内面の段はなだらかだが、下部は明瞭な稜をなす。(D：にぶい橙～灰)	16世紀。
37	第26図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 —	高 —	—	断面は灰白色、器表は淡黄色。外面に煤付着。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は平坦で、外面は外方に張り出す。張り出し部は僅かに上方に向く。(B：淡黄)	16世紀。
38	第26図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 —	高 —	—	還元炎。口縁部下でややゆるく屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部上面は狭く丸みを持つ。端部内面は微少な張り出し。内耳は細く小さい。(A：灰)	15世紀後半～ 16世紀中頃。
39	第26図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 —	高 —	—	口縁部下で外反。口縁部は幅広く平坦。口縁部外面は外方に張り出す。内面に細い粘土紐を貼り付け内耳とする。(B：浅黄)	16世紀。
40	第26図	在地系土器 内耳鍋	底部	口底 (20.0)	高 —	—	断面から外面器表は橙色、内面器表は黄灰色。平底。底部外面は砂底状の微細な凹凸がある。体部外面は下端を除き煤付着。(Aか：橙、黄灰)	中世。
41	第26図	在地系土器 焙烙	1/6	口底 (39.0) (35.2)	高 4.9	—	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は灰黄色。器高は低いが、内面中央に段を持つ。口縁部内面は内側に張り出す。外面下半は皺状亀裂。(A：灰黄)	16世紀～17 世紀。42と同一 個体か。
42	第26図 PL. 60	在地系土器 焙烙	1/8	口底 —	高 5.2	—	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は灰黄色。器高は低いが、内面中央に段を持つ。口縁部内面は内側に張り出す。内耳はやや幅広いが、下部は体部内面に貼り付ける。外面下半から底部外面に皺状亀裂。(A：灰黄)	16世紀～17 世紀。41と同一 個体か。
No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要
43	第26図	鉄製品 釘	頭部欠損	長厚 4.2 0.4	幅 0.55	—	断面5mmほぼ正方形の角釘で先端5mmほどで急激にとがる頭部分は欠損。	重量4.32 g
44	第26図 PL. 60	砥石 (切り砥石?)	上・下部欠損	長厚 (11.0) 5.2	幅 6.0	—	両側面に幅広い刃ならし傷があり、表裏面が主たる使用面という構成だが、表裏面に面取り整形が残りと、粗粒石材を用いた多面砥石とすべきかもしれない。(粗粒輝石安山岩)	重量246.1 g
45	第26図 PL. 60	砥石	破片	長厚 (10.8) (2.5)	幅 (4.5)	—	背面側は良く使い込まれ、著しく研ぎ減る。裏面側は刀子状工具により面整形、右側側は粗い磨き整形。(粗粒輝石安山岩)	重量122.9 g 左辺側被熱破損
46	第26図 PL. 60	板碑	頂部破片	長厚 (9.6) 2.7	幅 (20.4)	—	推定全巾27cm程。表裏面やや摩滅。破断面は直線的で平坦だが、転用研磨の痕跡は認められない。(黒色片岩)	重量889.7 g
47	第26図 PL. 60	板碑	基部破片	長厚 (19.5) 3.3	幅 (18.9)	—	裏面に横・斜方向の平ノミ状成形工具痕(巾12mm程)を残す。地中埋没部のためか表裏面の摩滅少。(緑色片岩)	重量1969.4 g
48	第26図 PL. 60	板碑	蓮座部破片	長厚 (16.2) 3.4	幅 (14.7)	—	厚みから大型板碑と推察される。裏面に工具痕なし。断面の所々に転用後の研磨の痕跡有り。(緑色片岩)	重量1123.3 g
49	第26図 PL. 60	板碑	基部破片	長厚 (18.0) 6.9	幅 (24.0)	—	表裏面共に文字・工具痕は認められない。(黒色片岩)	重量1143.3 g
50	第27図 PL. 60	石臼 (茶臼上白)	1/4弱 破片	径 20.0	高 12.5	—	側面は丁寧な面整形を施し、挽手孔の円形額の一部が残る。摺面は偏減りは少なく均質に摩耗し、挽目はほとんど残らない。軸孔の一部が残る。(粗粒輝石安山岩)	重量2328.1 g
51	第27図 PL. 60	石臼 (上白)	1/2弱 破片	径 (26.6)	高 9.3	—	全体にやや摩滅し、縁の一部が剥落。上面・側面・摺面には物入れ・挽き手・軸受けの孔が残る。摺面は均質に摩耗し、浅く目が残る。(粗粒輝石安山岩)	重量4471.6 g
52	第27図 PL. 60	石臼 (下白)	1/4 破片	径 (36.0)	高 5.4	—	側面は全体に摩滅し、一部剥落。摺面は偏減りは少なく均質に摩耗し、挽目はほとんど残らない。(粗粒輝石安山岩)	重量2139.7 g
53	第27図 PL. 60	石臼 (下白)	1/4弱 破片	径 30.0	高 (10.5)	—	側面は全体に摩滅する。摺面は偏減りが少なく均質に摩耗し、目はほとんど残らない。(粗粒輝石安山岩)	重量1808.3 g
54	第27図 PL. 60	石臼 (下白)	破片	径 (16.5)	高 (10.2)	—	側面の摩滅は少なく、製作時の工具痕を残す。摺面は偏減りが少なく均質に摩耗し、目は浅く残る。(粗粒輝石安山岩)	重量1567.1 g
55	第27図 PL. 60	石製品	完形	長厚 19.5 8.4	幅 19.7	—	上面に径93mmほどの掘り鉢状の孔が穿たれ、孔の内面は平滑。裏面は浅く皿状に窪み、内面には丸タガネ状工具による刺突痕が残る。(角閃石安山岩)	重量1787.0 g
56	第27図 PL. 60	石製品	破片	長厚 (14.4) 18.6	幅 (15.0)	—	上面を径5cm程の範囲を敲打して皿状に掘り窪める。このほか、右側面に砥石様の平滑面がある。(角閃石安山岩)	重量2560.8 g
57	第27図 PL. 60	火打石 (剥片)	剥片	長厚 3.2 0.8	幅 2.5	—	上端部エッジに使用に伴う敲打痕が集中する。(石英)	重量6.5 g
58	第27図 PL. 60	銅銭 皇宋通宝	破損	長厚 2.47 0.12	幅 2.3	—	劣化後の破損により一部を欠く。表面の郭は細く、裏面の郭は不明瞭。	重量1.2 g

2区1号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要	
				口 底	—	高			
1	第30図 PL. 60	龍泉窯系青磁 碗	口縁部から 体部片	口 底	—	高	外面に片彫りによる鎬蓮弁文。貫入は入らず、焼成はやや良好であるが、釉の透明感は弱い。(灰白)	Ⅱb類。13世紀前後～前半。	
2	第30図	尾張陶器 片口鉢	体部片	口 底	—	高	断面は灰白色、内面器表は褐色、外面器表はにぶい赤褐色。内面は斑状に薄い自然釉、外面の多くには厚く釉がかかり、ほとんどが剥がれる。(灰白)	片口鉢I類。12世紀～13世紀。	
3	第30図	渥美陶器 甕か	体部片	口 底	—	高	器壁は薄い。外面に叩き目。(灰)	12世紀～13世紀初頭。	
4	第30図	常滑陶器 甕	体部片	口 底	—	高	断面は灰白色、内面器表は褐色、外面器表はにぶい赤褐色。内面は斑状に薄い自然釉、外面の多くには厚く釉がかかり、ほとんどが剥がれる。(褐、にぶい赤褐色)	中世。	
5	第30図	在地系土器 片口鉢	1/8	口 底	—	高	還元炎。底部に比して体部下位の器壁が厚い。底部回転糸切無調整。使用により体部内面下位から底部内面の器表やや摩滅。(A：灰)	中世。	
6	第30図	在地系土器 片口鉢	1/3	口 底	(10.4)	高	還元炎。体部外面下端は篋撫で。底部は板作りで砂底。体部内面下位と底部周縁は使用により摩滅。体部内面と底部境は摩滅せずドーナツ状に器表が残る。(A：灰)	中世。	
7	第30図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	断面中央から内面器表付近は灰白色、断面中央から外面器表付近は橙色、内面器表は黄灰色、外面器表は黒褐色。口縁部上面は平坦で、外面は丸みを持って張り出す。端部内面は明瞭な稜をなす。口縁部下内面の段は小さい。(D：黄灰、黒褐)	15世紀末～16世紀中頃。外面に煤付着。	
8	第30図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	外面器表付近から内面器表はにぶい褐色、外面器表は黒褐色。外面に煤付着。口縁部は外反。口縁部上面はやや幅広で中央が窪む。端部外面はやや大きく張り出す。口縁部下内面の段は明瞭。(D：にぶい褐、黒褐)	16世紀後半～17世紀初頭か。	
9	第30図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	断面から器表付近は灰白色、器表は灰色。口縁部下で屈曲し口縁部は開く。内耳部のため口縁部は内湾。屈曲部内面に段ははく、明瞭な稜をなす。(D：灰)	15世紀後半～16世紀中頃。	
10	第30図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	断面から器表付近はにぶい橙色、器表は黒色。口縁部下で屈曲し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部上面は僅かに窪み、外面は外方に張り出す。端部内面は僅かに張り出し、端部は稜をなす。屈曲部内面の段はゆるいが、下部はゆるい稜をなす。(B：黒)	15世紀末～16世紀中頃。	
11	第30図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	断面中央と器表は灰色、器表付近はにぶい橙色。口縁部上面は平坦で、端部内面は小さく張り出す。張り出し部上面の器表は摩滅。口縁部下内面の段は上部のみ残存。(D：灰)	15世紀末～16世紀中頃。	
12	第30図	在地系土器 鍋	口縁部片	口 底	—	高	断面中央は黒色、器表付近は白味の強い灰白色、内面器表は黄灰気味の灰白色。外面器表は煤付着し、黒色。口縁部下で外反し、口縁部は内湾気味に開く。口縁部上面は僅かに窪む。内面口縁部下の稜が消失しており、退化した内耳も消失した時期の鍋と考えられる。(Bか：灰白、黒)	江戸時代か。	
13	第30図	在地系土器 不詳(焙烙か)	1/8	口 底	(28.0)	高	内面器表付近から外面器表は褐色、内面器表はにぶい黄褐色。体部外面は凹凸が認められるが、丁寧な撫で、皺状亀裂など残らない。残存部内面上端が外反しており、段が存在するか外反すると考えられる。底部外面は砂底状。(A：橙、にぶい黄橙)	時期不詳。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘 要	
				高	幅				
14	第30図 PL. 60	五輪塔 (空風輪)	完形	高	27.0 13.2	幅	14.4	正面に比べ側面の巾が細い。宝珠部および裏面中央部に巾広(30mm程)の平ノミ・丸ノミによる荒削り工具痕を残す。(角閃石安山岩)	重量3510.6g
15	第30図 PL. 60	板碑	主尊部右 側破片	長 厚	(23.0) 3.3	幅	(12.0)	深い葉研彫りの阿弥陀如来種子と蓮座の一部が残る。推定全巾40cm程の大型板碑。碑面と側部は丁寧な面成形。裏面は全面に横方向の平ノミ状面成形工具痕(巾13mm程)が残る。表裏面摩滅減少。(緑色片岩)	重量1457.3g
16	第30図 PL. 60	石臼 (上臼)	1/6	長 厚	(13.1) 7.3	高	(10.4)	側部1/5程。縁部は丁寧な面取りが施される。摺面は目が残り、大きく偏減りする。(粗粒輝石安山岩)	重量842.4g
17	第30図 PL. 60	宝篋印塔	笠部破片	高 厚	(14.8) (11.8)	幅	(10.4)	下二段。隅飾は二弧輪郭付。丁寧な面整形。所々に細い丸タガネ状の面成形工具痕を残す。角の欠失はあるものの風化による摩滅は少ない。(粗粒輝石安山岩)	重量936.0g

2区16号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	—	高		
1	第31図	常滑陶器 甕か	肩部片	口 底	—	高	断面は灰色、内面器表はにぶい黄褐色、外面器表はにぶい赤褐色。上部外面に薄い自然釉が斑状にかかる。湾曲部内面は強い横位撫で。(にぶい黄橙、にぶい赤褐色)	中世。
2	第31図	在地系土器 皿	1/4	口 底	(5.0)	高	体部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。(A：橙)	江戸時代か。
3	第31図	在地系土器 皿	1/5	口 底	(7.3)	高	底部右回転糸切無調整。(A：にぶい橙)	時期不詳。
4	第31図	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	—	高	還元炎で軟質。断面は灰白色、器表は灰色。口縁部を上方につまみ上げる。端部は丸みを持つ。(B：灰)	14世紀中頃。

2区土坑(陶磁器)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	—	高		
9坑 1	第38図 PL. 61	在地系土器 内耳鍋	1/8	口 底	(37.6)	高	断面はにぶい赤褐色、器表は黒褐色で外面に煤付着。口縁部下で屈曲して外反し、口縁部は内湾気味に開く。屈曲部内面の段は大きく明瞭。器壁はやや厚い。口縁部内外面は丸みを持ち、上面は平坦。屈曲部以上は横撫で。体部内外面は撫で。(D：黒褐)	16世紀。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要	
				口 底	() 幅	高			
25坑 1	第39図 PL. 61	在地系土器 皿	1/3	口 底	(8.0) (5.0)	高	2.0	体部から口縁部は開き、中位でやや外反。底部内面周縁と体部下端の境は不明瞭。底部右回転糸切無調整。(B：橙色)	14世紀後半～ 15世紀中頃。
25坑 2	第39図 PL. 61	在地系土器 内耳鍋	1/8	口 底	—	高	—	口縁端部上面は僅かに窪み、外面は外方に張り出す。口縁端部内面は器表摩擦(使用痕)。(D：灰)	15世紀末～ 16世紀中頃。
30坑 1	第39図 PL. 61	在地系土器 内耳鍋	口縁部 1/8、体部 1/4	口 底	(29.0) —	高	—	断面はにぶい橙色、器表は黒褐から黒色。焼成最終段階で燻し焼成。口縁部下でゆるく外反。内面は段がなくゆるく屈曲。口縁端部内面は丸みを帯びて肥圧。(黒褐～黒)	15世紀後半。
32坑 1	第40図	在地系土器 片口鉢	底部片	口 底	—	高	—	断面は浅黄橙色、器表付近から器表は灰色。底部回転糸切無調整。使用により、底部内面周縁は浅黄橙色部分まで摩擦し、中央は器表が平滑となる。(B：灰)	中世。
33坑 1	第41図 PL. 61	在地系土器 片口鉢	底部片	口 底	—	高	—	断面は黒色、器表付近から器表は灰白色。器壁は薄い。口縁部は直線的に開き、口縁端部は内側に折り返すように張り出す。口縁部内面から外面器表は斑状に器表が剥離する。体部内面に湾曲のきつすり目。残存部に片口部の一部が残る。(B：灰白)	3 竪穴13と同一 個体か。16 世紀～17 世紀か。
47坑 1	第41図 PL. 61	在地系土器 皿	1/2	口 底	(10.6) 6.3	高	2.5	外面中位で外反し、口縁部は僅かに内湾気味。底部左回転糸切無調整。(A：橙)	16世紀中頃。
47坑 2	第41図 PL. 61	在地系土器 皿	口縁一部欠	口 底	10.8 6.5	高	2.5	外面中位で外反し、口縁部は僅かに内湾気味。底部左回転糸切無調整。(A：橙)	16世紀中頃。
47坑 3	第41図 PL. 61	在地系土器 皿	体部一部欠	口 底	10.9 ～11.4 6.9	高	2.5 ～2.8	外面中位で外反し、口縁部は僅かに内湾気味。底部左回転糸切無調整。体部下位から底部欠損部の周囲は黒く変色しており、二次被熱と楕円形欠損部との関連が考えられる。(A：橙)	16世紀中頃。 二次被熱による 破損か。

2区土坑(石製品)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要	
				長 厚	() 幅	高			
12坑 1	第38図 PL. 61	五輪塔 (水輪)	中層 +30	長 厚	(15.9) 12.9	幅	(14.7)	歪な球形を呈し、上下面には巾20mm程の平ノミ状工具による面成形切削痕が残る。側面の欠矢・研磨は転用。(角閃石安山岩)	重量2154.6g
32坑 2	第40図 PL. 61	板碑	主尊左側 部破片+51	長 厚	(20.7) 2.7	幅	(18.6)	浅い彫りの阿弥陀如来種子と蓮座の一部が残る。裏面は横・斜方向の平ノミ状面成形工具痕(巾15mm程)を残す。表裏面共にやや摩擦。(緑色片岩)	重量1575.4g
33坑 2	第41図 PL. 61	敲石 棒状礫	一部欠損	長 厚	(17.9) 6.3	幅	7.0	小口部上端に著しく敲打され、これに伴う剥離痕がある。(粗粒輝石安山岩)	重量937.6g

2区1号井戸

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要	
				長 厚	() 幅	高			
1	第42図 PL. 61	敲石 棒状礫	完形	長 厚	12.8 3.5	幅	4.3	小口部両端・両側縁に敲打・摩擦痕。背面側を被熱破損。(変質安山岩)	重量284.2g
2	第42図 PL. 61	板碑	主尊部左 側破片	長 厚	(34.1) 4.9	幅	(24.3)	主尊の浅い葉研彫り阿弥陀如来種子の一部が残る。碑の厚さと主尊の位置から、巾50cm程の大型板碑と推定される。表裏面共にやや摩擦。(緑色片岩)	重量6550.0g
3	第42図 PL. 61	五輪塔 (地輪)	破片	長 厚	(15.0) 11.8	幅	(21.0)	歪な形状を呈する。上下面には巾5mm程の丸ノミ状工具による面成形痕が、側面には巾30mm程の平ノミ状工具による面成形痕がそれぞれ残る。(角閃石安山岩)	重量877.6g
4	— PL. 64	木製品 曲物底板	—	長 厚	(12.0) 0.6	幅	—	厚さ6mm程のヒノキ科材の薄板で劣化が著しく本来の形状は不明。(樹種ヒノキ科：板目材)	
5	— PL. 64	木製品 曲物底板	—	長 厚	(8.0) (0.5)	幅	—	厚さ5mm程のヒノキ科材の薄板で、現状では楕円形だが劣化が著しく本来の形状は不明。(樹種ヒノキ科：板目材)	

2区3号井戸

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要	
				口 底	() 幅	高			
1	第43図	在地系土器 片口鉢	体部下位 から底部 片	口 底	—	高	—	断面は黒色、器表付近から器表は灰白色。体部外面下端は直立気味。底部は板作りで外面に板状圧痕。内面にうねりの大きい温泉マーク状のすり目。(B：灰白)	1号竪穴14と 同一個体か。 16世紀～17 世紀か。
2	第43図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	口縁上半は内湾気味。口縁端部上面はやや窪み、外面は外方に張り出す。外面に煤付着。(A：灰)	15世紀～16 世紀。
3	第43図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	断面から内面器表は明褐色、外面器表は煤付着し黒褐色。内面にやや太い粘土紐を貼り付け内耳とする。(B：明褐色、黒褐)	中世。
4	第43図	在地系土器 内耳鍋	体部片	口 底	—	高	—	断面はにぶい橙色、器表は黒色。焼成最終段階で燻し焼成。口縁部下で屈曲し、口縁部は開く。屈曲部内面の段は明瞭だが、下部は稜をなさない。(A：黒)	中世。体部下 半に砂の多い 粘土を使用。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要	
5	— PL. 61	礫 棒状礫	—	長 厚	12.8 2.1	幅	3.6	先端側に弱い敲打痕があるものの、意図的なものか不明。(黒色片岩)	重量141.8g
6	第43図 PL. 61	板碑	頂部～主 尊部破片 +96	長 厚	(22.5) 2.6	幅	(10.5)	二条線なし。主尊の葉研彫り阿弥陀如来種子の一部が残る。推定全巾は30cm前後。裏面に横方向の平ノミ状面成形工具痕(巾12mm程)を数条残す。(緑色片岩)	重量1251.5g
7	第43図 PL. 61	石臼 上臼	下層 1/5+92	径	28.0	高	9.0	上臼1/5弱。上・側面はやや摩擦し、摺面は摩擦が著しく挽目も残らない。(粗粒輝石安山岩)	重量1483.4g
8	第43図 PL. 61	石製品 扁平礫	下層 完形+106	長 厚	14.6 3.5	幅	13.1	背面側中央が敲打され、浅く皿状に窪む。被熱して全面が煤ける。(粗粒輝石安山岩)	重量731.6g

2区中世屋敷外ピット群

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土:色調)	摘 要
				口 底	—	高		
1	第51図	常滑陶器 費か	55号ピット 体部下位片	口 底	—	高	内面に自然釉が斑状にかかる。外面は板状工具による縦位撫で。(にぶい 橙)	中世。
2	第56図	常滑陶器 不詳	153号ピット 体部片	口 底	—	高	断面は灰白色、内面器表はにぶい黄橙色、外面器表は暗オリーブ色の自 然釉かかる。外面に叩き目の一部が残る。(にぶい黄橙)	中世。

2区2号井戸

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土:色調)	摘 要
				口 底	—	高		
1	第60図 PL. 62	尾張陶器 片口鉢	口縁部から 底部片	口 底	—	高	小型の片口鉢。口縁部はゆるく外反し、端部上面に平坦面。体部外面下 端は篋削り。貼付高台。使用により、内面体部下位から底部内面の器表 は摩滅。(灰)	片口鉢I類。 13世紀第2四 半期～第3四 半期。
2	第60図	常滑陶器 費	頸部片	口 底	—	高	断面から内面器表は灰色、外面器表は暗赤褐色。外面に白濁した自然釉 が斑状にかかる。(灰、暗赤褐)	中世。
3	第60図	常滑陶器 費	肩部片	口 底	—	高	断面は灰白色、内面器表はにぶい橙色、外面器表は暗赤褐色。外面に自 然釉が流れる。(にぶい橙、暗赤褐)	中世。
4	第60図	常滑陶器 費か	体部片	口 底	—	高	断面は灰色、内面器表は褐灰色、外面器表は黒色。内面は撫でて接合痕 残る。外面は板状工具による縦位撫で。内面に白濁した自然釉が斑状に かかり、体部下位片と考えられる。(褐灰、黒)	中世。
5	第60図 PL. 62	在地系土器	口縁一部欠 皿	口 底	7.6 5.2	高 2.0	下半は外反し、上半は内湾気味。底部右回転糸切無調整。(A:橙)	中世。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘 要
6	第60図 PL. 62	台石 扁平礫	完形	長 厚	22.8 11.4	幅 15.8	背面側中央付近に弱い敲打痕が残る。(粗粒輝石安山岩)	重量3392.0g
7	第60図 PL. 62	五輪塔 (水輪)	完形	長 厚	21.0 15.7	幅 25.5	上面は皿状に窪み巾5mm程の丸タガネ状工具による条痕跡が残る。側面は 全体にやや摩滅し、巾50mm程の幅広の平ノミによる切削痕が残る。(角閃 石安山岩)	1号溝・1号 井戸出土五輪 塔と類似 重 量5955.4g
8	第60図 PL. 62	石製品	一部欠損	長 厚	(25.8) 19.5	幅 18.9	背面側に3～5mmの工具痕を残す。工具痕は浅く、U字状を呈す。軽石 質の軟質石材で、加工意図は不明。(粗粒輝石安山岩)	重量5340.4g

2区2号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土:色調)	摘 要
				口 底	—	高		
1	第61図	尾張陶器 片口鉢	体部から底 部片	口 底	—	高	高台内に凹凸目立つ。高台剥離部に篋削り痕。体部外面下位から底部外 面周縁は回転篋削り。貼り付け高台で高台剥がれる。底部内面の器表は 使用により摩滅。(灰白)	片口鉢I類。 12世紀～13 世紀。
2	第61図	在地系土器	1/5	口 底	(12.0)	高	左回転軸調整。体部から口縁部は内湾。(A:橙)	17世紀か。
3	第61図	在地系土器	1/4	口 底	(12.0)	高	左回転軸調整。体部から口縁部は内湾。(A:橙)	18世紀か。
4	第61図 PL. 62	在地系土器	1/3	口 底	(9.0) (5.6)	高 1.9	外面中位でやや外反。横撫でにより口縁端部外面を立ち上げ、端部を尖 らせる。底部左回転糸切無調整。(A:浅黄橙)	15世紀末～ 16世紀中頃。
5	第61図	在地系土器	1/7	口 底	(12.2) (7.0)	高 2.7	体部は外反し、口縁部下で小さく内湾。底部左回転糸切無調整。(B:橙)	16世紀中頃～ 後半。
6	第61図	在地系土器	1/5	口 底	— (7.0)	高	底部左回転糸切無調整。(B:浅黄橙)	中世。
7	第61図	在地系土器	1/5	口 底	— (7.3)	高	体部内湾。底部左回転糸切無調整。(D:橙)	江戸時代か。
8	第61図	在地系土器	1/4	口 底	— (7.0)	高	体部は外反。底部左回転糸切無調整。(D:橙)	中世。
9	第61図	在地系土器 片口鉢	1/4	口 底	— (12.0)	高	断面は橙色、器表は灰黄色。体部外面に撫でによる溝状の窪み残る。内 面の器表は使用により摩滅し、体部内面下位から底部内面周縁部の摩滅 が著しくやや窪む。残存部にすり目はない。底部外面周縁の器表摩滅。 糸切り痕が認められない。(D:灰黄)	中世。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘 要
10	第61図 PL. 62	砥石	上端部 破片	長 厚	(4.3) 0.9	幅 3.2	表裏面ともよく使い込まれ、研ぎ減る。(砥沢石)	重量15.5g

2区8号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土:色調)	摘 要
				口 底	—	高		
1	第63図	常滑陶器 費か	体部下位 から底部 片	口 底	—	高	内面に自然釉薄くかかる。底部外面砂底。(灰白～黄灰)	中世。
2	第63図	常滑陶器 費か	体部下位片	口 底	—	高	残存部中位以下の断面中央は灰色、中位以下の器表付近から上位の断面 は灰白色、器表はにぶい黄褐から灰白色。内面器表には薄い自然釉が斑 状にかかる。外面は板状工具による縦位撫で。(にぶい黄褐～灰白)	中世。
3	第63図 PL. 62	在地系土器	口縁一部欠 皿	口 底	8.3 4.8	高 1.9	体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。底部内面と体 部境は横撫でにより境が不明瞭。相対する口縁部に油煙付着。(A:にぶ い橙)	15世紀中頃。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値				成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	()	高	幅		
4	第63図 PL.62	在地系土器 皿	口縁部一部 底部 完	口 底	(8.3) 5.0	高	2.2	体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切無調整。(A：にぶい橙)	15世紀前半。
5	第63図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	断面は橙色、器表は黒から黒褐色。口縁部は内湾。口縁部上半は肥厚。口縁部端部上面は平坦でやや内傾。口縁部端部外面は横撫でにより凹線状に窪み、端部外面が外方に張り出すように見える。口縁部下内面の段差一部残存。(A：黒～黒褐)	中世。
6	第63図	在地系土器 内耳鍋	体部片	口 底	—	高	—	断面は黄灰色、器表は黒色。口縁部下で屈曲して外反。屈曲部内面の段は明瞭。器壁は厚い。(D：黒)	中世。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値				製作状況・使用状況(材質)	
7	第64図 PL.62	台石	埋没土	長 厚	24.6 8.1	幅	24.0	背面側中央付近にアバタ状の打痕が残る。背面側には光沢面があり、礫砥石としての使用も否定できない。(流紋岩)	重量7200 g
8	第64図 PL.62	板碑	左下半部 破片+21	長 厚	(25.6) 3.6	幅	(12.9)	浅い彫りの光明真言の一部が認められる。裏面は剥落し、一部に横方向の平ノミ状成形工具痕(巾12mm程)が1条残る。(緑色片岩)	重量1006.6 g
9	第64図 PL.62	石製品	破片	長 厚	(8.4) (6.5)	幅	(3.2)	背面側礫面に顕著な研磨痕がある。(緑色片岩)	重量261.2g
10	第64図 PL.62	石製品	完形	長 厚	13.2 10.2	幅	11.4	上面中央に径8mm程、深さ6mm程の孔を穿つ。孔内面は研磨が認められ、その周囲と下面には円形(径4mm程)の丸タガネ状工具による刺突が残る。上・側面には巾4mm程の鋭利な葉研彫り状の条痕が縦・斜方向に残る。(粗粒輝石安山岩)	重量1034.9 g

2区14号溝(陶磁器)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値				成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	()	高	幅		
1	第67図	常滑陶器 甕か	体部片	口 底	—	高	—	断面は灰色、内面器表は灰褐色、外面器表はにぶい赤褐色。内面に指頭圧痕残る。(灰褐、にぶい赤褐)	中世。
2	第67図	常滑陶器 甕か	体部片	口 底	—	高	—	断面は灰白色、器表は灰色。外面上部に薄い自然釉が斑状にかかる。(灰)	中世。
3	第67図	在地系土器 皿	1/5	口 底	(6.0)	高	—	体部下位は内湾気味に開く。底部回転糸切無調整。(Bか：橙)	中世か。
4	第67図	在地系土器 片口鉢	体部片	口 底	—	高	—	断面はにぶい橙色、器表は褐灰色。体部中位付近で外反。体部下位の器壁は厚い。残存部にすり目はない。使用により体部内面下位の器表は摩滅。(D：褐灰)	中世。

2区遺構外(陶磁器)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値				成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	()	高	幅		
2	第69図 PL.62	在地系土器 円盤状土製品(鍋)	1/2	口 底	—	高	0.6	断面中央は黒色、器表は灰白。鍋の底部片周囲を擦って円形に加工。(Cか：灰)	江戸時代か。
3	第69図	在地系土器 皿	1/5	口 底	(8.0) (3.9)	高	2.3	体部は外反し、口縁部は内湾。口縁部端部に油煙付着。油煙は口縁部端部欠損部にも付着。底部切り離しは不明。(B：明褐灰)	下野型14世紀か。
4	第69図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	断面中央は明褐色、器表付近から器表は橙色。器壁は厚く、口縁部は内湾気味。口縁部端部上面は小さく窪み、端部外面は外方に張り出す。(D：橙)	16世紀後半～ 17世紀初頭か。
5	第69図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	還元炎。口縁部中位はやや肥厚。口縁部端部外面は斜め上方に張り出す。(B：灰)	15世紀末～ 16世紀中頃。
7	第69図 PL.62	尾張陶器 片口鉢	1/2	口 底	(13.9)	高	—	高台内は細かい凹凸がある。貼り付け高台。体部外面下位は回転篋削り。使用により内面器表は平滑となる。底部周縁の摩滅は著しい。(灰白)	片口鉢I類。 12世紀～13世紀。
8	第69図	常滑陶器 甕	体部下位から 底部片	口 底	—	高	—	内外面板状工具による撫で。内面に薄い自然釉が斑状にかかる。(黄灰、暗灰)	中世。
9	第69図 PL.62	在地系土器 皿	1/8	口 底	(10.2) (5.4)	高	2.8	内面器表は灰黄褐色、外面中位はゆるく外反。底部回転糸切無調整。体部内面下位以下に、表面に黴のある漆状黒色物付着。(A：にぶい橙)	14世紀後半～ 15世紀前半。
10	第69図	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	—	高	—	外面器表付近から内面器表は灰白色、外面器表は灰色。還元炎。外面は口縁部端部付近まで篋削りの後、口縁部端部付近のみ横撫で。口縁部端部内面は内湾するように上方に丸く突き出る。口縁部内面の器表は摩滅(使用痕)。使用により体部内面の器表平滑。(灰白、灰)	14世紀前半～ 中頃。
11	第69図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	—	高	—	還元炎。断面は灰色、器表付近は浅黄色、器表は黄灰色。口縁部下で屈曲し口縁部は直線的に開く。口縁部は端部に向うに従い肥厚し、端部外面は小さく斜め上方に引き上げる。端部内面は丸みを持つ。屈曲部内面の段は稜をなさないが明瞭。(D：黄灰)	15世紀末～ 16世紀中頃。
12	第69図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口 底	—	高	—	還元炎。断面中央はにぶい黄褐色、器表付近は灰白色、器表は灰色。器壁は薄い。口縁部下で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部内面は小さく張り出し、明瞭な稜をなす。屈曲部内面の段は小さく不明瞭。(A：灰)	15世紀後半～ 16世紀中頃。
13	第69図	在地系土器 内耳鍋	口縁部から 体部片	口 底	—	高	—	断面は灰白色、器表は黒色。口縁部下は緩く外反し、口縁部は内湾して開く。口縁部内面は内湾し、内側に肥厚。口縁部下内面は段ではなく明瞭な凹線を廻らす。(A：黒)	15世紀後半。

2区遺構外(石製品・鉄製品)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値				製作状況・使用状況(材質)	摘 要
				径	()	高	幅		
1	第69図 PL.62	茶臼(上臼)	1/8	径	(17.6)	高	(14.4)	側面には方形の挽手孔と菱形の額の一部が残る。摺面は摩滅が著しく、ほとんど目を残さない。(粗粒輝石安山岩)	重量877.6 g
6	第69図 PL.62	板碑	中央部破 片	長 厚	(11.7) (1.4)	幅	(6.7)	浅い葉研彫りの蓮座花卉の一部が認められる。碑面はやや摩滅、裏面は全面剥落。(緑色片岩)	重量160.4 g

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				長	幅	高		
14	第69図 PL. 62	砥石	破片	長 厚	(4.6) (0.5)	幅 3.5	細粒石材を用いた仕上げ砥。背面側に線条痕が残り、弱く研ぎ減る。側面に切断痕が残る。(硬質泥岩：切り砥石)	重量13.3g 裏面側剥落。
15	第69図 PL. 62	敲石	完形	長 厚	17.6 3.2	幅 6.5	上端側両側縁が激しく敲打され、ダメージを受けている。(粗粒輝石安山岩：棒状礫)	重量725.8g
16	第70図 PL. 62	五輪塔 (空風輪)	完形	高 厚	29.4 15.3	幅 17.7	大型空風輪。均質で丁寧な成形を施す。全体に巾2mm程の丸タガネ状工具による刺突痕と同工具による斜・横方向の条痕を残す。(粗粒輝石安山岩)	重量7350g
17	第70図 PL. 62	五輪塔 (水輪)	完形	径 厚	7.6 6.4	高 10.3	丁寧な成形で均質な形状を造り出す。上下面は皿状に窪み、巾5mm程の丸タガネ状工具痕を僅かに残す。(角閃石安山岩)	重量3732.2g
18	第70図 PL. 63	板碑	主尊部左 側破片	長 厚	(6.4) (0.9)	幅 (6.8)	主尊の浅い薬研彫り阿弥陀如来種子の一部が残る。表裏面とも摩滅。(緑色片岩)	重量58.1g
19	第70図 PL. 63	石製品	北壁自然流 路+55	長 厚	17.8 7.1	幅 13.2	上面に径85mmほどの掘り鉢状の孔が穿たれ、孔の内面は平滑。外面の一部に巾30mmほどの平ノミ状工具による切削痕が残る。(角閃石安山岩)	重量1085.4g
20	第70図 PL. 63	石製品	1/2	径 厚	(10.8) 3.0	高 (10.8)	筒状を呈し、上下両方向から穿孔。孔内面には縦方向の丸タガネ状工具痕(巾4mm程)が残る。(粗粒輝石安山岩)	重量412.2g
21	第70図 PL. 63	銅銭 文久永宝	完形	長 厚	2.74 0.11	幅 2.6	郭の右上が破損し変形している。	重量2.1g

4-1区1号谷(陶磁器)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘 要
				口 底	高	幅		
7	第83図	肥前磁器 仏飯器	脚部	口 底	— 3.7	高 —	脚底部無釉。脚は短く、杯部境に1重圏線。(灰白)	江戸時代。
8	第83図	龍泉窯系青磁 碗	口縁部片	口 底	— —	高 —	蓮弁文碗。残存部に錆は認められない。釉表面の微細な傷により白濁したように見え、水摩を受けていると考えられる。(灰白)	II-a類。13世紀前後～前半。
9	第83図	肥前磁器 碗	1/5	口 底	— (3.2)	高 —	染付小丸碗。(白)	18世紀後半～19世紀初頭。
10	第83図 PL. 63	肥前磁器か 皿	3/4	口 底	— 9.9	高 —	蛇ノ目凹型高台。銅板転写による染付。底部内面に鶴亀文。(白)	近現代。
11	第83図 PL. 63	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	— —	高 —	断面は灰色、器表付近にはぶい橙色、器表は黒色。口縁部やや歪む。体部中位で屈曲して外反。口縁部は屈曲気味に内湾し、玉縁状をなす。口縁端部は尖り気味。(黒)	14世紀前半～中頃。
12	第84図 PL. 63	在地系土器 片口鉢	1/5	口 底	— —	高 —	胎土は緻密でやや焼き締まる。口縁は内湾気味で、端部内面は尖り気味に張り出す。(D：灰)	14世紀後半頃。
13	第83図	在地系土器 壺か甕	肩部片	口 底	— —	高 —	胎土と焼成は在地の片口鉢と同様。肩部外面上位は横撫で。肩部外面は丁寧な撫で。頸部で欠損。(灰白)	中世。
14	第84図	在地系土器 内耳鍋か	口縁部片	口 底	— —	高 —	断面は浅黄褐色、器表付近は灰白色、器表は暗灰色。口縁部は短く内湾。端部付近は肥厚。(A：暗灰)	14世紀後半～15世紀中頃か。
15	第84図	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	— —	高 —	断面は灰褐色、器表付近から器表は灰黄褐色。口縁端部が外方に張り出す。口縁端部上面は平坦。(D：黄灰)	15世紀末～16世紀中頃。

4-1区1号谷(石製品・鉄製品)

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘 要
				長	幅	高		
1	第83図 PL. 63	板碑	中央蓮座 部破片	長 厚	(8.3) 2.0	幅 (14.2)	深い薬研彫りの花卉と蓮実の一部が残る。大型板碑。碑面の摩滅は少なく、裏面は全面剥落。(緑色片岩)	重量196.3g
2	第83図 PL. 63	板碑	頂部右端 破片	長 厚	(9.9) (1.2)	幅 (6.0)	二条線と枠線の一部が認められる。碑面やや摩滅、裏面は剥落する。(緑色片岩)	重量108.3g
3	第83図 PL. 63	板碑	中央右半 部破片	長 厚	(33.0) 3.0	幅 (23.4)	主尊阿弥陀三尊の内、薬研彫りの脇侍の「サ(観音菩薩)・サク(勢至菩薩)」種子と蓮座が、中央には紀年銘「延文二(1357年)」と干支の「丁」、その両脇には光明真言の一部が認められる。碑面は丁寧な面成形が施され、表裏面の摩滅は少ない。(緑色片岩)	重量4860.2g
4	第83図 PL. 63	板碑	主尊部破 片	長 厚	(16.2) 3.6	幅 (17.1)	大型の薬研彫り阿弥陀如来種子と蓮座の一部が残る。推定全巾30～40cm。裏面に巾13mm程の横方向の平ノミ状面成形痕を残す。表裏面共にやや摩滅。(緑色片岩)	重量1106.0g
5	第83図 PL. 63	板碑	頂部破片	長 厚	(13.6) 3.0	幅 (12.8)	二条線の一部が残る。推定全巾30～40cm程。裏面の一部に横方向の平ノミ状の面成形工具痕(巾12mm程)を数条残す。表裏面共にやや摩滅。(緑色片岩)	重量815.0g
6	第83図 PL. 63	砥石 (切り砥石)	破片	長 厚	(4.8) (0.5)	幅 (0.6)	支流石材を用いた仕上げ砥。(珪質頁岩：切り砥石)	重量4.7g
16	第84図 PL. 63	砥石 (切り砥石)	破片	長 厚	(4.1) (2.3)	幅 (2.4)	背面側のみ使用、刃ならし傷が斜位に残る。左側面は磨き整形、右側面・裏面は刀子状工具で面取り整形。(砥沢石：切り砥石)	重量27.7g
17	第84図 PL. 63	板碑	中央部右側 端部破片	長 厚	(12.7) 2.1	幅 (5.8)	小さな文字の一部が残るが判読不可、偏文の一部か。碑面はやや摩滅、裏面は一部を残して剥落する。(緑色片岩)	重量187.8g
18	第84図 PL. 63	板碑	中央側部破 片	長 厚	(15.3) 2.6	幅 (9.8)	小さな薬研彫り文字が認められ、光明真言の一部と思われる。裏面は横方向に巾12mm程の平ノミ状の面成形工具痕が残る。表裏面共にやや摩滅する。(緑色片岩)	重量549.6g
19	第84図 PL. 63	板碑	中央部破片	長 厚	(6.9) (1.0)	幅 (5.7)	蓮座花卉の一部が認められる。碑面はやや摩滅、裏面は剥落する。(緑色片岩)	重量63.0g
20	第84図 PL. 63	板碑	中央部破片	長 厚	(5.9) 2.2	幅 (10.4)	阿弥陀三尊の脇侍「サ(観音菩薩)」種子の一部が認められる。碑面はやや摩滅、裏面には横方向の平ノミ状面成形工具痕(巾19mm程)が残る。(緑色片岩)	重量277.0g
21	第84図 PL. 63	板碑	中央右側部 破片	長 厚	(9.3) (2.1)	幅 (9.4)	光明真言の一部(ベイ・ロ)二文字が認められる。碑面はやや摩滅、裏面は剥落する。板碑推定巾は30cm程と推定される。(緑色片岩)	重量242.5g

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要
22	第84図 PL.63	銅銭 不詳	完形	長厚	2.45 0.15	幅	2.5	聖宋元宝か。 重量2.4g

4-1区遺構外

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
1	第86図	尾張陶器 片口鉢	体部から 底部片	口底	—	高	—	内面器表は使用により摩滅。外面は轆轤目顕著。 片口鉢Ⅰ類。 12世紀～13世紀。
No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要
2	第86図 PL.63	銅銭 皇宋通宝	完形	長厚	2.38 0.12	幅	2.5	裏面の郭は不明瞭、外圧による変形か銭が波打っている。 重量2.7g

5-2区2号井戸

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
1	第92図 PL.64	在地系土器 皿	口縁部 1/8、底部 3/4	口底	(7.4) 4.1	高	2	外面口縁部下の轆轤目顕著。底部左回転糸切無調整。口縁端部に油煙付着。(にぶい黄橙) 15世紀前半～中頃。
2	第92図 PL.64	在地系土器 火鉢	口縁部片	口底	—	高	—	断面はにぶい橙色、器表はにぶい黄橙色。口縁部は外反。口縁端部下位に焼成前に内側からの穿孔一カ所残る。(A：にぶい黄橙) 中世。
3	第92図 PL.64	在地系土器 片口鉢	体部から底 部片	口底	—	高	—	胎土はやや緻密、還元炎で軟質な焼き上がり。体部は外反。体部内面下端と底部内面は境を除き使用により器表摩滅。体部内面下位と底部との境は平滑となる。(A：灰白～灰) 中世。
No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要
4	第92図 PL.64	敲石	完形	長厚	12.5 3.1	幅	3.8	小口部両端に敲打痕がある。(粗粒輝石安山岩：棒状礫) 重量200.9g
5	PL.64	石製品	完形	長厚	32.0 20.5	幅	32.0	上面・下面・右側面にノミ状工具による整形面。上面のみ整形されている平坦面が摩耗している。 重量16350g
6	PL.64	石製品	完形	長厚	38.0 24.5	幅	28.0	下面・左右の側面にノミ状工具により平坦に、上面は山形に整形されている。整形痕は新鮮である。 重量21100g

5区3号溝

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			製作状況・使用状況(材質)	摘要
1	第97図 PL.64	銅銭 至和通宝	完形	長厚	2.470 0.124	幅	2.411	欠損は調査時のもの。 重量1.3g

5-1区2号河道

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
1	第99図	常滑陶器 甕か	体部片	口底	—	高	—	断面は灰色、器表はにぶい赤褐色。内面は横位撫で。外面は板状工具による縦位撫で。(にぶい赤褐) 中世。
2	第99図	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底	—	高	—	口縁部は内湾して立ち上がり、端部は尖り気味。口縁端部付近のみ横撫で。(灰) 14世紀中頃。

5-2区1号河道

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
3	第101図	常滑陶器 甕か	体部片	口底	—	高	—	内面は横位撫で。外面は板状工具による縦位撫で。(にぶい赤褐) 中世。
4	第101図	常滑陶器 甕か	体部片	口底	—	高	—	内面は横位撫で。外面は板状工具による縦位撫で。(にぶい赤褐) 中世。

5-1区遺構外

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			成形・整形の特徴(胎土：色調)	摘要
1	第102図	在地系土器 内耳鍋	体部から底 部片	口底	—	高	—	断面は灰白色、内面器表は黒色、体部外面器表は煤付着し、黒褐色。体部外面下位から底部外面には煤付着せず、にぶい黄橙色。体部外面下位は鋭削り。丸底。(黒、にぶい黄橙) 中世。

内耳鍋の年代は、秋本太郎「上野と周辺地域との関係 - 在地土器の分布論を中心に - 」「海なき国々のモノとヒトの動き-16～17世紀における内陸部の流通-」内陸遺跡研究会 2005 において設定された画期による。

在地系土器皿の年代は木津博明「上野国に於ける在地生産土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 中世土器研究会 1989による。

常滑は中野晴久「常滑窯」、「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世・常滑系』愛知県 2012 による。

渥美は 安井俊則「渥美窯」、及び「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世・常滑系』愛知県 2012 による。

14世紀以降の中国産白磁は 森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』貿易陶磁研究会 1982 による。

肥前陶磁は『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-』九州近世陶磁学会 2000 による。

瀬戸窯は藤澤良祐「編年表」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世・瀬戸系』2007 による。

美濃窯は 檜崎彰一「編年表」『尾呂 愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』瀬戸市教育委員会 1990 による。

13世紀以前の中国産白磁と青磁は山本信夫『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市教育委員会 2000 による。

丹波すり鉢は長谷川 眞「近世丹波系掃鉢の変遷とその系譜」『関西近世考古学研究会Ⅷ』関西近世考古学研究会 2000による。

在地片口鉢の年代は、星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』高崎市 1996 による。

※ 常滑窯でいう「片口鉢Ⅰ類」は、筆者には瀬戸窯製品との弁別が困難なため、製作地は「尾張陶器」とし、備考に「片口鉢Ⅰ類」と記した。

2 竪穴住居(平安時代)

3区1号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第103図 PL. 65	須恵器 杯	埋没土 口縁片	口 底	13.6 -	高 -	(4.0)	細砂粒・片岩/還元/灰 5Y6/1	ロクロ整形(回転方向不明)。 器面摩滅。

3区2号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第104図 PL. 65	土師器 杯	埋没土 口縁～底部片	口 底	11.8 7.2	高 -	2.9	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底 部手持ちへら削り。	器面摩滅。
2	第104図 PL. 65	土師器 杯	埋没土 口縁片	口 底	- -	高 -	-	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	口縁部横撫で。	口縁部-体部外面 に破損後の付着 物。
3	第104図 PL. 65	須恵器 椀	埋没土 底部片	口 底	- 6.0	高 -	(2.2) 5.4	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰N6/0	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転糸切 り後の付高台で、接地部に凹線が巡る。	
4	第104図	灰釉陶器 椀	埋没土 底部片	口 底	- -	高 -	-	細砂粒/還元/灰白 10YR7/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は底部回転 へら削り後の付高台で欠損。施釉は刷毛掛け と考えられ、見込み部にも施釉。	光ヶ丘1号窯式 か。
5	第104図 PL. 65	須恵器 甕	埋没土 口縁～胴部	口 底	15.9 -	高 -	(8.2) 17.1	細砂粒/還元/灰N4/0	ロクロ整形(回転方向不明)。	器胎セピア色。

4区1号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第108図 PL. 65	土師器 杯	埋没土 口縁～底部片	口 底	13.0 9.0	高 -	(3.3)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で。底 部手持ちへら削り。	器面摩滅。
2	第108図 PL. 65	土師器 杯	カマド前床上17 cm 底部1/2	口 底	- 7.1	高 -	-	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐10YR7/2	体部外面撫で、底部手持ちへら削り、内面撫 で。	
3	第108図	須恵器 杯	カマド内 口縁～底部片	口 底	12.7 7.0	高 -	3.5	細砂粒・粗砂粒/還元/ にぶい黄橙10YR6/3	ロクロ整形(右回転)、底部回転糸切り無調整。	口縁部内外面を 除き吸炭。器面 摩滅。
4	第108図 PL. 65	須恵器 椀	カマド周辺床直 上～床上4cm 1/4	口 底	14.4 7.0	高 -	5.1 7.0	細砂粒・粗砂粒/酸化/ にぶい黄褐10YR7/4	ロクロ整形(右回転)。高台は付高台。	器面摩滅。
5	第108図 PL. 65	須恵器 椀	カマド内⇨南東 隅 1/2	口 底	14.6 8.2	高 -	5.2 7.6	細砂粒・粗砂粒・片岩 /還元/にぶい黄褐 10YR6/4	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り 後の付高台。	器面摩滅。 藤岡か。
6	第108図 PL. 65	須恵器 椀	東壁下南寄り 3/4	口 底	15.0 7.6	高 -	5.4 7.2	細砂粒・粗砂粒/還元/ にぶい黄橙10YR7/3	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り 後の付高台。	見込み部に重ね 焼き痕。
7	第108図 PL. 65	須恵器 椀	カマド火床上10 cm 3/4	口 底	14.5 6.6	高 -	5.1 5.8	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/還元/にぶい黄橙 10YR7/2	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り 後の雑な付高台。	器面の摩滅顕著。
8	第108図 PL. 65	土師器 台付甕か	カマド火床上3 ～6cm 口縁～胴部片	口 底	12.8 -	高 -	(10.3) 15.0	細砂粒/良好/にぶい赤 褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面横-縦のへら削り。 内面横の撫で。頸部外面に輪積み痕。	
9	第108図	土師器 甕	カマド火床上6 ～13cm 口縁～胴上部片	口 底	20.8 -	高 -	(12.7) 24.0	細砂粒・粗砂粒・軽石 /良好/にぶい黄褐 10YR7/3	口縁部横撫で、胴部外面斜のへら削り、内面 斜のへら撫で。口縁内外面に輪積み痕。	粉っぽい素地。
10	第108図 PL. 65	土師器 甕	カマド内 口縁～胴部片	口 底	19.5 -	高 -	(15.0) 22.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面横-縦のへら削り。 内面横の木口状工具による撫で。	頸部外面に輪積 み痕。
11	第108図	土師器 甕	カマド前面床直 上⇨カマド火床 上12cm 口縁～胴部	口 底	19.5 -	高 -	(5.9) 17.7	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	口縁部雑な横撫で、胴部外面横のへら削り、 内面斜のへら撫で。	器面摩滅。
12	第108図	土師器 甕	カマド火床上25 cm 口縁～胴部	口 底	20.8 -	高 -	(5.3) 18.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面横のへら削り。内面 横のへら撫で。	頸部外面に輪積 み痕。
13	第108図 PL. 65	土師器 甕	カマド火床上3cm 口縁～胴部片	口 底	19.8 -	高 -	(15.8) 21.2	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面横-縦のへら削り。 内面撫で。	胴部内面下位に 接合痕。
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
14	第108図 PL. 65	石製品 敲石	東壁直下床直上 完形	長 厚	11.9 4.8	幅 -	9.3	黒色頁岩・楕円礫	小口部に敲打痕がある。表裏面とも礫面に線 条痕を観察することができるが、使用痕とす べきものか判断に迷う。	786.4g
15	第108図 PL. 65	紡錘車の 軸か	南東隅付近床上5 cm 完形か	長 厚	23.6 0.5	幅 -	0.5	鉄製品	断面ほぼ円形の棒状で端においかい細くなるが 両端とも尖らずやや丸みを持って終わる。	21.8g

4区2号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第110図 PL. 65	土師器 杯	北壁際床直上 口縁一部欠くほ ぼ完形	口 底	11.8 8.0	高 -	3.3	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫 で、底部手持ちへら削り。	

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胎土/焼成/色調			
2	第110図 PL. 65	須恵器 皿	南壁際10cm 1/2	口底 13.4 6.4	高 3.3 6.2	3.3 6.2	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は付高台。	器面摩滅。
3	第110図 PL. 65	須恵器 皿	北寄り床上3cm 口縁1/3欠	口底 13.1 5.7	高 3.3 5.3	3.3 5.3	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元/褐灰10YR4/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転系切り後のやや雑な付高台。	器面の摩滅顕著。 藤岡か。
4	第110図	須恵器 椀	中央床上6cm 底部・1/2	口底 7.0	高 (2.3) 6.5	(2.3) 6.5	細砂粒/還元/灰白 5Y7/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は付高台。	内外面のハゼ顕著。
5	第110図 PL. 65	須恵器 椀	西寄り床上2～4 cm 3/5	口底 13.4 6.6	高 4.9 5.9	4.9 5.9	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。見込み部に重ね焼き痕。

4区3号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胎土/焼成/色調			
1	第112図 PL. 65	土師器 杯	土坑内床下19cm⇔ カマド南脇床下7cm 3/4	口底 11.6 7.7	高 3.3	3.3	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、底部手持ちヘラ削り、内面撫で。	口縁部内外面の 一部吸炭。
2	第112図 PL. 65	土師器 杯	南壁寄り床上5cm 1/2	口底 11.5 7.6	高 3.5	3.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
3	第112図 PL. 65	土師器 杯	カマド南脇床上3cm 1/2	口底 12.0 8.4	高 3.2	3.2	細砂粒・角閃石・軽石/良 好/にぶい赤褐5YR5/3	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
4	第112図	土師器 杯	カマド内火床上6cm 口縁～底部1/3	口底 11.9 7.8	高 (3.2)	(3.2)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面粗い撫で、内面撫で。底部手持ちヘラ削り。	内面摩滅。
5	第112図 PL. 65	土師器 杯	中央床上5cm⇔掘り 方内床下5cm 1/4	口底 12.7 8.0	高 3.0	3.0	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面雑な撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
6	第112図 PL. 66	須恵器 椀	中央床上4cm 2/3	口底 15.6 8.6	高 6.9 8.8	6.9 8.8	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元/灰5Y6/1	ロクロ整形(右回転)。高台は、底部回転系切り後の付高台で、接地部は平坦。	見込み部に便所に伴う と思われる摩滅。藤岡か。
7	第112図 PL. 66	土師器 甕	全体に広がる床 直上～床上8cm 口縁～胴部	口底 19.7	高 (8.3) 16.9	(8.3) 16.9	細砂粒/良好/にぶい赤 褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面撫で。	
8	第112図 PL. 66	土師器 甕	南壁際から中央にか けて床上2～11cm 口縁～胴上部片	口底 19.6	高 胴 -	(7.1) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面横のヘラ撫で。頸部背面に輪積み痕。	器面摩滅。
9	第112図	土師器 甕	掘り方内床下10cm 口縁～胴上部片	口底 22.6	高 胴 -	(7.6) 19.8	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜のヘラ削り、内面撫で。口縁部外面に輪積み痕。	

4区4号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胎土/焼成/色調			
1	第113図	須恵器 椀	カマド燃焼部北 側窪み内 底部・1/2	口底 -	高 (2.4) 5.6	(2.4) 5.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 還元/灰5Y5/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は付高台。	器面の摩滅顕著。

4区5号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胎土/焼成/色調			
1	第115図 PL. 66	土師器 杯	カマド内火床上2cm 1/4	口底 11.8 7.9	高 (3.2)	(3.2)	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
2	第115図 PL. 66	須恵器 皿か	カマド内火床上5cm 底部片	口底 -	高 -	-	細砂粒・粗砂粒/還元/ にぶい黄橙10YR7/2	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	底部に墨書か。 器面摩滅。
3	第115図 PL. 66	須恵器 杯	カマド内火床上6cm 2/3	口底 12.6 6.0	高 3.9	3.9	細砂粒・粗砂粒/還元/ にぶい黄橙10YR7/3	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	内面の一部吸炭。 器面摩滅。

4区6号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胎土/焼成/色調			
1	第117図 PL. 66	土師器 杯	南壁際床上6cm 完形	口底 12.0 8.0	高 3.3	3.3	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/8	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
2	第117図 PL. 66	土師器 杯	南壁際西側床下2cm 3/4	口底 12.3 7.7	高 3.3	3.3	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
3	第117図 PL. 66	土師器 杯	貯蔵穴内床下31cm 口縁・底部一部 欠損	口底 11.8 8.0	高 3.6	3.6	細砂粒・雲母/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面雑な撫で、内面撫で。底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。口縁 部外面の一部吸炭。
4	第117図 PL. 66	土師器 杯	貯蔵穴内床下30cm 口縁部一部欠損	口底 11.7 8.1	高 3.4	3.4	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちヘラ削り。	
5	第117図 PL. 66	土師器 杯	貯蔵穴内床下31cm 完形	口底 11.3 8.0	高 3.3	3.3	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面雑な撫で、部分的に型肌を残す。内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	
6	第117図	土師器 杯	南壁際東側床下6cm 1/2	口底 11.8	高 4.0	4.0	細砂粒・輝石・軽石/良 好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、底部粗い手持ちヘラ削り。内面撫で。	器面摩滅。底部の 一部に型肌を残す。
7	第117図	土師器 杯	西壁寄り床上20cm 口縁～底部1/2	口底 11.4	高 (3.2)	(3.2)	細砂粒・角閃石・軽石/良 好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で。底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
8	第117図 PL. 66	土師器 杯	埋没土 2/3	口底 13.0 8.1	高 4.1	4.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ削り、内面撫で後放射状暗文施文。底部手持ちヘラ削り。	
9	第117図 PL. 66	土師器 杯	埋没土 完形	口底 12.0 8.2	高 3.2	3.2	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高	幅				
10	第117図 PL. 66	土師器 杯	埋没土 3/4	口 底	12.4 8.1	高	3.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ削り、内面撫で。	器面摩滅。
11	第117図 PL. 66	土師器 杯	埋没土 口縁～底部・一 部欠損	口 底	11.8 8.7	高	3.1	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちヘラ削り。	底部～体部外面の 一部吸炭。
12	第117図	土師器 杯	埋没土	口 底	11.7 7.4	高	3.4	細砂粒・角閃石・軽石/良 好/にぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で。底部手持ちヘラ削り。内面撫で後体部に細目の斜め放射状暗文施文。	見込み部に「×」 の焼成後刻書。
13	第117図 PL. 66	土師器 杯	掘り方内南壁寄 り床下10cm	口 底	11.7 8.2	高	3.4	細砂粒・軽石/良好/に ぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部手持ちヘラ削り。	外面に付着物。
14	第117図 PL. 66	土師器 鉢	埋没土 1/4	口 底	21.6 13.1	高	(9.1)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面ヘラ削りか。内面撫で、底部ヘラ削り。	器面摩滅。
15	第118図 PL. 66	須恵器 皿	貯蔵穴内床下15 cm 口縁一部欠	口 底	13.4 6.8	高	3.1	細砂粒/還元/灰5Y5/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	外底に墨書「十」 か。器面摩滅。 いぶし焼成。
16	第118図 PL. 66	須恵器 皿	貯蔵穴内床下18cm 3/4	口 底	13.5 5.8	高台	3.4 5.9	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/2	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転系切り後の雑な付高台。	器面の摩滅顕著。
17	第118図 PL. 66	須恵器 杯	中央床上20cm 4/5	口 底	13.2 6.3	高	4.1	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元/灰5Y1/6	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	器面摩滅。 藤岡か。
18	第118図 PL. 66	須恵器 椀	掘り方内南西隅 床下13cm	口 底	14.2 7.4	高台	6.1 7.0	細砂粒・粗砂粒・雲母/ 酸化/明赤褐5YR5/6	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	口縁部外面狭く 還元。
19	第118図 PL. 66	須恵器 椀	中央床上20cm 3/4	口 底	14.1 6.8	高台	5.1 6.6	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面の摩滅顕著。
20	第118図 PL. 66	須恵器 椀	貯蔵穴北脇床直上 3/4	口 底	14.4 7.8	高台	5.1 7.8	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰5Y6/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。
21	第118図 PL. 66	須恵器 椀	埋没土 4/5	口 底	14.1 7.0	高台	5.3 6.4	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。
22	第118図	須恵器 椀	南壁寄り中央床 上12cm 口縁～体部片	口 底	13.8 -	高	(4.7)	細砂粒/還元/灰白 10YR7/1	ロクロ整形(回転方向不明)。	器胎内吸炭。器 面摩滅。
23	第118図	須恵器 椀	埋没土 底部	口 底	- 6.4	高台	(2.4) 6.0	細砂粒・雲母/還元/に ぶい黄橙10YR7/2	ロクロ整形(右回転か)、高台は付高台。	器面の摩滅顕著。
24	第118図 PL. 66	土師器 台付甕	南壁際床上14cm 高台～体部片	口 台	- 8.2	高 胴	(8.8) -	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	胴部外面縦のヘラ削り、内面撫で、脚部撫で。	脚部端部内外面 吸炭。胴部外面下 半に炭化物付着。
25	第118図 PL. 67	土師器 甕	埋没土 口縁～胴部上半	口 底	19.5 -	高 頸	(8.5) 17.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐5YR5/3	口縁部横撫で、胴部外面斜のヘラ削り、内面撫で。	器面摩滅。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要	
26	第118図 PL. 67	石製品 台石	南壁中央直下床直上 完形	長 厚	33.5 10.4	幅	24.6	砂岩・盤状礫	背面側中央付近、及び、端部に敲打痕が残る。裏面側は被熱してアバタ状の剥落が著しい。	14650.0g

4区7号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高	幅				
1	第120図 PL. 67	須恵器 皿	埋没土 1/2	口 台	13.4 7.7	高	2.3	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。
2	第120図	須恵器 杯	東壁寄り床上4cm 1/4	口 底	13.0 5.6	高	3.6	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元/灰5Y6/1	ロクロ整形(回転方向不明)、底部切り離し不明。	底濃く凹痕、器面 の摩滅顕著、藤岡か。
3	第120図 PL. 67	須恵器 杯	北西隅寄り床直 上～5cm	口 底	13.3 5.8	高	3.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 還元/灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転)。底部回転手切り無調整。	器面摩滅。 底部内外面酸化。
4	第120図	須恵器 杯	南東隅寄り床上3cm 1/3	口 底	12.4 5.2	高	3.5	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白10YR8/1	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	器面摩滅。
5	第120図	須恵器 椀	北西隅寄り床上7cm 1/4	口 底	13.2 6.6	高	4.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 還元/灰白5Y6/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は付高台。	器面摩滅。
6	第120図	須恵器 椀	埋没土 1/4	口 底	14.4 6.8	高台	5.2 6.0	細砂粒・雲母/還元/灰 白5Y7/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。
7	第120図 PL. 67	緑釉陶器 皿	中央床下7cm 底部片	口 底	- 9.2	高台	- 8.6	細砂粒/還元/灰白 10YR8/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は角高台状で、底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉は淡い発色で、高台接地部を含めて全面。	京都産か。器面 摩滅。
8	第120図	灰釉陶器 椀(円盤状 土製品か)	埋没土 体部～底部	口 底	- 8.6	高台	(2.1) 8.0	細砂粒/還元/灰白 5Y8/1	ロクロ整形(右回転か)、高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉技法は不明。体部の立ち上がり部で、打ち欠いた痕跡がある。円盤状土製品に加工か。	見込み部に重ね 焼き痕。
9	第120図 PL. 67	灰釉陶器 瓶	南壁際周辺床上8 ～20cm 1/4	口 底	- 9.0	高 胴台	(15.9) 15.7 8.6	細砂粒/還元/灰白 5Y8/1	ロクロ整形(回転方向は不明)。高台は底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉は厚く垂れて高台にまで及ぶ。	東濃か。
10	第120図	土師器 台付甕	北西隅寄り床直上 台部	口 底	- -	高台	(2.4) 8.6	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/赤褐5YR4/6	脚部横撫で。	
11	第121図	土師器 甕	東壁寄り床上10 cm 口縁～胴部片	口 底	20.8 -	高 頸	(5.5) 19.5	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面撫で。	

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
12	第121図	土師器 甃	火床上6cm 底部～胴下位片	口 底	- 4.0	高 胴	(7.1) -	細砂粒/良好/灰褐 5YR4/2	胴部外面縦のヘラ削り、内面ヘラ撫で。 底部砂底。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
13	第120図 PL.67	敲石	住居中央床直上 完形	長 厚	20.5 6.6	幅	5.8	粗粒輝石安山岩・棒状 礫	小口部上端に敲打痕を有し、被熱して煤ける。 礫は断面三角形状を呈す。	882.9g
14	第120図 PL.67	台石	東壁下北側床上3cm 完形	長 厚	(24.1) 6.7	幅	18.6	粗粒輝石安山岩・扁平 楕円礫	表裏面とも中央付近に敲打痕がある。小口部 を意図的に打ち欠いている。被熱して煤ける。	4491.4g
15	第121図 PL.67	鉄鍬	北西寄り床上12 cm 茎端部欠く	長 厚	11.3 0.25	幅	1.7	鉄製品	錆化すすみ内部空洞化し形状不明瞭、柳葉型 でかつぎと茎間に段差を持つ、茎は大きく弧 を描き曲がり破損する。	7.5g
16	第121図 PL.67	刀子	北西寄り床上14 cm 切先部片	長 厚	2.9 0.2	幅	1.0	鉄製品	錆化すすみ内部空洞化し形状不明瞭であるが 断面三角形の刀子の先端。	2.16g
17	第121図 PL.67	鉄釘か	カマド前床直上 中央欠く	長 厚	5.6+6.4 0.4	幅	0.7-1.0	鉄製品	直接接合しない二破片あり、1片は断面やや 丸みのある四角形で端部はややとがりながら 曲がる反対側は破損、もう1片は端部で二股 に分かれ細くなり輪状に丸くなる。	11.7g

4区9号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第123図 PL.67	須恵器 椀	掘り方内床下3 ～6cm 3/4	口 底	11.7 6.6	高 台	4.0 6.0	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰黄褐10YR6/2	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り 後の付高台で、貼り付け部から剥落。 口縁部内外面の 一部吸炭。

4区10号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第124図 PL.67	土師器 杯	南壁下床直上 口縁片	口 底	13.9 -	高	(3.5)	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、底部手持ちヘラ削りで、間に 撫での部分を残す。内面撫で。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
2	第124図 PL.67	不詳	南壁際掘り方内 破片	長 厚	6.0 0.5	幅	1.0	鉄製品	しずく型で断面平行四辺形の鉄製品で一端は 細く端で欠損する。	8.13g
3	第124図 PL.67	鉸具	南壁際掘り方内 1/2破片か	長 厚	5.9 0.8	幅	3.9	鉄製品	泥・砂を巻き込み錆化が進む。外周の半分と舌 部分が残っていない。右側は劣化後の破損であ るが、左側破損部は破断面が錆に覆われてい おり使用中または埋蔵中に破損したとみられる。	22.08g

4区11号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第125図 PL.67	土師器 杯	西壁寄り床上4cm 口縁一部欠	口 底	12.2 9.6	高	3.3	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で後押圧、内面撫 で。底部手持ちヘラ削り。	
2	第125図 PL.67	土師器 杯	南壁寄り西側床 直上 完形	口 底	11.9 -	高	3.3	細砂粒・粗砂粒・軽石・ 角閃石/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫 で、底部手持ちヘラ削り。	
3	第125図 PL.67	土師器 杯	南壁寄り東側床 下2cm 口縁一部欠	口 底	11.9 8.0	高	3.6	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫 で。底部手持ちヘラ削り。	底部の一部吸炭。
4	第125図 PL.67	土師器 杯	南西隅床直上 完形	口 底	11.3 7.9	高	3.7	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫 で。底部手持ちヘラ削り。	外面に付着物。
5	第125図 PL.67	土師器 杯	南西隅床直上 完形	口 底	11.8 8.2	高	3.5	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫 で。底部手持ちヘラ削り。	外面に付着物。
6	第126図 PL.67	土師器 高杯	埋没土 杯部1/2	口 台	17.7 -	高	(5.8)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	杯体部外面斜の撫で、脚接合部外面撫で。杯 部内面丁寧な撫で。	内面摩滅。
7	第126図 PL.67	土師器 鉢	埋没土 口縁～体部片	口 底	15.5 -	高	(7.1)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ削り、内面 撫で。	
8	第125図 PL.67	須恵器 皿	南西隅床直上 完形	口 台	12.7 6.6	高	2.9	細砂粒・粗砂粒/酸化/ 褐灰10YR4/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転糸切 り後の付高台で、接地部に凹線で巡る。	体部外面吸炭。 器面摩滅。
9	第126図 PL.67	須恵器 皿	南壁寄り床直上 完形	口 台	12.9 6.6	高	3.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/酸 化/にぶい黄褐10YR5/3	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転糸切 り後の付高台。	器面摩滅。 藤岡か。
10	第125図 PL.67	土師器 甃	西壁際南寄り床 下6cm 口縁～胴下位1/4	口 底	15.0 -	高 胴	(20.5) 19.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫でか。胴部外面下半撫で。	器面摩滅。胴部 内面上半に輪積 み痕。
11	第126図 PL.67	土師器 甃	西壁際南寄り床 下6cm 底部～胴部	口 底	- 4.8	高 胴	(10.7) 14.9	細砂粒・粗砂粒・角 閃石・軽石/良好/橙 5YR6/6	胴部外面斜めのヘラ削りか、内面撫で、底部 ヘラ削り。	器面摩滅。

4区17号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第127図 PL.67	土師器 杯	南壁際床上5cm 1/4	口 底	13.4 8.2	高	(3.9)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ削り。内面 撫で。
2	第127図 PL.67	須恵器 椀	南壁下床直上 口縁～体部片	口 底	17.8 -	高	(6.1)	細砂粒・白色針状物質/ 還元/灰白5Y7/1	ロクロ整形(右回転か)。 南比企産か。

5区1号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第128図 PL.67	土師器 杯	カマド内 1/4	口 底	13.2 -	高 -	3.2	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、底部手持ちへら削りで、間に 撫での部分を残す。内面撫で。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
2	第128図 PL.67	不明石製 品	カマド前窪み内 完形か	長 厚	5.9 4.4	幅 -	4.5	二ヶ岳軽石か 楕円礫	小形礫を横位に鋭く切り取る。切り取り面はフラ ットで、整形面は確認できない。	41.4g

2 竪穴住居(古墳時代)

1区1号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第130図 PL.68	土師器 鉢	南壁下床土10cm 口縁～底部1/2	口 底	17.4 6.3	高 -	6.8	細砂粒/良好/橙5YR6/6	体部外面斜めのへら磨き、内面斜めのへら磨 き。	器面摩滅。体部 外面に吸炭部分。
2	第130図 PL.68	土師器 鉢	東寄り床上13～ 19cmに散乱 口縁～底部片	口 底	22.4 6.3	高 -	10.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	体部内外面へら撫でか。	器面摩滅。
3	第130図 PL.68	土師器 甕か	東壁下床土16～18cm 体部～底部2/3	口 底	- 6.6	高 胴	(6.6) 11.2	細砂粒/良好/橙5YR6/6	胴部外面横のハケ目(1cmあたり8本)、内面横 の粗いハケ目後撫で。	胴部外面下端剥 離。
4	第130図 PL.68	土師器 器台	南壁際床上9cm 口縁～底部3/4	口 台	7.4 8.9	高 -	6.9	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面ハケ目後撫でか。穿孔は3孔。	器面の摩滅顕著。
5	第131図	土師器 壺	埋没土 口縁	口 底	15.6 -	高 胴	(2.3) -	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/8	器面整形は不明。	器面摩滅。
6	第131図 PL.68	土師器 壺	南東床上10～19cm 頸部～底部3/4	口 底	- 5.2	高 胴	(19.7) 21.8	細砂粒/良好/灰5Y6/1	内外面撫でか。	器面摩滅。
7	第130図	土師器 鉢	東寄り床上10～ 23cmに散乱 1/4	口 底	- 7.2	高 胴	(9.5) -	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/4	胴部外面ハケ目後縦のへら撫で、内面横の撫 で後下端のみ斜めのハケ目(1cmあたり6本)。 胴部内面に輪積み痕。	
8	第131図 PL.68	土師器 甕	中央床上13～17cm 口縁～底部1/2	口 底	13.0 4.5	高 胴	13.0 14.7	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜めのへら削り、内 面撫で。	口縁部外面及び胴 部内面下半剥離。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
9	第131図 PL.68	敲石	埋没土 完形	長 厚	14.0 5.3	幅 -	7.4	溶結凝灰岩・棒状礫	小口部両端に敲打痕が残る。被熱して煤ける ほか、ひび割れる。	751.2g

1区2号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第133図 PL.68	土師器 高杯	東寄り床直上～ 床上5cm⇄掘り方 埋戻し土 杯部～底部3/4	口 台	17.8 12.8	高 -	14.6	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/8	杯部外面斜めの撫で、脚部外面縦の撫で、脚 部の穿孔は3孔。	器面摩滅。杯部 内面にハゼ。
2	第133図	土師器 壺	中央床下3cm～床 上3cm⇄掘り方埋 戻し土 頸部～胴部片	口 底	- -	高 頸	(10.8) 11.2	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	胴部外面ハケ目後撫で、胴部内面撫で。頸部 は貼り付け部剥落、胴部内面に輪積み痕。	器面摩滅。
3	第133図 PL.68	土師器 壺	中央に散乱床直 上～床上7cm 口縁～底部2/3	口 底	12.1 7.0	高 胴	22.1 22.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後撫で、胴 部外面斜めから横のハケ目後粗い撫でか。内 面ハケ目後撫で。	胴部外面下半の 粗れ目立つ。胴 部外面下半吸炭。
4	第133図 PL.68	土師器 台付甕	東寄り床上3～ 14cm 口縁～台上部1/2	口 底	16.6 -	高 胴 台	(28.0) 26.8 -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり7本)後2段の横のハケ目、肩 部-胴部下端左上方向3段のハケ目を重ねる。 脚部右下方向のハケ目。胴部内面下位に接合 痕、脚部天井及び底部内面に砂目粘土補填。	胴部下半被熱に よる赤変か。
5	第134図 PL.69	土師器 台付甕	中央床直上～床 上8cm 口縁～底部	口 底	13.7 -	高 頸 胴	(21.5) 11.8 20.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐10YR5/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面は左下方向の ハケ目(1cmあたり7本)、胴部外面は左上方向 へ3段ほどのハケ目、脚部外面右下方向のハ ケ目、胴部内面撫で、脚部天井部及び底部内 面砂目粘土で補填。	器面摩滅。胴部 内面下位帯状に 変色。
6	第134図	土師器 台付甕	東壁下床直上～ 床上3～7cm 口縁～胴部1/2	口 底	14.4 -	高 頸	(8.5) 12.8	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり9本)、肩部から下位左上方向ハ ケ目(1cmあたり7本)。肩部内面に縦の強い撫 で。	
7	第134図 PL.69	土師器 台付甕	東壁下床土3～ 10cm 台部～胴下半部	口 台	- 9.2	高 胴	(11.8) -	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR6/3	胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)、脚 部外面右下方向のハケ目、脚部天井及び底部内 面砂目粘土で補填。胴部内面下位に接合痕。	
8	第134図 PL.69	土師器 台付甕	南東寄り床上4 ～5cm⇄掘り方 埋戻し土 口縁～胴部1/2	口 底	13.6 -	高 胴	(11.8) 20.0	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5本)、肩部から下は左上方向 のハケ目。肩部内面縦の撫で。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
9	第134図 PL.69	敲石	南寄り床上7cm 2/3	長 厚	(13.1) 4.6	幅 -	6.6	粗粒輝石安山岩・棒状 礫	小口部上端に敲打痕。礫面が煤ける。被熱破 損。	617.2g

遺物観察表

1区3号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 台	高	()			
1	第135図 PL. 69	土師器 器台	中央西寄り床下6 cm 台部片	口 台	-	高 (4.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にぶい橙5YR7/4	受け部外面撫で、脚部外面縦の撫で、内面斜 めの撫で。脚部の穿孔は3孔。受け部内面剥 離。脚部上端に受け部接合のためソケットの 痕跡。	器面摩滅。
2	第135図 PL. 69	土師器 甕か	東寄り～北東壁 際床上6cm 底部片	口 底	-	高 胴 5.4	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	胴部外面縦のハケ目、内面粗いハケ目。	底部の粗れ顕著。
3	第135図 PL. 69	土師器 台付甕	東寄り～北東壁 際床上6cm 口縁～肩部片	口 底	15.4	高 頸 13.4	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部横のハケ目、口縁部内面 の屈曲はシャープ、頸部-肩部外面左下方向 のハケ目(1cmあたり7本)、内面は縦の強い撫 で。	
4	第135図 PL. 69	土師器 甕	北東壁下床直上 口縁～胴部片	口 底	16.7	高 頸 13.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	胴部外面左上方向のハケ目後撫で。内面横 のハケ目。胴部外面ハケ目後撫で、内面撫で。	胴部内面上位に 輪積み痕。
5	第135図 PL. 69	土師器 台付甕	北西壁下床下5cm 台部	口 台	-	高 7.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	脚部外面右下方向のハケ目、内面撫で、脚端 部の折り返しは雑、脚部天井及び脚部内面は 砂目粘土で補填。	脚部内面と端部 外面吸炭。

1区4号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 台	高	()			
1	第137図 PL. 69	土師器 蓋か	北寄り床上14～ 20cm 1/2	口 台	4.0 10.5	高 5.5	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	器面撫でか。摘部は高台状を呈し、やや雑な 貼り付け。	器面摩滅。
2	第137図 PL. 69	土師器 高杯	北寄り床上9cm 杯部片	口 台	21.8	高 (5.6)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	口縁部内外面横のヘラ磨き、体部外面縦、内 面斜のヘラ磨き。	
3	第137図 PL. 69	土師器 器台	北寄り床上14cm ⇔埋没土 口縁～脚部2/3	口 台	9.3 8.8	高 8.7	細砂粒/良好/明赤褐 5YR6/5	受け部外面撫で、内面は横-斜めのハケ目(1 cmあたり7本)、脚部外面は縦、内面は横のハ ケ目。	
4	第137図 PL. 69	土師器 器台	南寄り床上6～ 11cm⇔埋没土 口縁～脚部3/4	口 台	7.8 10.5	高 8.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/灰黄褐10YR6/2	受け部外面横のヘラ磨き、内面ヘラ撫で、脚 部外面細かなハケ目後縦のヘラ磨き、内面斜 めのハケ目後撫で。穿孔は3孔。	器面やや摩滅。
5	第137図 PL. 69	土師器 器台	北寄り床上13cm 完形(両端部一部 欠)	口 台	7.1 9.0	高 5.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	器面撫でか。脚部の穿孔は3孔。	脚部歪む。器面 摩滅。
6	第137図 PL. 69	土師器 器台	中央東寄り床上4 cm 脚部	口 台	-	高 10.0	細砂粒・角閃石/良好/オ リ-7黒5Y3/1	脚部内外面撫で。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。内外 面器胎吸炭。
7	第137図 PL. 69	土師器 器台	西寄り床上12cm ⇔2住埋没土 小破片	口 台	18.9	高 (3.5)	細砂粒/良好/橙5YR6/6	内外面ヘラ磨き、受け部の穿孔は8孔か。	
8	第137図 PL. 69	土師器 鉢	中央～北に散乱 の床上3～18cm ⇔埋没土 2/3	口 底	20.6 5.4	高 胴 14.4 20.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部外面横のハケ目後撫でか。内面横のヘ ラ削り、体部外面斜めのハケ目後斜めの粗い 撫で、内面撫で。	器面摩滅。
9	第137図 PL. 69	土師器 壺	東寄り床直上～ 床下8cm⇔掘り方 埋戻し土 胴部～底部	口 底	-	高 胴 8.0 32.9	(23.5) 細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR7/4	胴外面上半縦のハケ目(1cmあたり6本)後撫 で、下半斜の撫で、内面横の撫で。	底部-胴部下半に 黒斑。
10	第137図 PL. 69	土師器 台付甕	北壁際床上10cm ⇔埋没土 口縁～肩部3/4	口 底	13.6	高 頸 11.7	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR5/2	口縁部横撫で、屈曲部ヘラ撫で、頸部-肩部 外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、胴部 外面左上方向のハケ目、内面撫で。	胴部内面摩滅。
11	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	北寄り床直上～ 床上16cm⇔埋没 土 口縁～胴部2/3	口 底	17.0	高 胴 26.4	(13.0) 細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり6本)、胴部外面左上方向のハ ケ目、肩部内面斜めの撫で。	器面摩滅。
12	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	中央西寄り床上 17～18cm 口縁～胴部1/3	口 底	12.9	高 頸 11.5	(5.1) 細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5本)。内面撫で。	器面摩滅。
13	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	中央～西寄り床 上9～15cm⇔埋 没土 口縁～肩部2/3	口 底	14.4	高 頸 13.0	(4.4) 細砂粒・粗砂粒・軽石 /良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面右下方向のハ ケ目(1cmあたり7本)、内面縦の強い撫で。肩 部内面に輪積み痕。	
14	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	中央～西寄り床 上9～15cm⇔埋 没土 口縁～胴上部2/3	口 底	16.0	高 頸 14.0	(5.8) 細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり8本)、内面撫でか。	器面摩滅顕著。
15	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	北寄り床上9～ 17cm⇔埋没土 口縁～肩部1/4	口 底	15.4	高 頸 14.0	(5.7) 細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部は左下方向のハケ 目(1cmあたり5本)、内面は縦の強い撫で。	器面摩滅。
16	第138図 PL. 70	土師器 台付甕	北寄り床上9～ 17cm⇔埋没土 口縁～胴部1/4	口 底	21.6	高 胴 -	(18.6) 細砂粒・軽石/良好/褐 灰5YR4/1	口縁部横撫で、頸部-肩部左下方向のハケ目(1 cmあたり6本)、肩部-胴部左上方向のハケ目。 肩部内面に斜-縦の強い撫で。	内面吸炭。

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口底	高頸	高胴			
17	第138図 PL. 70	土師器 台付甕	中央床直上～床上3cm⇔埋没土3/4	口底 -	高頸 12.6	高胴 (19.2) 11.6 18.5	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐5YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、胴部外面左上方向の2段階ほどのハケ目。脚部外面右下方向のハケ目。脚部天井部及び底部内面に砂目粘土補填。内面撫で。胴部内面に接合痕。	胴部下半被熱によるものか粗れが目立つ。
18	第138図 PL. 70	土師器 台付甕	中央北寄り床上8～15cm⇔埋没土 口縁～胴部1/2	口底 -	高頸 17.6	高胴 (20.5) 24.9	細砂粒・軽石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、頸部-肩部左下方向のハケ目(1cmあたり7本)、肩部-胴部左上方向のハケ目、頸部内面にハケ目わずかに残す。肩部内面は縦の撫で。	器面摩滅。
19	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	中央東西の床下8cm～床上19cm 脚部片	口台 -	高 8.7	(5.7)	細砂粒/良好/にぶい黄橙10YR6/4	脚部外面右下方向のハケ目(1cmあたり10本)、内面斜めの撫で、端部折り返し、脚部天井及び底部内面砂粒のやや少ない砂目粘土で補填。	脚部外面に吸炭部分。
20	第137図 PL. 70	土師器 器台	西寄り床上6cm 脚部片	口台 -	高 8.6	(5.0)	細砂粒・角閃石/良好/灰黄褐10YR5/2	外面撫で後斜のハケ目、内面撫で。	
21	第137図 PL. 70	土師器 台付甕	南西寄り床直上～床上12cm⇔掘り方埋戻し土 脚部片	口底 -	高頸 9.5	高胴 (6.0) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙10YR7/3	脚部外面縦のハケ目後撫で、内面撫で。	器面摩滅。
22	第138図 PL. 71	土師器 甕	中央～北西の床上13～17cm 口縁～胴上部2/3	口底 -	高頸 13.1	高胴 (5.6) -	細砂粒/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後横撫で。胴部外面斜めの撫で、内面撫で。	器面摩滅。
23	第138図 PL. 70	土師器 甕	北西床上14～20cm⇔埋没土 1/2	口底 -	高頸 15.0	高胴 (20.1) 22.4	細砂粒・粗砂粒・輝石/良好/褐10YR4/6	口縁部横撫で、胴部外面ハケ目(1cmあたり6本)、下半斜めのヘラ撫で、内面撫で。	器面摩滅。
24	第138図 PL. 71	土師器 甕	中央～北西床上11～17cm⇔埋没土 口縁～胴部1/3	口底 -	高頸 17.6	高胴 (11.3) 15.7	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部外面縦のハケ目、内面横のハケ目後撫で、胴部外面斜め-縦の撫で、内面斜めの撫で。	器面摩滅。
25	第138図 PL. 71	土師器 甕	中央～北西床直上～床上18cm⇔埋土 口縁～胴部	口底 -	高頸 13.2	高胴 (15.8) 19.3	細砂粒/良好/にぶい赤褐5YR4/4	口縁部ハケ目後撫で、胴部外面斜めのヘラ削り、内面横-斜めの撫で。口縁外面に輪積み痕。	器面摩滅。
26	第138図 PL. 71	土師器 甕	中央～北に散乱の床上4～19cm 口縁～胴部1/2	口底 -	高頸 14.6	高胴 (22.9) 21.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面縦-斜めのハケ目、内面撫でか。	器面摩滅。
27	第138図 PL. 71	土師器 把手か	西寄り床上13cm 小片	長幅 7.2	高 5.2	4.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい赤褐5YR5/3	粗く面取りした後全面撫で。	

1区5号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口底	高頸	高胴			
1	第141図 PL. 71	土師器 蓋か	南寄り床下5cm 3/4	口底 3.7	高頸 11.5	高胴 5.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/橙5YR6/6	内外面撫でか。摘は高台状に貼り付け。	内面の摩滅顕著。
2	第141図	土師器 高杯	北寄り床上4cm 杯部片	口台 19.6	高 19.6	(4.0)	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	外面斜のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	器面摩滅し、内面中央のハゼ顕著。
3	第141図 PL. 71	土師器 壺	南東壁際床直上～床下4cm 完形 (口縁～体部一部欠)	口底 9.1	高頸 4.8	高胴 12.0 11.5	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫でか。胴部外面撫で。	器形に歪み。器面摩滅。
4	第141図 PL. 71	土師器 広口壺	南西壁際南隅床直上 1/2	口底 15.6	高頸 -	高胴 (12.5) 18.7	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐5YR3/2	口縁部横撫で、頸部-胴部外面ハケ目(1cmあたり8本)、内面撫で。頸部内面に輪積み痕。	胴部外面下半被熱により剥離か。
5	第141図 PL. 71	土師器 器台	南隅壁下床下6cm⇔8住北寄り床上4cm 杯部(杯部一部欠)	口台 17.0	高 17.0	(6.0)	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR7/4	受け部内面縦-斜めのヘラ磨き、外面縦のヘラ磨き。受け部の穿孔は5孔。	端部に吸炭部分3カ所。
6	第141図 PL. 72	土師器 台付甕	住居南寄り床直上～床上4cm 口縁～台上部1/3	口底 16.8	高頸 -	高胴 (23.7) 22.6 -	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり4本)、肩部-胴部外面左上方向のハケ目。胴部内面下位に接合痕、脚部天井及び底部内面に砂目粘土で補填。	器面摩滅。
7	第141図 PL. 71	土師器 台付甕	中央～南壁下に散乱の床下6cm～床上7cm 口縁～台上部1/3	口底 22.7	高頸 5.4	高胴 (35.5) 17.8 28.1	細砂粒・粗砂粒/良好/橙5YR6/8	口縁部ハケ目後横撫で、頸部外面左上方向の細かなハケ目。頸部-肩部縦のハケ目、肩部-胴部左上方向のハケ目(1cmあたり6本)。口縁部内面横のハケ目、胴部内面横のハケ目、下端縦のハケ目。脚部外面左下方向のハケ目。	
8	第141図 PL. 72	土師器 台付甕	北東壁下床下6～7cm⇔掘り方埋戻し土 口縁～肩部1/2	口底 15.8	高頸 -	高胴 (5.1) 13.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、肩部内面押圧。	

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	()				
9	第141図 PL.72	土師器 台付甕	南西壁下床直上 ～床上5cm 口縁～胴上部1/3	口 底	13.9 -	高 胴	(7.3) 19.1	細砂粒・軽石/良好/灰 黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり4本)、胴部外面左上方向のハケ目、肩部内面縦の撫で。肩部内面に輪積み痕。	
10	第141図 PL.72	土師器 台付甕	住居中央床下14 cm 脚部	口 台	- 7.8	高 胴	(6.0) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	脚部外面右下方向のハケ目(1cmあたり8本)、内面粗い撫で、端部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土で補填。	
11	第141図 PL.72	土師器 鉢	北東壁下床下4 ～7cm 口縁～体部片	口 底	17.2 -	高 胴	(4.8) -	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR11/3	口縁部-体部外面斜-縦のハケ目後縦のヘラ削り、内面横のハケ目、体部内面斜めのヘラ削り。口縁部外面に輪積み痕。	

1区6号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 台	高 胴	()				
1	第142図 PL.72	土師器 器台	南西寄り床下3cm ～床上4cm⇔掘り 方埋戻し土 口縁～脚部1/2	口 台	10.0 11.0	高 胴	10.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/8	器面撫でか。穿孔は4孔。	器面の摩滅顕著。 被熱による脚部 外面変色か。
2	第142図 PL.72	土師器 鉢	東隅壁下床下3 ～6cm⇔掘り方 埋戻し土 2/3	口 底	9.3 3.5	高 胴	7.5 9.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/4	口縁部横撫で、体部外面斜めの撫で、内面撫で。	器面摩滅。胴部 外面下半被熱の ため変色。
3	第142図 PL.72	土師器 台付甕	東寄り床下3cm～ 床上4cm⇔掘り方 埋戻し土 2/3	口 台	11.0 6.2	高 胴	16.6 14.9	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面右下方向のハケ目(1cmあたり5本)、胴部外面左上方向のハケ目後肩部外面に横のハケ目。脚部外面右下方向のハケ目、脚部天井及び底部内面に砂目粘土で補填。	
4	第142図 PL.72	土師器 台付甕	中央床直上～床 上3cm⇔掘り方埋 戻し土 口縁～台上部1/4	口 底	11.6 3.7	高 胴	(10.5) 13.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり5本)後横方向のハケ目、胴部中位-下位は左上方向のハケ目、脚部は右下方向のハケ目。	胴部外面被熱による変色か。

1区7号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 台	高 胴	()				
1	第143図 PL.72	土師器 器台	南寄り床下3cm～ 床上10cm⇔埋没 土 完形(裾部一部欠損)	口 台	8.7 13.0	高 胴	9.3	細砂粒/良好/橙5YR6/6	受け部外面縦のヘラ磨きか。内面不明、脚部外面縦のヘラ磨きか。穿孔は上下に並ぶ2孔が3組。	器面の摩滅顕著。 粉っぽい素地。
2	第143図	土師器 器台	埋没土 脚部片	口 台	- 11.6	高 胴	(4.0)	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にぶい黄橙 10YR6/3	脚部外面斜めのヘラ磨き。内面斜めハケ目。円孔の数は不明。	器面摩滅。
3	第143図 PL.72	土師器 台付甕	中央床上7cm 口縁～胴上半部	口 底	20.9 -	高 胴	(10.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、胴部外面左上方向のハケ目。	胴部内面摩滅。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
4	第143図 PL.72	敲石	南東壁直下床直上 完形	長 厚	28.0 7.4	幅	10.6	粗粒輝石安山岩・棒状 礫	小口部両端に敲打痕がある。全面が被熱して煤ける。	3842.4g

1区8号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 台	高 胴	()				
1	第144図 PL.72	土師器 高杯	中央東寄り床直上 脚部(裾部欠損)	口 台	- -	高 胴	(8.8)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面撫でか。内面はハケ目後撫で。穿孔は上下に並ぶ2孔が3組。	器面摩滅。
2	第144図	土師器 台付甕	中央東寄り床直上⇔埋没土 口縁片	口 底	14.1 -	高 胴	(5.3) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり7本)。内面撫で。	器面摩滅。

2区4号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	()				
1	第149図 PL.72	土師器 杯	中央床上8cm 完形	口 底	12.1 -	高 胴	6.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半ヘラ削り、内面ヘラ撫で。	口縁部内面-体部 外面の一部吸炭。
2	第149図 PL.72	土師器 杯	中央床上5cm⇔2 号畑 2/3	口 底	12.9 -	高 胴	(6.5)	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半手持ちヘラ削り、内面斜めのヘラ磨きか。	器面摩滅。底部 に黒斑。
3	第149図 PL.72	土師器 杯	住居中央床上2cm 2/3	口 底	12.8 -	高 胴	5.7	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/3	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半斜めのヘラ削り、内面ヘラ撫で。	
4	第149図 PL.72	土師器 杯	B住居東寄り床下 10cm 口縁一部欠損	口 底	13.5 -	高 胴	6.0	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、底部手持ちヘラ削り、内面撫で。	

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
5	第149図 PL.73	土師器 鉢	B住居東寄り床上 5cm 2/3	12.3 5.4	高	6.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で後放射状の粗いヘラ磨き。底部ヘラ削り。	
6	第149図	土師器 鉢	住居東寄り床直上 1/3	12.6 3.2	高	5.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/4	体部外面上半撫でか。下半斜めのヘラ削り。内面斜めのヘラ撫で。底部ヘラ削り。	
7	第149図	土師器 杯	埋没土 口縁～体部片	12.0 -	高	(5.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤10R4/6	口縁部横撫で、体部外面横の撫で、内面撫で後放射状の粗いヘラ磨き。	
8	第149図	土師器 高杯	中央西寄り床直上⇔2号畑 杯部片	9.0 -	高	(5.5)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/4	内外面撫で。	
9	第149図 PL.73	土師器 高杯	南壁際床直上 底部～脚部	- 11.2	高	(8.4)	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/3	裾部まで厚手の作り。脚柱部外面縦のヘラ撫で、内面横のヘラ削り。裾部撫で。	杯部内面にハゼ。
10	第149図 PL.73	土師器 高杯	B住居中央床直上 1/3	17.2 12.6	高	13.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/3	杯部外面上半撫でか。下半ヘラ削り、内面撫で後粗い放射状のヘラ磨き。脚柱部外面縦のヘラ磨き。裾部撫で、内面撫で。	器面摩滅。
11	第149図 PL.73	土師器 罎	B住居東寄り床直上 3/4	12.6 3.3	高 胴	14.4 13.2	細砂粒・雲母/良好/橙 5YR6/8	口縁部外面横撫でか。内面縦のヘラ磨き。胴部外面ハケ目後横のヘラ撫で、内面撫でか。	器面摩滅。
12	第149図	土師器 罎	B住居中央床直上 1/4	- 5.0	高 胴	(12.3) 14.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐5YR4/6	肩部外面斜めのヘラ磨き、胴部中位外面横のヘラ撫で、下端横のヘラ削り、肩部内面押圧、胴部内面横のヘラ撫で。胴部内面に輪積み痕。	
13	第150図 PL.73	土師器 壺	中央床直上～床上 7cm 1/2	12.6 7.0	高 胴	26.2 23.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部-頸部外面撫で、胴部外面縦のヘラ撫で、内面撫で。肩部内面に輪積み痕。胴部内面下位に接合痕。胴部上位に外側からの焼成後穿孔。	器面摩滅。
14-1	第150図	土師器 甕	2号畑 口縁～胴上半部片	23.6 -	高 頸	(19.6) 17.9	細砂粒/良好/橙5YR6/8	口縁部下位に段を有し、横撫で、肩部-胴部外面右下方向のハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。	器面摩滅。胴部上位外面に吸炭部分。14-2と同一個体。
14-2	第150図	土師器 甕	住居北寄り床直上 胴下半部～底部片	- 8.4	高 胴	(24.3) 34.2	細砂粒/良好/橙5YR6/8	外底部中央やや凹み。胴部外面下半左上方向のハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。	器面摩滅。胴部外面下半の一部剥離。中位に黒斑。周辺摩滅。14-1と同一個体。
15	第150図	土師器 手捏ね	B住居南壁下床直上 脚部～底部	- 3.2	高	(2.6)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	脚部外面縦の撫で、内面撫で。	
No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材 質 ・ 石 材 形 態 ・ 素 材	製 作 状 況 ・ 使 用 状 況	摘 要
16	第150図 PL.73	石製模造品	掘り方内床下17cm 完形	長 厚	2.5 0.3	幅 1.1	滑石・剣形石製品	背面側中央に鑄があり、比較的丁寧に造作。上端側に2mmの孔を片側穿孔する。	1.0g

2区6号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
1	第153図 PL.73	土師器 杯	カマド火床直上 3/4	14.8 -	高	5.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部整形不明。	器面の摩滅顕著。
2	第153図	土師器 杯	北寄り床直上～ 床上5cm 1/3	14.8 -	高	(4.8)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐 5YR4/4	口縁部横撫で、体部内外面撫でか。	器面摩滅。
3	第153図 PL.73	土師器 鉢	カマド火床ほぼ 直上 3/4	13.6 4.8	高	4.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部上半撫で、下半斜めのヘラ撫で、内面撫で。	内外面摩滅。
4	第153図 PL.73	土師器 高杯	カマド火床直上 脚部1/3欠損	17.7 14.0	高	14.0	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	杯部外面縦の粗いヘラ磨き、内面斜め放射状の粗いヘラ磨きか。脚部内外面撫でか。	杯部内面摩滅。
5	第153図	土師器 高杯	カマド火床直上 杯部片	18.7 -	高	(6.1)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐5YR4/6	杯部外面撫で後斜めの粗いヘラ磨き、内面横の撫で後放射状のヘラ磨き。杯部下端ヘラ削り。	
6	第153図	土師器 罎	北東壁下床直上 口縁片	13.0 -	高 胴	(6.6) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐 5YR4/4	口縁部上端横撫で、内面下半ヘラ撫で。	
7	第153図 PL.73	土師器 甕	カマド火床直上 ～8cm 4/5	17.2 7.5	高 胴	24.6 24.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面上半撫でか。下半斜めのヘラ削り。頸部内面縦の撫で。	器面摩滅。

2区8号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
1	第157図	土師器 杯	南西壁際床上9 ～11cm 3/4	- -	高	(4.6)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部内外面撫でか。	器面の摩滅顕著。
2	第157図 PL.73	土師器 杯	住居南隅床直上 2/3	14.3 4.9	高	6.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で後粗いヘラ磨きか。	体部外面に黒斑。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
				口 底	計	高				
3	第157図	土師器 鉢	住居南東寄り床 上5cm 口縁～底部1/4	口 底	13.8 -	高 -	(3.6)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部内外面横、体部外面斜め、内面放射状 の丁寧なヘラ磨き。	
4	第157図 PL. 73	土師器 鉢	住居中央床下3cm 完形(口縁一部欠)	口 底	14.4 4.0	高 -	4.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	内外面撫で、底部ヘラ削り。	器面摩滅。
5	第157図 PL. 73	土師器 鉢	住居南東寄り床 直上～床上5cm 1/2	口 底	13.6 -	高 -	6.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐10YR7/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端は斜のヘ ラ削りか。内面撫で。	器面摩滅。
6	第157図	土師器 鉢	南東壁下床下6 ～床上7cm 口縁～体部1/4	口 底	15.0 -	高 胴	(7.0) 15.8	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部横撫で、体部外面横の細かいヘラ磨き、 内面撫で。	器面摩滅。
7	第157図 PL. 73	土師器 鉢	南西床上に散乱 の3～11cm 1/3	口 底	11.4 4.2	高 胴	6.0 10.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半斜め のヘラ削り、内面撫で後粗いヘラ磨き。	
8	第157図 PL. 74	土師器 高杯	杯部3/4・脚部一 部欠損	口 台	18.0 15.8	高 -	16.3	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	杯部外面撫で後縦の粗いヘラ磨き、内面撫で 後粗い放射状ヘラ磨き。脚部外面撫で後粗い 縦のヘラ磨き、内面撫で。脚柱部内面に指の 押さえ痕。	外面摩滅。
9	第157図	土師器 高杯	住居南寄り床下6 cm～床上5cm 杯部1/2・端部欠 損	口 台	19.8 -	高 -	(15.6)	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	杯部内外面縦のヘラ磨き、脚部外面縦のヘラ 磨き、柱状部内面横のヘラ削り。	
10	第157図 PL. 74	土師器 高杯	住居中央床上8cm 3/4	口 台	17.0 13.4	高 -	14.2	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	杯部外面上半撫で、下半ヘラ削り、内面ハケ 目後粗い撫で。脚柱部外面縦の幅太ヘラ磨き、 内面絞り目残る。裾部撫で、内面撫で。	
11	第157図 PL. 74	土師器 高杯	北調査区壁下床 直上～床上6cm 2/3	口 台	17.6 12.0	高 -	14.2	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/明赤褐 5YR5/6	杯部外面上半撫で、下半撫で、内面横のヘラ 撫で。脚柱部内外面縦のヘラ磨き。裾部撫で で端部は上方へ弱く反る。	器面摩滅。
12	第157図 PL. 74	土師器 高杯	南東壁下床上4cm 杯部3/4、脚裾部 欠損	口 台	15.9 -	高 -	(12.3)	細砂粒・雲母/良好/橙 5YR6/6 脚柱部内面黒 色	杯部外面撫で、下端横のヘラ撫で、内面撫で で黒色処理。脚部外面撫で後縦の粗いヘラ磨 き、内面に接合痕。	器面摩滅。
13	第157図	土師器 高杯	住居北西寄り床 直上～床上5cm 杯部のみ	口 台	16.9 -	高 -	(6.0)	細砂粒・軽石/良好/橙 5YR6/6	内外面撫でか。	器面摩滅。
14	第157図	土師器 高杯	住居北西寄り床 上4～8cm 杯部1/3	口 台	17.8 -	高 -	(6.7)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/橙5YR6/6	杯部外面縦の粗いハケ目後横撫で、内面撫で。 脚との接合部で剥離しソケット状の突起残 る。	
15	第157図 PL. 74	土師器 高杯	南東壁下床上4cm 底部～脚部	口 台	- 14.3	高 -	(12.3)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/橙5YR6/6	杯部内外面、脚部外面撫でか。ヘラ磨きの痕 跡は認められない。脚部内面撫で。	器面摩滅。
16	第157図 PL. 74	土師器 高杯	住居北西寄り床 上3cm 脚部	口 台	- 13.1	高 -	(9.6)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面縦のヘラ磨き、脚部内面横のハケ目 後撫で、脚柱部内面粗い撫で。脚柱部内面に 輪積み痕。	
17	第158図	土師器 埴	住居西寄り床直 上 口縁～頸部1/2	口 底	12.0 -	高 頸	(6.0) 7.5	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/橙5YR6/6	口縁部-頸部内外面撫で後縦のヘラ磨き。	
18	第158図 PL. 74	土師器 埴	南西壁際床上4cm 3/4	口 底	12.5 3.1	高 胴	15.7 14.4	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/橙5YR7/6	口縁部外面縦の細かいハケ目後撫でか。内面 縦のヘラ磨き。体部外面上半縦のヘラ磨き、 下半横のヘラ撫で、内面撫でか。頸部内面に 接合痕。	
19	第158図	土師器 壺	住居北西寄り床 直上 口縁片	口 底	19.9 -	高 頸	(7.4) 14.4	細砂粒・粗砂粒・軽石 /良好/にぶい赤褐 5YR5/3	内外面撫で。	内面剥離。 器面摩滅。
20	第158図 PL. 74	土師器 壺	北西に散乱床下3 cm～床上9cm 埋 土 1/3	口 底	20.6 7.4	高 胴	25.9 23.6	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 黄橙10YR6/4	口縁部中位に段を有し、横撫で。胴部外面撫 で、下端は斜めのヘラ削り、内面撫で。	器面摩滅。胴部 外面に黒斑。
21	第158図 PL. 74	土師器 小型甕	住居東寄り 2/3	口 底	11.4 5.9	高 胴	10.9 13.2	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR7/6	口縁部横撫で、胴部外面縦のヘラ撫で、下端 横のヘラ削り、内面撫で。底部厚手で丸底気 味。	胴部外面下に 黒斑。器面摩滅。
22	第158図 PL. 74	土師器 手捏ね	住居中央床上3cm 口縁一部欠損	口 底	6.1 4.3	高 -	4.4	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄橙10YR7/3	外面撫で、内面押圧に近い斜めの強い指先の 撫で。	底部に黒斑。
No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要	
23	第158図 PL. 74	石製模造 品	東側埋没土 完形	長 厚	2.7 0.2	幅	(2.7)	滑石・有孔円盤	表裏面とも粗い線条痕が残る。側縁は粗い線 条痕を伴う面取り整形。径1.5mmの孔を片側 穿孔する。	3.4g

2区10号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
				口 底	計	高				
1	第160図 PL. 74	土師器 台付甕	住居南東寄り床 上12cm 口縁一部欠損	口 底	12.8 7.1	高 頸 胴	22.3 11.7 19.6	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向の3段ほどのハケ目(1cmあた り5本)後肩部外面に粗く横のハケ目、内面撫 で。脚部外面は右下方向のハケ目、内面撫で で、端部折り返し。脚部天井及び底部内面砂 目粘土で充填。	器面摩滅。胴部 内面下に接合 痕。

2区11号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第162図 PL. 75	土師器 器台	貯蔵穴南東脇床下7cm 完形	口 台	9.3 11.2	高	8.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR7/6	受け部外面斜めのハケ目、内面撫でか。脚部 外面縦のへら磨き、内面撫で。	器面摩滅。
2	第162図 PL. 75	土師器 器台	南東隅壁際床下8 cm 完形	口 台	8.6 11.6	高	10.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	受け部外面斜めのハケ目後撫で、内面横の撫 で。脚部外面縦のへら磨き、内面横の粗いハ ケ目後撫で。	受け部内面にハ ゼ。
3	第162図	土師器 壺	埋没土 口縁～頸部片	口 底	14.6 -	高 頸	(4.3) 9.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部有段で、2本単位の棒状の貼付文を3カ 所貼付か。	内外面摩滅。
4	第162図	土師器 甕	貯蔵穴内床下6 ～11cm南東壁際 床下3cm 口縁～胴上部片	口 底	12.1 -	高 頸	(7.4) 11.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目(1 cmあたり6本)、内面撫で。	胴部外面被熱に よるものか摩滅 し赤変。
5	第162図	土師器 甕	貯蔵穴内床下6 ～11cm 口縁～肩部片	口 底	16.7 -	高 頸	(6.5) 13.8	細砂粒・角閃石/良好/ 暗赤灰10R3/1	口縁部外面ハケ目後横撫で、胴部外面斜め、 内面横のハケ目(1cmあたり5本)。	胴部外面に剥離。

2区12号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第163図	土師器 壺	西寄り床下8cm 口縁～頸部片	口 底	15.4 -	高 胴	(4.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 赤10R5/6	内外面撫でか。	内外面のハゼ顕 著。
2	第163図	土師器 台付甕	埋没土 口縁～肩部片	口 底	11.6 -	高 頸	(3.5) 11.2	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/2	口縁部横撫で、胴部外面上位縦のハケ目(1cm あたり7本)、内面撫で。口縁部直立気味。	器面摩滅。
3	第163図	土師器 手捏ね	埋没土 1/3	口 底	3.0 -	高	3.5	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/3	器厚薄めでほぼ一様。内外面細かいハケ目後 撫で。	底部に黒斑。

2区13号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第164図	土師器 小型甕	埋没土 1/2	口 底	- 5.4	高 胴	(8.6) 8.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	胴部外面上半右下方、下半左上方のハケ 目(1cmあたり6本)、内面撫で。	底部中央わずかに 凹む。器面摩 滅。

2区14号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第165図 PL. 75	土師器 有孔鉢	中央北寄り床下 11cm 3/5	口 底	16.6 5.4	高 孔	9.5 1.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	体部外面斜めのハケ目後撫でか。内面横のハ ケ目後斜めのへら撫で。	体部外面下端に 黒斑。体部外面 ～ 底部摩滅顕著。
2	第165図 PL. 75	土師器 台付甕	中央西寄り床下 13～18cm 3/4	口 台	15.1 8.0	高 頸 胴	27.0 13.4 22.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下、胴部外 面左上方向の3-4段のハケ目(1cmあたり5本) 後肩部外面に横のハケ目。肩部内面縦の押圧。 脚部外面右下方向のハケ目。端部折り返し。 脚部天井及び底部内面砂目粘土で補填。	胴部外面下半被 熱のため赤変し、 一部剥離。
3	第165図 PL. 75	土師器 台付甕	中央西寄り床下 13～19cm 4/5	口 台	10.7 7.4	高 胴	15.6 12.7	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR6/2	口縁部横撫で、内面にハケ目の痕跡を残す。 胴部外面上半斜めのハケ目(1cmあたり5本)、 下半撫でか。脚部外面下半斜めのハケ目。	胴部外面下半-脚 部被熱による粗 れ。胴部外面剥 離。
4	第166図 PL. 75	土師器 台付甕	中央東寄り床下 17cm⇔床下6cm 完形	口 台	19.2 9.9	高 胴	32.4 27.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、内面は横のハケ目後横撫で。 胴部外面右下方向のハケ目(1cmあたり5本)、 胴部内面上半撫で、下半斜めのハケ目。脚部 外面斜め、内面横のハケ目。	胴部下半-脚部外 面被熱。
5	第166図 PL. 75	土師器 甕	中央東寄り床直 上～床上14cm 3/4	口 底	15.6 -	高 胴	(23.4) 21.7	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部外面斜めのハケ目後粗い撫で、内面撫 でか。頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあた り6本)、内面撫で。胴部内面下に接合痕。	胴部外面下半被 熱により赤変。
6	第166図 PL. 75	土師器 小型甕	中央北寄り床下 12～17cm 口縁部一部欠損	口 底	11.2 4.9	高 胴	12.1 11.8	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部外面斜めのハケ目後粗い撫で、内面整 形不明。胴部外面縦-斜めの細かなハケ目、 内面ハケ目後撫で。	器面の摩滅顕著。
7	第166図 PL. 75	土師器 甕	中央西寄り・床 上12～23cm 4/5	口 底	18.0 5.0	高 胴	20.7 23.1	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部撫で、頸部斜めのハケ目、胴部上半斜 めのへら撫で、下半ハケ目後横-斜めの粗い へら磨き、内面上半斜め、下半横のハケ目(1 cmあたり6本)。	口縁部内面の摩 滅顕著。胴部外 面中に黒斑。
8	第166図 PL. 76	土師器 甕	中央西寄り床下 13～20cm 4/5	口 底	14.8 4.7	高 胴	17.6 18.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部外面-胴部上半斜めのハケ目(1cmあた り4本)、下半横の粗いハケ目。口縁部内面- 胴部内面上半斜めのハケ目。胴部内面下に 接合痕。	器面摩滅顕著。
9	第166図	土師器 甕	中央北寄り床下 17～12cm 口縁～胴部1/3	口 底	16.0 -	高 胴	(17.5) 24.3	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄橙10YR7/4	口縁部外面撫で、内面横のハケ目、胴部外面 斜めのハケ目、内面横のハケ目後斜めの撫で。	胴部外面下半被 熱により摩滅か。
10	第166図	土師器 甕	中央寄り床上15cm 口縁～胴部片	口 底	22.8 -	高 胴	(13.1) 26.3	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄橙10YR6/3	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目 後撫で、内面撫で。胴部内面に輪積み痕。	

2区16号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第169図 PL. 76	土師器 高杯	東壁際床上8cm 4/5	口 台	22.7 11.1	高	14.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	杯部内外面撫で後縦のへら磨き。脚部外面縦 のへら磨きで、中に横のハケ目。脚部の穿 孔は上位1孔1対と下2孔1対の6孔。	杯部内面のハゼ 顕著。

遺物観察表

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 台	高	(口 径)			
2	第169図	土師器 高杯	住居南寄り床直上 脚部	口 台	-	高 (6.7)	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	脚部外面縦のへら磨き、内面撫で。脚部の穿孔は外側からで3孔。	
3	第169図	土師器 鉢	住居東寄り～東 壁際床上5～19cm 1/4	口 底	13.8 4.3	高 (5.75)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	体部外面横のへら磨き、内面撫で後粗い放射状へら磨き。	
4	第169図	土師器 有孔鉢	埋没土 底部片	口 底	-	高 洞 (2.5)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	体部外面縦の粗いハケ目。	器面摩滅。
5	第169図 PL. 76	土師器 台付甕	東に散乱床直上 ～床上8cm 口縁～胴下部	口 底	16.6 -	高 頸 洞 (21.9) 14.9 22.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐5YR4/6	口縁部内外面横のハケ目後撫で。口唇部に刻み。胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)。頸部内面横のハケ目。胴部内面強いへら撫で。脚部欠損。胴部内面下位に接合痕。	
6	第169図	土師器 台付甕	住居北寄り～南 壁際床直上 胴部下半～脚部	口 台	-	高 洞 (7.3)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	胴部-脚部外面縦のハケ目(1cmあたり7本)、脚部内面細かな横のハケ目。	
7	第169図	土師器 台付甕	東壁下床上3cm 脚部2/3	口 台	-	高 洞 (4.1)	細砂粒/良好/にぶい黄 褐10YR5/3	脚部外面斜めのハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。	
8	第169図	土師器 甕	埋没土 口縁～頸部1/2	口 底	14.9 -	高 頸 洞 (5.1) 9.5	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/橙5YR7/6	口縁部外面横、頸部外面斜めの細かなハケ目。内面撫で。	器面摩滅。
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
9	第170図 PL. 76	石製模造 品	北東隅床上8cm 完形	長 厚	3.9 0.4	幅 (1.5)	滑石・剣形石製品	全面に粗い線条痕が残る。剣先は側縁を面取り整形して作出。上端側に径2mmの孔を両側穿孔する。	4.7g
10	第170図 PL. 76	砥石	中央東寄り床直上 ほぼ完形	長 厚	8.2 1.5	幅 (2.7)	頁岩・切り砥石	四面使用。背面側上端の孔が破損したのち、側縁から孔(径4mm)を両側穿孔し、下げ砥石として使用。	47.8g

2区17号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 台	高	(口 径)			
1	第171図	土師器 器台	中央～西に散乱 の床上3～20cm ⇄河道 脚部2/3	口 台	-	高 (7.6)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	脚部外面縦のへら磨きか。内面撫で。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
2	第171図	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 底	-	高 -	細砂粒・軽石/良好/黒 褐10YR3/2	口縁部外面横-縦のハケ目、内面横のハケ目。口唇部圧痕。	

2区18号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 台	高	(口 径)			
1	第173図 PL. 76	土師器 高杯	住居南隅壁際床 上9cm 2/3	口 台	17.0 13.1	高 (15.3)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	杯部外面ハケ目後撫でか。内面撫で。脚部外面縦のへら磨き、脚柱部内面横の撫で。	
2	第173図	土師器 埴	北西壁下床直上 口縁片	口 底	10.8 -	高 (5.1)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/3	口縁部は縦のハケ目後撫でか。内面撫で、頸部内面狭くへら削り。	器面摩滅。
3	第173図	土師器 器台	北東壁下床下3cm 脚部片	口 台	-	高 (5.7)	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	脚部外面縦のへら磨き、内面撫で。	受け部は接合部から剥離か。
4	第173図 PL. 76	土師器 台付鉢か	住居中央床下10 cm 口縁～底部3/4	口 底	9.2 -	高 洞 (8.5) 10.6	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	体部外面撫で後縦の粗いへら磨き、内面へら撫で。脚部欠損。	体部外面に黒斑。
5	第173図	土師器 台付甕	住居南東寄り床 上17cm 口縁～胴上部片	口 底	17.8 -	高 頸 洞 (6.6) 16.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/黒褐10YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、内面縦の撫で。	
6	第173図	土師器 台付甕	北西壁下床直上 台部片	口 台	-	高 洞 (6.0)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	脚部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面撫で。	器面摩滅。
7	第173図	土師器 台付甕	北東に散乱床上6 ～10cm 台部片	口 台	-	高 洞 (6.0)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面縦のハケ目(1cmあたり5本)ハケ目(1cmあたり5本)、内面横-斜めのハケ目(1cmあたり7本)。	
8	第173図 PL. 76	土師器 甕	住居南東寄り床 上4～11cm 4/5	口 底	15.3 5.3	高 洞 (14.3) 17.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部折り返し。肩部外面にRL横施文。胴部中位横、下位斜めのへら磨き、内面撫で。	器面摩滅。
9	第173図 PL. 76	土師器 甕	住居南隅壁際床 上8cm 底部	口 底	-	高 洞 (4.1)	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 良好/橙5YR6/6	胴部外面斜めのハケ目、内面撫でか。胴部内面に輪積み痕。	器面摩滅。

2区19号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 台	高	(口 径)			
1	第175図 PL. 76	土師器 埴	西壁下床直上～ 床上6cm 完形	口 底	11.4 3.9	高 洞 (13.4) 10.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部-頸部外面縦のへら磨き、内面撫でか。肩部外面縦、胴部中位横、下半縦のへら磨き。内面撫で、下端細かなハケ目。	
2	第175図 PL. 76	土師器 器台	西壁下床上13cm 完形	口 台	7.0 9.1	高 (8.7)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	受け部上端横、下半外面縦、内面斜め放射状のへら磨き。脚部外面縦、内面横のへら磨き。脚部の穿孔は3孔。	脚端部の摩滅顕著。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 頸	(口 底)			
3	第175図 PL. 76	土師器 有孔鉢	北壁下床下10cm 3/4	17.6 4.5	高 孔	10.1 1.7	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部折り返しで、縦のハケ目後半横撫で。 体部外面縦-斜めのハケ目後粗い撫で、内面 斜めのハケ目か。	内面に灰白色の 付着物。
4	第175図 PL. 77	土師器 台付甕	住居南寄り床直 上 完形	15.3 9.6	高 頸 胴	25.8 12.9 21.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向の2-3段のハケ目(1cmあたり7 本)、内面撫で。脚部外面右下方向のハケ目。 端部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘 土補填。	脚部外面下半帯 状に変色。
5	第175図 PL. 77	土師器 台付甕	西壁下床直上 完形	14.6 9.7	高 頸 胴	28.5 12.8 22.5	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向の2段のハケ目(1cmあたり6 本)、内面撫で。脚部外面右下方向のハケ目。 端部折り返しで、脚部天井及び底部内面砂目 粘土補填。	肩部外面帯状に 剥離。脚部外面 下端帯状に変色。
6	第175図 PL. 77	土師器 台付甕	西壁下床直上 脚部欠損	14.8 -	高 胴	(21.3) 21.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向の1-2段のハケ目、内面撫で。 脚部天井及び底部内面砂目粘土補填。	脚部外面下半被 熱により変色。
7	第176図 PL. 77	土師器 台付甕	住居中央床下4cm 口縁~胴下部	14.1 -	高 胴	(14.3) 20.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、肩部外面左下方向、胴部外面 左上方向のハケ目(1cmあたり6本)、内面撫で。	器面摩滅。胴部外 面中位の剥離頭 著。9と同一個体か。
8- 1	第175図	土師器 台付甕	西壁下床直上 口縁~胴上部片	15.8 -	高 胴	(10.8) 23.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5-6本)、 胴部内面縦の強い撫で。	器面摩滅。8-2と 同一個体か。
8- 2	第175図	土師器 台付甕	西壁下床直上 胴部~台部片	- -	高 胴	(16.8) -	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)、 内面撫で。脚部外面右下方向のハケ目。脚部 天井及び底部内面は砂目粘土で補填。胴部内 面下位に接合痕。	器面摩滅。8-1と 同一個体か。
9	第176図 PL. 77	土師器 台付甕	住居中央床下4cm 胴部~台部	- 8.5	高 胴	(16.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	胴部外面斜め、脚部外面右下方向のハケ目(1 cmあたり6本)。脚端部折り返し。天井部及び 底部内面砂目粘土補填。	脚部外面被熱に よる剥離。胴部 内面下半変色。7 と同一個体か。

2区20号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 頸	(口 底)			
1	第178図	土師器 器台	埋没土 脚部1/2	- 12.6	高	(5.6)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	脚部外面縦のへら磨き、内面斜めのへら削り。 穿孔は上下2段の3孔。	
2	第178図 PL. 77	土師器 台付鉢か	住居中央床上21 cm 4/5	11.2 6.6	高 胴	12.9 10.8	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/8	口縁部-体部外面へら磨きか。内面整形不明。 脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
3	第178図 PL. 78	土師器 台付甕	南壁下床上17cm 1/2	14.3 10.1	高 頸 胴	28.4 12.4 22.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR7/6	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)。胴 部内面撫で。脚部外面左下方向のハケ目。端 部折り返し。脚部天井及び胴部内面砂目粘 土補填。胴部内面下位に接合痕。	器面摩滅。
4	第178図 PL. 78	土師器 台付甕	南壁際床上17~ 21cm 1/2	18.6 10.0	高 頸 胴	29.7 16.5 13.2	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外 面左上方向、脚部外面右下方向のハケ目(1cmあ たり7本)、胴部内面撫で。脚端部折り返しで、天 井部に砂目粘土補填、底部内面の補填は不明瞭。	脚部外面下端の 一部吸炭。
5	第178図	土師器 甕	東壁下床上14cm 口縁~胴上部片	15.8 -	高 頸	(3.9) 14.7	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR4/2	口縁部外面斜め、内面横のハケ目(1cmあたり 5本)、胴部内面上位斜めのハケ目。	

2区21号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 頸	(口 底)			
1	第180図 PL. 78	土師器 埴	住居東寄り床直 上 4/5	6.8 3.0	高 胴	16.9 14.4	細砂粒・軽石/良好/橙 5YR6/6	口縁部-胴部外面上半縦のへら磨き。胴部外 面下半横のへら削り、内面撫で。胴部内面に 輪積み痕。	
2	第180図	土師器 壺	埋没土 口縁~頸部	- -	高 頸	(6.0) 9.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	頸部に突帯を巡らし、上下にハケ目、肩部外 面は撫でか。内面粗い撫で。頸部内面に輪積 み痕。	器面摩滅。
3	第180図	土師器 壺	東隅壁下床上10 cm口縁~胴上部	11.4 -	高 胴	(13.5) 10.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 浅黄橙10YR8/3	口縁部-胴部外面縦-斜めの細かいへら撫で、 内面撫で。頸部-胴部内面に輪積み痕頭著。	
4	第180図	土師器 壺	埋没土 底部~胴下半部	- 7.6	高 胴	(9.6) 20.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	胴部外面縦-斜めのへら撫で、内面斜めのハ ケ目(1cmあたり3-4本)。内面に接合痕。	底部中央凹み、 周辺摩滅。胴部 内面摩滅。
5	第180図 PL. 78	土師器 壺	南西壁際床直上 2/3	16.4 6.0	高 胴	21.4 20.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部-頸部内外面斜めのハケ目後撫で。胴 部外面斜めのハケ目後粗い撫で、中位は横 のへら削り。頸部内面指の押圧。頸部内面に 接合痕。肩部内面に輪積み痕。	器面摩滅。

2区22号住居

No.	挿図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 頸	(口 底)			
1	第181図 PL. 78	土師器 高杯	住居北西寄り床 上10cm 1/4	15.0 10.4	高	10.4	細砂粒/良好/橙5YR6/6	杯部外面縦、内面横のへら磨き。脚部外面縦 のへら磨き、内面横のハケ目後粗い撫で。	器面摩滅。
2	第181図	土師器 鉢か	住居南西寄り床 直上 口縁~体部片	12.9 -	高 胴	(7.4) 13.1	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	外面縦のへら磨きか。口縁部-体部内面横の へら磨き。	外面摩滅。

遺物観察表

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	第181図	土師器 台付甕	住居南西寄り床上6cm 口縁～胴上部片	口 底	12.5 -	高 頸	(5.1) 11.0	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、内面縦の撫で。
4	第181図	土師器 台付甕	住居中央床直上 口縁～肩部片	口 底	15.8 -	高 頸	(5.0) 13.6	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。
5	第181図	土師器 台付甕	北東壁際床上5cm 口縁～胴上部片	口 底	13.8 -	高 胴	(7.8) 18.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/黒褐10YR3/1	口縁部横撫で、頸部-肩部まで左下方向のハケ目(1cmあたり6本)後横ハケ目。肩部-胴部左上方向のハケ目、頸部内面に横のハケ目、胴部内面撫で。
6	第181図	土師器 壺	住居北寄り床上8cm 口縁～頸部片	口 底	14.7 -	高 胴	(5.6) -	細砂粒・軽石/良好/ ぶい黄褐10YR5/3	口縁部横撫で、頸部突帯を境に上位は右下方向、下位は左上方向の細かなハケ目(1cmあたり8本)、内面撫で。

2区23号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第182図	土師器 台付甕	埋没土 台部片	口 台	- 9.6	高 -	(4.3)	細砂粒・軽石/良好/ ぶい赤褐5YR5/4	内外面撫で、脚端部平坦。
2	第182図	弥生土器 甕	掘り方 胴部片	口 底	- -	高 -	-	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰5Y6/1	胴部に櫛描き羽状文。内面横の粗い撫で。

2区24号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第184図	土師器 器台	南西壁下床上4cm 脚部片	口 台	- -	高 -	(3.6)	細砂粒/良好/ ぶい橙5YR6/4	受け部内面撫で、脚部外面撫で、内面斜めのハケ目。脚部の穿孔は3孔。	
2	第184図	土師器 壺	掘り方 底部片	口 底	- 7.0	高 -	-	細砂粒・角閃石/良好/ 黒褐5YR3/1	外面へラ磨きか。	内外面赤彩。

2区25号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第185図 PL. 78	土師器 杯	住居外 完形	口 底	10.1 -	高 -	3.9	細砂粒/良好/橙5YR7/6	口縁部横撫で、底部手持ちへラ削り。内面撫で。	器面摩滅。粉っぽい素地。体部の歪み顕著。
2	第185図	土師器 高杯	埋没土 脚部	口 台	- 8.8	高 -	(4.4)	細砂粒/良好/ ぶい黄橙10YR6/3	脚部外面縦のへラ磨き。内面横のハケ目後撫で。	
3	第185図	土師器 台付甕	埋没土 口縁～胴上部片	口 底	13.0 -	高 -	(3.3)	細砂粒・粗砂粒/良好/ ぶい黄橙10YR7/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり5本)、肩部内面縦の撫で。	
4	第185図	土師器 壺	住居北西寄り床上27～37cm 頸部～体部	口 底	- -	高 胴	(27.3) 30.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/ ぶい橙5YR6/3	胴部外面斜めのへラ磨き、内面撫で。胴部内面に輪積み痕、胴部外面中位に黒斑。	
5	第185図 PL. 78	土師器 手捏ね	隣接河道内 2/3	口 底	6.1 3.4	高 -	5.1	細砂粒・角閃石/良好/ 褐灰10YR4/1	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面横のハケ目。	体部外面-底部に黒斑。

2区26号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第186図 PL. 78	土師器 高杯	北東壁下床直上 ⇨掘方床下26cm 底部～脚部片	口 台	- 12.2	高 -	(10.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	底部にソケット状接合痕。脚柱部外面縦のへラ磨き、脚部内外面撫で。脚柱部内面に輪積み痕。	器面摩滅。
2	第186図 PL. 78	土師器 高杯	北東に散乱床下3cm～床直上 4/5	口 台	17.5 13.7	高 -	15.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/赤褐5YR4/6	杯部外面縦の幅広のへラ磨き、内面撫で後粗い放射状へラ磨き。脚部外面縦のへラ磨き、内面撫で。	脚端部外面の一部吸灰。
3	第186図	土師器 甕	掘り方 口縁～胴上部片	口 底	11.8 -	高 頸	(5.0) 10.8	細砂粒・角閃石/良好/ 暗褐10YR3/3	口縁部横撫で、胴部外面撫で、内面斜めの強い撫で。	
4	第186図 PL. 78	土師器 甕	北東壁下床直上 口縁～胴上部片	口 底	16.2 -	高 頸	(9.7) 13.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面右下方向のハケ目(1cmあたり7本)、内面指先の押圧。胴部外面輪積み痕顕著。	

2区27号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第187図	土師器 甕	住居中央床上3cm 口縁～頸部片	口 底	14.8 -	高 頸	(3.6) 13.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/黒褐5YR3/1	口縁部横撫で、胴部外面斜のハケ目。	

2区28号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第188図 PL. 79	土師器 高杯	南東隅壁下床上8cm 口縁一部欠損	口 台	19.4 14.4	高 -	14.1	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	器面の摩滅が顕著のため整形不明。脚部の穿孔は上下2段に3組。	粉っぽい素地。
2	第188図 PL. 79	土師器 埴	東壁下床下13cm 口縁1/2欠損	口 底	12.0 5.2	高 胴	19.7 15.9	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部外面縦のへラ撫でか。体部外面撫で。胴部内面中位に輪積み痕。	器面摩滅。
3	第188図 PL. 79	土師器 埴	南東隅壁下床上7cm 2/3	口 底	9.7 3.3	高 頸	7.5 7.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部-体部内外面へラ磨きか。	器面摩滅。

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
4	第188図 PL. 79	土師器 台付甕	南東隅壁下床土上7 ~11cm 口縁・台部一部 欠損	口 台	14.2 8.6	高 胴	23.8 17.6	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/暗褐10YR3/3	口縁部内外面雑な撫で。胴部外面斜めのへら 削り、内面斜めの撫で。脚部内外面撫で。歪 みが大さい。	胴部外面下端-脚 部被熱。脚部外 面剥離。
5	第188図 PL. 79	土師器 台付甕	口縁~胴上部 住居東寄り床上9 cm	口 底	15.8 -	高 胴	(12.4) 26.4	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR5/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)。肩 部内面縦の強い撫で。	
6	第188図	土師器 台付甕	東壁下床土上7cm 台部片	口 台	- 8.8	高 胴	(6.7) -	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR7/2	脚端部内面に折り返し。胴部外面-脚部外面 ハケ目。脚部天井及び胴部内面中央に砂目粘 土を補填。底部厚手。	

2区29号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第189図	土師器 鉢	住居中央?床土上22 ~25cm 口縁~底部片	口 底	27.8 -	高	(9.8)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/8	外面縦のハケ目後撫で、内面撫で。	器面摩滅。 粉っぽい素地。
2	第189図	土師器 甕	南東壁下床直上 口縁~胴上部片	口 底	16.4 -	高 頸	(5.9) 13.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部左上方向のハケ目後粗い横撫で、頸部 外面撫で、肩部外面左上方向のハケ目(1cmあ たり7本)。内面斜めの撫で。	
3	第189図 PL. 79	土師器 壺	住居中央床上17 cm 3/5	口 底	14.6 5.9	高 胴	20.9 19.4	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/4	口縁部-頸部内外面撫でか。底部外面に細か なハケ目で一条の鋸歯状施文。胴部外面斜め のへら磨き、内面撫で。胴部内面下位に接合 痕。	器面摩滅。

2区30号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第191図 PL. 79	土師器 高杯	東壁際床上24cm 口縁・脚部一部 欠損	口 台	19.6 13.0	高	14.6	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/橙5YR6/6	杯部内外綿斜めのへら磨き。脚部外面縦のへ ら磨き、内面横の撫で。脚部穿孔は上下2段 に3組。	杯部内外綿と脚 部外面の一部吸 炭。
2	第191図 PL. 79	土師器 高杯	東壁際床上23cm 杯部	口 台	23.1 -	高	(7.2)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	杯部外面撫でか。内面撫で後斜め放射状へら 磨き。	器面摩滅。杯部 内面中央剥離。 脚部は貼り付け 部から剥離。
3	第191図 PL. 79	土師器 高杯	住居東寄り床直上 2/3	口 台	11.5 8.6	高	6.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	杯部内外面横のへら磨き。脚部外面縦-斜め のへら磨き、内面撫でか。	脚部の摩滅顕著。
4	第191図 PL. 79	土師器 埴	東壁下床土上17cm 口縁一部欠損	口 底	16.8 2.9	高	8.8	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/浅黄橙10YR8/3	口縁部-頸部外面ハケ目後斜めのへら磨き、 内面縦のへら磨き、体部外面横のへら磨き、 内面不明。底部外面わずかに平坦部分あり。	内面摩滅。
5	第191図 PL. 79	土師器 器台	東壁際床上27cm 4/5	口 台	9.4 12.1	高	9.5	細砂粒・雲母/良好/明 赤褐5YR5/8	受け部-脚部外面粗いハケ目後へら磨きか。 受け部内面整形不明。脚部内面斜めのハケ目。 脚部の穿孔は3孔。	受け部内面吸炭。 器面摩滅。
6	第191図	土師器 器台	掘り方 杯部~脚部片	口 台	8.2 -	高	(4.1)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	受け部外面縦の細かなハケ目後横の粗いへら 磨き、内面横のへら磨き。脚部外面ハケ目後 縦のへら磨き、内面撫で。	受け部内面ハゼ。
7	第191図	土師器 器台	埋没土 脚部1/3	口 台	- -	高	(4.3)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/8	器面摩滅のため整形不明。脚部の穿孔は4孔。	
8	第191図 PL. 79	土師器 器台	東壁際床上28cm ⇨4・37・47住他 杯部片	口 台	19.4 -	高	(5.6)	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/8	受け部下端に突帯を巡らす。内面及び外面上 半へら磨き、外面下半縦の撫で。	脚部は貼り付け 部から剥離。
9	第191図	土師器 壺	埋没土⇨65号土 坑 1/3	口 底	- 7.8	高 胴	(18.0) 24.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	胴部外面上半斜めのハケ目後縦の粗い撫で、 下半斜めのへら撫で、内面上半斜めのへら撫 で、下半横のハケ目(1cmあたり9本)。	胴部外面下半-底 部に黒斑。
10	第191図	土師器 壺か	東壁際床上21cm 胴部下半~底部 片	口 底	- 15.2	高 胴	(8.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR7/6	内外面撫でか。	器面摩滅。 外面一部剥離。
11	第191図	土師器 台付甕	南東隅壁下床土上7 cm 口縁~肩部	口 底	16.8 -	高 頸	(7.3) 14.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5-6本)後 肩部に横のハケ目。底部内面縦の強い撫で。	
12	第191図	土師器 台付甕	住居西寄り床下6 cm 口縁~肩部	口 底	17.8 -	高 頸	(4.9) 16.6	細砂粒・軽石/良好/黒 褐10YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり6本)後肩部に横のハケ目、肩 部内面斜めの強い撫で。	
13	第191図	土師器 台付甕	東壁際床上24cm 口縁~胴上部	口 底	16.3 -	高 胴	(9.6) 23.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐10YR5/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)、肩 部-胴部内面縦の撫で。	
14	第191図	土師器 台付甕	住居東寄り床直上 ~床上15cm 口縁~胴上部	口 底	18.8 -	高 胴	(10.1) 25.5	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5-6本)、 肩部内面縦の強い撫で。	
15	第192図	土師器 台付甕	住居南寄り 1/3	口 底	11.8 -	高 胴	(11.2) 16.1	細砂粒/良好/黒褐 10YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり6本)、胴部外面左上方向のハ ケ目、肩部-胴部内面縦の撫で。	器面摩滅。胴部 中位外面剥離。
16	第192図 PL. 80	土師器 台付甕	住居南寄り床上7 ~8cm 3/4	口 台	15.3 8.7	高 頸 胴	26.6 13.4 23.1	細砂粒・雲母/良好/に ぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり7本)後肩 部外面に横のハケ目。胴部内面撫で。脚部外 面右下方向のハケ目。端部折り返し。脚部天 井及び底部内面砂目粘土補填。	器面摩滅。胴部 外面下半被熱の ため剥離。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値				胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口底	12.4	高 胴	(11.5) 17.7			
17	第192図	土師器 台付甕	東壁際床上23～ 27cm 1/3	口底	12.4	高 胴	(11.5) 17.7	細砂粒/良好/黒褐 10YR3/1	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6-7本)、胴部外面左上方向のハケ目、肩部内面縦の強い撫で。	胴部内面中位帯状に変色。
18	第192図	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上部片	口底	14.4	高 頸	(5.1) 12.5	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄橙5YR6/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面斜めのハケ目後撫で、肩部-胴部外面横のへら削り、内面横のへら削り。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)				材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
19	第192図 PL.80	敲石	掘り方 完形	長厚	10.7 5.3	幅	7.2	粗粒輝石安山岩・楕円 礫	小口部両端に敲打痕がある。このほか、背面側中央が敲打され、浅く皿状に窪む。	584.9g

2区31号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値				胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口底	18.6	高 頸	(6.5) 15.4			
1	第193図	土師器 甕	住居内北西寄り床 上8cm 口縁～肩部	口底	18.6	高 頸	(6.5) 15.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 暗褐10YR3/3	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後粗い撫で、胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面斜めのへら削りか。	
2	第193図 PL.80	土師器 円盤状土 製品	埋没土 完形	長短	3.6 3.4	厚	0.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/2	甕の破片の胴部周辺を打ち欠き、一部研磨して作成か。未成品の可能性。	被熱により赤変。

2区32号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値				胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口台	12.9	高	8.3			
1	第195図 PL.80	土師器 高杯	土坑内床下16～ 18cm 完形	口台	12.9	高	8.3	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	器面整形不明。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅顕著。
2	第195図	土師器 高杯か	土坑内床直上 脚部	口台	-	高	(9.4)	細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐5YR4/6	脚部外面縦のへら磨き、内面上半放射状の撫で、下半横のハケ目(1cmあたり5本)。脚部の穿孔は3孔。	
3	第195図	土師器 器台	土坑内床下7～ 27cm 底部～脚部片	口台	-	高	(6.6)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	薄手。脚部外面へら磨きか。内面撫で。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
4	第195図	土師器 器台	土坑内床下16cm 脚部	口台	-	高	(6.8)	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面縦のへら磨きか。内面撫で。脚部の穿孔は上下2段で3組。	器面摩滅。受け部は貼り付け部から剥離。
5	第195図 PL.80	土師器 高杯	土坑内床直上～ 床下23cm 体部～脚部片	口台	-	高	(10.5) 17.8	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	杯部内外面摩滅のため整形不明。脚部外面縦、内面横の細かなハケ目後撫でか。脚部の穿孔は上下2段で3組。	器面摩滅。
6	第195図	土師器 高杯	土坑内床直上レ ベル 杯部～脚部	口台	15.9	高	(7.1)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部屈曲し、内面受け口状。杯部外面斜めのハケ目後横-縦のへら磨き、内面横-放射状のへら磨き。脚部の穿孔は3孔。	
7	第195図	土師器 壺	土坑内床下8～ 27cm⇔57住 底部～胴下部	口底	-	高 胴	(6.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄褐 10YR5/4	胴部外面横-斜めのハケ目後粗い撫で、内面横のハケ目(1cmあたり7本)。	内面やや吸炭。
8	第195図	土師器 台付甕	土坑内床下9～ 27cm 口縁～肩部片	口底	15.6	高 頸	(6.6) 13.6	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり4本)、肩部内面縦の撫で。	器面の摩滅顕著。
9	第196図 PL.80	土師器 台付甕	土坑内床下27cm 口縁～胴上部	口底	18.9	高 胴	(9.7)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 暗褐10YR3/3	口縁部横撫で、頸部-肩部対面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)後肩部外面に横のハケ目。肩部内面に縦の強い撫で。	器面摩滅。
10	第196図	土師器 台付甕	土坑内床下5～ 23cm 口縁～肩部	口底	15.2	高 胴	(6.2)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり4本)、肩部内面縦の撫で。	14と同一個体
11	第196図	土師器 台付甕	土坑内床下10cm 口縁～肩部片	口底	17.8	高 頸	(9.0) 15.5	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR6/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)、内面縦の撫で。	
12	第196図	土師器 台付甕	土坑内床直上～ 床下8cm 1/2	口底	13.4	高 頸 胴	(22.8) 11.9 21.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向の2-3段のハケ目(1cmあたり5本)、脚部外面右下方向のハケ目、胴部内面撫で。脚部天井に砂目粘土の補填。胴部内面下位に接合痕。	器面摩滅。
13	第196図	土師器 台付甕	土坑内床下11～ 23cm 口縁～胴部片	口底	21.0	高 胴	(20.4) 32.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)後肩部に横のハケ目、肩部内面は縦の撫で。	
14	第196図	土師器 台付甕	土坑内床直上～ 床下23cm 胴部～底部	口台	-	高 胴	(18.6)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR6/4	胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)、脚部外面左下方向のハケ目。脚部折り返しで、天井及び底部内面に砂目粘土で補填。脚部内面下端に接合痕。	脚部外面被熱により赤変。10と同一個体。
15	第196図	土師器 台付甕	土坑内床下23cm 胴部～脚部1/2	口台	9.6	高 胴	(18.3) 20.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐5YR3/1	脚部外面左上方向のハケ目(1cmあたり4本)、脚部外面右下方向のハケ目、胴部内面撫で。脚部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土の補填。	
16	第196図	土師器 甕	土坑内床下24cm 口縁～頸部片	口底	16.0	高 頸	(5.9) 13.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。頸部内外面に輪積み痕。	

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要	
17	第196図 PL. 80	敲石	土坑南壁際底面 直上 完形	長 厚	13.4 5.2	幅	11.2	粗粒輝石安山岩・扁平 楕円礫	小口部両端に敲打痕が残る。背面側の敲打痕 については多孔質石材であり、判断は難しい。	1020.6g

2区33号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第198図 PL. 80	土師器 高杯	住居東寄り床上 12cm⇨19住掘り 方 2/3	口 台	20.8 14.4	高 頸	13.3	細砂粒・雲母/良好/橙 5YR6/6	底部にソケット状の接合痕。杯部内面横のハ ケ目後粗い撫で、外面撫で。脚部内外面撫で か。脚部の穿孔は上下2段に3組。	口縁部外面に縦 のひび。器面摩 滅。
2	第198図	土師器 壺	住居東寄り床直上 口縁部片	口 底	18.6 -	高 頸	(8.3) 12.3	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部-頸部外面斜めのハケ目(1cmあたり7 本)、内面横のハケ目後口縁部内外面横のへ ら磨きか。	器面摩滅。
3	第198図 PL. 80	土師器 台付甕	北東隅壁下床直上4 ~18cm 口縁~胴上部	口 底	17.9 -	高 胴	(13.2) 26.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(隙間多い)、胴部外面左上方向のハケ目 (1cmあたり8本)、肩部内面縦の強い撫で。	
4	第198図	土師器 台付甕	住居北東寄り床 上12cm 口縁~肩部1/4	口 底	14.0 -	高 胴	(9.2) 21.3	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5-6本)、肩部内面縦の強い撫 で。	肩部外面に吸炭 部分。
5	第198図	土師器 台付甕	北東隅壁下床直上4 ~12cm 口縁~肩部2/3	口 底	17.4 -	高 頸	(7.2) 15.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり9本)、脚部外面左上方向のハ ケ目、胴部内面縦の撫で。	
6	第198図	土師器 台付甕	北東隅壁下床直上4 ~12cm 胴部~底・台部	口 底	- 9.6	高 胴	(21.0) 26.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	胴部外面左方向の2-3段のハケ目(1cmあたり 8本)、脚部外面右下方向のハケ目。脚端部折 り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土で補 填。胴部下位内外面に接合痕。	脚部内面下半変 色。
7	第198図	土師器 台付甕	北東隅壁際床直上 ~床上4cm 胴部~底・台部	口 台	- 9.8	高 胴	(21.6) 25.6	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR4/2	胴部外面左方向の3段ほどのハケ目(1cmあ たり7本)、脚部外面右下方向のハケ目。脚端部 折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土で 補填。胴部内面下位に接合痕。	

2区34号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第199図	土師器 台付甕	南西隅壁下床直上4cm 台部	口 底	- -	高 台	(5.4) 8.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	脚部外面撫で、内面へら撫で。	内面摩滅。
2	第199図	土師器 台付甕	西壁下床直上7cm 脚部片	口 底	- -	高 台	(6.9) 8.8	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	脚部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面 へら撫で。厚手で折り返しなし。端部平坦。	器面摩滅。脚部 天井吸炭。

2区35号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第200図	土師器 甕	埋没土 口縁~頸部片	口 底	19.6 -	高 頸	(3.6) 16.0	細砂粒/良好/黒褐 10YR3/2	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後撫で、頸 部外面斜め、内面横のハケ目。	内面摩滅。

2区36号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第202図	土師器 埴	住居中央床下6cm 口縁部片	口 底	10.8 -	高 頸	(7.6) 4.6	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	口縁部内外面横の撫で後縦のへら磨き。	内面吸炭。
2	第202図 PL. 80	土師器 器台	南壁際床直上~ 床上18cm⇨28・ 53住他 3/5	口 台	17.0 17.2	高 台	15.4	細砂粒・雲母/良好/に ぶい橙5YR6/4	受け部に隅丸方形の透かしを4ヵ所穿ち、脚部 との間に突帯を巡らす。脚部の穿孔は上下2段 に4組。器面は細かなハケ目後受け部は撫で、 脚部は縦のへら磨き。各端部は平坦に仕上げる。	受け部内面摩滅。
3	第202図	土師器 台付甕	住居西寄り床下5 cm~床上12cm 口縁~肩部片	口 底	12.0 -	高 頸	(3.7) 12.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり7本)、内面撫で。	
4	第202図 PL. 80	土師器 台付甕	南壁際床下10cm 2/3	口 台	10.6 6.2	高 胴	16.0 13.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部雑な撫で、指の押圧を残す。胴部内 外面撫で。脚部外面は斜めの撫で。肩部内面 上端に接合痕。	胴部内面下半に 帯状の変色。
5	第202図	土師器 台付甕	埋没土 台部片	口 底	- -	高 台	(4.0) 6.8	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	脚部外面撫で、内面へら撫で。	外面の一部吸炭。
6	第202図	土師器 台付甕	住居中央床直上 ~床上11cm 台部片	口 台	- 8.7	高 胴	(6.0) -	細砂粒・軽石/良好/灰 黄褐10YR6/2	脚部外面下端縦のハケ目(1cmあたり5本)、脚 部外面右下方向のハケ目、内面縦の撫で、端 部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土 を補填。	脚部外面被熱の ため赤変。

2区37号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第204図 PL. 81	土師器 台付甕	住居東寄り床上 21cm 口縁~胴部	口 底	10.8 -	高 胴	(6.8) 15.6	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR5/2	薄手。口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方 向のハケ目(1cmあたり6本)、内面撫で。	器面摩滅。
2	第204図 PL. 81	土師器 台付甕	住居東寄り床上 21cm 胴部~脚部	口 底	- -	高 胴	(14.5) 16.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐10YR3/2	薄手。胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり 6本か)、内面撫で。脚部天井及び底部内面砂 目粘土補填。	器面摩滅。胴部 内面に接合痕。 脚部外面下半-脚 部被熱。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
3	第204図	土師器 台付甕	南東壁際床上22 cm 1/3	口 底	12.4 -	高 胴	(17.5) 19.5	細砂粒/良好/にぶい黄 褐10YR4/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり7本)、肩部-脚部外面左上方 向のハケ目、内面撫で。	器面摩滅。

2区38号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
1	第206図	土師器 器台	南東壁下床上18 ~22cm 口縁~体部片	口 台	19.8 -	高 -	(4.7) -	細砂粒・輝石/良好/橙 5YR5/8	受け部外面縦、内面横のヘラ磨きか。受け部 の穿孔は5孔か。	器面摩滅。
2	第206図	土師器 台付甕	南東壁下床上9cm 口縁~胴上部片	口 底	15.4 -	高 頸	(6.2) 12.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐10YR3/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5本)、胴部外面左上方向のハ ケ目、内面撫で。	器面の摩滅顕著。
3	第206図	土師器 台付甕	住居北東寄り床 上32cm 台部1/2	口 底	- -	高 台	- 6.8	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR5/2	脚部外面縦の撫で、内面斜の撫で。	脚下端部を除き やや吸炭。

2区39号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
1	第207図	土師器 鉢	埋没土 1/4	口 底	8.8 3.7	高 -	4.0	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄褐 10YR6/3	体部外面縦の撫で、内面撫で。底部ヘラ削り で平坦。やや厚手。	体部外面-底部の 一部吸炭。
2	第207図	土師器 甕	ピット3内 底部~胴部片	口 底	- 4.2	高 胴	(3.4) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/4	胴部外面撫で、内面細かいヘラ撫で。	

2区40号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
1	第208図	土師器 台付甕	南西壁際床直上 ~床上4cm 口縁~胴部	口 底	14.4 -	高 胴	(10.6) 16.7	細砂粒・軽石/良好/褐 灰10YR4/1	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)、内 面撫で。	器面摩滅。
2	第208図	土師器 台付甕	住居南寄り~南 西壁際床上3~7 cm 口縁~胴上部	口 底	19.0 -	高 頸	(6.0) 15.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5本)後横のハケ目、内面縦の 撫で。	
3	第208図 PL. 81	土師器 台付甕	南西壁際床上9cm ⇔30他他広範囲 1/3 (脚部欠損)	口 底	15.4 -	高 頸	(22.8) 13.5 22.3	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、肩部外面左下方向、胴部外面 左上方向の2段ほどのハケ目(1cmあたり7本) 後肩部外面に横のハケ目。胴部内面撫で。脚 部天井及び底部内面砂目粘土補填。胴部内面 下位に接合痕。	脚部外面下半被 熱で変色か。
4	第208図 PL. 81	土師器 台付甕	南西壁際床上9cm 2/3 (脚部欠損)	口 底	14.8 -	高 胴	(18.4) 20.3	細砂粒・輝石/良好/に ぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、肩部外面左下方向、胴部外面 左上方向の3段ほどのハケ目(1cmあたり8本)、 内面撫で。胴部内面下位に接合痕。	
5	第208図	土師器 台付鉢か	住居西寄り床上 10cm 台部~体部片	口 台	- 4.4	高 -	(4.4) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/4	脚部外面斜めの粗いハケ目後撫で、体部と脚 部の接合部押圧。脚部内面細かなハケ目。脚 接地部平坦。体部内面撫で。	
6	第208図	土師器 台付甕	南西壁際床上8cm 台部片	口 台	- 8.4	高 胴	(5.1) -	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面縦のハケ目後撫でか。内面横のヘラ 撫で、底部内面放射状の撫で、脚接地部平坦。	

2区41号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
1	第209図 PL. 81	土師器 埴	住居北西寄り床 上4cm 完形(口縁一部欠 損)	口 底	10.1 4.0	高 頸	6.6 7.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	頸部内面に稜を残すが外面ではごく弱い。口 縁部-体部内外面ヘラ磨きか。	内面わずかに吸 炭。器面摩滅。
2	第209図	土師器 甕	住居南西寄り床 直上~床上5cm 口縁~胴下位部	口 底	20.9 -	高 胴	(20.1) 23.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/3	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後撫で、胴 部外面横-斜めハケ目(1cmあたり5本)、内面 は斜めのヘラ撫で。胴部内面下位に接合痕。	

2区42号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口 底	高 胴	(口 径)				
1	第211図	土師器 高杯	北東壁下床上7cm 脚部片	口 台	- -	高 -	(3.3) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	外面調整不明、内面撫で。	器面摩滅。
2	第211図 PL. 81	土師器 台付甕	南寄り床上5cm 脚部	口 台	- 9.1	高 -	(6.0) -	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	脚部外面縦、内面横-斜めのハケ目(1cmあた り7本)。	脚部内面及び外 面下半の一部吸 炭。
3	第211図 PL. 81	土師器 台付甕	北西壁際床下7cm 脚部	口 底	- 8.6	高 -	(5.6) -	細砂粒・雲母/良好/明 赤褐5YR5/6	胴部-脚部外面斜めのハケ目、胴部内面下半 粗いハケ目、脚部内面ヘラ撫で。	
4	第211図	土師器 台付甕	南寄り床上16cm 台部~胴下位部	口 台	- 5.3	高 胴	(8.2) -	細砂粒・軽石/良好/灰 黄褐10YR4/2	胴部外面縦の粗いハケ目、内面横のヘラ削り か。脚部外面縦の細かいヘラ撫で、内面撫で。	

2区43号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第212図	土師器 高杯	埋没土 脚部	口 台	-	高 -	(6.0)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR6/3	脚部外面縦のヘラ磨き、内面斜めのハケ目(1 cmあたり5本)、脚部の穿孔は4孔。	脚部内面摩滅。
2	第212図 PL. 81	土師器 鉢か	住居中央床上3cm 完形	口 底	8.8 3.9	高 胴	8.5 6.8	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部-体部外面縦のハケ目後、口縁部外面 撫で。体部外面は縦のヘラ磨きか。	器面摩滅。
3	第212図	土師器 台付甕	P2内床下11cm 台部～胴下位部	口 台	-	高 -	(11.3)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐10YR3/2	胴部外面撫で、内面木口状の工具による斜め の撫で、脚部外面ハケ目後撫でか。内面木口 状工具による斜めの撫で。	
4	第212図	土師器 甕	住居中央床上3cm 口縁～肩部片	口 底	14.5 -	高 頸	(5.2) 11.7	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR6/4	口縁部外面斜め、内面横のハケ目後粗い撫で。 頸部-肩部外面斜めのハケ目、内面横のハケ 目。	
5	第213図	土師器 甕	P2内 口縁～胴上部5/6	口 底	17.3 -	高 胴	(10.9) 20.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、胴部外面斜めのヘラ撫で、内 面斜めのヘラ撫で。	
6	第213図	土師器 甕	南東2床上17cm 口縁～胴下位部	口 底	18.8 -	高 胴	(17.6) 24.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 暗褐10YR3/3	口縁部-頸部外面斜めのハケ目後撫で、内面 横のハケ目、胴部外面斜めのハケ目(1cmあた り6本)。	胴部外面中位に 黒斑。胴部外面 下半摩滅顕著。
7	第213図	土師器 手捏ね	掘り方 口縁～底部片	口 底	9.2 4.0	高 -	2.8	細砂粒/良好/橙5YR7/6	鉢状の器形で器面撫で。	外面下端に輪積 み痕。

2区45号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第214図	土師器 甕か	埋没土 口縁～胴部片	口 底	7.9 -	高 -	(4.3)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面ハケ目後撫で、内面 撫で。	胴部外面吸炭。

2区46号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第215図	土師器 埴	埋没土 口縁～胴部片	口 底	11.8 -	高 -	(4.0)	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	内外面ともに横の細かなヘラ磨き。	器面摩滅。
2	第215図	土師器 台付甕	埋没土 口縁～肩部片	口 底	-	高 -	(3.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、胴部外面斜めのハケ目(1cmあ たり4本)、内面撫で。	器面摩滅。
3	第215図	弥生土器 甕	埋没土 胴部片	口 底	-	高 -	-	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR7/3	頸部外面に簾状文、下位に櫛描き羽状文、内 面横の撫で。	

2区47号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第216図	土師器 高杯	調査区壁際床直上 底部～脚部	口 台	-	高 -	(6.7)	細砂粒・角閃石/良好/ 灰5Y5/1	杯部外面横のヘラ磨き、内面撫でか。脚部外 面縦のヘラ磨き、内面雑な横の撫で。脚部の 穿孔は内側に向けたもので上下2段の3孔。	杯部内外面、脚 部外面吸炭。
2	第216図	土師器 台付甕	埋没土 口縁～肩部	口 底	17.0 -	高 頸	(5.3) 14.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部は横撫でで「5」の字状を呈し、上端部 は平坦。肩部外面は斜めの粗いハケ目、内面 は撫で。	

2区48号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第217図	土師器 埴か	南隅壁下床上15cm 底部～胴下半片	口 底	-	高 -	(1.9)	細砂粒・角閃石/良好/ 黒10YR2/1	内外面撫で、底部に凹み。	底部-胴部下半に 黒斑。
2	第217図 PL. 81	土師器 壺	南隅壁下床上14 ～25cm 1/2	口 底	13.8 6.8	高 胴	22.9 24.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫でか。胴部外面上半ハケ目(1cmあ たり6本)後、斜めのヘラ磨き、中位ハケ目、 下半斜めのヘラ撫で、胴部内面撫で。胴部内 面下位に接合痕。底部厚手で平坦。	胴部外面中位に 黒斑。
3	第217図 PL. 82	土師器 壺	南隅壁下床上14 ～18cm 2/3	口 底	14.8 8.8	高 胴	27.8 23.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR6/8	口縁部折り返して撫で。頸部外面斜めのハケ 目、内面斜めのハケ目後粗いヘラ磨き。胴部 外面斜めのヘラ磨き、内面上半横のハケ目(1 cmあたり7本)、下半ハケ目後撫で。	器面摩滅。
4	第217図 PL. 82	土師器 甕	南隅壁下に散乱 床上15～23cm 口縁・胴部一部 欠損	口 底	-	高 -	(32.7)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 浅黄橙10YR8/3	頸部内面横のヘラ磨き。肩部外面RLを2段に 回転施文。胴部外面下半縦のヘラ撫で。内面 上半縦の粗いヘラ磨き、下半撫で。	
5	第217図 PL. 81	土師器 壺	南隅壁下床上15cm 胴部一部欠損	口 底	13.8 6.2	高 胴	25.9 23.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部外面撫で、内面横のハケ目。胴部外面 ハケ目後上半縦-斜めのヘラ磨き、下半不明。 内面斜めのヘラ削り。胴部内面下位に接合痕。	胴部外面中位に 黒斑。

遺物観察表

2区49号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第218図	土師器 器台か	北壁下床直上 脚部片	口 台	-	高	-	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚端部横撫で。 内面摩滅。
2	第218図	弥生土器 甕	埋没土 頸部片	口 底	-	高 胴	-	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/黒褐10YR3/1	頸部外面に櫛描き波状文と14分割3連止め簾 状文。胴部に櫛描き羽状文を施す。内面横の へら磨き。

2区50号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第219図	土師器 高杯	住居南東寄り床 上14cm 脚部1/2	口 台	-	高	(9.1)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	脚部外面縦のへら磨きか。内面斜めのハケ目 後撫で。脚部の穿孔は3孔。
2	第219図	土師器 埴	埋没土 口縁部片	口 底	7.8	高 胴	(6.5)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、頸部外面斜めのハケ目(1cmあ たり6本)、内面撫で。
3	第219図	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 底	14.0	高 頸	(4.9)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部折り返し。外面細かな横のハケ目(1cm あたり17本)、頸部外面縦のハケ目(1cmあ たり8本)、内面細かな横ハケ目後縦のへら磨き。

2区51号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第221図	土師器 高杯	住居北西寄り床 上9cm 脚部2/3	口 台	-	高	(6.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明黄褐10YR6/6	脚部外面ハケ目後撫で、内面斜めのハケ目。 杯部内面は剥離したものとソケット状の突起 が脚部側に残存。	
2	第221図 PL. 82	土師器 器台	北壁下床直上 杯部1/2	口 台	18.0	高	(6.6)	細砂粒・粗砂粒・雲母/ 良好/浅黄橙10YR8/3	受け部外面ハケ目後へら磨きか。内面整形不 明。受け部の透かしは角孔で4カ所。	器面摩滅。脚部 は接合部から剥 離。
3	第221図	土師器 器台	住居中央床直上 杯部2/3	口 台	18.0	高	(5.4)	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/4	受け部外面斜めのハケ目後横のへら磨き、内 面横のへら磨き。受け部の穿孔は4孔か。	
4	第221図	土師器 器台	埋没土 脚部1/4	口 台	-	高	(6.0)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/2	脚部外面は撫でか。内面斜めのハケ目後撫で。 上下互い違い2段の4孔を穿孔。	
5	第221図	土師器 台付鉢か	埋没土 脚部片	口 底	-	高 台	6.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	内外面撫で。	器面摩滅。
6	第221図	土師器 台付甕	中央床上4cm 口縁～胴上部1/2	口 底	11.0	高 頸	(4.3) 10.2	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、頸部-肩部外面右下方向のハ ケ目(1cmあたり8本)。内面撫で。	
7	第221図	土師器 台付甕	北寄り床直上～ 床上4cm 口縁～胴上部4/5	口 底	15.5	高 頸	(4.5) 12.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり5本)後、横のハケ目。内面撫 で。	
8	第221図 PL. 82	土師器 台付甕	南東寄り床直上 4/5	口 底	11.1	高 胴	(14.9) 15.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり6本)、内 面撫で。脚部天井及び底部内面砂目粘土補填。	脚部外面被熱で 剥離。
9	第221図	土師器 台付甕	中央床上7cm 口縁～体部	口 底	17.6	高 胴	(15.4) 27.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハ ケ目(1cmあたり4本)、肩部-胴部外面左上方 向のハケ目。肩部内面縦の撫で。	
10	第221図	土師器 台付甕	北西寄り床下7cm 脚部	口 台	-	高 胴	(5.5)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	脚部外面斜めのハケ目後粗い撫で、内面撫で。	脚部内面吸炭。
11	第221図	土師器 台付甕	中央床直上 脚部	口 台	-	高 胴	(6.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明黄褐10YR6/6	脚部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面 撫で。接地部平坦。	器面摩滅。
12	第221図	土師器 甕	北寄り床直上～ 床上11cm 口縁～肩部1/2	口 底	15.6	高 頸	(4.7) 12.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面斜めのハケ目、 内面撫で。	
13	第221図	土師器 壺	北東寄り床上11 cm 体～底部	口 底	-	高 胴	(12.0) 29.1	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい赤褐 5YR5/4	胴部外面ハケ目後斜めのへら磨き、内面ハケ 目後横-縦のへら磨き。胴部内外面下位に接 合痕。	
14	第221図 PL. 82	土師器 手捏ね	南寄り床直上 完形	口 底	4.6 3.0	高	3.9	細砂粒/良好/橙5YR6/6	台付鉢状。体部外面指先の粗い撫で、内面斜 めのへら撫で。外面に輪積み痕。	
No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
15	第221図 PL. 82	敲石	北寄り床直上 完形	長 厚	10.9 3.1	幅	11.2	石英閃緑岩・扁平礫	小口部上端から右側縁に著しい敲打痕が残 る。	613.0g

2区52号住居

No.	挿図 PL. No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第222図 PL. 82	土師器 高杯か	東寄り床上20cm 脚部	口 台	-	高	(6.2)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	脚部外面ハケ目後へら磨きか、内面横のハケ 目後撫で。	器面摩滅。
2	第222図	土師器 台付甕	北西寄り床上23 cm 口縁～肩部片	口 底	15.0	高 頸	(4.6) 13.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、胴部外面斜めのやや粗いハケ 目。薄手。	器面摩滅
3	第222図	土師器 壺	南寄り床上17cm 底部～胴部	口 底	-	高 胴	(15.0) 28.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	胴部外面撫で、内面ハケ目後撫で。	底部摩滅。

2区53号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第224図	土師器 高杯	北東寄り床下3cm ～床上5cm 杯部1/4	口 台	15.8 -	高 -	(4.1)	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	杯部外面斜め刷毛目後、縦のヘラ磨き。内面放射状のヘラ磨き。内外面赤色塗彩。	
2	第224図	土師器 高杯	南西寄り床直上 脚部2/3	口 台	- -	高 -	(5.6)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面縦のヘラ磨き、内面横のハケ目。脚部の穿孔は4孔。	脚部内面にハゼ。
3	第224図 PL. 82	土師器 器台	中央寄り床下6cm 4/5	口 台	6.9 8.3	高 -	6.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	受け部外面ヘラ磨きか。内面整形不明。脚部外面ハケ目後縦のヘラ磨き、内面撫でか。脚部穿孔は上位にあり3孔。	器面摩滅
4	第224図	土師器 台付鉢	中央寄り床上3cm 頸部～脚部2/3	口 底	- -	高 -	(8.9) 9.4	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	肩部外面縦のハケ目、体部外面撫でか。内面撫で。脚部外面縦のヘラ撫で。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
5	第224図	土師器 壺	東寄り床上7cm 頸部～底部2/3	口 底	- 8.1	高 -	(19.1) 21.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	胴部内面斜めのハケ目後縦のヘラ磨きか。内面撫で。	胴部外面中位～ 下位に吸炭部分。 外面の一部剥離。
6	第224図	土師器 台付甕	北東寄り床上5cm 口縁～肩部	口 底	11.7 -	高 -	(3.5) 10.6	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり5本)、内面撫で。	器面摩滅。
7	第224図	土師器 台付甕	中央寄り床上9cm 口縁～胴上部片	口 底	16.8 -	高 -	(7.6) 14.6	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり9本)、肩部-胴部外面左上方向のハケ目後肩部に横のハケ目、肩部内面縦の撫で。	
8	第224図	土師器 台付甕	埋没土 底部～脚部	口 台	- 8.4	高 -	(4.8) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面上端縦のハケ目、下半縦の撫で、内面横-斜めのハケ目(1cmあたり5本)。底部内面粗いハケ目。	
9	第224図	土師器 台付甕	東寄り床上5cm 底部～脚部	口 台	- 8.4	高 -	(6.1) -	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	胴部外面-脚部上半縦、脚部下端横のハケ目(1cmあたり9本)。胴部内面及び脚部内面横のハケ目。	
10	第224図	土師器 台付甕	中央寄り床上9cm 脚部1/2	口 台	- 12.0	高 -	(7.1) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	胴部下半-脚部外面斜めの粗いハケ目。脚端部折り返し。脚部天井砂目粘土の補填。底部内面には補填なし。	
11	第224図	土師器 甕	中央寄り床上6cm 口縁～胴部片	口 底	13.6 -	高 -	(9.5) 15.6	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部-頸部外面斜め、内面横のハケ目後撫で。胴部外面斜め、内面横のハケ目(1cmあたり5本)。	
12	第224図	土師器 甕	中央寄り床上6cm 底部～胴下部片	口 底	- 5.6	高 -	(6.3) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	胴部内外面ハケ目、底部ヘラ削り。	脚部下端被熱によるものか赤変。
13	第224図	土師器 甕	中央寄り床上6cm 口縁～胴上部片	口 底	11.2 -	高 -	(10.0) 18.0	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部外面斜め、内面横のハケ目(1cmあたり5本)後雑な撫で。胴部外面斜めのハケ目、内面斜めのハケ目後斜めの粗い撫で。	
14	第224図	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒/良好/暗褐 10YR3/3	口縁部内外面ハケ目。口唇部ハケの刺突。	
15	第224図	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 底	- -	高 -	- -	細砂粒・角閃石/良好/ 灰褐5YR4/2	口縁部外面斜のハケ目後上半横の撫で、内面横のハケ目。口唇部ハケの刺突。	

2区56号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第228図 PL. 82	土師器 杯	南東隅床上8cm 3/4	口 底	12.2 -	高 -	6.8	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/赤褐10YR5/4	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ撫で、内面粗い縦のヘラ磨き。	
2	第228図 PL. 82	土師器 鉢	南東隅床直上～ 床上5cm 2/3	口 底	13.6 4.9	高 -	5.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面上半横のヘラ削り、内面撫で後粗い放射状ヘラ磨き。	
3	第228図 PL. 82	土師器 鉢	南壁際床下4cm ほぼ完形	口 底	15.0 3.2	高 -	6.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/3	底部外面やや上げ底状。口縁部横撫で、体部外面斜めのヘラ撫で、内面横の撫で。	内面のハゼ・剥 落顕著。
4	第228図 PL. 82	土師器 台付鉢	南壁際床下9cm 杯部	口 底	15.5 -	高 -	(7.7) 15.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面縦の細かいハケ目(1cmあたり10本)、内面撫で。	脚部欠損。
5	第228図 PL. 83	土師器 高杯	南壁際床直上 脚部	口 台	- 13.3	高 -	(5.7)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚柱部内面に輪積み痕。	
6	第228図	土師器 高杯	南東隅床直上 脚部	口 台	- -	高 -	(8.6)	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/8	脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。内面に輪積み痕。	
7	第228図 PL. 83	土師器 埴	南東隅床上4～8 cm 完形	口 底	12.1 3.9	高 -	14.9 13.0	細砂粒・軽石/良好/に ぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、頸部外面縦の撫で、内面横の撫で。胴部外面撫でか。下端斜めのヘラ削り。	器面摩滅。
8	第228図	土師器 甕	南壁下床下5cm 口縁～胴部上半	口 底	14.8 -	高 -	(5.9) -	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で、胴部内外面の整形不明。	器面の摩滅顕著。
9	第228図 PL. 83	土師器 甕	南東隅床下22cm 完形	口 底	18.4 6.3	高 -	31.0 26.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部弱い段、横撫で。頸部内面に接合痕。胴部外面斜めのヘラ撫で、内面撫で。	器面摩滅。口縁 部内面明度高い。 胴部外面中位剥 離。
10	第228図	土師器 甕	南東隅 口縁～胴部1/3	口 底	13.9 -	高 -	(11.4) 17.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/8	口縁部横撫で、胴部外面斜めの細かいヘラ撫で、頸部-胴部内面横のヘラ撫で。胴部内面に輪積み痕。	

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
11	第228図	土師器 壺	住居P3内床下13cm 底部～胴下部	口 底	- 5.5	高 胴	(2.6) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	胴部外面斜めのへら磨き、内面横のハケ目(1cmあたり12本)。	底部摩滅。
12	第228図 PL. 83	土師器 羽口	南壁下床土19cm 4/5 (転用)	長 径	5.7 5.6			細砂粒・軽石/良好/ にぶい赤褐5YR5/3	高杯の脚柱部の転用か。先端溶融し羽口としての使用明確。	先端破損は被熱によるか。

2区57号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第229図	土師器 器台か	北西壁寄り床直上 脚部1/3	口 台	- 13.2	高 胴	(7.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙5YR6/4	脚部外面縦のハケ目後撫で、内面撫で。穿孔は3孔。	被熱によるものか内外面ひび割れ。一部剥離。
2	第229図	土師器 器台か	埋没土 脚部1/4	口 台	- 15.1	高 胴	(8.2) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面斜めのハケ目後斜めのへら磨き、内面斜めのハケ目後粗い撫で。穿孔は上下2段に3孔。	
3	第229図	土師器 鉢	北西壁寄り床直上 1/3	口 底	11.4 4.0	高 胴	(6.6) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部-体部上半斜めの細かなハケ目、胴部外面下半横のへら磨き、内面撫で。	
4	第229図	土師器 埴	北西壁寄り床直上 口縁部1/2	口 底	15.5 -	高 胴	(6.4) -	細砂粒・軽石/良好/橙 5YR6/6	口縁部-頸部内外面横のへら磨き。	内外面摩滅し、一部剥離。
5	第229図 PL. 83	土師器 壺	南西壁寄り床土3cm 口縁～頸部片	口 底	16.4 -	高 頸	(5.7) 6.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫でか。頸部外面ハケ目後縦のへら磨き、内面横のハケ目後雑なへら磨き。	器面摩滅。
6	第229図	土師器 壺	埋没土 頸部～胴部片	口 底	- -	高 胴	(4.5) -	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	頸部外面に突帯を巡らせる。突帯より上位斜めの細かなハケ目、胴部外面縦のへら磨き、内面撫で。胴部内面に輪積痕。	
7	第230図 PL. 83	土師器 壺	北西壁寄り床土7～14cm 頸部～底部	口 底	- -	高 胴	(28.3) 26.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/灰白10YR8/2	頸部外面に突帯を巡らせ、上位は斜めのハケ目後撫でか。胴部外面斜めのハケ目後粗い撫でか。内面撫で。胴部歪み大きい。	器面の摩滅顕著。
8	第229図	土師器 台付甕	北東壁寄り床土9～12cm 口縁～肩部2/3	口 底	17.2 -	高 胴	(4.5) -	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり5本)、内面縦の撫で。	
9	第230図	土師器 台付甕	南西壁寄り床直上 口縁～肩部片	口 底	15.8 -	高 頸	(5.5) 14.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり5本)後横のハケ目。胴部は左上方向のハケ目。肩部内面縦の強い撫で。	
10	第230図	土師器 台付甕	北西壁寄り床土10cm 口縁～肩部1/4	口 底	19.8 -	高 胴	(5.4) -	細砂粒・軽石/良好/灰 黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)、内面縦の撫で。	
11	第230図	土師器 甕	北西壁寄り床土7～14cm 口縁～胴上部片	口 底	23.3 -	高 頸	(14.6) 16.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部は斜めの撫で、頸部-肩部左下方向のハケ目(1cmあたり5本)後横のハケ目。肩部-胴部は左上方向のハケ目、内面は撫で。口縁端部は平坦。	口縁部内面に剥離。
12	第230図	土師器 台付甕	南西壁寄り床土6～12cm 口縁～胴上半部	口 底	16.8 -	高 胴	(10.0) 23.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、外面へら削り後頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり4本)、肩部-胴部外面右下方向のハケ目、胴部内面縦の撫で。	
13	第230図	土師器 台付甕	北西壁寄り床土10cm 3/4	口 底	12.4 7.4	高 胴	17.4 14.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり8本)、胴部外面左上方向、脚部外面右下方向のハケ目。胴部内面撫で。脚部天井及び底部内面砂目粘土で補填。	
14	第230図	土師器 台付甕	北西壁寄り 底部～脚部	口 台	- 8.7	高 胴	(6.9) -	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙10YR7/2	脚部外面左下方向のハケ目(1cmあたり6本)。脚端部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土補填。	
15	第230図 PL. 83	土師器 壺	南西壁寄り床直上～床土11cm 3/5	口 底	- 7.2	高 胴	(34.2) 30.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙10YR6/3	胴部外面撫でか、内面下位に弱い接合痕。底部外面ややや上げ底状。	内外綿の摩滅顕著、胴部外面中に黒斑。
16	第230図 PL. 83	土師器 手捏ね	北西壁寄り床土18cm 1/2	口 底	- 2.7	高 胴	(2.7) 4.1	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	外面押圧、内面撫で。	器面摩滅。

3区3号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第233図 PL. 84	土師器 高杯	西調査区壁下床直上 脚部	口 台	- -	高 胴	(11.4) -	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	脚部外面撫でか。内面横の撫で、裾部ハケ目後撫で。	外面に付着物。器面の摩滅顕著。
2	第233図 PL. 84	土師器 台付鉢	西調査区壁下床直上 台部欠損	口 底	15.8 -	高 胴	(9.7) 14.7	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部内面撫でか。内面横のへら撫で。頸部内面に輪積み痕。	体部外面に吸炭部分。
3	第233図 PL. 84	土師器 甕	埋没土 口縁～胴部1/2	口 底	17.4 -	高 胴	(13.2) 19.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部外面縦のハケ目後横撫で、内面へら撫でか。脚部外面撫で後縦のへら撫で、内面撫で。脚部内面に輪積み痕。	
4	第233図 PL. 84	土師器 甕	西調査区壁下床直上 口縁～胴下部3/4	口 底	17.0 -	高 胴	(22.6) 21.8	細砂粒・粗砂粒・雲母/ 良好/にぶい黄橙10YR7/2	口縁部横撫で、胴部外面縦の撫で、内面撫で。胴部内面に輪積み痕顕著。	

3区4号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
				口 台	高	胎土/焼成/色調				
1	第234図 PL. 84	土師器 高杯か	中央床下4cm~床 上5cm 脚部2/3	口 台	11.4	高	(8.9)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	脚部外面縦のヘラ撫で、内面撫で。	器形歪む。器面 摩滅。
2	第234図 PL. 84	土師器 罎	中央床上19cm⇔ 埋没土 胴部	口 底	-	高 胴	(3.5) 9.1	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	胴部外面撫で、中位より下は横のヘラ削り。 内面撫で、頸部内面に絞りによる皺。	
3	第234図 PL. 84	土師器 罎	中央床上19cm 底部~胴部下半	口 底	3.7	高 胴	(2.4) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	胴部外面斜めのヘラ削り、内面撫で、底部ヘ ラ削り。	
4	第234図 PL. 84	土師器 罎	北壁下床上12cm 口縁部欠損	口 底	4.3	高 胴	(5.7) 8.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/6	頸部~胴部外面斜めの撫で、内面雑なヘラ撫 で。	胴部外面に黒斑。 頸部内面に吸炭 部分。
5	第234図 PL. 84	土師器 甕	中央床上12~19 cm 3/4	口 底	16.8 6.5	高 胴	18.9 19.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐10YR3/2	口縁部外面横撫で、内面横のハケ目後撫で、 胴部外面上半細かなハケ目、下半斜めのヘラ 削り、胴部内面撫で。	胴部外面下半被 熱による赤変か。 頸部外面剥離。
6	第234図 PL. 84	土師器 甕	中央床下4cm~床 直上 口縁~胴部1/2	口 底	16.6 -	高 胴	(23.0) 21.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部斜めのハケ目後粗い横撫で。胴部外面 斜めのハケ目後撫でか。内面撫で。	器面摩滅。
7	第234図 PL. 84	土師器 甕	中央床上5cm 胴部~底部一部 欠損	口 底	16.8 7.6	高 胴	25.8 23.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、胴部外面縦~斜めの細かなハ ケ目後上半横のヘラ削り、下半斜めのヘラ削 り。胴部内面下位に接合痕。	胴部外面中位の 両側に吸炭部分。
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要	
8	第234図 PL. 84	石製品	中央床上3cm 完形	長 厚	7.5 2.7	幅	3.7	二ツ岳軽石か	上端側が括れ、体部背面側・側面・裏面側に 径9~11mmの孔を穿つ。裏面側・孔の底部に は環状管錐による穿孔痕が突出した状態で残 る。	30.1g
9	第235図 PL. 85	敲石	北寄り床直上 完形	長 厚	15.1 3.5	幅	13.4	溶結凝灰岩・扁平礫	表裏面とも平滑だが、これが摩擦面か判断は 難しい。礫の両側縁に打痕が残る。	1118.5g

3区5号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
				口 台	高	胎土/焼成/色調				
1	第237図 PL. 85	土師器 鉢	中央床上4cm 完形	口 底	10.0 -	高 胴	5.4 10.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面下半斜めの撫で、内 面撫で。	体部外面に黒斑。
2	第237図 PL. 85	土師器 鉢	南東隅床直上~ 床下4cm 口縁一部欠損	口 底	13.8 3.9	高 胴	6.7 13.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ削り、下 端斜めのヘラ削り、内面撫で、底部ヘラ削 り。	体部内面と外面 の一部吸炭。
3	第237図 PL. 85	土師器 鉢	貯蔵穴内床下5cm 完形	口 底	12.7 3.7	高 胴	5.7 12.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面斜めのヘラ削り、内 面斜めの撫で、底部ヘラ削り。	体部外面に黒斑。 素地埴状。
4	第237図 PL. 85	土師器 鉢	中央床上5cm 完形	口 底	12.2 3.3	高 胴	5.8 12.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、内面は横のヘラ磨き、体部外 面斜めのヘラ削り、内面撫で、底部ヘラ削 り。	体部内面の一部 吸炭。
5	第237図 PL. 85	土師器 鉢	貯蔵穴内床下8cm 口縁一部欠損	口 底	13.6 5.5	高	5.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面縦のヘラ撫で、内 面撫で後粗い放射状ヘラ磨き、底部ヘラ削 り。	口縁部外面に黒 斑。内面中央にハ ぜ。埴状の素地。
6	第237図 PL. 85	土師器 杯	貯蔵穴床上5~7 cm 完形	口 底	13.6 3.4	高	5.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面斜めのヘラ削り後縦 の粗い撫で、内面撫で、底部ヘラ削り。	
7	第238図 PL. 85	土師器 高杯	カマド内床直上 脚部1/4	口 台	-	高	(7.3)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	脚部外面縦のヘラ磨き、内面接合痕上に指の 雑な撫で。	
8	第238図 PL. 85	土師器 高杯	南寄り床上3cm 1/2	口 台	13.8 10.6	高	10.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	杯部外面撫でか。下端斜めのヘラ削り、内 面撫で後粗い放射状のヘラ磨き、脚部外面縦 のヘラ撫で、内面撫で。	器面摩滅。
9	第238図 PL. 85	土師器 高杯	カマド内床直上 杯部2/3、裾部欠 損	口 台	19.0 -	高	(15.3)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	杯部外面縦の粗いヘラ磨き、内面放射状のヘ ラ磨きか。脚部外面縦の撫で、内面横のヘ ラ削り、裾部は撫でか。脚部内面に輪積み痕。	
10	第238図 PL. 85	土師器 高杯	住居中央床直上 裾部欠損	口 台	18.6 16.3	高	15.6	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR7/6	杯部外面斜めのヘラ撫で、内面やや粗い斜 めのヘラ撫で、脚部外面縦のヘラ撫で、内 面横のヘラ削り、裾部内面撫で。	脚裾部内外面に 吸炭部分。
11	第238図 PL. 85	土師器 高杯	貯蔵穴内床下8cm 杯部1/2、裾部一 部欠損	口 台	20.5 16.6	高	17.2	細砂粒・粗砂粒・角 閃石・軽石/良好/橙 5YR6/6	杯部外面斜めのヘラ磨き、内面撫で後粗い放 射状ヘラ磨き、脚部外面縦のヘラ磨き、内 面撫で。脚部内面上部に杯部との貼り付けの ための指先の撫で。	
12	第238図 PL. 85	土師器 高杯	住居中央床上6cm 杯部・裾部一部 欠損	口 台	20.5 17.8	高	19.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/6	杯部外面斜めのヘラ撫で、内面撫で後粗い放 射状ヘラ磨き、脚部外面縦のヘラ撫で、裾 部は撫で後縦の粗いヘラ磨き。内面撫で。脚 部内面に輪積み痕。	脚裾部内外面に 吸炭部分。
13	第238図 PL. 86	土師器 高杯	住居中央床直上 口縁・脚裾一部 欠損	口 台	19.2 16.6	高	16.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	杯部外面縦のヘラ撫で、内面粗い撫で後放射 状の粗いヘラ磨き。脚部外面縦のヘラ撫で、 内面斜めのヘラ削り、脚裾部外面木口状工具 による撫で。	
14	第238図 PL. 85	土師器 鉢	貯蔵穴内床下5cm 完形	口 底	13.8 4.0	高	6.2	細砂粒・粗砂粒・角 閃石・軽石/良好/橙 5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端斜めのヘ ラ削り、内面撫で、底部ヘラ削り。	埴状の素地。
15	第238図 PL. 85	土師器 鉢	カマド内床上4 ~5cm 一部欠損	口 底	20.0 6.0	高	11.0	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面横~斜めのヘラ削り、 内面上半横~斜めのヘラ削り、下半撫で。	底部及び周辺赤 変。底部内面吸 炭。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
16	第238図 PL. 86	土師器 有孔鉢	南西壁際床上25cm 口縁一部欠損	17.3 5.0	高	9.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙10YR7/2	口縁部横撫で、体部外面縦の撫でか。内面上半縦の撫で、下半斜め-横のへら削り。	体部内面下半に灰色の付着物。
17	第239図 PL. 86	土師器 甕	北東壁下床上23cm 完形(口縁一部欠)	11.2 3.5	高	10.9 12.1	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/橙5YR6/6	口縁部外面横撫で後縦の粗いへら磨き、胴部外面上半斜め-横のへら磨き、下半斜めのへら削り後横のへら磨き。	底部は凹む。
18	第239図	土師器 壺	西隅壁下床上17cm 口縁→胴部片	17.6 -	高	(11.7) 12.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面丁寧な撫で。肩部内面縦の強い撫で、脚部内面上位横のへら削り。	肩部内面に輪積み痕。
19	第239図 PL. 86	須恵器 壺	住居中央床上3cm 口縁一部欠損	10.0 -	高	16.1 14.7	細砂粒/還元/灰白5Y7/1	ロクロ整形(回転方向不明)、口縁部外面に2条の突帯と7条の波状文を巡らす。	外面及び内面中央に自然孔。底部にへら描き「X」。
20	第239図	土師器 甕	住居西寄り床上9cm 口縁→底部片	19.8 8.0	高	13.3	細砂粒・粗砂粒/良好/橙5YR6/6	体部外面斜めの撫で、内面縦の粗い撫で。内面上位に輪積み痕。	
21	第239図 PL. 86	土師器 甕	貯蔵穴西脇床直上～床上11cm 胴部一部欠損	22.2 8.3	高	28.7 26.7	細砂粒・粗砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面撫で、内面横-斜めの撫で。胴部外面下位に接合痕、胴部内面中に輪積み痕。	胴部外面に2ヶ所黒斑。
22	第239図 PL. 86	土師器 甕	カマド内床上7cm 完形	11.2 4.3	高	15.0 14.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部撫で、胴部外面縦の撫で、内面へら撫で。胴部外面に輪積み痕。	胴部外面下半吸炭。
23	第239図 PL. 86	土師器 壺	カマド内床直上 口縁→頸部	15.0 -	高	(4.9) 10.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/灰褐5YR4/2	口縁部横撫で、頸部内面縦の撫で。	口縁部内面に吸炭部分。
24	第239図	土師器 甕	南東壁際床上19cm 口縁→胴部片	19.4 -	高	(11.8) 15.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部-胴部外面ハケ目後撫で、胴部内面横のハケ目。	肩部内面に輪積み痕。器面摩滅。
25	第239図 PL. 86	土師器 甕	カマド内床上5cm 完形	18.7 7.0	高	28.0 25.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり8本)、胴部下半横-斜めの撫で、内面斜めのへら撫で。胴部外面下位に接合痕。	
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
26	第239図 PL. 86	砥石	カマド前床直上 ほぼ完形	長厚 5.1 1.3	幅	3.2	砥沢石・切り砥石	四面使用?風化が激しく、使用面の詳細は不明。背面側が弱く研ぎ減る。下端側を欠損する。	34.7g

3区6号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
1	第240図	土師器 高杯	北調査区壁下 脚部片	- -	高	(8.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/赤褐5YR4/8	脚部外面縦の丁寧な撫で。内面横のへら削り。	
2	第240図 PL. 87	土師器 壺か	南東壁下 口縁部	15.7 -	高	(6.3)	細砂粒/良好/にぶい赤褐5YR4/4	口縁部横撫で、口縁部-頸部外面縦のへら磨き、内面ハケ目後斜めのへら磨き。	内外面吸炭。
3	第240図 PL. 87	土師器 甕	北調査区壁下 口縁一部欠損	22.7 8.2	高	27.7 26.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/橙5YR6/6	口縁部外面横撫で、内面横のハケ目後撫で、胴部外面斜め-縦のハケ目(1cmあたり5本)後中位横の撫で、胴部内面上半横の撫で、下端ハケ目残す。	胴部外面中に黒斑。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
4	第240図 PL. 87	石製模造 品	南壁下床上19cm 完形	長厚 2.8 0.3	幅	2.7	変玄武岩・有孔円盤	表裏面とも摩耗、弱く線条痕が残る。側縁は粗い線条痕を伴う面取り整形。径2.5mmの孔を両側穿孔する。	5.3g
5	第240図 PL. 87	敲石	西壁下床上13cm 完形	長厚 16.2 5.1	幅	6.1	粗粒輝石安山岩・棒状礫	小口部両端・側縁に敲打痕が残る。	823.4g

4区12号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高	幅			
1	第243図	土師器 高杯	中央床上3cm 杯部片	19.8 -	高	(4.6)	細砂粒・角閃石/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で。内面撫で後粗い放射状のへら磨き。	器面摩滅。
2	第243図 PL. 86	土師器 高杯	北寄り床直上⇔床上46～50cm ⇔22住北東寄り 体部→底部	- -	高	(6.2)	細砂粒・軽石/良好/褐灰5YR4/1	杯部外面縦のへら撫で、内面放射状のへら磨き。	
3	第243図	土師器 高杯	東寄り床直上⇔床上53cm⇔22住 東寄り 杯接合部→脚上部	- -	高	(10.7)	細砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	杯下半-脚部外面へら磨き。杯部内面撫で、脚部内面撫で。	
4	第243図 PL. 86	土師器 鉢	埋没土 1/4	口底 10.8 3.0	高	6.7 10.5	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤褐5YR4/3	口縁部横撫で、体部外面下半横のへら削り。内面撫で、底部へら削り。	
5	第243図 PL. 87	土師器 埴	北寄り床直上～39cm⇔22住北壁寄り 口縁1/2	口底 14.2 -	高	(7.6) -	細砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部内外面丁寧な撫で後粗い縦のへら磨き。	内面やや摩滅。
6	第243図 PL. 87	土師器 鉢	西壁下⇔埋没土 口縁→胴部片	口底 12.0 -	高	(5.6) 13.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/赤褐5YR4/8	口縁部横撫で、内面へら磨きか。体部外面横のへら削り、内面撫で。	外面摩滅。

4区15号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第247図 PL. 87	土師器 高杯	北壁下床直上 脚部一部欠損	口 台	12.2 10.6	高	12.7	細砂粒・角閃石・雲母/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/3	杯部内外面ハケ目(1cmあたり9本)、脚部外面 縦、内面横のハケ目。脚部内面上半にしぼり 目。	器面摩滅。
2	第247図	土師器 高杯	住居中央床直上 口縁片	口 台	14.8 -	高	(4.0)	細砂粒/良好/灰黄褐 10YR6/2	器面撫で。	外面吸炭。
3	第247図 PL. 87	土師器 高杯	北壁下床直上3cm 脚部	口 台	- 13.1	高	(8.3)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	脚部外面縦のヘラ撫で、内面横の撫で。	器面摩滅。
4	第247図 PL. 87	土師器 壺	南壁際床下6cm 口縁欠損	口 底	- 1.8	高 胴	(8.8) 8.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/4	胴部外面下半斜の撫で。胴部内面下位に接合 痕。	頸部-胴部内面赤 色に変色。
5	第247図 PL. 87	土師器 埴	東壁下床直上 完形	口 底	7.9 -	高 胴	7.3 9.1	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部外面横撫で、内面横のハケ目後撫で。 胴部外面上位はハケ目、下半横のヘラ削り、 内面撫で。(ハケ目5本)	器面摩滅。
6	第247図 PL. 87	土師器 手握ね	中央西寄り床直上 底部片	口 底	- 4.4	高	-	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	体部外面及び底部撫で。	

4区18号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第250図	土師器 甕	床面炭化材集中 部分 口縁~胴部上位 片	口 底	11.0 -	高 胴	(7.7) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部から胴部外面撫で後に斜 めのハケ目(1cmあたり7本)。口縁部内面にハ ケ目残る。胴部内面は輪積み痕と指の押圧が 顕著。	
2	第250図 PL. 87	土師器 甕	床面炭化材集中 部分脇 口縁片	口 底	16.6 -	高	-	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で。	器面摩滅顕著。
3	第250図 PL. 87	土師器 甕	床面炭化材集中 部分 口縁~底部	口 底	15.8 -	高 胴	22.8 -	細砂粒/良好/褐灰 5YR5/1	口縁部横撫で、胴部外面斜の撫で、部分的に 斜の粗いヘラ磨きか。内面撫で。	頸部内面に輪積 み痕。

4区19号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第253図 PL. 87	土師器 鉢か	埋没土 口縁片	口 底	13.8 -	高	(3.8)	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面下位横のヘラ削り。 内面撫でか。	器面摩滅。
2	第253図 PL. 87	土師器 鉢	南壁下床直上 1/2	口 底	15.0 3.6	高	3.8	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部外面横のヘラ撫で、体部外面横-斜め のヘラ撫で。内面撫で後粗い放射状ヘラ磨き。 底部ヘラ削り。	
3	第253図 PL. 87	土師器 鉢	埋没土 1/2	口 底	13.6 4.6	高	4.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端斜のヘラ 撫で。底部ヘラ削り。	内面のハゼ顕著。
4	第253図 PL. 87	土師器 鉢	貯蔵穴北床上11 cm 口縁一部欠損	口 底	14.4 3.4	高	4.2	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端斜のヘラ 削り。内面撫で。	内面の一部吸炭。
5	第253図 PL. 87	土師器 鉢	貯蔵穴埋没土 口縁一部欠損	口 底	10.8 4.5	高	4.6	細砂粒・角閃石/良好/ 浅黄橙10YR8/3	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半斜め のヘラ削り、内面ヘラ撫で。	器面摩滅。
6	第253図 PL. 87	土師器 高杯か	南壁下床直上 杯部	口 台	16.0 -	高	(4.6)	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部内外面撫で。	内面の細かなハ ゼ顕著。
7	第253図 PL. 88	土師器 高杯	カマド内火床直上 ~4cm 杯部3/4	口 台	18.0 -	高	(6.8)	細砂粒・雲母/良好/明 赤褐5YR5/8	口縁部横撫で、内面撫で、体部下半撫で後縦 の粗いヘラ磨き。	内面やや摩滅。
8	第253図 PL. 88	土師器 高杯	北東隅壁下床直上3 cm 1/2	口 台	18.6 -	高	(6.6)	細砂粒・雲母/良好/灰 褐5YR4/2	内外面撫で。	脚部との接合部 ソケット状。口 唇部の一部吸炭。
9	第253図 PL. 88	土師器 高杯	埋没土 杯部1/2	口 台	17.8 -	高	(7.2)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面斜の撫で、下端横の 撫で。	杯部下端に輪積 み痕。内面摩滅 顕著。
10	第253図 PL. 88	土師器 高杯	南壁下床直上 脚部片	口 台	- 14.6	高	(5.1)	細砂粒/良好/赤褐 5YR4/6	脚部外面細かなハケ目後縦のヘラ撫で、裾部 は斜めの粗い撫で。内面ヘラ撫で。	脚裾部の一部吸 炭。
11	第253図	土師器 高杯	北東隅壁下床直上3 cm 脚部1/5	口 台	- 13.4	高	(7.7)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面撫でか、内面雑な横の撫で。脚部内 面に輪積み痕。	器面摩滅。
12	第253図 PL. 88	土師器 高杯	住居南西寄り床直上 ~床直上4cm 底部一部欠	口 台	17.8 15.0	高	14.8	細砂粒・雲母/良好/明 赤褐5YR5/6	杯部内外面撫で後粗いヘラ磨き。脚部外面縦 のヘラ磨き。内面撫で。	脚部内面の輪積 み痕顕著。
13	第253図 PL. 88	土師器 高杯	カマド内火床直上 口縁、裾部一部欠	口 台	17.3 15.1	高	14.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、杯部外面粗い撫で後粗いヘラ 磨き。脚部外面縦の撫で、内面横のヘラ削り、 端部は撫で。	杯部内面のハゼ 顕著。
14	第253図 PL. 88	土師器 高杯	カマド北袖脇床直上 4cm 裾部欠	口 台	17.5 -	高	(13.3)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で後杯部外面縦の撫で。内面粗い ハケ目後撫で、さらに斜放射状のヘラ磨き。 脚部外面縦の撫で。内面中位ヘラ削り、上半 縦の撫で。	杯部内面のハゼ 顕著。
15	第253図 PL. 88	土師器 有孔鉢	南東隅壁際床直上 1/2	口 底	21.4 6.8	高 孔	11.0 2.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で後斜のハケ目(1cmあたり7本)、 内面横のハケ目、体部外面縦の縦のハケ目後 撫で。	内面に灰白色の 付着物。体部下 半に黒斑。

遺物観察表

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 胴	計測値			
16	第253図 PL. 88	土師器 埴	カマド北袖脇床直上 口縁一部欠	13.3 5.1	高 胴	13.3 13.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部撫で後縦の粗いへら磨き。胴部外面上半横のへら磨き、下半横のへら削りか。底部へら削り、内面撫で。	器面摩滅。
17	第253図	土師器 壺か	埋没土 口縁片	14.7 -	高 胴	(4.9) -	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	口縁部受け口状で横撫で。	器面摩滅。
18	第253図	土師器 甕	住居南寄り床上8 cm 口縁～肩部片	15.6 -	高 頸	(7.7) 13.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部撫で、頸部から胴部外面撫で後に斜めのハケ目(1cmあたり7本)、口縁部内面にハケ目残存。胴部内面は輪積み痕と指の押圧痕が顕著。	
19	第254図 PL. 88	土師器 甕か	住居南西寄り床上4～17cm 4/5	21.1 -	高 胴	(21.8) 22.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部-胴部上位斜の粗いハケ目、胴部外面中位斜、下位縦のへら磨き。胴部内面横の撫で後、斜の粗いへら磨き。下半横-斜の粗いハケ目。	胴部内面下位に接合痕、上半に輪積み痕。胴部外面中位に黒斑。
20	第254図 PL. 88	土師器 甕	南東隔壁際床直上 完形	17.3 5.3	高 胴	22.8 23.1	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面横-斜のへら撫で、内面横-斜の強い撫で。	胴部外面中位に粘土付着。胴部外面中位に黒斑。
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
21	第254図 PL. 89	敲石	中央床直上 完形	長 厚	16.4 5.3	幅 6.4	ひん岩・棒状礫	小口部両端に弱い敲打痕が残る。	880.9g

4区20号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 台	高 胴	計測値			
1	第257図	土師器 高杯	カマド内床下4cm 杯部片	16.8 -	高 胴	(6.7)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部外面斜めのハケ目(1cmあたり8本)後撫で、内面は横のハケ目後撫で消し、放射状の粗いへら磨き。体部外面はハケ目後撫で。	
2	第257図	土師器 高杯	カマド内床上29 ～37cm 裾部片	- 16.0	高 胴	(3.3)	細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐5YR4/6	外面撫で後縦のへら磨きか。内面端部は撫で、上位は横のへら削り。	器面摩滅。
3	第257図 PL. 89	土師器 高杯か	掘り方埋戻し土 脚部・3/4	- 8.2	高 胴	(5.2)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄褐 10YR7/4	外面整形不明。脚部内面横のへら削り。	器面摩滅。
4	第257図	土師器 台付甕	埋没土 口縁～胴上部片	15.0 -	高 胴	(22.0) 19.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向のハケ目(1cmあたり7本)、胴部外面左上方向のハケ目、肩部内面縦の強い撫で。	器面摩滅。
5	第257図	土師器 台付甕	中央床上35cm 台部2/3	- -	高 台	(7.7) 9.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 浅黄橙10YR8/4	脚部下端-脚部外面右下方向のハケ目(1cmあたり6本)。脚端部折り返し。脚天井部と脚部内面中央に粘土補填(砂目粘土ほどに砂の含有はない)。	器面摩滅。
6	第257図 PL. 89	土師器 甕?	中央床上34cm 完形	9.4 3.5	高 胴	11.1 11.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面上半横のへら削り、下半縦のへら削り、内面横のへら撫で。胴部内面に輪積み痕。	胴部内面に灰白色の付着物。胴部中位に夾雑物が抜けた孔。
7	第257図	土師器 甕	カマド内床直上 ～床上34cm 口縁～胴部1/3	18.6 -	高 胴	(8.8) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面撫で、下半横のへら削り、内面横から斜のへら撫で。胴部外面中位に粘土付着、胴部内面下半に輪積み痕。	
8	第257図	土師器 甕	埋没土 口縁～胴部	18.5 -	高 頸	(6.3) 14.2	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜のへら削り。内面撫で。	頸部内面に接合痕。
9	第257図	土師器 甕	カマド内 口縁～胴上部片	24.6 -	高 胴	(12.2) 22.4	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR7/4	口縁部横撫で、胴部外面撫で、内面撫で。	

4区22号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要
				口 底	高 胴	計測値			
1	第260図 PL. 89	土師器 杯	埋没土⇔12住埋 没土 1/3	12.7 -	高 胴	4.7	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、底部外面へら磨きか。底部中央へら削り、内面撫で後放射状へら磨き。	内面のハゼ顕著。
2	第260図	土師器 杯	埋没土 口縁～底部片	15.8 -	高 胴	3.4	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、底部撫で、中央部手持ちへら削り。内面撫で。	
3	第260図	土師器 杯	埋没土 口縁～底部片	15.4 -	高 胴	4.0	細砂粒・角閃石/良好/赤 褐5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、底部手持ちへら削り。内面撫で。	底部に黒斑。
4	第260図	土師器 鉢	埋没土 口縁～底部片	14.6 5.8	高 胴	5.0	細砂粒/良好/赤10R5/8	内外面丁寧な撫で、底部へら削り。	内面摩滅。
5	第260図 PL. 89	土師器 台付鉢	埋没土 杯部1/2	18.2 -	高 胴	(8.2)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部斜、体部上半横、下半縦のへら削り。口縁部内面に粗いへら磨き。体部内面は撫で。	
6	第260図 PL. 89	土師器 高杯	中央床下5cm 杯部	16.5 -	高 胴	(5.1)	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、体部外面斜めの粗いへら磨き、内面撫で後放射状の粗いへら磨き。	内面中央のハゼ顕著。
7	第260図	土師器 高杯	北寄り 杯部1/4	17.0 -	高 胴	(6.4)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/赤褐5YR4/8	杯部内外面横撫で後外面は縦、内面はラセン状のへら磨き。体部下端-脚接合部はへら削り。	体部外面の半面吸炭。
8	第260図 PL. 89	土師器 高杯	北寄り 杯部2/3	18.5 -	高 胴	(5.9)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、体部外面へら削り、下端撫で。内面撫で後放射状のへら磨き。	内面摩滅。体部外面に不整形な吸炭部分。
9	第260図	土師器 高杯	北寄り 口縁～脚中位1/4	17.8 -	高 胴	(11.8)	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/8	杯部外面横撫で、内面撫で後放射状の粗いへら磨き。杯部外面下半-脚部外面は撫でか。脚部内面へら削り。	杯部内面摩滅。粉っぽい素地。

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
10	第260図 PL. 89	土師器 高杯	埋没土 脚部	口 台	- 17.6	高 (11.1)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐5YR4/4	脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚裾部内面に接合痕。	脚部外面に吸炭部分。
11	第260図 PL. 89	土師器 高杯	中央付近 底部～脚部	口 台	- 12.6	高 (8.3)	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	脚部外面縦-斜めのヘラ磨き、内面撫で。脚部内面に輪積み痕。杯部との接合部にソケット状の粘土残存。	
12	第260図 PL. 89	土師器 高杯	埋没土 杯部1/3	口 台	20.2 -	高 (6.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙5YR6/4	杯部外面丁寧な撫で。内面は横のハケ目を撫で消す。	器面摩滅。
13	第260図	土師器 高杯	北～中央床上15～35cmに散乱 底部1/2	口 台	- 16.6	高 (4.5)	細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい黄橙10YR6/4	脚部内面屈曲部に接合痕。脚部内外面撫で。	器面摩滅。
14	第260図	土師器 鉢	中央付近に散乱 口縁～胴部1/2	口 底	17.4 -	高 (6.5)	細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面横-斜のヘラ磨き。内面横の撫で。	
15	第261図	土師器 埴	北寄り 口縁片	口 底	13.8 -	高 胴 (6.4)	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部内外面丁寧な撫で後縦のヘラ磨き。	
16	第261図 PL. 89	土師器 甌	北寄り床上30cm前後に散乱 4/5	口 孔	25.5 7.5	高 胴 (25.5 24.7)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、頸部外面右下方向のハケ目(1cmあたり7本)、胴部外面縦のハケ目後撫で、内面横のハケ目。穿孔部の端部はヘラ削りにより面取り。	胴部外面上半に黒斑。胴部内外面下位に接合痕。
17	第261図	土師器 甌	中央付近床上20cm前後に散乱 胴下部～底部片	口 底	- 6.2	高 (11.6)	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙5YR6/4	胴部外面斜め-縦のハケ目(1cmあたり7本)後粗い撫で、内面横のハケ目、下端横のヘラ削り。胴部内面下位に接合痕、中位に輪積み痕。	
18	第261図	土師器 甕	埋没土 口縁～胴部片	口 底	14.8 -	高 頸 (6.7)	細砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐5YR4/3	口縁部横撫で、胴部外面撫で、内面横のヘラ撫で。	
19	第261図	土師器 甕	北寄り 口縁～胴上部片	口 底	15.2 -	高 頸 (7.5) 12.7	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙10YR7/2	口縁部横撫で、胴部外面撫で、内面は斜めの強い撫で。	
20	第261図 PL. 90	土師器 甕	北～東床上40cm前後の広範囲に散乱 口縁～胴部	口 底	17.2 -	高 頸 胴 (26.6) 14.0 25.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい黄橙10YR6/4	口縁部は横撫で後、頸部-肩部に斜のハケ目(1cmあたり5本)。頸部内面ハケ目後撫で、肩部-胴部下位やや幅広の斜の撫で、下端幅の狭い縦の撫で。内面斜の撫で。	胴部外面中位に黒斑。
21	第261図 PL. 90	土師器 壺	中央付近床上15～40cmに散乱 口縁～胴部1/2	口 底	18.8 -	高 胴 (23.0)	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい黄橙10YR6/4	口縁部上半縦のハケ目後横撫で、下半ハケ目(1cmあたり12本)残す。内面横のハケ目。胴部外面ハケ目後撫で、胴部中位斜のヘラ削り。胴部内面上半横の撫で、下半横-斜のハケ目後、粗い縦のヘラ撫で。	胴部内面上半に輪積み痕。
22	第261図 PL. 89	土師器 甕	北～中央床上15cm前後に散乱 口縁～胴部1/3	口 底	16.3 -	高 胴 (19.2) 22.9	細砂粒・軽石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部-頸部横撫で、胴部外面上半縦、下半横のヘラ撫で。内面横-斜のヘラ撫で。	胴部内面に輪積み痕。
23	第261図 PL. 90	土師器 甕	北～東床上40cm前後の広範囲に散乱 口縁～胴部1/2	口 底	18.5 -	高 胴 (20.3) 23.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい赤褐5YR4/4	口縁部雑な横撫で、内面横のヘラ磨き、胴部外面縦-斜の粗いヘラ磨き。胴部内面上半横の強い撫で、下半横の粗いハケ目。	胴部内面上半に輪積み痕。胴部外面下半に被熱痕。上半煤付着。
24	第261図 PL. 89	土師器 埴	埋没土 2/3	口 底	9.3 -	高 胴 (8.5) 8.0	細砂粒/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫でか。体部外面上半は撫で、下半は横のヘラ削りか。内面撫で。体部内面上位に輪積み痕。	体部外面に黒斑。器面摩滅。
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要
25	第261図 PL. 89	砥石	埋没土 破片	長 厚	(8.0) (2.1)	幅 (4.5)	粗粒輝石安山岩・礫砥石	表裏面ともよく使い込まれ、弱く研ぎ減る。	70.4g

4区24号住居

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第265図 PL. 90	土師器 鉢	カマド内火床上3cm 完形	口 底	13.4 3.8	高 (5.2)	細砂粒・粗砂粒/良好/赤10R5/8	口縁部内外面横の粗い撫で、体部外面ヘラ削り後横のヘラ撫で、内面撫で後粗い放射状ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	
2	第265図 PL. 90	土師器 鉢	南東壁下床直上 完形	口 底	12.3 4.7	高 (5.9)	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面横-斜めのヘラ撫で、内面撫で。	内面にハゼ。
3	第265図 PL. 90	土師器 鉢	南東壁下床直上 口縁一部欠損	口 底	10.4 3.4	高 (5.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/赤10YR5/8	口縁部横撫で、体部外面上半横のヘラ撫で、下半斜めのヘラ削りか。内面撫で後粗い放射状のヘラ磨き。	器面摩滅。
4	第265図 PL. 90	土師器 鉢	埋没土 口縁1/2	口 底	12.5 4.1	高 (4.7)	細砂粒・粗砂粒・軽石・角閃石/良好/赤褐5YR4/6	体部外面横のヘラ磨き。内面撫で後放射状のヘラ磨き。底部ヘラ磨き。	内面やや摩滅。
5	第265図	土師器 鉢	貯蔵穴 1/2	口 底	11.8 3.2	高 (4.5)	細砂粒・軽石/良好/赤褐5YR4/6	体部内外面撫で、底部ヘラ削り。	器面摩滅。
6	第265図	土師器 鉢	掘り方 口縁～底部片	口 底	11.6 4.4	高 (3.8)	細砂粒・角閃石・軽石/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面横、内面放射状の撫で。	体部外面の一部吸炭。
7	第265図 PL. 90	土師器 高杯	カマド内床直上 口縁一部欠	口 台	18.5 14.8	高 (16.9)	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐5YR5/6	杯部外面撫で、内面撫で後粗いヘラ磨き。脚部外面縦の撫で、端部横撫で、内面ヘラ削り。	
8	第265図 PL. 90	土師器 高杯	カマド北西袖脇 床上9cm 杯部のみ	口 台	18.7 -	高 (6.8)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/明赤褐5YR5/8	杯部内外面撫で後、外面斜め内面放射状の粗いヘラ磨き。	口縁部内面帯状に吸炭。
9	第265図	土師器 高杯	カマド 脚部片	口 台	- 13.0	高 (6.6)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	脚部外面撫で後縦のヘラ磨き、内面強い撫で、端部撫で。	

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胴			
10	第265図 PL.90	土師器 罎	南東壁下床直上 完形	口底 12.1 4.1	高 14.9 14.2	胴	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/3	口縁部内外面撫で、頸部-肩部外面横の撫で、 体部外面斜めのへら削りか。体部内面に輪積 み痕と剥離。	体部外面に黒斑。
11	第265図 PL.90	土師器 鉢	住居南西寄り床 上5cm 口縁一部欠損	口底 9.8 3.7	高 7.9 10.6	胴	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面横-斜めのへら削り、 内面横のへら撫で。	体部外面に黒斑。
12	第265図 PL.90	土師器 鉢	北西壁下床下4cm 1/2	口底 12.2 4.5	高 9.4 12.1	胴	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/暗赤褐5YR3/3	口縁部内外面横のへら磨き。頸部外面横のへ ら撫で、体部外面横のへら削り、内面へら削 り。	
13	第265図 PL.91	土師器 鉢	カマド全面床直 上 胴部一部欠	口底 22.2 7.2	高 17.3 21.9	胴	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/赤褐 5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面斜のへら撫で。内面 横-斜のへら撫で。	胴部外面下位に 接合痕。
14	第265図 PL.91	土師器 甗	カマド内床直上 口縁～胴部	口底 21.8 -	高 頸 17.9	(13.7) 17.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、頸部外面に斜の細かなハケ目。 胴部外面上半撫で、中位横のへら削り。頸部 内面押圧、胴部内面上半斜のへら削り。	
15	第265図 PL.91	土師器 甗	カマド南東袖脇 床直上 胴部一部欠	口底 17.5 7.1	高 頸 30.0 13.7 24.6	胴	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部横撫で、胴部外面上半斜のハケ目後撫 で、下半横のへら削り。口縁部内面ハケ目後 横撫で、内面撫で。	胴部内面上半に 輪積み痕明瞭。
16	第266図 PL.91	土師器 甗	カマド北西袖脇 床直上 底部欠	口底 17.9 -	高 胴 23.9	(26.8) 23.9	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面上半撫で、中位-下 半斜のへら削り。内面撫で。	胴部内面に輪積 み痕。
17	第266図 PL.91	土師器 甗	カマド南東袖脇 床直上～床下6 ～11cm 口縁～胴部1/2	口底 22.6 -	高 胴 25.2	(24.8) 25.2	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面撫で、中位及び下位 に横のへら削り。内面上半斜のへら削り、下 半斜の撫で。	口縁部内面の一 部と胴部外面に 吸炭部分。
18	第265図 PL.91	土師器 手捏ね	住居北東寄り床 下3cm 完形	口底 4.0 2.5	高 2.7		細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面に押圧。内面撫で。	
19	第265図 PL.91	土師器 手捏ね	北東壁下床直上 完形	口底 4.1 2.8	高 2.5		細砂粒・角閃石/良好/ 黒褐10YR3/1	口縁部横撫で、体部外面押圧、内面撫で。	内外面吸炭。
20	第265図 PL.91	土師器 手捏ね	カマド北西袖脇 床直上 完形	口底 3.8 2.4	高 2.5		細砂粒・角閃石/良好/ 黒10YR2/1	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で。	内外面吸炭。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要
21	第266図 PL.91	砥石	南西壁下床直上 ほぼ完形か	長厚 15.3 2.3	幅 5.1		頁岩・礫砥石	表裏面とも線条痕を伴う研磨面が形成されて いる。	297.8g

4区25号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胴			
1	第269図 PL.92	土師器 鉢	南東壁下床下4cm 完形(口縁一部 欠)	口底 14.7 2.6	高 6.1	胴	細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐5YR4/6	口縁部横撫で、体部外面上半撫で、下半へら 磨きか。内面撫で後放射状へら磨き。	底部凹む。体部 外面に黒斑。
2	第269図 PL.92	土師器 鉢	南東壁際床下9cm 完形(口縁一部 欠)	口底 12.7 3.3	高 5.6	胴	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面縦のへら磨き、体部 下端へら削り、内面撫でか。	内面摩滅。体部 外面に黒斑。
3	第269図	土師器 高杯	カマド内床下4cm 杯部～脚部	口台 -	高 11.3	(11.3)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	杯部-脚部外面ハケ目か。内面撫で。脚部内 面へら削り。	
4	第269図	土師器 高杯	埋没土 杯部片	口台 19.8 -	高 3.3	(3.3)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR4/3	外面撫で後全面丁寧なへら磨き、内面撫で。	
5	第269図 PL.92	土師器 壺	南東壁下床下7cm 口縁～胴上半部	口底 18.6 -	高 胴 30.1	(20.0) 30.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部外面斜めのハケ目、内面横のハケ目後 横撫で、胴部外面ハケ目後撫で、中位は横の へら削り、肩部内面縦の強い撫で、胴部内面 は横のハケ目か。頸部内面に接合痕。胴部内 面上位に輪積み痕。	
6	第269図 PL.92	土師器 壺	カマド内 口縁上部欠損	口底 8.3	高 胴 28.8	(32.4) 28.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面丁寧な撫で、内面撫 で。胴部外面下位に接合痕。	内面やや摩滅。

4区26号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胴			
1	第271図	土師器 杯	埋没土 口縁～体部片	口底 15.7 -	高 3.3	(3.3)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/黒褐10YR3/1	口縁部横撫で、底部へら削り。内面撫で。	内面やや摩滅。
2	第271図	土師器 罎	埋没土 頸部～胴部片	口底 -	高 頸 5.8	(5.8) 5.8	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	胴部外面磨きか。内面撫で。頸部内面の接合 痕明瞭。	

4区28号住居

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口台	高	胴			
1	第273図 PL.92	土師器 高杯	南壁下床下40cm 杯部一部欠損	口台 14.2 -	高 5.7	(5.7)	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄褐10YR7/3	体部外面撫で、下端斜のへら撫で、内面撫で。	内面中央剥離。 口縁部外面の一 部吸炭。器胎内 吸炭。

4区30号住居

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口底	高	胴				
1	第276図	土師器 甕	埋没土 胴部下半~底部	口底	-	高	(2.9)	細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい黄橙10YR7/2	外面撫で、胴部内面下位横のハケ目、中央へラ撫で。	胴部外面下端に黒斑。

4区31号住居

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口底	高	胴				
1	第277図 PL.92	土師器 鉢	埋没土 口縁一部欠損	口底	14.2	高	5.4	細砂粒/良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面横-斜めのへら撫で、下半は斜めへら削りか。内面撫で。底部へら削り。	

3 古代の区画と溝

3区4号溝

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				口底	高	胴				
1	第279図 PL.92	土師器 杯	埋没土 口縁部一部欠	口底	12.1	高	3.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部手持ちへら削り。	外面摩滅。
2	第279図 PL.92	土師器 杯	埋没土 口縁~底部片	口底	11.8	高	3.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部手持ちへら削り。	
3	第279図 PL.92	須恵器 杯	埋没土 1/4	口底	10.0	高	3.0	細砂粒・雲母/還元/灰5Y4/1	口クロ整形(右回転か)。底部回転糸切り無調整。	いぶし焼成。器面摩滅。
4	第279図 PL.92	須恵器 杯	埋没土 底部のみ	口底	-	高	(3.0)	細砂粒・粗砂粒/還元/灰5Y5/1	口クロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	

4区9号溝

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
				口底	高	台					
1	第281図	灰釉陶器 椀	埋没土 高台~体部片	口底	-	高台	(2.3)	10.0	細砂粒/還元/褐灰10YR6/1	口クロ整形(右回転か)。高台は三日月高台で、底部回転へら削り後の付高台。施釉は刷毛掛けと見られ、見込み部にも刷毛掛けされている。	見込み部に重ね焼き痕。東濃か。

3区3B号溝

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
				口底	高	胴						
1	第284図 PL.92	土師器 杯	北西隅底面上8cm 1/2	口底	11.6	高	3.6	7.8	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙5YR6/4	口縁部狭く横撫で、体部外面撫で、内面撫で。底部手持ちへら削り。	内面摩滅。	
2	第284図 PL.92	土師器 杯	北隅底面上11cm 完形	口底	12.2	高	3.3	8.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で後押圧、内面撫で、底部手持ちへら削り。	器面摩滅。	
3	第284図 PL.92	土師器 杯	北寄り底面上4cm 4/5	口底	11.6	高	3.6	7.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、体部外面撫で後押圧、内面撫で、底部撫で、底部に型肌を残す。		
4	第284図 PL.92	土師器 杯	北隅底面上10cm 3/4	口底	11.7	高	3.4	7.0	細砂粒・輝石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で。底部撫で、型肌を残す。	内面の摩滅顕著。	
5	第284図 PL.92	土師器 杯	北寄り埋没土 口縁一部欠損	口底	11.8	高	3.6	7.4	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面雑な撫で、下端押圧、内面撫で、底部撫で、型肌を残す。		
6	第284図 PL.92	土師器 杯	北寄り底面上5cm 2/3	口底	11.4	高	3.5	6.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端押圧、内面丁寧な撫で、底部は撫で、型肌を残す。	器面摩滅。	
7	第284図 PL.92	土師器 杯	北東隅底面上16cm 1/3	口底	11.8	高	3.4	8.2	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙10YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で後押圧、内面丁寧な撫で、底部は撫で、型肌を残す。		
8	第284図 PL.93	土師器 杯	埋没土 1/3	口底	11.4	高	3.4	7.2	細砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部は雑な手持ちへら削りで型肌を残す。	器面摩滅。	
9	第284図	土師器 杯	埋没土 口縁~底部片	口底	12.8	高	3.2	9.4	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で、底部は手持ちへら削りで、中央に窪みが見られる。		
10	第284図 PL.92	土師器 杯	埋没土 1/3	口底	12.2	高	3.2	7.4	細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部手持ちへら削り。		
11	第284図	須恵器 杯	埋没土 底部片	口底	-	高	(2.3)	6.0	細砂粒・粗砂粒/還元/褐灰10YR5/1	口クロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	器面の摩滅顕著。	
12	第284図 PL.93	須恵器 椀	北側底面上5cmに 散在 3/4	口底	14.0	高台	6.0	6.6	5.5	細砂粒/還元/灰白5Y8/1	口クロ整形(右回転)。高台は雑な付高台で歪む。	器面摩滅。

3区3A号溝

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
				口底	高	胴					
1	第284図 PL.93	土師器 杯	埋没土 口縁~底部片	口底	12.8	高	3.3	9.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で。底部手持ちへら削り。	器面摩滅。
2	第284図 PL.93	土師器 甕	埋没土	口底	12.0	高	10.9	-	細砂粒/良好/にぶい黄橙10YR7/4	口縁部中位に突帯を巡らす。胴部内面は撫で、肩部の孔は焼成前穿孔。	器面摩滅。胴部内面に輪積み痕。

4 掘立柱建物とピット列

No.	挿図 PL.No.	種器 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
				口底	高	台					
1	第287図	灰釉陶器 皿	1号掘立柱周辺 底部	口底	-	高台	(1.5)	7.0	細砂粒/還元/灰5Y6/1	口クロ整形(右回転)。高台は三日月高台で、底部回転糸切り後の付高台。施釉は刷毛掛けと見られ、見込み部にも施釉。	見込み部に重ね焼き痕。高台接地部重ね焼きにより剥離。
2	第287図	土師器 杯	1号掘立柱周辺 1/4	口底	12.8	高	3.5	9.9	細砂粒・角閃石・軽石/良好/にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちへら削り。	内面摩滅。

遺物観察表

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 胴	()				
3	第287図 PL. 93	土師器 甕	1号掘立周辺 1/2	口 底	14.0 6.0	高 胴	26.3 23.6	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面斜のへら削り、下端 横のへら削り。内面横-斜の撫で。	胴部外面下位に 接合痕。内面中 位に輪積み痕。

5 ピット

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 胴	()				
1	第295図	土師器 鉢か	3区35号ピット 体部~底部片	口 底	-	高 胴	(6.4) 12.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR4/4	体部外面横のへら削り。内面撫で。	
2	第295図 PL. 93	土師器 台付甕	4区62号ピット 口縁~底部	口 底	12.5 4.0	高 胴	(14.3) 13.5	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面横-斜めのへら削り、 内面撫で。胴部内面に輪積み痕と剥離。	口縁部外面剥離。

6 土坑

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 胴	()				
1	第296図 PL. 93	土師器 台付甕	2区58号土坑 脚部	口 底	- 9.7	高 胴	(7.0)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 黄橙10YR7/3	脚部外面右下方向のハケ目、内面撫で。下端 は折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土 で充填。	

7 井戸

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 胴	()				
1	第301図 PL. 93	土師器 杯	埋没土 小破片	口 底	- 8.2	高 胴	(1.5)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	底部手持ちへら削り。内面撫で後細かな放射 状暗文施文。	
2	第301図	土師器 杯	埋没土 口縁~底部片	口 底	11.6 7.8	高 胴	(3.2)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐5YR5/3	口縁部横撫で、体部外面雑な撫でで型肌を残 す。内面丁寧な撫で。底部手持ちへら削り。	
3	第301図 PL. 93	須恵器 碗か	埋没土 底部片	口 底	- 6.5	高 台	(2.2) 6.2	細砂粒/還元/灰白 5Y8/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り 後の付高台。	器面の摩滅顕著。
4	第301図 PL. 93	須恵器 杯	埋没土 底部片	口 底	- 6.3	高 台	(2.5)	細砂粒・粗砂粒・雲母/ 還元/褐灰10YR4/1	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	いぶし焼成。 器面摩滅。
5	第301図 PL. 93	須恵器 杯	埋没土	口 底	12.6 5.8	高 台	4.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 酸化/にぶい黄橙10YR7/3	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	体部外面下端~底 部吸炭。
6	第301図 PL. 93	須恵器 碗	埋没土 口縁~底部・1/2	口 底	16.0 6.6	高 台	(5.1)	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白10YR7/1	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り 後の付高台で、貼り付け部から剥落。	器面摩滅。
7	第301図 PL. 93	須恵器 碗	埋没土 3/4	口 底	15.4 7.4	高 台	4.3 6.4	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元/灰黄褐10YR6/2	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り 後の雑な付高台。	体部外面に墨書文 字不明。底部吸炭。
8	第301図 PL. 93	灰釉陶器 長頸壺	埋没土 口縁片	口 底	-	高 胴	(4.1)	細砂粒/還元/灰白 5Y7/1	ロクロ整形(回転方向不明)。内外面に厚く施 釉。	東濃か。
9	第301図	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口 底	28.2	高 台	(9.5)	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰黄褐10YR6/2	ロクロ整形。	内面の剥離顕著。 器面摩滅。
10	第301図	須恵器 鉢	埋没土 口縁片	口 底	18.0	高 胴	(6.3) 19.2	細砂粒/還元/灰N4/0	ロクロ整形(回転方向不明)。	口縁部内面に自然 釉。器胎内セ ピア色。

9 畑

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 頸	()				
1	第315図	土師器 甕	3-2区畑耕作土 口縁~胴部片	口 底	25.6 -	高 頸	(5.3) 23.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で。胴部外面斜のへら削り。内面 横のへら撫で。	
2	第324図 PL. 94	須恵器 杯蓋	4区畑耕作土 口縁片	口 底	11.8 -	高 台	(3.6)	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰N5/0	ロクロ整形(回転方向不明)。外稜、口唇部と ともにシャープな作り。天井部外面回転へら削 り。	
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘 要	
3	第324図	砥石	4区畑耕作土 破片	長 厚	(5.7) 2.2	幅	(6.9)	粗粒輝石安山岩	表裏面ともよく使い込まれ研ぎ減り、端部に 刃ならし傷がある。このほか、礫の小口部に も使用面がある。	125.2g

11 溝

2区24号溝

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 底	高 胴	()				
1	第338図	土師器 壺	埋没土 口縁部片	口 底	20.7 -	高 胴	(4.6)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部折り返し。頸部外面斜めの細かなハケ 目、内面ハケ目後撫でか。	器面摩滅。

2区26号溝

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	摘 要	
				口 台	高 胴	()				
1	第339図	土師器 高杯	埋没土 口縁~体部	口 台	19.5 -	高 胴	(5.9)	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、杯部内外面撫でか。内面は放 射状の粗いへら磨き。	
2	第339図	土師器 高杯	埋没土 脚部片	口 台	- 15.0	高 胴	(4.8)	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	器面撫で。	
3	第339図 PL. 94	土師器 高杯	埋没土 1/3	口 台	17.4 14.0	高 胴	13.6	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	杯部外面撫で、内面撫で。杯部下端-脚部外 面縦の撫で。	
4	第339図 PL. 94	土師器 壺	埋没土 口縁・体部一部 欠損	口 底	6.0 -	高 胴	6.4 8.0	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面上半撫で、下半へら 撫で、内面撫で。	器面摩滅。

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
5	第339図	土師器 壺	埋没土 口縁～頸部	口 底	14.4 -	高 胴	(5.3) -	細砂粒/良好/橙5YR6/6	口縁部折り返して、外面横のハケ目(1cmあたり9本)後半撫で、内面横のヘラ磨き。頸部外面縦、内面横-斜めのハケ目。胴部外面ハケ目後粗いヘラ磨き。	
6	第339図 PL. 94	土師器 甗	埋没土 口縁～底部1/4	口 底	13.8 5.4	高 胴	17.7 17.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜めのヘラ撫で、内面撫でか。	胴部外面数カ所吸炭部分。

2区27号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第340図	土師器 壺	埋没土 口縁部片	口 底	14.8 -	高 胴	(4.4) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/3	口縁部は有段で、外面撫で、内面ハケ目後撫で。頸部外面斜めのハケ目、内面撫で。	外面-口縁部内面赤彩。
2	第340図	土師器 台付甗	埋没土 底部～脚部	口 台	- 8.4	高 胴	(6.5) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐10YR5/3	胴部外面撫で、内面格子状に細かな撫で。脚部外面斜めの撫で。	
3	第340図	土師器 甗	埋没土 口縁～肩部片	口 底	15.6 -	高 胴	(5.5) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄褐10YR7/3	口縁部外面-頸部斜め、口縁部内面横のハケ目(1cmあたり6本)後口縁部横撫で。胴部外面斜めのハケ目、内面横のハケ目後撫で。	胴部内面摩滅。

2区28号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第341図 PL. 94	土師器 杯	西側下層埋没土 口縁一部欠損	口 底	14.5 -	高 胴	4.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で。底部手持ちヘラ削り。内面撫で。	器面摩滅。

4区12号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第348図	土師器 杯	埋没土 口縁～底部片	口 底	13.6 9.4	高 胴	(3.1)	細砂粒/良好/にぶい赤 褐5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面丁寧な撫で。底部手持ちヘラ削り。	
2	第348図	須恵器 皿	埋没土 1/3	口 底	12.0 5.4	高 胴	2.5	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰N6/0	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。	内面やや摩滅。口縁部に歪み。
3	第348図	須恵器 椀	埋没土 1/4	口 底	13.4 6.3	高 台	6.3 6.0	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰N5/0	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。	
4	第348図	須恵器 椀	埋没土 1/4	口 底	13.8 7.0	高 台	5.4 7.0	細砂粒・粗砂粒/還元/ 褐灰10YR6/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
5	第348図 PL. 94	須恵器 甗	埋没土 口縁～胴部上半	口 底	17.4 -	高 頸	(8.9) 12.5	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰5Y4/1	ロクロ整形(右回転か)。	胴部器胎内セピア色。
6	第348図	須恵器 甗	南側底面直上 口縁～胴部	口 底	18.4 -	高 胴	(11.5) 21.5	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰5Y5/1	ロクロ整形(回転方向不明)。	

5区9号溝

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第350図 PL. 94	土師器 円盤状土 製品(甗転用)	中央底面直上 完形	長 幅	8.9 8.5	厚	1.6	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/にぶい黄褐 10YR5/3	甗の底部破片の縁辺を打ち欠いて円盤状に加工か。	内外面に付着物。

12 遺構外の遺物

2区1号土器集中地点

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第351図	土師器 器台か	南側 脚部	口 台	- 20.9	高 胴	(3.6) -	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	脚部外面縦のヘラ磨き、内面細かなハケ目後撫で。互い違い2段の4孔を穿つ。	器面摩滅。
2	第351図 PL. 94	土師器 器台	西側 完形	口 台	9.1 12.2	高 胴	11.4	細砂粒/良好/橙5YR6/8	受け部外面斜めのヘラ撫でか。脚部は不明。脚部の穿孔は3孔。	器面の摩滅顕著。
3	第351図	土師器 鉢	北側(28溝脇) 口縁～胴部片	口 底	18.8 -	高 胴	(8.5)	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 黄褐10YR5/3	口縁部横撫で、体部外面斜めのハケ目(1cmあたり5本)、内面斜めの撫で。	
4	第351図	土師器 台付鉢	北側(28溝脇) 台部欠損	口 底	12.0 -	高 胴	(9.4) 11.2	細砂粒/良好/にぶい赤 褐5YR5/4	口縁部外面斜めのハケ目後粗い撫で、内面斜めのハケ目(1cmあたり10本)。体部外面縦-斜め、内面斜めのハケ目。体部内外面に輪積み痕。	
5	第352図	土師器 台付甗	北側(28溝脇) 口縁～胴上部片	口 底	17.8 -	高 胴	(7.9) -	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のやや雑なハケ目(1cmあたり6本)、肩部内面斜めの撫で。	
6	第352図	土師器 台付甗	西側(22住脇) 口縁～胴上部	口 底	17.0 -	高 胴	(11.1) 22.3	細砂粒/良好/灰白 10YR8/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり4本)、胴部内面撫で。	器面摩滅。
7	第352図 PL. 94	土師器 台付甗	西側 3/4	口 底	9.2 7.2	高 胴	13.3 9.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/8	口縁部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり9本)、内面撫で。脚部外面斜めのハケ目、内面横のハケ目。接合部外面指先の押圧。胴部内面に輪積み痕、下端に接合痕。	胴部下半-脚部被熱か。
8	第352図 PL. 94	土師器 台付甗	西側 2/3	口 台	8.1 5.9	高 胴	12.6 9.0	細砂粒/良好/にぶい黄 褐10YR5/4	口縁部-頸部外面斜めの撫で。胴部外面縦の粗いハケ目後撫で、内面撫で。脚部外面縦のヘラ撫で、下端は横のヘラ削り。	脚部内外面被熱のため剥離か。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 台	高 胴	胎土/焼成/色調			
9	第352図 PL.94	土師器 台付鉢か	西側 4/5	口 台 8.6 6.0	高 胴 9.4	11.2 9.4	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、体部外面上半斜めのハケ目、 下半-脚部外面縦のヘラ撫で。胴部内面撫で。 胴部内面上位に輪積み痕。	器面摩滅。
10	第352図 PL.94	土師器 台付鉢か	西側 胴部一部欠損	口 台 8.1 5.4	高 胴 9.1	10.3 9.1	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面上半横、下半縦のヘ ラ磨き、内面撫で。脚部内外面撫で。	器面摩滅。
11	第352図 PL.94	土師器 台付鉢	西側 3/5	口 台 11.9 7.7	高 胴 11.8	16.3 11.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部外面横撫で、内面横のハケ目後粗い撫 で。胴部外面左方向のハケ目(1cmあたり7本)、 内面横-斜めのハケ目。脚部外面縦のハケ目 後撫で、内面横のハケ目。	
12	第352図 PL.94	土師器 台付鉢	西側 3/5	口 台 14.2 7.0	高 胴 17.9	20.1 17.9	細砂粒/良好/灰白 10YR8/2	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴 部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)。脚 部外面右下方向のハケ目。脚端部折り返し。	
13	第352図	土師器 台付鉢	北側(28溝脇) 口縁~胴部片	口 底 21.8 -	高 胴 28.1	(26.6) 28.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐10YR5/3	口縁部は2段の稜を作り出し、横撫で。頸部- 肩部外面左下方向、胴部外面左上方向の3段 ほどのハケ目(1cmあたり4本)後肩部外面に横 のハケ目、胴部内面は撫で。	胴部外面下半変 色。内面は摩滅。
14	第352図	土師器 鉢	北側(28溝脇) 口縁~胴上部片	口 底 15.4 -	高 胴 21.4	(9.6) 21.4	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部-頸部外面斜め、口縁部内面横のハケ 目(1cmあたり7本)後口縁部横撫で。胴部外面 斜めのハケ目、内面斜めのヘラ削り。	

2区2号土器集中地点

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 底	高 胴	胎土/焼成/色調			
1	第353図 PL.95	土師器 鉢	西側 4/5	口 底 10.4 5.3	高 胴 11.3	7.3 11.3	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面横のヘラ磨き、内面 撫で。	体部外面に黒斑。
2	第353図 PL.95	土師器 鉢	西側 完形	口 底 13.0 3.8	高 胴 12.9	9.4 12.9	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 橙5YR6/4	丸底気味。口縁部内外面撫で。体部外面上半 撫で、下半横のヘラ削り、内面撫で。底部ヘ ラ削り。頸部外面に輪積み痕。	体部内面に黒斑。
3	第353図 PL.95	土師器 埴	東側(流路脇) 3/4	口 底 11.0 -	高 胴 16.3	17.4 16.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部外面縦の粗いハケ目か。 体部外面斜めのヘラ撫で、内面斜めの撫で。 頸部内面に接合痕。	体部外面中位に 黒斑。

2区3号土器集中地点

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 底	高 胴	胎土/焼成/色調			
1	第354図 PL.95	土師器 壺	南側 1/2(底部欠損)	口 底 12.0 -	高 胴 20.0	(19.2) 20.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部外面斜め、内面横-斜めのハケ目後撫 で。胴部外面ハケ目後斜め-縦のヘラ磨き。 胴部内面上半指先の押圧、下半横のハケ目。 胴部内面輪積み痕顕著。	
2	第354図	土師器 壺	南側(1溝脇) 口縁~肩部片	口 底 15.6 -	高 頸 12.0	(7.5) 12.0	細砂粒・粗砂粒・角閃 石・軽石/良好/にぶい 黄褐10YR5/4	口縁部折り返し。頸部-胴部外面斜めのハケ 目(1cmあたり4-5本)、口縁部内面横のハケ目 後撫でか。	内面ハゼ顕著。 器面摩滅。
3	第354図	土師器 壺	北側(1溝脇) 底部~頸部	口 底 4.2	高 胴 14.8	(12.5) 14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 赤褐5YR4/6	胴部外面横のヘラ磨き、内面撫で。胴部下位 内外面に接合痕、肩部内面に輪積み痕。	
4	第355図	土師器 台付鉢	北側 脚部欠損	口 底 19.6 -	高 胴 28.7	(24.6) 28.7	細砂粒/良好/明黄褐 10YR6/6	口縁部横撫で、肩部外面左下方向、胴部外面 左上方向の3段ほどのハケ目(1cmあたり5本)、 頸部内面縦の強い撫で。脚部内面下端に接合 痕。	胴部外面下半被 熱。
5	第355図 PL.95	土師器 台付鉢	北側(1溝脇) 口縁~脚部1/2	口 台 10.6 8.0	高 胴 14.5	17.2 14.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、肩部外面左下方向、胴部外面 左上方向のハケ目(1cmあたり8本)、内面撫で。 脚部外面左下方向のハケ目。脚部天井に砂目 粘土補填。底部内面には補填なし。	胴部外面に黒斑。

2区流路脇土器集中地点

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 台	高 胴	胎土/焼成/色調			
1	第357図 PL.95	土師器 高杯	広範囲に散乱 杯部1/2	口 台 21.8 11.4	高 胴 13.2	13.2	細砂粒・軽石/良好/明 赤褐5YR5/6	杯部外面撫で後粗い斜めのヘラ磨き、内面撫 で。脚部外面ヘラ磨きか。脚部の穿孔は3孔。	杯部内面わずか に吸炭。
2	第357図	土師器 高杯	北側に散乱 杯部2/3	口 台 21.4 -	高 胴 6.1	(6.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	杯部外面斜め、内面斜め放射状の粗いヘラ磨 き。	
3	第357図	土師器 高杯	埋没土 底部~杯部	口 台 14.0	高 胴 11.2	(11.2)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	杯部外面ハケ目(1cmあたり6本)後撫で。脚部 外面はヘラ磨きか。内面撫で。脚部の穿孔は 3孔。	器面摩滅。
4	第357図	土師器 器台か	南寄り 脚部片	口 台 8.6	高 胴 5.6	(5.6)	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/4	脚部内外面撫でか。脚部の穿孔は4孔。	
5	第357図	土師器 高杯	北寄り 脚部1/3	口 台 13.6	高 胴 6.9	(6.9)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙5YR6/4	脚部外面縦のヘラ磨き、内面は撫でか。脚部 の穿孔は外面からで3孔。	
6	第357図	土師器 小型鉢	1/2	口 底 6.8 4.0	高 胴 6.3	6.3 6.3	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/2	体部外面斜めのヘラ撫で、内面撫で。	
7	第357図 PL.95	土師器 鉢	中央付近 完形	口 底 11.3 3.6	高 胴 11.6	10.3 11.6	細砂粒・角閃石・軽石 /良好/にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部横撫で、体部外面斜めのハケ目後斜め のヘラ磨き、内面撫で。頸部外面は斜めの撫 で。	底部付近に黒斑。
8	第357図	土師器 台付鉢か	南寄り 脚部一部欠損	口 底 9.5 -	高 胴 12.1	(16.6) 12.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐5YR5/6	口縁部受け口状で撫でか。体部外面斜めのヘ ラ磨きか。体部内面下半横の細かなハケ目。 脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
9	第357図	土師器 埴	地点B内 口縁~肩部	口 底 11.6 -	高 胴 13.8	(13.7) 13.8	細砂粒・軽石/良好/に ぶい黄橙10YR6/4	口縁部-頸部外面斜めハケ目後縦のヘラ磨き、 内面斜めの細かなハケ目後縦の粗い撫で。胴 部外面斜めのヘラ磨き、内面撫で。	

No.	挿図 PL.No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	胴			
10	第357図 PL.95	土師器 埴	口縁部欠損	7.4 2.6	高	6.8 7.1	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部外面撫で、内面撫で後粗い縦のヘラ磨き。体部外面縦のヘラ磨きか。底部外面はやや上げ底状。体部に外側からの焼成後穿孔。	器面摩滅。口縁部内面にハゼ。
11	第357図	土師器 器台	北寄り 脚部欠損	8.7 -	高	(5.1)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	受け部外面上半撫で、下半は縦のヘラ磨き、内面全面ヘラ磨き。脚部の穿孔は3孔。	受け部内面吸炭。
12	第357図 PL.95	土師器 器台	北寄り 4/5	7.8 12.3	高	8.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙5YR6/4	受け部内外面撫でか。脚部外面縦の撫で、内面横のハケ目(1cmあたり6本)後撫で。	受け部内面の摩滅顕著。
13	第357図 PL.95	土師器 器台か	南側 脚部	- 7.5	高	(4.6)	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚部の穿孔は4孔。	
14	第357図 PL.95	土師器 器台	地点B⇔南側 ほぼ完形(端部欠損)	22.7 19.5	高	21.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	受け部の側面に6カ所の方形の透かしを穿ち、内外面ともにハケ目後撫で消す。脚柱部外面縦のヘラ磨き、裾部外面は細かなハケ目後撫で、裾部と脚柱部との境に4孔、裾部上面に5孔、側面に8孔を穿つ。	
15	第357図	土師器 壺	北寄り 北口縁〜肩部片	12.6 -	高	(6.9)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫でか。頸部外面斜めの細かなハケ目、胴部外面斜めのハケ目後斜めの粗いヘラ磨き、内面撫で。	器面摩滅。
16	第357図	土師器 甗	口縁〜肩部片	12.4 -	高	(6.1)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR6/3	口縁部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり4本)、内面撫で。	器面摩滅。
17	第358図	土師器 壺	4/5	12.5 6.7	高	23.7 22.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部・頸部外面斜めのハケ目後撫で。胴部外面斜めのヘラ磨き、内面撫でか。底部外面上げ底状。	器面摩滅。
18	第358図 PL.96	土師器 壺	地点B脇 2/3	12.8 7.1	高	26.1 24.6	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい橙5YR7/3	口縁部斜め、内面横のハケ目後粗い撫で。胴部外面斜めのヘラ磨き、内面横のハケ目。頸部内面及び胴部内面下位に接合痕。	胴部外面下半吸炭。
19	第358図 PL.96	土師器 壺	地点A内 4/5	15.2 6.1	高	23.9 23.1	細砂粒・軽石/良好/橙 5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。頸部内面に接合痕。口縁部に弱い段。胴部中央に最大径。底部外面やや上げ底状。	器面摩滅。
20	第358図	土師器 壺	地点B脇 口縁部欠損	- 6.2	高	(15.6) 16.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	頸部外面斜め、内面撫でのハケ目、肩部外面細かなハケ目後斜めのヘラ磨き。胴部下半外面斜めのハケ目、内面撫でか。胴部外面中位に布の圧痕。	胴部外面に吸炭部分。
21	第358図 PL.96	土師器 台付甗	地点A内 脚部欠損	14.4 -	高	(14.6) 15.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり5本)。胴部内面下半横のハケ目、上半撫で。	脚部下半被熱のため赤色。脚部貼り付け部から剥離。
22	第358図 PL.96	土師器 台付甗	南側 口縁一部欠損	11.3 7.5	高	16.6 12.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部外面粗めのハケ目。胴部外面撫で、胴部内面横の撫で。脚部外面縦の撫で、端部横の撫で、脚部内面斜めの撫で。脚部内外面下位に接合痕。	脚部外面吸炭。
23	第358図	土師器 台付甗	地点B内 底部〜脚部欠損	15.1 -	高	(16.2) 20.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり8本)、内面撫でか。	胴部外面摩滅。
24	第358図 PL.96	土師器 台付甗	地点A内 脚部欠損	16.6 -	高	(21.4) 22.5	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向の3段ほどのハケ目(1cmあたり6本)後肩部外面に横のハケ目。内面撫で。胴部内面下位に接合痕。	胴部外面下半被熱で変色。
25	第359図	土師器 台付甗	地点A内 脚部欠損	18.9 -	高	(27.0) 23.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部横撫で、胴部外面縦-斜めのヘラ削り、内面横のハケ目(1cmあたり4本)。脚部外面撫で。	
26	第359図 PL.96	土師器 台付甗	地点A内 3/4	19.0 8.7	高	27.9 23.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/灰黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面上半撫で、下半横のハケ目。脚部外面縦のハケ目。	胴部外面中位に黒斑。下半被熱か。
27	第359図 PL.96	土師器 台付甗	地点A内 4/5	16.7 8.6	高	24.7 20.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/灰黄褐10YR4/2	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面上半撫で、下半横のヘラ磨き。胴部外面下位に接合痕、内面に輪積み痕。	胴部外面下半-脚部被熱により変色。
28	第359図 PL.97	土師器 台付甗	地点A内 4/5	17.3 8.2	高	25.3 20.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 暗褐10YR3/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面斜めのハケ目(1cmあたり5本)、胴部外面全体にハケ目か。内面横のハケ目。肩部内面に輪積み痕。	胴部外面下半被熱で変色、中位剥離。外面中位に黒斑。
29	第359図	土師器 台付甗	中央付近 脚部	- 9.6	高	(7.1) -	細砂粒・軽石/良好/灰 白10YR7/1	脚部外面右下方向のハケ目(1cmあたり6本)。端部内面折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土で補填。	
30	第359図	土師器 台付甗か	脚部	- 7.2	高	(4.5) -	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	脚部外面撫で、内面斜めのハケ目。一部胴部との接合面で剥離。強い撫での痕跡を残す。	
31	第359図	土師器 甗	中央付近 口縁部欠損	- 4.8	高	(11.4) 12.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり6本)、内面下半ハケ目後斜めの撫で。	胴部外面に黒斑。
32	第359図 PL.97	土師器 甗	中央付近 4/5	12.8 4.8	高	16.0 15.3	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/褐灰5YR5/1	口縁部横撫で、内面横のハケ目。頸部-胴部外面斜めのハケ目(1cmあたり5本)、内面撫で。胴部内面下位に接合痕。	胴部外面下半被熱のため赤変。
33	第360図 PL.97	土師器 甗	地点A内 3/4	14.0 5.8	高	13.0 13.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-胴部外面斜めの粗いハケ目(1cmあたり5本)、内面横-斜めのハケ目。	器面摩滅。

遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 底	13.1 5.5	高 胴	16.8 17.3			
34	第360図 PL. 97	土師器 甗	北寄り 完形	口 底	13.1 5.5	高 胴	16.8 17.3	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部-頸部外面左上方向、胴部外面左上方向のハケ目(1cmあたり5本)、内面撫で。胴部内面下位に接合痕。	頸部-胴部上半外面に大きなハゼ。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)				材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要
35	第360図 PL. 97	管玉	1/2	長 厚	2.1 0.6	幅	0.6	蛇紋岩・管玉	体部に縦線条痕が残る。径2.5mmの孔を両側穿孔する。	1.4g

4区包含層

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 底	12.0 7.9	高	3.1			
1	第362図 PL. 97	土師器 杯	トレンチ北隅 3/4	口 底	12.0 7.9	高	3.1	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面雑な撫で、内面撫で。底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
2	第362図	土師器 杯	北西側 1/2	口 底	11.8 7.0	高	2.8	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部横撫で、体部外面撫で、内面撫で、底部手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
3	第362図	灰釉陶器 碗か	北東側 底部片	口 底	- 7.6	高 台	- 7.0	細砂粒/還元/灰白N7/0	ロクロ整形(右回転)。高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉技法は不明。	産地東濃か。
4	第362図	須恵器 壺	南西側(16住上) 底部～高台片	口 底	- 10.2	高 台	(3.4) 12.0	細砂粒/還元/灰白 5Y7/1	ロクロ整形(回転方向不明)、高台は付高台。	産地秋間か。
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値 (cm)				材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要
5	第362図	巡方	トレンチ南隅(16 住上) 完形	長 厚	4.1 0.7	幅	4.2	蛇紋岩	略方形だが3mmほど幅が広い。背面側は丁寧に研磨され光沢を帯びているが、裏面側には線条痕が残る。潜り孔を横位穿孔。	29.2g

1区遺構外の遺物

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 底	-	高 胴	-			
1	第363図 PL. 97	須恵器 すり鉢	B混土下 底部～体部片	口 底	-	高 胴	-	細砂粒/還元/褐灰 10YR6/1	ロクロ整形か。高台が付くと思われるが、剥落。	胴部外面に自然釉。秋間か。
2	第363図 PL. 97	土師器 壺	集落確認面 口縁部片	口 底	-	高 胴	-	細砂粒/良好/橙5YR6/6	有段口縁で、口縁部外面に2本単位の棒状の貼付。	器面摩滅。

2区遺構外の遺物

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口 台	-	高 胴	(6.6)			
1	第363図	土師器 高杯	中世面 底部～脚部	口 台	-	高 胴	(6.6)	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR5/2	杯部内外面ヘラ磨きか。脚部外面縦のヘラ磨き、内面横-斜めのヘラ撫で。	器面わずかに吸炭。
2	第363図	土師器 器台か	集落調査面 脚部片	口 台	-	高 胴	(5.2)	細砂粒・雲母/良好/ にぶい橙5YR6/4	脚部外面ハケ目後縦のヘラ磨き、内面斜めの撫で。上下2段3組の穿孔を穿つ。	器面摩滅。
3	第363図	土師器 鉢	集落調査面 口縁～底部片	口 底	13.8	高	5.6	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/灰黄褐10YR6/2	口縁部横撫で、体部外面撫で、下半斜のヘラ削り、内面撫で。	内外面吸炭。
4	第363図 PL. 97	土師器 鉢	1溝に混入 完形	口 底	12.5 5.1	高	4.1	細砂粒・角閃石/良好/ 橙5YR6/6	口縁部横撫で、体部外面撫で、下端斜のヘラ削り。内面撫で後放射状にヘラ磨きか。	内面の摩滅顕著。
5	第363図 PL. 97	土師器 鉢	畑調査面 4/5	口 底	13.6 6.0	高	(7.2)	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐5YR5/4	体部外面撫で、下端斜めのヘラ削り、内面斜めの木口状工具の撫で。	底部付近に黒斑。
6	第363図 PL. 97	土師器 鉢	集落調査面 完形	口 底	14.9 -	高	5.3	細砂粒・赤砂粒・角閃 石・軽石/良好/5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面横の細かなヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き。	体部内外面の一部吸炭。
7	第363図	土師器 鉢	3号井戸に混入 口縁～体部	口 底	14.8	高	(5.4)	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	口縁部横撫で、体部外面粗いヘラ磨き、内面撫でか。	
8	第364図	土師器 鉢	3号穴に混入 1/3	口 底	8.6 4.0	高 胴	5.7 9.0	細砂粒・軽石/良好/灰 黄褐10YR5/2	口縁部横撫で、体部内面斜めのヘラ削り、内面斜めの強い撫で。	
9	第364図	須恵器 杯	2号井戸に混入 底部片	口 底	- 6.5	高	-	細砂粒・雲母/酸化/ にぶい橙5YR6/4	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
10	第364図	須恵器 杯	2号井戸に混入 底部3/4	口 底	- 6.8	高	-	細砂粒・酸化/にぶい赤 褐5YR5/4	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	内面に黒色の付着物。
11	第364図	灰釉陶器 皿	256ピットに混入 底部片	口 底	- 6.8	高 台	- 6.0	細砂粒/還元/灰白 5Y8/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は三角高台で、底部回転糸切り後の付高台。施釉技法は不明。	丸石2号窯式か。
12	第364図	灰釉陶器 皿	中世面 1/4	口 底	14.6 9.0	高 台	2.2 8.4	細砂粒/還元/灰白 5Y8/1	ロクロ整形(右回転か)。高台は角高台で、底部回転ヘラ削り後の付高台。釉は内面のみ厚く施す。	黒笹14号窯式。
13	第364図	土師器 埴	西側 体部～底部2/3	口 底	- 2.1	高 胴	(4.8) 6.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	体部外面横のヘラ磨き、内面斜めのヘラ磨き。	器面摩滅。粉っぽい素地。
14	第364図	土師器 埴	集落調査面 4/5	口 底	8.0 1.6	高 胴	7.4 8.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐5YR5/6	口縁部外面斜めの細かなハケ目(1cmあたり7本)後粗い撫で。体部上半撫で、下半横のヘラ削り。	
15	第364図 PL. 97	土師器 器台	16溝に混入 4/5	口 台	7.4 9.2	高	6.9	細砂粒/良好/橙5YR6/6	受け部内外面撫でか。脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚部の穿孔は3孔。	器面摩滅。
16	第364図	土師器 器台	1号穴に混入 杯部～脚部	口 台	9.0	高	(6.0)	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄褐10YR5/3	受け部内外面縦のヘラ磨き、脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚部の穿孔は3孔と思われる。	
17	第364図	土師器 壺	集落調査面 口縁部片	口 底	20.0	高 胴	(2.9)	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐5YR5/6	有段口縁。頸部外面は左上方向の細かなハケ目、内面斜めのヘラ磨き。	
18	第364図	土師器 壺	2ピット内 口縁～頸部片	口 底	19.4	高 胴	(7.0)	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部厚い折り返し。口縁部内外面横のヘラ磨き、頸部外面左上方向の細かなハケ目。	内面の剥離顕著。 口縁部内面吸炭。

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 底	高 頸 胴	胎 土 / 焼 成 / 色 調			
19	第364図 PL. 97	土師器 台付甕	集落調査面 3/5	口底 16.5 8.5	高頸 胴 26.5 14.7 23.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部横撫で、頸部-肩部外面左下方向、胴部外面左上方向の2-3段のハケ目(1cmあたり5本)。胴部内面撫で。脚部外面右下方向のハケ目。端部折り返し。脚部天井及び底部内面砂目粘土補填。	胴部外面の一部 摩滅顕著。	
20	第364図	土師器 台付甕	集落調査面北側 底部～上部	口台 -	高 胴 (5.0) -	細砂粒・雲母/良好/に ぶい赤褐5YR5/4	胴部外面下端縦のヘラ撫で、内面撫で。脚部外面下半縦の細かなハケ目(1cmあたり10本)、内面横のハケ目後撫で。	器面摩滅。	
21	第364図	土師器 甕	25土坑に混入 口縁部片	口底 15.6 -	高 胴 (4.1) -	細砂粒/良好/にぶい黄 橙10YR7/3	口縁部折り返しで撫で。頸部外面斜め-縦のハケ目、内面斜めのハケ目後撫で。		
22	第364図	土師器 甕か	1井戸に混入 口縁片	口底 10.7 -	高 胴 (3.4) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 浅黄橙10YR8/4	口縁部横撫で、内面には横のハケ目を残す。		
23	第364図	土師器 甕	集落調査面 口縁～胴上半部	口底 19.7 -	高 胴 (14.6) 24.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙5YR6/6	口縁部横撫で、胴部外面縦の粗いヘラ磨き、内面横のヘラ削り後斜めの粗いヘラ磨き。		
24	第364図 PL. 97	埴輪 円筒	畑調査面 破片	口底 -	高 胴 (11.9) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	底部周辺の破片。外面端部まで縦ハケ目。	器面摩滅。	
25	第364図	土師器 手捏ね	集落調査面 底部	口底 -	高 胴 (2.7) 2.6	細砂粒/良好/灰白 5Y8/2	内外面ともに撫で。	外面の一部吸炭。	
26	第364図 PL. 97	土師器 手捏ね	畑調査面 完形	口底 4.7 3.6	高 胴 4.3	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR6/4	台付鉢か。器面指先の押圧と撫で。		
27	第364図 PL. 97	土師器 手捏ね	西側 1/2	口底 6.8 3.6	高 胴 5.4	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙10YR7/3	台付鉢か。器面撫で、脚部外面押圧に近いような指先の強い撫で。		
No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値 (cm)			材 質・石 材 形 態・素 材	製作状況・使用状況	摘 要
28	第364図 PL. 97	管玉	西側 1/2	長 厚 2.5 0.5	幅 0.5	0.5	材質・石材 形態・素材 蛇紋岩・管玉	体部は磨き整形されているが、弱い線条痕が残る。径3mmの孔を両側穿孔する。	1.5g

3区遺構外の遺物

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 底	高 頸 胴	胎 土 / 焼 成 / 色 調			
1	第365図 PL. 98	土師器 高杯	3-1区畑調査面 4/5	口台 19.3 14.0	高 胴 14.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐 5YR5/4	杯部内外面横の撫で、脚部外面縦のヘラ撫で、裾部撫で、内面斜めのヘラ撫で。	杯部内面摩滅。	
2	第365図 PL. 98	土師器 高杯	2住に混入 脚部	口台 -	高 胴 (4.9) 13.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐5YR5/6	脚部外面撫で後縦の粗いヘラ磨き、内面撫で。脚部内面に輪積み痕顕著。		
3	第365図	須恵器 杯	1土坑に混入 底部片	口底 -	高 胴 (2.3) 5.4	細砂粒・粗砂粒/還元/ 褐灰10YR6/1	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	内面やや摩滅。	
4	第365図 PL. 98	土師器 埴	3-1区泥流内 1/2	口底 -	高 胴 (6.9) 2.2	9.8	細砂粒/良好/赤10R5/6	胴部外面整形不明。底部は凹む。	器面摩滅。 内面吸炭。

4区遺構外の遺物

No.	挿図 PL.No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計 測 値			胎 土 / 焼 成 / 色 調	成形・整形の特徴	摘 要
				口 底	高 頸 胴	胎 土 / 焼 成 / 色 調			
1	第365図	土師器 鉢	北東側包含層 1/4	口底 14.5 6.0	高 胴 5.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙5YR6/6	体部外面横のヘラ磨き。内面は斜のハケ目後撫で、さらに粗いヘラ磨き。		
2	第365図 PL. 98	土師器 器台か	8住に混入 口縁片	口台 13.7 -	高 胴 -	細砂粒/良好/にぶい橙 5YR6/4	外面は丁寧な撫で、内面やや粗い撫で。		
3	第365図	土師器 高杯	平安・中世面 脚部片	口台 -	高 胴 (2.5) 18.3	細砂粒・軽石/良好/赤 10R5/6	脚内外面撫で。	器面摩滅。	
4	第365図	土師器 器台	古墳集落面 4/5(裾部欠く)	口台 8.4	高 胴 (5.3) -	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙5YR6/6	外面横-縦のヘラ磨き、脚部内面撫で、脚部の穿孔は3孔。	受け部内面に細 かなハゼ。	
5	第365図	土師器 鉢	流路内 口縁～胴部片	口底 10.9 -	高 頸 胴 11.6 -	(5.0) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、口縁部内面に横のハケ目。胴部外面撫で、内面横の粗い撫で。	
6	第365図	灰釉陶器 皿か	B混土面 底部～高台片	口底 -	高 台 (2.3) 8.3	8.0	細砂粒/還元/灰白 5Y7/1	ロクロ整形(右回転)。高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉は刷毛掛けと見られ、見込み部にも施されている。	見込み部に重ね 焼き痕。産地東 濃か。
7	第365図	灰釉陶器 段皿	北東側包含層 口縁～体部片	口底 16.2 -	高 胴 (2.4) -	細砂粒/還元/灰5Y6/1	ロクロ整形(回転方向不明)。内外面厚く施釉。	産地東濃か。	
8	第365図 PL. 98	土師器 壺	古墳集落面 3/4	口底 12.2 5.8	高 頸 胴 17.3 13.6	細砂粒/良好/にぶい赤 褐5YR4/4	口縁部内面撫で。胴部外面ハケ目後撫でか。	器面摩滅。	
9	第365図 PL. 98	土師器 壺	流路内 口縁～胴部上半	口底 18.6 -	高 頸 胴 11.6 -	(8.3) -	細砂粒・軽石/良好/に ぶい赤褐5YR5/4	口縁部横撫で、胴部外面はヘラ磨きか。	器面摩滅。
10	第365図 PL. 98	土師器 壺	古墳集落面 ほぼ完形(体部一部欠)	口底 18.9 5.8	高 頸 胴 28.4 -	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	口縁部横撫で、胴部外面斜のヘラ磨きか。下端横のヘラ削り。底部ヘラ削り。内面撫で。	胴部内面下位に 接合痕。	
11	第365図	須恵器 壺	畑調査面 肩部～体部1/3	口底 -	高 頸 胴 (6.2) 10.4	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰白5Y7/1	肩部外面に2条の沈凹線と間にクシの刺突を施す。胴部外面下半はヘラ削り。		
12	第366図	土師器 有孔鉢	古墳集落面 1/4	口底 16.4 5.0	高 胴 10.4	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/良好/にぶい黄橙 10YR6/4	体部内外面斜のハケ目後撫で。穿孔は底部側から。	体部外面に黒斑。	
13	第366図 PL. 98	土師器 甕	8住に混入 口縁～胴部片	口底 15.5 -	高 頸 胴 -	(7.7) -	細砂粒・角閃石/良好/ 灰黄褐10YR6/2	口縁部外面斜のハケ目後横撫で。胴部外面斜の細かなハケ目。内面撫で。	胴部内面に輪積 み痕。
14	第366図 PL. 98	土師器 甕	北東側包含層 口縁～胴上部	口底 20.6 -	高 頸 胴 22.9	(12.2) -	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部雑な横撫で、胴部外面縦の撫で、内面横のヘラ撫で。口縁内外面に輪積み痕。	

遺物観察表

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				長	幅	孔				
15	第366図 PL. 98	土製品 土錘	流路内 完形	長 幅	2.75 0.7	孔	0.25	細砂粒/良好/にぶい黄 褐10YR5/4	器面撫で。	端部紐掛けの擦 れ。
16	第366図	土師器 不明	1号溝に混入 底部～胴部	口 底	- 4.0	高	(5.6)	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にぶい橙5YR6/4	体部外面縦の細かな撫で、内面撫で。体部下 半に突起残存、ソケット状に体部に穿孔して 貼付、把手か。	
No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
17	第366図 PL. 98	鉄釘	北東側包含層 ほぼ完形か	長 厚	4.2 0.35	幅	0.35	鉄製品	断面ほぼ正方形の鉄釘で頭部は薄く伸ばした のち強く折り曲げられている。	3.53g
18	第366図 PL. 98	鉄釘	北東側包含層 ほぼ完形か	長 厚	3.7 0.4	幅	0.4	鉄製品	長さに対して幅太。断面ほぼ正方形の鉄釘で 頭部は短く伸ばした後直角に曲げられてい る。	2.25g
19	第366図 PL. 98	不明鉄製 品	北東側包含層 端部欠く	長 厚	6.6 2.0	幅	0.65	鉄製品	劣化が進み本体は空洞化し脆弱。帯状の鉄で 構成され、刀の足金物に似た形状だが下側は 両方とも欠損し全体形状不明、上部は折り曲 げによりループ状を呈している。	9.42g

5区遺構外の遺物

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
				摘	高	口				
1	第366図	須恵器 蓋	7土坑に混入 小破片	口	-	高	(2.3)	細砂粒・粗砂粒/還元/ 灰黄褐10YR6/2	ロクロ整形(右回転か)。摘みは環状摘みで天 井部外面回転ヘラ削り後の貼り付け。	内面酸化。
2	第366図	須恵器 椀	7土坑に混入 底部のみ	口 底	5.8	高	5.4	細砂粒・粗砂粒/酸化/ にぶい黄橙10YR7/3	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切後 の付高台。	器面の摩滅顕著。
3	第366図	須恵器 杯	4井戸に混入 口縁～底部片	口 底	13.2 8.0	高 胴	3.7 -	細砂粒/酸化/にぶい橙 5YR6/4	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
4	第366図	須恵器 椀	9溝に混入 底部のみ	口 底	- 7.0	高	(2.8) 5.6	細砂粒/還元/褐灰 10YR6/1	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は雑な付高 台。	器面の摩滅顕著。
5	第366図 PL. 98	土師器 甕	平安・中世調査 面 口縁～胴上半部	口 底	19.1 -	高 頸	(7.5) 17.1	細砂粒・軽石/良好/に ぶい橙5YR6/4	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面 横のヘラ撫で。頸部内外面に輪積み痕。	
6	第366図 PL. 98	土製品 土錘	東側流路内 完形	長 幅	4.7 1.9	孔	0.65	細砂粒/良好/明赤褐 5YR5/6	外面撫で、端部面取り。	13.0g

8木製品

No.	挿図 PL. No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値			材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要	
				長	幅	厚				
1	第303図 PL. 64	柄	流路内北寄り 両端欠く破片	長 厚	12.5 4.1	幅	7.1	コナラ属コナラ亜属 クヌギ節	幹の樹芯を外した3分割材を装着部として加 工し、枝を柄として使用する膝柄。分枝部付 近の装着面は角度約120°の山形であるが、 先端部から3cmは断面丸みを正方形を呈す。 枝は丸木のままであるが劣化消失し現存長さ は3.5cm程残すのみ。加工痕は見られず形態 も不明瞭だが、端部の断面形状から袋状鉄斧 を装着した柄と考えられる。	114g 全体に劣化が著 しい。
2	第303図 PL. 64	縦杵	流路内北寄り 1/2	長 厚	43.8 10.0	幅	10.8	コナラ属コナラ亜属 クヌギ節	推定直径30cm以上の材より削り出し造られた 杵。端部断面は樹芯方向で細い丸みのある三 角形で割材から加工されたことをうかがわせ る。端部は角がなく丸みをおび、放射方向に 大小の亀裂が入り凹凸が著しい。側面は比較 的なめらかでなだらかに細くなるが端部は劣 化欠損し全体形状不明。表面全体に放射組織 の凹凸がみられ、これを直接水酸化鉄が硬く 覆う。	1857g 地中に埋まる前 にすでに亀裂お よび表面の風化 が進んでいたも のと推察される。